

清沢冽の戦争日記

1942（昭和十七）年12月9日から
1945（昭和二十）年5月5日まで書か
れた清沢冽の日記である。橋川文三編『暗
黒日記』を底本として作成したものである。

凡例

本PDFは、橋川文三編『暗黒日記』（全三巻、評論社刊復初文庫「570」）を底本としている。ただし、編者の著述に当る部分（解題、脚注）を除き、更に編者が序文代わりに付した清沢の小文「わが兎に与う」を省いた。底本において□によって記された部分は、全て編者が挿入したものであるということで、全て削除して作成するべきところ、切り抜きの出典として、新聞紙名・日付のみは、載録した。また、原本の状態を記す文章も編者のものだが、これは引用として載録した。

底本にあるルビ「(ママ)」は、赤字のルビとした。編者が清沢の誤字脱字を補った箇所も、補わずにママとした。この両者の区別は特にしていない。作成者として疑問を持った箇所は、緑字でママと付した。したがって、なお、おかしな文・文字があるとすれば、作成者のミスと見られたい。

その他のルビは、底本にあるものに加えて、若干作成者の判断で付加した。

清沢の文章は、旧字旧仮名遣いであったが、編者において新仮名遣いに改めている。その過程で単純な誤字は訂正したとのことであるが、人名・官職の誤字不正確も修正されたとのこと、これらは編者の著作権とは見なさず、そのまま載録した。

新聞の切り抜きは、基本的に見出し程度の内容が分れば良いという方針で、幾つかの文字、文章のみを取り出した。□によって括った箇所が切り抜きである。見出しの一部をゴシック体とした。清沢に

よる赤線部分は全て収録、その前後の意味が通じるように配慮した。底本では、新聞紙名・日付は○あるいは◇で記されており、前者は編者の挿入の印であり、後者は切り抜きそのものに記載されているか清沢が記したのであるが、区別していない。□は作成者の調査による。切り抜きの現物は見えていないので文章上のチェックであり、別紙の同一記事の可能性は残る。

【、「#」で記した部分、脚注は全て作成者が付加したものである。底本の切り抜き箇所にあった○は◇とした。英文に付した訳は参考程度にされたい。

編者によると、日記は、日本評論社製日記帳三冊、大学ノート二冊に記されてあった。

第一冊（昭和十年用日記帳）昭和十七（1942）年十二月九日から昭和十八年九月二十八日。

第二冊（昭和十四年用日記帳）昭和十八（1943）年十月一日から昭和十九年七月九日。

第三冊（昭和十一年用日記帳）昭和十九（1944）年七月十日から昭和二十年三月十日。

第四冊（千代田ノート製大学ノート）昭和二十（1945）年三月十一日から同年四月二十二日。この

のノートに『戦争日記』の標題があるとのこと。

第五冊（無銘、大学ノート）昭和二十年四月二十三日から五月五日。

なお、第一冊には別に断片的文章があつて第一巻に収録されているが、本PDFでは収録せず。第三冊にも読書メモ、一月一日から八日までの簡単な日記があるとのこと。

目次

凡例

- 一九四二（昭和十七）年十二月 ……【ガダルカナル島撤退決定】
- 一九四三（昭和十八）年一月 ……【日華共同宣言】
- 一九四三（昭和十八）年二月 ……【ガダルカナル島撤退開始】
- 一九四三（昭和十八）年三月 ……【各種統制法公布】
- 一九四三（昭和十八）年四月 ……【山本五十六戦死】
- 一九四三（昭和十八）年五月 ……【アメリカ軍アッツ島上陸、守備隊玉碎】
- 一九四三（昭和十八）年六月 ……【内務省防空退避施設の整備を通告】
- 一九四三（昭和十八）年七月 ……【キスカ島撤退】
- 一九四三（昭和十八）年八月 ……【日本ビルマ同盟条約】
- 一九四三（昭和十八）年九月 ……【イタリア無条件降伏】
- 一九四三（昭和十八）年十月 ……【日華同盟条約】
- 一九四三（昭和十八）年十一月 ……【大東亜会議、カイロ会談（米英中）・テヘラン会談（米英ソ）】
- 一九四三（昭和十八）年十二月 ……【徴兵適齢引き下げ】
- 一九四四（昭和十九）年一月 ……【ソ連軍レニングラードを解放】

- 一九四四（昭和十九）年 二月 ……【東条首相兼陸相が参謀総長も兼任】
- 一九四四（昭和十九）年 三月 ……【インパール作戦開始】
- 一九四四（昭和十九）年 四月 ……【海軍特攻兵器回天等を開発】
- 一九四四（昭和十九）年 五月 ……【ドイツ軍クリミア半島・ルーマニア撤退、女性車掌初勤務】
- 一九四四（昭和十九）年 六月 ……【マリアナ沖海戦】
- 一九四四（昭和十九）年 七月 ……【インパール作戦中止、東条内閣総辞職・小磯内閣】
- 一九四四（昭和十九）年 八月 ……【ダンバートン・オークス会議始まる】
- 一九四四（昭和十九）年 九月 ……【拉孟・膽越の玉砕】
- 一九四四（昭和十九）年 十月 ……【台湾沖空中戦、レイテ沖海戦】
- 一九四四（昭和十九）年 十一月 ……【東京初空襲】
- 一九四四（昭和十九）年 十二月 ……【東南海地震】
- 一九四五（昭和二十）年 一月 ……【米軍ルソン島上陸】
- 一九四五（昭和二十）年 二月 ……【ヤルタ会談、米軍艦載機による空爆、米軍硫黄島上陸】
- 一九四五（昭和二十）年 三月 ……【東京大空襲】
- 一九四五（昭和二十）年 四月 ……【米軍沖縄本島上陸、小磯内閣総辞職・鈴木内閣】
- 一九四五（昭和二十）年 五月 ……【ドイツ無条件降伏】

一九四二（昭和十七）年

十二月九日（水）

近頃のことを書残したい気持ちから、また日記を書く。

昨日は大東亜戦争記念日¹だった。ラジオは朝の賀屋大蔵大臣の放送に始めて、まるで感情的叫喚であった。夕方僕は聞かなかつたが、米国は鬼畜で英国は悪魔でといった放送で、家人でさえもうラジオを切つたそうだ。斯く感情に訴えなければ戦争は完遂できぬか。奥村情報局次長が先頃、米英に敵愾心を持てと次官会議で提議した。その現れだ。

東京市では、お菓子の格付けをするというので、みな役人が集まって、有名菓子を食つたりしている。役人がいかに暇であるか。

英米は自由主義で、個人主義で起てないはずだった。いま、我指導者達は英米の決意を語っている。

「評論」という文字は、役人に対し「評」というのは怪しからんというので「言論報国会」としたそうだ。そして僕のところへは通知も参加状もこない。

i 対米英戦争の二年目に入った。

大東亜戦争一周年において誰もいったことは、国民の戦争意識昂揚が足らぬということだった。（奥村、谷萩大佐ことごとく然り―『日々』【東京日日】十二月九日）これ以上、どうして戦争意識昂揚が可能か。

総て役人本位だ。役人のために政治が行われている。県ブロック（役人の首の問題）。戦争の問題。

十二月八日、陸軍に感謝する会が、木挽町の歌舞伎座であつて、超満員だった。

「連続決戦」という文字が新たに出た。

戦争を勃発させるに最も力のあつた徳富猪一郎【徳富蘇峰 1863-1957】は、戦争一周年に「日本に日本精神あれば、英米に英米魂あり」といつている。また「朝氣は鋭、暮氣は帰」の古語に対し、アングロサクソンは「朝氣は朦朧、暮氣は新醒」という。（十二月十九日『日々』）政党の弊害、役人の弊害、結局教育だ。

東條首相は朝から晩まで演説、訪問、街頭慰問をして五六人分の仕事をしている。その結果、非常に評判がいい。総理大臣の最高任務として、そういうことを国民が要求している証拠だ。

『読売』昭和十七年十二月九日　日ア紹介の英人像抹殺
日本山岳会がウェストンの胸像を撤去」

大東亜戦争を通じて最も表象的な人間は奥村情報局次長である。予は奥村情報局次長の説を愛読す。かれの説が、現在のイデオロギーを代表するがゆえに。奥村の知識は日本国民を代表す。おそらくは世界には通用せず。

十二月十一日（金）

文字に対し敏感なのが当節の特徴だ。極東は禁止して東亜となし、英米語を抹殺する如きだ。

昨日、半沢玉城君の家に寄る。倉橋藤治郎君の招待の帰りなり。同君は現在を「赤」と資本主義の戦いなりといい、その旨、三菱本社に行つて、話したという。資本家の不満は甚大だ。小林一三氏が官僚の赤化いうに顧みても、かれ等は非常な反感を有している。

十二月十二日（土）

右翼やゴロツキの世界だ。東京の都市は「赤尾敏」という反共主義をかかげる無頼漢の演説のビラで一杯であり、新聞は国粋党主という笹川良一という男の大阪東京間の往来までゴザ活字でデカデカと書く。こうした人が時局を指導するのだ。

ラジオの低調はもはや聞くにたえぬ。

二三日以前、警察署の情報部のものが来て英米に対する敵愾心宣伝の効果如何を聞きに来たる。奥村情報局次長がやっている政策に対する批判だ。僕は奥村更迭の要をのべた。

大東亜戦争下の失敗は、極端なる議論の持主のみが中枢を占有し、一般識者に責任感を分担せしめぬことであつた。

十二月十三日（日）

昨日、正午は外交年鑑編輯会議に、竹内克巳君の会に行く。晩は長谷川如是閑、石橋湛山、嶋中雄作、太田永福、秋山高の諸君を芝居に招待。芝居は超満員。食堂はどこも「売切れ」にて、危うく夕食を食い外す

ところだった。

新聞などでボチボチ「時局を認識せよ」というだけでは時局は認識されないといったことを言うようになった(『日々』余録)。

石橋君なども来年はひどい事になるぞといったていた。誰も危機、いよいよ迫るを感ずるのだ。

十二日真夜中、警戒警報^い出す。

ソロモン海戦、苦戦の報、町から町に伝わる。

官僚は闇撲滅だけに一緒になる。而して生産には意を用うところなし。

十二月十四日(月)

資本家は生産増強の重荷を負わされている。それにかかわらず、法規で縛られ、統制に服して不満々だ。資本家側が、現時の官僚を赤と呼ぶものが多い。小林一三氏がそうであり、半沢玉城がそうだ。(前頁参照)。

資本家はようやく反噬^{はんぜい}して来た。本朝の『朝日』には藤山愛一郎が「人の機械化を排せ」といつて、観念ⁱガダルカナル島を繞る海戦で三次にわたる戦いは終わり、十二月末にやつと撤退を決める。

的平等主義を書いている。階級的闘争——資本家と労働者階級、若い者との間の闘争が目立つて来た。

昨夜、大熊真君を訪ね、歴史上の物語りをした。僕は現下の事態を悲観した。

大熊君曰く、谷萩報道部長などの談話^{ラジヲ}を聞くと、米国は元来がよかったが、近代の政策が謬^{まちが}ったといつて同感するが、奥村一派は、米国のものと相容れぬという。それでは解決の道はない、といった。

十二月十五日(火)

昨日、東洋経済の月曜評議員会に出席。伊藤正徳も来る。

奥村情報局次長は、新聞記者会合の席上で、「新聞の紙は来年から、ウンと少くなる。諸君はやめて情報局の聖戦完遂の演説で地方でも廻れ」といったという。それから『中央公論』などはウンと少くすると、名をあげて攻撃した。さらに堀内という中佐は中央公論を無くしてしまうといったという。言論は、この少壮官吏の玩具になったことを知【以下いくつか不明字との

こと」はずではないでしょうかと。

十二月十七日（木）

昨日、名古屋と同盟に書く。午後、中大連中【中央大
学の連中】の手伝いをして書斎整理。

今朝の新聞では、株式取引所が官営になったことを
報ず。国家社会主義ますます進行す。資本家側より共
産化云々の批難出でん。

それにしても政府の権限強化驚くべし。しかもその
政府は何等統一せず。ここに問題あり。

十二月二十一日（月）

言論報国団ができた。僕のところへはもとより通知
もない。文章報国、三十年。僕に通知がないのだ。もつ
とも僕はかつて返事をしなかった。

十七日の晩、岩波茂雄、安倍能成、藤原咲平、長谷
川如是閑、馬場恒吾、石橋湛山等集まる。岩波は誠意
一点張り、僕は西郷なんて下らん男だといった。かれ

i 『中部日本新聞』と雑誌『同盟』宛の原稿の意

昭和十七年十二月

は遵法精神なんて何か、といった。藤原博士はソロモ
ン海で日本軍が対手をやつつける。愉快で愉快でたま
らんという。岩波が「日本が世界に正義をしくのでな
ければつまらん」というのをひどく怒る。実に単純だ。
高島屋の古書展を見に行く。一昨日買おうと思った
本、高いからと考えていたら、もう無くなっていた。
二十日、『最近日米関係史』書あぐ。約一千枚だ。ま
だ整理に一骨だ。

十二月二十二日（火）

一、昨日、小林一三氏と東燈の歴史を書くための打
合会有り。

同氏の談——鉄道国営の一面史は、戦后、外債を募
集するのに、外国は日本の鉄道担保をなさしむる体制
を要求したので、加藤高明は辞職した。

三井、三菱は、銀行資本金百万円（？）をも集める
ことができなかった。その資本金はウォーター・ヴァ
リューであった。

言論報国会は僕のところに入会勧誘をしてこない。

郷里の清沢市治いよいよ徴兵される由、二十三日出發。かれ一人が生産の中心なれば、実家は全滅といつてもいい。生産増強が困難なことはこの一事でも明かだ。

尾崎行雄、不敬罪で八ヶ月の懲役、執行猶予一ヶ年に決定すⁱ。

ベルツ（ドイツ人）の談——四十七士の「仇討ち」という言葉はドイツに分らぬ。悪い意味となる。そこで「決闘」という文字にかえたといった。西洋人には三味は分らぬし、あのバチで音をたてるところが嫌われる。長唄、義太夫も分らぬ。比較的謡がいいといった。

十二月二十三日（水）

瀧沢百二君が若い妻君を貰つて帝国ホテルにいた。一緒に飯を食う。大熊真君も来た。

大熊君が幕末をやってくれるそうだ。これで幕末だけは無二のものができる。

『読売新聞』に左の如きものが出た。ああ。

i 一審判決。大審院は昭和十九年六月二十八日参照。

【切抜は欠けていると】

十二月二十六日（土）

昨日を以て、『日米関係史』の本文完成。総計七百ページにもなるようだ。

ダルランⁱⁱ暗殺さる。日本人は仏国を憐れむ。しかし仏国は歐洲で最も恵まれた国にならないという保証がどこにある。仏国は戦火を免れたのだ。歴史は批判す。カルカッタを日本空襲す。新聞によると、こうすることによって、印度人が日本になつくと考えている。一つのイデオロギーは経験によって改めることは難し。

十二月二十七日（日）

昨夜、小林会ⁱⁱⁱに出席。小林氏この会を楽しむ。

岡村今朝良夫妻午前中に、笠原清明午后来る。――

『日米外交史』に紙なきたため圧縮してくれと国策研究会の千田君より申込みあり、総て整っているのに困つ

ii F. Darlan、ヴィシー政権の閣僚でもあり対米協力も。

iii 小林一三を囲む会。

たものだ。索引も止してくれという。当方は原案を主張。

『外交年表』は中央公論社から出すことに決定。右の旨藤田出版部長より電話あり。これで二安心した。

言論報国会より馬場恒吾氏にも通知なき由。僕や馬場君を除外したのだ。

ソ連の日本大使館宮川参事官二十五日に談話す。独逸とソ連との衝突はダーダネルス海峡の勢力問題が最も重要だとの説である。政治的には確かに然り、ただ、イデオロギー的にはボルシェビズムに対する、ナチスの見解および実力主義を脱すべからず。

泥酔者、町と電車に一杯だ。

十二月二十八日（月）

汪精衛、南京に帰る。今回の来京はおそらく参戦問題であろう。形式主義の政策ここに至る。

言論報国会よ。自らを軽んずることなかれ。馬場恒吾君のところへも、僕のところへも、入会勧誘無し、我等が評論家でなくて、何人が評論家なりや。彼等は自らだけで、この戦争の大責任を負い得るか。

昭和十七年十二月

大孝弥栄会の会長皆川治広氏以下三十七名の大孝弥栄会員が、二十五日から三日間曉天禊行を行う。宮城前に土下座する白衣、白袴の一团。正にこれ幕末維新の光景である。中に国民学校生徒あり。風間正守という。こういう教育の結果が日本にいかなる影響を及ぼすか？

『朝日』十二月二十八日 曉に祈るヲ必勝ヲ 大孝弥栄
会員の禊行……」

十二月三十日（水）

二十八日は年表相談会あり。

二十九日、三井、第一、三菱、第百の合併成立す。ⁱ コミュニスチックの運動いよいよ成功す。ここから国
有までは一步の前進のみ。

煙草屋や汽車切符の前に長蛇の如く行列す。

男子の酒酔いあり、女子に酒酔いなきは何故なりや。西洋においては必ずしも然らず。晩、八時過ぎ電車に
ⁱ 銀行、翌年三、四月三井と第一、三菱と第百それぞれが。

乗れば酔どれ、吐瀉^{としゃ}山の如し。

一九四三（昭和十八）年

一月八日（金）

三十一日に熱海山王ホテルに過し、七日午後帰宅。

『ジャパン・タイムス』が『ニッポン・タイムス』に改名、『東京日日新聞』が『毎日新聞』に改名。パタビアがジャカルタに改名——マレイがマライに。名前をかえることが一番楽な自己満足だ。

文化は交流により発達するか、それとも純粋を保つことにより発達するか。後者なればナチスは最善の政策だ。ドイツはすでにドストエフスキーの文学などを禁止したとのことだ。

一月十一日（月）

南京政府、九日、英米に宣戦す。租界、治外法権等を日本返還を声明す。支那は何事をもなさぬことに對し、この収獲を得た。支那の勝利だ。汪精衛はこの土産を持って、いつでも重慶に帰参しうるのだ。日本政府とその関係者の無智、凡ゆる方面に暴露す。

伊太利大使館に働く日本通訳官、伯林電報を翻訳せんかと上官に聞く。かれ曰く「君はまだドイツ電報なんか信じているのか」といったという（馬場恒吾君の実話）。

芦田均君選挙のことを回顧して曰く「おれは外国政府から圧迫されたことはない。しかし日本政府は俺の政治的声明を奪おうとした。この事は決して忘れ得ない」と。

東海道の松並木が切り倒される。（『中部日本新聞』）家庭のドアの^{すべ}りまで徴集されることになった。次のごときものが代表的なる戦時論策だ。

『「中部日本新聞」「文化」一月九日』西洋は野蠻ぢや〃竹本孫一【情報局官僚】：「ユダヤ的物質文明の浸潤茶毒はいま日本のみならず東亜民族の全面に及んでゐるのである。」：「このむごく残忍にして利己に終始する敵米英の世界観、その文化体系を大東亜から叩き出すことこそこの聖戦の最大目的でなければならぬ。」

インテリに対する反感は、また学問を排する立場である。知らぬものが、知っているものを排撃するのだ。

学校教育の弊は、しかし明かだ。個人訓練をしなくてはならぬ必要は確かにある。大学卒業者は放縦のみを教わった。

谷萩陸軍報道部長は内原農業訓練場に行つて、農村に対する政策について講演した。いうところは肯綮^{こうけい}に値する。ただこれはかつて総理大臣の施政演説にいうところであつた。

一月十二日（火）

風邪気のためゴルフ・トーナメントに行かず。

インテリの間では奥村情報部次長が極めて不評判だ。かれをヘート【**hate** 嫌悪】はしないが軽蔑はすると今井登志喜博士（帝大教授）がいった。学問と智慧を超越する言論に対しては、学問のあるものは大体そういう。これで知識階級を率うことは困難だ。

国民学術会議【**協会**】の例会に三木清君久し振りで顔を見す。フィリップピンから帰つて来たのだ。比島の統

治は、朝鮮と満州と同じだという。同じ人間がやるのだから異なるはずはないと附言する。

米英的なものというものが、実は米英的なものに非ざる事実が多いと、一学者がいう。何が英米的な問題は、自由主義、個人主義を勝手に解釈していると同じ。

一月十三日（水）

米国の軍事予算は一千五十億ドル（一九四三年）に達するだろう旨の教書発表。日本の国民収入が四百五十億としても、約十倍の予算だ。

新聞が単にこの軍事予算の実現性なし、こけおしだとして軽視する風あるは（十二日夕刊各紙、『毎日新聞』社説）従来と同じ。

政府、情報協議会を設置す。従来、単にファナティックの集合なりし情報局が改組されるかどうか。今は第五等程度の頭脳が、憲法や法律を蹂躪してやつている。新しい時代に言論自由確保の必要。

家の前に不良少年うろつく。

源川榮二君の話。新潟から帰りに汽車の二等にいて、産業戦士なるものが続々来て、「二等なんかに乗って何だ。俺等が遅れば戦争がでかね^やないか」といつて威張ったという。芦田均君曰く、ロシア革命前は若い者が服従せず、そうであつた。

一月十四日（木）

昨日、東京市の招待あり、常会指導会の五十回記念なりと。近頃は僕は招かれぬが、かつての関係からだ。隣りに東京府内政部長あり。かつて兵庫の警察部長たり。

一、かつてグルーの報告（対米暗号）を解読したが、かれは日本を正解したように思う。

二、米国の暗号の半分は分らぬ、秘密のものは一切分らぬ。海軍が比較的に発達している。分らぬものは海軍にまわした。

三、戦争は勝つか、敗るか何れしかない。本年は重大だ。米国は極端な制裁を考えているのではないか。

といったことを話した。教育のあるものは理解がある。この人なども然りである。座に文部省の「臣民の道」を書いたという男あり。八紘一宇の何のと低級なることおびただし。国民精神研究所の所員なり。斯る連中の天下なり。この事が日本を現状に追込む。南京からの電報によると南京大使館好富情報部長は左の如くいつている。

【出典不詳】顧みて他をいふ米英重慶 好富情報部長痛撃
〈南京本社特電〉（十三日発）……日本の租界返還に米英は驚愕している云々、」

重慶や米英が、これを重要視すると考える頭脳が、すでに救うべからざる愚なり、日本の頭脳、世界的レベルより落つ。悲しむべし。

一月十六日（土）

昨日、牧野伸顯伯を訪うて、一時間半ばかりいる。「いつでも電話をかけて来てくれ」という。この老伯の

記憶は、僕などよりも遙かによし。頭脳のよさは珍らしき人である。パンがなくて困るという。一日二食でパンだけである。この老人にパンを与え得ざるに至る。写真を持って行つて署名して貰う。僕と共に、太田、石橋両君にも。

経済クラブに大河内正敏子の談を聞く。非常に明朗で頭のいい人の印象を得た。鉄を造ることの困難を説く、公定相場を場所によつて異ならしめよといい、また支那、南方に石油を利用し、製鉄しインゴットとして持ち来たれという。従来、百五十万トンのスクラップ・アイアンの輸入があつたのだから、それだけ補充するのは容易でないという。銅も然り。増産は困難だとの結論のようだ。それにしても科学者は進歩的である。

ベテールが二、三日以前に日本観を書く。「もし英国がよければ交換船で帰つたらう」という。（『読売新聞』）

一月二十三日（土）

近頃は『年表』編輯のため毎日、事務所に出勤。本日、三、四日振りに家に在り。昨夜、風雨。

明治維新には、攘夷派が敗れて、開国派が勝つた。今は反対だ。だから今は明治、大正に対する激しい反感が所在に見られる。

中野正君寄贈するところの「リカルドからマルサスへの手紙」を拾ひ読みす。意見を異にしながら、友情の密なるものあり。羨しさにたえず。意見を異にしながら、我等は友情を持ち続け得ざるか。

『評論』の文字は明治二年三月二十九日の衆議院規則にあり。詔書あり。（『明治政史』（上）、八三）

待詔局（待詔院）は天下の才能を待せらるるところである。明治初代がいかに知能を持ったかを知るを得（同上、八四頁）。詔勅にもこの旨あり。

評論の文字、『明治政史』、指原一六四頁。

明治六年二月七日、太政官令を以つて、復讐を禁じた。しかもその後、復讐の物語りと話は修身の中心であつた。

自由主義者は明治十三年に生きていた。板垣退助が懇親会を大阪に開いた。自ら自由の主義という。（『明治政史』、上、三五八、三七〇、下、一三〇） 翌十四年、

西園寺、新聞を始む『東洋自由新聞』という。(進歩主義——(下)一八四)

自由主義——(下)二四五(代議政党の主義)

明治二十三年八月二十三日

立憲自由党成る(下)二四七頁、その後主義——「自由」とのみ記す(二五四頁)

昭和十八年二月

二月二日（火）

東條首相風邪にて寝ていたのを議会のため起つ。「戦争は二つの場合に敗く。第一は陸海軍が割れる時、第二は民心が割れる時。しかし何れも考えられず」と東條は説き、結束を破るものは如何なる高官のものといえども容赦せずと言明した。

東條はよく怒るそう。枢密院でも怒り、南が立つて忠誠の志は皆が持っているのだといったという。酒井中將の話によると中中理屈が好きで頭はいいが、やはり怒りっぽいという。

新聞は南太平洋の非常な難戦を報ず。従来、戦況は一切秘密にしていたのを、ガダル・カナル、ニューギニア等の苦戦を国民に知らせるのだ。左は『毎日新聞』特派員、小瀧雄二郎の手記だ。（二月二日紙）

『毎日新聞』二月二日 勇士・最期の言葉 ……メリケン兵は「人間の仮面を被つた畜生である」：「地球上から一人残らず絶滅するまでは断じて兵を収めてはならない」

…

これはちょうど、古い伝記にあるような言葉である。

昨日、レンネル島沖合の海軍大勝利あり。喜ぶべし、喜ぶべし。

明治二年頃の外交文書に名印を附せず、ロシア領事から注意されているのが見える。（明治二、二、八一条約改正文書一）（十六頁）「国務卿」というところを、福地は「尚書」と書いている。（外務文書、一七七頁）ワシントンは「話聖束」と書いている（同上、一九六）。日本の朝廷が洋服採用すべきよう岩倉一行より進言している（二一二）。

二月四日（木）

国民政府（南京）は従来、青天白日旗の上に「和平、反共、建国」の黄色三角標識をやつて来たが、今回それをやめて重慶のものと同じにした。（『毎日』南京特電）これは何を語るものであるか。その方が人がよけれ

i ガダルカナル撤退行動に絡んだ一海戦

ばそれを外さないはずであろう。(華北政務委員会でも採用)

スターリングラードのドイツ軍全滅す。ナチス十年記念にヒトラー総統出でず。アフリカの戦線ドイツに悪し。英とトルコの新協約成立す。

東條首相、戦争には必ず勝つという。ただ巷間、不安の氣ただようのが事実のようだ。

二月五日(金)

東條首相は議会で、「自分は日本人の誠忠を信ずるがゆえに戒厳令もしかなかった」といった。議会は追従主義で、盛んに「強権発動」をいつている。強権発動を試みたら、結果がよくなるか。実物教育のためにやってみたらいいではないか。ここまできれば何をやつても同じだ。——しかし彼等は、どんな場合にも経験による教訓は得まい。

戦争の費用——

一日の費用、英国は昭和十七年(一九四二年)六月は一千二百万ポンド、十月は一千五百万ポンド。然

るに、昭和十八年一月三十日までの一週間は——一億四千二百七十五万一千五百ポンド。一日平均二千百万ポンド(これを日本金にすると)一日、三億四千万円(一ポンドを十七円とし)一ヶ月 百億二千万円、一ヶ年一千二百二十四億円。

収入——同期間内に九六、一二一、〇五五^{ポンド} 磅
我国の収入

——昭和十七年、四百五十億円。この内△財政資産、二百四十億円、△生産拡充六十億円、△国民生活百五十億円

——昭和十八年(賀屋藏相の議会における声明) 国民収入——五百億円——財政資金約三百億円(五百億円——一人当り五七円の月収、五人世帯では二百八十五円の月収) 五人家族三百五十五円。

無知なる国民は斯かる数字を示されれば、自分のところは貧乏だが、金持が得をしているように考えよう。藏相は無責任である。

七千万人で五百億円を割れば七百十四円
百五十億円——生活費 二百十四円

一ヶ月 十八円

一家族 九十円

日本——一ヶ年大体三百三億円

一日 八千九百万円

一時間 三百七十万円

一分間 六万一千五百円

米国——一千九十億弗

(円五倍) ——五千四百五十億円

一ヶ月——四百五十四億円

一日——十億五千万円

一時間——六千二百五十万円

一分間——百四万円

米国戦費(三月二十二日電報) 二億五千万弗

三百廿八億円 事変以来の公債発行

【出典不詳】(二月四日) 四日の衆議院赤字委員会におい

て谷口大蔵次官は明治以来の国家財政支出の趨勢及び戦時公債発行状態に関し次の如く答弁した

▽：財政支出

一、明治維新以来昭和十二年まで四百五十億円

一、昭和十三年より十六年まで四百五十億円

一、昭和十七年以降は十七年度予算約八十八億円、臨時軍事費百八十億円、合計二百六十八億円(内通りぬけ二十六億円)十八年度一般会計百二十三億円、それに仮りに臨時軍時費が前年通り百八十億円程度と見てもすでに四百五十億円の財政支出が考へられる

▽：戦時公債発行

一、日清戦役 一億五千万円

一、日露戦役 十四億七千万円

一、日独戦役 五億七千万円

一、満州事変 十八億五千四百万円

一、支那事変 勃発より昭和十八年一月まで三百二十八億一千五百万円」

二月六日(土)

日清戦争の時、陸奥外相は英国が上海に戦火が及ばざるように要求、これに対し許諾を与えた。支那が上

海を戦争に使用していたので批難がなかった。

酒井中將の談——ヒトラーは最近、大島と逢った。個人の資格においてだ。ヒトラーは述懐する。

一、ダンケルクの時に英国を追窮せんとしたが、船がなかった。

二、ロシアをやるうか、やるまいかと考えた。これくらい考えたことはなかった。

三、同盟軍があんなに弱いと考えなかった。ドン側の当方に立たせて置けば安全だと思つた。ところがそれでも追いまくられるのである。

蠟山政道君此島より帰り歓迎会をす。

一、比島の治安はまずあの程度だろう。問題は米逃避軍が紙幣を出しており、その量が三千五百万ペソばかりある。(総通貨量一億五千円ペソ)。それがインフレの基礎をなしている。

二、大東亜共栄圏の大方針が不明で困る。

二月八日(月)

昭和十八年二月

五十三の誕生日である。晩に赤飯を食う。何年まで生き、何をするか。

外務省で幣原男に答えて「清沢の年表の重要事項の選択は粗雑だ」といったそうだ。林君の報告だ。これは愉快ではないが、僕にはいい賜物だ。小さい事には、どうも不向きにできているが、しかしまた学者としては正確でなくてはならぬ。努力するつもりだ。

右は僕が年表に録すべきものを拾い出して、幣原男に問合せたものを、同男が外務省に送附し、調査を依頼したもの。その返答だ。調査局の若い人のアロガント【arrogant 横柄】な態度を知るに足る。

伊藤正徳君とドイツが本年中に屈するかどうかを聴く。

二月九日(火)

昨日の議会で軍事予算提出。

昭和十八年度

普通

九十九億九千五百万円、追加九億三千万円——

百三十二億七千五百万円

臨時

二百七十億円——総額四百二億七千五百万円

通りぬけを除き——三百六十億円

昭和十七年度

普通軍事費 九十三億円

臨時軍事費 百八十億円

合計 二百七十三億円

通りぬけ控除——二百四十六億円

両年比較

額面——百二十九億円 控除——百十三億円

昭和十八年度の三百二十七億三千五百円（内、外

地で三十三億円をまかなう）前年度に比し——

八十億四千二百万円——

二月十日（水）

奥村情報局長は日本の対外宣伝は非常にうまく
いつているといっている。この人々は相手の心理を知
らず、自己満足がすなわち相手の満足だと考えている。

彼等は永遠に覺るところはあるまい。悲しむべし。

【出典不詳……「議會ではないか」……】

「対敵宣伝の現況」……

奥村次長 ……「レンネル島沖海戦において大本営発表を

米国に知らしめたところ大動揺を来してゐる」……「重

慶に対する日本の宣伝は米英自体をして脅威を感じ

しめてゐる、この対重慶宣伝によりルーズヴェルト、

チャーチルへの反感が昂まりつゝあり、重慶を動揺さ

せてゐると英米人の秘密文書は語つてゐる。……森田

氏 諸外国及び敵国の知識層への宣伝方法如何

奥村次長 「……宣伝に於ては凡ゆる方法で日本精神を説

いてゐる、英國の議會で日本精神の是認さへ行はれ、

ニューヨーク、タイムスがこれを取り上げるなど反響

は甚大である」

文相 「……現段階では米英的な考へを日本的に考究する

程度であるが、今後研究してゆきたい」

森田氏 「……団体訓練の画一的な強行（体育的精神的）

は行きすぎてはゐないか、「個」の尊重を強調する必

要はないか」

佐藤陸軍々務局長 「軍隊においては団体の訓練と、もに個性の創意を生かし独断専行を尊重している」

東条首相 独断専行とは上級指揮官の命令の範囲においてであり恣意をいふものではない

作田高太郎氏（広島）……

対外宣伝戦は万全 敵の謀略は完全に粉碎 奥村次長
答弁

……、実に一日七十七回三万七千語が全地球上に電波となつて飛び二十二ヶ国語の放送で反枢軸国の謀略を排斥陰謀を粉碎して戦つてゐるのだ、……次の如く詳説した

奥村情報局次長 【本社速記】……無線放送も元来はラジオだけであつたが最近では強力な無線電信をもつてやつてゐる、……、用語も今日ローマ字は勿論英米語、フランス語、スペイン語その他でやつてをり、七十七回の電波を出して三万七千語を出してゐる、また無線電話については今日五十キロの機械三台、二十キロ一台都合四台で全世界特に大陸に宣伝致してゐる、敵国米英は固より南方、中南米、濠州更にイラン方面、ビルマ、イン

ドその他世界各地十三方向に電波を出して一日の放送延時間は三十時間に達してゐる、しかも使用してゐる言葉は二十二ヶ国語となつてをり英語、フランス、スペインその他、タガログ語、マライ、ヒンズー語、ベンガル語その他主なる国語を全部使つてゐる、……、それにはその国の人を使つてゐる、例へばインドについてはインドの志士で本国を追はれた人を使つてゐる、それで放送局は殆んど人種展覧会のやうである、……また昨日も話があつたやうに宣伝戦の重要性特に今次大戦にはまづ一番は武力戦であるが思想戦では英米のデモクラシーと日本の皇道との戦ひであるといふ主旨によつて放送陣営をその方向に進めるために努力いたしてゐる次第である」
(二月六日)

正宗白鳥氏曰く「文士は駄目だ。文士の会に出るのは嫌だ。先頃菊池寛と自動車に同乗したが、今度の大東亜戦争で比律賓が当方のものとなつても大したものだ。ここ三四年の辛抱で、すっかり米英を撃砕するといつて、まるでいい氣持になつていた。」

正宗氏曰く生活のためだから、彼等の立場に同情はする。しかしそれだけのもので尊敬はしないと。

三木清君も曰く「文士は駄目だ。彼等の観るのは感情的側面だけだ。話題は沢山あるが、なにもつかんでいない」と。

本間司令官の如きすらも、女尊男卑というようなことを非常に重要視すると。フィリッピンの軍政下では、第一にやったことは男女共学をやめたことだ。

三木君曰くスペインは教会を与えた。米国は学校を与えた。日本は農業を与えなくてはならぬと。

二月十一日(木)

紀元節だ。朝日さやけし。ああ、天よ、日本に幸いせよ。日本を偉大ならしめよ。皇室を無窮ならしめよ。余は祖国を愛す。この国にのみ生れて、育ちて、死ぬ運命に結ぶるのだ。

十日、二つの会あり。第一は国際関係研究会の例会である。中島健蔵君のマレイ報告談。

一、最初、華僑を支那人と考えた。そこで沢山なも

の行衛不明にした。ⁱそして八千万ドルの献金を命じた。これが極めて僅かのものと考えによってなされた。ところが銀行はない。担保をとるところはないといったことで、この金はできない。今でも引つかかっている。これは失敗だった。戦時課税だと。

二、マライ人は必ず聞く。(イ)軍政は、いつすむかと。カーキ色に恐怖を感じていると。(ロ)英国人はマライ人を英国的にやった。これは謬りだった。日本も日本的にやると謬るとマライ人はいうそうである。彼等は英国人にきく葉は必ずしも回教徒にきかぬと考えている。

三、マライ人にナシヨナリズムはない。ジャバ、スマトラにはこれがある。ジャバ、スマトラの独立を約束して利用したので今になって不平のものもあるようだ。

石橋君外交官にすぎやきを振舞う。吉田茂、三土忠造、出淵勝次諸氏集る。僕も旧知なり。

一、出淵氏は、米国の兵隊が、西比利亜^{シベリア}出兵の時に、「芝ⁱこの事件の責任者として司令官が戦犯として処刑されたが、犠牲者数は不明。

居もないところでいつまでも駐在させる」と抗議した例あり、素質は悪いという。

二、三土氏、今朝（十日）の「ガダル・カナルよりの転進」の大本営発表を三回読みかえたという。何を意味するかがよく分らぬ。

三、三土氏の東條首相観―可愛い男だ。自分で出なくてもいいところに出る。枢密院などでよく昂憤するという。

二月十四日（日）

新聞はパレンバンの降下部隊、それからシンガポールの戦勝などのことを全面を通して書いている。ヒースという英降将の手記をものせている。他を強制して、武功を吹聴せしめることが好きのようだ。

二月十七日（水）

十六日、ゴルフをやる。二ヶ月振りだ。あまり成績よくなし。ゴルフは今度打球というようになった。「打球鍊成袋」とゴルフ・バッグをいつたらどうかと皆で

笑う。テニスの英語も、日本語にした。テニスを生かして言葉を日本語にす。小児病的な現代思想ここにもあり。

ロストフ陥落の事、月曜の新聞に見ゆ。「ドイツ軍の猛攻撃」「赤軍敗退」といった題目が続いた後、こうした記事が出るのだ。

二月十八日（木）

左は谷萩報道部長が十七日福岡で講演したものの一節だ。アメリカに対する認識を知るに足る。すなわちローズヴェルトがチャーチルに「イギリスを信ず」といったのを逆にとつているのだ。「神風」をいい、「暗雲」をいう。これが電報で米英に知れたら、彼等は日本を侮辱しよう。

ガダルカナルについて

【朝日新聞】（二月十八日）……カサブランカ会談に於てチャーチルがドイツを屈服せしめた後反枢軸の全威力をもつて日本を攻撃せんとする公式協定をなさんと申出で

たが、ルーズヴェルトはアメリカ国民はイギリス国民を信ずると称しこれを拒絶した、チャーチルがこんなことをいつたことそれ自身がアメリカの対日戦意に一抹の暗影あるを看取し得るのである、かくて来年の新大統領の総選挙を前にして神風が吹くのではないかと予想されるのである。」

「年表」をヘルプに來ている学生、御飯が盛り切りでお腹が一杯にならぬという。

一昨夜、延寿春に行ったら、おかゆ一杯のみ。さすがに僕でも帰宅して物を食った。

主要産業に力を入れる結果、小商工が整理され、百七、八十万の失業者が出ようという。

二月十九日（金）

東條首相が今秋の選挙には推薦制度は用いないといつた。また官憲が指導することは不可と明言した。

『朝日』は社説で推薦制度が公選にもとることを論じて
i 前年の選挙では翼賛会の推薦者が4/5を占めた。次の選挙は結局敗戦後になる。

いる。政府が声明すると始めて、これについて論ずる。かつて当時は一人もこれに抗議するものはなかった。これが日本の「言論」である。

東條は、できるだけ公平でありたいと思つていようだ。これに對しおそらく「現状維持」といつたことで不平が起るであらう。

日本は小学生程度の常識になつてきている。ああ。何等の愚劣ぞ。これで国家が、うまく行けば、それこそどうかしている。

奥村は議会演説において（二、三日以前）、紐育タイムスが何とか論じたから、これは政府の黙諾する方針であるといつた。今更ならねど、かれの無知救うべからず。

二月二十日（土）

——。

ドイツのゲッペルス宣伝相、国家に大難來たことを演説し（十八日）ボルシェビズムの危険を指摘した。

第一には英国を攻撃しない事、第二にはドイツがソ連の軍力を軽視した事を率直に告白した事、第三にはヒトラーが、ここ当分起たず、この演説もゲッペルスをしてやらせたことの問題等問題は多い。

ドイツ人は初めてドイツ軍も敗けるものであることを知った。今まで秘密にしていたことを初めて打ち開けられたのだ。ここにいくとドイツはもはや、永遠に頑張れまい。

佐藤軍務局長、依然として議会の答弁に重きをなす。反戦、反軍の言説に対しては、いかなる高位高官のものとも断乎処分するといった。軍、独裁である。

支那の中支方面において積極的戦争始まる。おそらく先方が攻撃に出て来ているのであろう。これに何十万の兵隊を永遠に必要としよう。

議会において青木大東亜相、蒋介石は絶対に相手にせずといった。討伐あるのみと東條首相もいった。相手も同じことをいつているようだ。日米交渉当時、支那が最も妥協を反対した事実頼みれば。

軍力が結局、問題を解決しうるかどうかは、最もよ

く今回の戦争が教えるであろう。

二月二十二日(月)

林知彦君、副領事となつて上海に行く。土曜日一緒に郡司喜一君と夕飯す。

浪花節文化が果実を与えて来た。大東亜戦争は浪花節文化の仇打ち思想である。新聞は「米利犬」といい、「暗愚魯」といい、また宋美齡のワシントン訪問に、あらゆる罵言的報道をなしている。かくすることが戦争完遂のために必要なりと考えているのだ。

何故に高い理想のために戦うことができないのか、世界民衆に訴えて、その理性をとらえうる如き。ああ。

昨日の『朝日』に古垣君『日本外交史』の批評をす。半分は讃め半分はけなす。けだし米国に関するところの深みに足らざるをいうのだ。

材木を盛んに切る。船を造るためだ。結構だが、何かやり出すと一定の規準を超えるのが日本人だ。今度も機械力その他を顧みずにやる危険がある。洪水が出よう。大濫伐になろう。——科学的に調査せよ。幾何

の量を必要とするかを。

二月二十五日（木）

青木大東亜相および佐藤軍務局長、昨日議会において発言して「国府の独立と創意を尊重し内政に干渉せず」と発表した。佐藤局長は「米国も戦争目的がなくなつたのだ」といった。何故にかかる発言をしたかは分らないが、

一、支那の討伐が、続いて、とても大変な事

二、汪政権から国旗問題の質問、応答等で逆に突込まれはしなかつたかと疑われる事

三、米国の強敵であることが、ようやく判明した事等であろう。最初からこうした政策をとつていれば、支那事変も解決し、大東亜戦争も起らなかつたろう。現実には突当らなくては分らないのだから大憂にたえぬ。今頃これをいえば弱いことを示すにすぎぬ。

大東亜戦争は封建主義が、開化主義に対する勝利だ。

正木晃（つとむ）【1896-1975】とこう弁護士（しんし）の『近きより』という小雑誌がある。その一月号、二月号は驚くべき反

軍的、皮肉的なものである。戦争下に、これだけのものが出せるのは驚くべく、これを書いたかれの勇氣驚くべし。かれはボーン・デモクラットで、文章も非常に上手だ。

三月二日（火）

幣原男を二、三日以前に訪う。

一、貴族院で何人かが谷外相に「戦後案」の有無を問う。谷は折角研究中だといった。同じことを青木大東亜相に問う。色を作して、「今戦争中なのに戦後案とは何事か」といったという。

二、松方老候夫人が、幣原男に、しばしば鹿鳴館時代のダンスの苦痛について話していた。皆な寝る頃なのに行つたのは大変だったと。

三、デニソンと親しかったかがエジプトに旅行して帰つての話に、日清戦争までは右翼と左翼——というよりも国粋派と進歩派が対立して心配だった。然るに日清戦争で一緒になった。ちょうどナイルが二つの支流がカルツーム？で一緒になり、それから下のデルタを造る。一方は動物性の故に青で他は鉱物性で白だ。そのように日本も一緒になったと。デニソンも日本の洋化主義を憤慨していたというから

i 明治・大正期に外交顧問を務めたアメリカ人。

昭和十八年三月

ボアソナードと同じらしい。

昨夜、国民学術協会あり。丸山国雄氏の外交資料編集費の援助を提議したが、あまり気乗りせず。しかし大體に通過。

三月四日（木）

各方面で英、米を憎むことを教えている。秋田県横手町の婦人会は、チャーチルとローズヴェルトの人形を吊つて、女子供が出てザクリザクリと突きさしていると今朝の毎日新聞報ず。世界新秩序も何もなく、ただ封建時代の敵討ち思想だ。そしてこれを指導するのが、そうした思想人だ。

一方、支那に対する政策の転換はコンプリート【complete】だ。これと自由主義外交と何の相違ありや。

三月十日（水）

朝日新聞のローマ特派員たりし前田君の談を聞く。

一、トルコの外相が栗原大使に会見して曰く、戦争で枢軸国に勝目はない。日本も（一）英国にシンガポー

ルをかえし、(二) 米国に比島を返したらどうかと
いった。

二、トルコから日本にキニーネを売るよう交渉した。

日本では値段の何のとむずかしいことをいった。す
ると米国大使スタインハートは、その全額を自分の
名で、トルコに寄付をした。

三、戦争は八、九月が山である。

四、イタリーはまだ崩れ落つまい。なぜならばムソー
リニの反対者が現れぬ。ゼノアやミラノは全部壊滅
している。また戦前に三百万トンの石油しかなかつ
た。今はもうあるまい。

三月十四日(日)

外交年表は進行中である。誠実は克つ。各方面から
人物が自然に集るのである。「明治」部の蜷川君病氣の
ために、鬼塚君という大熊君の下の人がやつてくれる
ことになった。

今朝の新聞は敵が大陸から空襲するであろうといっ
ている。これらはいかにして敵を砕きうるのか。

毎日、無知なる××が、政治をやつてここまで持つ
て来たことを考えている。

三月十六日(火)

昨日、高の台ゴルフ・クラブに遠征を試む。PGA
なり。三等賞をとる。すき焼あり、天気よく、好個の
日であつた。

夕刊によつて東條首相が南京に赴いたことを知つた。
理由は汪精衛の来朝に対する返礼のためである。しか
しすでに租界を無条件返還することの話しが纏まり、
これの打合せと、対支媚態のためであるう。

最も重大なポイントは、東條首相をもつてしても、
實際外交をやれば、この程度の譲歩を已むなくするこ
とと、また事態がここまで押して来たことである。

願わくはこれによつて国民が、智的に少しは利口にな
らんことを。ただ政策的にいえば、これによつて支
那は日本の弱点を発見するのみで、全く何等効果なき
は明らかだ。

三月十七日（水）

徳富蘇峰、毎日紙にアングロ・サクソンの正体を説く。

この人が日本歴史を説くのは分るが、アングロ・サクソンがいかにして分るか。ただし面白い事も書く。

『毎日』三月十七日 アングロサクソンの正体……重要な文書などは、先づ英文で草稿し、これを改めて日本文に翻訳してゐた。記者は屢々それを目撃し且つ屢々諸先輩より其事を聴いた。而して其の実例の一として挙ぐ可きは、明治三十三年、政友会が伊藤公に依つて創立せらるるや、其の綱領は朝比奈泉氏が筆したといふことであるが、其の第二の綱領とも云ふ可き、府県全議員選挙に際し、伊藤公の党員に告げたる文書は、都筑馨六男をして、先づ英文にて起草せしめ、本文の記者に向て其の翻訳を依託せられたことがある。…』

この頃、欧化主義者は彼自身ではなかつたか。

堀内謙介氏の談（先頃、本月初旬）。陛下が東條首相

に語り給うた。有吉公使がかつていつていた。支那における西洋人は皿の中の御馳走を皆な食つた。然るに日本人は皿まで食つてしまふと。東條は帰つて来て感激して高等官を集め、大御心を伝え、対支政策の転換を語つたという。

どうせ返還をやむなくするならば、現在の返還は認め得べきだろう。しかし政策の転換に陛下を引合ひに出すのは——議會でもそうだった——極めて不穩だ。陛下に御責任を歸し奉ることになるのではないか。

三月十八日（木）

内閣に顧問が置かれる。それはことごとく実業家であり、また最少年者が豊田の五十九才である。「若い者」の世界が、今どこにある。同時に、官吏専制の夢が実行してみても駄目であることが明らかになったのを示す。しかし国民の貧困化と、一部の富裕化とは、革命的機運を招致することもまた明かだ。この国の運命安からず。

予がかつて「中外ⁱ」で主張した査察制度実現した。

三月二十日(土)

米国では、毎木曜日に戦後経営について討議する会合ができた由、日本では戦後の事を話せば、総てこれデファイテスト【defeatist 敗北主義者】として批難され、或は罰せられもするだろう。

今朝の読売に米国のユダヤ金権化の問題あり。世界をユダヤ人と非ユダヤ人との二つに分つ如き単純な頭では何一つ解決はできぬ。ユダヤ人問題をいうものは、世界の問題を複雑な形において論じ得ない頭脳者である。この連中はモーゲンソー(米国の蔵相)が米国を参戦せしめたという。こういう単純な論理だから困る。

三月二十二日(月)

米国一日の戦費、二億五千万弗の由。

ヒトラー、ベルリンに帰還、久し振りに演説す。か

i 『中外商業新報』、現『日本経済新聞』

れの町に出なかったことが種々の噂をまいた。昨年十一月八日以来始めてである。かれの説くところではドイツ軍の死者合計五十四万二千名の由。ドイツ人はヒトラーの言を今、いかに聞くか。知りまほし。

我国において敵を憎むことを教う。たとえば星条旗の上を足で踏む如し。戦争目的は、そうした感情よりも遙かに高からざるべからず。昔しの仇打ち思想では世界新秩序の建設は不可能である。高い理想を打ち建て、その理想の実現を米国がはばむというのでなければ駄目である。

新聞電報ではほとんど毎日、戦後に關する英米の話し合いが進んでいる旨を報道し來たる。日独が戦っているのに。

英語にキルケニー・キャッツなる言葉がある。十八世紀頃、アイランドのキルケニーという場所があるが、そこで英国軍隊の兵士が二つの猫の尾をつるして喧嘩をさせていた。士官が來て、そんな乱暴な悪戯はやめろといった。兵隊は尾を切つて放してやった。前の士官が來てその尾を見付け、「どうした訳か」といったら、

「実は猫が噛み合って離れません。ついに双方跡方もないまでに食ひつくして尾だけ残ったのです。」といったという。喧嘩して共倒れになることをキルケニー・キャッツという。

三月二十三日（火）

昨夜、外交年鑑の会合があり。竹内克巳君主催す。この人、兎に角才物なり。座に信夫、田村、米田の諸君あり。

田村幸策氏林董伯の日英同盟に関する交渉の手記ありという。いづれ見せるとのことである。田村君は非常に親切だ。

毎日新聞に某という陸軍中將が思想戦を論ず。彼等が用兵作戦のことを論ずるは可なり。彼等の専門なればなり。しかし彼等に「思想」を論ずる資格何処にありや。現時、思想の低調さはその指導者の故なり。

四月七日（水）

二十三日から四日までを四国に過した。通信省と経済クラブとの講演のためだ。

汽車の中ではほとんど昼食ができなかった。幸いにパンを持って行つたんでそれを食つた。松山の一流旅館——木戸屋といつて夏目漱石が宿つたところ——で昼食ができなかった。もつとも県ブロックから県によって物資の豊富さが異なっている。香川県などは豊富だ。

四国は静かな、いいところだった。ことに松山が気に入つた。松山の郵便局長は池妻という人で帝大出の若い人。それに平山徳雄氏という前日本銀行員、今は合同銀行頭取が優待してくれた。

四国の町には松山、高知、徳島、高松何れも城下町のこととして計画性がある。日本人にも計画性があることが発見される。規模は小さいが。

すでに桜が咲きかかつていた。東京より半月早い。

四月十日（土）

中央大学生の中村君支那より帰る。支那——特に北支那方面の排日気分横溢を説く。北京で夜は一人歩きが危険であり、山海関、天津の間の鉄道は、始終妨害さるるという。徐州あたりでは老人や子供を殺し肉を食うという。

「年表」十四日に原稿を出すこととす。

四月十三日（火）

日曜日に佐藤日史君母親と来たる。山内令嬢のことについてなり。——

江戸城受授の頃のことである。勝は榎本に軍艦引渡しを交渉した。勝と西郷との話し合いの結果である。勝は榎本に説いて、「一隻でも二隻でもいいから、官軍に引渡せ、そうすれば徳川家は安泰だ」という。榎本諾す。もとより内部に反対あり。

軍艦受取りに赴いた飯牟礼喜之助、奥春輔、官軍が単に半分、しかも劣弱なものしか受取らざることを総督府に詰問す。大西郷これに答えて曰く「苦情は承知のことなり、今もし我に良艦を取り、彼に劣等の艦の

みを与えんか、朝廷は軍艦の欲しさに良艦を貪りたりといわん、もはや勝敗の大局は決せり、彼に良艦を与えるは最も公平の事に非ずや」といった。

大西郷はさすがに偉かったと思う。（『近世日本国民史』第七六卷、蘇峰、『毎日』本日）

年表に野田良国君中々勉強せず。ために遅る。

四月二十一日（水）

佐藤日史君、山内嬢との結婚を承諾した由。随分の難航であつたが。

笠原清明、砂糖の闇で飛ば散りを食い悲観し、商売を辞めるといい出す。兎に角、一応慰留す。

東條内閣改造、東條自ら文部兼任。ムソリーニを真似て三役を兼ね。谷がやめ重光に、安藤中将内務に、山崎は農林に、いずれも就任す。谷外相は少し気の毒なれども、やはり、どうも仕方なかるべし。荷が重過ぎたのは、けだし事実だろう。天羽も軍部に人気よしと見ゆ。

重光は大のオポーチュニストにて、今までとても軍部の色を見てはロンドンとモスクワから報告を書いていた。出世主義の雄なるもの。

今回の人事は、やはり東條が自由になる人事だ。「指導者原理」には必然である。ただ井野よりも山崎達之輪が苦勞して来ただけに遥かによし。岸が居居つたのは満洲ブロックのお陰ならん。

四月二十三日（金）

内務次官に唐沢、警保局長に町村選任。両氏に面識あり。いずれも好個の紳士である。明朗なり。最もいいことは奥村が辞めたことである。

四月二十四日（土）

メートル法反対の岡部長景子が文部大臣になった。東條らしい人事である。メートル法反対一本槍のところに、この人の些末主義がある。形式的であり、懐古的である。文相は近來、総べて素人だ。荒木大将もそうだし、橋田とてもそうだ。国家のために深憂にたえず。

五月一日（土）

外交問題を観るのに、日本人は神経質に過ぎる。国際関係は、そう急に右に、左に移りかわるものではない。ソ連とポーランドとの関係の激化について、武藤貞一などがすでに、対ソ連工作を考えている。この男は、かつてシンガポールをとって、英米を属せしめ得ると考えたのではないか。

谷が駐支大使となった。湯川が貴族院議員になった。東條グループの勝利、而して東條人事である。

徳富蘇峰、相変らず英国批評をやっている。その趣旨については論ぜず。たゞかれは英国を論ずる資格ありや。かれの如き議論は、世界の感心を買わない。徳富が戦争最大の責任者なるはいうを要さない。徳富と三宅が芸術賞を貰った。

長谷川、馬場は今や生活のために迫られている。

五月二日（日）

敵国は日本の事情に通ずる者を、それぞれに重要使している。たとえばグルーを使い、前駐日参事官ドーマンを駐ソ公使に任命（二七・一二・二二）した如きだ。日本はそうした者を遠ざけるのである。

五月三日（月）

今朝、軽井沢に行くはずなのが、家内の風邪で延びた。アリューシヤンのアッツを熱田島、キスカを鳴神島と名づけたのは、名前をかえることを喜ぶ役人的考え方にもよるが、また戦争を甘く見ていた証拠だ。

芝染太郎氏はフィリピン行きを志望して中止した。最近、発見したところによると、同氏がロータリー・クラブの幹事をしていたので、「拝米家」だと考えて軍部が反対したとのことである。昨日、田舎から出て来て同氏の談話である。同氏の如き「国家主義者」は滅多にない。古いタイプの愛国者である。こうした人を地位の故に判断するところに形式主義がある。それにしても何故、米国に対し「米国通」を利用しないのだろう。クリップスを利用し、グルーを利用し、いやし

くも知識のある者は何人でも利用するという敵に比し、この点では遺憾ながら劣っている。

五月十一日（火）

軽井沢に六日間宿った。天気よく、とても気持がよかった。

ソ連で復活祭を復活したという。これはイデオロギーが敗れて、旧習が勝ったことを示すものだ。国民の解放だ。

五月十五日（土）

十二日に野村大使の講演を聞く。米国側が八九月頃まで日米交渉を纏めたいために一生懸命であった旨を語った。大学教授連盟における演説だ。僕に「この人は米国通だから、「あんな事をいつていやがる」と思っているかも知れん」と後に顧みて小松教授にいった。しかし野村の認識は正しい。かれの頭はいいし、さすがに頭を出すだけのことはある。かれは将来があらう。

枢軸軍北阿¹から撤収す。ドイツからの電報も、国内の輿論も、それが予定の行動の如く書いてある。戦争は努力して論理を発見せしむるものなり。斎藤忠という若い軍事評論家などは、最初から観測を謬¹つて、しかも依然人気者なり。もつて大勢を知る。

アツツ島に敵軍が上陸すと新聞は伝う。いかに犠牲の多き事よ。かつてこの島を熱田島、キスカを鳴神島と命名し、大本営発表にもその名がある。しかも今はアツツ島と発表す。とられた時の事を考えての結果ならん。名前をかえることの好きな小児病の現実暴露だ。子供の知識所有者が政治をやっている！

北阿の枢軸軍首脳者が感謝状を貰い、元帥にもなった。アーニム大將が。おそらくは引上げたのであらう。西洋人心理だが、この方の事は新聞も何とも書かぬ。

五月十六日（日）

昨夜、佐藤日史君と、山内みわ子嬢との婚約が星が岡の茶寮にあった。三、四ヶ月間の交渉が、ついに結晶

i 北アフリカに展開していたドイツ・イタリア軍が降伏。

したのである。

朝、加納君（東調布警察部）来た。チュニジア戦線の結果を問わんとてなり。警視庁よりの指名的質問であろう。僕は（一）ドイツと英、米、ソとの間に和平のチャンスなき事、（二）従つて戦いぬかれざるべからざる事、（三）しかし国家には人間と同じく耐久力の限界ある事、（四）ドイツは結局敗けるであろう事、（五）その峠が本年一杯であろう事を語った。

かれの話によると右翼方面では「東條も近衛と同じである。長くて本年一杯ぐらいしか持たないだろう」といつているという。右翼は在支治外法権等に不満なのだ。また曰く「海軍の若い連中が、東條の声明によれば海南島まで返還することになる。怪しからんとて事務局長に申し出で、事務局長は大臣に、島田大臣から東條に意志表示をしたという。」

山内夫人が、普通の着物で、出たらば、モンペイをはいて来いと追いかえされたという。英子がパンツをはいて行く。女学校の服が最も立ち廻りがいいのだ。この形式主義から日本は救われることありや。

五月十七日（月）

昨日は小汀利得夫妻の外、片岡鉄兵夫人、片岡氏（父）、岡村今朝良夫妻等が来て賑やつた。家の農園でできた苺を出した。

一、片岡氏の話しに、職工などは二十時間も働いているとのことだ。

二、重要産業は、繊維工業よりよほど遅れている。繊維工業ならば、できないものは引受けない。然るに重工業では無理に引受けさせられる。その結果無理をし、能率があがらない。

『東京日日』「余録」五月十七日

……「新しい地理書は全巻大東亜のことだけで埋められ」……「今度の本にはアジア以外の五大洲のことはきれいさつぱり抜いてある」……「今の太平洋南北の激戦地帯に言及してゐる」……「地理を教へることは非常にむづかしいといふ。都市の人口や各地の産業の数字は国家機密であるし」……「しかし余りびくびくしてゐては子供には何

もわからなくなる惧れもある。」

文部省の連中が定見なく、フラフラであることがこの
 国定教科書で分る。

【出典不詳】熱田島は正式の名にあらず

「敗戦に喘ぐ敵アメリカは去る十二日アリューシャン列
 島のアツツ島に來襲したが、十四日の大本営発表にアツ
 ツ島とあつたので」：正式名ではなかつたので：」

五月二十日（木）

嶋中君とゴルフの約をしたが折柄の雨で駄目。梅雨
 に入つたらしい天候だ。

小麦の収穫が非常に悪い由。よくて三割、大体五割
 前後の減収の由。食糧問題の悩み。世界の歴史におい
 て一国の政治が、斯くの如く低級無知なる人間の一团
 の手に落ちたる例ありや。

橋樸氏という人の話を聞く。支那については詳しく
 と思うが、その話しの回転がおそく、その観察も独

断矛盾に満ち、観念的に見ゆ。感心せず。

田中耕太郎博士の支那から帰つての話しに、支那人
 は治外法権撤廃の何のということよりも、現実に食
 を得たいと希望していると。昨年、上海あたりでは
 千三四百人宛餓死しているとのことだ。これは橋氏の
 話し。

東京市の町会課で慰労宴を張る。予は近頃忌避され
 ているのに御馳走だけにはなる。その席で文部省関係
 者の話し。「ガダル・カナルで転進したことにつき、あ
 まりに軍の弁解が過ぎると田舎の人がいつている由。
 日本人をどうして信用できぬか」と。

アツツ島にては当方の一に対し、対手は一〇の由、
 また飛行機も五百台もある由。日本クラブでの演説で
 秋山中佐は「日本軍は孤立無援に陥っている」といつ
 たとのことである。当局は何故に、これに充分な手当
 を加えざりしや。（もつとも途中の潜水艦禍多く、島
 在住の兵は最初に持つて行つた武装あるのみなりとの
 事。）彼等の苦戦に同情す。ああ、誰の罪ぞや。

山田外務省調査局長の談——チュニジヤ戦線で独伊側の捕虜十七万五千人、その内将官百十一人。内イタリー人九十一名とか。

五月二十一日（金）

今夜は石橋湛一君の結婚式だ。僕もその役割の一部を持った。目出度し。

田村幸策君に「年表」の大正の部を見て貰った。さすがに同君は細心で記憶力がいい。いろいろ指摘して貰った。

鬼塚正二君の話に安岡氏が外務省の講演会で「日本人はどこに行っても総すかんである。十年後にまた問題が起きよう」と安岡正篤がいったという。日本の皇道主義というものが、異国人の一人をも感服せしめないものでありはすまいか。少なくとも実践的には。外国に行くものに算流の説教をしたって何になるか。

五月二十二日（土）

山本五十六大將戦死を、昨日発表さる。予は白井弥枝君と神谷という信州の小学校長と日本クラブで話して、朝日新聞社前でこれを知り茫然たりだ。これだけ大きなニュズは近頃なかった。山本は日米戦争に反対だった。海軍次官のかれは、はやる陸軍の対米戦争指導を食い止め、一時は非国民とさえもいわれたものだ。かれは公然陸軍に抗した。しかし一度国策決れば然して戦うといって、火ぶたを切った。すなわちこの戦争はかれの好まない戦いであつた。ゴルフに行く途中バスでの女学生の話に、かの女の母親はラジオで山本の死を知り御飯を食わなかつたと話していた。瞭iiの話に、ラジオのアナウンサーが、終りに泣いた。この事を報告する自由学園の学生がまた泣いたといつた。以つて国民の感情を知るべし。たゞその反響は、前のガダル・カナルおよびアッツと共に、何となく暗い気持ちで戦争の前途に与えるという観測が多かつた。

正宗白鳥氏は田舎の景気はいい。子供を殺しても、それを運命的に見ている。日本国民は戦争の前途に大

i 4.18 戦死。

ii 清沢瞭、洌の長男。

して不安を持っていないと話していた。そうだろうと思ふ。

暗愚なるこの国民は、一種のフェータリズム【Fatalism 運命論】を有しているのだ。

昨夜、石橋氏にお目出度あり。

五月二十三日（日）

山本神社が長岡に建つ由。

「国を負いて、い向うきはみ千万の、軍なれども言拳はせじ」

言拳げのみしている陸軍はこれを何と見るか。山本に対する人気は、また海軍に対する人気を表徴するものである。

「読売」に中井良太郎という陸軍中将が、日本は直ちに「兵力戦に指導をこめよ」といつている。「軍令は国民に通ぜぬというような自由主義的な憲法論を排し、この事令の中から、総力戦下国民の指導をせよ」と論ずる。現在ほど軍隊の指揮をしている時代はない。そ

れでなおいけないというならば、その内在的本質に弱点があるのではないか——しかしこの人には絶対に左様な反省はない。

我等の知った人で、頭のいゝ米国通が政府の顧問役をつとめたものはない。何れも結論を先に有している人である。それでは情勢の正しい見通しは出来ない。その選択が大東亜戦争最大の弱点だ。

米国陸軍予算七百十八億弗、海軍予算二百九十四億弗が下院通過。その内空軍費は陸二百三十六億弗、海四十五億弗

米の反米活動の抑留者——日本人二一九九人、ドイツ一七一五、イタリア人二四二である。日本人が在留者数の割に多きことを知るに足る。

五月二十四日（月）

『中央公論』の小説細雪（谷崎潤一郎）は評判のものだったが、掲載を中止した。「決戦段階たる現下の諸要請よりみて、或は好ましからざる影響あるやを省み、この点遺憾にたへず」と社告にある（六月号）。

山本元帥の死は非常なショックであった。しかし近頃のラジオと新聞のように、朝夕、繰返していられると少しウンザリする。近頃の指導者達はサイコロヂーを知らぬ。もつとも一般国民にはその方がいいのか。

小汀利得のところへ本を見に行く。本道楽だけに中々いい本がある。ステーツマンズ・エアー・ブックの如きは一九〇〇年度頃よりほとんど備わっている。個人のライブラリーとしては最も完備したものの一つだ。

統帥権に発して統帥権の解決に終る。我等は形式論者ではない。しかし形式の必要なことは時代と共に移ることを得ない国において特に然り。統帥権問題の如きはそれだ。

モラールの問題だ。日本は全く行詰つたのだ。

内務省の役人がグルグル変る。僕等は一生かかつて、一つの問題が分らぬ。この連中に分るのか？

リスボンからの電報はローゼヴェルトがスターリンに宛ててシベリアの航空基地を借りることを申し出たといっている。ベルリン電報も左様なことを臭わしたが、ドイツの宣伝であらう。日本人の無知、これに乗

る恐れあり。あるいは日本人自身の宣伝かも知れぬ。大島に初めて、対ソ戦争を望む分子が多いから。

五月二十五日(火)

国際関係研究会で昨日乾精末君が世界新秩序案を読んだ。それは東亜共栄圏を中心にした世界新秩序案である。あまり各方面から感心されなかつたようだ。というのは、事態が困難だからだ。世界の開放を求めるのはいいが、それならば東亜において各族の独立を認めることが出来るか。例えば朝鮮人が人民投票した結果、独立を欲するといえど如何。

左翼主義はそれでも研究をした。歴史研究にしても未踏の地に足を入れた。唯物的立場から。然るに右翼に至ては全く何等の研究もない。彼等は世界文化に一物をも加えない。

五月二十六日(水)

布施勝治君に信州の伊那郡教育会で来てくれというので昨日午餐を共にし頼んでやった。かつて木曜会で

山本五十六提督が海軍次官となつた時に我等が招かれ「この面を出しまして……」といった挨拶をなしたことを話した。その時、僕は挨拶した。

小寺君という三井君の親友が「実業家は学者の観測というものは、まるで駄目だといっています」と話していた。学者が駄目なのではなくて、現在の学者らしく振舞っている者が駄目なのだ。

谷萩報道部長が二十五日、横浜公園市立音楽堂において枢軸側の勝利が絶対である事、戦争が長期に亘れば亘るほどいいことを演説した。要は「米国の生産は、彼等という六割程度」「米国において飛行機事故が頻発しているのは労働者が思想的に悪化し、その製品を以て故意に反戦を表示するものだ」「兵は器に非ず、気なり。魂だ。米兵は粗製濫造だ」「米国はその生産において本年が最頂だ」といった点だ。谷萩部長のいつたところはゴムやキニーネの問題など、戦前、軍部や中野正剛あたりが言つたことと同じだ。果してそれが正しいかどうかは今後の事実が示すだろう。

五月二十七日(木)

朝ゴルフの練習に行く。

事務所に行つて、小林一三氏と逢う。東電史打合せのため大阪に行くことにす。三宅君と共に。多分四、五日。

古賀大将(連合艦隊司令官【山本の後任】)に手紙を書く。激励のためである。

食堂などの配給が本年秋にはなくなるだろうと笠原清明いう。然かあらん。

露国の革命は食物餓饉から来た。ドイツの第一次大戦も然り。もし日本に同じ運命が来たらば、暴動が起らぬという保障があるうか。どうせ革命的変動は免れぬ。

時局雑誌に野村重臣という男が僕の外交史が米英の見解を述べているといい、国内の思想闘争を展開しなくてはならぬという。かれは何故に、どこが否であるかを指摘しないのだ。かれの観方が正しいという証明はどこにあるか。僕の見方が純日本的だといえ、それは観方の相違ではないか。問題は、かれのイデオロ

ギーを以つてして日本を偉大にするか。戦争の責任者はこの輩である。しかし右翼はなお自分必らずはびこるであろう。ああ。

五月三十日（日）

朝日特電によると米英の対独空中戦は非常に激化したという。激墜数はドイツ側が本年四月中のものが西部だけで四八二機というに對し、英側は全体で二八七機とあり、大体二倍の相違があるが、しかし激化したことだけは明らかだ。爆弾投下量はドイツ側からの報告でも

一九四〇年——二六〇〇噸^ト（二ヶ月宛）

四二年——四二〇〇噸

四三年（四月）一〇、〇〇〇^ト

となつてゐる。今やドイツと英國とは攻防所を異にしたことはベルリン電報が、これを認めてゐる。

駒沢ゴルフ場は兵隊の練兵場になつてゐる。かつてはちよつと断つたものだそうだが、今は断りもしない。その人々が休んだ後は、煙草や紙片が一面に散ばつて

ゐる。これをゴルフ場で取り去つてゐる。こうしてゴルフは天下の悪事のようにいわれるのである。

仕事に切れ目を得たのでゴルフの本を読む。京口元吉著『日本外交史話』は非常に面白い。僕の知らないことも大分書いてある。歴史だけは知りつくすことは困難だ。野村重臣その他の連中は、どこから左様な独断的な結論を得て来たか。

五月三十一日（月）

今夜は森島守人君の令嬢の結婚式だ。

昨日、アッツ島の日本軍が玉碎した旨の放送があつた。午後五時大本營発表だ。今朝の新聞でみると、最後には百数十名しか残らず、負傷者は自決し、健康者は突撃して死んだという。これが軍閥係でなければ、こうした疑問が起つて社会の問題となつたらう。

第一、谷萩報道部長の放送によると、同部隊長山崎保代大佐は一兵の援助をも乞わなかつたという。然らば何故に本部は進んでこれに援兵を送らなかつたか。

第二、敵の行動は分つてゐたはずだ。アラスカの完

備の如きは特に然り。然らば何故にこれに対する前後

ない。それは戦いの劇しさを示す。

処置をせず、孤立無援のままにして置いたか。

第三、軍隊の勇壮無比なることが、世界に冠絶していればいるほど、その全滅は作戦上の失敗になるのではないか。

第四、作戦に対する批判が全くないことが、その反省が皆無になり、したがつてあらゆる失敗が行われるわけではないか。

第五、次ぎにくるものはキスカだ。ここに一ヶ師団ぐらいのものがいるといわれる。玉碎主義は、この人々の生命をも奪うであろう。それが国家のためにいいのであるか。この点も今後必らず問題になろう。もつとも一般民衆にはそんな事は疑問にはならないかも知れぬ。ああ、暗愚なる大衆！

英労働党、共産党の加盟を十五対二票で拒絶す。これが、自由主義は共産党の温床だという考え方といかなる関係を示すか。

軍神を多く出さしむるなかれ。山崎部隊長、山本元帥、佐久間艇長、ハワイ九軍神、いずれも悲劇ならざるは

六月一日（火）

アツツの犠牲悲し。我等は他の意味で不安を感じず。戦争が不利になって行くにしたがつて、国内に対する圧迫が甚しくならん。

どの新聞もアツツの「仇を打つ」といった言葉に満つ。「この仇を討つ兵器を送れ」（『毎日』社説）、「忘るな、五月二十九日！」（『読売』）

六月三日（木）

朝、ラジオで徳富蘇峰の講演あり。ペルリが日本占領の意図あり、かれの像を建てた如きは、もつての外という。また日露戦争にルーズヴェルトが仲介したのを感謝する如きも馬鹿馬鹿しいことだという。米国は好戦国民である。仁義道德のなき国だ。そうしたことがその講演の内容だ。

先頃、山本提督の死の時にも講演し、このところ、徳富時代である。この曲学阿世の徒！この人が日本を謬ったこと最も大なり。

昭和十八年六月

英国の兵員損害——最初の三年間に五十一万五千とロンドンにて発表さる。その内英本国だけ二十七万五千人。

明治政府においては「脱籍之者等と雖も、実に悔悟状罪条理相立ち候上は自ら公平穩当の処置に出づ」（国史本日分——岩倉の書簡）のであつた。榎本などは、そのため許されている。昭和維新——大東亜戦争の時代においては、断じて許されない！

六月十二日（土）

大阪、神戸、名古屋、京都へ講演旅行に行つて十一日帰宅。小林一三氏との打合せ会をも兼ね。

一、まず物資の偏在に驚く。大阪方面では、あるものは非常にある。輸出が止まり、国内の他の方面に送れないからだ。

二、ホテルには砂糖がない。塩がない。一流ホテルでだ。オリエンタル・ホテルでバターがないのである。近くで飯を食っている者が、たんを吐いたり不愉快だ。全く礼儀も儀式も知らぬ世界となつた。

三、池田市で端書がない。官製端書がないのだ。民心に、可なり投げやりの気持ちを見る。

四、講演会は大分沢山人が来た。僕は結論をいわないうで、歐洲戦争をめぐる国際情勢を説いた。経済人だから、大体の理解があるようだ。

五、読売新聞で武藤貞一という男が、盛んにミッシン・スクールやキリスト教を攻撃しだした。ソ連においては礼拝を許して宗教を許している。この時に、国内に不和を起そうというのか。武藤という男などは戦争の発頭人だ。こうした男を読売がかつぐのは何事か。

(立教大学をも攻撃した由)

河村幽川君がこういつていた由——青山学院の商科学生がストライキを起しかけた。笹森校長の人事が、あまりにキリスト教主義に傾いているというのだ。これを聞いて一応止めたが、ために商科部長は心臓麻痺を起して死んだ由。——キリシタン禁止の再燃——大東亜戦争の思想的表現。

『読売報知』『日本刀』六月十二日 宗教学校 武藤貞一

：「敵米英の完全なる第五列、悪虐救世軍には、時つひに到つて弾圧の聖槌が振りおろされた。」：英米人が他国に資金を投入し学校経営することが「一口にいつて米英思想謀略の道具としてその機能を発揚しつつあつた」とはいふまでもない。」：「紀元節には何の関心も払はざるくせに、」米國独立は祝う。：『学校』の仮面をかぶつて、多くの全國の子弟を否応なく礼拝堂に脆かせ、天上の王地上の主に対する讚美歌を唄はせ、主の僕たらしめ、主の絶対帰信者たらしめることによつて、年少男女を『主の檻』に投ずることが、この種ミッシン・スクールの目的である。果してこれをもつて皇國の決戦体制と両立し得るものと考えられるや否や。」

小林一三氏の談——

「大臣をやつていた時、海軍の大佐が来て、『是非、その主張貫徹してくれ、海軍は飽くまでバックする』といった。そうした関係もあつて、岸次官問題に積極的だった。ところがいよいよ問題が進捗すると海軍は一切手を引いた。こういうことで陸軍と正面衝突をす

ることは好ましいと考えたらしい」

「自分は枢密院で『赤』の弾劾をやりうと思った。すなわち誰かに小林大臣が『脱税している』というの事実か」と聞かせる。そこで陛下の御前で赤の陰謀を根こそぎに暴露しようと決心した。これに対し、池田も賛成しなかったし、誰も賛成しなかった」

「形勢が悪いと見たから、予は近衛に辞職を申し出た。かれは貴族院議員がいいか、それとも枢密院がいいかといった。枢密院には実業家代表が深井英五しかない。予は枢密院は始終出席しなければならぬから困るといった。田舎に隠れたかったのだ」

実業家は全体として、現在の統制を「赤」であり、その指令によつて動いていると固く信じている。

【岸次官とは岸信介のこと、第二次近衛内閣時、民間から商工大臣になった小林に対し、官僚として留任した岸次官との確執をいつている。官僚による国家統制を図る者たちは革新官僚とも呼ばれたが、財界人は「赤」と呼んでいたという意。】

六月十三日（日）

『毎日新聞』によると、軽井沢の地元ではゴルフ場を回収し、また別荘を産業選手に開放しようとしているそうだ。傷病兵ならば分るが産業選手とは何か。戦争の深化にしたがつて「革命」的徴候を見る。すなわちそれは「赤」である。小山亮という代議士の如きはその典型だ。右翼化した左翼だ。

関西で雑貨屋が「営業時間午前八時より午後五時まで、ただし急用の場合はこの限りに非ず」という標札を見た。小商人の役所化だ。

山本元帥が自殺したとの放送を敵側はしている由である。打ち続く敗戦——かれ等のいうところでは——により自決したというのである。

鈴木企劃院総裁が京浜の産業界を巡察したが、その報告が今朝発表された。（五月十二日——二十一日までの）

「計画経済の実施に伴う官吏責任感の強化については一段の努力を要するのである」ともいつている。

イタリーのパンタラリア島陥落。この次ぎはシシリー

島ならん。イタリーは永遠に持ち耐えることは困難で、もはや時の問題であろう。イタリーは参戦三年。戦争継続を「再確認した」旨電報に見える。再確認、旅行中、汽車はほとんど遅れざるなし。特急はいつも一時間乃至三十分はおくれる。

配給の飯足りて京都路さみだる。

廃刊相つづ。貿易統制会会報は五月号を以て、郵船会社会報『報国』は四月号を以て、大阪ビル、その他予のところに寄贈しきたるもの多く廃刊す。

水戸斉昭は横文字を焚き、学者を制限せよといった。(水戸藩関係文書、第一)(二一四頁)今これを真似るは如何。

六月十四日(月)

ゴルフに行く。駒沢ゴルフ場は兵隊および青年団の訓練場に化する。しかも彼等は少しも相談もせず、無断に使用する由。掃除は結局会員がなす。

昨日、豊田則雄君来る。南京政府の汪精衛は潔癖だが、他は全部賄賂、囤積(「二字不明のこと」貯)公行の由。

某事件を調査してみると汪の夫人陳璧君、修【周】仏海などが中心であり、さすがにどうにもならなかった由。

東條首相が南京に行ったのは、畑に後継首相の相談のためだったと同盟あたりで噂さしているとの事。内地で聞いたところでは、治外法権撤廃、租界廃止等で現地の軍人が不平だからそれを押えに行つたのだという。

いつか東條が拝謁仰せつけられた。陛下はかつて有吉公使の帰朝の時、「支那人はいつています。西洋人は御馳走を食つて皿を置いて行くが、日本人は御馳走を食つた上、皿まで持つて行く」と、申上げたのを、お話しになったという。東條は恐懼して陸軍省に帰り、陛下の御言葉を高専官に語り、「断じて実行せん、そのための犠牲を惜むところに非ず」といったという。しかし歴史的に言えば、日本軍は支那を対手にして戦争することの不可能と、したがって支那人の民心を得んとする努力の現れだ。

【出典不詳】米の対日憎悪 低劣極む輿論調査(アエノ

スアイレス十一日発同盟〉……世論調査によればドイツ国民とは親交を回復しうが()%に對し、日本国民とは∞%に過ぎなかった。……報告を寄せた米国人が日本人を誹謗した形容詞の中で発表出来るものだけの断り書きでその一部を公表したが……その言葉は「米国民自身こそ文明国民の資格なき野獸の如き思想をもつた民族であることを物語つてゐる。」

中谷保君【山王ホテル・安全自動車社長】、保釈にて出獄す。戦争経済は中谷君の如きいいビジネスマンを刑余の人とし終りたり。

六月十五日(火)

朝雨降る。梅雨はまだあがり切らなかつたのだ。洋傘も破れて無くなつた。ボチボチ我等の生活も、物の不足を身辺に感じて来た。

京阪の旅行で宝塚ホテルは、朝はコーヒーには砂糖があつたが、普通のスープと、貝をフライしたものだ。朝食の楽しみは全くなし。オリエンタル・ホテルは朝

のコーヒーは、砂糖ほとんど入らず。隣のテーブルの男が痰を吐いたりして食つたような氣がせず。

帝国ホテル、オリエンタル・ホテル等の如きが、礼儀を知らない連中の占領下になつたのは近頃の特徴だ。産業選士なるものを無茶におだてる。優遇は僕、本年の主張なるも、斯くの如きは、将来の労働者の革命の萌芽を蔵するもの。

イタリーに対する上陸作戦の可能性は、欧州電報が何れも説いているところ。おそらく、然りであろう。そうすればイタリーは持ち耐え得まい。上陸作戦が成功すればイタリーは脱落の外はないであろう。同時に東部戦線でもソ連の方が優勢である。問題は「いつ」である。

六月十六日(水)

昨夜、太田永福君と成沢君訪問、半年の内に二人の男子を胸の病氣で失いし由。氣の毒なり。

太田君の話し――

友人のところに千五百人の職工見習い來たる。け

だしその戦需産業が認められたからだ。ところが、これを訓練するには六ヶ月かかり、かえって熟練職工の能率を削ぐ。その上に寄宿舎なく、また布団もなく、食料もない。そこで警視庁に行つて、切符を得たが、布団綿は東京で得られず、京阪名古屋辺を廻つて、ようやく五百人分を得て、一枚ずつ与えているという。

議会開会。企業整備と労務者の再配置——労務対策は賃銀針^マ付け停止の小出し変更。

形式主義は総てに表現す。外交に、統制に、政治に。

六月十七日（木）

昨日議会の施政演説で東條首相は、全然、米英の立場を理論的に攻撃せず。惜むべし。何故、斯かる機会において敵の政策を破碎せんとせざるや。思想戦争に処してこれでは駄目だ。

東條首相が言つたのは戦争のことと、フィリッピンの独立およびタイへの協力についてだけである。

昨夜ペン倶楽部あり。

谷川徹三君の話し——

支那大学生の内、五六割は排日、一割は親日、他は日より見であると南京でいった。北京に行つてそれについて聞いたら、大体そうだが、日より見が多少ろうといった。

北京あたりでは毎日二三百名ずつ餓死者がある。支那（北方）を三つに仕切る。日本占領区、共產区、重慶側区と。しかしてこの内、日本占領区に食糧問題その他で爆発する機会が多い。

支那ではダンス・ホールは全部閉めている。そのためマカオが非常な賑いだという。

日本内地の神がかり的な言辭は外地では少しも分らず、それは馬鹿にされるのみである。この点は現地の参謀などが一致して認めるところである。然るに帰朝してみると依然然りである。

柳沢健君の話し——

支那とタイと同じような状態にある。日本の国策映画は入場者六、七人。仕方がないから、その後をドイツ映画をやった。ところがエノ健などをやるとワツ

サワツサ人間が来る。「どうぞ、国辱ものを輸出して下さい」と僕は情報局に話した。

宣伝ラジオが、今のような面白くないものでは駄目だと堀情報官に話した。それをそのまま——少し誇張して情報局に話してくれというので、高等官連に話した。そうしたら、「内務省の検閲課に話してくれ」といわれた。ここでも話すつもりだ。

タイ国民はいう。大東亜戦争で日本は得るところがあるが、タイ国は何を得るか。

松岡外相のタイと仏印との争議仲裁は、タイ国に深甚な不満を与えている。日本には一方交通で、対手の事情が分らなかったのだ。

東條首相の演説に対する感想を満州国、タイ、比島その他から集めて、新聞紙とラジオで大々的に取扱っている。こうした子供らしい自己満足が、世界をして日本を侮辱させることになるのだ。

六月十八日(火)

昨日、三宅晴輝君の話し。

同君の友人の一人は、我国に革命必至なるを信じ、浅川近くに田畑、山林を四月つて移ることにした旨を語った。友人とは大内兵衛君に非ざるか。

嶋中雄作君の話し。

近くの奥さんが交番に呼ばれ、「女中を使うなどは贅沢だ。明地^マがあつたら、産業選手^マに貸してやれ、掃除などしなくてもすむだろう」といったという。

右のような話から見ても、社会の根底に赤化的流れが動いていることを知り得る。予はかねてから空襲下に略奪不可避を言つて来た。また食料難から革命的騒擾の出現をも予想して来た。ただ、これを避ける方法を講じ得ないのは何という不幸であろう。

戦争の深化——食料難——騒動——内閣更迭——動搖の継続——和平論の擡頭——革命的变化——そのような順序をとるのではあるまいか。

議會はただ自己欺瞞のみ。不思議なる国民である。かかる自己満足で満足しうるとは。信ぜんと欲することとは信じ得る国民だ。

土佐藩記録によれば宝永より天保^マよりの土分の処刑

は、ほとんど色情関係と、酒狂に基因する刃傷沙汰であつた。

百姓の租率は六合^{マツ}四民で、その民の四分の内、二分を以つて普請役その他の諸課役^{マツ}を弁じ、結局二分が農民の所得となるという。京都帝大法学部発行、「藩法幕府法と維新法」(井上和夫著)『歴史学研究』第百十号(五月号)

加藤武雄君が朝鮮から帰つての話し

朝鮮人の間に日本に対する不満がある。在鮮日本人は、これを見て、しかも知らぬ振りをしている。自分はこの事を警告して来た。

予は、米国の戦後要求の中には、朝鮮独立という如きことはあるまいが(それは合法的に行われたものだから)しかし、国民投票によつて帰去を決するということのようなことはあろうと話した。

嶋中雄作君の話し

中央公論社だけは陸軍省へ出入りを差止められたと。何でも谷崎の「細雪」を早く、とり止めなかつたというようなことであつたらしい。

議会で重光外相が初答弁した。出来栄は不明だ。その要旨は米英は破壊政策で、我国はアジアの解放を以て精神とするというのである。これも米英の欠点を指摘する点が少ない。

世間、心中は無くなった。男女道徳観の変化だ。すなわちそうする社会的必要がなくなつたのだ。近頃、最も増した犯罪は強姦だそうだ。

六月十九日(土)

笠原清明、銀星をやめて南方に行きたいといつてゐる。正直者で、闇の問題には、いよいよこりたと見える。

現在、世の中に幅をきかしている者は馬鹿か便乗主義者である。

野口米次郎、徳富蘇峰、久米正雄その他がある。鶴見祐輔、永井柳太郎の如きもその一人であらう。出世主義者の世の中だ。

室伏高信の話しに、大東亜戦争前に、情報局の間接後援で、高田保馬、本位田祥男その他の学者が集まつた。開戦を促行させるためである。その内、戦争に反対し

たのは室伏のみ。中に天羽がいたが、これは反対のような口ふんだつた由。役人あてにならず。

六月十六日に航空戦^{空戦}ルンガ沖にあり。我方来帰還二十機という。「航空船^{空船}」という文字初めて現る。

大東亜戦争の前には若い軍人は、皇族の若様方に働きかけ、皇室に非常なる運動をお願いしたる由に聞く。

御直宮様^{じきみやう}だけは何れも御聡明なる由。

六月二十日(日)

大日本言論報国会では「日本世界観委員会」及び「思想戦対策委員会」を創造したが、前者は筑紫熊七中将が委員長、山田孝雄、鹿子木員信等が選ばれ、後者の委員長には鹿子木員信、思想界からは相川勝六、市川房枝、橋本欣五郎、斎藤瀏等が選ばれたそうだ。いいものが出来るであろう！

スバス・チャンドラ・ボースⁱが東京に来了。かれは確かにインドの有力者である。しかしこの新聞の取扱方はどうか。昨夕も今朝も、全くその記事だけだ。依

i Subhas Chandra Bose, 1897-1945, インド独立運動家。

然として重要性のプロポーシヨンが分らない。一人のかれが、有力者であろうとも、どうすることができただ、これ等も広汎なる知識のない証拠である。

昨日、小辻節三氏のユダヤ人に関する話を聞いた。ヘブライ語で演説をするという人だけに、中々の学者である。南加大学におつたそうで、僕を知っているそう^うだ。ユダヤ人の歴史を話した。

ユダヤ人に Sephardi と Ashkenazi があるが前者はスペイン系、後者はドイツ系であるという事、アシエケンゼーとは「ドイツ人」というヘブライ語である。一つの流れはローマからスペインに行き、大逆殺^{大逆殺}に会してバビロンに帰つたものであり、他はダニユープ^{ダニユープ}を伝^つわつてドイツに行った。ユダヤ人を大別して前者が一〇%、後者が九〇%だ。

甚だ有益な話しだった。上海に三万に近いユダヤ人が居るとのことである。

その前夜、四王田中将【四王天延孝】^{四王天延孝}というのユダヤ論を見た。小松雄道君がやっている教授連盟のパンフレットだ。いかにも幼稚で独断。一つの結論を持ち来

たすために雑誌などの切ぬきを集めたに過ぎぬ。こんな子供らしい議論が感心して聞かれると思うと、日本の知識程度が嫌になる。

だが他面において我等の本も売れる。すると知識人の数も中々に多いが、それが世に出ず、また衆愚がはびこっていることを意味する。

六月二十二日（火）

一昨日、小汀利得に招かれて歌舞伎を見た。小汀は芝居を見ると泣けて仕方がないそうだ。かれほどのファイターはないのに、この一面あり。ファイターとは情熱漢のことである。

伊藤正徳が、いつか不愉快なのは徳富蘇峰、武藤貞一、斎藤忠といった如き鼠輩が威張り廻していることだといった。

今朝の『読売』で武藤は会沢正志（水戸籍）を論じて徳川のキリスト禁宗を讃美し、またキリスト教排撃をやっている。これは軍に対する便乗のためか、それともかれの本心か。兎に角、今度の戦争が、思想に

出発し、思想を中心に動いて来たことは明らかだ。

今朝の発表で元帥に永野海軍大将、寺内寿一、杉山元がなつた旨発表された。海二、陸二だ。永野を先に発表したのも、東條の遠慮からではあるまいか。戦争も終らない内に、こうした昇進は、果して民心にどう影響するだろうか。（順序は永野大将九年三ヶ月、寺内七年八ヶ月、杉山は六年八ヶ月のためだ）

今日で独ソ戦がちょうど二ケ年になった。第二次大戦は三ケ年十ヶ月である。

大阪の「京阪」と「急行」【阪神急行（現・阪急電鉄）】と合併。両者の競争があれだけの発達をなさしめたのであるが今後は果してどうなるか。

六月二十三日（水）

昨日、明治学院で講演。出来甚だよからず。予は出来不出来が非常に多し。生理的關係ならん。

メルボルン発電報によれば、大東亜戦争の最初、濠州は「日本軍が濠州に進駐する場合には、いわゆるブルスバーン【Brisbane】線以上の濠州北部を放棄する積

りだった」とのことである。これは労働相ウオードが六月六日に議会で暴露したもの。日本は何れにしても戦力不足であった。(ブエノスアイレス二十一日発同盟通信『朝日新聞』六月二十日朝刊)

『読売報知』『日本刀』六月二十三日 宗教学校(読者の声)

武藤貞一

「ミッシヨン・スクールの内部については：真相を聞いてもらひたい。」：「大司教、牧師の許へは多量の牛乳と食パンが配られ、」：「高原にそゝり立つあの教会堂を眺めると、それが米英多年の思想謀略として如何なる役割を果たしつゝあつたか」：「札幌市の北海道帝大構内には米人クラークの銅像が目立つ。」：「もし信教を強要せぬといつて信用させて置きながら、入学した学生に対して陰に陽に信教を押しつけ、否でも応でも礼拝堂で讚美歌を唄はねばならぬやうに仕向けるのは明かにベテンでありウソつきであり、詐欺である。」：「

徳富蘇峰、英国のユダヤ化を、今朝の『毎日新聞』

昭和十八年六月

で説く。徳富と武藤ノ ちようどいい相棒だ。ただ国家のため嘆ずべし。

日本人はこの戦争の結果偉くなるだろうか？谷川君の話によると、出先の官憲は、神風的思想には困ると、一致した意見だそうだ。だがそれにかかわらずダンスなど禁止している。第一には中央と外部との思想的衝突。第二には現地自身における矛盾。

六月二十四日(木)

地中海方面危機。ドイツ兵イタリーに向う旨『朝日』報ず。

石川達三、中川龍二両氏とゴルフをなす。

信州南安曇郡辺では今春、犬を全部殺しその皮を軍に献納した。

医者皆保険医で、その代価は村役場からとる由。すなわち患者が病気になるれば、医者のかれに投薬乃至は注射す。その代価は村役場に請求するが、そこで値段を鑑定し、適当な値段を交附す。したがって医者の方で請求するだけの払うのではない。そして誰もその保健

会員であり、支払いは租税に應じて出すのだ。

これ等の中心は翼賛壮年団だ。高田甚市氏のところへ壮年団が来て、レコードや本で米英的なものは全部出せといった。さすがに「どれがいけないのか」といって一部を保留した由。銅鉄は、仏壇の燈明まで出した由。土橋のところでは五百貫も出したとか。

何れも実話である。老人連中は「行きすぎだ」と批難するが、どうにも仕方がない。青年団の勢力斯くの如し。特に信州の青年は、かつて「赤」化しただけに、その行動は徹底的である。知恵がないだけだ。ここから革命までは一步のみ。

『中央公論』本月不発刊の旨広告す。先頃の陸軍省への出入差止めと関係あらん。

読売の高橋君と日本クラブに逢う。武藤貞一のことをいうと人気が中々あり、新聞政策としてはよいといっていた。「インテリには人気が悪いがね」と。彼の文章だけは全部検閲する由。然らばすなわち官許である。

六月二十五日（金）

本日、またゴルフに行つてプロの教えを受く。成程と思う。矢張り勉強は先生があつた方がいい。

『改造』の巻頭に谷萩報道部長（少将）、大串兎代夫、斎藤响の三人の鼎談がある。それに序があるが、その終りに「とくに谷萩那華雄閣下が軍務多端の折柄、本編輯部の企図を諒とせられ貴重なる時間を割かれたることに對し深く感謝の意を表す」と、御丁寧に感謝している。こんなに丁寧をつくした座談会がかつてありしや。しかし、その内容は谷萩少将が、よく分つてゐるのに對し大串、斎藤はまるで分らない。谷萩はアメリカに、満州事変当時、新渡戸博士をやつた内輪について語つた。さすがに長く支那に居つただけのことはある。ただ根底的な考え方になるとそこに矛盾や撞着が出て来よう。

六月二十七日（日）

翼政会より中野正剛、鳩山一郎、白鳥敏夫等脱会。一時、好まなかつた中野、鳩山等も参加せざるを得なかつた空氣だつたのに、今はそれも不思議でなくなつ

た。

不思議なのは「空気」であり、「勢い」である。米国にもそうした「勢」があるが、日本のものは特に統一である。この勢が危険である。あらゆる誤謬がこのために侵^マされるおそれがある。

国際関係研究会で石橋君が広域圏の問題を講演した。

高橋亀吉、芦田均、有田八郎その他の発言。僕も議論した一人。

晩は二六会に出席。

中央公論社は（嶋中君の話ではないが）編輯者が休職になったそう。軍報道都のいい分というものを聞くと、中央公論は十の力を持つているのに五分の力しかいていない、これはなお、自由主義の残滓があるからである。あくまで顧みる必要があるというのである。そこで全部できていた雑誌を止して、自肅の意を示し、八月再出版にしたのだそう。鹿子木とか、その一派が書かされないもので、それが怪しからぬときれ憤慨、三木清とか、谷崎なんかを養って置くではないかと突かかる由。要するに御馳走をしないからだと

勝本君はいった。そして乗取つてしまいたい底意であるという。

内務省や、情報局はむしろ好意を有しているが、陸軍報道部一つの所存であるそう。少佐か中佐かが、言論の自由、文筆人の生活を左右できるので。

『毎日』六月二十七日 日本的基督教へ 妖雲撃滅の新運動展開
：「皇室中心主義の基督教の大旗を掲げ日本基督教史に一大改革運動を企てんとする熱列なる愛国基督教確立の叫びがあげられることになった。」：「日本新教協会生る」：「仏教、旧教、回教その他の各部も今後次々と設立され、宗教決戦態勢の完璧を期する筈」

六月二十八日（月）

ドイツ兵、北伊に行き、アルプスのブレンネル峠の守備についたという。イタリアの趨勢が不明および敵前上陸が危険になったのだ。

大毎の山本清君の話では小野特派員がスイスに行く旅費を請求してきた。イタリアが危なくないかと社

内で評判の由。

安積得也君の「母を思ふ」の手紙を得ての返し、

母と子はかくあらまほしきうた読む

わが眼に、いつか涙にじめり

言挙げをする愚かさよ日の本の

道はこの母この子等にこそ

六月三十日（水）

昨日、妻と軽井沢に来る。一日中、例によつて家中を取り片づく。一ヶ月以前に來た時は、まだ若葉なりき、いま満目深緑に満つ。

本日は午前は東洋經濟に社論を書き、午后ゴルフを遊ぶ。このゴルフ場を提供せしむる運動、長野県壮年団にあり。労力不足が悩みならずや。この草原をとりて、彼等はいかにして生産せんとするや。売名か、赤化か。

国民学術協会の哲学講演会を取り止む。右は広告に中央公論社へ申込むべき旨を書いてあり、それが陸軍報道部へ投書したるものあるやにて烈火の如く怒っている由。右計画は一週間続けて、哲学の講義をなすは

ずにて、すでに百余名の申込みありし由なり。その講師の中に京都大学の某講師（西田哲学の一人）あり、また三木清もその一人なり。それが不埒だといふのである。

嶋中君の話によると、結局鹿子木、野村重臣等に書かせないのが悪いというにあり。八月からは内容を全く一変する由。今まで売れ過ぎたから、売れない雑誌をつくる。海軍は同情するが、いま陸と衝突すれば雑誌そのものの運命にもかかわるから、海軍には遠慮せず、陸の氣に入るように雑誌を作れといっている由。七月の雑誌を休刊した影響が中々大きく、それがかえつて彼等を硬化せしめたらしい。社長を変えるのもその一つの目的らしいが、もしそういう場合になれば、自爆すると、嶋中君は決意を語っている。

七月一日（木）

今日から「東京都」になる。名前を変えることを好む現れがまたここに実例を見る。もとより府、市に弊害はあり。だが、それを戦時下に変更せねばならぬほどの必要ありや。

天気よく、万物青し。鳥声地に満つ。

七月二日（金）

上海共同租界を支那に還す。在支、日本人はおそらく不平をいうだろうし、国内の右翼も憤慨するだろう。領土占領以外に、実際問題として何の支那問題ありや。領土拡張を目がけて、ここに至れるを彼等は心外に思うならん、そして東條首相に不平が集まらん。彼等は

一、東條という軍部代表者を以てして、上海租界、治外法権を還附せざるを得ない事情を反省することとはできないであろう。

二、武力政策が結局大損をすることも反省し得ないであろう。

三、世界および支那は、この日本の譲歩を、必らずサイン・オヴ・ウィーキネスと思うだろう。

四、形式的なことに重要性を置く現代日本の思潮がここにも現れている。すなわち形式問題を形付ければ（治外法権その他の還附）それで支那人は喜ぶだろうと思うことこれだ。彼等の欲するものはパンだ。法律ではない。

五、しかし一度、これを還附すれば、もはや永遠に権利は去つたのだ。これが果して支那と、世界のためだろうか。治外法権は別として、租界は支那に害悪を与えたりや。

六、共同租界を還附したことは、支那人の内争問題からみても、謬りであつたと予は思う。ただし、どうせいつか還さねばならぬ。今還すことは結局いいだろう。この政治をやっている以上は。

昨夜のラジオで五大地方長官出現を知る。府県ブロックを破るために地方区域を作るのだ。これは間接には、政府が府県ブロックを破り得ず、その解決策としてこ

i 九区ブロックであつた。

こに出でた告白である。思想が封建主義となれば、国内と地方の事情も封建主義的となる。思想は孤ならず。

昨日、嶋中君、東京より来たる。晩遅くまで、白井、中村（前者建築士、後者監督者）両氏と話す。嶋中邸は浮城の如し。ことに夜景よし。プラクチカルには非ざるも、アーチスチックなり。

七月三日（土）

今日はゴルフのPGAある日なれども、昨夜より雨甚し。ゴルフなどはどうでもよし。この雨のため百姓達はどんなにいいことか。

今回、宮城県の知事になった内田信也の話しに、「先般神奈川県下の某製鉄所で船を繋留するため杭を一本打つため各省の手続をとるのに六ヶ月かかったという話を聞いた。行政簡素化のためには煩瑣な手続は極端に省略すべきではないか」

現在の事態になつても、この通りだ。標語が地につかず軽^レ念物^レであることが分る。

ソロモン群島のレンドバ島に敵兵上陸した旨大本営

より発表。アツツの例が繰返さるべきやを恐る。

全軍、自殺の道德観が、インテリからは無論であるが、軍自体より検討さるる日が来たるであらう。それは自己の利害に最も強く対立するからだ。また国家的損失である。

一方において封建主義が注入され、他方においてそれが実行されて試みられ、破綻を現わして行く。この矛盾が、どういう形式になつて行くか。

【出典不詳】全県健保へ 長野県の健民態勢〈長野電話〉

長野県では国民健康保険組合の全県的結成をめざし昭和十三年以来積極的努力を続けてきたが、二日全国に魁け全県設立を完了した、組合数三百七十九、被保険者数百四十六万六千四百三十二名で健民態勢確立に凱歌をあげた」

七月六日（火）

三日、四日と雨の中PGAの試合をやる。予は第一日は59、58とネット101、第二日は53、58と94、

結局第三位に入る。来会者下村海南老、外常連。加藤武雄、細田民樹来らず。近藤浩一路画伯の絵は伊藤正徳に。

昨日までで家具類整頓す。石川匠務所から職人長来てくれてやったのだ。

ゴルフなどは、もう来年はやれないだろうという空気が、PGAの連中の間にも満ちてきた。

鈴木文史朗は現在の支配者階級を歌舞伎の赤ら顔にたとえる。確かにそうした感じだ。「無暗に国民を排撃して、それで総力戦が出来るだろうか」と誰かがいった。

有沢広巳は兄から金を出して貰って、浅川に三反の畑と、山を買い、百姓屋を改造して自作農をやることになったそうだ。それは来るべき混乱と革命に対する恐怖からである。

ベルリン電報によると六月中の枢軸軍の敵船舶撃沈数は三十五万噸とっている。これでは少なくて心配だ。敵は、少なくとも百万噸は造っているであろう。

僕は今日嶋中君のところである人々との話の中でこういった。「電車の中で、宮城の前を通る時に頭を下

げる。その時、僕は、神様どうぞ、皇室が御安泰であるように祈るのが常だ。それは形容ではない。かつてサターデー・イヴニング・ポストのマカッソンという記者が拝謁した記事の中で、当時の摂政宮であられた陛下について――この方は御一生の内で、種々な御経験を経られるだろう――と書いたのを覚えている。そういう言葉を想出しながら、私はほんとうに御安泰を祈るのだ」と。

この共同的訓練のない国民が、皇室という中心がなくなつた時、どうなるだろうというような理屈もあるが、しかしそうした理性的な問題ではなしに感情的に「日本人的」なものを持っているからだ。

七月七日（水）

日華事変六周年である。朝のラジオは「支那をあやつるのは米英である。蒋介石のみが取り残され、支那民衆は日本と共にある」といったことを放送した。この考え方は日支事変六周年を経て、まだ日本国民の頭を去らないのである。米英を撃破したら、支那民衆は

直ちに親日的になるのか。支那人には「自己」というものは全然ないのか。

この朝、又例によつて満州国、汪精衛、比島のバルガスその他要人をして日本の政策を讃美せしめて放送した。期かる小児的自己満足をやっている以上は、世界の笑い物になるだけである。

昨夜。Books on the Far East, 1934 (Kobe Chronicle) の中の H・G・ウェルズの The Shape of Things to Come を読む。ウェルズは満州事変を出発点として支那と全面的な戦争になる。日本は支那に三度勝つてナポレオンの如く敗れる。それから日本は一九四〇年に米国と戦争をすることになる。東京、大阪は「危険思想家」の手に帰する。「日本の終りは始まる」日本は亡国となるという筋書だ。

ウェルズの予言は、実によく当る。日米戦争の勃発も一ヶ年の相違である。

「将来の歴史家は日本が正気であつたかどうかを疑うだろう」ともいつている。面白い書だ。秀吉の計画と同じことをやっている時に、日本では秀吉（太閤）伝

が吉川英治などに書かれて、最も売れた時である。

太閤伝、西郷隆盛等、空前の人気であつた。日米戦争とこの読物との関係は一にして二に非ず。最も興味がある。それにラジオ——

七月九日（金）

八日、軽井沢から帰京。この夜、芦田均君の主催にて正木呉君を中心にする会があるからである。正木君は『近きより』を発行する若き弁護士である。その寸鉄的文字は、つとに有名である。集るもの芦田、馬場、嶋中、名川侃市、安藤正純、佐々木茂索の諸君である。

正木君の話によると、今年の『近きより』は二月号と六月号とかが発禁であつた由。自分が弁護士である関係からか官憲に呼び出されないとこの事である。名川氏も弁護士であるが、こちらが強く出ると役人などは弱い。彼等の頭には「出世」しかないという。憲兵隊にも、かつて一回しか呼ばれないそうだ。

正木君は「日本の指導者は下士官の程度になつた」という。外国を知らないのが惜しいというから僕は「そ

の方がいいんだ。僕は十二月八日、大東亜戦争勃発の時に持った感じを忘れることはできない。私は愛国者として、これで臣節を全うしたといえるか、もつと戦争を避けるために努力しなければならなかったのではないかと一日中煩悶した。米国の戦力と、世界の情勢を知っていたからだ」といった。

鶴見祐輔君は戦争前途觀を樂觀す。永井や鶴見には美文があるが、思想無し。——もつとも鶴見君は僕に厚意を持ち「必要ならば、いつでも援助するから」といつていた。

帰って見ると安藤正純君の『政界を歩みて』という一書を贈らるるを發見。非常にいい人であるが、筆力、思想、遺憾ながら大したものではない。

軽井沢に居って家を改善していても、いつも「この家を取りあげられたら？」という氣持を持つ。

日本に革命は必須である。その革命は封建主義的コンミュニズムであろう。その結果は、他の持つ者を奪いとするのである。クリエーションでなくて、デストラクションである。特に信州が然りだ。

芦田君が「どう我等が努力しても仕方がないから、安心境に入った」というから、「それはその通りだが、この事態の齎らす結果について樂觀できない。すなわち革命はそれ自体恐れないが、その齎らすものは何等文化的なものが見当らない。この点で仏国大革命の持つ目標の如きものを有していない」と僕はいった。

七月十日（土）

朝、下村海南氏よりゴルフの誘いあり。行く。

昨日、富士食糧工業会社（富士アイス）の総会あり。

払込み決定す。僕は勸業から借金するの外なし。

昨夜、国民学術協会評議會あり。席上、嶋中理事より、講演会（哲学）を中止した事情につき陳述す。

「陸軍報道部より学術協会の講演会の顔触れが怪しからん、といわれた。そこで中止したのだが、これには中央公論との関係がある。中央公論は正月の谷崎の細雪が有閑マダムを主題にしたもので時局を知らぬと批難されていた。二回でやめたが、その頃から感情を害した。そこへ京都派の哲学者の座談会があつて、それ

が気に入らず、また清水幾太郎のアメリカニズムの研究その他が悪い、中央公論を潰すというようなところまで行つた。情報局も内務省もことに海軍などが、あまり気にしないことが益々感情を害したようだった。それに編輯者が一応の弁解をしたことも結果を悪くした。七月号の目次を見ると、これでは少しも自粛していないではないかといったので、そこで思い切つて休刊をしたのである。その後、直ちに国民学術協会の広告が出て、それが感情を刺激した。内容ではなしに、単に顔触れを見ての上だけである。性格が悪いというのだ。」

右が大体嶋中君の報告である。そして、もし自分の存在が迷惑であれば辞任しても差支えないと申し出た。それから食後、田中耕太郎氏の支那訪問雑感あり。

一、治外法権撤廃には大衆は多く無関心だ。

二、重慶が取残されると日本ではいうが、民衆が和を欲すれば重慶はそうする以外はなく、反対に戦いを欲すれば戦うのだ——そう某支那有力者はいつた。

三、大学教授の待遇が非常に悪い。小使室に居るといふような人もある。学者を求めているが、あれでは人は集まるまい。

四、支那は自然法信者だ。国権の欠如が、そうしたことになったのだ。干渉主義は失敗し、無干渉主義が成功する所以もそこにある。支那は、デモクラシーの国である。

七月十一日(日)

反枢軸軍、シシリー島に上陸した旨の電報あり。これは、かねて覚悟していたことだ。イタリアが枢軸側より脱退するのは、もはや時日の問題である。すでにブレンネル岬にドイツ軍あつて中欧への侵入を扼す。

イタリアが脱落すれば、そこに居つた米英艦隊は、余程多く太平洋に來ると見ねばならぬ。

昨夜、チェンバレーンの *Things Japanese* を読む。面白し。またハーンは日本婦人が、今後の器械文明には絶対に出ぬタイプであることを論じている。ロングフォードのものといい、日本婦人は彼等に最も興味を

提供しているようだ。

新聞に対する当局の指令は滑稽なほど周到だ。後のため^右の事項を保存す。インド国民軍が俘虜を以て編成せられている事実も禁止事項によつて知り得た。

ある記事を情報局が新聞に与えた。翌日、出たのを見るとまるで異つてゐる。カンカンに怒つて呼びつけて調べてみると、その晩に軍報道部で訂正したことが分つた。情報局、あげた拳を振り下すところに困る。

七月十二日（月）

海鷲の志願者が、学生から沢山出る。募集しているのだ。早稲田の如きは一九九八人すでに志願し、東大は四五八という有様だ。（『毎日』十一日附）。英国ならば、この大学生を採用する場合に、選択して、人的合理化をするであらう。すなわちせっかくの大学教育を受けたものを、全部飛行人にさせたら、それだけ他に穴があくわけだ。

しかし、こういうことを言い出す人は絶対になく、不合理が、訂正されることなく進行して行つてゐる。

昭和十八年七月

鶴見祐輔君の談——

先頃、ある会で元民政党の有力政治家が、鶴見君のところに来て「米国は、まだ頭を下げぬかのう」と問いた。突然の事に何とも答えられなかつた。無暗なことをいえば誤解されるし。

政治家の不勉強と無智ここに至る。大東東戦争が無智人の指導による危険さ。

菊田貞雄君（明治学院教授）の談——

明治においてはキリスト教の感化が非常に多かつた。珍田、佐藤愛麿は本田の弟子だつた。本田自身が日露戦争の時に、日本の立場をパリの大会で宣明した。桂の二回目の夫人がキリスト教徒であつた関係からキリスト教には余程傾倒してゐた。

小林一三氏関係の「東電史」のため年表を作つてゐるが、大正末期において（一）政党が泥仕合が盛んであつた事、（二）ストライキの頻発、（三）軍縮の企て等が、それまで雌伏してゐた軍部と右翼思想を勝利に導いたことが痛感される。

日本人の打つ電報や新聞を見ると、米国でローゼヴェ

ルトが戦争に不勢なので人氣を落し、それを獲得するためにあせつてゐるように書いてゐる。米國心理を知らぬ証左。米國人は日本人のように「戦争」に敏感ではなく、またローゼヴェルトの責任だとも考えてゐない。大本營陸軍報道部員堀田吉明中佐は大阪で講演して曰く「敵を引寄せ決戦で叩き潰す」といつた。それならばテンで先方に出ない方がよかつたではないか。

【出典不詳：『大阪毎日』7/12に近似記事】〈大阪発〉米英撃滅敵愾心昂揚特別大講演会

…「ロ」を総反撃としていた筈のルーズベルトは「反枢軸の生産力が頂点に達したいま、このとき逸すべからずと本年を決戦の年と変更したのである。」：「一方国内の諸部面に摩擦紛争を生じこれが逐次生産面に影響して早くも生産力低下の兆がみえてきた。」：「特に飛行機の威力は絶大なるものがあり太平洋上の決戦は航空機で大勢が決るといつてよい」：「この飛行機性能の日進月歩に鑑み本土の防空は一刻もゆるがせにできない、爆撃に遭つても生産機構がビクともしない防空態勢を整へね

ばならぬ」：「現在の米の攻勢も日本の思ふ壺で引きよせておいて大決戦で叩き潰す絶好の機会である、」：「

大正末から昭和初めは総ての混乱——崩壊期であつた。権力の喪失——政党の泥仕合——一方において支那の覚醒

七月十三日（火）

昨夜、芝居を見た。多賀之丞後援会に新入会したのだ。如是閑氏を招待。

日本評論に序手により、日米關係史がどうなつたかを聞く。特配はとれなかつたが、割当ての紙で印刷するならば差支えないのだそうだ。来年一杯ぐらいにはできるのであらう。これは一安心。

年表の方は印刷会社の方で渋つてゐる。これも早く片をつけたいが——。

菊五郎に僕は感心しない。まるで踊りだけの芸だ。声も悪し、筋などに至つては、いつも低調だ。

七月十四日（水）

物を知らぬものが、物を知っている者を嘲笑、軽視するところに必ず誤算起る。大東亜戦争前に、その辺の専門家は相談されなかつたのみではなく、一切口を閉じしめられた。

信州の翼壮は軽井沢のゴルフ場閉鎖を主張するのは、近衛とか後藤とかいう連中が、自分でそんなことをしているのでは、増産も何もできぬというにある由。

彼等は知識人が休息の要あることを知らぬほど無知であり、また根底に破壊と嫉妬あるを見る。

ソロモン群島にて我軍不利の情報発表。憂慮すべし。敵が多大の犠牲を厭わざるを報道する新聞は、かつて英米の個人主義、自由主義は墮落を極め、戦争などとは思ひもよらぬことを報じた新聞ならずや。

最大級形容詞が流行する。「至妙至巧な我水雷戦」とか、「古今独歩の大戦闘」とか。西南太平洋の戦争は、決して左様なものではない。前哨戦だ。局部のみしか分らない証拠。

統制会社を統制する運動出で来たる。政府は統政会

社令とでもいうべきものを作るそうだ。——国内に統制会社は六百もあるという事（『毎日』本日紙）

たとえば出版ものは、「日配」に、二割五分の手数料を納附する。何もしなくてもとられるのだ。これを「トネル会社」といつている。

形式主義の金しばり。そして現在でも、「取締り」のみを考えて生産は少しも考えない。

七月十五日（木）

今日から三日間、防空演習あり。例によつて脚絆きやはんでなければいけないとか、袖がどうだとかいうことばかりに力を入れている。軍人が中心指導者だからである。これに対しては識者——特に学者に反感がある。昨日からの協力会議で曰く。

『朝日』七月十五日夕刊第四回中央協力会議国民総常会

服装に気を使ふな 八木学長の発言に拍手

：「体裁などのことに気を使つてゐる時ではない」：「指導者の中には徒らにどなるばかり、行事の立案ばかりに

憂き身をやつしてゐる人もある、」……「指導者は場当たりや徒らに画一的な行事を好むやうな人を避けて思慮分別ある人を採用してほしい」

（朝日だから敢えて載せ得たのである。）

河相達夫君（前濠州公使）の談――

東條首相が演説の中で「世界の大勢を解して、日本と協力せよ」といったが、濠州ではこれを嘲笑した。世界の大勢を解しているから、こういう態度をとっているのだ、東條首相は戦争をテニス競技と考えているようで、スコアーをとれば、それで勝つたのだと信じているようだ。これはある新聞の論説の要旨だった。東條首相は濠州を英帝国から離し得ると考えているようだが、そういうことができるものではない。

僕はかつて田中義一内閣の時に、対支強硬政策というものは最後だろうと書いたことがあった。田中の無茶な失敗によつて国民の眼が覚めたと考えたからである。しかし国民は左様に反省的なものでないことを知つ

た。彼等は無知にして因果關係を知らぬからである。今回も国民が反省するだろうと考えるのは、歴史的暗愚を知らぬものである。

内田七五三藏君その他の話によると、地方では米国が戦争に勝てば、財産は取りあげられ、国民は殺されると固く信じている由。無知はこの程度である。

七月十六日（金）

翼賛協力会^{マダ}で一番問題になったのが衣服問題だ。十五日から防空訓練が始まったが同じく服装問題が最大の問題。防空日の講評。

『読売報知』七月十五日夕刊 服装…和服・ハイヒール不可、…

『毎日』七月十五日夕刊 銀座で『敵機影発見』の訓練、通行人の防空服装半分以上、

浅草では全然駄目、

『毎日新聞』七月十五日夕刊

東条首相答弁…「配給部面における不正等が行はれること

は遺憾であるが政府としては万全を期してゐる」：「道端に腐つたキャベツの山が捨てられてある。…このやうに腐らすことは政府の責任もあるが国民の責任でもある」：「戦場で戦つてゐる将兵のことは忘れてはならない」

この衣服問題は現在の思想がここにフォーカスされたものである。

第一は根本主義者であつて信州のある代表者がいつたように、服装によつて精神を見る主義である。服装さえキチンとできぬものに防空的精神があらうかというのである。

第二は実質主義者で、服装なんかに、そんなに目かどを立てなくても、というのである。

シチリア島に上陸した米英軍は、ほとんど無人の地を行く如く進んでいる。イタリアはナポリと、バリエツタ（アドリア海）を戦闘区域と指名した。中央部に上陸可能性を伝えるもの。ムソリーニの運命迫る。また

イタリアの脱落迫る。

七月十七日（土）

昨夜、久し振りで二七会をやつた。僕の幹事役だ。谷川徹三君を主賓とし、長谷川如是閑、馬場恒吾、正宗白鳥、上司小剣、嶋中雄作、阿部真之助等参集、何れも時局向きならざる顔だ。（芦田均も来る）。

防空練習は、丸ビルでは信号あるや便所の中でも、ピタリと床に平這いになつて、顔を地につけてゐる由。その非常識、沙汰の限りだ。二十才前後の者が、得意氣に命令をして歩いている。

東良三君久し振りで来る。午前中同君のためにつぶさる。午餐を共にす。しかし旧友である、好意がもてる。

七月十八日（日）

東洋経済の『文明史』に関し、まだ書かぬ土屋喬雄君は産業史を書いたが、資本主義および政府と結びついていて、そのままで出せぬ。そこで、そうした部分を削除しているそうだ。歴史を正直に書けぬ国だ。

それは僕も経験がある。

晩、浜作で太田富士アイスが、山田秀雄君、石橋湛山君を招く。けだし前者の増資努力に対するお礼心である。僕も出席。

学生の手鷺への志願申込みが二万を突破した由。

七月十九日（月）

朝、佐藤日史君、三輪子さんと共に来る。来月二日に比島に赴任する由。軍の司政官ははなはだ感心せず、二ヶ年後、比島公使館に還れるのを楽しみにしている由。「陸軍省などに行くと、ガアガア大きい声で怒鳴っている、あれで、いい国策が考え得られるかと思ひます」というのである。

近藤浩一路君から画を貰う。茶掛けだか、さすがに立派なものである。

歸りに、かねての約束から田村貞治郎君方へ赴き、東良三君と共に御馳走になる。田村君は中々の裕福なり。税金も五千円ぐらゐは出している模様。ただ国家的政策については、語り合わず、矢張り淋しい。

毎朝のラジオで林子平とか某とかいう人々の訓話を朗読す。この人々は外国の事情の分らない時に生き、その年齢も若し。今更百年近く後の現在、かかる人々の説教をキンカ玉条にするに至つては、そこにアナクロジ^マを見る。

七月二十日（火）

雨降る中を軽井沢に来る。英子となつ、やを連れる。別荘に物置も出来、内部も整う。井出君相変らず、よく働いてくれる。

軽井沢に下車する人、意外に少し。時局の故か。

統制会社は、地方を合すれば六百に達し、これを統合する必要ありという。統制のための統制。そして統制がまた統制を必要とす。大東亜戦争下の現象！

【朝日新聞七月二十日】決戦経済と統制会社の整備 機構を簡素強力化新勅令の制定も進捗

…「岸商相もすでに議会において統制会社の根拠法令や…、国家総動員法に基く統制会社令を制定し、統制会社

の一元的監督強化を図りまた統制会社、産業団体等に関し企業整備の一環として根本的再検討を加へ……いはゆるトンネル会社などの整理統合により物資統制機構を簡素強力なものにする方針を明かにしてゐる、」……◇統制上の独占権……日本石炭、日本肥料、日本木材等の如くなかには特別法による統制会社もあるが大部分の統制権は商工省令や農林省令等に根拠を發してゐる、」……◇配給統制会社……「在來の元卸、地方卸などの商業主義經濟を再編成し食料品や纖維の如き消費材、金屬機械の如き生産材、あるひは石炭、石油のごとき燃料、木材、セメント、瓦のごとき建築資材等諸物資の配給統制に當つてゐるが、」……

七月二十一日(水)

朝のラジオは、李王殿下が航空司令官(?)に御就任の由を伝え、かつ重要ポストに皇族方の御活動の例をあぐ。

皇族方が最重要ポストに就かることが、この際ラジオの宣伝する如く健全なる証拠であらうか。時局困

難なる際、その部の失敗は、すなわち頭目に責任が歸するのである。

また皇族方は、その実力から、重要ポストに就任されるという感じを国民に持たしむるであらうか。

東電記念出版のために、昭和年代の年表を作成中だ。満州事変前二、三年間にいかにストライキ、学校騒動、思想關係の事件が多きことか。陛下を狙撃せんとする企ても、難波大助事件、昭和七年の鮮人逆徒李奉昌等の事件あり。この不安と動揺とが、満州事変に現れたともいい得るであらう。

この底流は、十年後の今日も、なお払拭されておらぬのである。この大東亞戰爭の結果、何事かが起らぬと考へることは、その事が不自然である。

ミリタリズムとコンミニニズムとの妥合。予はコンミニニズムは封建主義と同じフレーム・オブ・マインド【frame of mind】の産物なりとの見解を抱く久し。この事は、あらゆる方面に見らる。

五・一五事件の三日後に、日支事変(満州事件)に対する第一回の論功行賞あり。爾來、戰爭が終らない間

に行賞す。何という大胆さ。——（第四十四回の行賞発表）

七月二十二日（木）

議会とは、外交に関する限りは現地派遣軍に感謝決議を行うところである。

五・一五事件の被告は最極刑四ヶ年の禁錮（求刑八ヶ年）、これに対し浜口暗殺犯人の佐郷屋に対しては死刑。（佐郷屋は上告棄却さる）。これが一国内の刑の運用である。（陸軍判決昭八・九・十九——佐郷屋八・十一・六）

七月二十四日（土）

昨日、今日はようやく晴る。晴れば軽井沢は天下一也。物置出来。出来栄え非常によろし。いろいろなものを買入れて置いたことが、今、都合よき所以。大きな見透しにおいて謬らなかつたことが、日本に不幸なところだった。

毎日ゴルフにも行かず、家の周囲にいる。掃除も自分で行う。

午后ゴルフに行く。うまくいかず。ボールのみ失う。場内で土を耕している。ここに来て耕作せざるべからざるか。何人も、何人も監督してやっている。これが生産のためか——元より然らず。

七月二十五日（日）

朝からカラリとしていい天気である。軽井沢は雨天と晴天とは両極端に対立す。前者はジメジメして濡氣多く、後者は高原の氣満ちて快壮なり。

日本人が、進んで災害を避ける積極政策を有し得ざる例は函館の火事によつて知らる。函館は何回となく大火を繰返す。しかもこれをプレヴェント【prevent 予防】する具体策を考究せざるなり（最後の大火 昭和九年三・二二全焼二万三千六百）。現在の教育による日本人は、断じて時局に関しこれを反省せざるべし。

日本人の美德はあきらめにあり。しかし積極的建設は到底不可能である。馬鹿な国民に非ざるも、偉大な国民に非ず。

ドイツ人が同じ事を繰返す如く、日本人も必らず今

後同じことを繰返さん。

昭和九年に日本をニッポンと決定し、大体一定化する。
横書き、^{度衡等}は依然強い反対あり。

田村幸策君の話——

『東日』（毎日新聞）の大東亜調査会にて、学者達が「戦争責任」に関する研究を進めていた。秋田中佐というが来て「そんなことは分っているではないか。チャーチルとルーズヴェルトにあるのは無論だ。今更戦争責任は可笑しい」と。学者先生ピチャンコとなり、同部門なくなる。

昭和九年四月二十八日——宮中四大節宴会の洋楽を廃せらる。

昭和九年六・九 南京の日本総領事館蔵本書記生失踪。日本新聞支那側を攻撃したが、結局当人の精神異状と分る。公平なる結果によつて処置するといふのでなければ乞食と雖も服せず。

読売に二つの代表的時局論文あり。

一つは「日曜新論」の林仙之大将による「奉勅に徹せよ」の一文。「一にも奉勅、二にも奉勅、行住座臥、

悉く承詔必謹、大詔奉戴の実践でなければならぬ」という。そしてそれが勝利の道なりという。然り。ただし勅語は責任政府が上奏して御渙発を乞うもの。それが皇室を煩わし奉らざる国体の真髓ではないか。東條首相といい、この大将といい、自己を勅語と結びつけるの不敬を侵してはいしないか。

他は例の武藤貞一の論。「枢軸の勝算歴然」と題し、スターリンとルーズヴェルトの交渉を見て来たように書く。シチリア島と東部戦線の不振現在の如くにして、よくもこういう観測ができるもの。由來、英米の心理情態は、遺憾ながらこの人々には分らぬ。真剣にそう考えるならば愚、単に口さきならば厚顔無恥——もつともこれが当世の指導者。

『読売報知』『日本刀』七月二十五日 枢軸の勝算歴然

武藤貞一：「敵アメリカは、急速にソ聯を対日戦に誘ひ込むか、それとも極東ソ聯領を米海空軍に利用するの途を講じなければ本格的対日作戦の展開不可能なるを知る。」：「米英は依然としてその総力を一箇所に集中す

るを得ない。このため米英の総戦力は分散され、全体の意義よりして生煮え作戦の遂行を余儀なくされてゐる。」
 「米英の作戦はバラバラこれが枢軸側に取つての決定的勝算でなくて何であらうか。」

旧軽井沢に散歩に行つたら伊東祐正？（伯爵）君夫妻に会す。

信州に不在地主の一掃運動起る。余も不在地主の人なれど、これは当然であらう。ただしここにも革命的気運を見る。

七月二十六日（月）

今日、一応東京に帰る。二六日会^マおよびその他の庶務を弁ぜんためである。朝晩は、少し寒いくらいで、東京の暑さが思いやらる。

七月二十七日（火）

ムソリーニついに辞す。イタリー脱落。二六会のようなところでも、皆遠慮して時局の談話には触れず。

ただ困つたというようなことを繰返すのみなり。

中野正剛、秋田清、白鳥等が、一緒になつてゐるの事、これに永井柳太郎などが参加していると噂さる。一部において東條の政策が、妥協的で駄目だといふので、かなりな反対ある由。それ等が東條打倒運動になる可能性あり。これは想像しうることである。

ただ陸軍をつかんでいることが、かれの立場を強くしているのだが、東條は国内的にも、対外的にも、妥協政策であるから、不満あらん。

本日は服装問題を東経に書く。

佐藤日史君が比島に行くので、今夜、山内氏宅で送別会をなす。佐藤君の話によると、来栖が比島大使に赴任せんかと。

七月二十八日（水）

英文エコノミストに、米英関係の論文を書く。

イタリーの政変の全貌が、片々の電報を通して、ようやく明らかになつてきている。注目すべきは

一、戒厳令が布かれた事

二、電報電話が通じない事

三、ファッシスト民軍が改編され、「国家保安義勇民軍」を作った事

である。以上の事実は左の如き結論を生む。――

一、イタリア国内に、ムソリーニおよびファシスト団に対する反感が起り、争動化した事

二、その争動は、ある意味では革命的な深度をまで有している事

三、イタリア降伏の一步手前である事

ステファニ通信社長が逝去したというが、病死か、変死か。ムソリーニも果して無事かどうかと思われる。

ファッシスト党は今や大体解体された。ここで一国一党主義は崩壊した。ファッシズムはイタリア人の手によつて、その価値なきことを宣言されたのだ。ローマ電報によれば

一、国内にファッシストと非ファッシストとの対立感があり、これがバドリオ元帥出現により払拭されたという。

この独裁主義は到底挙国一致主義をとることができ

ないのである。日本において元より然り。

日本は右翼――奥村の小児病患者が、知識あるものを非国民の米英的だのといっている。彼等の「国内戦争」は深刻に一部の反感を買っているのである。

小林氏の「年表」につき、会合協議す。

七月二十九日（木）

毎日新聞の調子の低いのも困ったものだが、二十九日の論説にこういうことあり。四王天一派と同じ口調だ。何事も「米英的」を以て片づける思想と同型である。

『毎日』七月二十九日 ローマ爆撃とユダヤ民族

…ローマ爆撃はフリー・メーソンの計画だ、現に直前に会議を開いている…

女の子を軽井沢に残してあるので行かざるを得ず。軽井沢に赴く。

七月三十日（金）

昨夜つく。嶋中君のほう二君および二宮嬢来て話す。九時半頃寝てグッスリ朝六時半まで。斯くの如きことは近來初めて。三、四日の寝不足と、氣候の好適が快眠を得しめたのであろう。

今日はまた近來なき好天気だ。

水野広徳氏【1875-1945】から手紙あり。「もう腸炎」切開後の経過に曰く

「老骨に加ふるに營業物絶無の折柄にて体力の回復遅々として捗らぬには自烈^{じれつ}度^たくてなりません。産めや殖やせよの赤ん坊第一時代の事として、我々老骨は一合の牛乳を得るにも医者、隣組、町会、区役所の証明を得て漸く三日に一度か、五日に一度の配給さへも、三度に一度は腐敗して居るといふ有様にて、全く以て生ける印のある世の中に候。

時局の前途もいよいよ以て益々暗澹、嗚呼。日本は何処に行く？開戦当時の……国家の異端者か、非国民かの如く感情的に白眼視したる高等学生に対する軍当局の媚態こそ、腕力に対する智性の勝利であり科学に対する大和魂の降伏であります。人類は暗黙の間にも

一歩一歩前進しつつあることを感ぜられます。

目先のきくムソリーニの逃げ出しこそ桐一葉の感なくんばあらずではありませんか、鼎足今や一を欠く。三国同盟危いかな。

老生等は最早幾くもなく、此のまま朽ち果てるこそ、国のためであります、貴兄等は尚春秋に富まれる身として更生日本のため御奮勵あらんことを。」

以上が水野大佐の手紙だ。同級の小林躋造、野村吉三郎等は世に時めくの、それ以上の英才を以て気の毒である。

今までのところ天気よからず作柄憂慮さる。昨年の米供出実績三千九百七十五万石で、割当四千百万石に達せず。

これだけ官僚政治の弊害を見ながら、尚マルキス主義的官僚政治の実現を計画するものあり、愚や及ぶべからず。ただし現在の資本家万歳は何としても訂正せざるべからず。

武藤貞一が翼社会の何かの職につく。そこで害毒を流すだろうが、新聞から、その論文が消えたことは慶

すべし。

ムソリーニ失脚は各方面に可なりな衝動を与えたようだ。こうならねば分らぬのが困ったものだ。

軽井沢のこの別荘に巡査が来て防空準備をしると注意したそうだ。この山の中の一軒家に防空用意を強うるところに、巡査の画一的——したがってまた常識の欠乏を知ることができる。

速達を出すのに、第四種は取扱わぬことになった。それはいいとして、東洋経済に原稿を出すのに、誤って封切りにした。豊やが、それを郵便局に持つてゆくと、封切りではいかぬとて書直しを求められた。これも形式主義の一つ。

沓掛で荷物を出すのに、沓掛からは、宅送りは駄目である。東京駅に送つて、またそこで手続をし直さなくてはならぬ。これ等も事務的な形式主義。

七月三十一日（土）

昨夜、嶋中君来た由、お土産のお菓子を貰う。

今朝も天気よし。高原の気、四方に満つ。周辺に鶯

とカッコウ啼く。蟬の声も聞ゆ。この生活がいつまでできるものか。

イタリーで新聞が自由主義的になったとベルリン当局者が批評した。ファッシスト、独裁主義が行きつれば自由主義は必然だ。現にポルトガルにも革命に近いことが行われたという。しかし、この時局を收拾するのには譲歩を必要とし、譲歩は必然に不人気になる。自由主義は、そう簡単に勢力化するものとは思わず。また日本においては、ファッシストを倒したものが自由主義者であるというニユズを見て、自由主義圧迫の力が働く可能性ありと思われる。行きつまらせたものがファッシストであるという事実を忘れて、自由主義は反抗を受くる可能性あり。ここ当分、自由主義と共產主義との政権戦になろう。

日本ならばムソリーニは切腹したところ。イタリー人は如何。もつともベルリンに居った伊大使など行衛不明なところを見ると、イタリー内では余程の暴動、ファッシスト弾圧があつたものらしい。

毎朝のラジオを聞いて常に思う。世界の大国におい

て、斯くの如く貧弱にして無学なる指導者を有した国が類例ありや。国際政治の重要な時代にあつて国際政治を知らず。全く世界の情勢を知らざる者によつて導かるる危険さ。

八月一日（日）

大東亜戦争とは自からを犠牲にして仁を行う戦争である。

一、本日をして完全にビルマに独立を附与した。バーモ長官が主権者になった。その代償としてビルマは英米に戦を宣した。これは汪政権に対すると同一の手である。

二、支那の租界を完全に還附し、本日を以て上海その他の租界は支那の主権下になった。

三、近く比島に独立を附与する。

四、朝鮮、台湾に徴兵令を施行した。

タイ国への四州割譲といい、ビルマの独立、租界還附等は、果して適當の機関の審議を経たのだろうか。どうせ還附しなければならぬのだから、行為そのものは異議はないにしてもだ。

鶴見祐輔君の話ではムソリーニは監禁され、ファッシスト党幹部八名同じく監禁された。軍部のクー・デ・ターだとのことである。最初、東條首相はこの報を得て、

握りつぶさんとしたが、天羽情報部長が強言して発表せしめたのだと。

同君は曰く、日本の大学生は、ムソリーニの失脚を知って大量に転向しつつありと。また思想の波は十三年一期で転換するのが歴史的事実だから、一九四六年あたりから転換すると。

鶴見君は目前の事象に、あまり感動しすぎ、独断的なことが多すぎる。演説家が大向うの動きを注意しすぎる癖を持つ。しかし転換期を左様に考えても、素より宜しからんか。

朝、鶴見、嶋中とゴルフをやり、成績よからず。

予日記をつけつつありというと、嶋中君危ないぞという。中央公論社の出版物を警視庁で持つて行つたが、その中に馬場恒吾君や僕のものもありと。予もこの日記をつけながら、そうした危惧を感じざるに非ず。

ただ予の場合は「現代史」を後日、書くために記録を止め置かんとするに過ぎず。

八月二日（月）

いつまでゴルフなどやれるか。午前ゴルフ。午后は「年表」の仕事をなす。

柳沢君来訪さる。タイ国に文化事業をやるために努力しつつあり。五百万円ぐらい集める由。

二、三週位以前、重光外相と午餐を食った時、外相は「欧州の方が先に和平を講じて、東亜が残る如きことなし。御安心あれ」と言ったという。

来栖大使はヒリッピンに大使として赴任するやの噂さがあるが、当人は、世界の大勢はマニラにて決定する訳に非ず。東京で御用に立つ以上は、マニラにはゆかずといったそうだ。

八月三日（火）

片岡鉄兵君を交えてゴルフをなす。帰途、僕のとこで昼食をす。午后四時過ぎまでいる。

ファッシスト崩壊で、日本の自由主義者に対する圧迫加わらんという点は予と同感。自由主義者の如き真面目の愛国者は多からず。これをお国の役に立てないのは国家的損害である。

ラジオでベルリン発電報として、ルーマニアの油田に米国機襲撃。ドイツ軍その内の五十何機を撃墜すと。ルーマニアの油田はドイツの生命線なり。クルップ等に対する空襲でダム等破壊され、洪水起っており、その他軍需工場の被害多しと。

片岡君の談——情報局や検閲方面においては、文学に志を立て失敗した連中がやっているの、とても我等がいいはずはないと。嫉妬と憎悪が時代的特徴。

ヒンデンブルグの「我生涯より」の中に「亜細亜人は復讐以外の美德はない」という意味のことあり。戦争目的は何か。

八月四日（水）

ラジオその他で鼓吹するのは、満州事変以来、高山彦九郎や吉田松陰や、西郷隆盛である。彼等は何れも反逆者で刑に附された人々だ。多くの水戸人も然り。天下を握っている者が、反逆精神を鼓吹することは、自からの位置を脅かすことである。

朝ゴルフ、夕方旧軽井沢に赴く。嶋中君と二人で。

鳩山一郎の別荘の前を通る。すばらしいものなり。邸内に鳥、魚、何でもあり。正宗白鳥氏の家に寄る。同君ちようど在宅。立話す。

晩、北田正武君来る。帝大教授の家に寄留し居る由。

上智大学はドイツ人が主だが、カソリックだからナチスおよびヒトラーにはむしろ反対である。予備大佐の配属将校がほとんど独裁的で、校長にも、ドイツ人教師にも、ねじ込んだり、抗議している。ドイツ人教師が出て来たら「お前には用はないんだ」といつて叱り飛ばすという有様。キリスト教はユダヤ思想と同じで、日本のためにならぬと確信し、生徒に説いている由。

八月五日（木）

久しぶりで雨天。久しぶりの雨天はかえって気が落着き気持よし。本日は一日書齋に立てこもる。

先頃、軽井沢の予の家に来た労働者の曰く

戦争なんかどうしてやるんだろう。こんな戦争を始めさせたローズヴェルトと蒋介石は怪しからん野郎だ。あの二人を何とかして殺してしまえない

かと。

戦争勃発が二人の責任と確信している一般日本人の考え方の代表的なるもの。

八月十六日（月）

八月九日に東京出発。八月十五日に軽井沢に帰る。通信省の依頼により福島、仙台、米沢、山形および新局長連の訓練のために巡講したのだ。

九日の朝、上野駅にて二百数十円入りの財布をすらる。遺失といたいところだが遺失の可能性なく、すられたといった方がよからう。通信省員の随行員天田輝男君も、そのスーツケースを盗まる。

上野駅の混雑は実にはなはだし。それを利用して盗人、縦横に荒行。

一、福島局長菊地永太郎氏の話しによると同氏は隣村の出征戦死者の告別式に行つて玄関で靴ぬいで置いたら、それを盗まれたとの事。

二、大越軍三君の話では、同君の友人が靴を汽車でぬいで置いたら、それを盗まれた。

日本国民は貧して全部泥棒になりつつあるといいつてもいい状態だ。

清明に福島から電話をかけ金を送って貰う。

福島にてはドイツとイタリアの事情が樂觀すべからざるを——しかし多少共色をつけて話す。それでも初めてそんな話しを聞いた由。

陸前落合というところの農学校で新入局長等のための練成あり。そこで質問を許す。「ガツカリしましたよ」と欧州の情勢についていったものあり。彼等は極端に樂觀していたものである。

また米沢局の質問では「大東亜戦争は、いかにして結着がつくか」といった。僕は頑張ることにより、「米国をして厭戦気分を出さしめることだ」と答え、かつ、米国の弱点を指摘した。大東亜戦の終末について疑問を持つている者があることが分る。

また米沢局ではロンドン会議で日本が何故に五五三の比率を受諾したかを問う。日本屈辱の宣伝がきいていることが明らかだ。

米沢で上杉謙信を祀るところの上杉神社に参拝。歴

史的に諸種の批判がある人を「神」として参拝するところに、無理があろう。批判のあり得ざる人を祭るのならばいゝけれども。

帰りに白河町の大越又郎君のところに一泊。相変らずの元気なり。途中汽車の混雑は全く殺人的である。列車の継ぎ場のところで押されて落ち、死したるものありという。

ローマ市非武装宣言をした。イタリアはすでに全国を戦闘区と指令したが、それ等のことは米英のイタリア本土への上陸が切迫したのを示すものであろう。同時に新政府が焦土的政策をとらぬことを示すものであろう。

八月十七日（火）

明治維新においては華族の子弟に学資を与え、明治四年に至つて（四・一・二九）外国留学のためのみに限ることにした。来るべき時代においては、夜郎事大にならないため、外国留学制度を学者以外に官吏その他に全面的に、拡張すべきだ。

今回の戦争の後に、予は日本に資本主義が興ると信ず。総てを消費しつくしたる後なれば、急速に物資を増加する必要あり、然も国家がこれをなすのには資金なく、また官僚を以ては、その事の不可能なことは試験済みである。そこで個人をして興業をなさしむるべく努力するであらう。明治四年十二月に私財を以て疏水、修路をなすものには路銭を徴収するを許した例あり。

各大学、専門学校生徒は、休暇奉還と称して、労苦に服す。そのため犠牲者続出。左はその一例なり。科学的ならざる「練成」を知るに足る。

【読売報知八月十五日】病軀、炎天下の作業 一高生遂に
休る

貫く「勤労即戦場」の精神

…炎天下五日間の作業、六日目の豪雨後「その夜は猛烈な下痢に加ふるに吐瀉三回に及んだ、そして二十二日寮の玄米飯を極少量摂つただけで〇〇廠にかけつけた、かくて二十三日で作業はひとまづ終了」…実家へ帰省後、

昭和十八年八月

「過労による心臓衰弱に肺炎併発と診断され」…「眠るが如く逝つたのであつた」…「一高の帽子を棺の中へ入れてやりました」…」

【読売報知八月十九日】遺髪を剪つて出勤軍奉仕に散る烈々・学徒勤労の華・北大の大西君…「報国隊に参加した一学徒が建設の礎石と化し倒れて後止む戦場精神を立証したことが関係当局から発表された」…「死因は急性心臓衰弱症と診断された」

八月十八日（水）

嶋中君とゴルフをやる。同君の話では中央公論社発行の書籍を、先に警視庁で検査のために持つて行つたが、その結果、僕の本——何れか不明——は一部削除、馬場恒吾君のものは『立上る政治家』その他ほとんど全部断載（廃棄）を命ぜられ、下村千秋のルンペン小説の如きも禁止されたと。

この日の（前日？）「日本国民史」に榎本武揚が死せざりしを批難する説あり。武士道よりいえば然らん。しかしその後その榎本は対露その他に非常な勲功を立

て国家のためにつくした。

自殺がいいのか、国家のためにつくした方がいいのか。そこに日本的と進歩的との意見対立す。

明治八年八月十日には日光山堂字保存のため、内帑金三千円下附さる。大東亜戦争において、最初に手をつけたのは日光の杉並木の伐採である。

八月十九日（木）

昨日平川唯一君、子供の純雄君をつれて来たる。例によつて庭の仕事等を、すっかりやつてくれる。

米国で教育をうけた連中が、真面目で誠実であるのは、著しい特色である。恩を感じるもの、この人々の如きは非ず。僕の知っている者の内、最も真面目なグループだ。彼等は必ず成功するだろう。米国教育の中に、そうした誠実を教うる空気があるのだろう。

朝、暗中君方へ高石真五郎氏来たり、ゴルフに誘わる。ニラウンズ。近頃減茶に敗ける。

宮城農学校における講演会で蒋介石を殺すものはないか、かれこそ怪しからん男だ。挺身隊みたいなもの

が出るべきだといった。成程、その通りだ。右翼連中は、日本人を殺すよりも、敵を殺すべきだ。しかし蒋介石が支那人大衆を代表している事実を、彼等は知らぬ。彼等の考えは目前的で歴史的でない。

シシリー島をいよいよ撤収した。予定されたことで、珍らしいことではない。

『読売報知』八月十九日〈ベルリン特電十七日発至急報〉

…独伊軍は十七日午前六時あらゆる軍需資材とともにシチリア島より撤収を完了

〈ストックホルム特電十七日発〉…英軍の一部はメツシナ市内に突入したと報じてゐる

〈註〉…米英軍の常套作戦たる「量における圧倒的優勢」をたのんで犠牲と損害を惜しまず遂に橋頭堡確保に成功、一方枢軸軍は…頑強極まる遊撃戦を展開…敵に甚大なる消耗をなさしめた

〈ベルリン十七日発同盟〉五週間前よりドイツ軍並びにイタリア軍数ヶ師団の一部はシチリア島において四倍乃至五倍……」

ハリコフも極めて危機に立っている。ドイツ東部戦線総くずれの危険。

南太平洋方面に三ヶ所クーパン（チモール）ケクワ（ニューギニア）ミミカに敵機来襲。千島列島にも先頃来た。

新聞は生産増強以外のことは、何にも書いてない。瞭が青木花見【安曇の附近「あおけみ」から帰つての話しに、仏様の金物まで全部出した上に、屋根も出せというそうで、セメント瓦発見次第出すのだそうだ。

人絹スフ製造業は第四次整備に着手、来月完了。その目標とするところは鉄屑を出すためだ。戦争が終つた頃は、鉄類はほとんど国内に無くなっているかも知れぬ。商業政争も困難である。その資本と機械はどこからくるか。

八月二十日（金）

管理事業の社長を「応徴士」ということになった。応徴士服務規定によれば

i ウクライナ第二の都市。

昭和十八年八月

「事業主たる応徴士は生産遂行の全責任を負荷させられたるものなるの自覚に徹し……戦力増強の責を果すべし」とある。

政治もここまで行けば滑稽を通り越して子供の玩具である。彼等は社長を役人化して、宣誓させればそれで能率があがると思つてゐるのである。資本以外はことごとく国家化し、マルクス主義的公式と役人イデオロギーをつぎ交ぜたものがあがつたのである。役人がかつて真の責任を感じたことがあるのか。新聞ではその会社を報ずるのに、○○会社長と伏字にしている。防諜のためであらう。その宣誓なるものは左の如し。

『読売報知』八月二十日夕刊

宣誓：最近日を逐うて戦局苛烈を加へ戦産一如の体制確立：粉骨碎身以て生産の飛躍的増強に挺身邁往せんことを誓ふ……

管理工場事業主徴用令書令達式は十九日午前十一時半首相官邸において行はれた：東條首相、小泉厚相はじめ内閣より星野書記官長、森山法制局長官、天羽情報局総裁、

陸軍側よりは富永次官、吉積整備局長、海軍側より嶋田海相、保科兵備局長、商工省より岸商相、椎名次官、企画院より鈴木総裁、安倍次長、地方長官代表として薄田警視總監、厚生省よりは武井次官、中村勤勞局長、宮崎動員課長出席」

H. G. Wells "The Shape of Things to Come" を軽井沢の古本屋より買つて来た。その中に日本のことが書いてあるが「日本の当局者の頭脳はインサニティー【insanity、狂気】に近いもの」といった意味のことあり。いかにも鋭くうがつている如く感ぜざるを得ない。社長徵用令やラジオの演説を聞いては。平川君帰京す。

八月二十一日(土)

二十日日泰間^{タイ}に領土編入条約調印された。日本は日本占領下にある北部マライにおけるペルリス、ケダー、ケランタン、トレンガヌ四州およびシャン聯藩中ケントン、モンパン二州をタイ国領土に編入することを承認したのである。

これについて三つのシグニフィカンス【significance】がある。第一は、これ等の領土は日本の占領下にあるが、なお最終的に決定をみないものである。(米英は何と批評するだろう)(泥棒の下分というか)第二は、東條首相という陸軍軍人——譲歩と妥協は如何なる場合にも罪悪なりと感ずる人によつて、この種の「軟弱外交」が行われたことである。東條首相は最初、タイ国の独立尊重はいつたが、領土的譲歩をいつたことはなかった。東條は軍人で知らなかつたので、自身でやつて見ると、国際関係はそう簡単にいかないことが明らかになるはずだ。——知識というものが、まず最初である。第三に、これはタイ国参戦および友情というものを買いとるための代償である。(条約文には譲渡といわないで「承認」といつている。)

昨日柳沢健君を訪問、曰く

(イ) タイ国における文化会館設立に関する費用(二百万円)支出方を賀屋蔵相に相談した。二つ返事で承諾した。自分はこんなに簡単に承諾するならば、今少し多く吹きかければよかつたと思つた。

(ロ) 東條首相に会見した。「土地が買えてよかったね」といった。文化会館の敷地のことである。従来、こんな問題には陸軍は、鼻もひっかけないところである。それなのに総理大臣がこれだ。

(ハ) タイにおける経済的、軍事的権益は、戦争の推移によってどうなるか分からない。しかし文化的設備だけは、どう間違っても残るだろう。そういう感じが皆にある。それが支出を快諾する一理由だ。

(ニ) それにしても、日本の立場が弱化して、こうしたことに神経を使わざるを得ず。はなはだしい媚態外交をなさざるを得ないことに甚大なる遺憾を感ずる云々

本日は千客万来であつた。
珍らしく正宗白鳥氏がま、い、うが手に這入つたといつて持つて来てくれた。そこへ三井高維君と小寺酋吉君が来られた。一緒に嶋中君の家を見て帰つて来ると、柳沢健君が、すばらしくうまいパイを持つて来て

くれた。戦争の段階について話しあつた。それから笠原清明と岡村今朝良が宿りがけで来た。

柳沢君はさらに語る――

高松宮様が実に御賢明であられる。この方の御知己に酬いるためにも、日タイ文化事業には挺身せざるを得ないと。総ての問題に御通じになって、中々に御頭脳が明晰であられるそうだ。

八月二十二日(日)

午前に鮎沢巖君一家が来らる。曰く

東京あたりの実業家などは、今や日本と米国とは五分五分の実力となつた。ここらで妥協出来ないだろうかといつてゐるものがあるという。――実業家の無智。

山内一郎君がクリエー【counier 密使】として、クイビシェフ【現・サマール】に赴き佐藤尚武大使のところに行つた。同大使はソ連が二ヶ年の戦争においてほとんど疲弊して居らぬといったという。山内君は独ソ間の仲裁できぬかといったのに対し「左様な事をいつて来るものが日本の有力者にも多い。そうしたことが出来

るように考えている者が多いことが、国際情勢に暗いのを示すもので情けない」といった。

外務省のソ連研究者の【二字空き】君の話だとして鮎沢君曰く、

その人がシベリア鉄道に乗ったところ、列車に軍人が来た。女車掌が、「この切符では駄目だ」といった。軍人は功労章や胸の勲章を指し、ここに置いてくれといった。女車掌はロシアで偉いのはスターリンだ。この列車で偉いのは自分だ。自分はこの切符で乗せる訳にはいかぬと追い出したという。

僕はいった。

何とか米国に大打撃を与えたい。ニューヨーク辺でも滅茶苦茶にしたい。米国をして戦争の惨劇なることを知らせることは将来、世界のためである。ただ問題は、その事は可能かどうかだ。

日本兵、とうとうキスカから撤収した旨をラジオが報ず。そしてその撤収が一兵を損わず、米国が馬鹿を見たように放送した。

i 底本では以下一字下げであるので「僕」とは鮎沢。

島崎藤村氏死去の旨のラジオ放送あり。予はこの人には、種々世話になり、また書いた物も貰っている。あの白哲の下向きに、すみ切った眼を光らせている様を思い出す。最後の招待会には、行くことができなかった。愕然として驚くとはこの事。かれは最後まで書き通して頭は確かりしていた。歴史的人物である。

八月二十三日（月）

キスカから撤収されたのは、無用に戦死者を増すのを避けるために結構なことだとして、その発表の仕方が、例によって奇々怪々、国民を斯くも愚弄するかと腹だたしい。

【出典不詳…〓大本営発表】我行動完全に秘匿 爾後作戦を有利に導く…「陸海軍部隊は七月下旬…撤収した」が敵米軍は依然として精強なる皇軍部隊が同島を厳守するものと思ひ込み」…「秘匿されたことに…絶大の意義」…「敵艦隊をして混乱同士打等を演ぜしめ」…「敵は爆弾、砲弾等を多量に徒費した」…

執擁な攻撃を撃退 撤収まで敵然と勇戦…

間拔けな敵軍 無人島に必死の攻撃…「わが方に対する空よりの反攻の機が増加した事実[△]は蔽ひ難く、この完全撤収に示された卓抜なる作戰頭脳に敬服するのみでなく、更に進んでわが全面的なる防備態勢を強化するとともに」…「不毛の島キスカを守備せるわが兵力に對し注がれてゐた至難なる長途の海上補給が不必要となれるため我が海上兵力にして他に転用し得るものの生れることが予想され」……（九月二十三日）

アツツの英魂・米鬼を震撼…「アツツ島で玉碎した山崎部隊将士の尊い賜もの」…「敵は今回のキスカ攻撃においても全く消極的となり、」…「死せる孔明生ける仲達を走らせた」…」

右の記事が陸軍より発表されたものであることは明かだ。どの新聞も同じだ。

このキスカの撤収が成功したことは（一）神靈の加護（二）アツツ島玉碎部隊英靈の加護（三）作戰の妙といったことにあると各新聞は報ずる。

（一）英靈は日本のみにあつて、外国人の死者にはないのだろうか。

（二）作戰の妙は、撤収しないで、進んで撃破する方に向けられなかつたろうか。

それからアツツ島の全死が、米鬼を心底から震い上からせたという如きは、自分の作文に感心する以外の何物でもない。この程度では、一等国を對手にしては戦争は出来ぬ。宮本武蔵か四十八士の浪花節から得た常識である。

毎日の新聞とラジオは、重慶や米国の新聞が「日本の不敗の地位」を述べたといったことのみを搜して掲載している。フラッタリング【flattering】による自己満足の追求が彼等の唯一の武器だ。

マルクス主義の日本に對する影響は甚大であつた。

（一）封建主義思想との混合

（二）物質主義の人生觀を注入した。

（三）暴力による目的達成の思想すなわち力第一主義、しかもH・G・ウェルズのいわゆる五ヶ年計画なきコンミュニズムに墮した。

小汀利得曰く、近頃の泥棒は何れも戦鬪帽と国民服である。

闇の犯罪が非常に多いが、軍属か軍の請負になれば裁判所も警察もこれを追窮せざるが普通である。すなわちそこは全く治外法権である。

八月二十四日（火）

兵隊は常に讃められ、自讃していなくては居れないものと見える。キスカ撤収は何人が見ても戦局的にマインナスであるにかかわらず

「キスカ撤収の前例なき成功が御稜威の下、神霊の加護を得て、陸海軍の緊密なる決死的協同作戦により……」（『読売報知』二四日）とか、「この事実（撤収）は従来の我が優位の戦略的態勢に些かの悪影響を及ぼすものでなく、反対に我が防備態勢に画期的強靱さを加えたものである」といつている。

すなわちその説くところはアツツ、キスカを昭和十七年六月七、八日に占領した所以は、わが本土東北方面の守りを固めるためであつた。従つてアツツ島守備

隊将士の勇敢無比なる玉碎は「この作戦的憂慮の不幸なる中であつた」といい、

【『読売報知』八月二十四日】「我が巧妙なる作戦指導とアツツ、キスカ両島守備隊の勇猛果敢なる奮戦に眩惑されて膨大なる兵力をこゝに集中し、一年一ヶ月に互つて完全釘付けされたのであつた、この事態が我が全般の作戦上に及ぼした好影響は測り知れぬものがあり、」……「北辺の防備を完成せしめた第一の殊勲は我がアツツ、キスカ両島守備隊将士の上に帰す」……

という論法だ。予も実はこうした理由を製出して、早くアツツ、キスカより兵を引けといったものである。しかし、こう向き出しにくくやられると、ちよつと御挨拶の方法はない。

国民は、この程度をもつともだと感ずるだろうか。

（二）キスカ、アツツが敵の来襲をさまたげたか。答えは否だ。同所は航空機の出発点ですらもないのだ。

(二) それならば何故に国土の重大化を説くのか。

ニューヨークのフォリン・ポリシー・ブレッテン(外交協会発行)は左の如くいっている(同盟ヴェノス・アイレス十四日発)(十七日新聞【朝日】)

米英は、日本の重慶反抗の弱化を妨げなくてはならぬ。

第一、米英は重慶と治外法権撤廃条約を結んだ。

第二は国際共産党の解散は重慶の位置を強めた。

第三は支那移民法の廃止は重慶政権に心理的影響を与えた。(もつとも実際は一ヶ年百名に過ぎぬが)

八月二十五日(水)

ベルリン二十三日発電報はハリコフ撤収を伝えた。これでドイツ軍は、もう東部戦線を持ちこたえ得なくなった。ただしその発表はちょうど日本軍のそれと同じだ。すなわち左の如し

『読売報知』八月二十五日ベルリン特電：「独軍のハリコ

フ撤収は確かにソ聯軍を一步ウクライナに近づけたが、」
：「独軍所期の防備態勢強化の一端に過ぎない、」：

ドイツはドニエプル河沿岸で食い止める意志であろう。しかしそれが果して可能であろうか。たまたまドイツ内相フリックがやめて、その後親衛隊長兼秘密警察総監ハインリッヒ・ヒムラーが就任した。国内問題に対し備える意味に解さるる。

午后三時、鮎沢君一家来る。昨夜、招かれた返礼である。ワッフルを食おうというのだ。同行者に陸軍中尉加賀美君というがある。三菱銀行社員である。慶応出身で米国の大学に行ったという。日本の学生と米国の学生とを比較して、日本の学生はノートをとるぎりだ。米国の方が自から勉強することを知って居り、原典をも読破するという。極めて頭のいい青年だ。

八月二十六日(木)

ケバック会談が終了した。ローズヴェルトとチャーチルと八月十一日から開会、二十四日に終わったのだ。

その会談は

一 軍事上の統一に関する打合せ

二 会談の主題は対日作戦にあつた事

というにあり、ソ連を招請しなかつたのは問題が重に
対日作戦であつたからという意味を声明で述べている。

これによつて米英の反抗作戦が熾烈になつてくるこ
とが明瞭だ。大本営発表にも、ニュージョージア島お
よびベララベラ島の「敵反攻の勢は侮り難きものあり」
と認めている。

ボチボチ戦争責任を、銃後の生産不足に帰するよう
な論調を出してきている。

米英が休戦条件として「戦争責任者を引渡せ」と対
イ条件と同じことをいつてきたとしたら、東條首相そ
の他はどうするか？

午后旧軽井沢に行き、二十五円でゴーエン【Herbert H. Gouwen】の『The Outline History of Japan』を買つた。読んで
見ると通俗的なもので、書齋に大したものを加えない。
それにしても近頃の書籍は中々高価だ。

今日、島崎藤村氏の葬儀だが、僕はとうとう行かな

かつた。非常に盛んなようだ。そんなに盛んならば僕
一人行かなくてもといった気分も動く。

八月二十七日（金）

池辺三山の巴里通信（柳沢健君の本で、木村毅編）
の「大久保利通」を読む。中々頭のいい人だと見えて、
その説くところ確かだ。大久保を、よく理解している。

大久保が武人の権力を怖がらなかつた事を説き

「軍人、殊に天下随一の人望を持つてゐる大軍人を
政敵として、友誼も友情も抛ち……其結果、天下を
敵とするの恐れあるも憚らず、断然として排斥し
て、文治内閣を自己中心的に建立して、屹立するこ
とという其政治家的骨格の構造のしたたかなこととい
つたらない。大久保は到底政治家として軍人〇の下に
立つことを肯ぜない……かれはビスマルクに比して
一層も二層も男性的だ……」

「仮りに山県さんが支那を今一度叩くといひ出して
誰が抑えるか。」

実によく説いている。

満州事変以来の日本に二つの不幸があった。

第一は軍人を抑える政治家がなかったことだ。第二に軍部を押え得る軍人がなかったことだ。その事が動物的衝動に押されて戦争に持つてきてしまったのだ。

政府は盛んに科学知識の普及と研究完備を説く。そのため首相は帝大総長を集め、また文部省奨学金も十五万円の内、十万円は自然科学奨励費だ。人文科学に対しては依然軽蔑的だ。

この科学研究の統一について、陸海軍の対立を除けといったもの、新聞は一つもない。軍部は全く批評の外にある。軍需品も、研究所も奪い合い、対立である。国家の重大事に面して、なおこの対立感は抜けないのだ。他人の事を責める資格があるだろうか。

いわゆる日本主義の欠点は、国内の愛国者を動員し得ぬことである。思想の相違を以て、愛国の士をも排斥することである。これがファアタル【^マfarmer】な弱点だ。

英国の発表では東南アジア司令部を設置し、これが最高指揮官として海軍中將ルイス・マウントバッテンを任命したという。対日攻勢に出る第一歩だ。毎日、

支那、南太平洋方面の空中戦が激化するのが目につく。

明治天皇は伊藤博文を絶対に信頼遊ばされた。それが右翼、軍人等の攻撃があつたにかかわらず、重要な位置に居った所以だ。

ゴルフに行つたが雨天のために中止。

八月二十八日(土)

英労働組合指導者アーサー・デーキングがストックホルムに赴き、フィンランド労働組合議長ウォリと会談した。ソ連との関係整調を企図しているらしいと(『読売』ストックホルム特電、二八日紙)。何人をも派遣して交渉せしむるところに強味がある。日本では「同志的」乃至は「日本的」でない人間は駄目なのだ。陛下の御精励と、現身神としての御位置――

『毎日新聞』八月二十八日新報(二面)：八月一日の御句祭には参列員も奏楽もなく、唯々

「必勝のお祈りを遊ばされた」：第八十二回開院式「今や時局洵(まこと)二重大ナリ宜シク億兆一心全力ヲ尽シテ敵国ノ

非望ヲ破碎スヘシ」

「現御神と仰ぎ奉る陛下から一億国民に対しての断乎たる御命令が下されてゐるのである。」

『毎日』八月二十九日夕刊：日本にはムツソリーニ氏もなくヒットラー氏もない。又た今日信長も無ければ秀吉もない。：「大元帥陛下を現身神として仰ぎ奉つてゐる。」

我等一億臣民はただ大元帥陛下の大命に奨励して一切を犠牲として勇往邁進せねばならぬ。」

徳富蘇峰の「伊大和と皇国」の（五）結論

鳴物入りで「大東文学者大会」なるものが催されている。文学者の愛国運動だ。新聞が非常に書き立てる。満州、台湾等からの、同志的文学者だ。評論家もいるが、僕とはもとより通知も受けていない。

日本の鉄道は重要線も単線が多い。これはあまりに早く国有にしてしまったからだ。自由競争でなければ、絶対に増設拡大は不可能だといつていい。この程度の政治においてはだ。

午后、三井高維君夫妻及び一家と長嶋君という若い

哲学者来たる。戦争に空爆が来るのを予想して、三年前に野尻湖に行ったとの事。食料研究者である。近頃食料研究者が多いのはいい傾向だ。明日招かれることを約す。

八月二十九日（日）

アツツ島の山崎大佐が二階級飛びで中將になる。昨夜のラジオも今朝の新聞も、それで一杯、他の記事は全然ない。軍の命令であることが明らかだ。昨夜のラジオも八時から九時のものはプログラムを変更した。

「鬼神も哭く」式の英雄は、もう充分なり。願わくはもはや「肉弾」的な美談出づるなかれ。そして作戦をして左様な悲劇を繰返す如き方途をとらしむるなかれ。

それにしても国民は「責任の所在」を考えないのだろうか。イグノランス [Ignorance] の深淵は計りがたい。

一方において毎日、科学奨励に一生懸命であり、他方において頑愚なる精神主義を高調す。この矛盾は永久に続くものに非ず。徳川幕府が根底の流れと、政策とが矛盾衝突して結局倒れたように。

アッツ島最後の問題——

一 敵に大打撃を与えたか——否

二 敵の士気に打撃を与えたか——否

そうとすれば、国内的、伝統的の理由により、全軍自害をなしたという以外にはない。ああ二千数百名の有為にして愛すべき青年達！ 前にも書いたが、国家人材の立場からも、この封建主義的報国観は変化せざるを得ない——もとより国民の伝統的感情は短期日の間に変るものではないが。

池辺三山の岩倉具視論の中に、京都派が、もし攘夷を「治外法権」の条項の故に主張するといったらどうだろうかと書いてある。これは卓見だ。柳沢君の話し——

世界大戦当時、仏国は日本が参戦すれば、仏印を提供してもいいという決心だった。その事が、ブリチッシュ・ドキュメントに書いてあると。

明治は薩長藩閥であった。昭和は陸海軍閥時代である。

午後は来栖三郎氏を訪ねて過去の外交話を聞いた。

昭和十八年八月

三井高維君の家庭で夕食を御馳走になる。野草の御馳走である。

(この日——デンマークに戒厳令敷かる。)

八月三十日(月)

約一ヶ月近く振りて下山。東洋経済新報に出社。伊藤正徳君も来たる。

石橋君の話では山中湖で有田氏と会談。有田氏も極端に時局を悲観しているようだ。アンコンジショナル・サレンダー【unconditional surrender 無条件降伏】になると、公然研究もできず、困るという。有田氏の話によると、東條首相以下は、まだ樂觀しているとのこと。おそらくはその地位に居ると樂觀するものであらうと。

伊藤君の説では米国はラバウルに全力をつくしているようだ。ラバウルが落ちれば第一線に楔を打ち込まれるものである。比島に来れば日本は駄目であらう。

東京はさすがに暑い。

汽車中で『昭和外交片鱗録』を読む。いちおう読んだが再読しているのである。有田、自ら書いたものと

して後に残るものだ。ただし有田の「大東亜共栄圏」思想は半熟であり、時代の思潮を代表しているだけで論理的ではない。有田は頭は良くない。ただ人間が生一本で、屈しないところがあるのが取柄だ。真面目である。

ドイツはデンマークに戒政令を布いた。英国の敵前上陸の危険が迫ったと思われる。ドイツは何時まで持つか。

ドイツが「国際法に準拠する」云々といい出したのは注目すべし。今まで国際法などは頭になかった。

八月三十一日(火)

島崎藤村氏遺族宅を訪問。夫人静子さんは疲労のため入院中とは左もあろう。床の間には、あの藤村氏の透き通った目が光っていた。しかし叱るような眼ではなかった。下向きの、反省的眼光であった。

大谷花卿久しぶりであて宿る。木更津で商売しているとのことである。

駿河台の文化学院を文部省が閉鎖。「自由主義的」だ

からとのことだ。役人の一存で、こうした刑罰的なことができる組織は恐ろしいことだ。日本に憲法は存せず。嶋中君の第二女が行つていて、兎マてもよかつたといつていた。

今日、伊藤博文の『憲法義解』を読む。戦争苛烈化に伴う事態に対する研究のためだ。こうしたことは、政府側が進んで研究しなくてはならぬものだが、誰もやっておらず、またやれば不測の禍を受くる恐れあり。憂うべし。

九月一日（水）

欧州大戦満四年。

関東大震災二十周年目。

文化学院前校長西村伊作氏不敬罪および人心惑乱罪で収容された。

【読売報知九月一日】 人心惑乱罪とは昭和十六年十二月十九日公布同廿一日施行された言論出版集会結社等臨時取締法第十八条の「時局に関し人心を惑乱すべき事項を流布したる者は一年以下の懲役若は禁錮又は千円以下の罰金に処す」といふものである」

「自由主義者」に対する圧迫きたる。もつとも西村とはどういう人か知らぬし、文化学院の教育方針は、僕の如き規律を尊ぶものには賛成できぬが。ただ不敬罪とは大事件だ。尾崎行雄も同じで、近頃として二人目。

日本の新聞は、独ソ戦争についてドイツ側の情報計り載せている。何故だろう。ソ連とは中立国関係では

ないか。

大谷利助君、前夜より宿泊。一緒に鶴見と横浜に行く。墓の鉄鎖は全部取り去られている。丸ビルのドアも、階段の踏み台の鉄も取らるる由。戦后には一片の鉄も無きに到らん。

勸業銀行に借金に行く。富士アイスの新株払込みに充当するためである。借りるとなると大した金でもないのにいかに面倒であるかが分る。僕などにはよほどよくやつてくれているのだが。

米機多数南鳥島（小笠原島の一部）に來襲。ために警戒警報を発す。

水道は出ない。風呂は破れる。晝は古くなつても変えられぬ。いよいよ生活の底を突いた。外に行つても弁当が食えないので、今日は墓詣りにお弁当を持つて行つた。横浜に行くのに。

九月二日（木）

戦争の深化と共に、右翼連がどう動くかが興味がある。彼等は常に戦争を欲し、そして戦争を得た。

「『読売』 九月二日：頭山満翁は語る

「たまには敵が来るのもえゝぢやらう」：「わが皇土に攻撃してくればこれこそ：かたまる動機になるとわしは信ずる」：「神国日本は人も物もあげて天皇陛下のものであつて、」：「いまままでよう来させなかつた皇軍はえらいもんどぢや、」：「」

近頃は必らず「樂觀に流れず、悲觀に陥らず」といい、また「敵を侮らず、恐れず」という。これだけの言葉は文や講演の後に加える。この中間の心境とは何だろう。研究すれば必らずどちらかに陥る。有耶無耶に過ぎることが戦時心構えか。

タガンロッグを独軍撤収し、ソ連軍スモレンスクに迫る。

土地および家屋を抵当に入れ、勸業銀行から借金するため手続を始めたのが一ヶ月計り前である。印鑑証明だの、それ謄本だのと、面倒なことおびただし。本日も家屋の増築証明がないというので、区役所と区裁

判所の間を往復し午后をつぶす。「明日来られても一日のつもりでなくてはなりません」と代書いう。

裁判事務がいかに煩雑であるかが分る。形式主義はこの辺に最も強く出ている。充分な抵当物件があつて、借金をするのに、こんな小面倒な——一人の男が数日を潰すようなことは改めなくてはならぬ。

だが改まるだろうか。紙の上で形式主義の政治と觀念遊戲と、他人の事を考えない国民の惡風は改まるまい。

近頃、日本人というものが、ほんとに情けなくなつた。アーネスト・サトーの『幕末回想録』『幕末維新回想記』を読む。訳文中中々いい。

九月三日（金）

一日中、家において英文エコノミストの原稿を書く。豊やは勸業銀行に行つたが、優に一日手続きにかかり、その上百円を印紙、手数料にとらる。驚くべし形式主

義や。

警報解く。南鳥島へ敵機百数十が来た由。

九月四日（土）

反枢軸軍はイタリー本土に、二日夜上陸作戦を開始した。ベルリン電報によると上陸兵力一個師団というが、その程度の兵力をどうにもできなくては、枢軸軍悲観の外なし。デンマークにも反乱があつた。東部戦線も悪くスモレンスク方面に激戦続く。世界大戦四周年目において、勝負は明瞭化した。

陸軍は兵隊は強いし、負けないが、鉄が不足するが故に勝利が握れないといった宣伝になつてきた。

これに対する新聞の批判――

『毎日新聞』「社説」九月四日 国民に訴ふ：「○○参謀の談話から重点の置かるべき部分を列挙して、改めて読者と共に真剣に考へて見たい」

一、『わが兵隊は誰もが必勝の信念に燃えて、戦争に絶対負けてゐないと自信してゐるのであつた、或る部隊の

如き敵の火砲のため十分の九の損害を被りつゝも絶対に

負けてゐないと思つてゐる。』：「十に九を失つてなほ

かつ意気軒昂たる軍隊が皇軍以外どこにあり得るか。：

然るに敵軍の素質は如何。」二、『第一線の兵隊の感想は

米国兵は濠洲兵よりも下で、濠洲兵は支那兵に劣る。』

「皇軍に刃向ふ敵は実にかくの如き醜草に過ぎないの

だ。然るにも拘らず、皇軍の精銳は戦闘に勝ちつゝも、

これ等醜類の擁する鉄量と飛行機のために圧倒されてゐ

るのである。』：「駝鳥が頭を砂中に埋めるやうに、敗

字などから逃避すべきでない。』

巷間にて伝うるところでは戦艦、陸奥、長門ⁱはすでに撃沈され、また郵船会社の船などはほとんどなしと。果して然るや否や。

坂本直道君に逢う。同君は満鉄バリ出張所長たりし人見識ある人である。

一、重臣会議において東條首相は「ドイツ、イタリー

i 陸奥はこの年原因不明の爆発で沈没、長門は温存され戦後まで残つた。郵船会社の船は軍事利用されているとして標的にされ多く沈んでいる。

が不勢になるという如きは全く意外にて、見透しを謬った」とだけいつたそうだ。重臣も唾然たり。

二、重光が広田のところに行った。そして対ソ関係打開等につき一臂の力を乞うた。自分は駄目だが東郷を起用せよといった。東條に相談すると承知しない。以前の問題（外相の辞職）からセンチメンタルに排撃しているのである。

三、広田は偉い。しかし今となつては案がないと。

四、広田はロシアと日本軍との間に非武装地帯を造つて撤兵し、それを支那方面に持つて行くべきだと考えているが、政府は左様な事は全然考えず、今まで通りに兵力を維持している。

五、山本英輔大将の観測では英国は、大挙まずビルマ方面を突き、支那に進出して、その方面からタイ方面に出て、日本軍を中断する作戦らしいと。

六、松岡も非常に悲観しているそうである。

九月五日（日）

これから家族で畠をやりうと思つたのが雨で駄目に

なつた。しかも水道は一滴も出ない。家が少し高台だからである。雨続きであるが、その程度の水ではどうにもならないほど、水の需要が増したのであらう。無計画なる都市膨脹の結果だ。

国際関係が一番大切な時に、新聞雑誌には国際関係の記事がほとんどない。精神的説教がまだ幅をきかしている。

谷萩陸軍報道部長が、宇都宮で講演し、例によつて新聞は大々的に報じている。陸海軍の少中佐の演説が、外国においては首相程度の取扱いを受けているのは近頃の特徴だ。誰が新聞雑誌を動かしているかも知れよう。

注意すべきことは「米国にしてみれば東亜侵略の非望を放棄するにおいては彼我の間に何等死闘すべき理由がないこと」云々の箇所だ。これはバロン・デセイ [Baron d'Essai] 観測気球か。米国で左様な論議がなかうことは、やや明かだと思ふ。他の「米国内の情勢は長期戦を許さぬ」云々は外国に知れたら笑われるであらう。米国はこれからだと考えていよう。

【『出典不詳』『朝日』『中部日本』『日本産業経済』にもある】
講演要旨

「シチリア島の占領、イタリアの政変、枢軸都市の爆撃、ソ聯の夏季攻勢等、また太平洋方面においては日本軍のキスカ撤収、南太平洋方面の局地的反攻等」であるのに宣伝が低調であるのは「焦躁の気分」ありか、：国内の問題があるのだらう：「帝国主義乃至は侵略主義殊に比律賓領有、支那干渉等は絶対に日本の自存自衛と相容れないものであることを悟つた彼等が、東亜に政治的軍事的根拠を領有する限り日本は断乎としてたとひ一億玉碎するとも闘争するものであるが、米国にして若し東亜侵略の非望を放棄するにおいては彼我の間に何等死闘すべき理由がないことを逐次認識しつゝあることは事実である」

◇：斯くの如く淡泊なる米国民衆は対日戦争の目的に対して疑惑を持ちつゝある、ルーズヴェルト大統領一派はこの形勢容易ならずと観て」：「米当局は戦争の損害をひたかくしに秘してゐる、」：

昭和十八年九月

南洋諸島に長時日を要し、「彼等が『キスカ島には八万六千人が無血上陸した、』と公表してゐることでも」：「即ち日本の一に對して米二〇の兵力を以てするにあらずんば勝利は困難と自覺して居る、此の論を以てすれば一つの島に日本軍一師団があたりこれを攻撃するに彼等は甘け師団を要する、」：

今日は種々な人が来た。水野警察部長が話を聞きに来た。臼井弥枝君が来た。宇梶洋司君、伊藤勇君が来た。宇梶、伊藤両君は夕飯を食つて行つた。

九月六日（月）

東洋経済に行く。

この日、一万二千円を勧銀から借る。いかにも大変な手数である。これだけしなくては金が借りられないのか。手続き簡易化が必要だ。

戦後問題に関する研究をなすように石橋君から頼まれる。書けない問題があるので困る。しかし日本も、あらゆる場合を考えて、自由に研究するような空気が

できなければ、国家は危ない。現状は、左様な空気の結果だ。

アーネスト・サトウの『幕末維新回想録』（塩尻清市訳）面白し。

九月七日（火）

朝、農園に出ることにしている。暫らくやらなかったので草一杯だ。

新聞は何れも一面に秋山中佐の昨夜のラジオの演説を載せている。南方の苦戦をアドミット【admit 認め】してさらに曰く（大毎）

『毎日』九月七日…「彼の英国人がインドなくして英帝国なしと申してをる」…「我々はロンドンやワシントンに進まないでもインドと濠洲に飛び込むことが即ち敵をして徹底的に手を挙げさせ得る」…」

秋山中佐はインドと濠洲を落せば、それで参るようになっている。こういう結論がどこから出るのである

う。

『読売報知』の今朝の記事だ。ペルリは日本侵略のために来たというのである。

『読売報知』「風塵録」九月七日…「もちろんペリーの来朝は日本侵略の目的で来たことは明かな事実で」…中里中将が「恩人だと思はれてゐる男は実は侵略未遂者である」といった…」

左はソ連が宗教に対する寛大性を示すものだ。

『読売』九月七日…スターリン氏大主教と会見…」日本ではキリスト教迫害、小さな「長袖」を切れといったことで騒いでいる。

九月八日（水）

今朝の『読売』に池崎忠孝の「ドイツは不敗なり」との長論文あり。（一）軍力、（二）軍需品生産力、（三）

食量自給力、(四) 戦争の犠牲と恐怖にたえうる国民の精神力との四つに分け、何れもドイツの方が優れていると論断。

『読売報知』九月八日 ペルリ問題で砲弾寄附・ペルリ威嚇砲撃の砲弾海軍省へ献納…』

一、ペリーが小笠原島を、訪問した時は、同島には英国旗が掲げられていて人口三十一人しかいなかった (The Great Commodore p.259) (拠点としたことは事実だ) (嘉永九年)

二、幕府は文久元年外国奉行水野忠徳を遣わし、翌年八丈島民三十名を移した。が、まもなく引あげた。(国史辞典)

三、明治六年十二月、小笠原島経営廟議決す。

四、明治八年十月二十二日、田辺太二等出張(外交年表)
五、明治八年十一月五日、パークス日本領土として承認
認

何でも米国を攻撃すればいいという考え方は困った

ものである。そしてそれに反対はできぬ。右について『読売』の同欄にちよつと手紙を出して置いた。

九月九日(木)

池崎忠孝の「ドイツは不敗なり」の結論にいう。

『読売報知』九月九日：「いつ何時ソ聯の頓死を誘発するかも知れないことを思ふと、」：「ソ聯紙の衷情は十分これを察する」

「ソ聯脱落後における米英の地位に至つては、もはや多くを論ずる必要はないであらう。」：「ソ聯が如何に重要であるか」…』

この日(イタリー無条件に降伏す)

維新前後の国論、日清戦争の陸奥の説いた日本国民の常識、日露戦争の小村講和に対する批難。そして今回の低級なる論調の横行。日本人はついにこの程度の国民であらうか。

お昼に日本倶楽部で田中都吉氏から、イタリアが無

条件降伏した旨を聞く。夕刊でその事が発表された。

丸ビルの新聞屋は長い長い行列を作つて、その新聞を買うために一生懸命だった。よほどのショックを与えたようだ。バドリオ政権は戦争の点ではムソリーニと同じだと宣伝した後だったからだ。こうした見えすいた嘘宣伝の連続で、しかもその間違いが続くのだが、相変わらず、それを繰返して行つてゐる。困つたものだ。外政協会で堀田中佐というの講演を聞く。下らない、平凡な説教事だった。ただドイツはクリミヤは絶対に手放すまいというのが、やや革新らしいだけ。ドイツは大磐石であるといった結論である。

加地・坂本両君に加え、芦田均、芝染太郎氏を経済クラブに招く。

加地君は上海から帰り、また明后日出発。

一、統制経済をやつてゐるが、到底成功しない

二、日本の役人が日本人だけをいじめており、そのため資本がドシドシ支那側に逃げて行つてゐる（たとえば日本人は綿布を一万円で買い上げ、その四千円かを国債に寄附。然るに支那人には

一万八千円を与えてゐる）

三、日本人には到底支那を統治あるいは指導する資格なし

九月十日（金）

バドリオ政権（イタリア）の降伏から、日本の新聞はイタリアへの悪口が、始まつた。例によつて例の如しだ。『毎日』の論説に曰く

『『毎日』「社説」九月十日：「バドリオ政権の裏切をとうに看破したので、」：足手まといが無くなつた』

白鳥などが新聞で談話を発表している。シアーシアーとして「イタリアの任務終る」といったことを言う者もいわせるものも、健忘、驚くの外なし。

こんな国と、然らば同盟条約を結んだのは何人か。またそれを喜んだのは何人か。

九月十一日（土）

各新聞のイタリア攻撃ますます猛烈——

バドリオの背信許さず——帝国の抗議通告

ただ遁辞のみ、伊大使館休戦経緯を通達

武力に自信なき当然の卑劣手段——以上誑売——

東亜各地からの留学生を日本的に指導するそうだ。この程度の知識の国民が、他国民などを指導できるものか。

昨日まで「イタリアー、イタリアー」といつていたのが、今日は文芸欄その他まで動員しての悪口だ。日本の新聞には小学校生徒の常識と論理もないらしい。

ファッシスト新国民政府がイタリアーにできた。絶対主義的心構えにあつては、一つの政府をその内容から変えることはできない。常に同志的人物の出現を促してこれを利用する。妥協ではなしに、闘争だ。

ドイツのやり方は全部それであり、日本とても同じだ。国際政局においては、しかしそれは非常に犠牲が多いのである。

晩、国民学術協会に出る。僕が「日本の現状は、これが普通なのか、悪いところが出ているのか」というと、

和辻哲郎が「ウオースト」【wost】だという。三木清君は、国民の知的レベルが低いからだという。

三木君は現戦争にマルクス主義の重要性を認め、和辻博士と予はナシヨナリズムであるという。予は「今、どこの世界において『横』の現象があるか。国家と国家との争いではないか」といった。

九月十二日（日）

イタリアの悲劇は、大帝国になろうとする——その力なくして大帝国となろうとした悲劇だ。

イタリアーは日本を裏切ったことを盛んに、痛憤する。（各紙——『朝日』、井口論文）。ドイツの独ソ協定もそうではないか少し気をつけろ。

もしイタリアーが、それほど信用できない国民だとするならば、最初にこれと提携した責任者を罰すべし。そしてこれを喜んだものは誰だ。

「ファッシズムの救国の原理は永遠」と上田辰之助という商大教授はいう。（『朝日』）しかしファッシズムは

i 「横」と読めるが怪しいと底本にある。

ベスト・ブレイン【best brain】を持ちきたり得ない必然性を有する組織なのだ。

昨夜の話しに「芸術院から島崎藤村の死亡届けがだったが、その死亡届けが島崎家に配達された」。すなわち島崎は自己の死を自分に通知したのだ。けだし形式的に働いているいい例だ。その課長が中央公論の藤田君に「藤村」は「東か藤でしたかね」と聞いた。

現下において一番の苦痛は、低劣なる議論に対し何等の批判を加え得ないことである。それがますます輿論を墮落せしめる。

小汀利得を訪れ、とてもおいしいコーヒーを御馳走になる。

△参謀本部あたりでは東條の陸相兼任をとかせ、専任陸相を置かんことを希望している由。しかし東條は中々やめまいという。

△貴重本をどこかに送りたいという。小汀にしてすでに空襲の危険を感じているのだ。

九月十三日（月）

『読売』のペルリの記事につき、無駄だと信じたがちよつと聞いてやった。高橋君を通して。何にも根底がないことが明らかになった。

英米飛行機は中流階級の住宅を目がぐと。これが日本に知られているところである。然るか。後の研究材料。国際関係研究会を正午開く。山内一郎君という外務省囑託のソ連訪問報告あり。ソ連のモラルはよく、ソ連の文化はあがつているという。

一、僕は大切な書類を持つて行つたが、シベリア鉄道で鉄道学校の生徒が暑中休暇で帰るのが乗り込んだ。車掌に申し出でてこの外国人の荷物を警備するということで代り代りで遅くまで番をしてくれた。赤帽なども実に親切だ。

二、女が三分の一乃至三分の二、汽車に働いていた。

三、厭戦気分は見えなかった。

四、誰もドイツに勝つと考えている。

五、宗教が自由になったことは自信ができたからでもあるが、また政治的だ。教会は一杯だった。

貸屋の〇〇という男、頑張つて動かず。極めて不倫

快である。内容証明で手紙を寄達した由。

九月十四日（火）

昨日の国際関係研究会で、僕は、ソ連が日本の為し得る唯一の外交対手だから、せめてまず東部戦線の戦況を報ずるのに公平にせよ、それから満州方面で非武装地帯でも造つて、大軍を支那に廻せと主張した。

ソ連が宗教を利用しつつあるのは、それだけイデオロギーの色が薄くなつた事を示す。日本が一部のファナチック中心に運転されているに一步を先んじているということだ。

【『日本産業経済新聞』九月十四日】〈モスクワ十二日発同盟〉「革命以来最初の主教会議は八日モスクワで開催、」
：「開催された主教会議が全世界の基督教徒にソ聯の戦争遂行に対する協力を要請した」：（九月十日）

晩に有楽座で「ボース」という芝居を見る。相馬愛蔵氏から切符を送られたが故だ。役者は中々いいが、

説教が多過ぎ面白くなきことおびただし。頭山満が妻君と共に見物に来ていた。この黙々たる老翁、さして勉強もせず、見識もなき男が、兎に角、多数の人の熱仰を有することは、どこかに「勲」を持つてゐるからだろう。

九月十五日（水）

軽井沢に来たる。いつもの如く殺人的な雑沓さだ。丸ビルの横浜植木会社（名前をかえたそうだ）で種物を買つた。公定だそうで五十銭買うと十数種ある。普通市場なら三、四円はするものだ。

公定相場は無理な、どうにもやつて行けない相場である。強い、信用のあるものをいじめ、闇を奨励する制度である。しかも事務官が全権を有している現在においては、統制経済に対する批判は全然許されないものである。批判を殺して、衆人に関係ある経済を行おうというのだから百弊千出するのは無理がない。闇は普通の現象だ。闇をやらないでは一日もおれない。そこで一般にはこれを「国民相場」といい「闇の公定」と

いう。需要供給の關係で自然に認められたる相場ができていたのである。

砂糖は一貫目二十五円から四十円、時には五十円もするそうだ。油は一貫目百五十円。出入の者の話ではかれの知人は蜂蜜一貫目二百円で買ったという。その騰貴は非常に急で、砂糖を一貫目十円ぐらいで買ったのは遠い以前ではなかった。砂糖が一貫目三十円（それでも安い）すると、茶さじ一杯十銭になる。（一杯三匁半ぐらい入る）洋服一着一千円といったのは、五六ヶ月以前のことで。悪性インフレがきたのである。公定と、実価との相場は確かに二対一〇である。

軽井沢に着くと市原君が嶋中君のところに宿つていた。アツツに機関長として通つていたが、病氣のために下船したのだという。無事を祝す。八時に寝る。けだしレコード。

九月十六日（木）

昨日、汽車中でアーネスト・サトーの『幕末回想録』（訳）を読み終う。非常に面白かった。いかなる一つの

書よりも、豊富に幕末のことがこの書に盛られている。かれは各方面の人と交つた。西郷・大久保・勝・中井その他ことごとくかれの友人だ。そこから話を聞くのである。ミカドに大権が行くのを努力した。それにしても英人は勉強する。

サトー、ミットフオード、アダムズ、オリファンント、オルコック、何れも大部な書冊を後世のために残している。彼等は若くして日本に来て、その地で勉強したのだ。

日本はイタリアの変節を觀て憤慨するが、イタリアがこういつたらどう答えるだろうか。

一、日本は、戦争のため、どれだけ助けてくれたか。
二、日本は滿州事変以来、旧条約は新事態に適應しない場合には、いつでも破つていいという立場をとつてゐるではないか。今回のイタリアの場合がそうであつた。

三、ムソリーニ没落はすなわちイタリア政策変改の論理的結論だ。然るに日本の新聞は勝手に希望的觀測を書いてゐた。これは日本自身の責任で、そ

んなことにまでイタリーは責任は負えぬ。

市原君（嶋中君の親類で機関長だった人）嶋中君の山莊に來ているが共に旧輕井沢に赴く。

太洋丸は千数百人の内、二十数名しか助からなかった。輸送船の場合には陸軍の中佐が司令官であるが、この人の司令の下に船長はある。然るに彼等は船の事は知らぬ。船が異変ある際、陸軍中佐が命令するのである。大洋丸の場合にも、その処置について争つたらしい。船長も司令官も死んでしまつて知るに由ないが。

この命令系統については、海事裁判の時にも、一切触れてはならぬと命ぜられている。船長は海軍大尉担当官だが、陸軍々属になつて、一切陸軍の支配下にある。そうしたことから必要なる犠牲も出るものらしい。——沈没した事情は全然口外することを禁ぜられている。そういうわけで謬りが正される機會は全くないのである。

九月十七日（金）

i 昭和十七年五月八日沈没、1357中817犠牲の記事有。

昭和十八年九月

今日の午前中、東電年表の仕事をし、午後は市原君とゴルフをする。

ムソリーニは共和ファシスト党を結成して五ヶ条の宣言をなした。かれは公然伊国皇帝を否認するのである。しかし皇室中心主義の日本が、共和ファシスト党を後援してそれで筋が通るのだろうか。時勢に押されて、日本と相容れない立場をとることが、やがて大問題になることを指導者は考へているだろうか。新聞の発表を見ると日本の飛行機被害は極めて少数だ。これを例するとブーゲンビル島ブインに対する来襲機撃墜数は左の如し。

【出典不詳】：「三、四、五月の三ヶ月間にわが陸海軍地上部隊は合計廿一機を撃墜破してゐる」：

来襲機数 撃墜機数 我方損害

七月十七日	一六七	五八	九
同 十八日	一五〇	二九	二
同廿五・六日	一〇五	二七	數機
八月一日	一〇〇	四	〇

同 十二日	五五	三四	一
同 廿六日	二五	六	〇
同 廿七日	九	二	二
九月十一日	七七	一六	一
計	六八八	一七六	一五以上

これによると敵機一七六撃墜に対し、我損害は十五機内外である。すなわち一〇対一である。これならば、何も「苛烈」をいわなくてもよさそうな気がする。

チャーチルが七月三日、ギルドホールでの演説を読む。

一、米国が戦争の断崖に立っているのを見るやこの foul Japanese はアジアのドミニオンを目掛けてパール・ハーバーを攻撃した。ドイツが米英の空軍勢力によつてワイプ・アウトされるまで——この最大にして主要なる戦勝が得られるまで日本がなお屈しなければ、予は諸君に誓う。英国の総ての船と飛行機は挙げて太平洋に向けこれを撃破することをする。

△ チュニジアにては三十五万の独伊軍を捕虜或は撃滅した。

△ 六月には米英側の新造船は一对七乃至十の割合で失なわれたものに比してきた。

△ 我等の四万以上が殺され十二万が、ドイツ飛行機によつて負傷した。今やうず巻は反対だ。本年半ヶ年でRAFだけでドイツが我等の上に投ずる爆弾の三十五倍を敵に投じている。デュセルドルフだけで、一晚の内に二千トンの爆弾を投じ、その損害は三十八機だった。これに対し同じ半年間に敵が我国に投じた爆弾は一千五百トンで、その損失は二四五機である。

△ 秋の木の葉が落ちる前に地中海で大攻勢に出る。(以上はチャーチルがロンドンの自由市民のタイトルを得た時の演説)

チャーチルがムソリーニの没落に関する演説——一九四三年七月二十七日議会にて——

△ イタリアがどうなるか知らぬ。しかし我等はイタリアを混乱と無政府情態に置き、交渉の対手な

き如き事態にするのを希望せぬ。我等はドイツ人の如く多くの国家を自から支配してその内政に責任を持つ如き謬りを侵すことを避けなくてはならぬ。予はイタリアに対し、死刑執行や、コンセントレーション・キャンプ【concentration camp 政治犯収容所】に導くことを望まぬ。……

チャーチルは其の敵はドイツにあることを強調してイタリアに対し寛大な処置をとることを述べ、その無条件降伏を勧めた。

九月十八日（土）

毎日、霧が多く、雨天がちだ。軽井沢のいいところが出てこぬ。

ラジオは今日は満州事変十二周年で、マニラの斎藤報道部長とかの比島人に対し放送したという要旨を報じた。その要旨は満州事変が大東亜戦争の第一歩であり、それはまた他民族解放のための第一歩であった。この日本の誠意を比島人が認めることを要望するといったようなことだ。

軍人達は、そんなことをいつて、比島人が感心すると思つていられるらしい。普通ならば満州事件などは黙つて、他の記憶を呼び起さないのが普通だ。それなのに進んで、そんなことを言つていられるのだから、愚かさもちよつと想像以上である。彼等は戦争の現階段および将来については、少しも反省しておらぬ。またどんな事態になつても自から反省するような教育を受けておらぬことも、かねて明かなことだ。年表を書いていて気付くことは火事が多いことである。函館などはとても多いが、これを根本的に防圧する方法を講じない。戦争などに幾らこりても、おそらくは反省はすまい。そんなに人間は利口ではない。

伊藤博文は強かつた。これは明治天皇が親任し給うたからである。誰が何といおうが親任し給うた。明治天皇は確かに偉大な皇帝であられた。

今朝のラジオにて三井物産の山西省支店長禁錮十ヶ年に附せられ、三井物産は同地区で商売禁止。統制に反したというんだが、どんな罪が行われたか知らぬが随分無理が横行していると思う。治外法権を若い兵隊

が持つてゐるんだから。

午後ゴルフを市原君とやる。スランプで、どうにもならぬ下手さだ。近頃夢ばかり見て熟睡できぬ。身体はいいのだが不思議である。

毎月、ガスが多く、カラリとした天気にならぬ。ラジオに世界のニュースを漁るのだが、毎日、軍人の放送ばかりだ。

九月十九日(日)

日清戦争の論功行賞は、戦争終了後まず審議会を設け、それから八月五日(講和は四月)始めて行賞をなした。日支事変以来は、解決しないのに、すでに四十何回行賞だ。

いつか河相達夫君の話に、濠州では日本との通商条約(?)の締結案を中々返事しない。日本では例の事務上の遅滞なのだが、先方は気を廻して、日本がこれを好まないのだと解して、総てを論議した。

正しい事には従うというのではなくては議會政治は行われぬ。明治時代からの日本は閥の対抗であつた。

午後四時、約に従つて近衛公を訪問、一時間半ばかり日米交渉について聞く。目下の時局については施すに道なしという。「無責任のようだが」と附言して。宋子文はケベック会談の後に演説して、台湾と満州の支那回収、朝鮮の独立等を声明した。仏印、香港は考慮するといった由。対英米工作で中々巧妙だ。

近衛公は、戦争が激化するにしたがつて、ひどい弾圧政策に出るのではありませんかといつていた。

新制度の下においては首相を、上下両院にて選び二ヶ年ぐらいの年期にし、再選を許すことにせば如何。

九月二十日(月)

ムソリーニは十八日ローマからラジオでサヴォイ王朝を強く攻撃した。『朝日』はその全文を掲げた。

『『朝日』九月二十日：「国王は自分の行状がばれた事を知りながら、…敢て退位もしてゐない、国王は直接に責任を負はねばならぬ、国王は自身宣戦しておきながら」：「イタリアの基本的傾向は王政といはんよりもむしろ共

和制であつた」…

こんな演説を、そのまま掲載していいのか。皇室否認ではないか。

今日は航空日であつて増産を強調している。一方、新聞が行政一元化をとりあげている。行間に、陸海軍が、統一なく発注することに対し、民間側の希望をかげているのだ。『読売』は本日、『朝日』は十六、七日にかかげた。

なんでも、この期に臨んでも陸海は資材の奪い合いをやっているようだ。

来栖大使は十七日、中南米諸国に放送した。最後のところが、何だかバロン・デセイのようにも見える。

【出典不詳：9/17放送、9/18に複数の記事】…「我は敢て米洲の問題に干渉する志を有しない、」…「われらの理想に完全なる理解を示す事を求むるに過ぎない」…「東亜と米洲の間に永遠の平和を望み得る」…（九月二十日）

昭和十八年九月

九月二十一日（火）

嶋中君、昨夜来り、市原君帰る。毎日の雨で軽井沢らしきよさ少しもなし。家妻よりの通信では東京も然りという。

九州から中国一面、非常な暴風雨で、被害激甚の様ⁱ。警報を発表できぬことも一因ならん。鳥取の地震ⁱⁱといい、天怒るものか、それが故に、新聞では極めて小さくしか出しておらぬが、想像以上ならん。昨年の今頃過ぎ山陰、山陽を廻つてみたが、それよりも範囲が広いように思う。これに対する資材は到底得られず。ああ。

九月二十二日（水）

今朝久し振りの天気だ。

朝ゴルフを嶋中君とやる。

今朝の『読売報知』にはペリーの遠征記が間諜だとして左の如く報道。無知はこの程度だ。

i 9.20^{*} 死者768人、全壊6574戸

ii 9.10^{*} 死者1083人、全壊7485戸

『読売報知』九月二十二日 間諜の魔手是の如し 珍らしい『ペルリ』の報告書隅なく国情を探る…日米交換船で帰ってきた人がもたらした古文書に「支那及び日本の政治、経済、文化の各方面に互つて写真、図解等多数挿入し更に人情、風俗、地誌から当時の造船事業鍛冶工場の規模まで詳細に説明」…ゆえに国情探りだ」と

九月二十三日（木）

昨夜、ラジオで東條首相が行政の刷新について演説をした。その具体策が今朝の新聞で発表された。それは、学生の徴兵猶予の撤廃、十七業種の就業に男子を禁止、官庁人員を整理、官庁と家屋店舗の整理等可なり思い切つたものだ。

飯食店に四十才以下の男子を使用し得ざるに至つたことは銀星、富士アイス等、予の関係しているところ到大影響がある。

官庁の整理はどうせできない。それで結局民間だけが、大きな犠牲を払う訳だ。

しかし戦争遂行には、どうせここまでくるのは当然

だ。国民としては、近代戦争が何を意味するかを身に染みて考えるのには、これがいい教訓であろう。また防火のために建物および道路整備は絶対必要で、これまた当然だ。

今日も午前にゴルフをやる。

中央公論の問題は谷萩報道部長が嶋中君と会見し、解決した由。近頃、取締りが大体情報部一本となつてきたとの事。

谷萩は部内で、やや批難あり。たとえば東京都の人口疎散の問題はかれが考え出したのだが、今の場合、交通機関に左様な余裕なく、やむを得ず城を枕とする案に逆もどり。谷萩は東條に叱られたとか。また対支工作も、報道部は汪精衛支持一点張りだが、中央部はさすがに蒋介石合流を目標とし、支那人も納得する議論を載すべきだといっている由。

明治四十一年三月十五日、警視庁令を以て頬冠りを禁止

九月二十四日（金）

家妻来着、午前ゴルフ。

王精衛が二十二日入京、二十三日に帰国。借款の事か、蒋介石に対する抱き込みの打合せか。インフレで可なり悪状態にある。

日本の宣伝につき、加地君の話しては

蒋介石没落しとボスターにあるが、これは蔣は「落ちない」という意味であり、そんな例は沢山あるとの事。

台湾に徴兵令をしく。

明治以来、各政府共、よく軍部と戦った。明治二十年代より三十年代は軍事予算を削減し得たことにより反対し得た。しかし日露戦争後においては全く左様な力はなくなった。また同一人が長く政府要路にいることにより訓練されていい政治家になり得た。桂太郎、齋藤実、山本権兵衛等然り。

九月二十五日（土）

午前ゴルフし、関戸円次郎君来る。晩、嶋中君の家に巡査部長長田君を招き、予等夫婦も招伴す。

長田君の話によると、近頃軽井沢に頻々として泥棒入る由。

関戸君の話——

名古屋辺では女が竹槍の練習をしており、妻君も娘も毎日やっている。県も市もあまり賛成しないのだが、師団の責任者がそれをやらしている。

どこの家も、防空壕を家の中に掘る。そこで家が傾いているところが多い。——火事になって、家が傾いたらどうするか。東京でも皆な穴を掘らせている。

形式主義の一例は、軽井沢の山荘に、むしろを用意している。

九月二十六日（日）

軽井沢町の大運動会。宇垣大将に逢うために行つてみると、ちょうど近衛公一家が来た。一緒に見る。

宇垣大将と会見。外相当時の事を聞かんがためだ。非常に若若しい。目標もいい。国家を救うのはやはりこの人だろう。近衛は聡明だが勇氣と迫力無く、他の

軍人も駄目だ。

かれは果して立ち得る機会ありや。もつとも誰がやつても手遅れではあるが。

九月二十七日（月）

早朝、東京に帰る。雨降るもかさを買うことができぬ。関戸君と共に上京。

昼は東洋経済、晩は二六会だ。二六会においても一致して空襲の不可避をいつている。一回大規模な空襲があると十五六万の死傷はあるといわれる。

ファシスト政権を認めた¹。

九月二十八日（火）

外政協会で加瀬俊一という外務省役人の米国に関する話を聞く、米国は短期戦を狙っている事、戦意はなお旺^{さか}んである事、といった話をした。短期戦を狙うというのは、国内の問題であるよりも、むしろ日独という敵を見くびつてのことであろう。

i ドイツ軍に助けられたムツソリーニがドイツ軍占領下にあるイタリアの政府を自称し、それを日本政府が承認の意。

九月二十九日（水）

今日、軍需省ができて、商工省と企劃院が廃された。

これは代表的なやり方だ。外の国ならば、既定の機関はそのままとして、軍需省を設置して、そこで事務を統一するはずである。しかし「日本的性格」においては、そういうことはできず、また機構主義の軍部政治においては、左様なことは不可能なのだ。

すなわち之を一面よりいえば東條の「機構よりも人」主義の破綻だ。軍需省は発注一元化の要請に応ずるためだ。それだけならば、何も新しい機構を造る必要がないではないか。そこに日本人の欠点がある。

汪精衛が来たのは、日本が蒋介石政権に働きかけ、条件を提出した。それが宋子文を通して、米国で新聞に発表された。汪はこれ聞き、怪しからん、重慶工作は、予を通してという約束違反ではないかという抗議のためであるとのことだ。

重慶工作などは、従来、何回あったか知れん。それ

を今頃やつと気付いて来たとは、さてもさてもだ。

近頃、といつてもズツと前からのことだが、新聞記事も演説も「軍、官、民」といつている、すなわち士農工商といった順だ。

この間の東條の演説の中には「大稜威の下」という言葉は例によつてあつたが、「赫々たる戦果」という枕言葉はなかつたと或人が話していた。

三井物産の山西省における支店が統制違反をしたというので支店長は十ヶ年の懲役、向井会長は、謝罪に支那まで出向き、それから帰国後辞職することだ。

そのままにして置いて、増産に挺身させる気持になれず、国民をだけ、いじめる態度が、ここに現れている。現地における商業人の苦心は想像に余りある。

【『中部日本』九月二十一日】アツツ島の玉砕も空軍力の差に基因 高性能機多量生産の秋 大本営報道部秋山中佐講演：「今や『凡ては空にあり』：地中海の戦いに見られるように：アツツ島もそうだった：北アフリカ i 日中戦争開始当初から工作は為されており、汪の来日理由と共に清沢の見解はズレていると、底本の注は記す。

でドイツ軍が敗れたのも：」

空軍の差あり。ただしこの空軍は世界全部にさし向けては幾らあつても足らぬ。日本の生産力には限りあり。これを標準として、作戦と外交を考えなくてはならぬ。それを考えたか？

昨日の外交協会で、何故米国は日本人を憎むのでしょうと高島平三郎氏が質問した。この知識階級を以てして、何故に日本が憎まれるかが分らないのだ。

ローゼヴェルトは七月二十八日（一九四三年）の演説で

In the Pacific we are pushing the Japs around from the Aleutians to New Guinea..... The Japs have lost more planes and more ships than they have been able to replace. The continuous and energetic prosecution of attrition will drive the Japs back from their overextended line running from Burma and Siam and so on. We have good reason to believe that their shipping and air power cannot support

such outposts. Our naval, land and air strength in the Pacific is constantly growing; if the Japanese are basing their future plans for the Pacific or a long period in which they will be permitted to consolidate and exploit their conquered resource's () の文句は『国際情報』『情報局発行』になし) they had better start revising their plans now. I give that to them merely as a helpful suggestion.

【太平洋においてアリューシャンからニューギニアでジャップを押している。ジャップは取り換えるより多くの飛行機・艦船を失っている。消耗の継続的精力的遂行はビルマからタイなどへ拡張過ぎた戦線からジャップを追い落とすだろう。彼等の輸送力・空軍力では前哨基地を維持出来ないという充分な理由をわれわれは持つ。我々の海・陸・空軍力は絶えず増大している。日本が、太平洋の将来計画または彼等が獲た資源を強化・活用に許された長い期間を基礎にしているなら、今計画を変更するのが良いだろう。私は役に立つ提案としてそれだけを与える。】

かくいつてかれはビルマその他において空中の優位を占めていることをいつている。日本は軍略において万全の策をとったか。

この日(九月二十九日)尾崎秀実^{はつみ}の死刑決定ⁱ。僕は一、二回会見しただけだ。かれは果してスパイだったろうか。それを肯定も否定もする材料はない。ただその資料が公開されないのが、遺憾である。

i 1944.11.7 死刑執行される。

大東亜戦争は非常なる興亡の大戦争也。筆を持つ者が、後世のために、何等かの筆跡を残すは、その義務なるべし。即ち書いたことのない日記をここに始む。将来、大東亜外交史の資料とせんがため也。

神よ、日本を救え。

昭和十八年十月一日

十月一日（金）

昨日は駒沢ゴルフ場の閉鎖最後日でバッグをとりに行つた。やっている間に、NO9のアイアンを拾われ盗まれた。不愉快なること限りなし。近頃は盗人の世の中である。汽車で据つている間に靴を盗まれた人。電車で鞆を盗まれた人。非常に多し。

新聞とラジオは増産と飛行機生産のことしかない。それほど飛行機が欲せられている。しかし飛行機は、世界どこにでも戦線を拡げて、それで足りるという訳

i 橋川文三はこの箇所の記述は偽装であらうという。この日から二冊目の日記帳に記されるから、第一冊を守る偽装。

昭和十八年十月

にはいかなない。戦線は拡げすぎていないか——ローズヴェルトはそういつている——戦略はそれでいいか。その辺の批判がないから、犠牲は非常に多かろうと思う。

戦争の最初から、企劃院其他で（一）敵の生産力（二）自国の工業力を研究していたはずだ。今更に慌てるのは、いかに研究が独善的であつたかを示すものにはすぎぬ。

九月十八日朝刊発表——伊藤海軍中尉が、工事、捗らずとて割腹自殺した。新聞は大書して徳を称した。海軍葬が執行された。死そのものが尊敬される道德の一表現である。

比島からラウレル、アキノ、バルカスの三氏来る。

野村重臣は『読売新聞』においていつている。イタリア上層部はアングロ・サクソンであるとは奇妙である。

『読売報知』十月二日 米英思想を攘ふ 日本の場合 野

村重臣

：「イタリアの不名誉はイタリア国民の自ら招いた報ひであつた」：「アングロサクソンの血に原因」：「皇民はこれ凡て大和民族：皇軍はいふまでもなく、天皇の軍隊」：戦前は日米交渉妥結を願う親米英論者も居たが反省を求める…」

マクアーサーは比島で死ぬべきであつたか、それも生きて米英軍を指揮すべきであつたか——むろん、米英の立場よりして。

日本の新聞はマルクス主義影響から抜けず、ステチニアスが米国務次官になったというと直ちに、かれがモルガン財閥の一人だといった批判をする（『中部日本新聞』）。ベルリン電報でも左様に唯物的ではない。この連中の困ったことは、公式論をやるだけで、それを打破する気持のない事だ。

十月二日（土）

昨夜、国民学術協会の席上で三木清君と議論す。要

点は明瞭でないが、要するに僕は戦争になれば、もはや英米と妥協の道はないといい、かれはまだあるといったようなところがポイントの相違らしかった。かれは理念、希望と、客観的情勢をゴツチャにするのが癖である。

『朝日新聞』の投書欄は、唯一の時局に対する抗議欄だが、それによると、中野には「十四才以上六十才以下、男女共、月五回銃剣術訓練を受けよ、土気昂揚のためである」といつてきたそうである。また先頃から六十才近い婦人までを集めて「頭を右」とか「頭を中」とか敬礼を行わしめているそうだ（『朝日』、一日夕刊）。

『毎日新聞』すらが、近頃のアマりにひどい右翼極端派の跋扈（^{ばぐ}）に対し抗議している。即ち左のように書いている。

日本国民は世界一だというのに、日本人ほど自国民を疑うものはない。

『毎日新聞』「落下傘」十月二日夕刊：「せっかくの建設

的努力に冷水を浴びせる如き暴評は慎むべきである。」
：「ある雑誌を読んでみると、まるで日本はかうした危険分子で充満し、しかもそれらの危険分子が第一線に立つて仕事をしてゐるかの印象をうける」：」

しかしこうした雑誌（『公論』、『文芸春秋』）は軍部の全的支持を受けているものである。紙の割宛が減らないのも、それ等の雑誌だけである。

野村重臣という男は、本日の読売で、ますます「国内戦争」、米英思想の撃滅戦をやるといつている。

鮎沢巖君世界経済調査会を辞む。聞けばその下にあつた者が左翼で引張られた。その証人として横浜の警察に呼ばれたが、同君が英米人に交渉あり、また国際労働支局長たりし関係より、過去一年半ぐらい注意されて居つたとのことである。警察で三人の警部補および巡査から取調べられ、何回なぐられかかったか知れないとの事である。随分ひどい言葉で罵られた。隣室にはピシヤリピシヤリと擲^なつてゐる音が聞えたという。

鮎沢君は若い時から外国に居つて日本の事を知らなかった。東良三君の青果輸出組合専務理事辞任もそんなことではないか知ら。彼等は日本人のサイコロジを知らないが故に、極めて善意を以て——愛国的動機から外国人と交際していた。それが疑いを買つたのである。気の毒である。鮎沢君は密告されたのだという。この密告好きの国民！警察も軍隊も擲り、蹴飛ばすことは普通の行事である。闇に引つかかつたものなどは、例外なくやられるとのことだ。

十月三日（日）

雨降る。毎日の雨で、しかも水道は出ない。
今朝のラジオで鉄道省と通信省を一つにして運輸通信省、軍需省を作つたかわりに農林省を農商省にするとのことだ。（一）この大改革がビクともせずに行われるのは流石だ。（二）しかし機構の改変は必然に一時能率を遮げる。（三）「機構より人」をいう東條首相が、それをやらざるを得ないところに問題がある。機構の改

革その事は悪くない。

(一) 機構いじり——形式主義が依然としてイデオロギーの中心である事

(二) 形式を変えなければ、それが中心で動いてきた役人は、そのセクシヨナリズムから離れ得ない事
右の第二は日本人の特異点として注目さるべきだ。

何人の頭の中にも、現下の最大問題が陸海軍の統合融和にあり、そこに先ず省改廃のメスが下さるべきはずだと考えているのに、一言もこれに言及するものはない。

十月四日(月)

今度は関東から東北にかけて暴風雨があつた。この方は被害がそれほどでもないようだが、しかし稲が倒れて食糧増産に影響があらうと思う。「神風」もこれでは困る。あるいは一部に迷信が生れぬという保証はない。心配である。天氣がカラリとしなければ悪疫が流行する恐れがある。

三井物産の人の話に、南方に行った者は、皆な肥えて帰つて来る。ところが、一ヶ月、日本にいと必らず瘠せると。電車の中の青年の顔色の悪さ。

今朝の『朝日』と『読売』に重慶が早く猛省しろという社論がある。「重慶の勇断を求む」(『朝』)、「重慶の立場」(『読売』)と題す。汪精衛の「抗日戦の理由は既に解消した」と声明したのを敷衍しての論だ。ビルマへ重慶軍が出たことに対するプロテストの意味もある。——総べて手遅れだ。目前の問題のみに氣を奪わるものの行きつく立場である。

北京電報として「重慶との全面和平の流言、断乎処分」と、どの新聞もある。北京から——そして黙つていれば誰も知らないことを——どういうわけだろう。

東経評議員会に出席。ドイツ東部戦線の形勢悪し。ドイツ軍が計画的撤収ならば可なるも、敗退ならば回復の道なし。ドニエプル河にてどれだけ反撃しうるかに戦争の前途かかる。あるいは反撃する余力を残さないのではないだろうか。

大本教が、現在の大勢を予言したとかで、また信者が増えてきたというものあり。根底のない信仰だから、そんなこともあるかも知れず。

十月五日（火）

問題がなくなると「統制強化」をやるのが日本人の特徴だ。今朝の新聞は「防衛行政一元化、急速要望さる」「交易指導一元化」（『読売』）、「宣伝機関の一元化の必要性」「発注の徹底的一元化」（『毎日』）といった具合に一元化を説いている。「一元化、一元化で戦争終りけり」

交通省といえぱいいところを「運輸通信省」と長くいうところに事務官的特徴を見る。

キリスト教徒に対する迫害甚しとのことである。たとえば青山学院とか、立教大学とかに對し。ちょうど幕末と同じだ。

先頃、重臣達（前、元首相）が東條首相を招待した。その時、岡田啓介が

戦争はどこもあまりパツとしていないようだが――

というと東條は昂憤して

「あなたは必勝の信念を持たないんですか」と、プツと立つたという。また若槻礼次郎が

「作柄がどうも心配だが」

というと東條は

「我等閣員は何にも食わなくても一死奉公やるつもりだ」

とこれまた昂憤したという。

議會でも、どこでも、昂憤ばかりする人であるようだ。イエス・マンだけを周囲に集めるのは、そうした性格だからだ。

外政協會で井口調査官のイタリーに関する談話あり。

一、開戦当時は飛行機生産一ヶ月三百台前後にすぎなかった。

二、参戦についてはエマヌエル二世などは賛成しなかった。それが負けたので露出したのだ。

三、ムソリーニの失敗は、戦況をあまりに楽観的に

報告した。

四、天羽情報局総裁からロッシ（？）宣伝長官に、「大いにやろうではないか」と言つてやると、日高大使に回答をよこし、「三国同盟の精神でやる」と述べたが、「これは日本で発表してもいいが、イタリア国内では発表しない」といつた。

五、バドリア^マ政権からの対日通牒にも「これから飽くまで英米戦争をやる」とは言つていない。

六、バドリア政権の参謀長が仮名してリスボンに行つて、サムエル・ホアーに会見し話を纏めた。

七、大体の形勢は分つていたので警戒していた。ただし軍艦は「米英を撃つ」と出て出港して三四発打つて降伏し、そのため三分の二は敵に走つた。米英はこれを改装して地中海を守らせ、英艦を印度洋に向けるつもりらしい。

八、ドイツは三つの方法がある。(一)爆撃に備える。(二)潜水艦戦を激化せしめる事、(三)独ソの和

平。何れも望みなし。通商破壊戦の如きは最初の八十万噸が六月の如きは十五万噸だ。チャーチルは生産の七分の一か十分の一だといつてゐる。

九、中立国の内スペインの如きも、日本のモロッコ（？）の領事館設置を渋つて承諾しない状態だ。ポルトガルはチモール奪回のため宣戦しろと英国にいわれている。

ムソリーニは近來は誰のいう事も聞かなかつた。在スペインの大使がローマに行つて、このままで行くとイタリアは亡国する、という、ひどく叱られて歸つたとのことだ。

十月六日（水）

近頃——といつても大東亜戦争後、陸軍々人——しかも少佐、中佐あたりの書いていない日の新聞はほとんどない。そこに指導者の偏在を知ることができる。

国策研究会で、大東亜行政に関する書を出そうとした。それを大東亜省が許さなかつた。あるいは大東亜

省自身は将来を見通していたが、ただ言い出す勇氣がなかったかも知れぬ。

通信省と鉄道省との併合で、省内で大騒ぎしているそう[△]だ。左も[△]ありなん。これで能率[△]があがるか。さらばとて縄張り争いでもいかず。大戦争で、この国民がウンと修練[△]することがいいだろう。

午餐に日本倶楽部で「捕虜待遇について」という講演を小田島大佐（捕虜管理局課長）に聞く。

一、京城や青森、神戸あたりで「敵が憎い」と群衆の中から踊り出て乱暴するものがあつた。台湾である兵士がウェー[△]ンライト[△]のところに行つて「こん畜生、同胞の仇だ」といつて、ポカポカ抛[△]つたという。

二、捕虜は皆なで三十万もあつたが、大東亜圏内の諸民族のものは釈放し、釈放できないもの約三万、それに白人十二、三万を加えて十五万ばかりである。十%は士官だ。収容所は十五ヶ所あり、その

i Wainwright 中佐、フィリピンで降伏した指揮官。

内八ヶ所は内地にある。和蘭人三万、米人二万という如きだ。

三、日露戦争においては、米英的とでもいうか、あまりに捕虜を優待した。今回の戦争においては従来の捕虜に関する規制は御破算して、「國際法に反せざる限り嚴格に取締る事」にした。日本は捕虜に関する条約は、国体に合せざるものとして御批准を得なかつた。

四、捕虜は全部必勝の信念を有している。イタリアの敗北はよほど前に予言していたものが多かつた。ドイツは直^じき敗れるだろうといっている。始め日本では、彼等を教化する方針だったが、彼等が必勝の信念が確かなので教化は断念した。

五、彼等は捕虜であることを少しも恥として居らない。彼等は実によく働く。朝から晩まで少しも休まない。ある阪神間の重工業会社の如きは、捕虜がいなくなれば潰れるとさえいつている。能率も非常にいい。

六、捕虜の給与は一日十銭から二十銭ぐらいである。彼等に丸の子の目たてをさせると一日十三、四造る。これに対し日本人職工は二十ぐらい作る。ところが試験の結果は日本人の造つたものの合格は五（四分の一）彼等の造つたものは全部である。リベットを造るのに彼等是一日百五十、日本人職工は五十である。捕虜は物資を大事にする。たとえば釘一つ落ちていても、それを集める。また火をつけるのに、つけ木が半分残つていても、それを消して、つぎの機会に使うという如きだ。

七、彼等は人種的偏見が強い。——一緒にならない。東京では黒人に号令をかけさせている。英国人はキチンと髯を剃り、容姿を整える。米国人のある飛行将校と話したら「国家のためなら一生捕虜になつていてもいい」といったイタリーの軍艦が神戸に來たが、まるで駄目だ。軍艦旗をかかげる時も、一人か二人しか出ないという有様だ。

右の話によつて小田島大佐は、捕虜に、可なりな

敬意を表しているようだ。しかし彼等の考え方は全然諒解し得ない。日本人が感奮する事——たとえばアツツ島の全滅というような高貴なことが、彼等に分らないことを、天下の不思議と考えている。他国人の感情、考え方に対し、一歩置いて客觀的に見ることは到底不可能である。したがつてこの人々には、客觀的に物を見るができない。話を聞いてそんな感じを持つた。

十月七日（木）

War and Peace を読む。野村、来栖が十二月七日（米国的）に最後通牒を渡すと、ハルは地球上において斯くの如き嘘を言い得る政府があると考え得なかつたといつたという。近衛に対する信用もない。支那問題を起こした近衛が会見しても果たして平和的に処理し得るかというのである。いずれ研究して比較してみるつもりだ。

午後は年表を書く。木内君のやつた昭和年代の仕事が粗雑であるのに驚く。やはり人に任せては駄目だ。

十月八日（金）

経済クラブで太田三郎氏という外務省課長の「英国の近情について」を聞く。中々いい頭の人だ。

一、英国はドイツを滅し得ないという考え方が増しに行く。ギルバートもそういう説だ。そこでこれに対して二つの方法しかない。一はソ連を味方としてそれをしてドイツを押えさせる事。第二は米国をして欧州問題に釘づけにする事。

二、英国の食糧政策と人力政策は成功だ。食糧についてはパンは無制限。ミルクは極めて豊富だ。かつて二割五分しか生産できなかったのを今や四割八分自給だ。

三、戦後の問題は二つある。一つは貧豊の懸隔が非常に少なくなっていく。租税が十万ポンドに九万五千四百ポンド（？）をとられる。したがっ

て英国には一ヶ年五千ポンド以上の収入はない。かつては紳士には一ヶ月二千ポンドなくてはやれないといわれたものだ。もう一つは英国が三百年間に貯めたものを三ヶ年間にすってしまった。インドの如きも鉄道の債務を本年初半に返してしまった。各国とも同じだ。したがって英豪国を結ぶ紐帯はなくなってしまうている。

四、お正月には酒の元気で、飛んだものが出る。カサブランカの「無条件降伏」と「蒋介石を相手にせず」だ。「無条件降伏」は英国流でなく米国流だ。英国には左様な考え方はない。

五、ドイツに対しては無力にする——デバイド【divide】するということから漸次変って行っている。

六、ドイツは強い国の強いところを打ち破る。シュリーフェン作戦ⁱがそうだ。これに対し英国は弱いところに働きかける。チャーチルはことにそうだ。

ⁱ 第一次大戦以前、近くのフランスを先に叩いてという作戦、第2次大戦でも同様の作戦だと見ているようだ。

今朝、水野君が来た。米英ソ三国会談に関する意見を聞きに来たのだ。警視庁の出題らしい。

丸ビルでの話しに、軍需省ができた後に戒厳令を布くというのである。いろいろなデマが横行している。

ある代議士が、その抱く意見を述べに東條首相と会見した。すると憲兵隊が、かれを召喚して十日計り留置して訊問したり、虐めたりしたそう。かつて須磨情報部長が憲兵隊へ引張られたと同じような傾向の事件である。

十月九日(土)

今朝の新聞で軍需省を中心とする改組が発表になった。中央機構などは、ない方が国家運営にいいぐらいなものだから、これを機会に懸案の廃合はいいだろう。しかしそれならば何故に外務省と大東亜省という二つの対立的存在を一緒にしないのだろうか。また陸海軍の軍務省案は如何。

お昼は信夫淳平博士の、晩は金田一京助博士の講演

を聞く。信夫博士によれば空襲と潜航艇が戦時国際法未決の問題であるから、講和会議の時に、これを一項として提出しろというのである。金田一博士はアイヌの研究者。アイヌに独特に文化があるという。大学生の頃からアイヌ部落に入り込んで、アイヌ語とユリカ(俗語)を研究した苦心談を話した。非常にいい人柄でアイヌに心からの同情を有している。

『東亜文化圏』という雑誌を送りきた。当の雑誌社からだろう。『中央公論』『改造』『東洋経済』等が瘡^マ癩^マえたのに、誰も読まないであろう、こうした新雑誌はページ数も多い。内容は右翼的、極端主義で、秋山小佐などの座談会出席よりみて軍部のイデオロギーだ。

十月十日(日)

太田永福君長男の結婚式だ。僕も出席挨拶を述べ。晩、また暴風雨に近し。農産物の被害激甚ならん。帰途、秋山高氏と石橋君方に寄る。

i ユーカラ(叙事詩)と登場女性ユリカと混同か。

僕が警察に引張られた由の噂があつたと、小汀君語る。高橋雄豺その他の連中の会だというから識者の会なのだろう。何か根拠があるか、それとも単に噂か。半沢玉城が調べられているとの噂あり。半沢君は静岡知事に招かれ県庁や翼政会の人々に話したのだが、それが問題になつたとの事だ。

十月十一日（月）

東経の評議會に続いて、晩は高木陸郎氏に招かる。築地の錦水だ。集まるもの高柳賢三、加田哲二、田村幸策、稲原勝治及び予である。高木君は外交評論家を招待した事過去にもあり、その継続だ。

東條首相は閣員などに対し小僧扱いにする由。近頃では知識階級でかれを高く評価するもの一人もなし。かれが領土を泰國に与えた声明も陛下には奏上したかも知れぬが、他は相談に預からなかつたらしいと。

十月十二日（火）

有田八郎夫人逝去し、本日告別式だ。帰途、高橋雄豺君の自動車で都心に出ず。日本クラブで午餐。晩、歌舞伎に行く。石橋湛山氏を招いた。菊五郎の脚本はいつも浅薄だ。吉右衛門の芸にはいつも感服する。小汀夫妻と帰る。

十月十三日（水）

バドリオ政府、対独宣戦布告（13日）。横田喜三郎君の論文が満場一致で東大教授会を通過、博士論文請求のため、文部省に廻つたが、一ヶ年近くを経過するも許可しない由。仮に予の論文が通つても同運命にあわんか。早稲田の藤井という人の学位請求は却下になつたそうだ。論文審査が混んでいて中々早くいかない由。外交評論に「日露戦争の頃」という随筆を書く。

十月十四日（木）

東洋経済に比島の独立のことを書く。比島本日を以

て独立す。日本の新聞はその記事で一杯だ。仮に米国によつて独立したら、日本はこんな態度をとるだろうか。しかもこの独立によつて日本は全く何等得るところ無し。日本人は感情を食っている人間だ。

十月十五日（金）

『中部日本』に原稿を書く。午后は年表。毎朝、島で働く。僕はゴルフをやつて満足感を持ったことなし。今や農業をやると実に気持がいい。人間がブラクチカルにできている証拠だろう。

ラバウルに敵機二百来たりし由。ラバウルは内線作戦中の第一線である。これを奪われれば南洋統治領に楔が入るわけである。

十月十六日（土）

臨時議會に軍需会社法等を提出に決定。増産に一生懸命になるのは当然だが、命令さえかければ、また法

律さえできればそれで可能だと考えているのは依然たり。

『毎日新聞』八月十六日 生産責任者を選任 軍需会社法
要綱

：「書面監督の煩を排除し」：「創意工夫と努力により増産の実現を期し」：「信賞必罰以てその功禍を明かに」：「政府は現場の實際を明確に把握し生産上の隘路を開闢するために簡素強力なる指導監督を行ふ」

比島の独立について小説家林房雄が、マニラから通信を書いている。林は西郷隆盛の著者。「独立」ではなく「日本領土」が、かれの狙いである。（『毎日新聞』16）小説家というものが多く無知であることは、三木清も話していたところだ。

『毎日新聞』八月十六日 ：「百年前の志士の夢は百年後の今日においてまさに実現の第一歩を踏み出した。日本の神々はやがて南の島々に降臨し給ふであらう、」：「

i 「内線作戦」基地から遠心的に行動する戦術。

十月十七日（日）

ドイツ軍、クリミヤ半島への入口、ザボロージュを撤退。クリミヤの独軍は、またスターリンググラードの二の舞いを演ずる危険あり。イタリー方面でも不振だ。米第五軍はヴォルツルノ河（ナポリの北方）を渡河。午後は年表を書く。

イタリーの軍艦が反枢軸に降参せるもの約百——この内戦艦（全体の六の内）、八巡洋艦（全体十一）および商船十五万噸だ——（八月十二日、チャーチルの議会への報告）

「会社の国家性」とか「利益追求の否定」とかいったようなことばかりいつている。軍需会社法もそれだ。形式主義もこれまでになれば到底反省の余地はあるまい。

目前の機構に重要点を置きすぎるのは不可だ。どう機構が変つても日本人は日本人だ。ソ連の強いのはソヴェト組織ではなしに、その国民的伝統による。

明日で東條内閣二周年目を迎える。この内閣に対する批判は、後の歴史家がなそう。しかし、これくらい知識と見識に欠けた内閣は世界において類例がなからう。

年表作成中（昭和十五、六年頃）感じたこと——軍部は大政翼賛会其他に一々干渉。国内においては完全に勝利を得た。同様な勝利が敵に得られるかどうかが一の残る問題だ。

十月十八日（月）

朝、例によつて百姓。平川君来り葡萄をくれる。午後「東電年表」の打合せ会をやる。三宅君は何もせず、伊藤君にやらせている。同君には仕事はできず。予はほとんど仕事を完成した。蟬山君帰京。

十月十九日（火）

『毎日新聞』に、徳富蘇峰と本多熊太郎の対談会載る。

開戦の責任は何人よりもこの二人である。文筆界に徳富、外交界に本多、軍界に末次信正、政界に中野正剛——これが四天王だ。徳富も本多も客観性皆無。

ローゼヴェルトがアルゼンチンのユダヤ人弾圧を攻撃している。米国が人種問題を云々する資格あるか。

徳富は東條を例によって大鼓持ち振りを發揮している。この連中が第一線に出るべきだ。統制経済や社会主義は公徳心の完成を前提にす。水道などが壊れても職工は決して修繕せず。(僕の家近く)

ANTI-JEW STAND WORRIES YANKS

Roosevelt Upset Over

Ban by Argentina

On Yiddish Newspapers

Domei

LISBON, October 15. --President Roosevelt criticized Argentina's anti-Jewish attitude in suppressing the publication of Yiddish newspapers, at the press conference

held this afternoon, according to Washington reports.

"The suppression of Yiddish newspapers by Argentina is mainly an internal question, but I cannot help being deeply concerned to see a policy similar to that of the German National Socialist Party being adopted in the Western Hemisphere," President Roosevelt said.

"I believe that all United States citizens and peoples of the American continent are of the same opinion, In the resolution adopted at the Eighth Pan-American Congress held at Lima, it is clearly mentioned that oppression based on racial or religious reasons is incompatible with legal customs of the American continent."

Roosevelt's declaration is nothing but a threat against Argentina. While usually the President's utterances at press conferences are not permitted to be directly quoted on this occasion his statement was revealed word for word.

When Roosevelt was questioned whether his view was submitted to the Argentine Government, he replied : "The

Argentine Government will know it soon."

American political circles are placing much importance on this issue, and are asking the Argentine Embassy for further details. One newspaperman asked why Japanese newspapers published in Argentina were not suppressed when Yiddish papers were stopped. The Argentine Embassy replied that only one or two Japanese newspapers are being published in Argentina at present.

【反ユダヤ姿勢ヤンキーを悩ます アルゼンチンでユダヤ系新聞の禁止 ルーズヴェルトを悩ます（ヘリスボン 11.15 同盟）ワシントンの報告によると、今日午後開催の記者会見で、ルーズヴェルト大統領はユダヤ系新聞の出版を抑えるアルゼンチンの反ユダヤ的態度を批判した。ルーズヴェルトは言う、「アルゼンチンでユダヤ系新聞を抑制することは主に国内問題です、しかし西半球においてナチスと同様の政策が採られることは憂慮に耐えない。」「私はアメリカ市民と大陸の人々が同じ意見であると信ずる、リマで開催された第八回汎アメリカ議会で採択された決議では、人種的又は宗教的理由による

抑圧は、アメリカ大陸の法習慣とは相いれないと明確に言及されている。」ルーズヴェルトの宣言はアルゼンチンに対する脅威だけではない。記者会見では通常、大統領の声明はこの時直接引用することは許可されていないが、声明は一語一語明らかにされた。アルゼンチン政府に伝達されるのかという質問に、「アルゼンチン政府はすぐに知るだろう」と答えた。アメリカ政界はこの問題を重視しアルゼンチン大使館に詳細を問うている。或る記者が、ユダヤ系新聞が止められた時、日本語新聞が抑制されなかったのは何故かと訊ねた。アルゼンチン大使館は、現在アルゼンチン国内で一、二の日本語新聞が発行されていると答えた。】

十月二十日（水）

軽井沢に來たる。碓井峠の紅葉は満山紅というには早過ぎるが、緑中に紅葉の散在が、かえって趣を添える。山荘にきて、やはりよかったと思う。晩に雨降る。『日本タイムズ』で来栖の演説（帝大における）を読む。流石にこの人はジャーナリスチックで、いいポイ

ントをつかまえる。民主主義国家が低関税のできぬ事、すなわちハルの政策の如きが不可能である点の如きは一家の見識だ。

行政機構改革の事は、まだ新聞で中心問題として毎日やっている。号令をかければ人間が動くと考ええる事、機構いじりが結果を生むと考える事。戦争が幾ら苛烈でも、この考え方は直らぬ。

十月二十一日（木）

軽井沢において。『中部日本新聞』に書く。朝夕は寒し。葛かづら真紅。紅葉も、あるものは真紅、あるものは褐色。高山の紅葉の赤きは急に寒さになるからだ、かつて自由学園の羽仁校長が説けるを想い出す。

そんなに寒くもないのに、電気ストーブをやつてパツと毛布を焼く。自分でやったことながらこの頃、物資を損ずることほど、心憎きはなし。

日本は何を目がけて大きくなつたろう？ 戦争そのものだというのは明らかに嘘だ。戦争をやると何かが

達成するから戦うのだ。征服慾だというものも不完全だ。征服して何を求めるのか。やはり、日本的なものを世界に布こうという考えと、それからそれにより自己が利益しようとの二つだろう。日本人は干涉好きだ。しかし何か行動によつてこれをなすことはない。たとえば昨日、電車の中で網の上に鞆を載せようとしたのを何人も手助けしない。日本人の干涉は思想的なものに對してだ。

英米人は干涉嫌いだ。しかしそれは思想に對してであつて、他が困っている場合にこれを助ける。町で考え込んでいると、「何を捜すんですか」といつて必らずヘルプしようとするのはその例だ。電車の中でも必らず助ける。とすれば干涉は同じだ。相違は「何を目がけて？」という点に帰する。それは習慣と傾向の相違といつていいであらう。

十月二十二、三日（金、土）

二十二日、二十三日を郷里に過ごした。岡村治泰君（政

雄氏の長男の）結婚式に臨むためだ。

明科から松本に到るまでの日本アルプスの美はいつ見ても雄大だ。ここに育ちながら、この美しさを知ること少なかった。柿が枝も折れるばかりになっている。紅葉が、赤く山脈を染め出している。

二等車には必らず土木請負人のような野卑な連中が乗っている。第一次世界大戦の時にいわゆる成金が日本を一変させた。今度も同じである。資本主義機構の欠点は確かにそこにある。しかし社会主義化、統制主義化しても別の弊害がある。要は教養の向上のみ。

土橋莊三君のところに鞆を置いて、結婚披露会場に行く。やはり昔流の結婚披露也。また、明晩は家庭で村中を招くという。大変な費用である。酒は二升だけが特別配給あるだけにて使うのは五六斗は要るならん。そうやってゐる間に習慣も変わってくるだろう。岡村夫人の希望にて岡村方に宿る。増沢という岡村家長女の婿さんあり。いい青年だ。

この朝、家妻より手紙あり。嶋中君より電話あり。

僕の身辺に関しデマが飛んで居り心配している。言動を気をつけてくれと。

この間も、そういう噂があつた。僕のことを調べていることは事実ならん。しかし僕はどこに行つても不謹慎なことをいつたことはないはず。戦争が始まつた以上、戦争に勝ちぬくことは当然ではないか。

あるいは近衛、宇垣のところに行つたことなどがないのか。兎に角、下らぬ誤解を受けないため、できるだけ注意をするつもりだ。信州の秋は寒し。

二十三日は朝、今朝良君のところへ行つた。居らず、後粟を送り來たる。

岡村家の次男坊、早稲田大学に在り。本年の徴兵猶予特権の解消にて、体格検査を受く。合格はもとより既定の事実だ。僕をバスまで送つてくれた。快活な青年なり。出征についても極めて樂觀的にて、どんなに弾丸がきても、僕だけは当りつこはなしと考えている

という。

これは誰もの心情だ。東京が空襲されても、自分のところだけは安全だと思うと同じだ。

松本には物資多し。お昼を土橋方にて御馳走になり、査掛についたのは午後六時。すでに暗し。

十月二十四日(日)

午前中、ワー・アンド・ピースを研究し、午后旧軽井沢に赴く。出ると何かと買う。

ワー・アンド・ピースによると米国は二回ばかり、日本とのアンタントを希望したようである。ハルは野村に対し日、米、英の提携をいい、ローゼヴェルトもそういった。ただしそれはどうせできないからと考えたかも知れぬ。あの時、体かわしができれば非常な外政家であつた。しかし一国の外交は、そう途中で変更できるものではない。いわんや日本の外交においては。

軽井沢は本年は比較的、まだ人が残っているというが、しかしどの家も閉じている。もつとも荷物は

分送つてきているようだ。

十月二十五日(月)

軽井沢駅方面に行つて帰ると、黒木時太郎氏が来訪の旨のウナ電あり。また迎えに行く。小雨降り、察し。

十月二十六日(火)

早朝出発のはずを正午出発にす。晩、二六会に出席。中野正剛君が警視庁に捕われた旨を聞く。倒閣運動の故なりと。ⁱ

十月二十七日(水)

昨夜、室伏高信君は、世の中はまた自由主義に帰ると、僕や芦田君の立場を賞讃す。

午後の夕刊にて中野正剛ⁱⁱの自殺を知る。僕は大東亜戦争勃発に続いてのショックを受けた。これは僕が、

ⁱ 105日記にある重臣会議(880開催)云々は中野等が大東亜降しを企てたもので、その反撃に遭つた。

ⁱⁱ 警察は釈放され、憲兵隊に再逮捕されて後、自殺。

かれをローマにて御馳走になれるからかも知れず。しかし兎に角万感こもごも沸く。僕はかれを憎んだ。かれの思想が戦争を起したのである。だがかれの自殺を見て、僕はその罪を許してやる気持になった。けれど、僕も日本の伝統を心深く持つていたのである。ただ、かれの自殺の理由については全く不明である。

かれは生一本であつた。かれは開戦すれば、米国は直ちに屈服すると公言していた。これは謬りであつた。その自省の気持ちが自殺の要因をなしていたらうか。それなら立派だ。それともムソリーニ、ヒトラーを夢みたかれが、事志と違い、そのため失望したからか。兎に角、典型的の日本志士である一事は認めざるを得ぬ。僕はローマで「これから君等の世界だ。どうぞドイツに行つてナチのやつていることを見てくれ。ナチは少なくともその運動が地についている」として "I know these dictator" を贈つた。

僕は二回食事を御馳走になつた。「英国を相手にするならば、しっかりとやつてくれ」というと、かれは「中々

強敵だ。カイゼルも、ナポレオンもやられたんだからね」といつた。

英国に行く、英国流の考え方に墮する恐れがあるといふので、英国に行かなかつた。一つのイデオロギーを守るために、他の説を聞かざらんとするのが、かれの心的弱味である。かれの態度は常に宗教的であつた。かれは「真」を恐れた。そしてとうとう自殺したのである。

十月二十八日（木）

東京都の講演会に赴き、晩にPENクラブの理事会に出ず。正宗白鳥氏会長を引受けし由。この人が会長を引受けたのは意外だ。

十月二十九日（金）

晩、国際関係研究会あり、蜷山君の歓迎会を兼ね。蜷山君は同会をやめたいという。やめても差支えなからう。どうせ研究は歓迎されぬ。

十月三十日（土）

朝、例により農園に出ず。近頃は毎日三時間ばかり働いて居り、その結果、勉強ができていないで困る。

山本清君来る。丹部女史に頼んだお嫁さんがどうにか決定しそうだとのことだ。

山本君の話では、中野正剛の遺書は、平凡なものだという。日本刀が切れそうもないので、切腹せず、頸動脈を切ったというようなことだそうだ。家に憲兵も警戒していたとのことだ。

自殺か、他殺かというような疑問も出る。他殺ならば検屍などでパスしつこはないから、自殺だろうとは思われるが、あまりに不思議な死である。

夕刊に日支同盟条約ができた旨を報ず。互恵平等、善隣友好をモットーとするもの。重慶工作の一部と見るべきであるが、重慶は断じて動くまい。この事を二ヶ年以前に実行すれば日支事変も解決し、大東亜戦争も起らなかった。

戦後、無条件撤兵を約束した東條首相は、陸相としてこれを承諾しなかった。

十月三十一日（日）

一日中畠で働く。植木を動かす。朝、警察の水野君が日支新条約のことを聞きにくる。重慶は動かないであろうことを話す。

おい屋が肥料を入れたのはいいが、大切な生姜や、柿を盗んで行つた。すこぶる憤慨す。この程度の道德かと思うと、日本人を馬鹿にする気特になる。

【日本国中華民国間同盟条約

両国相互ニ善隣トシテ其ノ自主独立ヲ尊重シツツ緊密ニ協力シテ道義ニ基ク大東亜ヲ建設シ以テ世界全般ノ平和ニ貢献センコトヲ期シ之カ障害タル一切ノ禍根ヲ芟除スルノ確平不動ノ決意ヲ以テ左ノ通協定セリ

第一条 日本国及中華民国ハ両国間ニ永久ニ善隣友好ノ關係ヲ維持スル為相互ニ其ノ主權及領土ヲ尊重シツツ各般ニ亘リ互助敦睦ノ手段ヲ講スヘシ

第二条 日本国及中華民国ハ大東亞ノ建設及安定確保ノ為相互ニ緊密ニ協力シ有ラユル援助ヲ為スヘシ

第三条 日本国及中華民国ハ互恵ヲ基調トスル両国間ノ緊密ナル經濟提携ヲ行フヘシ

第四条 本条約ノ実施ノ為必要ナル細目ハ両国当該官憲間ニ協議決定セラルヘシ

第五条 昭和十五年十一月三十日即チ中華民國二十九年十一月三十日調印ノ日本国中華民国間基本關係ニ関スル条約ハ其ノ一切ノ附属文書ト共ニ本条約実施ノ日ヨリ効力ヲ失フモノトス

第六条 本条約ハ署名ノ日ヨリ実施セラルヘシ】

十一月一日（月）

今日から軍需省、運輸通信省、農商省が新設される。これを機会に「首相権限を画期的に強化」したという。同じことが従来、何回新聞に出て伝えられたろう。こうした記事が出た。

『『毎日新聞』余録』十一月一日：「ハイ・スクール卒業者で、葉書一つ書けないといふのはざらだからである▲米国に住んだことのある者ならば誰でも知つてゐることで、これは事実を誣ふるものではないのだ」：「考へ方などといふことは訓練されない」：「市民こそ主権体であるなどと煽てつゝ、やすやすと奴隷たるかれ等」：」

こんな馬鹿なことが、一応の知識のあるもので、どうしていえるのだらう。もっとも「手紙は書けない、タイプライターでなら打てる」というのならば話は別だ。

物を書くものの非良心的なことが時局を悪化せしめる。

朝、畠に行く、と、ある男が垣の枝を折っている。大喝してやつた。

日本人のモラルの低下したことは驚くの外はない。こんな国民が指導など断じてできるものに非ず。戦争の際は、他の面のみ強調される事、また物資が不足する事、気が荒くなる事、道徳方面の統制力が弱化する事、そんなことからこうした低下現象が生れるのだ。戦争というものについて考えざるを得ない。

新聞の新購読本日から禁止。（一ヶ以上の併読者は）

十一月一日（月）ⁱ

評議員会に行く。石橋君から眼鏡を貰う。

誰かの話によると満州における日本人（軍人は勿論）は依然としてソ連との戦争を欲し、ウズウズしている由。それがための工作をしていると。

ミル（？）は、「もし自分の考えていることが一時に実現したら、自分は非常に失望するだらう、と時々考

i 同一日が続くことに底本では説明は無い。

える。人間は前進に愉快があるのだ」と書いている。兵隊があれば戦争を考え、警察は事件を歓迎し、新聞雑誌は同じく事件を生む。

晩に国民学術協会の理事会に出席す。牧野英一氏一ヶ年振りに出席。何回も人事不省に陥った由。

どこに行っても中野正剛の死が問題になる。如是閑は、非常に負け嫌いだったから自分の意志通りにならぬのを悲観したのでろうという。

今日から新設省店開き。新聞一面新任命だ。

十一月二日(火)

朝例により百姓。そこへ池辺秀人君来たる。お昼と一緒に食う。百姓の話などす。辞したのが午後三時頃。それから日支同盟条約のことを書く。

同盟条約は攻守同盟のことだ。然るにこれは戦後基本条約である。この目的は重慶工作だ。この政策を二年以前に実施したら！

撤兵を何といっても承認しなかったのは東條ではな

いか。その東條が今、これに率先して承諾するのだ。

グルー【Joseph Clark Grew, 1880-1965 在日アメリカ大使】のいわゆるフランクリー・オポーチュニスト【frankly opportunistic】だ。だが現下の政策としては当然のこととて批難する事にならぬ。

十一月三日(水)

朝百姓。苗木を買いに行つたがなかった。帰りに百姓からビワの木を十円で買つて植う。

毎日ゴタゴタしていても少しも勉強しない。畠のためにクリーム・オヴ・タイムをとられることが一因だ。

小汀夫妻、お茶のみにきたる。正ちゃんを出して母親は毎日泣いている由。「日本の母親と米国の母親とが話しあつたら戦争は早く片づけばせぬか」というのはその通りだ。

今日は、明治天皇祭だ。明治天皇の御偉大さ。

東亜戦争の責任者達——政治家も文士も——は、明

i the cream of time 時間の粋の意か。

かに明治天皇の御方針に不満なのだ。日露戦争があまりに「米英的だ」というのはその一つの例である。

十一月四日（木）

朝、三時間、豊々と共に豆を植う。昨年は土地があまりにいたのが本年は一杯になったと豊やがいう。

モスコウの米、英、ソ外相会談は十月十九日から三十日まで十二回開催、左の如く公報が発表。極めて重要だ。（この外に三国共同公報が発表）

【出典不詳】…「△三国共同宣言 英米ソ三国並に重慶政

権は」…「これら各国が武器を横たえ無条件降伏するまで戦闘行為を継続する決意において一致し」…

「一、…四国共同の行動は将来の世界組織維持のためにも継続されるものとす

二、…三、…

四、…主権平等の原則に立脚し大小各国の加盟を認める
全般的国際組織を出来るだけ早く設置する必要を認める

五、将来の国際機構が成立する迄…

六、戦闘行為の終了後においては今回の宣言において予見される目的以外には他国の領土内において自国の兵力を行使しない

七、戦後軍備の統制につき実際的な全般的取極めを締結するため四国は互に協議協力する」

…「米英ソ三国政府が各国の利益の為に戦争遂行に関する現在の緊密な協同を戦後においても継続するに意見一致した」…欧州諸問題協議機関を設置する…イタリア問題諮問機関を設置する…オーストリア独立回復を図る…」

右の共同宣言につき

（一）無条件降伏は米国の勝利だ。米国が会議を引ずつたことが明らかだ。

（二）国際連盟的な組織が採用される。

（三）戦争終了後に各国の独立を認める。（六条）

（四）オーストリアを独立させると呼びかけ、ドイツをその辺より内部攪乱の期図。

新聞はソ連の主張に屈服（『読売』ストックホルム特電二日発）、ソ連に完全屈服（『毎日』ベルリン特電二日発）、米英の失敗歴然（ブエノス・アイレス今井特派員二日発）といずれもソ連の勝利をいつているが、事実はそうではない。むしろ米国がその援助国としての立場から、全面的な勝利を得たとみるべきだ。

この中には除去されたものが多いようだ（戦争責任者の問題等）

「**ただ昭和十四年の日記**」¹

ソ連二等書記官好富正臣氏の講演を国際協会で聞いた。若い^しが確か^しりしている。日露開戦をなすべからずとの議論だ。

『新聞は嘘をいつている——飢饉はない。農民の反乱もない。』

張鼓峰事件ⁱⁱでは満州国の大臣は金を引出し荷物をたんで支那に行こうとした。日本は農民をいじめて、

i 「十四年度」の日記帳を使ったという意があるいは、1939年に書いたという意か？赤字で記されているとのこと。
ii 1938.7～8に起こった日ソ軍事衝突。

彼等は張学良時代を謳歌している。

一、アンナ・カレニナを見るに二三丁も人が待つている。「顔が黒くなつたね」といつたら、待つていたんだという。二、アメリカ印度人は裸体だといつたら「それでは彼等はソヴエト・システムを持つていたか」といつた。

十一月五日（金）

米英両国は昭和十七年十月九日に支那における治外法権撤廃を発表し10・24（米）、11・1（米）それぞれ条約文を手交した。こうした事情にあつて、日本のみ頑張る訳にはいかぬ。この点で東條首相を攻撃するのは、攻撃するものが無理だ。ただ、東條自からも、その地位にあるまで、そうしたことを知らなかった。

きょう帝都に大東亜会議を開く。汪【南京政権】、張景惠【満州】、ラウレル【フィリピン】、バーモウ【ビルマ】、ボース【インド】等来着。ただタイだけは代理者を送つたにすぎぬ。

さても道具立ての好きな内閣かな。

東條の声明は例によって平凡にして陳腐、我等の商売を以てしても一読するにたえぬ。ヒトラーの繰返し主義の拙なるもの。どうして誰か有識の士に書かせないのだろうか。

蜷山政道君の講演を経済クラブで聞く。比島の事情についてだ。

比島の新憲法は全然米国流である。日本的のものを挿入せんとした試みは失敗し、ただ「道義（モーラル・ジャスチス）にたつ世界秩序」という一句だけを前文に入れただけだ。

(一) 比島にはローヤー・ポリチシャンが多い。議会がまず出来、行政府が遅れたことは運用がどうかと思う。

(二) 条約の批准を最初の案は三分の二だったが過半数にした。それでも今後の問題点だ。

(三) 戦争中だけ資源を得ることにした。戦後コオチネート【coordinate】及びセトル【settle】するところ。

富士アイスは集約的に経営する旨太田君の話し。

十一月六日（土）

大東亜戦争と米国の責任といった題目でオリエンタル・エコノミストに書くべく構想す。

そこへ電話あり、株式取引所の瀬川君という。逢いたいという。土産物を持って二人できたる。

近頃、まだ僕の意見を聞きたがるものがあることは不思議だ。

たとえば保険協会といい、またこの人々といい。おそらく昔し話したことが今更思ひ出されるからだろう。

十一月七日（日）

おさつを掘って蔵す。午前中労働。からだガミキミキして苦し。

大東亜会議で宣言書発表。新聞も大袈裟に書いて居り、昨夜は新聞夕刊が四頁出た。記念号だ。大西洋憲章に対する太平洋憲章だと書いている新聞もある。相互の独立尊重といったことを歌^マつてある。

しかしこれ等が一体、何を日本に与えるのだろう。例によつて自慰。困つたものだ。

それよりもブーゲンビル島沖合の戦争で戦果をあげた。喜ばしい。だが一面からみれば第一線のラバウル近くに敵の主力が伸びて来たことを示すものである。

十一月八日(月)

英国に復興省が近く出来る旨が同盟通信にある。英国はすでにドイツに勝つたと考えて戦後経営に乗り出したのだ。

英国において「最も重要なこと」は」との質問に対し、二割かが「第二戦線だ」と答えたが「大東亜戦争」といつたものは一人もない、と電報にあり。米国においては少し異なるがそれでも大同小異だ。

かつて中野正剛その他は「日本が加担する方に勝利あり」といつたものだ。自己評価の過重が不幸をきたした。

i 日本側沈没^二、アメリカ側沈没無しであつたらしい。

昨日、いわゆる大東亜会議の各代表演説をちよつとラジオで聞いた。チャンドラー・ボースの英語も演説も立派なもの。バー・モウもうまいがアクセントあり。しかし帝都の発声が英語であることについて、右翼から抗議は出ないか？

汽車の中、道の目星しいところに警官が出張り、一々荷物を検査するそう。富山県では、米二升のため自殺したものもあつたとのことだ。

警官は泥棒を捕えるためではなしに、良民を捕えるためのものになった。事実、その方が案でもあるのだ！日本は、英国を東亜の舞台から引きあげしめるべきではなかった。英国が居れば、相共に米国を牽制することが出来た。英国は恐ろしくない。然るにこれを追つたために英米は握手してしまった。

排英運動は素人の外交運動の最悪なる見本であつた。大西洋憲章に類似する宣言を書き、各国民に独立自由を与える声明を発表せねばならぬのは日本の悲劇である。しかしそこにまた日本の学ぶべき教訓がある。

十一月九日（火）

産業報国会の調査では男十三貫のものは一日千四百カロリーこれに通勤に要するカロリーを入れて一日千六百カロリーだ。然るにこれに対し現在の配給は一日千四百カロリーだ。女の体重十一貫だから、それで融通がつく。しかし配給が偏するから結局足りないわけだ。

機業^マ整備盛んに進行中だ。交易者六千商社を一割の六百程度に。また出版業者は同じく約一割に。

従来^マの軍人首相が中正の立場を失なわなかったのは、その位置に長く居って政治を知ったからだ。東條首相の悲劇は、かれが田舎廻りから直ちに要路に立ったからだ。長く居ると、その辺が分ってきた。かれは恨まれよう。その対支政策などにつき。

オリエンタル・エコノミストの原稿を書く。晩は国民学術協会の会に出ず。如是閑の「佐藤一斎」に関する発表あり。

十一月十日（水）

蛭山君の帰朝せるを主賓に、石橋君および東洋経済の人々を招待して鶏のすきやき会を開く。

十一月十一日（木）

ゴルフ・トーナメントに行く。三等をとる。ゴルフはすでに少しも面白からず。むしろ百姓をやらん。ゴルフどころではなし。

十一月十二日（金）

井口情報官のイタリーに関する講演を経済クラブにて聞く。先頃、外政協会で行ったものと同じ。だが面白し。

里いもを取入る。

十一月十三日（土）

毎日新聞のベルリン特電に「英政府が斯かる評論を

許した理由」はとて欧州の勢力均衡に関する論文について言及している。英国の事情を知らない例。

『毎日新聞』十一月十三日（ヘルリン特電十二日加藤特派員発）：「ソ聯の東欧支配に向つて真向から反対を唱へて……」：英国の保守党系政治雑誌の「『領土保全可否か』と題する論文」：「英国にとつて歐洲安全保持のため勢力の均衡が絶対に必須の条件であるといふ立場にたち、英政府がかゝる評論を許した理由としては色々のことが考へられるが……」

保険協會で講演。あまりできよからず。舌がもつれて神経衰弱的だ。

帰つてきて清明の徴用令がきたのを聞く。それは困ると驚く。なにしろ同人が一人で銀星をやっているのだから。

十一月十四日（日）

朝、清明がき、そこへまた大熊真君が支那から帰つ

昭和十八年十一月

てきたと挨拶にきた。

大熊君は、日華条約は、支那事変に対する日本の完敗だという。

支那事変は支那が条約を守らないということから出発した。然るに今や条約を廃棄したのだから問題がなくなつたわけだ。

支那人は結局蔣が帰つてくると確信しているという。また在支日本人はこうした日本の政策は謀略か真心かと疑っている。もつとも謀略だと誰もが信じているとのことだ。

そこへ小村秀明君が来た。隣りの故俊三郎氏の婿で、満州に出征。軍曹だ。

満州は今、零度マヤ以十七八度で、三十度ぐらいには始終なるといふ。間島省【吉林省附近】に勤務している。第一線では、日本の悪いことが、少し誇大に伝わっているとのことだ。たとえば、米がないというようなことを。

午後東良三君きたる。統制会をやめて、今勉強して

いるとのことだ。理事長と衝突したらしい。

支那にいる日本人は皆な買手さえあれば財産を売つてしまひ日本へ引きあげたいと考えている。それも古い支那通がそうだ。

この戦争の結果、米国、南米、支那その他あらゆる方面に礎いた勢力は根底的に根こそぎになるのである。

僕は東條首相の政策が（一）支那その他を味方とするためにやむを得ない事。（二）列国——敵が一步先にやつたんだから、仕方がなかったといったことを説明してその政策を庇護し、小村君に話した。

観念的に嘘ばかりいうから、何人も信じられないことになるのだ。ただ、こうした嘘をいうところに、兎に角、武力政策は悪いという観念があることを示す。そして観念はやがて進歩を齎^{もた}らすだろう。

十一月十五日（月）

富士アイスの重役会に出席。規模を縮小して、一割配当を持続する方針との事。代田君を取締役にす。

床屋に行くと、かつて七人でやっていたのを、今は主人と二人。しかもその一人に徴用令がきた由。主人は「つぶすつもりでなければ一人ぐらい残してくれては如何」と談判し、出征家族として特別な考慮があるだろうとの事。

富士アイスの笠原という男にも徴用。神戸の出張所長にも徴用。今度の徴用は非常に広汎だ。こんなに徴用して一般産業が運転できるか。

この辺についても、経済観念に暗愚な連中がやっているから無理がある。徴用工には能率はあがらない。

おそらく厭戦的な気分を煽り、その集団から不平的爆発が起きはすまいか。

晩に前進座を観る。

最初の時局劇の愚劣さ。軍事保護院の推薦で、情報局の後援だ。平凡無味な論文を役者が読むようだ。石橋君曰く「あれがエフエクチヴだと考えるのだろうか」と。これで宣伝をやるとういうのだから低劣なる常識。これでは有終の実は全う出来ず。

その次ぎの忠臣蔵は真山青果の脚色で、これは流石に立派だ。後に残るものだ。

十一月十六日（火）

講演のために東方^マに出発。相変らず混む。が前方に二等車あり、そこで据る。なつやを待たして置いたが、開札^マが一時間前で間にあわず。

隣りの紳士の話しでは九州からの手紙は多く開封検閲される由。国内相互に疑いあう。戦争の影響。

福島に下車。白河にては先頃死んだ大越又郎君の靈に遙拝した。タコマ時代^イの友人がポツリポツリと逝く。

飯坂温泉の花水館に宿る。いい旅館なり。三瓶という人応待しくる。講演午後九時に至る。

十一月十七日（水）

東京からの汽車中にては白柳秀湖の安曇族の研究を読む。よく知っているが、こうした事はやはり僕には

i シアトルのタコマで雑役をし、ハイスクールに学ぶ。

興味が持てず。健忘症の故にもやらん。

今日はシーレーの英国膨張論を読む。これは実に面白し。英国のクラシックは僕にピンとくる。英国の膨張は戦争外に立ったことにある。日本が日清、日露——少くとも日露戦争をしないで、バランス・オヴ・パワーを握つて、英国的海洋政策に乗り出したらば如何。フランスの失敗は大陸と海洋の二兎を追つたからだ。日本の事情が然り。

横手に下車。出迎えの人多し。講演す。横手は軍需産業無く、時局には明らかに不平だ。その空気を会合から観取し得る。

九州は中野正剛的だ。東北は後藤新平的だ。前者は偏狭、後者は素直だ。

前進座にて高垣寅次郎博士、「地方に行つては氣をつけないさいよ」と。僕の講演が警戒に満てるものなる点が聴衆が一応の不満な所以。

「会員の中から来年は武力戦争はすむそうではないですか」との質問あり。また「ドイツが破れば日本だ

けでは」ともいう。他の場処と異なり、戦局の重大化を認識している。

秋田県に入つて、宿屋の女も、誰もかれも色の白いのが目につく。晩、雨降る。

この田舎町で野菜がない由。配給制度に対する各方面の不平が目立つ。闇は素より横行す。

十一月十八日（木）

朝早く秋田に立つ。

宿にて炬燵こたつを立ててくれたのが嬉し。この旅館は総て親切なり。

秋田駅に西野幸八郎氏と魁さきかけ新聞の人見君あり、西野氏はかつて、共に満州に旅行せる人。経済クラブの幹事だ。石橋旅館に鞆を置き、秋田銀行の沢木淳吉氏の午餐に招かる。田舎の方が御馳走あり。

午後四時十五分から講演。聴衆は昨日も、今日も稀に見るほど、多いそうである。かつて秋田魁に書いたので名前が知られている関係もある。

秋田人士はやはり開放的だ。何等、軍需的に利益しないので、事局に対し冷静だ。後の個人的話に、軍需的景気の均点化てんてんかを欲する旨の要望があつた。供出、労働というだけで、反対給附が何もないのである。

武藤貞一がきて、独ソは握手する。ソ英の間は衝突する。日本は大勝利す。そうした楽観論を振りまいて行つたそうだ。この連中の愚及ぶべからず。気狂いがリードしている形ちだ。

夕飯を御馳走になり、さらに秋田魁の客となり料亭に酒をくむ。酒がいくらでもあるのに驚く。

十一月十九日（金）

雪降る。秋田方面には以前にも降つたそうだが、僕には初雪だ。とても寒い。おかげで風を引いたようだ。

汽車が少しスチームを出す。

文明人はとても生存競争ができぬ。秋田の旅館で炬燵を何といつても出さぬのである。不親切というより、彼等はそれを大して寒いと感じないのだ。汽車に乗る

と、少し部屋が温まると、天井の窓をあけるのだ。

新潟に着くと某という男が出迎う。イタリー軒とい
うところで十数人と会食し、講演会に出ると、二人の
私服巡査が一人は速記、一人は監督している。斯くの
如くして講演ができるはずなし。

選挙演説といい、講演といい、こんな小学生徒みた
いな男が監督するのだから、ろくな政治や言論ができ
るはずなし。官僚政治の打破が、必要だが、さて国民
が自己をガバーンできるかどうか。

十一月二十日（土）

新潟を早く出て、長岡で汽車に乗りかう。直通の汽
車は一、二回しかないとか。殺人的に混雑す。

正宗白鳥氏が言った。「僕は不断に不安で脅威されて
いる。戦争に勝つても、自分には関係が少くない」と。
その意味は隣り組がうるさく、翼壮がうるさく、また
何時官憲の圧迫があるかも知れないというのだ。

交換船が十四日に着き、新聞は「アメリカの暴虐を

衝く」（『朝日』十七日より）を連載。「邦人を殺人犯と
同監」「邦人を射殺」といった記事をかかく。

汽車中にてシーレーの『英国膨張論』を読む。教え
らるゝところ多し。午後七時近く山荘に着く。家内と
なつや・在り。

十一月二十一日（日）

晩は寒けれども、昼間は気持よし。名古屋への原稿
等を書く。

十一月二十二日（月）

お昼頃、安田利兵衛君きたる。けだしくるとの約
に従いたるもの。午後一緒に旧軽井沢を散歩す。ド
イツ人等中々多し。横浜等から立退きを命ぜられ、
二百五十人計りくるとの事。

十一月二十三日（火）

婦人の労働者、男子に代る。日本婦人への革命だ。

今までのように奴隸的では居れなくなる。必然にその位置も向上し、その知識もよくなるう。

総て、日本に革命を齎^{もたら}す。犠牲は多いが、日本人そのものが賢明であれば、必らずこれを実現しよう。どうせ行き詰っていたから、こうした外的治療を必要とする。強気であつた連中が、あまりに悲観的になつたに對し、我等は、かえつて樂觀的だ。

山莊の前面に畠を造るため人足きたる。安田君歸る。

十一月二十四日（水）

小汀君より青木大東亜相との会食あり、出でずやとすることに、帰京することす。汽車混み、二等切符を持つて三等に腰を下す。

車中にて「幕末の新聞」を読む。リチャードソン事件（生麦事件）、長州砲撃等あり。

十一月二十五日（木）

青木一男、大東亜大臣に招かる。小汀、高橋龜吉、石橋、

石山（ダイヤモンド）、長谷川如是閑、布施勝治、阿部賢一等の顔触れだ。

官邸は、元、高島小金治の邸であつたという。とても立派なものである。

青木氏は善良な官吏である。しかし政治家といつたところ無し。したがつて普通の大臣に聞くような内部話を聞くのが氣の毒な氣がする。

例の大東亜宣言はあれで行くという。日本のような大國、しかも戰勝國が、あの宣言をしたところに、日本の偉大さがある。機構は造らず、また日本は指導者顔もしないという。

右は戰爭の一部としての政策だ。勝つためにはあらゆるものが犠牲にされる、といった意味のことをいう。そうすれば謀略ともとれる。——もつともそれが一緒になつたのだとの説明である。

形式を造つて、その通りに信じ得る人のようだ。御馳走になつてすまないが、たいした政治家ではない——たいした事務家ではあろうが。重光の方がいいよう

だ。

長谷川如是閑氏と、古本屋市に行く。『自由日本を漁る』を買う。二円三十銭。定価より少し高い。

青木大東亜相官邸で、戦後機構の問題が出る。青木氏はあまり乗気でなく、戦争遂行だけで手一杯だというようなことをいう。僕は「明日講和談判があれば、日本の世界政策が問題になるではないか」といった。

こういう最高知識の会合でも、誰もかれも嘘をいつている。これでは他をコンビンス【convince 説得】することはできぬ。

十一月二十六日（金）

各新聞とも、今日は米国の対日最後通牒の記念日だとしてデカデカに來栖の話を書いている。

日華同盟——大東亜宣言は、思想的に言えば彼等の主張の勝利であり、外交的にいえば日本の完敗だ。

この点は後の歴史に解剖を必要とする。

青木大東亜相の談話に「大東亜宣言」の草案に対し、

ビルマ代表から、第五項に対し「相互的に資源を開発し」と改正したらどうかといっただけだった。これに対し「意味はその通りだ」というとそのままになったそうだ。オリエンタル・エコノミストの僕の原稿にセオドア・ローゼヴェルトが「日本の対米抗議に僅かの示嚇ありと感じ」軍艦を派遣した云々という個処を、日本の不利なりとて削除をせよとある。（翻訳者の発意だそうだ）これでは宣伝などできっこなし。

この連中は耳をふさげば、他人も聞かぬと考えているらしい。

ギルバート島を取られた由。正面の一門突破する。

二六会のようなところでも正直なことをいわず。誰もかれも嘘をいつている。（鶴見君は戦争について常に樂觀だ）

小林一三氏の談——政治なんてものは実につまらないものだ。正面から下らないことばかりいつて、少しも纏らない。実業家は自己の責任において、どんなことでもやれる。

十一月二十七日（土）

今日は防空演習の日だ。一日家に居つて年表を再検討。防空演習が全くの形式だ。我等もその必要を痛感するが、さてそれを実際見ると馬鹿馬鹿しくなる。誰も「仕方がない」という觀念からで、「イザという時にはためにはなりませんよ」といつている。

十一月二十八日（日）

午前中、皆と一緒に畠をやる。午後は年表。後藤新平がヨッフエを招いた時には、随分政府部内——内務省から反対があつた。後藤でなければ検挙されて居つたらう。

後の世に評価は定まる——しかし後藤程度の大物でなければ闇から闇に葬られたらう。

革命はすでに目前にある。若い巡査や民衆の金持ちに対する深刻なる反感だ。

（一）嶋中君の話しに、新橋の料理屋街に置いた自動

車が二十台以上も、タイヤをスツカリ切られたそう。

（二）家内が上田に行く汽車の中で、制服の巡査が隣りの人と、「人足が別荘の草とりに行くなんて怪しからん」といつていたそう。

芦田君の話しに、「日独伊三国同盟」の太鼓を叩いた連中は、今警視庁に検挙されているそう。その頃、ドイツ側の奔走も多く、金がバラまかれたかも知れぬ。後世の物語りには、なお問題があるう。

台湾、新竹に敵機二十台来襲——ベルリンを二十二、二十三両日及び二十六日に英機爆撃、その損害は甚大で、英国側は無条件降伏を宣伝している由、ベルリン電報に見ゆ。冬の空襲被害は大変だろうと思う。シュミット情報部長負傷。朝日、毎日の支局はいずれも全焼。ベルリンにおいては劇場も地下室に設けられている。

パットンという米将校、兵卒を擲つて大問題となる。これはどう日本に響くだろう。——こういう思想は弾

押しなくてはならぬと感ずるだろうと思う。

イタリーのムソリーニ主宰の政府を Fascist
Republican Gov. より Italian Social Republic と呼ぶ
ことに十一月二十六日に決定した。これは邦文新聞に
は出ていない。「イタリー社会主義共和国」はちよつと
困るだろうと思う。

十一月二十九日(月)

正午東経、国際関係研究会、東良三君を太平洋協会の
山田文雄氏に紹介、それから黒木時太郎氏の晩餐会
に招かれた。黒木氏宅には僕等の外、原信子住田正一
君夫妻等あり。いい洋酒に酔う。住田君は酔つて途中
で帰る。御馳走馴れしているので、とてもうまかった。

読売の夕刊に「フォーチュン誌」の大東亜戦争開戦
当時の記事というものがある。それにはまず野村、来
栖両大使がハルを往訪し、最後通牒を発し、それから
戦争になったように書いてある。こうした嘘をどうし
て書かなくてはならないのだろう。嘘を書くところに

その道徳的弱味がある。そのまま発表したらいいでは
ないか。

十一月三十日(火)

パットンという米士官が兵士を擲なつて問題になった
事件を、新聞は米軍の士気の敗類たふの一証拠しやうきょになしてい
る。必らずしも、そういわなければならぬという立場
からではないようだ。米国の、そうした感情、考え方
については全く無知なことが分る。

嶋中君の二男の出征を見送ろうとしてみると、岩波
茂雄氏が社員と共に来たる。小村俊三郎氏遺族を訪問
に来たが、僕のところ近くにあると聞いて来たのだ
という。お昼と一緒に食つて鶴見総持寺の小村氏墓に
お詣りをする。

節は屈たしなかつた人には余徳あり。この人を訪ぬる
岩波氏も特志なり。一個の志士を岩波氏に見る。

東経に「學術研究会」のことを書く。

十二月一日（水）

朝早く嶋中真也君を見送りに行つたが、人混みで見えなかった。

学徒が日の丸を肩から胴に巻いて元気よく出る。その無邪気を見よ。この人々が学問や知識のためにではなく、砲銃を持つて立つのだ。感慨沸く。

戦争を世界から絶滅するために敢然と立つ志士や果たして何人あるか。予、少なくともその一端を担わん。

徳富蘇峰の談（『東京新聞』十二月一日）

大東亜会議に敵国語でやるということは怪しからん。東條首相にそういえというのである（切抜き参照）【対応する切り抜きは無い】徳富は大東亜宣言に全く同情がない。（それは当然だ）出征するものには必らず「お目出度う」「祝」と書かなくてはならぬ。また戦死した人に対しても「お目出度う」というのだそうだ。

住田正一君の話に、二人の男子を出したが、何だか可笑しな気がするといつていた。

こうした感情と表現の不一致から問題は出発する。

陸軍中将四王天延孝の談話——（『東京新聞』八月一日）

「『東京新聞』八月一日：我々は当然来る戦争であると考えておつたのに「日本ではやれ国際連盟だとか、不戦条約だとか、色々と米英の謀略に引つかゝつて怖かされ、戦争などないものと考へて居つた、これがどれほど高度国防国家の建設を妨げて来たか判らぬ、そのお蔭で、我々はいま壁に馬を乗りつけた、」：「第一線で苦しんでゐる人々に対し、大いに奮励、昔の不明の取り返しをして、酬いるところがなければならぬ」：」

昨日の新聞にローマ法王庁で各国使臣が会見。その後ベルリンは、和平説を否定した。

一日の新聞でハルが和平説を否定。

何か問題があることが明らかである。ベルリン空爆は可なり大袈裟のようだ。

ベルリン空爆は二十二日夜から二十六日まで。最初の二晩に投下した爆弾はハンブルグ一週間のものの三分の二を超える。(『朝日』)

十二月二日(木)

富士アイスの重役会あり。重役賞与、配当金合せて二〇〇〇円以上あり。近頃、総べて物価あがり、収入を以て支出を支うこと難し。幸いに投資よりの収入あり、僅かに辻褄を合すに足る。

それにしても僕の如き裕福の部に入るべきものにして然り。一般人は如何。因っている者が非常に多いと思う。

ローゼヴェルト、チャーチル、蒋介石がカイロで十一月二十三日から二十七日迄五日間に亘つて会談した。その結果が十二月一日発表された。新聞は全文を、もとより伝えないが、これから戦争激化するであろうことだけは事実だ。

i 11.18 から 12.3 までは波にわたる夜間大空爆であった。

昭和十八年十二月

『毎日』は条文は全然伝えず記事だけ。『朝日』も簡単。毎日——日本の地上抹殺狙う。不逞カイロ会談。断乎撃て、この企図。謀力粉砕、実力回答のみ。

朝日——カイロ会談、敵傲慢の決議。戦局破綻を糊塗。蔣を踊らせ躍起の謀略。

読売——笑止——カイロ会談。日本の三等国転落。わが新領土を剥奪。以下は読売——

『読売報知』十二月二日 無条件降伏を 公表内容へリスボン一日発同盟

一、米英両国並に重慶政権は「日本軍の無条件」降伏を図るため共同戦争を遂行し陸海空三軍を以て日本軍に圧力を加へることに意見一致した、但し公報も日本軍に対する戦争は「困難且つ長期に亙る」ことを予想してゐる。

一、三国の戦争目的は第一次大戦以来日本政府が獲得した太平洋上の島嶼を悉く剥奪し日本を三等国に陥れてしまふことにある

『毎日新聞』十二月二日夕刊…三首脳会談は戦局の不利

に焦つたものだ。…「日本の独立と生存を明らかに否定せんとするものにほかならない。」…東亜他地域に言及しないのは「いづれにしても利害と打算によつて結ばれ何ら建設的理想もなく徒らに荒唐無稽の戦後経営論を繰返さざるを得ないところに反枢軸陣営の致命的弱点がある。」…

敵も長期戦を覚悟 会談内容…ヘリスボン特電一日発
参加者は三首脳その他「米、英、重慶代表を併せ二百名に及んだ…」

佐竹陸軍中佐、『毎日新聞』に「独の必勝陣は鉄壁」と題し三回に亘りドイツが不敗の位置にあることを述べ。同中佐はドイツに在り、本年六月かに帰来した人だとのことだ。結論は左の如し。日本の産業状態を攻撃していることを見るべし。

『毎日新聞』十二月二日、夕刊 …「国民の団結 ヒットラー総統に対してドイツ国民は全幅の信頼感をもつてゐる。」…「生産陣営の気概と闘志とは前大戦」より高まっ

ている…「この政治と生産の固く結びついたのがドイツの生産陣営である。」…「結論 ドイツの生産力は湧き出る泉の如きものである、日本にあれだけの技術と工業力があれば天下無敵である。」…「日本が儼として頑張つてをれば西欧においてもドイツの地位は絶対に揺がぬ、ドイツの心配をするより内の心配をすべきである、」…

この日「東電年表」を伊藤君に渡す。

十二月三日（金）

毎日の新聞が英米の日本攻撃困難のことだけを大きく書いてゐる。セルフ・コンソレーション【self consolation 自慰】だ。その一例。米国の「小だし戦術」と必らず加える。

Japan, Reich Unbeatable
Domei
BUENOS AIRES, November 29.-Japan and Germany can never

be defeated by naval and air forces alone, declared Lieutenant - General Lesley J. MacNair, United States Commander in the African Front, in his radio speech today, according to Washington reports.

"However powerful naval and air forces the antiAxis nations may possess, Japan and Germany can never be defeated by only naval and air forces," he said, and "it is impossible to defeat those two countries without land attacks."

In his speech, McNair warned the American public against too optimistic views concerning the future of present war.

【日本、無敵の国〈ブエノスアイレス電一月二九日同盟〉ワシントン報告によると、日独は海空軍だけでは決して屈服しない、とレズリー・マクネル將軍（アメリカ戦線の司令官）はラジオスピーチで言った。「空枢軸国は強力な空海軍をもって居るかも知れないが、空海軍だけでは日独を屈服させることは出来ない。陸上攻撃無しでは不可能です。」と、彼の演説で、戦争の将来の樂觀視をアメリカ市民に警告した。】

菊田貞雄来訪。同君は稀に見る篤学の士だ。明治学

昭和十八年十二月

院教授で明治時代の研究者。

同君の話。

幕末の佐幕の士は二つの方面に出た。キリスト教徒と、そして新聞記者である。新聞記者が反政府的なのはその故だ。政府を攻撃するのに外人居留地によった。ブラックの如きは、日本字新聞を出したが、政府はこれをどうすることもできなかった。

井深梶之助【1854-1940】の如きは最後まで薩長に深い恨みを持つて居り、意識不明の時も薩長というところと眼を見開いた程である。××も薩長のパペット【puppet 操り人形】と感じた。

外人にして日本研究者は、多く日本婦人を妻に持った人であつた。ハーン、ベルツ、マードック、プリンクレイ等はいずれもそうであつた。これ等は武士の娘であつて皆な立派な人々であつた。

井深は福沢諭吉の感化を受けた。木戸孝允は新島を通してキリスト教というものを知ったようだった。

i John Black 1827-80^o スコットランド出身、『日新真事誌』
ii ママ、「軍隊」ぐらいなら伏せなくても、「天皇」？

三好貞雄という人の『最近十年世界外交史』というのを購入。大したものでないが、僕の「外交史」を少し引照してある。

十二月四日（土）

学徒徴兵検査で「海軍」志望のものが圧倒的に多かったそう。検査官は陸軍だから「何故か」と反問した。その条項には「服装か」「海か」「気分か」といったようなことがあったそう、中には「気分だ」と答えたものがあつた由。

銀星の九君にまた徴用令が来た由。総べての者が徴用される状態だ。二、三日前、四十五才まで年齢を引上げられた。

野菜物などは大根一、二本しか与えられない由。僕の家では百姓しているからあるが。

戦争後、華族が増し、プロモーションがあり、金鶏勲章が増える。これを全廃したらどうか。そうすれば、それを貰うために戦争を目がけるものがなくなろう。

また実際の国民が犠牲だけ払うのに、官吏、軍人だけが利益を得るのは、その立場からも否定すべきだ。午、銀行、富士アイス等に行く。日本評論社で僕の出版が駄目らしい。原稿を一部持つて帰る。

十二月五日（日）

軍人は教育を憎む。しかし自身は陸大、銀時計というようなことを誇りとするんだから教育そのものを排斥するのではないことは明らかだ。

軍が、今まで軽蔑していた「学徒」を極力讃めたてるのはどういうものか（松村と栗原の会談【陸軍と海軍の報道部】）。だが学者に対しては排斥するのは学問も^{えんり}蘊奥を極めると駄目になるということらしい。

今日は冬の霜除けのため一日中畠をやった。晩、北田正武君の出征を送るため夕飯に招待。

十二月六日（月）

i 『外交史年表』の方であろう。

政治家に必要なのは心のフレキシビリティである。その屈伸性を近頃の軍人政治家は全く欠如している。だから時に応じて対策をたてることができなかつた。

毎日の新聞は松村、栗原両報道部課長の対談やら談話やらだけを載せている。そして戦局のただならざることを警告している。

日本が宣伝下手であるという事実が、日本人がアドミットする唯一の弱点である。他は総て日本人が優れていると思つてゐるのに。

我等から見れば日本人ほど自家宣伝をする国民は他にない。

『朝日新聞』十二月六日、松村・栗原対談

栗原 鈴木大將が「ペルリが日本に來たのは日本を侵略に來たのであつた、それが何故侵略せずには歸つたか」といふと、ペルリが日本に上陸したとき、その行列を見ていた日本の漁師の妻が、よちよち歩く子供を連れておつたところ、その子供が石につまついて転んだ、するとその女房がその石を蹴飛ばした、そこで子供はにこにこ

昭和十八年十二月

つと笑つて母親について來た、それを見たペルリが日本人といふものは恐ろしい國民だと思つた。」：こんな連中の祟りが怖いと歸つた。：

「松村 アヘン戦争などもそうだね。」

松村：「ブーゲンビルの頼つ破りにしろ、ハワイの被害を一年後になつて発表するなど、」：「数字で嚇さうとする、」：「信を置けないものが多いが、要するにアメリカの遣り口は不利なことは國民に隠さう、有利なことをなるべく大きく吹つけて欺瞞とごまかしで行かうとする。」：戦後計画など「暗に戦争に勝つといふことを前提と」：宣伝だから「割引して見なければならぬ点が多いやうな氣持がする、日本の方は反対に控へ目控へ目になつてゐる、これについては、長く宣伝にたづさはつてゐる人がよく言はれることであり、何よりも信用が第一で、向ふから歸つて來た連中の話を聞いても、日本の大本營の発表は信用があるといふことです、」：「在外使臣——大使館員や武官あたりからも同様の電報が沢山來てゐる。」：」

『朝日新聞』十二月六日「神風賦」 宣伝は由来日本人の

得意とするところでない。といふより寧ろ宣伝といふことを嫌ふ傾向がある。宣伝屋といふ語は、好ましい形容としては用いられない。▼殊に戦ふ場合に、事々しく自分の有利な情勢を宣伝するなどは、日本人の性格として欲しないことだ」：「敵米英は、実戦には弱い、宣伝の方は得意である。」…」

十二月八日（水）

大戦争二周年廻り来たる。新聞も、ラジオも過去の追憶やら、鼓舞やらで一杯だ。外では盛んに訓練がある。満二周年において明らかなことは、沢田も昨日いったように、国民はまだ戦い足らぬことである。一二、三日以前から十二月号の『中央公論』を見ている。その「赴難の学」という座談会の如きは「京都帝大」教授連の談なのに、奇々妙々なものだ。「徳川慶喜にフランスが刃向させた」とか、征韓論はアメリカの謀略みたいに書いてある。小牧という教授は「大東亜戦争は天佑神助だ」と繰返している。中央公論を通して全部そうし

i 「赴難」難局に赴くという旧軍隊用語らしい。

た調子だ。

大東亜戦争には（一）戦争そのものを目的な人と、（二）これを機会に国内改革をやるうという人と、（三）それによって利益する人とは一緒になっている。そしてその底流には武力が総てを解決するという考え、また一つの戦争不可避の運命観を有している民衆がある。戦争は徹底的に戦い通されねばならぬ。

二年に気付く現象は、コソ泥の横行である。物を盗まれない家とてはない有様だ。玄関に置いた外套、靴、直ぐとられる。

この日の新聞はロ、チャ、スターリン三名のテヘラン会議の公報を発表した。「世界の全民族が圧制を蒙ることなく、かつまた独自の決意と良心に基づき、自由なる生活を営み得る日の到来を待望する」といつている。六日発表だ。「ロンドン電報」と書かなければ「大東亜宣言」と間違えそう。

かつて、我等は日本主義者から「日本がついた方に戦争は克つ」という言葉を聞いた。中野正剛の如きが、

そういつた一人である。今でもその信念は失なわれて居らぬ。

警察の水野君が来たから、空襲下においては食糧掠奪が行われよう。それには隣組が単位で防衛団を造るべきだと話した。また欧州方面には「和平談の否定」が行われているが、否定するところに何事かあるものだと話した。かれは耳学問があり、事態を正しく見透している。

十二月九日（木）

東條首相が昨夜ラジオでやった講演が今朝の新聞に満載されている。相変らず「赫々たる戦勝」といったことである。

誰もかれもがいうことは「アメリカに戦争目的がない」ということだ。日本に戦争目的がないというのはどういうことだろう。陸海軍報道部長も外国から帰った連中も、全部「米国の戦争目的」の欠乏をいっているのは、当局者の指導だろう。

東條首相の演説にもそれがある。

【「出典不詳」：「戦争の苦悩日増しに加はる米英国民大衆が、戦争目的に疑念を抱くに至るべきは必定と信ぜらるゝ、而も米英の指導者等は、焦慮の余り今後愈々その国民大衆を欺瞞しつゝ、苦しまぎれの執拗な」…】

この点から米国に内部不満が起るといふのが、そのウィッシュフル・シンキング【wishful thinking 希望的観測】らしい。『朝日』で白鳥敏夫が「ユダヤ」をいつている。米英何れもユダヤ人で動かされているといふのである。毎日八日記念日の感想を本多熊太郎と、鹿子木員信をして語らせている。この人々が戦争責任者である。

正宗白鳥君の話では新潟で、僕の行った後に白鳥と斎藤忠が行って、ドイツは伊国という荷厄介なものを捨て、磐石の体制ができたといったそうだ。総べてが樂觀である。僕の談話を聞いて面白い対照であるが、彼等（新潟新聞の坂口専務）は白鳥の方の説に加担し

ているらしいとのことである。

秋田の武藤貞一の話しと同じ。地方に出て行くのが、そうした連中だから、地方に樂觀気分あるのは無理がない。

国民学術協会で仁科博士の「宇宙線の話」というを聞く。面白し。

十二月十日（金）

天気よし。近頃はズツと好天気だ。

経済クラブで「焦る敵米国」という題下で高瀬中佐の講演があった。出るつもりだったが僕は行かなかった。近頃、米国の政勢を「焦って短期戦を狙う結果だ」と言っているものが多い。そしてこれは米国の弱点の露出だというのである。これはまた自慰である。米国は最初から一九四三年の暮から攻勢を開始するといっていたではないか。

第二次大戦と民族主義の問題を、国際関係研究会のために書く。

若杉要君逝く。紐育総領事、香港総領事の時から随分御厄介になった。知人に死者多し。

勝田^{かつら}蕙子女史（石井満君の姉）も逝く。

松村報道部長（陸軍大佐松村秀逸）は、「郷軍に寄す」と題して講演。英米の「阿片戦争」「比島に対する残虐」をいう。むしろ米国の移民法の不当を攻撃したかどうか。阿片戦争はもう古い事だ。

米国は病院船を襲撃して撃沈するのは怪しからん。

『「朝日」十二月十日夕刊』：「十一月二十七日我が病院船「ぶえのすあいれす」丸は敵の二回目の襲撃を受けて遂に沈没したのである、幸に乗員の大多数は助かったやうであるが、」：「しかも病院船を襲つたのはこれで十一回目である。昭和十七年五月十六日の「高砂」丸、十八年一月四日の「あらびや」丸、」：

痴人の夢力イロ会談「日本の無条件降伏を呼号し、我が領土を奪取して三等国たらしめんと高言してゐる……」

（以上は松村大佐の演説一部）

十二月十一日（土）

『「毎日」本日付「余録」…「各学校は予備士官学校であり、
…「国民学校に配属将校を配置する必要を考慮してゐる
と述べた」…』

兵務局長が小学校教育のことを指導しているが、国民学校に配属将校をつけるとなると全く軍国政治だ。

今でも専門学校以上は配属将校に非常な力があるのだから。

『「読売新聞」（本日）「空飛ぶ日本刃」座談会、新藤中佐（教官）、吉川英治 …』

新藤「空中戦闘も最後にはその相撃ちになるのです、」
…「気魄がうすくて避けた方がこの場合必ず墜されるのです」…「体当りの精神がなくては駄目なのです、」…「昔の宮本武蔵あたりが真剣で仕合つてすべて勝つたといふのと同じことで、そのために訓練中衝突などで殉職者を出してゐる」…「部隊戦闘になりましたでも最後の止めを

刺すものはやはり個です、日本軍の強いのは個が強いから部隊戦闘になつても強い、」…』

「個が強いから部隊も強い」

「これは個人主義的考え方ではないか」

飛行士は、その戦闘方法を昔の剣道から得ている。

ナチスの理論と、日本の指導精神との類似性。（戦争の讃美、実力の絶対性その他）（ポリリカル・ソーツの英書参照）

晩、鮎沢巖氏夫妻来たる。今の家売ろうか、貸そうかと相談さる。けだし世界経済調査会をやめ、将来の方針に迷っているのだ。僕は外人に貸すべきことを勧め、また自身のことにつき、決して悲観すべからざることを勇気づけた。

賀川豊彦、高良良子女史が憲兵隊に呼ばれ、彼等が英国の平和団体かの会員であるというので「英国諜略にかかつて入会したが断然脱会する」という、手紙を出せ。しかもそれを憲兵隊において発送しろといわれ

た由。ⁱ

その後のことは知らぬ。(賀川氏はヘルド **heldhold** の過去形?)ⁱⁱ されている由)(後記)

十二月十二日(日)

若杉君の告別式に出る。この人に日米交渉の事を聞いて置かなかったことが遺憾であつた。有能な人を死なしたのは惜しい。

重光外相がラジオ演説をした。十一日、日独伊軍事同盟をした記念日のためである。ペルリが日本征服のためにやって来たといっているが、かかる事は敵の侮りを受ける。歴史家でその様に信じている者はないからだ。むしろ移民問題を持出すべきだ。

【朝日新聞十二月十二日】：「その真意を明かにし、日本を征服してこれを維新前の姿に返し、」：過去アジア・中東を：「彼等の植民地と化した、」：「阿片戦争をも

i 「日本友和会」のことか? 国際友和会はキリスト者の平和団体。高良良子は「高良とみ」本名「富子」。

敢てした、」：「鹿児島を砲撃した英国艦隊も、ペルリの率ゐた米国艦隊もその目的は何れも日本征服にあつた、」：」

以上重光外相の演説。

十二月十三日(月)

重光外相に、手紙と『日本外交史』を送り、ペルリ、鹿児島砲撃等の演説が、歴史の事実と異なることを指摘した。我等の宣伝は事実を基礎としなくてはならぬということ強調した。

海外開発協会で安曇徳明君と林甚之丞の講演を一寸聞く。

一、米国帰りが、米国が戦争目的で迷っていると異口同音にいうのは、そういえと言われているのではないか。

(二)ニューヨークに居つてニューヨークタイムスなどへ寄書していた男が、どこかで講演して、直ちに

引ばられたと長谷川進君が話していた)

二、林君は東條首相の言明たるタイ国へマライ四州を割譲することに対し、ひどく反対していた。

(一) 歴史的にも左様な根拠はない。(二) 住民は賛成していない。(三) 経済的にそれではマライがやつていけぬ(割譲地は米のとれるところだ)。(四) 日本の鉄鉱がそこから沢山くる。(五) 治安の維持をどうする。(六) 日本の権益をどうする。

同君の話しでは食塩もマライは困っている。治安も決してよく保たれていない。出先きの官憲は、事ごとに干渉するから、一般民心はむしろタイ国についた方がいいと考えているそうだ。

東條首相の声明は領土はスポイル【spoil 獲物】だという考え方である。

今日の『朝日』に風邪続出との記事あり。どこのビルでも暖房装置は一切とってしまった。銀行の窓も撤回。それから橋の欄干もとった。

戦争の後には金具が一切ない国となって居ろうと思

う。この復興は中々大変だ。況やこの上に空襲でもあればだ。

N P ロンドン電によると、この戦争の戦死者を七百五十万と推定した。前大戦では連合国側の戦死者が五百十五万とある。

ブーゲンビル島、ギルバート島の海戦で、海軍は全く愁眉を開いた由だ。これで来年秋までは直接日本に來られぬと東経の村山君いう。

十二月十四日(火)

ドイツ大使シュターマーが、しばしば重光に会見する。その理由は「日本がソ連に対し開戦しなければ、ドイツは英国と和を講ずるかも知れぬ」と、いつていふとのことだ。これはありそうなことである。

今になつても、まだソ連とこの際、開戦せよという議論をするものがあるのだから、一般民衆というものは、どれだけ無知だか分らないのである。

i 例によつて事実には正反対で日本側の航空部隊が大打撃。

林君の『海外タイムス』に、たゞ原稿を書く。雑誌を貰つてゐる御礼だ。

『中央公論』（十二月）というものが驚くべきものになった。その座談会「赴難の学」というものは、京都帝大の教授などが出ているが、西洋の学問は「西戎学」、「明治の暦法改正は不必要」「学問奉還論」「学問は日本書紀、古事記だけ読めば総べてのことが書いてある」（能田）、「国際法は全く米英の謀略法」で「ユダヤの主体性」というものは疑う余地はない、「徳川慶喜にフランスが詔勅に刃向させた」、「同志社は謀略だ」——凡そこんな風だ。

奇説もここまで来ると面白い。僕は名前の肩書きを見比べながら巻を置くにたえなかつた。その話しをする石橋氏もそうだそうだ。

『ユダヤ人研究』という雑誌の中に、「イタリーのバドリア政権の裏切り」もユダヤ人の陰謀とあつた。

米国では日本語を非常に習得している由（『毎日新聞』）

十二月十五日（水）

朝のラジオを聞いていると、昨今は知識というものを全く侮辱している。こうした平凡にして下らんことを全国的に聞かせようとしているのだ。聞いていても腹立たしい。

こんな低級な時代がかつて、また世界にあつたらうか。

十一日の日独攻守同盟の記念日に、日本だけが騒ぐのはどういうわけだろう。ベルリンでは大島大使が主催で高官を招いたらしいが、リベントロップは出ない。攻守同盟を想起させるためか。

米国は新聞記事の検閲を緩和したそうだ（同盟ヴェノサイレス）（十一日発）

彼等は戦争をすでに見越しているらしい。

東洋経済に「日ソ中立維持すべし」という論文と名古屋屋とに書く。

腹をこわし、中々直らない。こんな頑固な胃腸病は

始めてだ。

十二月十六日（木）

昔の倭寇が丁度昭和十五六年代の新しい形だ。

国内においては神風連的な右翼思想が流行する。外国に行くのはそういう連中に限られる——たとえば大教授田中耕太郎博士はカソリックで、日本精神に徹底しないというので、すでに決定していたのを取消さしめられた。自分で頼んで置いて取消す役所の意気地なさも時代を現わすものだ——彼等は無知でありながら、恐ろしく自信がある。そこで大東亜諸国に行つて、それ錬成だ、それ儀礼だという。こんな国民に彼等が推服するものではない。この事は林甚之丞君もいい、誰もかれもいうところだ。

その頃、司政長官としてぬかれるものは、ほとんどことごとく右翼思想の持主だ。富山県の知事をしていた矢野某という如きもその一人である。

戦後、大東亜諸国の識者の日本に関する評判を知り

たいものである。

土井田君という中大出身で海軍主計学校に行つてゐる人が来た。ヒドク擲る^{なぐ}そうだ。擲ることが義務のようにならう。他から聞くと擲ることが一つの訓練で、擲ることによつて一人前の兵隊になると信じてゐるのだそう。

日タイ文化会館（柳沢健君）の主催でタイの新大使ウイシエットの歓迎会があつた。風彩^{マヤ}のあがらない男である。

その席上で萩原徹という大東亜省の書記官の話し。

東條首相という人は反対する人を好まない。今のところ重光さんが少し忠告したりしているが、あれが続くと、長くない前に放り出されてしまうだろうと。

いつか阿部賢一君の話し。

重臣は誰も東條に対し愚痴をいつてゐる。戦局のこと「俺に任せて置け」といった具合で、少しも打ちあけもせず、相談にも乗らぬ。無条件に押して

いるのは阿部信行だけだ。

中野正剛は、そこで宇垣擁立を計画した。

杉森孝次郎氏曰く中野秀人（中野の弟）が死后直ちに來て全く分りませんといっていた。

（政府が慌てたことは事実で、憲兵隊は四方に飛ぶ、福岡あたりでも関係のない人が停車場で引つ張られたりしたと。）

東條首相の考え方（十六日經濟連盟での談話）

『『毎日新聞』十二月十六日：「この一年がその大勢を決する」…「敵米英の内情を大觀致するに元來敵米英においては戦争目的が明確でなく、また米英相互の間における利害も必ずしも一致してをらない」…「これに對して帝國は明かなる戦争目的の下に戰略的必勝の態勢を已に確立して」…東亜の資源で戦力強化出來ているに對し敵は苦境で「莫大なる損害をも顧みず遮二無二反攻する焦燥振りを示して居る所以は實にこゝに存するのである。」…「戦争第三年を決勝の年とする」…「由來戦争は無理を克服せんとする人と人、意志と意志との決闘である、

決勝の原動力は何といつても敢闘精神であり、特に指導者の氣魄である、この事たるや戦場に限らず国内經濟活動の部面においても当然適用せられなければならない、一例を石炭にとつて見るならばもし出炭能率が思はしくない傾向ありとせば社長自らその炭坑に飛び込ん」…「敵が焦るといふことは敵をしてさうさせる大きな理由があるからである、換言すれば彼等の前途には不安の暗雲が増して來たともいひ得るのである」…」

- 一、戦争目的
- 二、敵の焦燥
- 三、戦争は無理

十二月十七日（金）

國際關係研究会で三浦新七氏の東西西洋の文化に関する講演あり。篤学なる学者だ。西洋はキリスト教を根幹としているのに、東洋は雑多である。西洋では神と人とを別にしていて、神に到達せんとして努力し進歩する。これに對し東洋では自然の力の中に自己を發

見する。西洋では教会が中心で発達してきたが、それが故に教会对国家という問題が起った。日本は宗教一致だ。ヒトラーなどが日本を羨む理由がそこにある。

赤松克麿君と久し振りに会す。産業労働者の思想悪化は驚くべきものがある。労働組合を造つて、命令が幹部から達するようにするのがいいと資本家もいつてゐる由。

なんでも中島飛行場あたりで、労働者が寄宿舎を叩きこわした由。自由主義、個人主義の洗礼を受けねば駄目だという。

僕も石橋君も自由主義に反対したのは君等ではないかといった。

ソ連とチェッコの間に友好並に相互扶助条約が締結された。それを新聞特電は盛んに問題にしている。ドイツが強ければ、こんな亡命政府の行動などはどちらでもいいはず。

ただ米国あたりが、全般的安全保障機構を考えている時に、この同盟が出来たことは一つの問題だ(『朝日』

十八日特電)

十二月十八日(土)

近頃の文章(新聞)には必ず一つの型がある。「戦力増強に邁進しなくてはならぬ」「銃後の責任を果さなくてはならぬ」といった言葉を最後に附することだ。これは説教好きな国民性を示す一つの現れだ。言い放しにすると何か不安を感じるのだ。

【出典不詳】(『ブエノスアイレス十六日発同盟』米開戦来損害発表 米陸軍長官スティムソンは「米国軍の死傷総計十三万一千余名なる旨言明した」)：

〈同〉世界の人的喪失二千万人 …「反枢軸軍は七百五十万、ドイツ軍は二百五十万の兵員を喪失してゐる一方空襲、飢餓、疾病等で一般市民千万人が失はれてゐる、」：「戦費は米国は第一次大戦では僅かに三百二十億弗にすぎないのが今次戦争では既に千四百三十億弗に達している」

英軍はまた十六日、ベルリンへ千五百噸^トの爆弾を投下した由。再建しようとすればつぶす戦法だ。日本も同じ戦砲^{アサ}に出らるべく、東京で残存するものは極めて少ない建物だろう。

古本市場を見に行く。本は大分高くなった。稲垣満次郎の『外交と外征』というを買う。明治二十九年の発行だ。その頃、日清戦争の勝利の結果として日英同盟を予言したのは偉い。西洋歴史も中々面白く書いてある。

いつ出ても評判になったものはやはりいいところがある。ケンブリッジを出た人である。

朝鮮において「何故に我等に独立を与えぬか」という運動が起っている由。また義勇兵壮行会の席上などで野次が飛んだり混乱があったりする。郷里から三通も四通も手紙が来て義勇兵志願を勧めるのだそうだ。

英国は、いつでも他をして戦わせる。しかし英国が味方した方が敗けたことがあったか知ら。

十二月十九日(日)

十七日、米国は支那移民排斥法を撤廃(ロ大統領署名)吉野の岡村君来たる。先頃郷里で結婚せる青年。目下同盟に勤務中である。

十二月二十日(月)

日本新聞会で、僕と阿部真之助君の対談会をなす。同社の会報のためである。聞くと情報局で、現役にあらずる人の説がいいとて引張り出したのである由。

阿部君後に曰く「我等を引き出したのは彼等が自信がなくなつた証拠だよ」と。

嶋中君に一万五千円と利子千円返す。けだし軽井沢の土地のためのものである。外債を日発社債に直したものを全部提供し、その上に現金を添う。利子は五分とす。なお来年一千百円返すこととす。

『朝日』の鉄箒欄に「六郷水道」のことを出したら掲載した。

i 六郷用水路の埋め立て計画に反対した件。

十二月二十一日（火）【底本では「十月」】

ギルバート島のマキン、タラワ両島を敵に奪われ、三千余名殲滅された旨を今朝の新聞は発表す。これは先頃から米国の被害が非常に多いことを予報しながら小出しにして居ったものである。ニュー・ブリテン島のマーカーカス岬といい、これといい、国民としても可なりショックを受けよう。

同盟の岡村君の話では、部内で敵の内、米国は個人主義、自由主義で戦争が嫌だから、まず米国から崩れ、戦争が妥協に終るだろうと言っている由。青年の知識はこの程度である。

末次大将、斎藤忠その他は何れもなお時代の寵児である。彼等は確かに戦争の責任者だ。その連中は依然として雑誌や新聞を賑わしている。——山田君（東洋経済）曰く、斎藤忠は依然として愛読者を持っているですよ。

東洋経済へ言論報国のことを書く。晩に日タイ文化

昭和十八年十二月

協定一周年の演芸あり。英子を連れて参列。

この間の萩原徹という大東亜省官吏の話しに、ピプンが、やや逃げ腰になっているとのことであつた。

十二月二十二日（水）

強硬外交のバランス・シーツ——

増税案が今朝の新聞で発表された。初年度二十二億円の増収を目標だ。すなわち支那事変当時の税収の八倍である。今までとても外国では日本をポバーティーストリックン【poverty-stricken 窮乏】などといっていた。いよいよ人間は税を払う動物になったわけだ。しかし戦争していればそれはもとより必至である。

『毎日新聞』十二月二十二日：「十九年度における租税収入は総額実に百九億七千万円の巨額に上り支那事変勃発の昭和十二年の十三億九千余万円に比し約八倍の驚異的数字となる訳である……」

(百十億を以てしても支出の五分の一を満たすのみだ)
%で税の負担率を出すのが近来の慣例だ。

「米英に比し余裕 将来の負担力を残す：「わが方は余
裕を残し更に近き将来増税が」：アメリカ租税見込み
五百億ドル【為替相場四円としても二千億円】：支出に
対し46%、対して日本は26%」

「今回で九回目 増税の足跡：第一回〜第八回：」

帰国者は、米国の取扱いが全く鬼畜の如きものである
ることを盛んに宣伝している。

『中部日本新聞』『中京春秋』十九日：「交換船で帰つて
きた人の話」：『日本人を殺せ』と言ひ交してゐると
いふことが、齎されたが、：「我々は：至極のんびり
挨拶を」：」

小汀利得君が河相達夫君を主賓として予を常盤に招
待す。河相君は支那を廻つて来たのである。

河相君曰く、満州国に対しては六十点をやれる。支
那に対しては受験資格すらもなしと。蒋介石工作は無
論駄目である。また支那における日本のやり方――

一、北京の北園に散歩に行くとか防空用水を貯めてあ
る。その裏は大池である。

広田外相というのはグウタラであつて、総理大
臣になるためのジェスチュアが多かつた。ある記
者が「広田はナタ豆ぎせるを吸つていたが、マッ
チであの硫黄を吸い込んでいた、あれはまやかし
もんだ」といつていた。「蒋介石を相手にせず」は
閣議の結果生れたものだ。その頃から外交を内閣
が取りあげた。「相手にせず」とは、どういうこと
かと聞かれて風見章書記官長が「否認より、もつ
と強いものだ」といつた。支那はこれを聞いて硬
化した。

小汀は日米戦争は、いい加減なところで妥協すると
いつている。この事情通を以てして、その程度の樂觀だ。
意は、ギルバート海戦において敵に打撃を加えたから、

それでヘトヘトになるというのである。かれは東京の空襲すらも疑問に思っているのである。

山西でマツチ一つが二銭五厘ぐらいだが、北京では一円六十銭、山東では二円六十銭ぐらいだとの事。

山本茂『条約改正史』を買う。いい本だ。またペリーの記念物をその孫より送り来たれるデヂケーション【dedication 献呈】のパンフレットを買う。ペリーのインタプレーション【interpretation 解釈】は日米国交の程度によつて異なる。当時はペリリは開国の恩人だった。

十二月二十三日（木）

ソ連は国家をかえた。インタナショナルは廃して、愛国家に代えたという。（『朝日』）。

宗教問題といひ愛国主義にまじている証拠だ。

例年の如く太田永福夫妻以下を歌舞伎に招く。僕の席の下に置いたステッキを後の席の男が盗み去った。

十二月二十四日（金）

今朝の新聞により昭和十九年度より徴兵適令を一年引下げに決定したことが発表した。来年あたりには、それがさらに引下げることが明らかだ。

陸軍省発表によると、米英は十八才、独ソは十七才であるという。果たしてそうであるか、戦後において研究の要あり。おそらくこれは「適令」と「徴兵」とをゴツチャにしたものであらう。

小汀君の話——ローズヴェルトに対し支那は賄賂を二百何十万弗とかやった。日本はやらなかった。それがかれが反日的な理由だと。斯くの如き程度だ、常識は。

二六会に出席。鈴木文史朗君は我国の食糧は、この程度が底をついたのだらうという。また料理屋で切符を持たず食えることが、まだ豊富な証拠だという。また戦争も、うまくいくだらうという。

鈴木といい、小汀といい、政府関係者と会談の機会の多いものは、非常に樂觀的だ。

考える機会がないからでもあらう。活動家の周囲に

は思想家の顧問が要る一つの例だ。

『読売』十一月二十三日：アメリカがラバウルを目標とするが「けだし民主国の悲しき、米国の指導者は常に民衆の鼻先に勝利の栄冠をかざし、絶えずその民衆の顔色を覗ひつゝその戦をやらねばならぬ」…空母等損害をひた隠しし戦わずを得ず「しかのみならず、民主国の常として一たびその部隊を僻遠の島嶼に上陸せしめたる以上、彼ら是否応なしにこれが補給援護の責めに任せざるを得ぬ。けだし戦術上形勢非なりとして、その上陸部隊を死地に見殺しにするがごとき」事は出来ない。…【この文は鹿子木員信の筆であるらしい。】

この人は言論報国会理事長で最も代表的な時代の寵児だ。米軍が民衆を取結ぶという点が一致した見方だ。笠間君帰って二六会に出る。かれも樂觀的で、日本に悲觀説の多いのに驚くという。

十二月二十五日(土)

「大東亜共栄圏」という文字を使うことを新聞雑誌に禁止している由。「指導」をする印象を好まないのだ。

萩原書記官の話では、ボースが支那民衆にラジオで「今度、自分は日本に行つて、日本が従来の侵略的態度と變つてきた」と放送したので非常に怒っている由。萩原君曰く、情報局の連中はまるで分りませんよと。政府の方針は、日華同盟条約、大東亜宣言といった理想主義、世界主義であるに對し、他の言論取締りは依然として「國際法は米英の謀略法だ」(『中公』の座談会)といったことでやっている。ここに現実がある。今日は年表を整理した。新しく書くより骨が折れる。

十二月二十六日(日)

九州地方長官(所謂「大知事」)が『毎日新聞』の座談会で統制と価格の無茶振りを攻撃し、農商省を攻撃している。役人の役人攻撃で、その点偉觀である。

馬場恒吾君の話——千葉県で、ある妻君が五升の米の故に巡査に虐められた。そこで夫が怒つてその巡

査を殺害した事件がある。それを枢密院会議で南弘が発表したところが東條首相は知っていたそうである。

昭和九年三月三十日、ペリー来船八十周年でペリー・デー各地にて挙行、広田外相談話発表。(ペリーに対する批判が別れる一証左)

戦争の前途を樂觀するものは米国の反戦的気分を待つのである。しかし米国と英国とは、ソ連や支那以上に国内が一致せず、駄目なのだろうか。同じ期待が少なくともソ連と支那には現出しなかった。

午前少し畑をやり、午后本を丸の内より持ち来る。

十二月二十七日(月)

【読売報知十二月二十七日】お吉会館に閉鎖命令(下田電話)：唐人お吉：」

お吉会館などが閉まるのは当然だが、しかし下田が今は呪われの地になったのは時勢である。

英国はハロルド・ラスキーをソ連に、労働代表とし

て送ることになった旨電報は報ずる。ラスキーは有名な政治学者だ。かつては左翼政治家クリップを大使として送った。対手国に向く人物を。それが英国外交の人選だ。国民がこれに対して批難をせぬ。

僕のオリエンタル・エコノミストに掲載せるアメリカン・トラジェデーと称する一文を「日本タイムス」で転載。郷社長から手紙が来て、外務省からいい評論だからと注意があつたのだそうだ。その僕の文は情報局や軍関係者からは一切排撃されるのだ。

佐々木茂索君の話——比島では『公論』『狂信的軍国雑誌』を輸入しないそうだ。それは日本国内に、如何にも分派があるように見えるからであり、その調子が、あまりに狭隘だからというのである。

こうした意見と政策がポツポツ出つつある。

十二月二十八日(火)

「日本外交史研究会」の設立趣意書を書く。けだし年来の希望を出現し、かねて生活的にも備えんとするも

数一万人押取品を「積み上げて火を点じた」…」

小汀君の話——支那人は亀を嫌う。その嫌う「半十亀」が儲備銀行券の意匠にあった。普通では見えないが、検徴鏡で見える。この意味は「半十亀」がセパケと発音し、それが「日本鬼」に通ずるのである。すなわち日本を呪う意味だ。このデザイナーは死刑に処されたとのことである。

こうした民衆の反抗心があつては、日支関係は失望あるのみだ。ああ日本民衆の知識よ。

十二月二十九日（火）

外交年表のことを東洋経済の倉沢氏に話し、日米関係史のことを、清野君に話す。何とかして出すことに馬力をかく。

また日本外交研究所の原稿を東経に托す。

徳富蘇峰の『国民史』の第一巻で維新の功臣に岩倉と大久保をあげ、また第二巻の序で薩長と幕府が、い

ずれも、英、仏と提携せることを述べ。（慶喜の詔勅に反したのは仏国の後押しによるといった『中央公論』（十二月号）の座談会を否定す）。

十二月三十日（水）

今朝の『毎日新聞』の社説に「赤化する北阿」とあり。北阿にユダヤ人勢力が浸潤することを述べ結論に

『『毎日新聞』「社説」十二月三十日：北アフリカはソ連案のもとユダヤに牛耳られ「一体北阿を舞台とする米英系の資本主義とソ連系の共産主義の対立はどうなるかとの疑問さへも成立しないのだ。両者を支配するものは、これ亦ユダヤ民族なのである。資本主義と共産主義は両極ではない。水と火ではない、ユダヤ民族活動の両翼をなすものなのである。こゝが分らなければ米英の名において描かれる世界制覇の筋書も背景も分るはずはない。」

とある。資本主義と共産主義はユダヤ人活動の両翼を

なすものである！。これが毎日新聞——日本二大新聞の一つの社説である。日本人のメンタリチーの低劣を示す。しかもかれの知ったか振りを見よ。

外交は自国民に確信がなくてはできぬ。「ソ連の勢力の伸びるところ必らず赤化あり」（前掲社論）というのでは、ソ連との外交はできぬ。また英、米をユダヤ人と見たのではこれとは永遠に交渉はできぬ。英国の外交が何故いいかといえば、自国民は赤化などはしないと確信するからだ。

考え方が違つても愛国者であり得、また意見が相違しても団結することができる。そう我国の「愛国者」は考うることもできぬ。

日本的な政策では、他民族などは決して治めることができないという実物教育を日本人に認識させない前に、もし戦争が終るようなことがあれば、それはかえつて日本国民に取つて不幸である。

英帝国は経済的、政治的には駄目になる。しかしシーレーの「新植民政策的」には依然として大国をなす。

シーレーの著書の如きは、その後世を導くこと大。（英帝国は政治体制が崩れても、道徳的に一致する準備ができていた。今度の戦争下における英帝国の一体化はこれを証明する）

産業の国営ということは責任の所在がなくなるということである。

いわゆる強硬外交は成功する。それが一定のところまで止ればだ。

日本が満州事変で、イタリイがエチオピアで、ドイツがミュンヘン会議で止ればそれは成功する。イタリイのエチオピア戦では連合国は失敗を認め、中立諸国（第一次大戦の）は経済封鎖終止を公式に宣言した（一九三六年六月二十五日）。問題は、そうした諸国はそこで止まれるかどうかである。

満州事変以来、特に一九三六年前後は対支外交は経済問題まで総て軍これを行う（一九三五年、支那幣制改革に軍反対、一九三六年十月一日の北支開発協定等々）。

十二月三十一日（木）

熱海に行かんとしたが切符買えず。何でも晩の八時頃から立って居ったものがあつた由。近頃は切符を買う商売があり、大概十円ぐらい余計やるのだそそうだ。

毎日、外交年表の訂正だ。木内君のものが随分粗雑である。

一九四四年（昭和十九年）

一月一日（土）

重大なる年来る。歴史を決する日来たる。しかしそれに拘わらず、全くそうした気がしない。形式が整わないからである。

玄米の餅を食う。笠原清明兄弟来たる。

朝、切符が買えたので熱海に赴く。山王ホテルに歩いてつく。

東郷安男【東郷安男爵】、土屋左三^マ君と夕飯を共にし、土屋氏の家でコーヒーを呑みながら、国家の前途について語る。かつて山王ホテルの会談は談論風発、興味があつたが、今は時局の話は、公開の席では一切禁物である。

どこの家でも朝飯の食前に向つていう事は「来年も果してこうして食えるかどうか」と、いうことだ。寒い。火の気が少しもないのである。

『ペリー前の日米関係』という英書を読む。面白い。

日本でも外国人を、それほど虐待したのではないらしい。もつとも、これは対米宣伝の意味もあるうから取調べの必要あり。明かなことは日本人の漂流者は非常に優待されたことであり、また米国では米人の漂流者受取りに、わざわざ軍艦を送つてきている。これに対し、日本では、漂流者も受取らない有様だ。「国民」というものの価値が異なる。

一月二日（日）

例によつてお昼にホテルより御馳走になる。大変に御馳走が出る。

晩に土屋氏のところで東郷、犬養健の四人で話す。犬養氏は例の尾崎秀実事件で告訴され無罪になつたのである。

一、かつて近衛内閣の時に一週間一回官邸で話をする集まりがあつた。風見章は司法大臣をやつていたので、支那問題は自然尾崎秀実が中心になつた。犬養君などが話すと、尾崎にいつて置いてく

れといった調子だった。そのグループの内尾崎が一番穩健であつた。

二、西園寺公一は対米交渉に興味を有していた。近衛メッセージのドラフトが西園寺家から出たりして、それが訴訟に不利であつた。

三、中野正剛の葬式の時に緒方君がいつていた。「中野を馬に譬えるのは失礼だが、サラブレッドの馬は、汚ない馬小屋につながれると恥て自ら死ぬそうである。中野は生一本で、刑事の手などで恥かしめられたので自ら死んだのだろう」と。頭山満のところにも大した遺書は送つて居らぬ。これは頭山秀三君の話である。

四、支那との交渉に、役人はキチンと証書みたいにしないと承知しない。それでは支那側で吞まない。日支交渉で一番有望な時はトラウトマン【中国駐在ドイツ大使】の仲介の頃であつた。蒋介石は英雄として死にたいと考えている。(以上犬養君話)

いろいろな話をして十一時頃までいる。

一月三日(月)

午前は植原悦二郎氏の家に敬意を表しに赴く。宇垣に望みを囑したが中野自殺に關し風評が立つたからこれの首相説は見込みがたえたという。

午后、高木陸郎氏を訪問す。外交史研究所の相談をする。満鉄の小日山に話せという。成程いい知恵だ。婦りに岩波茂雄君を訪う。丁度散歩に出る時である。一緒に出て、夕飯を御馳走になり、宿めて貰う。立派な別荘で、非常な御馳走である。長男及び二男在り。長男は芝浦の研究所、二男は帝大の西洋史学在学。

ウイスキーをチーにいったのを吞みながら氣焔を吐く。岩波氏は「至誠」を何よりも高く評価する人だ。僕はその「結果」を評価する。僕は久保、木戸を好み、かれは西郷を好む。岩波君の二男が僕と同感である。

一月四日(火)

岩波家に大変珍しい御馳走あるに驚く。朝はお餅

だ。岩波氏は朝六時以前に出発帰京、僕と二男坊と一諸に食事す。中々頭が確かである。

毎日、曇天で熱海も寒くて困る。部屋に帰っても仕方がないので街を散歩する。

夕刊に政府が戦時官吏服務令を決定したとて、それについて東條首相が、また訓示している。戦時官吏服務令というのは恐ろしく抽象的である。「不屈不撓、努力と工夫とを尽してその責務を貫徹すべし」といったことだ。これをまた東條が例の説教でやっている。

東條は官吏を昔しの士族と心得ている。したがって民間を一步下の被統治階級と心得ている。

大東亜戦争——満州事変以来の政情は、軍部と官僚との握手である。戦争を目的とする者と、一部しか見えない事務家、しかも支配意識を有している者とが混合妥協した結果生れたものである。

一月五日（水）

熱海に来て始めて天気快晴だ。部屋が暖かくてウト

ウトした。こう天気がいいと熱海はいいところだ。

どこに行っても物価の高くなったことをいう。曾我子爵の話ではバターが一ポンド二十五円である。また米は一俵二百円であり、砂糖は一貫目六十円だ。これ等が闇の公定相場である。したがって百姓その他は非常に儲けているものが少くない。

毎年の例と異なつて熱海は死んだような静けさだ。味かん[▽]一つ店に出て居らぬ。これは全部統制するからである。無論、魚もない。

一月六日（木）

川崎克氏、僕の部屋に来て、昨夜頼んだ画帳を書いてくれる。趣味の豊かな紳士である。話している内に、外交問題については、それほどの素養のないことが分かる。

お屋に高木陸郎氏にお屋に招かる。進頭という店だ。東郷安、川崎克、犬養健、島谷[▽]売介[▽]、清沢である。

僕は午后三時発で帰る。

米国人は日本軍を野蠻人だといっているという。陸軍中佐秋山邦雄氏は曰く

『中部日本新聞』昭和一九年一月二日：『ニューブリテン島の』マールカス岬などでは重火器殆ど携行出来ない、：敵アメリカが小瀬にも我が神兵を指して野蠻人と称することが恐らく彼等の近代戦の概念からしてこの方面の我軍の装備が如何にも貧弱であることを蔑視したものであらう、：』

この人はアメリカ人が日本人を目して野蠻人というのは、かれがかつて「アメリカ人に対し『可愛想に』といった有閑婦人があり」といったとて、仇討ち思想と行為を強調したような点であることを諒解し得ないのである。

ヤンキーもひどいことをやる。宇尾氏の話し。南洋の一島において米國潜水艦がきて漁夫のとった魚を出させた。そしてその後で漁夫を漁船に閉じこんで、石油をぶっかけて焼いた。幸いにその漁夫達は焼^やど^ろをし

ただけで助かったというのである。

戦争は野蠻行為の連続である。

『読売』で安藤正純、川崎克等の談話を新年号にとつたが、これを紙上にのせなかった。おそらくは時局反対の陣容と考えたが故ならんか、と。

『読売』「第一線」一月六日夕刊 細戈千足国 鹿子木員信：日本の国号の随一は端德國：今もし食たらずば、「われらが何等かの意味においてすめらみたみたるの本分に背くところあるがためである。苟くもわれらにして米英の資本主義的侵略攻勢の走狗たりし金肥を峻拒し、拮据経営、堆肥につき、工夫努力、作物の生ひ立ちが、いはゆる肥料によるよりも寧ろ日の神の恩頼、太陽の光熱によるもの多きを思ひ」：「他の一つは、細戈千足国といふ。」：「米英思想謀略の然らしむるところ、曾てはわが精鋭なる艦艇兵器をあたら海底に沈めてわが神授の細戈を鈍磨し去つて自ら得たりとする米英思潮の跋扈跳梁を見、その流弊の及ぶところ、つひに今日の危機を醸すに至る」：』

右は、昭和十九年一月——戦争四ヶ年目に現れたる新聞調の代表的なものである。国際的には大東亜宣言、国内的には食糧問題の行詰り、武器の近代化の必要に面している時に、言論界は依然、神がかり的なものである。斯くて戦争に克ち得るか。

どこに行っても戦争の前途に対して心配している。

一月七日（金）

石橋氏の新年講演あり、経済クラブに行く。石橋君は昨年の見透しが部分的に当たったことをいう。

昨年暮（十二月二十八日）に発表された食糧確保政米（食糧自給）は、農村から徴用をして、その方面に人手が不足してきたことに違^{あわ}てたからだという。熱海で聞いたことだが、本年は千三、四百万石も足らぬだろうという。

明治堂でフォン・ブランドの『黎明日本』『遣魯伝習生始末』『内藤遂著』その他を買う。『伝習生始末』を一

気を読む。面白い。

盛んに人口疎開を政府はやっている。かつては東京を去る者は非国民みたいにいわれたものである。封建的感情論がギリギリ押されて行く。

大口喜六氏なども、役人達が何といつてもきかず、鼻血を出して、こうやくを持っていくと、始めて受け入れる。最初からいうと「君等の出る幕ではない」とガンというといっている。

議會という大局を論説するところがなくなつて、大出の若い者の手に行政が渡つて、事態がよくなる訳はない。現下の行詰りはそこから生れたのである。

一月八日（土）

重光とシュターマーと盛んに会見する。昨日も逢つた。リベントロップが目下、西班牙^{スペイン}に行っているそうだ。和平工作ではないかとも思われる。

総てが非常に悪い。潜水艦の活躍は、昨年三月、九十四万トン撃沈、一日十余万という戦果が十日、

十九日に発表されたが、それを頂上として近頃はまるで振わない。(新年になって振っている——十日間に駆逐艦 21)

もしドイツが屈したら？ それを皆な心配している。米国としては今までドイツ撃破第一主義であることは、上記の記事でも明かだ。

【出典不詳】…ルーズヴェルトの報告によると1941.3より1943.11末までの各国への貸与総額は186億ドル、アメリカ戦費の13.5%に当る。英国50億ドル、ソ連30億ドル、「重慶、濠州、ニュージールランド十五億ドルその他の反枢軸軍五億ドルである。」…

日本側では米国の死傷者四十万といっているが、米側では十三万といっている。

今朝、陸軍大将(安藤利吉) まできた。現大将は二十二人。百二十四人目の大将だ。支那事変以来と、前総数と同じであろう。

例によつて年表を訂正す。こうしても果して出版できるかどうか。

昭和十三年(一九三八年)頃はソ連とも戦争危険あり、英、米にもやつ当りであつた。馬触るれば馬を切る——といった形である。

満州事変以来、外交は全く軍部に移つた。それは、また一般民衆の好むところの傾向でもあつた。それがよかつたかどうかは、タイムのみが明かにしよう。

一月九日(日)

明治天皇御東幸の折、第一に発し給うた勅語は直諫の士を求められたものである。行政官の発表も然りだ。然るに今やそうした直諫は最も排斥されるものである。

『毎日』一月九日…「百司を督励して、…祭政一致の大典に基き、」…

「以翼鴻業、凡事之得失可否、宜正議直諫、啓沃朕心。」明治元年戊辰十月

達書 …「就ては百官有司、」…「同心戮力、益^レ可^レ勵^ニ忠勤^一、尤御為筋存附候儀は、何事に不^レ依不^レ憚^レ忌諱^ニ正議直諫可^レ致様御沙汰候事。」

【前半】『正議直諫^{ちようぎ}の詔書』、凡て事の得失・可否は、宜しく正論を以て直に諫め、よく朕の心を啓くべし。後半『達書』、尤も為筋を知っている時は何事によらず憚ることなく、正論を以て直諫致すよう沙汰すること』予に、もし専門あらば「米国」と外交についてである。予の約三十冊の書籍はそれだ。然るに米国を對手とする戦争において、予の言は全く封^マられて、国家につくす方法はないのである。その上に予の糧道を断つべく政策が行われている。かくて如何にして国内を動員できるのであるか。

指導者の無知の例——今や人口疎開に一生懸命だ。そのために法律的強制力を持つに至った。二、三年前にこれをやれば、どんなによかったか。その頃は精神論で反対したではないか。また先頃、一度『毎日新聞』でやり始めたが、その頃は政府がこれを押えた。

ラバウルに六、七両日に二百七十機が来襲した。日本

の撃墜は相手の八対一だ。すなわち——

『毎日』 一月九日 敵機のラバウル来襲情況

	来襲機	撃墜	我損害
一日	七〇	九	〇
二日	四〇	一〇	三
三日	三〇	一一	二
四日	二二	一八	三
六日	約四〇	八	二
七日	約二三四	三一	二
計	四三六	八七	一二

家妻曰く、始終相手に勝っていて、どうして「戦争は苛烈化した」というんでしよう。

午后、加藤武雄君の家を訪ぬ。同君の令嬢の婚談につき、まず当人を見んがためである。

加藤君のところにいと宮下丑太郎氏来る。かつて

『雄弁』、『現代』の編輯者として僕を引出した人である。講談社のために二十一ヶ年働いて、酬いらるるところはなほだ薄いようだ。講談社を非常に攻撃している。野間清治氏には僕も厄介になった一人であるが、独裁者の死した後は兎角に物情騒然たりだ。

加藤君は朝鮮関係者の一人である。朝鮮では食器の銀製その他のものを取りあげ陶器を与えず。板で食っているとのことだ。すでに我慢し得られる頂点に達しているという。また北陸道の田舎でも統制による供出に対し不満を有し「我等は戦争に負けてならぬことをよく知っています。ただあまりの干渉で、尻の毛までむしられるようなことが嫌です」といつている由。

加藤氏から斎田画くところの油絵を貰う。軽井沢の別荘へのもの。

一月十日(月)

東洋経済に行く、新年最初の評議員会とあつて、すき焼を御馳走になる。

昭和十九年一月

蟬山、高垣両君も来たる。

千葉歌子夫人帰る由電報あり、徐州に何か問題が起つて居りはしないかと石橋氏心配である。

リベン^マのスペイン訪問はデマである由。しかしドイツが極めて困難な立場にあるは疑うべからず。

年表を東洋経済で引受くる由。ただし印刷の問題が大変。

岩波氏の店に行く。先頃のお礼^{かたがた}旁々この日曜に子息達を招待のため。

『毎日』一月十一日 昨年十二月以来の来襲

◇ラバウル来襲(括弧内は不確実)

日時	敵機数	撃墜	我損害
一七日	四〇	一八	二
十九日	八四	八	二
二十日	約一五	〇	〇
二三日	七五	二四(四)	六
二四日	一三五	五八(五)	六
二五日	七〇	二〇(二)	三

二七日	五〇	二三(八)	六
二八日	五〇	三一(十)	三
一月			
一日	七〇	九(二)	
二日	四〇	一〇(三)	三
三日	三〇	一一(四)	二
四日	二二	一八	三
六日	四〇	八	二
七日	二三〇	三四(七)	二
九日	一五〇	五二(二九)	二
【計	約千百	三三四	四二】

自由学園の生徒に資本主義の是非、という問題を出したら、ほとんど全部悪いといったそう。それが戦争を起したというのだ。瞭は資本主義はいいという。米英を富ましたのはそれだからだという。両方間違いだ、この大戦の結果、資本主義の変形はやむを得ない。

一月十一日(火)

年表の原稿を東経に持って行く。それから鮎沢君をオリエンタル・エコノミストに紹介し、一緒に石橋氏と飯を食う。近く英文号を手助けすることに決定。

晩は学術協会の例会あり。今井教授の「歴史上における大都市」という話しあり。興味あり、同教授の記憶のいいのに驚く。メモもなくて数字を説く。

独ソ戦は、赤軍旧ポーランド国境を突破す。同時に第二戦線が説かる。ドイツ側論者は、なお樂觀している由。

【『中部日本新聞』にあり、『読売』では1/10】「ブエノスアイレス八日発同盟」親独派のシンプソンを派遣 アメリカ政府は…イタリア管理委員会の財政顧問に…」

米国がイタリー管理委員に親独派を任命した。これは日本人には諒解の出来ぬ人事である。

チアノ元伊外相等死刑決定。独裁主義国の危なさ！

一月十二日（水）

『読売新聞』、『朝日』等が大東亜宣言を盛んに書いている。政府の意志なること明かだ。ただこれをなすのに、例えば斎藤忠、中野登美雄（『朝日』）などに書かす。この帝国主義者——極端の右翼が「大東亜宣言」をいつてもおそらくは日本以外は信ぜざるべし。狼が羊の啼き真似をする如し。

小泉丹、理博士、ラバウルから帰る。戦争について犠牲の多いのは事実だが前途はすこぶる樂觀す。笠間司政長官も然り。前線においては、銃後が戦争の正当なる認識なきを言っているのである。

『東経』に「米国の支那移民禁止法撤廃問題」を書く。

一月十三日（木）

家内が嶋中夫人に聞いた話——真也君が世田ヶ谷の連隊に這入ったが、毎日擲られて顔の形ちが変った由。雪駄の裏で打つので生きずがたえぬということで、「地獄」というかそれよりもグツと悪い」といったとの事。

ことに優しい性質なので気の毒で気の毒でと、母親としてなげいていたという。

新聞には右翼の議論は毎日、出ているが、また左翼張りの議論も出る。たとえば今朝の『読売』の社説には米国の決戦決意につき「敵も今年を決戦の年に」という題下に、米国の労働争議の頻発理由は（一）労働者がソ連援助の第二戦線出現を見なかつたことの失望、（二）資本家の利己行動をあげている。後者は事実にしても、前者はマルキシストの思いすぎだ。米労働者は、そんなに親ソ的ではない。この筆者は米国は、内輪割れを恐れるため本年を大決戦期とするというにある。台湾高雄、塩水へ飛行機来襲す。

一月十四日（金）

東洋経済の倉沢君より、大日本印刷にて外交年表を印刷すべしとの通知あり。何物の歓喜かこれにしかん。非常に愉快になる。

水野警察部長来たりて、予の提案せる六郷用水の整

備が大森、蒲田両区にて決定する旨を伝う。これまた快心。

さらに先頃買いたる鶏、玉子一つ生む。

昨日、ゴルフに出る。近藤浩一路君と共に廻る。近藤画伯の長男、横須賀の海軍に入る。非常な秀才なり。

海軍でも盛んに擲る由にて、爪の先にて地上に一時間もさかさになつてゐる由。とてもひどいという。これが最高学府出身者に対する訓練なのだ。嶋中夫人の話では、真也君の同輩は、便所の中で自殺したとの事。彼等は訓練とは、こうした事を考えているのだ。

一月十五日（土）

年表について嶋中氏と会見、特配の紙を東洋経済に移して貰う話をする。快諾。それから高木という東洋経済の印刷部長と体裁の打合せをする。さらに石橋氏に頼んで、年表の仕事に「年表部」の伊藤君の手を借りることにする。月曜に竹森君と打ち合わせ決定のはず。

晩、横浜、支那料理にて石橋氏の御馳走になる。蛸山、鮎沢その他なり。（高垣博士も）。非常に豊富な料理である。支那人が材料集めの上手は感心。

どの新聞にも「大東亜宣言開頭」（『読売』）、「大東亜宣言の顕現」（『朝日』）、「大東亜建設の五原則」（『毎日』）といった読物を出している。筆者の肩書に「言論報国会理事」といった文字があるのを見ると同会の御膳立なのは明らかだ。それはまた政府の方針だろう。だが筆者を見ると、凡そ「大東亜宣言」とは縁の遠い連中だ。白鳥敏夫、大串某、等等だ。

加藤武雄君の話では同君は「大東亜宣言」にちなんだ小説を情報局から頼まれてゐるそうだ。いかに消化しきれぬ標語であるかが分る。

一月十六日（日）

お昼に等々力君（安曇徳明）、岩波雄一郎、雄二郎両君、加藤武雄君及び寿子さん招待。

等々力君は第二回の交換船で帰って来た人。太平洋沿岸の日本人は全部、財産、地盤を失なってしまった由。仮に今、釈放されても何にもできず。すなわち根底から総てを失なってしまったのだ。

米国では、日本が「食うか食われるか」「講和談判はワシントンで」といったことを「無条件降伏」と考えている。つまり「無条件降伏」は日本の方が先きだ。

日本が飛行士捕虜を銃殺したことは、非常な反響を米国でひき起した。ローゼヴェルトは、これを利用して国債を募集した。その成績は遙かに予定額を超過した。

一月十七日（月）

東洋経済の評議員会に出席。伊藤正徳も久し振りに出る。

旧通信省で、樺太、北海道に行ってくれといわれて引受く。

樺太が内地編入されて最初なる由。

一月十八日（火）

一日、外交年表の昭和十八年度を書く。山本清君の母来たり。弥生さんと会見。

一月十九日（水）

東経の社論を書く。井出君宿る。

一月二十日（木）

朝、東大の高柳賢三教授から電話あり。行ってみると同君は外務省の嘱託となつて海外の知識階級に対する宣伝をやることになったが、その「委員」になつてくれという。僕と板倉卓造氏とがその委員に選ばれることになつたのである。僕はできるならやろうという。

「嘱託」という名前がうるさいので「委員」とするのであるという。板倉博士は福沢伝かの仕事の問題があるので、来週返事するという。

『読売報知』一月二十二日 戦争風邪も猶太謀略 毒牙粉砕の大講演会 …ユダヤ問題に詳しい諸氏が論陣を張る。…「米英も毒殺し併せて世界中をやつつけてユダヤの天下を築かうといふ魂胆だ。」…」

外政協会で牛場書記官のドイツの話しを聞く。ドイツが総べて有利のような話である。食糧が比較的に満足な状態にあるのは事実なようだ。空爆も、大きな破壊をくつても、一、二ヶ月の後には直ちに修繕するのだそうだ。石油も充分だという。

ドイツから来るものが、いずれもドイツを楽観するのを見ると内部はいいのだろう。ただし問題は米英ソの実力と比較してどうかの問題だ。同君は右翼だという。

一月二十一日（金）

経済クラブに太田三郎書記官の講演を聞く。中々頭

のいい人である。独ソ戦争をめぐる話した。

ソ連とポーランドの問題については論議を加えてはいけないと命令があった旨、外政協会の山形君の話だ。この秘密主義は若い官吏達が、むしろ面白半分にやっているのではないか。

一月二十二日（土）

戦争カゼもユダヤ人の謀略である旨、ユダヤ研究家が発表している。これが「昭和日本」の知識標準だ。（前頁参照）

昨日、議会開かる。東條首相が演説ズレによつて調子だけは重厚を加えてきた。しかし内容は、こんな平凡なことを、よくも長くやれると思われることばかりだ。しかし新聞の調子左の如し。

『読売報知』一月二十二日 戦ふ議場 果然異常な決意漲る政府・議会みことな一体ぶり…東條首相の一時間に上の演説、重光外相の初演説、…満場の異常な感動を

呼んだ」…首相…最後の五分間がんばれ、外相…物より精神、…」

右（『読売』）と、かつて議会の事といえれば必らずけ、しまくるのを比較すればそれが如何に極端な対照をなすかを知るのである。

ソ連は英国の単独平和説を流布したりして、ひどく「外交」をやっている。

経済クラブでお昼を食う。四人で二十三円。ステーキだけだ。かつては一円で食えたものだ。六倍のインフレである。金田一博士は玉子を一個一円で買っているそうだ。

太田三郎氏からピース・アンド・ワーを送って貰う。「極秘」とある。何故に「極秘」か。国民に対する不信任か、自己の行動と政策に対し自信がないのか、それとも若い官僚が情報を独占してしまいたいのか。

これに対する来栖三郎氏の批評（講演）を読む。矢張り中々傑出した頭である。

一月二十三日（日）

議会で山崎農相が増産計画を述べ、現在の食糧は確保できるといった。ただ従来計画仆れが多い。

『毎日新聞』「余滴」 一月二十三日…「計画と実収との開きが、いつもあまりに大きい。▲例へば昭和十六年度の増産目標は七千四百二十万余石、実収は五千五百万余石、…」

日本の特徴は Yes or No を明瞭にいわないことである。本日の『毎日』の蘇峰の日本史に、奥羽諸侯の処分問題について毛利父子は「天下肅然」といい、父は「震慄悚慄」といったとある。Yes でもなし No でもない。

開国、開国の論、シベリア出兵当時の日本政府の態度、いずれも Yes No がないと同じだ。

雑誌は中央公論、公論、現代が残ることになった。

この『現代』は「行政の統帥化」といった座談会をやつて居り、また野村重臣などが書いている。『公論』は天下認めるところの極右である。これ等の経過によつても、依然として軍部及び極右が時代と行政を引きずっているかが分る。大東亜宣言の如きはただ表面だけだ。

『毎日』一月二十三日【同誌に載つた『現代』二月号の広告】

八十銭大日本雄弁会／講談社「国民徴用の諸問題・戦争と日本科学技術」……

この雑誌と、それ以上の右翼たる『公論』が残るのである。

大東亜宣言と如何にして調和し得るか、興味がある。

一月二十四日（月）

東経の評議員会に行く。

昨日の議会で鶴見君の質問に対し、東條首相答う。

今回の戦争で明らかにされたことは「侵略」「他民族

隷属」ということが悪事だということである。不思議なことは両方共、そういうのである。日本側の言いは一月二十四日の東條首相の言によつて代表さる。一月二十四日の予算総会

『読売報知』一月二十四日 首相答弁 本社速記要旨

…大東亜宣言云々：「カイロ会談は明白に彼等の戦争目的が侵略と他民族隷属にあるを告白せるに外ならぬと私は存するのである。」…「広く万邦と交誼を厚うして」…「人種的の差別を世界的に撤廃しよう」…「治く文化を世界的に交流しよう」…「戦争目的は帝国の自存自衛を確保するためであることは勿論であるが、広義の意味においては全世界に対し征者、被征者、強制隷属の關係なき状態をつくりあげるといふところにも存するのである、米英の仮装的自由とはそこに根本的に異なる大なるものがあるのである」…「日独伊關係は米英重慶の關係の如き水臭い關係にあるものとは考へてをらぬのである、」…」

一月二十五日（火）

午前には畠をやり午後は東経へ社論「南方において日本人の教養が批難されている」という文相の言について書く。

岩波雄一郎君の所へ手紙をやる。

一月二十六日（水）

日本外交史研究会の事について、小林氏、三井氏に相談す。小林氏も一口乗るといふ。賛助者を頼むことにす。

二六会に出ず。どこの新聞にも、近頃は査閲係りができて毎日のつまらぬ記事差止め命令を突きあわせているそうだ。地方では特高科がやっているので、それを口実に圧迫も行われているという。鈴木文四郎君の談。

議会で英語のリーダーが、なお「英国的」だという質問があった。皇道主義の岡部文相、これには恐れ入つた。旧仮名遣いでは「出づ（いづ）」は出席、「出ず（でず）」は欠席。底本はここでは後者だが、出席したようにも読める。

昭和十九年一月

て直ちに変更をその場で言明。

【「出典不詳」英国礼賛の箇所は削除 中等教科書から…阿原国民教育局長は…「敵性とみとめられる箇所を削除して使用することに」…】

米国で日米交渉に関する出版があり、それを帰国者が持つてきた。近衛がそれを高松宮様にお話し申しあげると、読みたいとの仰せで牛場に翻訳させた。ところがそのタイピストがスパイで憲法隊に通じて取調べられた。どこへやったかというので高松宮様、近衛のところへ差上げたという。その一つが馬場恒吾のところに行っているそうだ。これは近衛が与えたのである。こういう事情が判明して起訴だけは免かれたそうだ。

半沢玉城君は舌禍事件で謹慎中だ。誰が行つても逢わぬ。外交時報と外交研究会と縁を切れと圧迫しているそうだ。小室誠君を社長にするという案を持つて行つたら、ひどく脅かされたという。「それでは半沢がやつた」前年十二月、社長は小室に交代している。

ていると同じではないか」と。その通りであろう。憲兵隊長の話では、ひどく沢山の金を造っているそうだ。「沢山」という額が解釈の問題でもあろう。

新聞社の合併問題につき後宮中将（大阪師団長？）が「大阪朝日と毎日の合同も時の問題でしょう」といったそう。これは小林一三氏の談。

一月二十七日（木）

アルゼンチンが二十五日日本とドイツに対し国交を断絶したという。新聞は「米国の圧迫」という。一国の行動を背後勢力によってのみ動くと考えること例の如しだ。

滑稽なのは貿易の数字を〇〇としてあることだ。

『読売報知』一月二十八日「……邦人資産は約二千万ペソで一九四〇年度における日本、アルゼンチン国間貿易はアルゼンチンよりの対日輸出は〇〇万ペソ、日本よりの輸入は〇〇万ペソであつた」

i 半沢の話と切れ目が無いが、底本のママ。

久し振りに「廿七日会」あり。徳田秋声追悼会なり。今夜は偕楽園中々の御馳走あり。全部の会員集まる。

一月二十八日（金）

リベリア政府は二十七日、日独に対し宣戦を布告した。

午後、英文オリエンタル・エコノミストの会あり。今後、毎月集ることにす。

青木得三氏、錦水に旧報知論説会員を招く。倉辻、川口両君だけは来たらず。病気なり。僕は報知と野間氏とは感謝すべき理由を有す。僕の土台を礎きたるはその時なればなり。

海軍中佐伏下哲夫という人のドイツの話しを経済クラブに於て聞く。「ドイツの内部事情は確かに強い。しかし作戦による結果は不明だ」という。また結局は生産の総量によって決定するという。結論は素よりいわないが悲観的である。ドイツの労働力三千万、内、外

人八百万。

一月二十九日(土)

ヘスの事件は英国議会で公表されたにかかわらず、日本では「極秘」である。松田道一大使の話しでは「英帝国を認める」といったようなものだという。

午後一時から「年表」について打合せ会あり。小林一三氏出席。囑託打切りは中池の意見と判明。さても事務員也。

夕飯にすぎ焼を三宅暗輝君に御馳走になる。鈴木文史朗君の室に行くと「支那浪人」——かつての『朝日』の記者、智厚(?)君あり。支那人は「皇軍」といわないでそれに「虫」ヘンをつけるという。蝗軍の来るところ一物も存せずという意味であるとの事。また南京あたりでも、子供が剣真似をやつて居り、その意味を問えば「強くなつて日鬼を放逐するためだ」といつているという。

i ナチス副総統であつたヘスが1942年イギリスに渡り、本人はイギリスと交渉する気であつた。

昭和十九年一月

かれの話しによれば世を救うものは石原莞爾中将であらう。石原は議会回復、言論自由、小党分立その他の事を主張している。

我等は東條首相から一回も戦後の経営、新秩序に関する構想を聞いたことがない。今回の議会における演説によると、かれはそれを泥棒の取前の分け合いと同じだと考えているようだ。即ち島田予算委員長の報告によると左の如し。

『日本産業経済』一月二十九日：首相は「戦後処理問題等恰も利益分配の如き物質的搾取的の架空のものを発表するといふが如きは有害無益になると信ずる」【『読売報知』一月二十四日の切り抜きにも殆ど同じ文が見られる】

我等はかつて寺内陸相から個人主義、自由主義の珍妙な解釈を聞いた。今又、この説明あり。知識と縁遠きことを見るべし。

i i 1942.11.1統制令により出来た、戦後『日本経済新聞』

『ニューヨーク・タイムス』のトリシアスという特派員の「東京レコード」というのが面白いそうだ。日本の小さい家を見て失望した事から、ゲイシャ・パーテーがボアリング【boring うんざり?】であつた事、それから松岡外相の歐洲戦争調訂案の一条等々。

鈴木文史朗君は家で米が足らず、外で食うのは一つはそのためだという。

【出典不詳】一億の戦闘配置 黒船に繋がる敵の野望

秋山謙蔵：ペリーが来日時、返書を長崎で受けるのを拒否したり、かつてに測量したりした、「而も其の報告書を『日本遠征記』といふのである。遠征―この態度を、そのまゝ強化拡充してゐるのが、今のアメリカである。」

：「その志の故に、数年の後、吉田松陰と共に淋しく散つたのが三樹三郎である。」：「米蘭仏と共に聯合艦隊を構成して下関に乱入する」：「強化悪道となりつゝ、今に至つてゐるのが、敵米英の野望である。」…」

『日本遠征記』とは日本語訳ならずや。

一月三十日（日）

『毎日新聞』に「断乎として行ふべし」との社説あり。米軍が病院船を攻撃するから、これに報復すべしという意味である。俘虜でも死刑に処すべしというのならん。

トリシアスの東京レコードには『毎日新聞』をジンゴイスト【好戦的愛國主義】・ペーパーといつてゐるといふ。

昭和十八年度の年表の作成終る。中々の手間だ。晩に岡村今朝良兄弟来る。弟の北海道へ婿に行つた実治が来京したので夕飯に招いたのだ。いろいろなことを話す。

一月三十一日（月）

東経の評議員会に出席。年表出版につき打合す。石橋君、三叉神経痛にて大阪に赴き留守である。

二月一日（火）

東光ビルを撤退のため本を運ぶ。「東電史」の仕事が終ったのである。本日から無月給者になる。物価は全く底知らず。砂糖の闇は今や百円（一貫目）といわる。どこも米が足らない。

マーシャル島に敵機来たり。今なお激戦中という。或は上陸企図をして、その戦争ではないか。憂うべし。外務省に赴き、高柳君と会談。明后日、箱根に行くこととす。外務省の仕事の話しなり。

国民学術協会に出席。理事改選旧態に決す。

ソ連、連邦諸国に外交権と国防権を与えることの報あり。（ソ連第十回最高会議に於る憲法改正）。これには種々の問題を示唆す。大東亜共同宣言と同じく、民族は独立尊重を要求するという事、またソ連はそれを許容することによりバルト諸国、ポーランド等を合併せんとしつつあることだ。

二月一日（火）

外務省に赴き高柳教授と会談。晩は国民学術協会理事会なり。役員改選は以前通りである。寒いことおびただし。

二月二日（水）

『東洋経済』に書く。中野君来たる。結婚をしてもいいとて家内に頼みに来たのだ。

二月三日（木）

朝、箱根に赴く。雪降る。富士屋ホテルの冷たき事。高柳、小畑及び予と、それから奈良官補を加えて対外宣伝のことにつき談ず。食はよきも分量少なし。

二月四日（金）

雨降る。ホテルに籠つて協議を続く。午后十一時半迄。

i 同一日が続くことの説明は無し。

ホテルは日本一だけに御馳走は整っているが、分量は少ない。ここだけいいものを食わせるところはなからう。しかし腹は僕等を以てしても一杯にならぬ。

スチームは通らず。何故に温泉を暖ぼうに使わないかが不思議である。この辺が非科学的なる日本人の特徴か。ホテルにはドイツ人多し。

八百屋に行く。干柿一個四十銭である。平年は五、六銭のもの。この蜜柑の産地に蜜柑一つなし。干柿を福島から送り、蜜柑を他に送るのである。配給と統一の画一性が問題の根本だ。

二月五日（土）

午前中にドラフト出来。僕の原案を基礎にして出来あがつたものである。これが具体化すれば僕も戦争遂行に小さからざる一役を持ったことになる。

雨あがつて、箱根の山に冬日照る。午后二時の電車で帰る。

マーシャル島に敵上陸した旨発表。これは既に三日

に外務省島の人から聞いたところ。石橋和彦君がクエゼリンにいるはずで、果して無事であるかどうか。石橋氏の心配同情さる。

二月六日（日）

どの新聞もが「元寇の乱」以来の大問題として総蹶起を第一ページ以下に掲げている。頭山満を『朝日』はかつぎ、徳富蘇峰を『毎日』がかつぐ。

『毎日』二月六日（熱海発）…戦争に犠牲は付き物じゃ

…今次大戦は「神武天皇の御東征に比し考へねばならぬ」

…飛行機の生産も敗けぬ精神で奉公せよ…

『朝日』二月六日 我に人雷、神雷 今こそけだもの退治

…「米英の狐狸どもをやっつけるのを商売のやうにしてきたわしぢや、大事な時に風邪などをひいてしまった」

…「金でも機械でもアメリカには寄りつけぬかも知れん、しかし」…「人雷」がある、それでも駄目なら「神雷」

がある…

府県に食糧部隊——大隊を編成する。また国民学校に軍事教育をやるのだそうだ。軍国化の現れ。

『毎日』二月六日 府県に食糧増産隊 大隊を編成、隊員は甲乙二種 選定 期間一年、具体方針通牒：「総計三万名とし月手当十円を給し」：集団作業で農家後継者作りをかねて：」

二月六日（日）

今日は訪問客で多忙だった。加納君が巡查部長になり、挨拶。宇梶君、大熊君などである。

『オリエンタル・エコノミスト』に米国白書の批評を書く。

二月七日（月）

東経評議員会に出席。『中部日本』に書く。こうして書くことに中々多忙で、纏ったものが書けぬ。

今朝の新聞はいずれも英米に対する敵愾心の昂揚を

目がける記事をかかっている。おそらく軍部か、情報局あたりで作ったものを載せたのだろう。殊に『朝日』のものが強い。「日本人を殺せ」と絶叫しているというのである。問題はこうした仇打ち思想で、世界の同情を集め、また戦意の昂揚に役立つかどうかだ。

『朝日』一面正面に挿入 二月七日 撃て！米英の残虐
童心も蝕む憎日感 不逞・叫ぶ日本人を殺せ」

：「我が領土に迫る敵米英の敵愾心を、：酬ゆるに何を以てすべきか、」：「黒人退治事件」では焼き殺して快哉を叫ぶアメリカ人：残虐映画であふれている等々……

「公債を売るには『公債を買って日本人を殺せ』（キル・ワン・ジャップ、バイ・ワン・ボンド）紙類の節約を説いては『紙を節して日本人を殺せ』（セーブ・ペーパー・キル・ジャップ）といった有様で『日本人を殺せ』これが流行り言葉なのだ、」：

四世紀の東洋吸血：アメリカだけではなくイギリス人も元海賊で、インド人への残虐、アヘン戦争を見よ……「日本人は全部殺してしまはねばと」：「日本人抹殺論は高

潮」：「僧日運動が始つてからは英国の生産能率さへはね上つた。」……

二月八日（火）

一日中、学術協会で講演すべき「米国白書」の原稿を書く。

出入の百姓が、朝九時半に来て十一時半頃でやめ、午后一時半に来て四時半にやめ、その間に一時間ばかりお茶を呑む。それで七、八円とるのである。

二月九日（水）

やや暇なので、一つ of 原稿に驚くべき時間をかける。今夜の講演などがそれである。朗読講演である。二時間ばかりやる。

小泉信三、松本丞治、牧野英一、穂積重遠、末広嚴太郎、田中耕太郎其他、近来にない盛会だった。辻善太郎博士などもその中にあり。いずれも最後まで熱心に聞いていた。

米国が戦争責任を政治的に負わざるべからざる所以をも説く。

隣室に軍人の会あり。その事が会後、散会の頃に分る。

二月十日（木）

外務省に赴く。聞くと我等の作った案は加瀬秘書官が駄目だといい、また太田、松平二課長にも異見ありと。こんな風に、案を作っても何人かの手で握り潰されでは、どうもならず。

松平課長は（一）米国白書は、来栖大使の依頼により詳しく読んだが、指摘すべきところなしという。即ち白書のいうところが事実だというのである。「あの通りだ」という。（二）布哇攻撃の正当化は、交渉中既に軍事行動を起していたのだから、これまた米国にこの点を宣伝しても無駄だろうという。（三）白書中の四月半ばの「案」なるものについては、あれは日本案とも、米国案ともつかぬもの、といっていた。

これ等については研究すべきものがあろう。

外務省の役人が正直であるところは買うべきだ。彼等は学問あり、対手の立場を知るものとして、事実を事実として認識するフエアネスを持つ。しかし進んで敵を打つ積極性を持たぬ。そこで僕は「議論的に日本の立場の困難は認めて居り、その点は同感だ。しかし彼等の二割でも三割をでも日本も理屈があると考えればそれでいいんで、その努力をするんだ」といった。

日本が仮に敗戦する如きことあらば、被告の位置に立つだろう。そうした場合に、日本は日本の行為を弁解せねばならぬ。そうした準備は、外務省でも出来て居らず、不必要だと考えている。また米国白書の研究をすらもやって居らぬ。況んや世界的新秩序をや。

これではとても駄目である。

日本の教育は広汎に考えることを不可能ならしめるらしい。

晩に柳沢健君の日泰文化会館の会に赴く。どこでも問題になることは食物だ。腹一杯にならぬというのである。

前晩の常盤では米がなく御飯が出なかった。

桑木博士は今日は家に米が少しもなかったといった。

柳沢健君の娘が学校に行くのに、弁当を持たせてやるが、女中がその中から盗んで食うという。いえ、出て行かれるし、どうにもならないと。

英子の青山女学院では弁当をストーブであたためることを中止した。ドシドシ盗まれるからだ。

いずれも食糧問題の窮迫をいわざるはない。食糧問題から悲観説が現れている。

東京に六月二十八日とかでこの戦争が日本側の勝利による終結すると占いがあさうだ。今までよく当った売卜者だという。売卜者流行りであつて、それに望みをかけているのだ。

翼賛会の「吉田」とかいふ人が、今後六ヶ月ぐらいが山であると演説したと北田君がいう。隣の青年也。その間に飛行機が出来て敵をやっつけるというのだ。

二月十一日(金)

英米が、一斉に日本の俘虜虐待を公表す。これに対し日本側は、米英だつてやつてゐるではないかといったことを発表している。

国民登録制を拡大し十二歳より六十歳まで。僕も徴用される危険性が増して来た。

山本清君来京、共に歌舞伎に赴く。尾上菊五郎のできよし。鏡獅子もよく「義経」の五斗兵衛のところもよし。羽左も出て近頃のいい芝居だった。

『毎日』「時局小論」二月十日 …我等は「世界の悪魔を退治する為に戦ふものである。」…アングロサクソンの徒「如何なる悪魔でもこれ以上の悪魔は無い。」……(徳富蘇降の論文)」

二月十二日(土)

敵攻撃が相互に激化する。(十二日『読売』)

『読売報知』『風塵録』二月十二日…最初のジャップから

マンキーに転じ今はインセクトに変わった、最近はずブヒューマンという表現になった。…毒ガス使用論も風向きが変わってきた。…「生意気な奴とばかり全部虐殺してしまう話があるが、日本人をサブヒューマンと呼び始めた米鬼は、まさにこのモロー博士の話を地で行こうとするのである、」…」

先頃、『毎日』は病院船攻撃報復として断乎たる手段をとれといった。捕虜を処分しろという意味である。本日は左の如く論ず。(在米同胞はどうなるか)

『毎日』社説二月十二日 順序を誤るな

…「米英俘虜問題よりも先に、わが病院船攻撃問題を当局は議会言明通りに進めるべきである。…本土爆撃の伏線と見ず、「要するに当局としては説明に没頭せず、スパルタ人の語法を以て相手になることである。」」

英文東洋経済の主催で支那料理を御馳走になる。支那人が材料を集めるのは感心なり。

二月十三日(日)

昨日から読み始めたウォルター・リップマンの『米国外交政策』を読了す。

(一) 日本とドイツとを強国より抹殺することを前提とす。

(二) 米、英、ソ、支那が戦後、世界統治の責任者となる。

(三) 結局、地域主義である。

(四) 米国が右三国と同盟を結べという議論だ。

地域主義を説いて、とにかく、これだけ明白に議論を構成したるものなし。米国には異論多かるべし。但し、必要が米国をして、従来の孤立主義に立てこもらしめないであろうことだけは明らかだ。中に、米国が東洋政策に専らであったのは、大西洋のセキュリチーがあつたからだというのは卓見だ。

夕方、土井田清一君来たる。中大卒業生で海軍士官候補生だ。二三日中に主計中尉になるそうだ。

(一) 教育が末梢的であつて、半ヶ年を何にも習得し

なかつたと同じだという。

(二) 戦争の情態など少しも話してくれぬとのことである。

かれはこれから海軍士官として第一線に赴くのである。現在の事態から見て、果して生還が期せらるるかどうか。涙ぐましい悲壮な気持ちになることをどうすることもできぬ。かれは熱心なるクリスチャンである。

石橋君の話によると敵艦がクエゼリン島の真中に来た由。

全滅を疑うの余地なし。「どうして家内を狂乱に陥れないかが問題だ」と平然という。愛児の悲報を淡々として語る石橋氏の態度は、けだし驚異のいたりだ。

『毎日』の報ずるところでは、大阪の国民学校生徒を調査したところでは、昼弁当を持つて来ないのが〇〇%だとの事。そこで大阪衛生試験所ではカロリー増強を研究中なる由。

「銀星」あたりでも近く「雑炊」を客に出すはず、三十銭で一食だが、「お腹が一杯になるまい」というと、

警視庁では「誰だつて一杯にならぬ、食えないよりいいではないか」といつている由。昨夜の会での話——大概お昼を三回食い歩くという人があつた。何人も腹が一杯にならないのが近頃の状態だ。

食糧問題の窮迫が上下を通じて問題になつて来た。つまり満腹感が得られぬのである。戦争が早くすむと宣伝する一理由。

家内と瞭が風邪に伏せている。

二月十四日（月）

敵の俘虜虐待宣伝は、習慣の相違にもよろう。日本では罪人を打ったり擲ったりすることは全く何でもないのである。然るにこれを米英に行く大変な人権問題だ。日露戦争の頃は「国際法」というものが、厳格な手本であつた。それに準ずれば俘虜優遇の事実が生れる。第一次戦争の頃もそうだった。今や日本復古精神によるのであり、英米人優待は「英米的」であるから、自然極端になるのである。いつか俘虜管理官小田島

大佐が、「日露戦争の頃は西洋崇拜的であつたから、現在には日本主義的にした」といつていた。

こうした小さな事件——影響は決して小さくないが——においても、今回の戦争の復古主義的性格を見るを得よう。

今朝、秋山謙蔵という国学院教授のラジオ講演あり。盛んに元寇の役と、神風を説いている。

飛行機増産が朝から晩までの宣伝だ。世人にはようやく、「第一線は働いているが、飛行機が足らぬ。それは銃後の責任だ」といつた宣伝が通あざることを噂うわさするものがある。

左は小林順一郎（予備大佐で大政翼賛会幹部、現戦争を惹起した最も有力なる右翼の一人）の論文だ。

『読売報知』二月十四日　：民間の中に被害者が居る：「今日武器の補給力十分ならずして、皇軍將兵に苦戦せしめ、悲憤の玉碎を忍ばざるを得ざる如き平時の無準備は、これらの人々の不心得であつたことが、確に大きな原因の

「一つとなつてゐる。勿論今日は国内において過去の責任を問うてゐるが如き場合でないことはいふを候たない。」
「…」

二月十五日（火）

外務省に赴く。先日作つた案が、加瀬秘書官の氣に入らず、また作り直すことになつたのだ。一日いる。会のニュークリスに商大の上田辰之助教授を加う。いろいろ相談したが案を得ず。

上田博士は、計画を聞くと直ちに「とても困難です」といった。日本が過去の失敗の非をアドミット【admit: 認める】するのでなければ、外国人は信用しないというのである。これが恐らく識者の態度であろう。しかし困難なことは、日本は断じて過去の失敗を認めないことにある。

二月十六日（水）

一日家に居り『東経』に「敵の日本人虐待宣伝」を

書き中部日本に同じく対外宣伝のことを書く。

二月十七日（木）

外務省に赴く。僕の立案の計画を討議し、結局それに纏る。

晩は東調布警察の加納君が帰任したので、小汀君と松の茶屋で歓迎会開催。

通運省より電話あり。十九日より四五日、青函連絡船ストップするにつき十八日に出発してくれと。承諾す。その後、東川属来訪。切符が買えぬかも知れぬという。聞くと、通運省のかれが、陸軍省の友人に頼んで都合して貰うのだという。僕は郵便局の鍊成のための講演ではないか。その公用のための鉄道の切符を、同じ省でどうにもならず、陸軍を通して買って貰うのである。一般を察すべし。

鉄道省と通信省とを無理に一緒にすることが如何に結果が悪いか。形式主義の一結果。

二月十八日（金）

『読売』 十八日。

大東亜戦争の責任者たる徳富蘇峰——

『読売報知』『書評』 二月十八日 蘇峰先生の「必勝国民読本」 斎藤忠 「徳富蘇峰先生の大東亜戦争における至大な内的寄与は、おそらくわれらの揣摩臆測を絶するものがあるであらう。必勝国民読本が、この大御戦を奉行する政府中枢の当事者よりの懇なる依頼によつて完成されたものである事も、われらはひそかに洩れ聞いてこれを承知する。もとより、この曠古の大戦のなかに、……「先生を措いては……求め得ぬのである。」……（定価〇・五五毎日新聞社）

近頃の新聞とラジオは、ますます精神的になつてゐる。そして全然見透しを謬つた連中が、処得顔にのさばっている。徳富、斎藤の如きが然りだ。

三月六日（月）（函館にて）

二月十九日に東京を出発。通信省——新しい運輸通運省通信院の依頼により樺太、北海道を巡講のためである。通信省と鉄道省を一緒にして両方共、しつくり行っていないことは、関係者の一致しているところである。

十九日の朝、上野を出発、汽車三時間遅る。急行列車が遅れるのは普通の現象だ。この日本の大動脈が単線なのである。鉄道国有のは是非がここに現わる。戦争前に日本は、せめて運輸機関の完成を期すべきだった。汽車遅着のために指定の青函連絡船の第一便に間に合わなかった。たまたま運輸整備（？）のために一般乗客を、一日、一便ぐらいしか運ばず。予は青森駅に午前二前半ごろより午後一時半まで待たざるを得なかった。

随行の東川君と駅に待つ。幸いに近くの三等郵便局に待ってストーヴにあたる。青森も林檎はなく、死都

の如し。函館に午後六時近くに到着、直ちに講演会に列席。志村函館通信局係長出迎え。札幌にまで随行。

青森にても函館にても停車場の職員、喧嘩腰にて乗客と盛んに喧嘩す。人氣荒く、今後の問題は鉄道駅頭にて勃発の可能性あり。満目雪にて北海道風景現出。晩は局長等と会食。二十日晚。

二十一日朝、僅かに乗車。三分の二ぐらいは駅に残さる。僕は二等切符にて三等におさまる。小樽経済クラブ講演。小樽は兵隊さんに一杯。札幌に赴き、山形ホテルに一泊す。

二十二日、小樽に引返し郵便局にて講演。北海ホテルに一泊。ここのサービスは言語に絶して悪し。北海道の婦人は、特に礼儀作法を心得ず、荒削りなり。晩、局幹部と会食。

二十三日は札幌通信局にて講演。昼、局長等と会見、定山溪ホテルに到る。札幌より十度ばかり冷し。ただしどこもストーヴあり。暮しよし。

二十四日旭川に赴き、講演。それから晩に寝台車に

乗り稚内に朝六時着。局員出迎えらる。北海道の最北部にて寒き事おびただし。しかしここもストーヴあり、東京よりはるかにしのぎよし。晩講演。局員に送られ船に乗る。吹風。我等の乗った船は三十時間、大泊からかかった由であり、その日は出帆しなかったが、我等は天候に恵まれ、早朝出帆。

その晩。ケゼリンの勇士玉砕のラジオを開く。石橋和彦君その中にあるはず。同情にたえず。船外の雪吹風を聞きながら明朗な青年の最後を追悼す。

二十五日、大泊に到着。豊原通信局より出迎えあり。ここも兵隊さんと、船の杜絶のために客が一杯にて、木賃宿のようなところに泊る。どこも浴衣が、垢によれてゐるのに気がつく。

予定を変更して敷香^{しすか}に赴く。樺太の国境近くなり。汽車にストーヴあり。古きスタイルなり。東京に比べて物資豊富。汽車弁当が買える。

午後六時すぎ敷香着。山形屋旅館に宿る。何処の旅館よりも女中の訓練がよかったのも理^{ことわ}り。その主婦は

教育家にて、自由学園に娘と息子を出しているとのことである。

二十七日、敷香郵便局にて講演。局長の配慮にて鯔のくん製を買つて送る。

午后四時汽車にて知【一字欠とのこと】というところへ泊る。翌朝六時出発、豊原に午后三時頃着。午后五時頃より講演。晩、局長主催にて王子製紙クラブにて座談会。とても立派な御馳走だ。電気の豊富なのに驚く。そこで宿泊。

翌日、大泊にて講演。

三月一日晩乗船、稚内に二日午后三時到着。総て順調なり。局にて休憩。たら座^{たらざ}か^かに^にというのをたらふく御馳走になる。最もうまかったものの一つである。

三月三日朝札幌着。グランド・ホテルに着。晩講演。

三月四日朝、札幌発。今までは随行あり。今日から自分の手荷物^{ていぶつ}の重さ^{おもさ}を感じず。函館近く——（南方）——になるに従つて人気荒くなる。苦小牧の駅にてそれを感じず。汽車に乗かえ殺人的な三等車の混雑で日高浦

河に着。奥田実治君と笠原義和出迎える。奥田邸で一風呂浴び、非常な御馳走になる。久し振りの鮮魚の満腹。

晩、附近の人を集め座談会あり。どんなところでも腹を割って話せぬのが近頃の特徴である。

朝早く立ち、登別に赴くべかりしを中止し、四時出発。汽車中に二等兵の帰郷する人と並ぶ。襟もとかいうところ無縁に従事するのである。風に仆されては、又工事しつゝありという。

六日早朝函館着、湯の川の福井館に赴く。後に聞けば、函館にて旅館をとつてあつたという。その方に移る。

晩講演。寝台とれず、予定を早くしてその晩乗船。

三月七日、一日中、急行車にあり。上野駅にとよやと英子待つあり。午后十時半頃帰宅。

三月八日（水）

この日記帳が旭川郵便局長気付けに送られたのがつかず。函館で始めて手にし、待つ間に要領のみ記入した。

帰って約二十日間に事態の一変に気付く。松尾晴見氏の二女の結婚式、帝国ホテルの洋食部を閉鎖したため中止。九日の国民学術協会も学士会館にて開くべかりしを中止。経済クラブも会員外は食事お断り。

樺太だけが、まだ干魚が少しあるが、これも余命幾何もなからん。

米は十ヶ月分だけ確保しありとの事、今後は問題起きん。北海道が四十万石とか樺太の分を受持つ由。

青森の波止場に船がついた時、僕は実はホツとした。大丈夫とは信ずるが潜水艦の現れぬという保証はないのである。仙台近くになるに従つて雪が消えている。

旅行中にクエゼリン、トラック両島の勇士玉砕を知つた。その中に石橋湛山君の二男和彦君が居つた筈。

雪吹風激しき夜なり北海にクエゼリン勇士の玉砕を聞く

長刀に海軍中尉の軍服の似合ひし姿今も忘れず

古しへの聖りは奇蹟を行へり神よいま世に現はし給へ

愚かしき思想と政治の結実を今、身近くに刈りとるらんか

和彦君は実にいい青年だった。

汽車の混雑、いわん方なし。鉄道員は「戦時下」という言葉を不親切と同意義と心得ているらし。どこでも喧嘩である。また宿屋などの投げやりも言語同断だ。今後数十年間、日本はこの不親切が常道になるのだらう。

三月九日（木）

久し振りに経済クラブに行き、石橋氏に会見。風邪のため鎌倉に引籠り中という。

嶋中君訪問、昨年から問題続出で、ほんとに苦しみ通したという。軽井沢に疎開を真剣に考えている。同社の藤田、畑中、沢、その他数人が左翼関係で引張られていそうだ。

ケゼリン島に日本人俘虜があつた由、しかもこの人々
 i 神奈川特高による言論弾圧「横浜事件」、ここに挙げられた名は中央公論関係、他四社も対象となる。

はおとなしい由。米国側は放送しているとのこと。その中に和彦君はおるやおらずや。

この次ぎは戒厳令が準備されているとは当然であろう。

三月十日（金）

今日は陸軍記念日ということで新聞もラジオも陸軍礼讃をやっている。朝、井上幾太郎大将のラジオの講演。近頃の講演に北條時宗が出ざることなし。敵の量が「天文学的」とのみえないことを述ぶ。

戦前は米国人は海軍兵士にはなれぬ。彼等は逃げる。また潜水艦などには、苦しくて到底乗れぬといった。次ぎには米国の計画は、「天文学的数字で——」と計画倒れになることを嘲けた。

今や、それ等について「事実」を承認せざるを得ないのである。

戦争責任者の一つであるジンゴイスト・ペイパー、『毎日新聞』は、本多熊太郎の談話を掲載している。その

中で徳富蘇峰と同一意見であることを述べていう――

『毎日新聞』三月九日 生か死の戦争 ……徳富先生の言う

ようにこの戦争は妥協の余地は無い、他に道は無い。

日米戦争は当然：「当然起るべきことが起つたと思つた、日米戦争はどうやつてみても免れないもので、しかもその危機が日一日と迫りつつあるといふことが、十六年南京大使だつたときの私の職務上の行為を指導せる根本觀念というか、指導原理であつた、国民政府強化もその一つである。それで汪精衛氏にも戦争は必ず日本が勝つといふことをいつた。」…南方の資源の豊富なところを抑えたら絶対勝つ…」

日米交渉当時、本多は南京から上京して、これが成立に反対した。すなわち国民政府の非承認に極力反対したのである。本多は鋭い観察者である。しかし一つの結論を有して、その角度から総べてを解釈する。

大東亜戦争勃発の責任者が少しも責任を感じずに「運命論」と「先見」を以て誇っているのが、この講演で

も分るであろう。

予は将来、こうした無責任なる論者を指弾すべき責任を持つ。

世界において斯の如き幼稚愚昧な指導者が国家の重大時機に、国家を率いたることありや――僕は毎日、こうした嘆声を洩らすのを常とする。

帝大の某教授（辰野隆氏）曰く「東條首相というのは中学生ぐらいの頭脳ですね。あれぐらいのものは中学生の中に沢山ありますよ」と。

宣伝流行り――

一、木製飛行機が盛んに宣伝されているが、まだ手もつていない由。やつと先頃プランが出来たばかりである。これは王子製紙が北海道で工場を建てつつありと。

二、野菜増産の宣伝ばかりして、種子も、具体的方法は少しもない。僕の家でニラを植えたいがない。新潟あたりで敵の俘虜が寒気や食物のために非常に沢山死ぬそうで、その死体が葬られるという。

樺太、北海道旅行中、最も大きなニュースはケゼリン島勇士の玉碎、および参謀総長の東條兼任（軍令部長島田大将）であった。

【出典不詳】 記事禁止事項二四〇号

昭和十九年二月二十一日（極秘） 警視庁検閲課

新聞紙掲載事項に関する件

本日参謀総長及軍令部総長交迭ありたる所右記事取扱いに当りては左記事項新聞紙に掲載せざる様記事編輯上御注意相成度

記

- 一 政府と統帥との關係に紛淆を生ぜしむるが如き記述を為さざること但し統帥と政務との一層の緊密化を計る為めの措置なることを説明するは差支えなし兼撰兼任又は一体化、一元化等の用語を用いざること

- 二 今次の交迭の原因を具体的戦局に結び付くるが如き記述を為さざること 以上

昭和十九年二月二十二日午前八時三十五分受領

（同盟時事日報二日号には「統帥国政緊密化成る」との要項で出ている）

日曜を三月五日から全廃した。学校でも日曜を授業し得るよう法令を改正する。余計時間をかけることが、能率をあげることだと考える時代精神の現れだ。

米英が鬼畜であるとの宣伝が行き渡っている――

浦河から苫小牧までの汽車で挺身隊が乗った。その隊長が曰く「大西洋憲章というものをチャーチルとローズヴェルトが作ったが日本人を皆殺しにすると決議した。男も女も殺してしまうのだと声明した、きやつ等に殺されてなるものか」、これが汽車中の演説である。

また、日本人に子を生ませないように、寧丸をとるとか、或は孤島に追いやるとかいうことも、一般人の間には信じられている。

『中部日本新聞』三月二日 米英の鬼畜冒険 万全の備へ断乎討つべし

（ベルリンにて樽井特派員発）イタリアで苦戦し修道院などを爆撃している…「太平洋戦線における敵は、すでにトラック島や北千島まで悪魔の翼をのばしており、日本民族の絶滅を呼号してゐる鬼畜の奴らが、わが本土に迫る日も決して遠くはないのである。そしてその時、彼らがわが都会地の文化施設や住宅地域を爆撃の目標とすることもまた間違ひないであらう、」…俘虜虐待云々のデマも云々」

総べての政策は今年一杯に決戦をなし、雌雄を決するといっている。『中部日本新聞』の社説がその一例。

『『中部日本』『社説』二月二十七日 今年の間に合せよ

…「興亡の岐路は正に眼前にある。即ち決戦非常措置が、茲一年の精進克苦を目標として、講ぜられる所以にほかならない。」…玉碎で時は稼いでいるが間に合わなかつたら何にもならん、故に各種長期計画も停止された、航空機生産など二十四時間制で間に合わせねば…」

（家のシュロの皮を町会からとり来たから提供した）

本年一杯で決戦一ヶ年の区切りを法令改正の目標としたばかりでなく、国民もそう考えている。目前のことしが見えない一つの例。

スパイクマン【Nicholas J. Spykman, 1893-1943】の America's Strategy in World Politic を読む。ザオ・ポリチック的な観点面白し。

一、日本は支那の内乱を利用するか、またはそれが統一されれば支那をめぐるパワーポリチックの衝突を利用すべきであつた。

一、この本の結論に、米国は結局日本を助くる事、英 国を助くる如かるべしとある。

一、日本は戦略的には大東亜戦争前に総て完全だった。南洋委任統治領は米国を圧し、支那封鎖は南太平洋を自由にした。それにタイと仏印は日本の勢力になっていた。——ただ国内の物質的実力だけが欠けていた。しかしこれを顧みることに最も不得手な勢力が

日本を指導していた。

三月十一日（土）

本多熊太郎は、米国が日本人を皆殺しにするといっているとか然談話している。

『毎日』三月十一日 …… ルーズヴェルトは選挙の土産に日本を三等国にしようとしている、他にも「日清、日露、日独戦争によつて得た日本の版図を全部取上げ」…「維新当時の日本にしよう」という者も居る、…

わが民族抹殺叫ぶ…「日本のいはゆる屈服だけでは満足せず、アメリカ・インディアンを皆殺しにした如く、日本民族を二千万そこらまで凡ゆる手段で殺してしまふ、かういふ意図であることが判る」…」

樺太での話し――

樺太の北部にギリヤーク族でウィーコルクという者が居った。非常な気焰家だが「日本人は大陸発展といながらギリヤーク語一つ学んでいる者がない、俺は

日章旗を持つて案内するよ」といつていた。かれの住居は敷香からあまり遠くないオタツスの森の中にいた。この男が憲兵に連れられて豊原に來たが、その後の消息はない。かれの娘は「豊原で死んだよ」と淋しい顔をしているという。

また、ある時には、あるロシア人か土人かを当方でスパイに使つていたが、それが急に見えなくなつたので、捜して途中で射殺してしまつたという。

午后、農園働き。雨宮庸蔵君、先頭の講演の御礼を持つて来る。かつてはこんな収入は珍らしくはなく、顧みてもみなかった。近頃は五十円が有難い。生活の決戦期が目前に來ているのである。

三月十二日（日）

朝から馬鈴薯を皆を督して植う。

蒲田の笠原家は郷里に疎開するに決したとて家兄來たりその決意を告ぐ。

米国の「日本抹殺」の内容が、新聞に、公然現われ

て来た。すなわち情報局第三部長井口氏は放送していう。

『毎日』三月十二日 …… ルーズヴェルトは1937年から日本を隔離してしまえと言っていた、…

グルー戦意煽る…知日派のグルーも日本撃滅と言いつらしている、…

何を語る米輿論「これを要するに敵米英の意図は端的に申すとわが国の民族的生活と発展の途を悉く封じ帝国を地球上より抹殺せんとするにあることが分明するのである」…カイロ会談で見ると「米国の憎悪心と征服慾は今や日本に集中してゐる感があり、わが国を世界第一の敵国と銘めてゐるのである」…雑誌の世論調査でも戦後の国際団体に参加支持は英国72%ソ連66%…日本2%…」

本多熊太郎はその続きにおいていう――

『毎日新聞』三月十一日 ……「日本人は人類でない、人間

以下の動物である」…「三等国として世界からボイコットする、さういふのが対日意図である」]

一 昨年の十月(?)に通信省の依頼により山陰道を巡講した時、僕は「もしも万が一にも――決して負けるなんてことはないが、万一にも日本が負ける如きことがありとすれば……」と講演したことがある。その時、同行の吉川属が「もしも万一、敗けた時……などという、外部の者に聞えた時に、どんな誤解をされるかも分らんですから」と注意してくれた。その時の事を考えると隔世の感がある。

「日本帝国抹殺」と「日本民族の抹殺」が一般には同義に解されている。

アドミラルチャー島のロスネグロス島に敵上陸と大本営発表――

海軍に優秀な青年が争って入隊した。その優秀な学徒が、今やほとんど全滅の機運に瀕している。日本は彼等にまつべきものが多かった。その彼等が死滅す。

国家の損失、何物かこれにしかん。嗚呼。今回の戦争でこれが最も重大なることだ。

大東亜戦争は総べての研究——人文科学を殺した。世界機構の問題の研究すらも危険なり、赤化なり、敗戦主義なりと迫害された。鮎沢君の如きはその一人である。我等も公然とは、一切これを発表しない。

三月十三日（月）

大東亜戦争の思想的背景が極端なる封建主義であることはいうまでもない。「西郷隆盛」「宮本武蔵」「四十七士」などの隆盛が、今の如く極端であつたことはかつてなかつたであらう。同時に戦争に対する態度も、日清戦争、日露戦争よりは一層反動的だ。その時には伊藤、山県、桂、いずれも国際情勢の動きは心得て、その基調は開明的であつた。故に、大東亜戦争においては、俘虜取扱いに関しても、日露戦争を先例とせざる理由なのである。小田島俘虜監督官は日本クラブの講演会で、明白にそれを明言していた。

一、大東亜戦争の思想的な根底は「仇打ち思想」である。「仇打ち貯金」というものが、各常会で行われている。

二、毎日新聞などは社会欄に大きく「殺せ、米鬼を」と特号活字で書いている。（米国においてキル・ジヤップと公然いつていると我国では宣伝されている）

「買出し取締り」「横流れ禁止」「闇の絶滅」——役人がやっているだけに取締りはあらゆる方面において強化されている。しかし生産方面については、ほとんど何等の考慮が払われていない。最近になって空地耕作などがいわれて来ているだけだ。物は自然に産れると考えるのだ。

日曜は三月五日から廃棄された。機械の二十四時間勤務と共に、人間の三百六十五日勤務ができるわけである。その事は無論、仕事によつてはいい。我等は現に日曜日もない。しかし問題はそれが能率をあげる所以であるかどうかである。

新らしくビルマ戦線から帰り陸軍航空本部長寺田濟一少将はビルマ戦線では一月二十日には二十対零、二月五日には十五対零の航空戦果をあげているといっている。そして木製飛行機については曰く(『読売』十三日)

『読売』三月十三日 : B「もB24もボロボロ落ちる「また最近よくいはれてゐる木製飛行機も搖藍時代の木製飛行機に帰つたのではなく似ても似つかぬほど高度に進歩したもので」」 : 「長年に亘る不斷の研究努力により…時代の脚光を浴びるに至つた」 : …」

事實は木製飛行機は機械だに据らぬ。当事者曰く「上層からの命令があるから関係官庁に行くと、課長に逢うのに廊下に二三時間も立ち、その上、被告扱いだ」と。東洋經濟の評議會に出席。蟬山政道君久し振りに出席す。自由に話し得るのはこの会ぐらいなものである。他では二、三人の会でも断じて正直はいえぬ。そこには常にスパイがいるからである。——さらばとて我等の

話しは常に国家の安危を忘れず、これを如何に対処すべきかを研究討議しつゝあるのであるが。

三月十四日(火)

『東洋經濟』が社論で(石橋君筆)「強力政治実現の要諦として首相はまず争臣を求めよ」という意味のことを書いた。(三月四日号)その中に

「然らば何うして某等多数の有能達識者は争臣たるのを職責を尽さなかつたか、……当局者に衷心から直言を歓迎する用意無く、正直な言説は却つて之れをなせる者に往々不測の禍をさへ齎らしたことである」と書いた。これは当局者より注意があつたさうである。情報局はこんなことばかりやつてゐるのだ。

石橋君曰く「現に僕などはそうではないか」と。

直言を当局者が好まない例は余りに多い。ある代議士が東條首相に忠告した。会合は二人だけであつたが、帰りに憲兵隊に呼ばれて、ひどく虐められたという話がある。

現に新聞、雑誌に現れ、また政府要路に立つものに一人でも「争臣」があるだろうか。

蠅山君曰くこんな国に生れたのが不幸だった！と。知識人としては、真とにこんな低劣な空気と干渉^{マヤ}にたえない。

東條首相は参謀総長就任につき、その言葉に極度に警戒している由。

例の肩章をかけている時には参謀総長東條大将であり、断じて首相ではない。先頃、皇宮参拝にお詣りした時には参謀総長の資格であつたそうで、この点嚴格である。なんでも右翼方面から突込まれたとのことである。右翼でなくても、この点、デリケートであることは想像がつく。

英米軍のドイツ空爆激化す。その目的は（一）ドイツ国民の士気、（二）軍需生産機構、（三）輸送機構、（四）大西洋要塞、（五）独空軍勢力の五つの破壊であろうが、それよりも対欧上陸作戦の前駆であろう。

ドイツ軍ウクライナにて苦戦。赤軍はジューコフ元

帥を立ててオデッサ——レンベルグの鉄道遮断に突進しつつあり。

食糧の不足が、どこに行っても話しの種である。北海道で僕を案内した志村民治君（通信局現業調査係長）は七人の子供持ちだが、自分達夫婦はおかゆだけ食っているといっていた。それがために二三貫目瘠せたそう。蠅山君は成長盛りの子供に一番沢山やって、残りを夫婦で食うそう。どこでも米は二食分しかなく、一食分足りない。僕の家でも瞭がもつと食いたいというが、近頃は割宛^{わりあて}だ。大熊真君のところで、「子供も空腹だが、もう馴れた、僕等はおかゆだ」と話していた。僕が二十日近く家を留守して、それで一杯食ってしまったとのことである。つまり配給では全くやって行けぬのである。生方敏郎の『古人今人』¹というのが比較的によく思い切つて書いてある——

何としても今のやうに食物が窮屈では人心落着か

i 生方敏郎の個人雑誌、不二出版が復刻版を出した。

ず、イザといふ場合何かしら勃発しさうに思はれ、何となく危険が感じられてならない。

それ故私は何よりも現代に於いて望ましいことは、食生活を司る人々、及び現に権力勢威ある人々が、配給以外の一粒の米一片の副食物をも自宅へ入れず、外でも決して口に入れぬことを明治神宮に誓ひ、たとへ十日間でも実行してみても貰ひたいと思ふ。さうすれば今年に入つてからの社会不安は一掃されよう。外敵以上恐るべきは飢餓に惶てる窮民の嘆きだ。

良将は戦線に在つて一兵卒と同床に臥し同飯を食するにあらずや。銃後も亦た之に習へ。

(生方敏郎『古人今人』)

蟬山君の話では、山口県あたりで米の供出がひどく、「これなら戦争をよしてくれ」といったものがあるという。

i 「惶」「あわただしい」からみて「あわてる」であろう

また信州の豊科からの来信によると四月までの食糧を残して全部出せとのことでまるで「明治維新のようだ」と今朝良君のところに書いて寄^マ込^マしたという。

野菜は大根半分を四人家族に二日分ぐらいだのとこのだ。内田農相が市場に行つて、「それでやつて行けるもんか」と告白している。

食糧問題が大都会の今後の問題だ。疎開を一生懸命に奨励しているのも、こうした情態で空爆でもあれば、食糧暴動の危険があるからだそうだ。

同じ『古人今人』は一寸痛快なことを書いている――

それは此三四年以来、紙の不足を名にして言論機関を惜しまぬことだ。中には消滅してよかつたものが多々ある。併し中には惜しいものも多々ある。今残存してゐるものが果して貴いもののみか。必ずしもさうでない。此統制はメチャメチャだ。良きもつぶされ悪きもつぶされ良きも残り悪きも残る。即ち盲目的に統制されたのだ。

二た言目には紙の節約といふ。借問す、紙と思想と何れが尊きかを。

紙を以て思想より尊しとするほど、世に唯物的な考へ方があるか。かかるバカげた、而して知識学問に対して不遜な考へ方は日本創まつて以来、未だ曾て無かつたことだ。

乳臭児どもの権力を弄すること、遂に此所に及べるかを思ひ、公論を天下に求め国民の学問知識の進歩を常に励まさせ給ふた明治大帝の聖恩を仰ぎ奉りし我等の若かりし幸福な時代を顧み、そぞろに血涙の膝に落つるを禁ぜざるものがある。噫。（『古人今人』）

これは最近出た最も思い切つたものだ。こうしたことを書くので、この小型四ページの雑誌に、案外支持者が多く購読料を寄附している。

ある人が、僕の家に砂糖一貫目百円だが買わないかといつて来た。聞いてみると他では百二十円で買つたそうだ。僕は無論断つたが、これが通り相場だ。公定

は三円ぐらいである。約四十倍の値だ。

米は一俵三百円前後で、一千円に三俵で取引された例は少なくないとのことである。

ユダヤ人問題、フリー・メーソン問題については北海道の浦河においても質問が出た。その宣伝が行き渡っている証拠だ。雑誌を出したり、講演をしたり、どこからか運動費の出ているのを示すものだ。

三月十五日（水）

汽車旅客制限をなし、今後、百キロ以外は警察が証明を出すことに決す。寝台車、食堂車全廃。ひどい制限である。

ドイツで矢張り制限をしているのは、運輸通信省の長崎という鉄道総局長官の談でも明かだ。

先頃の高級料理屋の閉鎖等も、ドイツの真似であろう。無論、必要に押されて来てではあるが。

いつも言うことだが、一般民衆にも「戦争」というものが、どんな味のするものであるかが分るだろうと

思う。

軽井沢に今後、行けぬのが問題だ。しかし問題はそうした個人の便、不便を超越して、事態の急迫にある。長崎長官の談を見ても、弁当の問題、その他について具体策がなくて実行しているのである。対策のない「断行」が、今回の汽車制限にも見られる。

朝、ラジオで川島陸軍主計大佐というのが「朝飯を食いながら」と題する五回目の講演をした。まるで国民を脅かすのである。そして食事中に「へどを吐く」とか「便所」とかいう。命令主義で、全然、相手の心理状態を知らぬ一つの現われだ。これを聞いている者は、学問があるものならば、強い反感と悪意を惹起せずには置かぬ。その事が分らぬのである。

「戦いは文化の母なり」「百年戦争」といった讃美をしていたものが、随分多かった。いまその人々は何処にある？　しかし新聞は相変らず斉藤忠とか鹿木員信とか野村重臣とかいった神風連中で賑っている。この国民の愚、及ぶべからず。

東大の学生が今、静岡県垂井(?)で暗渠工事の勤労をやっている。大学生と土木工事――

伊藤正徳夫人逝く。長煩^{むづ}らいだった。

外務省に赴く。先頃『ニッポン・タイムス』に出たジャポニカスは高柳賢三君であつた由。我等三人――上田辰之助教授を加えて――がジャポニカスの名で発表することに決定したという。この次ぎは僕が書く番。

三月十六日(木)

高級料理屋を閉鎖した理由としては、労働者や徴用士の反対がはげしく、そういうものを閉鎖しなければ治安の責任が持てぬと警視庁で言い出した由。これはそうあるべき事。徴用士連の寄宿舎では、「おれ等が、こう働いていても、重役連中や軍人は待合に行っているのではないか」と不平をいつている旨、銀星にいた小林が実話したそうだ。

高級料理屋――ブルジョア――に対する労働者の反感と同時に東調布警察署あたりの常会係りの刑事は、

盛んに「奥様」や、「物持ち」を攻撃し、女中階級を煽動しているとのことだ。これは若い下級官吏には特に通有することである。労働者と官吏の反抗的な革命熱。地盤はここにできているのである。

その上の問題は、徴用の乱暴な実行だ。仕事もなく、機械道具もない。それなのに無暗に徴用する結果、手をつかねて遊んでいる。そこに不平と不満が起るのは当然だ。

この戦争において現れた最も大きな事実、日本の教育の欠陥だ。信じ得ざるまでの観念主義、形式主義である。樺太その他の漁業場で、ありあまつて困るに、しんや魚を統制するのである。統制そのものが目的なのである。また一つの命令に対しては、ゆとりのない画一的実行だ。

「なぜだろう」と「東洋経済」の山田常務が聞くから、「蟬山君などが帝大の先生をしていて法律ばかり教えたから」と答えると蟬山君は向きになって「おれは絶対に責任を負わん。おれは始終、法律万能に反対してい

たんだ。しかし法律の科目を少くすることは、彼等の生活問題なんだ」といつていた。高文を通るための基礎教育としては、法律以外には何にも教わらないといっている。従って彼等は法律技師にしあげられるのである。法律が唯一無二の規準であり、目的である。これが役所の空気になると、その部内の下級役人や統制会社も自然にそうならざるを得ない。

生産部面を考えないこと——物は自然に出来て来て闇で横に流されさえしなければありあまるはずだといった考え方であるから、その方面については無責任だ。日本でストライキをやる、まず破壊をしてしまう。この考え方は革命騒動の一步手前である。

三四日前、白柳秀湖君が手紙を寄^マ達した。徳義がすたれば戦争に勝つても国が亡びる。国家永遠のためには敗戦した方がいいかも知れぬといっている。ここで彼は誤謬を冒している。第一に戦争の結果が何よりも徳義心を破壊したのだ。第二には、その戦争の責任者は誰なのだ。かれや、徳富蘇峰などが、最も大きな

その一人ではないか。日本歴史や日本精神を無暗に誇張して対手の力を計らなかつたのは、彼等ではないか。

昨日、英子と女中二人が都心に出た。お昼を食うのに富士アイスに行つて行列に並んだが途中で打切られた。松屋のデパートに行くと、お昼の行列が三、四階の階段全部を埋め尽して食えない。そこで富士屋に行つてようやく食つた。それでも行列は途中で打切られた。食つてみると御飯がなく、其黒いうどん、五六本に、内容不明の海草みたいなものをかけてあつただけで、それで八十銭だ。彼等の前に据つた男は、それを持つて来た弁当箱につめ、残つたものを丁寧に食つて行つた。そうだ。家内曰く「ようござんした、外の事が分つて。英子も決して選り好みをしないといつていました」と。豊やも曰く、有難いことが、ほんとによく分りましたと。近頃、閣議を宮中でやつている。東條は最初から盛んに陛下のお袖にかくれた。何かというと御稜威とか、陛下の御命令あつてとかといった。それはかれの無知にもよるが、無意識の内に、陛下の御名にかくれんと

したのである。閣議を宮中でやるのは、その一步の前進だ。

今日は興味深い話を聞いた。

昭和十九年二月二十三日の『毎日新聞』は「勝利か滅亡か」と題して特号活字の記事を一面に出した。それは、マシーナル島勇士の玉砕を経てトラック島で日本海軍が大損失をした旨の発表があつた直後だ。二十二日の新聞には東條首相が参謀総長を兼務した記事が発表された。

『毎日新聞』に発表された記事は「勝利か滅亡か」「戦局は茲まで来た」「毗決して見よ、敵の鋏状侵寇」という標題の記事であつて、その中にこういう文句がある。

「太平洋の政防の決戦は日米の本土沿岸において決せられるものではなくて、数千海里を隔てた基地の争奪をめぐつて戦はれるのである。本土沿岸に敵が侵攻し来るにおいては最早万事休すである。

i ハサミ状の侵寇、新語ではないか？

ラバウルにせよ、ニューギニアにせよ、わが本土防衛の重要な特火点たる意義がこゝにある」

そしてこの記事は、故に竹槍では間に合わぬ。飛行機だ、海洋航空機を造れという論に続くのである。

この記事を東條首相がその日の午后三時頃読んで怒った。沿岸に敵が侵寇し来るにおいては万事休すとは何事か、東京が焦土に帰しても日本国民は飽くまで敵を滅すために戦うのだと。

情報局は慌てて、午后三時半頃になつて『毎日新聞』の発表を禁止すると同時に、翌日、同局は都下新聞社の編輯局長を招致して、今後、そうした事のないうように訓示した。

陸軍省は毎日新聞に鋭い警告を発し、且つその筆者が何人であるかを問うて来た。毎日新聞では筆者を出だすことを謝絶し、編輯局長の吉岡半六君が辞職した。

これで問題は解決したと思われた。事実、筆者の目がけたところは生産増強にあつたのだ。ただそのヒステリックな書き方は、ジンゴイストの毎日新聞ですら

も、ひどすぎたほどのものである。山根真治郎（東京新聞編輯局長）は、右の情報局の会議で、二十二日には東條首相は閣議で「今や正に帝国は文字通り隆替の岐路に立っている」といった事実もあり、それが筆者の頭に這入つていたのであらうと。

ところが二三日してその筆者に突然徴兵命令の赤紙が来た。同人は海軍省の出入り記者で四十一、二歳の男、兵役関係のない国民兵である。この人が徴兵されたのである。かれは丸亀に入隊した。これを聞いた海軍省は怒った。海軍報道部員を無断で徴兵するとは怪しからんというので、丸亀師団部に交渉して除隊させた。海軍の意志としては、かれを飛行機で直ちに南方に連れて行く手筈をしていた。然るにその除隊されたこの筆者は、その翌日、また徴兵された。今現に丸亀にいるとのことである。（六月二十日参照）

この話しほど、東條の性格、陸軍のやり方、陸海軍の関係を、いみじくも画き出しているエピソードはない。ことに、極端なる御用の毎日新聞だから興味は一

層に深いものがある。

伊藤正徳君の夫人死去お悔みに行き、それから鮎沢君に東君を紹介、帰りに加藤武雄君の家に寄る。

加藤君の話によると、同君は東北方面の農村を視察して来たが、憂鬱になって来たという。米の供出は極端であつて、全部、一個所に運び去り、それを再配達することになっている。かれが組合事務所に居った時も、老村長が数人来て、百姓が食えないからどうかしてくれといつて来たという。とてもこれではやつて行けず、忍従の最後の段階まで来ているとのことだ。

鶴岡で石原莞爾中将に会見せんとしたら特高の者が何人も来て、最後に都合が悪いからと断つたという。石原に対し余程警戒している証拠だ。

三月十七日（金）

いよいよ春らしくなつて来た。気候も温たく、麦の芽次第にのぶ。昨日は北海道から鱈子を送つてくれつついた。

伊藤正徳夫人の告別式に連なる。かつて電通——今の同盟の上田君と並ぶ。同君は三井の某氏の勧めにより僕の『外交史』を読んで感心したという。また大蔵省の某官吏、病気で帰省しているが、僕の本を送つてくれと頼まれ、それを送つたという。同君曰く「識者の間には評判になつているのだよ」といつていた。

【この後、原本 2/3 ページ、切断されているとのこと】

古本屋で昨日、陸軍中将佐藤鋼次郎の『日米若し戦はば』という大正年間の発行本を買う。日米戦争では日本が断然勝ち、米国懼るるに足らずという論旨だ。日本で発行されたもので、米国の戦力を恐るべきであると論じたものはかつて無かつた。

南京政府のいわゆる貪官汚吏の二名が死刑に処せられた。日本軍への食糧買入れに不正行為があつたからという。重慶でやると「肅正」ととられるが、南京政府がやると、恨みは日本に移ることはなからうか。日本国内でも同じことをやって貰いたい。

ソ連、バドリオ政權を、米英に無通告で承認した。バドリオ政權は君主主義であり、反動的だといわれた。これをソ連がまず承認したのである。

ジェファアソンはいった。「英国は我国に害を与え得る唯一の国である。同国を味方にすれば他に恐るべきものなし。」これがモンロー主義の一理由である。敵にではなくして味方にしたので。(リップマンの『米国外交政策』参照)

ワシントン会議において米英の軍備を縮少したことは、それだけで彼等がそのホーム・ウオーターを守る勢力の減少を意味した。即ちそれだけ日本に有利だったのである。——リップマンはこれを指摘している。(同上)

日本はその地理からバランス・オヴ・パワーの上に立たねばならぬ。英国が大陸に対してとつたように、アジア大陸に対しては、そこに必然に起る列強の衝突に対処して勢力均衡政策をとることが賢明である。自から大陸国の一にならんとしたこと日本に失敗が

あつた。将来、日本の外国政策はこの一点に注意することが肝要だ。

「玉碎」という文字は使わなくなったそうだと山根君が松村秀逸陸軍報道部長に「そんな文字を使うのは可笑しいではないか」といつたからだと言根君が話していた。また「一機でも多く」も標語としなくなったという。

必要が彼等の道徳をかえる。

瞭の話し。吉田大尉という前の先生が来ての話によるアツツ島では人間の肉を食つたそうだと。人間の肉を食うと口がはれる。それを見て「人肉を食つたろう」と上官が聞くと「食いました」と答えるという。

千島には毎日、米国の飛行機が来るそうだ。

今日は雪降る。リップマンの『外交政策』を再読す。矛盾が沢山ある。しかし立派な評論家だ。米国の帝国主義主張。

三月十九日(日) 積雪五寸に近し。

瞭の話——青田大尉の話しでは勅使が第一線に行つて、日ソで戦争しないように——失方が乱暴をしても、当方では忍耐するようにと説いたということである。

今朝の新聞では「勤労昂揚方策」と「女子挺身隊制度強化」という二つの要綱が閣議を通過し、デカデカに発表されている。見ると最高勤労能率を発揮するため軍隊的規律による職階制を確立するというのだ（前者）。まるで生かじりの中学生の作文みたいなものである。彼等ははまだ、観念いじりに終始している。能率的には軍隊ほど非能率的なところはなからうではないか。人間は自分の経験より分らないものである。工場に軍隊式を徹底させることが最善だと考えているのが面白い。彼等には競争主義の味が分らない。

確信のみあつて知識なき徒！

【切抜貼付の剥奪ありとのこと】

これが決して間違っている訳ではない。ただ人間のサイコロジが分らないというまでだ。かうしたものを、しばしば出すと、彼等の知的実体を国民が知るで

あろう。

『読売報知』三月十九日 良民・即・良工へ 産報にも

当分は必要 総動員局監理部長 陸軍少将と記者の問答

答：「互に愛し合つて：お仕へするといふ精神」：

答：「生産の国家性と勤労の国家性が一致し、戦力の増強に寄与」：

前記、勤労観が軍人の産物なのは明らかだ。

外務省は、いよいよ大東亜会館に移る由。高級洋食屋などを閉めた底意にはそういうこともある。一国政府がトリックと見られることをやるのは政治の不信を買う所以である。

松尾夫人がよせの別荘に行く由。誰もいなければ空屋と見られとられる恐れがあるからであると。我家も軽井沢に行かねばなるまいと話した。

個人所有権今や無し。

三月二十日（月）

今朝の新聞は、流石に恐る々々ではあるが、「形式主義の否」（『毎日』）とか「必要なのは書くことではなくて物を造ること」（『読売』「陣影」）といったことを書いている。政府のやり方の馬鹿さ加減が、少しずつ分るのである。もともと新聞社の若いイデオロギー張りの連中には分らず、それが軍部と共に推進力となっているだろうか。

東洋経済の評議員会に出席。雨。

三月二十一日（火）

ジャボニカスの英文原稿を書く。同じ名の下に高柳、上田の両君と僕の三人で書くのだ。僕だけ英文が下手なので日本文、小畑君という大家が訳してくれるはず。力を入れすぎてあまり出来よろしからず。

午后畠をやる。肥料をやり、菜類を少しまく。とうもろこしをまく。暖かく、暑い寒いも彼岸までの文字我を欺かず。

先頃、避難荷物の検査があった。その検査官は、出入りの大工梅村であった。我等の隣組長を従えて、挙手の礼をして「よくできました」と讃めて行つたそう。ワイフは「今までは、勝手口から出入りするのにも遠慮しましたのね」という。

ここに問題は二つある。一つは大震災の時もそうであつたが、今、秩序維持の責任が、大工や植木屋、魚屋等に帰したことだ。彼等は丁度いい知識と行動主義の所有者である。第二は自己の持物をも、警察の代表者等によつて検査するという干渉主義の現れだ。新聞には疎開の荷物の中にカンカウ帽があつたとか、ピアノがあつたとかと、そんなことばかり書いてある。荷物の分量を決めて、何が大切であるかはその人の裁量に委せればいいではないか。その人によつて「最も大切なもの」の觀念が異うのだ。

三月二十二日（水）

函館の今井という人、汽車で逢つて行動を共にした。

電話をかけて来たので今日、一緒に飯を食おうといったが、経済クラブに来たらず。それから外務省に赴く。外務大臣官邸で相談す。高柳氏のもの是非常に旨いが、実際のところ僕のものできよろしからず。小畑君に兎に角、いい加減に翻訳頼む。英文の不足を感じたこと本日の如きはあらず。

国民学術協会評議会に出る。辰野隆氏の談話あり。「新しき兵隊」という。大学を出た兵士が新しい文化を持っているという意味である。

出版の紙、八割が制限された。二割で何ができよう。出版界は当分駄目である。

その席上の話のだが、朝鮮人や満州人に皇道精神を説いても分らない。『二宮尊徳夜話』(?)を読ましたら「成程」と直ぐ分った。そこで満州ではそれを五十万部注文したところが、岩波では「そんなに、とても」と目をむき出したとのことである。朝鮮からも同じく注文があつたという。

三月二十三日(木)

神戸の勝山勝司氏より和歌を送り来たる。

故里の山の名なれど有明といふは我影おぼつかなしや

夕刊も遂にやめねばならぬ時詩集など出す実はあはれなり

予これに答う

有明の里はなつかし春草のもゆる間をわらび摘みにき

夕刊もやめよ、ラジオも音を止めよ尽忠の道はわれ備へあり

愚かしき説教事を聞かんより三十一文字は日の本の道

警視庁の情報部の公文君という人來たる、東條内閣に対する批判を聞かんためなり。

東條首相及び島田海相について怪文書が廻っている。東條に対しては、参謀総長に就任した際、陛下より前参謀長に優渥な御沙汰があつたのを、杉山元帥に

お取りつぎしなかつたとか、陛下の大権をほしいままにしているとかいった事である由。また島田については、東條に、いゝ加減にまるめられている——おかまを握られているような格好ではないかといったことが書かれている由。怪文書というもののほど無責任のものなし。しかしこれがなす役割は軽視できず。

東條に対する反感が、可なり各方面に瀾漫^{びまん}しているようだ。予は大権の発動による事故、批判したくないが、最初は、戦争中の首相の変更は反対であつたが、近頃は考えている——敵に弱味と見られぬようなやり方ならば、必らずしも反対に非ず。たとえば戦争遂行のため参謀総長一本にする如きも考え得るところだという意味のことをいふた。

統帥権の問題については右翼及び軍人一部において問題になるであろうことは、北海道でそのニュースを聞いた時に、直ちに考えたことであつた。

東條は、かつて井野農相辞職の時にも、井野が放送局より帰つて来ると、一寸来てくれというから行つて

みると、辞職せよと詰腹を切らせられ、満腹の不平を保持つていた由。今回の内田の場合にも、突然相談され、内田は再三辞退したが、引受けたとのこと。

高等料理屋の閉鎖については、インフレ防止のためにも望ましくないではないでしょうかといった議論あり。予は労働階級の不平がここに至らしめたのだろうといった。

いづれにしても底流は可なり悪化している。昨夜、電車の帰りに全く生死の混雑なりき。それだけでも人心を悪化せしむるに充分だ。

新聞社は陸海の軋轢のため、どちらのことも書けぬと言っている由。日本はこの問題においても末期的症状を呈している。というのは、この間の『毎日』の発売禁止も、実は同紙が海軍のことを提灯を持ちすぎたことにあつたといわれる。「竹槍は駄目だ」とか「海軍航空機生産」を強調したのが、かんに障つたのである。『毎日』の記事は栗原報道部長がインスパイヤー【inspire】したもので、どの新聞にも出ていたとのことである。

チャーチルの二月二十二日に議會でなした演説を読む。その中で英國の飛行機生産はドイツより多く、ロシアの生産は英國と同じく、米国のそれはドイツの二倍か三倍だといっている。「日本の飛行機生産は、日本が攻撃した大国よりも遙かに少ない」といつて居る。かれのいうところではすでにUボートのメネース【menace脅威】はない、今後飛行機に全力をあげるといふのである。またソ連に対してはカーゾン線までポーランド領地を与え、ポーランドにはドイツ領土を与えろといっている。

欧州には、まだ将来平和なし。

三月二十四日（金）

午後、外政協會で佐々木克己中佐より「最近の戦況」を聞く。独・ソ戦争については、ソ連の損害が多い理由を以てドイツが有利なるかの如く説いた。表面的か、然らざれば、そう信じているのか。そう信じているとすれば正に愚である。もつとも今までもこの人々は見

透しを常に謬つて来ているが。

大東亜戦争については樂觀的なのはビルマ戦についてだけである。しかも戦況の思わしくないのを、総べて飛行機の数の少ないことだけに帰している。「フィリピンのコレヒドールの建設記念に「一九二九建設」と書いている。この頃日本の議會では軍縮演説をやつていた」といつていた。この人は、日本は、あれ以上に日本が軍備に金を費やし得ると思つてゐるのだ。また当時、同地はワシントン會議条約により、「現状維持」の事態にあつたことを知らないのだ。——驚くのはこの三十五六歳の青年が、依然として大胆で、断定的で、自信のあることである。この教育はどこから来たのだろう。

小汀君と銀星でお茶を呑んで分る。午前中、畠。

三月二十五日（土）

今日是一日中、畠を耕す。枝豆、つる葉等を植う。晩に稲垣乙丙博士の農業の本を読む。近頃は、農業の

事が一番熱心に、且興味深く身に染む。稲垣博士という人の篤学、且研究的、しかも通俗的なのは驚かれる。子供の頃、しばしば聞いた名前ではあるが、こんなに偉い人とは思わなかった。科学界に偉人出でよ。明治時代には矢張り研究的な人が多かったのだ。

三月二十五日ⁱ（土）

午前、午后にわたって畠を耕す。水野巡査部長来て、いろいろの事を話す。

三月二十六日（日）

家内総出にて百姓。一応耕し終る。午后は樺太紀行を草す。僕の手稿を出すところは『東洋経済』のみである。小汀君も『日本産業経済』にのせるのを断った。（旅から一寸その旨を書いた）。恐らくは例の方面への遠慮だ。

金曜日に佐々木中佐の示した東亜方面の米軍勢力

は左の如し。

	陸兵力にて算う	飛行機数
アリーシャン方面	六〇	八〇〇
マーシャル等方面	三〇師団	一、〇〇〇
ニューギニア方面	一五師団	一、八〇〇
濠州	二〇	一、八〇〇
ビルマ、印度方面	四五	一、七〇〇
支那	三〇	

右の数字を示し、佐々木中佐は敵の飛行機が非常に優勢であることをいつて憂慮すべきことを説いた。また敵との航空損失について、一時は七対一ぐらいであったものが、今は三・某対一となつてゐるといつていた。

一、これは重大な矛盾を伴う。この数による敵の航空勢力は、東亜全域に亘つて六千八百台である。それは三月二十五、六日の米英空軍が、一日にドイツに出動した数にも足らぬものだ。これに対し、相手の数が多いというならば、日本の航空能力はそれよりグット以下ということになるのである。

二、対敵損勝率は、現在においてなお三対一である

ⁱ 同日の連続は底本のママ

という。そうすれば地の理を考えて、飛行機勢力は、先方の三分の一を以て事済むはずだ。それなのに前記の数があつても、不足するといふのだ。

三、日本の陸軍飛行機が、相手の三倍の優秀な戦果をあげるといふことは、技術的に、数字的に、腑に落ちかねる。

三月二十七日（月）

朝、土橋母娘来たる。山本清君に引合せんためなり。午前十時半頃、山本君も来たる。僕は東経の評議員会に出る。

東條首相などについても、巷間、種々な噂がある模様である。床屋での話だといふのを聞くと、東條は敵産の一万円ばかりするピアノを五十円で買ったとか。

東條に対する噂は、近頃あまりよくない由。街で肩をなでたりする人氣は永續せず。敵産を安く買い付けしたものの中に、大蔵省の役人や、内務省の役人等が沢山あるとのことだ。まるで無茶に安い由。今後、問題

になる機会があろう。

四月一日から郵便料あがる以外に、魚や食料は小包として一切受とらぬ旨発表された。北海道旅行は僕にはよかつた。

山本清君の話しでは、『毎日』の例の問題の執筆者は徴兵されたのは事実だが、それは恐らくは徴兵が、偶然そうした事になったのではないか、徴兵を刑罰的な意味で適応せるとは思えぬと。

三月二十八日（火）

正木呉君より端書あり――

「学兄の『転換期の日本』を読み、現日本の予言の適中に敬服いたして居ります。十五年前に書かれていたことを理解し得なかつた同胞の多かつたことを悲しむと共に、義務を果された学兄の御心境の明朗なることを羨しく存じて居ります。転換期に転換出来なかつたのは落第生であります」

正木君は『近きより』を出版、また「人生断章」は

寸鉄人を射る底の警句で満ちている。最も強い自由主義者の一人である。

正木君にいわれてその本を出して読む。一九二九年の渡米前に書いたもの。

中野正君来たる。独身生活に飽き、妻君を欲しているのである。

雨降る。畠によし。近頃、時を消すのに農業の本が一番面白し。一万坪ぐらいの農園を経営し、晴耕雨読の生活するのは悪くなし。『東洋経済』へ政治論を書く。

三月二十九日（水）

梅満開。

『毎日』に地方の別荘等を徴用せよとの投書あり。近頃は個人の所有権を取りあぐるのが当然のように考えている。

土橋のところに警察官七名来たり。土蔵に入つて品物を全部提供せよと命令した由。商品の私有を許さな

いのである。

三月三十日（木）

百々正雄君死す。四十二歳。惜しき人であつた。これぐらい米国の事を知つて、英文のうまい人はなかつた。午后お悔みに行く。帰りに東良三君を訪ぬ。

山本清君来たり、「僕にまかす」という。——結婚のことなり。——乗気ならず。世評は男の方がいいというのに。

三月三十一日（金）

午前中百姓。午后外務省に赴く。

ソ連と漁業本条約できたとのことである。その交換として北樺太の権利を返還したそうだ。

このソ連との条約について重臣のところに加瀬秘書官などが行つたが、誰も反対しなかつた由。

日、ソ関係について御前会議を三回も開き、衝突を回避する国策を決定していた。「日本においてこれほど

確乎たる国策はない」と加瀬秘書官はいつていた。

新聞にも、ドイツの関係もあるから、大きく取扱わない由。

ここから大きな問題——ソ連を仲介にしながら、米英を相手とする外交が展開して来れば、外交は上々である。

シグニフィカンス【significance 意義】は二つある。一つは国内に対してだ。今でも日露衝突を夢みている人が沢山ある。北海道でも、しばしばそれを聞かれた。第二は米英と一緒にいるソ連とアプローチメント【approachment 和製英語？確認は出来ず】ができたことだ。

四月一日（土）

小林氏の名前で東電史謝礼千円くれる。三宅君が催促したのである。我家の経済、収入不安定の上に、支出非常な速度で膨張。今後の事、見込みたらず。原稿料は全くなし。銀星も不振、——今までやってきたのだから、どうにかなろう程度の樂觀あるのみ。

銀座を通つてみる。半分近くは戸を閉し、どの食物屋の前を通つても百人前後に達する長蛇の列である。腹にたまらぬ飯を食うのにこの騒ぎだ。

『毎日』「雑記帳」四月二日 「銀座といへば「銀ブラ」が」

…「いまや戦時生産色」…「酒場やカフェーは次々に軍需会社の事務所と変り、」…」

穂積重遠博士の談——

ある男が、配給の石鹼を持つて風呂に行った。洗場の泥棒が多いことを聞いていたので、その石鹼を湯つ

ぽの傍に置いて警戒していた。突然、背中に熱い湯がかかった。フツと後ろを振りかえつて、いま一度正面を見ると、その石鹼がなくなっていた。——熱い湯と石鹼紛失と因果関係あるかどうかが問題だと、その男は考え込んでいる。

同男の話——

娘の嫁入先に女中をやつた。かの女は女中をかえしてしまふ。何故かと聞くと、先頃も入物に砂糖がついていて、それをなめようと楽しんでいて、女中がそれを洗つてしまつた。女中などはいない方がいいと。

長谷川如是閑氏曰く、實際我等の生活は、なめる生活だと。

桑木嚴翼博士のところには女中が居らず、老夫婦だけであると。長谷川如是閑氏は自分で御飯を焚いている。同居の妹が、ひょうそう、か何かが出来て働けないからである。同隣組十軒ばかりの家で、女中がいるところは一人もない由。

長谷川氏曰く七十歳にして始めて米を焚く。昨日は

紙で焚いていると、人が来て火が消え、またつけたら、まるで食えないものができた。ただ勉強ができないで困る。——穂積博士曰く最後まで「紙で食うんですね」

牧野英一博士曰く地方に疎開しようとも思うんだが、経験者のいうところでは、いろいろのこゝちを持ち込んで、とても五月蠅く、永住出来ないかも知れん。牧野博士はカーキ色の戦闘帽を被つて来た。外の帽子は非常に高く、これが安かつたから買つて来たんだが、これを被つているとあまり尊敬されんねと。

柳田国男氏曰く、近頃の道傍の話しが非常に面白い。そういうものを書留めて置きたいが、僕にはその根気がなくなつた。

米不足がどこでも問題になる。足らぬ話し。

本日から全面的に値段あがる——郵便、汽車、租税、その他何でもかでも。また汽車には警察からの許可証があることになる。昨日は、その結果三割の減少で「大成功」と新聞は書く。数が少くなりさえすれば成功だというのだ。

島田海相では部内の統制がとりかねるといわれている。東條の指導に従うことが不満であるのも一理由であらう。さらばとて、中央で東條と対抗するわけにも行かぬ。島田の苦しいところだ。

陸軍と海軍の感情的対立は、既にボーリング・ポイント【Boiling point 沸点】に達している。日本の前途はこれに表徴されるところが多い。

『読売』『紙弾』四月二日……「苗床の筵をめくつて苗諸を持つて行く奴がある」……「いま一貫匁の苗を失ふことは秋に一反の諸の收穫を失ふことだ、」

荒木大将の談——日本軍は手を広げすぎている。ピルマのインパール攻撃の如きは、貴重な弾丸を損失して無駄である。結局、前線はそのままとし、元寇の乱の如く、敵がたたら浜に押し寄せて来るのを待つて、竹槍を以て对手を叩き伏すべしと。

——前者はその通りだが、竹槍主義は依然たる旧調。

本心か、比喩か不明である。かつては、それがかれの本音であつた。今でも然らん。

ソ連軍、無人の野を行くが如し。ルーマニアのガリシア油田地帯戦場と化す。ドイツ余命長からず。

ある大工が来て、「一ヶ月千円ぐらいなくて食べるかい」といつていたそうだ（牧野博士の談）。それぐらい闇相場の横行である。

四月二日（日）（雨）

東洋経済の家族会あり。ただし僕は平川唯一君が電氣器具の修繕に来てくれる約ありたるため行かず。平河君という米国大学の文科学出身者が、日本の、しかも東京の電氣屋さんが修繕し得ないものを直してくれるのだ。冷蔵庫、ワッフルのアイロン、その他ことごとく然り。

形式主義の日本の教育と、考えることを教える教育との相違ここにあり。

米国の大学で学んだ青年達の真面目で、且礼儀正し

しく、恩義に厚いことは驚くべきだ。それは我家に出這入りする人々の示すところだ。そうした真面目な空気が米国大学にあるのだ。この点で日本は米国を馬鹿にしうるか。

四月三日（月）（晴）

『東経』に日ソ関係の原稿を書く。午后峠。天気よし。ただし朝夕寒く作物遅る。

近頃の野菜の配給は一人、一日一銭の由。一銭といえは葱一本にもならざらん。

我家への配給が三日分で十八銭払った。一日分六銭で、六人家内だから一人当り一銭である。里芋ともやしである由。

しかも一方、新聞は電車や汽車の客の混む事ばかりを攻撃して、少しでも客足が少いことを「自粛」だとか「好成績」とかいっている。日本の新聞記者は官庁のメガホンである。ここでも自からの頭脳を使うことを忘れている例がある。彼等自身が配給では絶対食え

ないことを知りながら。

葉山で配給だけで食っている人がある。感心なことと、ある栄養研究者が家族を尋ねて行つた。すると家族皆な「鳥目」になつていたそうだ。これはどうも実話らしい。

米軍の損害——総計一七三、二三九名と発表。

この四月一日から百円の月給とりが源泉課税を七円五十銭差引かれることになつた。九十二円五十銭で、家族五、六人の生活をしなければならぬものがザラにある。砂糖一貫目百二十円は安いという物価時代に。

戦争というものが何を意味するかを納得することは将来の日本に大切である。

日本人は戦争に信仰を有していた。日支事変以来、僕の周囲のインテリ層さえ、ことごとく戦争論者であつた。小汀利得君も、太田永福君もそうであつた。事実、これに心から反対したものは、石橋湛山、馬場恒吾両君ぐらいのものではなかつたかと思う。そうした日本人に対しては何よりの実物教育であらう。

四月四日（火）

奥田惣兵衛君（北海道、浦河）が、消防関係の指導者として宮様の御招きに預かつて上京した。その会の終りに、陸軍報道部の矢倉少佐¹というが演説したが、「清沢さんのいうところと同じであつた」と笠原に話した由。

「真珠湾を攻撃した時、米国という眠れる獅子を揺り動かしたと考えた。当時、僕は気狂いのようにいわれたものだ。この責任は我等が負わねばならぬ」と。こんなことをいう人が軍部の中にあるとは意外であつた。（後記、矢倉少佐は海軍であつた。道理で！）

汽車、電車は殺人的な混雑である。電車から出て来たら赤兎が死んでいたというような例は少くない。

『毎日新聞』の本日²の論説によるとイタリーの裏切りはユダヤ勢力の働いた結果だとある。国際関係においてユダヤ主義を持ち出す男を見ると、僕は頭から軽蔑

¹ 海軍には「矢倉」居ぬ？、底本では別人を挙げている。

する。しかも『毎日』という大新聞の主筆上原という人が、ユダヤ陰謀の一本鎗だとのことだ。

『毎日』社説 四月三日 …… 最初裏切りが行はれたのは、米英のユダヤ勢力がイタリヤのユダヤ勢力に働いた結果であるのだが、……』

今朝、本を一冊送ったがそれが郵送料五十銭、それから原稿を速達便で四十五銭である。百円の月給取りが圧倒的に多からう日本の支出勘定の一面。

東調布警察署から「日ソ漁業条約」に関する意見を聞きに来た。僕は最も喜ぶものの一つであり、成功だといった。ただしそれだけでは無意味で、有終の美をおさめなくてはならぬ。それには特高や憲兵が下らぬソ連虐めをしないことであるといってやった。もう一つは戦争終結にソ連を利用すれば、更にいいと附言した。

「東洋経済」へ日本文と英語のものを二十部ずつソ連

大使館へ注文^マに来た。これ売ってはいけないというのだそうだ。かつて当局の要求で売ることを中止したが、また最近新しく申込んで来た。当局に聞くと売るなどというのだそうだ。「ソ連大使館が手も足も出ないようにするんだ」といつているとの事。こうした末端部まで外交常識が浸み込むようになれば外交は出ない。

東條首相が、ある飛行工場へ突然訪問した。お土産に卵と酒肴料を持って行つた。かれは日本国民全体に酒肴料と卵が持つて行けるか。

『読売報知』四月三日〈大阪電話〉 …… 『職場死守生産完遂全産業人総躍起大会』に臨み、白鉢巻に職場戦士の決意を漲らせる三千の工場生産責任者並びに指導者をまへに約一時間にわたる「…」

「生産責任者」といえば年頃の紳士である

鈴木重三君来訪。昨年十月に交換船で帰つて来たの

だ。オンタリオ州その他のキャンプにインターンされて二十一ヶ月居ったとのことである。カナダ政府は東部に日本人の行くことを奨励し、東部のフレンチ・カナジアンも日本人を歓迎するという。つまり日本人を群衆的に生活させないのがその方針だ。

なによりも農業の本と記事が面白い。政府も新聞も空地利用を閣議で決定国策として奨励しながら、まだ馬鈴薯の種配給なく、ここ二三日中に植えなければ駄目である。ニラを植えよとのことで、僕もニラの種を八方に探したがない。お隣りの天明さんに貰って植えただけである。

宣伝だけして何もしない。それが官僚統制という。国民は愚劣だから、まだ分らない。依然として「私鉄の国営」をいい、統制強化をいつている。こんな形式主義の国民は他に多くありとは思えない。

四月五日（水）（晴）

パラオに敵機動部隊来襲。巡洋艦二隻を撃沈す。パ

ラオから東京まで一七二九哩である。

『読売』四月五日 戦局重大場面へ わが印度進攻に敵
焦慮：「見よ、現下印度戦線における皇軍の絶妙果敢な
進攻作戦を、」：敵はアジア唯一の兵站基地インド喪
失の予感に：「敵の対日進攻戦略はわが印度進攻作戦に
よつて重大なる影響を蒙りつつある事は明らかである。」
「然し他方印度に対するわが至妙の作戦が成功するにつ
れ」：「遠く太平洋の彼方、」：「飛行機を、兵器弾薬を、
食糧を大量に送り出すために」：」

これが代表的な書き方だ。一貫して「至妙なる策戦」といったことを書かないと承知しない。この人々は朝から晩まで、讃められていないと、一日が過ごせないのである。

印度作戦は、大きな政策から観ると、悲しむべき結果を生ずるは明瞭だ。仮にインパールをとつたらどうするのだ。それ以上進めず、さればとて退けぬ。戦線の釘づけなのである。そして犠牲は非常に多かるう。

新聞は「日本的給料」とか「皇国的勤労観」とかいふことを盛んにいつている。俸給制は米英的だから、日本的なものを創造せよというにあるらしい。日本的なものというのは封建主義だ。主人が雇人の生活を保証し、その代りに絶対の服従を強うることだ。彼等には明治の維新が何故に起らざるを得なかったかまるで分らない。またそんなことが分るような頭の持主は口が利けないのではあるが。

ドイツのゲッベルス宣伝相は、東部線戦は第二義的な重要性を有していないと発表した。東部戦線がグツと後方にあつたときに、勝敗を決する重要戦線であつたものが、今、ソ連軍がルーマニアに侵入し、ドイツ軍がハンガリアに行つてバルカンに戦局が及んでいる時、第二義的意義しかないというのだ。ドイツの論法も「日本的」である。

午前畠。はえずり胡瓜、ゴマ等をまく。天気よし。五百坪近くの島が狭隘に感ずる位、蒔きたいものあり。午后外務省に行く。上田教授論文を完成。高柳君よ

りも、ぎごちなし。晩、銀座裏で皆で夕飯を食う。誰も食えないと思つてゐるせいか、却つて混んでいなかった。但し飯は食えない。家に帰つてパンを食う。この辺国家的には不経済だ。

鉄道省は不親切極まる。もつとも予自身特にそうした経験を有したわけではないが、その混雑が増すに従つて、自己の責任を棚にあげ、全部を客側の責任にするのである。乗越しは過大な罰金か、帰つて切符を買いかえしめる等、まるで刑罰である。役人亡国である。

鉄道に査察制度を活用すべし、恐らくは最も非能率的に動いてゐると思う。

四月六日（木）

スマッツ [Jan C. Smuts, 1870-1950] の演説を読む。昨年十一月のものを外務省で貰つたのだ。

「二つの危険なことがある。オヴァ・シンプリファイケーション [oversimplification 過度の単純化] とスロガンに従うことだ」とある。日本においては二つとも短所である。

前者は「ユダヤ人の陰謀」といったことの流行にそれが見られ、後者は標語流行りで内容を検討せぬところにそれが当はまる。

スマッツの如き視野の広い政治家が英帝国に存在するのは羨ましい。かれは世界が英、米、露の三国に指導されるであろうことをいい、三国の内、米露が豊富な力を有するに對し英國が費い果した国家であつて、パートナーシップとして平等でない。そこで一方、西ヨーロッパの小国を英帝国内に包括すると同時に、英帝国の内容を整備せよというのがその意見の大要だ。

大東亜は将来、米、ソの二国の進出と、支那の覚醒が必然である。この事態に而して日本はこの三国のバランス・オブ・パワーを握らなくてはならぬ。

上田教授の談——支那、満州辺に行つてゐる日本の役人が、世界的問題、大きな問題について話し得ないことは特に目につく。單なる事務家だと。確かにそうだ。彼等にはそうした訓練がない。法律の条文をいじるだけだ。その訓練がないことが、日本の南洋方面で、短

い期間ではあるが失敗した大きな原因だ。

教育を總括的な立場から訓練することが必要だ。

英米では反対の意見者が戦時中重視される。英のクリップ、モリソン、シンウエル等総て然り。米国でもリンドバーグはフォード工場に在る。日本で所謂親英米論者——最初戦争に賛成しなかつたものを重要位置に起用したら、彼等はその態度は依然「米英的」だつたらうか。

しかし日本は異なる思想は絶対に受入れることができないのである。

中野正君来たる。

——。

加地幸一君より、吉田東祐著『日華問題の全面的解決のために』を送らる。斯かるリベラルな論者が、日本人の中にあるかと思われるほどだ。文章も旨い。支那人の間に信用ありとのことだが、左もあろう。近頃読んだものの内、最も優れた著作だ。随分遠慮して書いているが、とに角「これだけのものを出色とこ

ろに日本の対支政策の反省が見られる。

四月七日（金）（午後四時より雨）

インパールへ日本軍は進出しつつある。これは東條大將が參謀總長になつてから最初の大きな作戦だ。その作戦には、これによって印度が動揺し、反英運動が起る可能性を考慮に入れたもので、政治的な狙いを主としていよう。東條の見透しが正しいかどうか、この戦争の結果によつて明らかにされよう。

株式市場に関係ある人二人、外交問題に関し意見を聞きに来たる。日ソ新条約の意味が、矢張り問題になつてゐるのである。

一人は富山の人だ。百姓は今まで政府に欺されて来たが、この表作は自由に処分できると信じて働いてゐる。今回、また欺されればこれからは作らなくなろうと。株式市場などは、もう先を見通して、悲觀の峠は過ぎた形ちだが、ただ生活問題に面してるといふ。

今日の配給野菜は六人家族の我が家に五六銭だとい

う。一にぎりのもやしのみである。二三日前畠をやつていたら、妙齡の婦人が野菜を別けてくれないかといった。毎日の新聞は野菜のことばかりだ。ところが、その増産の奨励にかかわらず、馬鈴薯の種薯も、にらもいずれも種が配給されぬのである。官僚主義がいかに生産的なものであるかが、この一事でも分るであろう。しかしフレキシビリチーのない日本人は未だ覺ることが出来ぬ。何か行詰ると「統制の不足」に持つていつている——始終同じことを書くようだが。

四月八日（土）

昨夜の雨で若芽のびた感あり。

家の前の土地を借りた豆腐屋の主人とかが、家の木を材マツつてくれといつてきたのはいいが伐らなければコンクリの石垣を倒してしまふといった由。二十年も住んでゐる家にきて、まだ種も植えない畠に対し、屋敷の木を伐つてしまふという。こうした考え方が一般の日本人だ。それが、少くとも非常時意識である。予の

畠も日蔭になるが、隣りの家に、そんなことを注文したことはない。

地方で山の真中で炭や薪がない。なぜかという統制で押えて切らせず、焼かせないのである。これが統制である。生るべき生産の出口をふさぐ。

雨やまず。秋山高氏のために嶋中雄作君の長女結婚の件を話すため会見。嶋中君はフエボラブリー【favorably 好意的】な感じを持つ。

中央公論の四月号を読む。続ものの寺田稲次郎という人の「日本革新史論」というのは、大久保をひどくけなして西郷を讃美し、また暗殺者を讃美している。大隈を襲った来島恒喜や、森有礼を殺した行為などに對してである。また、征韓論をやつていれば条約改正は二十年早くできたといっている。

これ等の人々は国際関係がまるで分らない。また何故に、その偉い筈の西郷が失脚して、大久保が、とにかく最後まで中心になったかの大きな流れが分らない。こういう連中——右翼天下の世の中でこの重大時局が、

乗り切れるわけではない。

その中の「必勝日本と世界戦局」という座談会では帝大の矢部貞治教授はドイツが非常に有利であると主張している。ウクライナをとられ、八方ふさがりの現在、東大の先生がそういつているのだ。もつて一般を知るべし。その中で外務省の加瀬俊一君は流石に事情に通じている。

四月九日（日）

笠原一家昨日、形式上鵜の木に移り来たる。昨日は八の日で、今日は九なれば「苦」は面白からずとの意味に出ず。

雨降つて畠でぎず。今年は非常に寒く、一ヶ月にて馬鈴薯の芽出でず。今日、里芋を植えつけんとした予定狂う。

四月十日（月）

国際関係研究会の常務理事の任務を僕に押しつけらる。これは蠅山政道君がやっていたのを衆議院の仕事もあり辞意を表していたもの。外交史の研究を進めることを条件とし引受く。

東洋経済あたりで後から後からと徴用、徴兵せられ人間の数非常に少なくなつて困る由。京城の如きは一人も居らなくなつて山田君出張するとの事。しかもこの徴兵に対し、留守中月給を出し、また徴兵から帰つたもので社に落ちつくものなく、大概出て行つてしまふと。

イーデン辞職の噂あつたが、中止したという電報あり。ソ連に対するゼスチュアールのためならん。

ファッシストのチアノ前外相は死刑に処せられ、他の幹部も裁判中だ。ファッシストには「反対」の自由なし。大評議会において仮にムソリーニに反対したとて何の事かあらん。それが会議ではないか——少くとも民主主義国ではそういうだろう。

旅客輸送に關し『東洋経済』で論文を書いて、政府の施政を批判した。これに対し「当局者を批議するもの」といつて公式に注意があつた。こんなことをやつていで、何か注意されると「当局者攻撃」として圧迫するのである。官僚政治の特徴を現わすもの。

『東洋経済』に僕の出した「樺太、北海道へ」の紀行及び、「議員は矜持を持ち政府は議会の要望に答えよ」（僕の策）に対し、芦田均君より『東経』に讃めて投書して来た由。

蠅山君は營養食の事を研究しつつあり。石橋君も僕も、同じことを研究。蠅山君が研究的で組織的であることは敬服に値す。

四月十一日（火）

午后畠、里薯を植う。例年はお翁さんがやつてくれたのだが、本年は人手なく、豊やとなつやを督して家族だけで働く。堆肥を沢山やる。

ジャボニカスの原稿に着手したが、どうも書きにく

い。大東亜だけで仕切って、それに重要性を持たせることは僕の論理が許さない。支那、比島、マライ、ジャバ——どこも日本人の徳に、少しも服していないではないか。戦争中に剣を以て維持する「共栄圏」が、戦後どれだけ足跡を残すのだろうか。大東亜共栄圏は、日本を中心にして小国が自然に集まるところに生る。日本人にはそうした統治能力はない。現実が論理を決定する。

昼のラジオでドイツ軍オデッサ【黒海に面す港灣都市】を撤退した旨を知る。

四月十二日（水）

新聞がボツボツ不安を書いて来た。第一は鉄道の乗越し禁止に関し、また鉄道当局の不親切についてだ。『毎日新聞』は投書欄その他にそれを取りあげている。この点は僕も『東洋経済』に書いたところである。形式主義の一例——

「『毎日』雑記帳」四月十二日　：警察で旅行証明書を貰い、駅で並んで申告書を貰い、切符買いに並んだら午前で締め切る。二日がかりで買えない。」

今朝の『朝日』には、いろいろな問題を取りあげ、一括して取扱つてある。これ等の不平、不満或は現状発表は、従来は「非常時局」「戦時下」の名にかくれ、敢て発表しえなかつたものだ。また実際、外国に知れると悪影響を与えよう。しかし、もうそうした考慮にかまつて居れないほど、国民は不便を感じるのである。

教科書は出来ない、肥料は行かぬ、漁業用油の配給では出漁が数日しかできぬ、交通関係はいうまでもなし——それ等がようやく切迫して来たのである。戦争そのものの結果ではあるが、同時に無茶な徴用、徴兵、所謂重点主義等の経済関係のデリカッシーを知らざる政府のためにここに至つたのだ。

日本はいよいよ国内的に行きつまつて来た。これがどこにどう出るのが次の問題だ。

石橋君曰く東條首相はど、飽かれながら、その職に居る総理大臣が今まであつたらうかと。

午后外務省に赴く。市川泰次郎という領事逢いたしというので会見。河相達夫公使の下に居つた人である。世界の戦后案を研究中。一部寄贈さる。

高柳賢三君と上田君と論議す。予等の原稿を高柳君が監督統制する立場にあり。これでは駄目だ。僕は日ソ関係のことを書かんとするのに対し異論あり。

始め日ソ交渉に対し日本は北樺太の利権を四億円と評価して提出。これに対し先方もカウンター・クレームして三百万ルーブルと踏む。結局五百万円(?)に折れあう。それまで馬鹿にしていた佐藤大使俄然この交渉から高く評価されるに至つた由。そして外務省はさらに独ソ関係調訂に向つてゐるらしい。予は日ソ関係の調整、進んでは露に備えている軍隊の撤退までを主張しているが、大して賛成なし。日本人は政府の政策以外のことを考えるのが罪惡だと思つてゐる如し。これを考える人は右翼かないしは左翼で、これまた困つ

たもの。

晩飯を食わんと四人で銀座の周囲をくまなく歩いたが、とうとう食えず。一ヶ所では三十分ばかり列の中にあつたが途中で切られた。

四月十三日(木) 雨

朝、高柳君に、高柳委員会より脱会したしとの手紙を書く。そこへ同君より電話あり。先頃の僕の前稿が非常にいいから、次を書いてくれと。僕の脱会申し込みの理由の一には、何等の経済的報酬なき一事もあつた。しかし流石にこれは書かなかつた。日本人はなぜこれをいわないんだろう。

新聞はインパール陥落によつてインドと重慶が非常に苦悶したように書いてゐる。例によつて自己満足。

重臣と東條首相が十二日懇談した。従来、東條は質問封じのために各大臣を同伴したが今回は一人で出た。重臣連中は「戦争はどうだ」と質問した場合、「あなたはそんなことを聞いて何になさる」と反問される可能

性あり。その返事をあらかじめ用意しているということだった。東條には誰も手こずっているようである。

明治時代には重臣は、其の発言権を有していた。明治天皇の御信任を拝して、首相をも監督する地位にあつた。それがチェックス・エンド・バランスの役目をつとめた。然るに今重臣は全く並び大名で、首相に対する質問すらもできない有様だ。

東條が御信任を名として、首相、陸軍、軍需相、参謀総長と完全に独裁者となつてゐる。いろいろな問題と示唆がこの辺に見られる。

今日の野菜の割宛ては六錢であつた。それが六人家族に対する三日分なのである。一握りの菜、我家の一回分にも足りないという。それでもまだ東京の配給は悪くないともいわれる。

雨降る。梅雨の如く然り。気候は遅れたが、しかしさすがに季節だ、桜花咲き始む。満開は一週間ぐらい後ならん。

平川君の話しでは放送局は、まだ完全な第二、第三

放送準備がないようだ。空襲その他の際、対外短波があれば日本の健在を示し得るのだが、それが止まれば国内事情の混乱を推測されよう。それなのに第二予備局は愛宕山、第三は第一生命保険会社の地下室、それから信州小諸だと。しかも、ただそうだけで設備も何にもしていないとのことである。何人も責任を負わない官僚組織の結果である。朝日、毎日両新聞の如きは、かなり疎開準備を完成したらしい。これは責任者があるからだ。

官僚主義、統制主義の欠点は、日本における数年の試験によつて完全に明かにされた。予の一生を通し、この目前の試験が、予の確信を最後のなものとした。統制主義、官僚主義は日本を亡ぼす。

我家の貸屋の家賃が供託されていたが、それを払ひもどすために、家の者が二日行つて、数十個の印を押した。司法^{はんぶんよくれい}の繁文縟礼も、人智に絶する。

四月十四日（金）晴

ゴルフのコンペション。何ヶ月振りでクラブを握る。惨敗す。ゴルフ場はことごとく取りあげられ、小金井ぐらいが唯一の残存だ。しかもこれを利用するというよりも、取りつぶすためだ。ブルジョア遊戯に対する反感である。出来あがつているものを取りあげる事、嫉妬、不平、占領主義それ等が「日本精神」なるものの特徴だ。

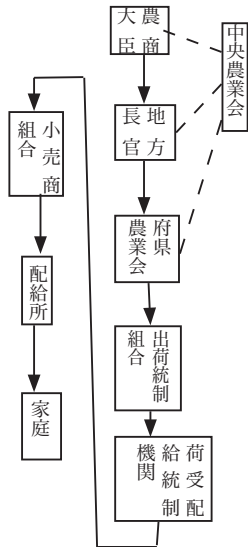
四月十五日(土) 晴

また閣議で配給機構が変わった。閣議というのは、切符や、魚の小売りのことばかり相談しているところらしい。とにかく、役人は外に用がないのと、また統制の面白さに図ばかりひいている。左翼全盛の頃からの流行だ。遺物だ。

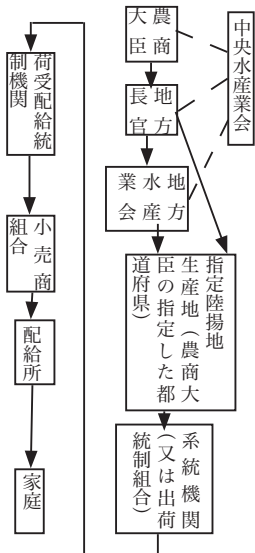
昨日は帝国銀行と十五銀行、安田と昭和、第三を合併した。資本国営の前提だ。しかし三井と第一の合併も、まだシツクリ行つて居らず、弊害却つて百出の有様だ。健全な統制のためには一応待つて第二段に進むべきで

はないか。ここにも「統制業者」の道楽がある。

「青果物の出荷配給系統」



「魚類の出荷配給系統」



小汀利得は常にいう。役人という奴は、どうしたら国をつぶすことができるかと、そればかり苦労している。奇警な言だが真理あり。

今、悲観論をやっている連中が、真珠湾攻撃当時は、あの一撃で米国が屈すると考えていた連中だ。三宅晴輝の如きもその一人で、僕にひどく食ってかかったものだ。木曜会においては東京日々新聞の西野入君は、得々として戦争が『東日』（毎日）によつて指導、勃発したものであることを演説したものである。

法博、渡辺鍬蔵が流言による海軍刑法違反の容疑で十四日起訴された。大阪で話した内容が悪かったとの事。渡辺君は大胆な言説をなしていた人である。

業者は統制関係法律、命令を読んで知るだけでも大変だ。それを知った頃は、また新しいものが出るのだ。

四月十六日（日）

今日、午前中は皆で畠。土を隣家から入れたのを整理。農園働きであった。天気の良い久し振りの日曜。

——見合いの結果を断り来る。こうなると却って都合がいい。例の英文のための原稿を書く。銀星の連中来る。

四月十七日（月）（晴）

東洋経済に行く。石橋君は栃木県に行つて在らず。

四月十八日（火）

今日も午前中畠をやる。紅葉の植えかえなり。沢山ありすぎて処置に困る。植木は知らぬ間に大きくなるものだ。

軽井沢にも昨年植えたが、本年も植えるつもり。

午後ジャポニカスの原稿を終う。スマツツの演説を引用し欧州のパワー・ポリチックスの重圧が、東亜共栄圏を必要ならしめるという論旨だ。大東亜共栄圏には、それ以外の議論は困難だ。

「今年もヒマを蒔きましょう」と宣伝を始めた。国民は一回や二回は宣伝に乗る。しかしそのヒマ【ヒマシ脂

を採る唐胡麻であろう」が、折角作つても、少しも回収

されない事実を経験した後は、毎年やるものではない。本年のヒマはおそらく大減収しよう。

新聞の報道では無理に疎開させた指定地の空屋は、まだそのままになっているそうだ。官僚政治の好模範。

桜満開。但し馬鈴薯は一ヶ月と一週間にしてまだ出でず。

南瓜と不斷草の種配給。馬鈴薯はとうとう来ず。種を沢山要るところも、要らぬところも同じ分量だ。そこに非常な浪費がある。統御経済、画一主義の浪費と、自由経済主義の屈伸性のある所以。

「何が何でも南瓜を作れ」とのポスターをはる。家の英子曰く「サア南瓜を作りましょう」といつたらどうですかと。小さなことを全国的に宣伝する結果、一方に偏するのはやむを得ず。ことに下らぬことまで閣議の決定による結果、自由裁量の範囲はますます狭めらる。

四月十九日（水）

相川という愛媛県知事厚生省次官へ。こう始終變つてばかりいて成績があがるものか。一つの問題に通曉するのに一生かかるはずではないか。

高柳賢三君と共に銀座裏の日本食屋に行く。腰掛る場処が、他にあいたのでそこへ移った。二、三分後にフト氣がついて、椅子の上に置いた帽子を見るとそれがない。とられたのである。新しい鳥打ち帽子であつた。紳士顔した男がとつたのである。日本は泥棒国となつた。「神国」である国は、しかし泥棒であつても差し支えないのである。

かつての武田春子——今の太木春子が急逝したとの報を得た。雨の中を告別式に行つた。なんでも疎開先の栃木県の田沼で、釣べに足をとられて変死したのだそうである。母の早子さんが可愛そうだ。天地に二人の仲であるのに。太木君は、詩人大木の弟である。

泥棒は常時の姿となつた。今後ますますひどくなるであらう。——

ああ。

四月二十日（木）

『東洋経済』に書いた僕の「日ソ関係の調整」の社論に警視庁から注意があつた。編輯者が呼び出されて警告されたところによると――

一、今回の条約（漁業条約五ヶ年延長と北樺太利権の返還）が、日本の譲歩だというようなことを書いてはいけぬ。それは国民の感情を刺激するものである。

二、今回の新協定が成功で「慶賀する」というようなことを書いてはいけぬ。それはドイツを刺激するからである。

三、北樺太の利権が尼港事件の結果だというようなことを書いてはいけぬ。それは国民に、いま一度、当時を想起させ、その関連において問題を考えさせるからだ。すなわち歴史は書いてはいけぬのだ。

それならば何を書いていいかといえ、これによつて日ソ関係が明朗化しただけでは書いていいと。

これが大体、今の検閲及び言論統制のいき方を説明している。予の書いたものについては「嚴重なる警告」――少しいくと発行禁止程度のものが待っているのである。

床屋に行つての話。東京に八千何百の床屋があつたが、既に八百軒ばかり閉めた。

久し振りで銀座界限を歩くと、どこもここも店を閉めて、字義なりに齒の抜けたようだ。

帝国ホテルで秋山高、嶋中雄作両氏と会食。秋山氏は帝国ホテルの一室を借りた。十名のお客としてだ。然るに事実三名だ。――会談する場処がないので、三人で十名分の食費と室代を払つたのである。恐らく七、八十円であろう。「料理屋に行くよりは安いですよ」と。秋山氏の次男と、嶋中氏の長女との結婚話しの内相談。

四月二十一日（金）

新聞は疎開のことを毎日毎日書いている。疎開をするのにトラックがなく、汽車が不自由、疎開先の連絡もやれぬ——足を縛って置いて、それ飛べ、なぜ飛べぬかというのが現在の政治だ。

秋山氏の話しに、出入りする職工が荻窪の方から来るが、同方面では「東條首相」などというものはない。なぜそんなに人氣が悪いのかと聞くと「配給が悪いからです」と。

ラジオや新聞には、戦争観につき——たとえば米国の戦力につき「樂觀も悲觀も禁物である」といった表現が流行している。なにも考えるなということなのだろう。

警視庁の指示要項の中に左の如きものがある。

（一）戦後機構問題の議論及び米英側の紹介は不可

（二）米英の対日条件の紹介は不可、ただしこれをなす場合は戦争熱を増すような方向なれば可

ユダヤ主義、ユダヤ思想で何でも片づけるのが近頃

の傾向だが、科学者界にもその傾向がある。

『朝日』四月二十一日 ……「科学謀略といふものがある。」

……栄養学で国民を動揺させること、戦争がすまないと分らんこと、「ユダヤ思想はこのやうに深長廣大である。」

これは頭の俊秀なドイツ人でさへ前大戦には、まんまと一杯食はされて敗戦の後に気がついた」……だから「ユダヤ系の医者一万余百名を国外に放逐し、」……」

この論文は海軍々医中將——呉海軍病院長福井信三

『改造』を久し振りで読む。蘇峰の巻頭論文あり。時局を樂觀も、悲觀もせず、正觀するという。それから日本の近状を「不親切」と「形式主義」とで攻撃している。この人の頭には二つの日本が画然と存在している。神国日本と、墮落日本とだ。そして日本が墮落したのは西洋個人主義の影響だと考えているのである。かれの望むが如く戦争に入つて、日本主義が全盛になつて、何故によくならないのか！

『改造』の顔触れは野村重信、斎藤忠といった言論報

国会の連中だけになった。かれ等が、他を一切排斥するのに成功したのである。軍部の後援を得て。

中学校の下級生のような議論が大手を振っている。

「不敬罪」は我国に幾つもある。(一) 皇室、(二) 東條首相、(三) 軍部、(四) 徳富蘇峰——これ等については、一切批評は許されない。

午后国際関係研究会のことで蠅山君と会見、事務所を決定。そこへ『朝日』の記者来たる。東條と重臣の会議で、東條は一時間半ばかり演説した由。重臣の側で動いているのは阿部信行と岡田啓介である。東條は今のところ止めそうもないとの事。

四月二十二日(土)

「日本の給与」というものが盛んに論ぜられて来ているが、それは左のようなものだそうだ。

『読売』四月二十二日：「資本主義的賃金支払方法を百八十度転換して扶養家族を含めた当該勤労者の生活保

証を目標とする定額制賃金支払方式を根幹とするものである」

つまり能率などはどうでも一定額は与えるのである。これは「日本的」とはいわなくても「ソ連的」といつてもいいかもしれない。もつとも「給与」は軍需会社のこと一般人は元より与からぬ。

社会は急に転換しつつある。それは共產主義的な徴候をあらゆる方面で出して来ている。

太田永福君の話である。富士アイスは営業がやれない。お昼少しばかり商売をするだけで、雇人は午后二時から休みである。一階を雑炊食堂のために、ただ提供せよと警察の背景をもつて強制して来る。大変な損失であるが、本年一杯だけは損失を押しやってみようと。

一方、先頃増資して始めた千葉県牧場の、千葉県における牧場統制のために取りあげられてしまうそうである。そうすると富士アイスは最早やって行けない

わけだ。僕の場合、富士アイスからの収入が、かなり重要な部分を占めているのだが、前途不安である。銀星の収入も今後は期待すべからず。平和産業に関係したものは、今後は食つてもいけないのである。

千葉県の牧場経営の場合は、ほとんど県の直接経営みたようになるわけだ。ここにもソ連的「国营」の一現象を見る。だが異なるところは、大資本家は依然としていいことである。他のものを併合し、自己はそれ等を自由にする。無論、大資本家も現状を好むものではない。しかし役人を、あやつるものは資本家だといえる。——マルクス主義のいうように資本家は、それほど力のあるのではなく、役人が引き廻しているのだ。

「本社」というものが各県にできる。これは木材を切る会社だが、先頃立木は自由に切つてもいいという命令が出た。鉄道沿線の山は坊主になるであろう。これも「国营」の方向。

革命はその基本において進行しつつある。

四月二十三日（日）

一日、百姓す。南京豆を植え終う。馬鈴薯の芽出^いず。枝豆も頭をもたぐ。

インパール攻撃は、最初は秘密にし、インド国境突破も新聞社に対しても押えたものである。ところがその国境突破の反響が大分よく、西アジアの方からもそうしたニュースがあつたというので、今度は東條自身が乗気になつて、陣頭にたつて宣伝を命令しているとのことである。（朝日記者談）知識を持たず、目前の事象で動く東條らしい話した。

気がついてみればラジオのニュースでは、まずインパールの戦況放送をやり、つぎに皇室関係のニュースを放送しいる。

四月二十四日（月）

泥棒流行りだが、農家が荒される。「世界一の泥棒国」は戦時下の日本に与えらるる尊称だ。

『毎日』四月二十四日 近郊農家の畑から盗むのあるが、空き地利用の家庭菜園も盗まれる、：板橋区であつた例：「防火用水桶の蓋やドブ板を盗むのもひどいが、」：「

こんなことは少しも珍らしくない。恐らく社員あたりの実験だろう。

清明、田舎から帰つて来る。田舎では「いつ戦争がすむんだや」と盛んに聞く由。あるラバウルから帰つた兵隊さんの話しに、敵の飛行機に対し、当方は全然なく、地上から打つただけだ。しかも食料は缶詰と、多少の野菜を食っているだけだとのことである。そんなことを地方出身の兵隊が話すのだから、戦況は却つて田舎の方に知れ、そこにまた不安も生れるのである。

医者の話——徴兵立合検査官だが、適齢者の九八％までとれとの命令だ。僕等から見れば、こんな身体は、とても働けない、家にいればそれでも多少とも増産に役立つ。しかるに徴兵された後、病気になるのは必然

だが、そのための費用が一ヶ年一千元は要り、この病院費が何億円だそうである。命令だから仕方がないが何をやっているか我々には分らないよ、と。

ジャポニカスとして書いたもの。重光外相が見て、これはいいから、比島特派大使アキノのいる間に英字紙に出したいといったとのことで、外務省に行く。それから東洋経済に赴く。蛸山君、鮎沢君も在り。

続いて国際関係研究会総会開催。僕の常務理事正式に決定。深井英五氏「異議なし」という。それから続いて有田八郎氏の外交に関する想い出話をなし。有田氏は頭が冴えた方にあらざれども、極めてシンセアー【sincere 正直】である。過去の事実に関し、全く何等の隠すところなく語る。

張作霖の爆死事件については田中首相は全然知らなかった。寧ろ愕然として驚き失望した。というのは支那本部は蒋介石、満州は張作霖にやらせるつもりであつた。芳沢公使が説いて張を奉天に帰したが、爆死したのはその時であつた。だから田中が計画的にやつたよ

うに考えたものがあつたがそうではなかった。参謀本部の第二部長は松井石根、陸軍省の軍務局長は阿部信行であつたが、彼等は知らなかった。出先のものの計画である。

防共協定は有田が武者小路と話してやらしたものだ。軍部が交渉をしていたが、それとは異なる角度から交渉したものであろう。最初、日独共に英国をその中にふくませる目的であつた。リベンが英国に大使として行つたのもそのためだ。しかしリベンは失敗して排英的になつた。平沼内閣の時に防共協定強化問題で協議したが、それは目標を英国とすることに對し、有田等が反対したのであつた。

日ソ中立条約は有田の当時、提案したがソ連がきかなかつた。ソ連がこれを諾したのはドイツの態度が急変して、日本と手を握ることの必要を感じたからである。(速記をとり保存)

終つて石橋氏にすぎ焼の御馳走になる。

四月二十五日(火)

雨降る。本年の雨続きは、作物には非常に悪かるべく心配だ。

『東洋経済』の社論(大西洋憲章批判)を書く。

僕の『東洋経済』に書いた日ソ国交問題(新協定)について、出淵勝次氏より石橋君に讀めて来た由。

政府検閲官が、いけないと注意したところは「慶賀する」といったような文字だそうだ。これは代表的な検閲態度である。二、三の文字を引きぬいて、問題にするのが日本人の癖だ。彼等はついに全体を把握する力がない。

形式的な問題といえば、近代のキリスト教主義の学校に、まつわる悲劇にはそうしたものが非常に多い。同志社大学の湯浅総長の辞職は勅語の読み違えといつたことであり、立教大学の木村校長も、勅語を読む時に、壇の中段でしたとか何とかいったようなことであり、先頃の青山学院の笹森院長の事件も、愛国心に結びつけたものであつた。それから立教大学の図書部長

は、カーネギー財団と何等かの関係があったが、官憲のひどい迫害があつて、自殺したそうだ。

四月二十六日（水）

『毎日』『建設』四月二十六日 農村の声：公価が安くやつて行けぬ、闇に出せば十倍以上になる、実情を訴え出たら当局から睨まれる：「工業労働者の賃金は一日米一斗代以上になつてゐるさうだが、百姓が米一升收穫するのは容易な仕事ではない。農家で他の働きをすれば、男は一日三円から五円、女でも二円五十銭は必ず取れるので、離農者や「職工農家」がふえ……」

問題は公定相場が安いということではない。その安いということという「当局から睨まれる」という点にある。即ち権力主義の政治と経済政策だ。これで増えるわけではない。

外務省に行く。僕の書いた「ジャポニカス」が昨日から『タイムス』に出ている。「中々いい」と奈良君そ

の他がいう。履歴書を出したから囑託になるだろう。

二十六日会の主賓、小林一三氏来ず、同人だけでやる。馬場恒吾氏暫らく見ぬ間に老いたり。

佐々木茂索曰く、昨日、血色のいい男が家に来て「何か食うものをくれ」といったという。「何もないよ」というと「そうですか」といつてそのまま行つてしまつたという。

三宅晴輝君曰く、先頃、新橋駅で大きな荷物を持つて歩いていたら「今朝から何も食わない、食うものをくれませんか」といったという。かれまた曰く「洗濯屋の注文取りが、ある家に来て女中に米を一升五円で売ってくれ」という。女中は主人に黙つて売った。二三回同じ事を繰返すと、女中はさすがに発見されるを恐れて断つた。すると「俺がいえばお前も引つ張られるのだ」といつて、おどかして命に従わせた。その内、この男が検挙され主婦と女中が警察に呼び出されて叱られた。

鶴見祐輔君曰く、病氣になつたので、貯蔵の白米を

食おうとするとない。女中に聞くと「御飯が足りない
ので二人で食いました」と。

佐々木君は伊東に疎開しているが、佐々木君と女中
だけが移動証明をとった。妻君が伊東に行くと妻君の
お飯が少ない。も少しくれというところ「旦那様と私だけ
の食料だけしかとりませんから」というのだそうだ。
山内氏のところで暇をとる女中が、砂糖鉢から勝手に
砂糖を「自分の配給だから」と持って行つたと同じ心
理である。

警察官に乗車証明権を与えたので、これを勝手に利
用するものが多いらしい。薄給の警察官が如何に墮落
するかは想像がつく。

今夜の会は米と炭を持つて行つてスッポン料理を
食つたのだ。近頃はどこも御飯を出す場処無し。

四月二十七日（木）

島をやる。ほとんど空閑地のないまで、隅から隅ま
でものを植えた。

ハルが四月九日に演説したものの中に、日本が「盗
んだ領土の取りもどし、再び隣国を攻撃し得ぬように
する事、支那の領土を支那に返し、朝鮮に独立を与える」
と言つてある。

チャーチルが三月二十六日になした演説の中には「下
等な奇襲のために米国の隠れた力を發揮させた日本の
指導階級は何という馬鹿者だろう」と言っている。ま
た一ヶ年以前に予算したより早くすむだろうといい、
戦後の住宅問題を約束している。彼は戦勝のつもりで
すでに戦後問題に乗り出したのだ。

四月二十八日（金）

婦人の服装が、一割は紋平姿、一割六分とかは国民服、
一割ぐらゐはズボンといった具合になつたそうだ。朝
のラジオの話。つまり銀座街頭を通る婦人の半分は戦
時服装だ。その服装が、極めて怪奇複雑なもので、要
するに何でもいいといったもの。無統一で醜悪だ。こ
らに現代日本の表現があらう。

鈴木文四郎君の話では大阪あたりの富田屋とか、最高級の料理屋に「海軍クラブ」といった看板をかかげたそうだ。芸者などもそのまま利用するのだろう。海軍は人気があるのにこうした事をやるのは不利だと識者はいつている由。

石橋湛山君の話——栃木県の高級料理屋は軍事会社——中島飛行所に買収され、芸者はそこに働いている。つまり高級会社員は、税金を払わずして、紋平姿の芸者を独占しているわけだ。

新橋あたりの高級待合が、ある者は労働者——産業戦士といつて居り、労働者とか職工とかいうものはない。なくなった——の合宿所になったが、あるものは軍需会社の「クラブ」になり、同じく芸者と料理屋を独占するに至っている。

どこに行っても官吏は、食物には事欠かず、そうした機関に割込むことができる。ある人曰く、丁度ロシアが崩れ落ちる以前が、こうしたモラルだったと。

戦争責任者である末次大將は涼しい顔で、依然とし

て「会長」などつとめ——中央同胞会の会長になった——涼しい顔をしている。

ニューギニアのホランデア（？）の両面に敵上陸した由。敵の放送では日本軍全部逃げ捕虜二十何名とか、また食糧を沢山占領した由——但し、まだ発表されぬ。

兵隊が逃げたのは「新しい指令」によるか、それとも現地の独主的処置によるか。僕はかつて玉碎主義を最初に反省し、変更するものは軍人だといった。彼等自身が最も被害者であるからだ。今回のような事態は今後も必らず沢山現われ、そこから、少なくともこの点の封建主義的思想は破綻すると思う。

樺太新報の社長遠藤という人は、また他の土木会社等をやっているが、汽車中でこんな話をしていた。「二年ばかりの間、私は軍と官の言う通りをやつて来た、その結果八十万円を損した。これ以上はどうにも出来ない」と。個人の損益勘定を全く無視するのが官僚統制だ。ニューギニア北部アイタベ（アイタペ？）及びホーランディア、捕虜は居ても壊滅だったので「玉碎」に近い？

制の特徴だ。その結果が、この行詰りである。

先頃、我家で家賃の供託金をとるのに裁判所に三日間足を運び、代書人をして七八通の願書を書かせ、それでようやく二百円ばかりをとった。登記をするのにも、どうしても二、三日はかかる。これが官僚形式主義の現状だ。

富士アイス重役会あり。教文館食堂だけでも一日、どうしても八百円なくてはやって行けぬのに、今は三百円しか収入がない。二百人の使用人を使って行くことはできぬわけである。軍需工場の手間賃かせぎでもしようというのが狙いである。

山王ホテルの客は、一時の超満員が四割五分の減少だそうだ。これまた無配当である。そればかりでなく中谷君の留守に、経営上の不行届もあって、赤字である由。斯くて生活の不安はようやく目前に迫って来た。

四月二十九日（土）

上海における物価は、上海商工会議所調査によると

——昨年十一月の生活費は独身者二千百六十一元九角、三人家族で三千九百五十四元——円と元とはバーである。本年になって物価があがったから、本年一、二月において独身で二千八百円。三人家族で五千円内外。ところが収入は官吏は本俸の五、六倍見当だから二百円のもの千百円。である。二百円というと高級俸給者だ。これを如何にして辻褄を合せうる？

国内の物価インフレも同傾向にあり。砂糖は一貫目百五十円で売手なし。電波機製造業の七尾氏の話では、軍需工場をもつてして坪当り一千円の建築費かかる由。工場では公然陸軍監督官に「闇」でないものは何にもありませんといっている。しかし現在では、この間をやつても成績をあげることを敏腕家だといわれるようになった。

つまり「闇」は最早「闇」ではなくなったのだ。経済原則を乗りこえた統制と干渉が「公定」の方に標準が動かずして、「闇」が普通になったのだ。犯罪は最早犯罪でなくなりつつある。

ガソリンは一ガロン四十円ぐらいだという。総ては二、三十倍の値段になっている。しかもあがる率は極めて急激だ。

独裁主義においては「反対」は死刑である。チアノが殺されたる如きがその一例である。その上にムソリーニとチアノは婿と舅の間柄だ。

「ジャポニカス」のため比島と日本と米国の関係を書き始む。

四月三十日（日）

日本はこの興亡の大戦争を始むるのに幾人が知り、指導し、考え、交渉に当つたのだらう。おそらく数十人を出でまい。秘密主義、官僚主義、指導者原理というようなものがいかに危険であるかがこれでも分る。

来るべき組織においては言論の自由は絶対に確保しなくてはならぬ。また議員選挙の無干渉も主義として明定しなくてはならぬ。官吏はその責任を民衆に負うのでなくては行政は改善出来ぬ。

ロンドンの『エコノミスト』はチャーチルが国民に計らずして、大西洋憲章、ソ連との約束、その他をなしたことを責め、条約の遂行は結局国民の協力によるのであるから、国民に計らずしてそれは持ちこたえられぬと論じた旨『日本タイムス』に見ゆ。我国における弱味は、将来、この戦争が国民の明白な協力を得ずして、始められたという点に現れよう。もつともこの国民は、事実戦争を欲したのであるが。

この時代の特徴は精神主義の魔力だ。米国の物實力について知らぬ者はなかった。しかしこの国は「自由主義」「個人主義」で直ちに内部から崩壊すべく、その反対に日本は日本精神があつて、数字では現わし得ない奇跡をなし得ると考えた。それが戦争の大きな動機だ。

今日も畠をなす。葱の植えかえ。

五月一日（月）

「東経」評議員会に行く。「年表」の資料篇から印刷所に渡すというので、右をまず出すため一応見直す。伊藤君が整理してくれている。適任だ。

蟬山君も評議員会に出席。石橋君は、無暗に徴用を沢山とつて、どの工場も人間が多過ぎて遊んでいる。ここ半年ぐらい徴用を一切打ち切れと大蔵省で主張し、大蔵省の役人も賛成しているという。

晩に「国民学術協会」理事会あり。この会は我國の最高の学者を網羅している会だ。然るに誰に聞いても「学問」なんてものは実につまらなく見えるといっている。今夜の集會者は桑木嚴翼、穂積重遠、牧野英一、高橋誠一郎、長谷川如是閑、正宗白鳥、僕等である。昔しから戦争は「文化」を重んずるに至らしめなかったのは事実だが、しかしナポレオンでも、カイゼルでも、一面これに充分な敬意を払ったのは事実だ。日本の指導者は「学問」などというものの価値を全く解しない。

無学の指導者と、局部しか見えない官僚とのコンビから何が生れる！

その会での話——練馬^{ねりま}あたりで、馬鈴薯を植えた種がドシドシ盗まれる。先頃も盗まれた後に二円を状袋に入れて残してあったという。また、ある百姓のところに二人の自転車乗りの青年が行つて、知人が病氣だから是非馬鈴薯を売ってくれという。七八貫目出すと、もつとくれといわれるので、地下室に梯子をかけてとりに下りて行くと、この二人の青年は上からの梯子をとり去つてドンドン逃げてしまった。家族が野良から帰つて見ると親父がいけない。声をかけつけて行つてみると地下室にいるのを発見したということである。

欧州の第二戦線——大陸上陸が切迫したように伝えられ、欧州からのニュースはそれで一杯だ。

五月二日（火）

『東経』のために第二戦線問題を書く。三浦半島の青木萬助君來たる。土地の管理者だ。同地方にはその後、

家も別荘もできないという。土地の値上りも比較的少ないそうだ。

島をやる。いんげんをまく。五百坪の土地——僕の手でやっている三百坪の土地には、もう野菜物で一杯だ。枝豆やいんげん芽^い出ず。馬鈴薯に追肥をやつて中耕。生産することが楽しみである。「土地」が、こう誘惑するものとは思わなかった。将来、三四町歩を持つて晴耕雨読をなすことは確かに望ましいことだ——それまで生命あらば。近頃は生命の限度を考える。「早く仕事をしてしまわねば」といった焦慮がある。

五月三日（水）

外務省に赴く。晚一緒に飯を食う。ジャボニカスを高柳君が「ハルの外交政策」を書く。中々上手だ。

五月四日（木）

島をやる。今年はどうもこしは早期育成に失敗す。大井町の店で買った種は、いずれも駄目だ。種屋は信

用が大切である。

比島の問題について書く。

五月五日（金）

朝の間、雨降る。すでに梅の実少し大きくなり、苺も青き実をつく。軽井沢から帰る頃は食べ頃ならん。

外務省に行つて「年表」に入るべき大公使表を頼み、それから経済クラブの講演を聞く。俘虜監督官、小田島薫という大佐でかつて日本クラブで聞いたことがある。

フィリッピン人は軽蔑すべき国民だ。米国人の悪い方ばかりとつてゐる。ある汽車で比島人、米国人俘虜、我軍隊の三つを分乗させた。ある停車場に停ると比島婦人の売子が、米国人俘虜のところに全部の品物を投げ込んだ。また女達が米人を大騒ぎで歓迎し、比島人は振りむきもしない。また、ある町に三人の米人が密かに入り込んだが、比島婦人がそこに宿りに行つた。なぜかと後に捕えて聞くと「米人との子供を生むと神

の子が生れる」といったという。

支那においても、比島においても、米国人の有難がれること限りなし。その正比例に日本人の嫌われること限りなし。顧むべきだ。

小田島大佐の話——比島でダイス中佐というが逃げた。それが米国に帰って、日本軍が、ひどい事をしたという宣伝をした。これが米国に大反響を与えた。そのため公債などは直ぐ売れるようになった。俘虜は非常によく働く。非常に計画的だ。仕事の選り好みはない。先頃、新潟の俘虜収容所がつぶれて十数人死んだ。俘虜の死亡率は十何パーセントであつて、營養不足がその一原因である。

小田島大佐は「日本人の欠点は」といったような話し方をする。軍人であつても、外国人と接する機会を持つければそれだけ異うのである。要するに英米人が、日本人より遙かに優秀だという結論だ。珍らしいことである。

トマトを三十本計り買つて来て植う。

「竹槍」を日本だけでなくビルマに行つてもやつている。スパイ、竹槍——日本的である。

『毎日』五月六日 スパイ狩りに竹槍隊 ビルマ政府布告
〈ラングーン特電四日発〉：「空からの敵スパイ潜入に
備へて」：

学生（学徒といつてゐる）は労働に駆り出されている。大学生が土木工事の土を運んだり、物を積下したりしているのである。閣議でその要項が決定したが、学科は一週間六時間以上、毎日の勤務は十時間が原則といった具合。外務省の人事課長が話していたが、高文試験の成績が非常に悪いという。学問とか将来とかいうものを考えないのが今更ならぬ戦時の日本の特徴だ。

五月六日（土）

ジャポニカスの「米国の比律賓対策」といったもの
三回（三十枚）を書き終う。

五月七日（日）

軽井沢に来たる。汽車は案外すぎだ。何年振りのゆるやかさだろう。そういえば東海道あたりを走っている汽車はガラ空きだ。鉄道関係役人はこれを誇っている。これが役人的考えの代表的なもので、そのためにどれだけいわゆる戦力増強が疎害^{そがい}されているかに気がつかないのだ。

「国民のために政治を行う」という考え方にならなければ行政はよくならない。しかしそれは封建主義的な日本人には極めてむづかしいことだ。現在のインスチテューションと教育にまで遡^{さかのぼ}るばなくてはならぬ。

明治の功臣達が何故に欧化したか。彼等は武士として攘夷主義者の先達ではなかったか。鹿鳴館事件の井上馨の如きは、最初はその最も然るものであった。明治の功臣は、大東亜戦争の指導者達と異つて、考え方に屈伸性があつたのだ。日本を偉大にするためには常に優れたものに従つたのだ。

昭和十九年五月

一昨日、古賀峰一大将殉死したとの報あり。かつて一面の識あるだけに感慨無量だ。少しも異議はないけれども、「戦勝」の功なくして元帥の昇叙はどういうわけだろう。気がついてみれば誰もかれもそうである。武官の昇進は「年順」か、然らざれば「誠忠」に対してか、ないしは「死」に対して行われるのである。

軽井沢には風強し。ただし予想以上に温かし。鶯や鳥の声を久し振りに聞く。埼玉県は若芽^{うすめ}、碓氷^{うすい}を越すと、落葉樹が僅かに芽出しかけたにすぎず。

汽車中、相馬黒光女史の『穂高原』を読む。郷里のこと極めて面白し。

五月八日（月）

山荘は思つたほど荒れて居らず。待ち望んだこぶしの花は本年は咲かず。後に蠟山君に聞けばこぶしの咲かぬ年はよくないとのことである。

庭先を掘つて、かぼちなどを植ゆ。物置のこもや縄が沢山盗まれたに顧みて、願わくは隣の百姓連よ農

品を盗み去るなかれ。

蠋山君夫妻昨夜来たりと尋ねくる。

五月九日（火）

庭の花壇をつくる。昼食后、外の長椅子にて寝る。

軽井沢ならではない悠長さである。

晩、約によって蠋山君の家で夕飯の御馳走になる。

午后九時半頃まで話す。雅子さんに対する嶋中鵬二君のラヴ・レターなどの話しあり。雅子さんが中々確かりしているらしいのに驚ろく。

相馬黒光女史の『穂高高原』を読了。午后十二時まで読んでいたことによつても、その内容の面白さを知に足る。お蔭様にて郷里のことを知った。

五月十日（水）

ラジオでも新聞でも、近時の人心が不親切で不愉快であることを説く。西洋的なものを総べて放逐し、ローマ字を漢字にかえ、悪の根原は全部なくしてしまつた

はずではないか。それだのにどうして望ましくないことが国内にあるんだろう！

蠋山君と共に旧軽井沢に行くはずだったのが雨降つて蟄居す。折しも東洋経済から『大陸東洋経済』に書いてくれといつてきたので「英帝国の悩み」という与えられた題下に書く。

夕刻、蠋山夫妻を夕飯に招く。鶏を買つて、焼き焼となす。鳥のすぎ焼は久しぶりだ。話題は、いつ、どこで話しても食糧不足以外のことはなし。これは婦人交えた会話には、いいトピックであるからでもある。井出君のところには群馬県から来た農業労働者、四人に米一斗を持ち帰らせるという約束したら、いくらでも働くといつている由。群馬県では労働者が、一日米一合某ししか貰えないと。

東京都が自から配給をする。それには設備が要る。時には商売もしなくてはならぬ。斯くして社会主義的傾向はますます盛んになつて行く。しかも官吏はかつて生産を考えたことのない人種である。彼等は物は泉

が沸くように独りでに生産されると考えている。従って物資について彼等の懸念するところは価格のみである。そこに物の不足が生ずるのは当然だ。

【出典不詳】塩竈の冷凍冷蔵庫、東京都に買取本決り（仙台電話）：「建物、機棟設備一切を含め廿五万五千円で買取が正式決定した」：」

名古屋の『中部日本新聞』に書く。

五月十一日（木）

蛭山君今日帰るとて挨拶に来る。例の食糧問題研究会について相談し、三井君に聞いてみることにす。

世界新秩序のことについて研究するため、まず中央公論社の『東亜共栄圏の諸問題』を読む。蛭山、東畑両君のものを読み、また、細川嘉六のものを読む。蛭山君は驚くべき頭脳であるにかかわらず、筆力なし。書いたものは平淡である。細川のもの面白し。問題を

提出しているだけだ。

日本人は到底、他民族を統治する能力なし。今度の戦争で教えられるところがあるかどうか、恐らく臥薪嘗胆といったことで、復讐心を養成するくらいなもので、ほんとに賢くはならないであらう。

細川嘉六という人は、マルクス主義者だということで、ズツと横浜の留置所に入れて置かれているとのことだ。中央公論社の何の関係もなさそうな連中が矢張り引張られて半歳になる。そして取調べに当るものは若い巡査だ。

鮎沢つゆ子さん、七時頃来たる。その教えている啓明学園の疎開に従って、教えるため。宿る。

五月十二日（金）

一日、家に居り Carr [E. H. カー] の Condition of Peace を読む。外務省から与えられたもの。英国人のは読みやすい。日本文のものよりも。

五月十三日（土）

八百福で、わを買ったが（昨年）、それについて覚えなしという。物資の不足は商人をして、かかる嘘をつかしむにいたる。普通の値段の数倍の金をとつて、しかも恩に着せるのである。

鮎沢つゆ子さんの友人の詩人大島博光という人尋ね来たる。つゆ子さんが駅で逢つたのだという。詩の雑誌をやつていたが統合されて無職である。

井出氏のところから苺とふきの苗を貰つて植う。

五月十四日（日）

つゆ子さんの話しに、近頃は生れる子に非常に奇形児が多いという。ある人の子は胃と腹が、反対についているそうだ。家内曰く、植原さんの嫁さんの家は小児医の大家だが、その人の話しに、子供が乳を吸わない者が多い。即ち乳を吸う力を持たないのだと。ドイツにおいて第一次大戦最中に同じことがあつた。日本において、これだけ栄養不足で、そうしたことがない

のが、むしろ不思議に思つていたのである。

昨日も天気がよかつた。今日も天気がいい。軽井沢は天気の良い日は実にいい。来て一週間なのに、みどりはこく、草や苗は見違えるように伸びた。高原の植物は冬眠より醒めた後の活動力早し。

東條は戦争を断行し、独裁力を發揮し、古来の歴史においてムソリーニ及びヒトラーと共に最大の権力を専らにしている。この力をかはどこから得たのだらう！

官僚は生産意識がない。殊に日本の如く家庭で、そうした空気のない国において然り。この官僚主義は生産を盛んならしむることはできぬ。いまこれが可能なのは、外国と競争がないからだ。そこで戦后は

（一）官僚が生産的になるか――

（二）競争主義の復帰か――

の二つ以外にない。そしておそらく後者の道をとるだろう。

国際関係学は最も広汎なる総合的知識を必要とする。

宗教と、思想と、政治と、経済とは素より状態判断に必須のものだ。この判断は国内において最も無知なる軍人がやるのだから駄目なはずだ。

露子さんの話——三井高維君が中学校と女学校を経営している。先生の方が多いという有様だから、大変な犠牲である。これに対し軍部あたりから非常な圧迫がある。スパイだということで、多年三井君のところに居った男を使って、言いふらしているのだそうだ。なんでも中学校に使っている別荘がいい建築物で、それをとりたい、のが目的だそうだ。その別荘の隣りにある宮様の別荘は、すでに供出させて使っているが三井君のものは学校で使えないからだ。

国技館の角力は始まっているが、この建物も軍部が使っている。文化学園を潰したのも、その建物を使用したいからだというのが専らの評判だった。

「千ガ滝」方面の別荘十二三軒が荒された。その泥棒をつかまえるために警防団をくり出し捜している。まだつかまらない由。

午后、庭の植木を移す。井出君外、三人が来てやつてくれた。お蔭様に非常に広くなった。

五月十五日（月）

千ガ滝に別荘を持っている行田という人がある。この朝、その夫人が別荘に行ってみると、お勝手がこわれていて、泥棒が這入ったのを発見した。中は一面取散らして、シャツや布団や、その他目星しいものは、全部用をなさないまでにズタズタに切りちらしてある。そして布団をしいたままで、缶詰などは皆な切って食っている。物がなくなっておらない事、本などを取り出して読み散らしてあることによってそれが普通の泥棒でないことは明らかだ。いわゆる思想的泥棒であり、ブルジョアに対する反感の所為だ。行田某氏は井出君のお客で、井出君の娘の実話である。

露子さんの話——知人の箱根の別荘にも泥棒が這入って同じく衣類などを切っている。一つの部屋に泥棒がいる。「すみません」といって顔をあげない。無理

に顔をあげさせると十九歳になる青年だ。その主人は気の毒になつて、その晩宿めてやり、風呂に入れてやつた。聞いてみると徴用されたが、とる給金では食えないというのである。警察に出さないで、今は、その経営する工場に使つてゐるのことだ——一ヶ月計り前の話。

ブルジョアに対する反感だ。戦争の激化、食糧の不足。そうした事実から暴力的騒動の一步手前まで来ていることが、あらゆる方面において見られる。

三笠宮様に御輿入れがあつた。御道具が沢山運ばれた。その運転手が「俺達は飯も食えないのに」と不平をいつていたという話を聞いた。

封建主義的、破壊的な不平の瀾^{びまん}漫だ。

一柳夫人というのはヴォリスという米人の夫人だ。三井君の学校——軽井沢——をチャージしている。東京で）教えていた時に「上級の人の子供さんは、そんなことをするものではありません」といつた。これが子供達の家庭においてすらも反感を招いたそうだ。英

国あたりで「貴族の娘はそんなことをするものではない。また「武士の子供はそんなことをするものではありません」といつても普通である。然るに、今日の日本では、そんなことをいうと可笑しいし、反感をおおる。この国と、この国民の将来に恐怖を感じる。

一日、百姓をやる。枝豆や南瓜を植う。鮎沢君来たらず。露子さんは才色兼備の娘さんだ。これぐらい整つて、いる若い女性は少ない。二十歳というに。

五月十六日（火）

午前中、畑をやる。井出君、朝五時半より来てくれる。馬鈴薯を植え、キャベージを植う。グダグダになる。

午后三時半の汽車にて露子さんに送られ東京に帰る。十日前に通つた時には碓氷はまだ枯木であつたのが、今や一面の新緑である。高原の樹木の活力は急且つ激しい。

五月十七日（水）

雨降る。畠に行つてみると留守十日というに荒れ果てている。しかし菜類が見違えたほど大きくなっている。苺もボチボチ成熟す。

外務省に行く。高柳賢三君の話しでは、僕が、秘密の消息話を外に洩らすというので、憲兵隊においてブラック・リストに載っているという。僕は機密のころなどは一切知らぬのだが、講演会などで英字紙にあるようなことを話すのを、物を知らぬ連中が「秘密」と考へて、そう報告するのだろう。しかし今後、一層注意するつもりだ。

なんでも外務省では囑託が二人、最近二ヶ月計りの間に引張られたという。一人は家の女学校生徒の子供に話したのを、友達の海軍々人の娘に話し、その娘が家庭で話したのを憲兵隊に通告したのだといわれる。太平洋方面の戦況についてである。

午后三時から国際関係研究会を開く。外務省調査局長山田芳太郎氏の話し。

昭和十九年五月

「ソ連は心憎いまでリアリスチックな政策を行つてゐる。隣接国家群に対し、第一、第二勢力圏を期図しているようだ。英国のベルギー、オランダ等の処理案に対しては反対を称えないが、ノールウェイについては米英が駐兵するならば、ソ連も駐兵することを主張している。またアルジェー、地中海問題について、発言権を留保している」

三井高維君の話しに、夫人がお勝手で物を煮ていたらば、一寸の間に英国で買ったなべを野菜と共にとられたという。洋服も持つて行かれた由。

同君が学校に使つてゐる別荘を、軍部が無償で貸せと。盛んにいつて来る由。すでに半分はとられ、他の半分も請求して来ているが、頑張つてゐる。それも種々の部が、かわりがわりいつて来る。堂々と正面からやつて来るならいいが、謀略で、ケチをつけて、ただ取ろうとしている。

三井君の兄——三井本家の主人——の家も、しばしば供出しろといつて来ている。軍需大臣の官邸とか、

迎賓館とかと、何局とかと擬して供出を迫つて来ているが、今までは頑張り通してゐると。

長野県は「新しがり屋」だけに諸種のことを試みられる。田畑の集団的耕作の如きもその一つだ。指導がよければ新しい方針となろう。ただし問題は結果が増産となるかどうかによつて是非が決する。

【出典不詳】人手や技術に応じ田畑を適当に配分 実組長が全耕地管理 信州笹賀村：「村の田畑全部の耕作権を農事実行組合長の管理下に置き」：「第八条、小作者は耕地管理委員会においてこれを決定」：「第九条、小作料は五ヶ年毎に本管理委員会の審議」：」

五月十八日（木）

井出君曰く、田舎で一日の労働賃金五円である。六日頼めば、米一俵無くなる。それでやれるものではない、政府には人物がいませんわいと——米に関する政策などは直接に農民と関係があるので、政府の政策を、百

姓がなし得るのである。

久し振りで、今度は東京の畠をやる。馬鈴薯が育つて、すでに小薯を持つてゐる。——この農夫の味を三四年以前に覚えたら、どこかへ二、三万坪の土地を買つて、百姓に落ちつき、晴耕雨読をやるのであつた。そうすれば今のような、落つきのない気持ちはないはずであつた。目前の恐怖はないにかかわらず、不安に満ちてゐるのが現代の一般人の生活だ。

街の風景、これは珍らしいものではない——

『朝日』「鉄箒」五月十九日 銭湯に切符制：「銭湯の盗難は頻々と」：悪いげたを履いて行つて良いのと履き違えて替える：「湯槽の中でごしごし体を洗ふ、はなをかむ」：」

少年の犯罪が非常に増加したそうである。本年四月までで昨年の犯罪に相当し、その昨年の犯罪は、一昨年の約倍だとのことだ。（名古屋警察の調べ）

「東洋経済」に赴く。木村日記というインド通の話しを聞く。仏教の僧侶だそうだが、独善で、偏狭でつまらない。日本人が、この程度の「世界的知識」だから大きくならない。「何故にインドとだきつかなかったか」と叫ぶ。その頃（加藤外相時代）の日英同盟がいかなる役割をつとめたかが、この連中には分らないのだ。

五月二十日（土）

丸山国雄氏に「年表」のことを頼む（一応、「注」を見て貰うこと）。

午后三時から経済クラブ中央会の評議員会に出ず。この会は東洋経済の別働隊だが、かつて評議員の候補名前を情報局に提出した。当時は、こうしたものの人選は大小となく情報局——すなわち軍部に相談したものである。然るにその頃、絶対権力を握っていた鈴木という少佐が、僕の名を除いたのだそう。この鈴木という少佐は、その頃の日本思想界の独裁者で、出版、団体その他、一としてこの人の許諾によらないものは

なく、講談社あたりは同人の書を出版して、多額の印税を贈ったといわれる。

行政と政治が若い連中に渡って、大東亜戦争は必然であった。下剋上の現象が国家を冒険に赴かしめたのである。満州事変以来然り。政治と外交が中央部を通せば、余程の分らず屋でも慎重である。

経済クラブ中央会で脇村義太郎氏（元帝大助教授）の話しあり。石油問題につき、この人ほど権威的な研究者はない。日本を除く世界の事情を、手にとるように研究調査している。世界石油産額の九五%まで反枢軸国側にあるを数字をあげて説明。

満鉄の秘書課で「日本外交史研究会」について説明。

五月二十一日（日）

午后畠をやる。午前中は『大陸東洋経済』への原稿を書く。苺、盛んに出す。

昨日から警戒警報発令。本日も未だ解けず。昨夜帰って来てリュックサックに食糧などを詰む。イザという

時に逃げるためである。

「米鬼」に対し盛んに宣伝しているが、一般はどうも
 対敵憎悪心が出ないようである。もつともこれは知識
 階級の間なるからかも知れず。少し古い毎日新聞の
 記事

『毎日』二月十九日 撃て・倒せ・米鬼を 日常の戦ひに
 ぬかりはなかつたか 峻烈な現実を直視せよ…太平洋で
 は苦戦しているが「作戦の巧拙は問ふところではない、」
 敵が凶に乗り「機動部隊の蠢動を許したのは…諸君であ
 り、私共であつた」…「敵の半数の飛行機があれば必ず
 勝つといつてゐる、」…早く作ろう…」

瞭の話しでは岡部文相が自由学園に行つて「日本人
 は善意の悪政をやり」英国人は「善意の悪政をやる」
 といった。支那やフィリッピンにおける治安がはなは
 だ悪いというのである。そして干渉が過ぎるを認めた
 という。文相の皇道精神とは「善意の悪政」のことか。

五月二十二日（月）

三井本社に、三井高維氏に連れられて行く。総務部
 長の大谷津寿雄という人に会見。要旨を述ぶ。三菱に
 も話してくれという。聞くと両者の間に黙携ありて、
 相互に話しあい、額を決定するのだという。ⁱ

瀬川君に招かれて、「明月」という上野公園の料亭に
 赴く。高広という富山県の富豪の「若殿」もあり、そ
 の関係にて非常な御馳走である。

この人は飛行機関係工場をやっているが、若い軍人
 が干渉して、全く何にもやれないとのことである。こ
 れでは増産などは思いもよらないと。

今夜、三井報恩会の専務理事を招き石橋、蛭山、三
 井三君と共に、食糧研究会を創設するための相談会あつ
 たが、予は前記の会合のために出られなかつた。

「明月園」で人を待つ間街に立つ。前に「大黒天」の
 神社あり。学生が一々極めて丁寧に頭を下ぐ。その一
 人だに例外なく、しかも決して形式主義にあらず。よ

i つまり三井と三菱は裏で談合しているということ。

くもこれほど教育が行きとどいたと思われるばかりである。――しかしこの若者は何に頭を下げるのだ？

彼等はお稲荷でも大黒天でも、鳥居や神宮をさえみれば頭を下げるのである。これまた形式主義の現れである。

葉巻入れを「丸尾」という料理屋に忘れて来たが、電話をかけた時にはあったという。然るに今日行ったら、なかったというのである。僕の外国で買ったものは、ついついに失なわれて行く。珍らしいものだから、拾ったら最後返さないのだ。

五月二十三日（火）朝五時から畠。

秋山高氏と、令嬢春子さん（和田家へ嫁せる人）来たる。嶋中家へ、家内が橋渡しをしてくれという件である。お昼を食って帰る。

植原彰子夫人来たる。

――。その相談だ。新渡戸博士と相談せんとしたが

果さず、穂積博士のところへ行こうかと思つたがそれも具合が悪く僕のところに来たのだという。――

――。植原さんもまた極めて同情すべきだ。

五月二十七日の朝、九州方面の経済クラブで講演のために出発、六月十一日夕帰京す。

旅行より帰りて

この日記帳は持つて行かなかつた。荷物になることもその一つの理由だが、それよりも、どこで舌禍にかかり、この日記帳を取調べられねばならぬかを恐れたからだ。我等の生活は不断の脅威におびゆ。

六月十一日午後八時過ぎ、予定の如く横浜に帰る。駅に家妻となつやあり。帰宅してみると畠は一面の草である。畠や、外の仕事が多忙で一週間後、旅行の印象を書く。

一、九州、殊に南九州は食糧が豊富だ。北海道の豊富は貯蔵品の使い残りだが、九州は生産地だ。海岸近くは魚が食い切れず、鯛などは始末に困る由。交通機関というものが如何に必要なかが今更感ぜられる。

二、汽車から観ると田畠に働いている者は、女と子供だけであり、たまに男がいるのを見るとお爺さ

んだ。徴兵と徴用が非常に多く、今なお続いている。三、長崎では芸者はなくなつたが、あいまいと女郎の混まの子のようなものは沢山存在する。そういうものが存在しなければ「産業戦士」が落ちつかないというのだ。昔しの丸山町の一帯がそれだ。支那人の家、個人の立派な邸宅、皆な産業戦士の寄宿舎になつている。大変な数である。

四、佐世保に行くに「警保隊」(?)というのがいる。ここは陸軍の勢力ではなしに海軍が牛耳つている。料理屋などでも税金を払わない。税務署で愚図愚図いうと「海軍を見殺しにするか」と逆ねじを食わせるのだそうだ。そこでの話しだが、海軍で新兵をぶんなぐることが多い。ことにそれは学徒に対するものが極端で、こん棒でなぐつて、腰骨を折つたものも少なくない由。町を歩きながら、そこの大呉服屋や、大商店の閉店しているものの多いのに驚く。そして思った。もし何人かが煽動している者あらば、暴動の火がつくであろう

と。

五、汽車の二等の椅子などが、すり切れて、臍物が現れている。日本も、いよいよ物資において最後の段階に來たことを思わしむる。

六、旅館などで便所の鍵や、取手が無い。後に考えてみると、金製のものは供出したのである。地方人は正直であるから、後にほとんど何も残るまい。

七、鹿児島商工経済会の理事の話——先頃、熊本に行つたが、二等車にドヨドヨと農業者が這入つて來た。三等切符を持つてだ。そして二等の者を尻目にかけて「おれ等は毎日白米を食つてゐるんだ。野菜だつて何だつてある。見ろ町場の奴等を……」と。農夫の反逆である。

八、どこにも日本地図も九州地図もない。あるものはビルマや蘭領の地図ばかりである。

九、鹿児島は西郷の崇拜者に満ちその写真で一杯だ。大久保は駄目だ。経済会の理事曰く「今日は知識階級が多いから、大久保を褒めて差支えありません

んよ」と。もつて察すべし。

ヒトラーとスターリンを誇る国のごと薩摩一色西

郷に塗る

英雄は郷土と容れずが正しくば大西郷は英雄なら

ず

一〇、鹿児島から指宿に行く。有馬純清氏のいるところなり。この辺は物資ことに豊か。

鹿児島を南に十里海青くみめ整へる乙女子を見ずあれはマライ、これはインドネシアと女達の顔の形を数えけるかな

何処からの子孫ぞ薩摩隼人は色黒く言葉の調子、支那語に似たる

一一、宮崎での話し——町の繁栄策として昔は師団あるいは軍事施設の引き移りを歓迎したが、近頃はそこに軍隊が來ると物資をグツサリ持つて行つてしまうので、近頃は成るべく來て貰わないことを願つてゐると。

一二、佐世保あたりでは、人口の発表も「秘」になつ

ている。いかに愚劣な隠蔽主義なるを知るべし。現今の指導者は発表というものが進歩を与えるという事実を知り得ず。

一三、「中央のやり方はあれでいいんですか」と宮崎では真面目に聞かれた。東條および政府は、地方の指導階級から見限られている。彼等から見れば中央があまりに神経質だというのである。

一四、松江が、その人柄と土地柄とにおいて、いいところであることを、今度も感じた。大社の駅では水筒に水を入れようとすると、私が入れて来てあげますと、自分で飛んで行って入れてくれた。斯様などころはない。

一五、新大阪ホテルに行くと、いかにも「戦時」だと始めて知った。実に不親切だ。旅館ではよかったのは松江の「皆美館」、鹿児島島の「岩崎谷荘」、熊本「研屋支店」、下関の山陽ホテル、佐世保の「油屋」等である。失望したのは長崎の「上野屋」である。一六、物資の偏在という封建的現象が各方面に現れ

ているのが目につく現象だ。

六月十三日（火）

三浦鉄太郎氏の『世界転換史』出版について祝賀会を開き、出席す。

六月十四日（水）

外務省に行くと、高柳君、お礼として「一千円」を与えられる。重光外相より機密費として受取ったのだと。国際関係研究会に赴く。高橋亀吉君の講演あり。大東亜共栄圏の構想なれども、矛盾に満ち。こうしたことは矢張り駄目なり。

先頃、日本評論社に預けありし「日米関係史」の原稿を返送し来たる。

六月十五日（木）

先頃小倉の講演会後、聴衆の一人が、米国は日本人

をみなごろしにすると述べ、僕の結論があまり生ぬる過ぎるといった。ほんとにそんなことを信じているのか不明だが。

六月十六日（金）

朝のラジオによって、米機二十台が、この朝、北九州方面を襲撃したことを知った。同時にサイパン島に敵上陸を企図した旨も放送された。

富士アイスの重役会。千葉の牧場を統合されてしまうのだ。評価額三十八万円という。明治製菓が中心となって営業するので、大資本万才だ。その中心人物の知事が、明治製菓と関係ある由。資本家と官吏との策謀だ。

六月十七日（土）

空襲が「北九州」というだけで、どこに來たか不明。ただし八幡の被害が少なかっただけは、どうやら事実らしい。

この秘密主義では、イザという時に、種々のデマが飛ぶことは免れまい。

新聞は相変らず「頭山満翁」談話だ——

『読売』六月十七日 相手は『けだもの』憎い敵め、自力で倒せ 頭山満翁談 ……大きな子を生もうとするのだから難産は当たり前、けだものの国にわが魂を知らしめる、「その信念を敵が手近にくればくるほど静かにどつしりと持つことぢや」

『読売報知』六月十七日 学校、病院や住宅街 敵鬼畜の盲爆 北九州に痛憤の暴虐 〈福岡電話〉 ……軍事施設は近づけないと住宅・病院などに爆撃、人的被害は最小限に食い止め」

『毎日』六月十七日 野獸さながらの敵機 徳富蘇峰翁談 〈熱海発〉 アングロサクソンの野蠻、病院船の爆撃、北仏に上陸のように一大転回を始めた、わが戦局もそうだが、前途の大いなる光明に首を長くし、その機来るを待つ

てある」……」

六月十八日（日）

朝、例により島。里芋の土寄せだ。

現在の感情からいえば、日本に落下傘で飛び下りた米兵を、そのまま生かして置くようなことはあるまい。左は毎日新聞への投書だ。民間防空当事者よりの疑問だ。

『毎日』六月十八日（一）敵機が落ちてきたらどうするか、
（二）落下傘で降りた者はどうするか、殺そうとする者も居る、（三）投下ビラはどうするか

晩に内務省警保局事務官林君を経済クラブに招く。石橋、蟬山、太田永福の諸君あり。林君は海軍司政官としてニューギニアに行っていた人である。太田君の親類。経済問題について聞きたいとのこと。石橋君を紹介したのである。

ニューギニアにおける日本のやり方は極めて下手だという。陸海軍の感情的衝突も、始終ありとのことである。

今日、「警戒警報」が解けて、また午後九時頃、警戒警報発令す。マリアナ諸島のサイパンに敵の大部隊上陸した。かなり有力な艦隊が来ているが、日本艦隊はこれを邀え撃たなかつた。主力戦は何時？

北九州の損害その他については全然発表されず。秘密主義例の如し。ただし人間の死傷は八百何十人を数う由。敵機は山口その他各地を襲ったとの事。

六月十九日（月）

「東経」評議会、鳩山君出席。

午后四時頃、警戒警報解く。「警戒警報」でも一晩立番し、部屋を暗くす。能率が非常に減じて困るとのことである。

日本艦隊はどこにいる？……これが識者の疑問だ。かつてブーゲンビル辺にてさえも「決戦」をいった日

本海軍は、いま内南洋の中枢部に敵を迎えて、その主脳部はどこにいるか。ⁱ

どの新聞もドイツの新兵機ⁱⁱがロンドンを苦しめている。

近頃、全く纏つたものを書かず、氣持焦慮す。

六月二十日(火)^マ(四月十六日【三月十六日】参照)

山本清君の話——新聞に「海軍機増産」のことを書いて陸軍に徴兵された某君は、山本君とは親友である。某君が右記事の刑罰のために徴兵されたことは疑う余地なし。かれは三ヶ月丸亀に居つたが、その終りの日に、連隊長が「これで君の事件は解決した」といったそうだ。海軍の努力で一日出された事、直ちにまた徴兵されたこと等、かつての話しの通りである。隊内では非常に優遇された。従つて陸軍にはむしろ好意をもつて退官したとのことだ。しかし海軍がこの問題の故に、かなり重要人物まで往復したので非常に感激しているそう。ⁱ 開戦六ヶ月ミッドウェイで主力空母四隻を失っている。ⁱⁱ 今でいうミサイル、ロケットの始まり。

昭和十九年六月

だ。同君は林毅陸の甥に当たるとの事。

『朝日』六月二十日 十八日夜関東、奥羽地区に発令された警戒警報は十九日午後解除された

危険な警報下の行列 …「食堂、喫茶店に夥しい行列の人波が押寄せており」…」

警報下にも雑炊食堂に行列が続く。雑炊とは、米を、野菜と共に煮たもので、箸が真直に立つていないドロドロなもの。うまいはずなし。しかもこれを食わんとして行列するのだ。警察は例によつて「自粛」しろといい、その対策として食堂を閉めさせているようだ。警察は何故に「食わないで居れ」といわないのか。

晩に経済クラブ中央会の会合に出る。岡崎情報官の話聞く。

第二戦線問題と、ドイツの将来につき、すこぶる悲観的である。英米側は飛行機においてドイツの三倍あり。その生産も、ドイツは空爆の結果、最初の三千台

より、二千台に落ち、今は戦闘機六百台という。要するに時間の問題だというのが結論だ。

日本銀行副頭取荒川氏は、第二次大戦勃発後、半歳にして帰朝した大蔵省ロンドン駐在員であつた。同氏は曰く――

「三年計り日本を留守して驚いたことは、日本の指導者達が、他の人のいうことを聞かない心的姿態になつていたことだつた。たまに、よく耳を傾ける人があれば、それは全く勢力圏外に退いている人である。私も役人ではあつたが、これでは駄目だと考えたと……」

「新聞が信用できなくなつたので、こうした会合（話を聞く会）が非常に人気がある」

六月二十一日（水）

マリアナ諸島のサイパン島に敵兵上陸した。我軍、相手に打撃を与えたが、「我が船舶、飛行機に相当の損

害あり」と大本営より発表¹。

『毎日』に、例によつて蘇峰の文章あり、『朝日』にもその談話あり。海軍の行動を希望するようなことをいつているのは、陸軍が書かしたのではないか。蘇峰は完全に陸軍のお雇ひ記者である。

『毎日』六月二十一日 一億鉄石心を發揮せよ 徳富蘇峰
わが一億同胞に告ぐ「今や来るべき時は来た。」……敵を撃滅するの好機」……「この戦果を見ても、わが犠牲の少くして戦果の多大なるを見る。」……「東西二盟邦が米英二敵に向つて殆ど同時に一大激戦を開始し、……」

外務省に赴く。それから下街で夕飯を食う。高柳賢一三、奈良官補と共に。

六月二十二日（木）

何か事件があると、「日曜返還」「休日取消し」といったことをやる。また警戒警報の晩も、隣組は辻に立ち、ⁱ マリアナ沖海戦、これで海軍は南洋の制海権をなくす。

翌日は非常練習といったことをやる。彼等は生理上のことを考えないのである。北九州空襲後において然り。

徴兵、徴用、多量に続く。

千葉皓君、総領事として二等兵で入営。早口のため「上等兵殿」という「ドノ」が明瞭でなかったたので、大分いじめられた由。恐らくなぐられたのであろう。総領事が無知の上等兵に殴打さるるのだ。

『読売』六月一日 職場の無事故は能率向上 心せよ工員の疲労 全国工場に安全週間 …大堀要講師に聴く…施設の「収容限度を超えた場合、あるひは勤労時間が長く過労が連続する場合は各労務者の作業能率が低下する」…「患者をそのまゝ放任すると他の労務者にも悪影響を与へ」…

意外に多い罹病者 工員に無理をさすな …「工員の集団検診を行つた結果は驚くべき数の注意、休養又は療養を要する健康異常者を検出、」…結核罹病率の増加、ビタミンB欠乏、視力障害、鉄・鉛軽金属工場の塵灰病…

僕が憲兵隊に検挙されたという流言は、すでに何十回も出ている。昨年は、嶋中君が電話をかけて来た。日本クラブあたりでも評判になったこともある。経済クラブ中央会の会で日本銀行副総裁荒川氏が、「そう聞きましたが、そうではなかったのですか」といつていた。事實は僕は、まだそういう意味では一回も呼ばれたこともない。石橋君曰く「君や僕がやられないのは貧乏だからだよ」と。肩書のないことが、怪我のない理由であるかも知らぬ。

『大陸経済』に原稿を書く。

六月二十三日（金）

英国のリットルトンが日米戦争について、米国が日本を圧迫した結果だといった。事の内容は別としてそんなことをいえる空氣が羨ましい。

【出典不詳】（リスボン廿一日発同盟）米政界湧き返る 英生産相の「戦争挑発者言明」で …リットルトンは下

院で失言を陳謝したが、米国では各紙で非難があがっている。

【『東京新聞』六月二十三日】（ストックホルム廿二日発同盟 或る紙は社説で『リットルトンの誣告』と題し、米国人は依然として全的に英国人を信頼出来ない、…）

（東洋経済社論に書く参照）（原文二十二日参照）

野菜類の配給非常に悪く、一日、六人家内に対し八錢分である由。二日分の春菊を^{し、い}にしたら、僕だけに不足であった。

近頃、誰もかれも非常に瘠せる。外務省の小畑君と一ヶ月振りに逢つたら、まるで瘠せた。隣りの小池氏と道で逢うと見違えるように細つていた。誰もかれもそうである。營養の不足が重大な原因だ。周囲に呼吸器患者が大分出て来た。

東京で総合配給制になったのは結構だが、ただ「公平」だけを狙っている。「乏しからざるを憂えず」というのが若い官吏の心理だ。

松本の土橋の手紙では、シャーツ類売捌き禁止だとのことである。先頃は、突然官吏、警察官が来て商品を出させられた。

赤軍の損害開戦以来五百三十万と。実際は恐らくその倍であろう。日本とドイツのみは自国の損害を発表せず。

（英生産相リットルトンの日米戦争観脱線演説）

JAPAN COMPELLED BY U.S. TO ATTACK

PEARL HARBOR

Domei

LISBON, June 20. "The United States provoked Japan to such an extent that the Japanese were forced to attack the Americans at Pearl Harbor." was the sensational statement made by Captain Oliver Lyttleton, British War-time Munitions Production Minister, in a speech today on Anglo-American relations and the Lend-Lease Act, according to a United Press dispatch from London.

Speaking at the luncheon arranged by the United States Chamber of Commerce, Lyttleton significantly departed from

his prepared speech text to comment on the Japanese-American relations and declared, "It is travesty on history ever to say that America was forced into the war." He added, "America provoked Japan to such an extent that the Japanese were compelled to attack the Americans at Pearl Harbor."

Continuing, Lyttleton stated, "Everyone knows where America's sympathies are." He said that he had always placed Britain's needs and interests just ahead of those of the United States, while the American representatives did likewise for the United States "but we have always found in the end that our respective interests are not very different." ("NIPPON TIMES" 22)

鮎沢露子さん、かつて軽井沢で厄介になったというのでお札に來たる。この人の真面目さ。その話し——電車などで戦争の話しをして擲^なられたものがある由。

老人には今は医者が薬を与えないとのことである。岡田八千代女史が困っていると鮎沢君のところに来

て話していたそうだ。

山内夫人曰く、ある婦人が結婚して肺病になった。婚家においては「どうせ癒らぬ病気に、營養分を与えるのはつまらない。この不足の際に」と与えない。さらばとて実家の事情が帰れないことになっている。山内夫人が見舞うと「私はこんな時代に生れて……」と泣いている。山内夫人も貰い泣きしたと。

空爆時の看護も、老人は顧るというのが医者への指令だと、かつて小泉丹博士が話していた。徹底的な実益主義である。

雀が麦を食うので、あみを張ったら、二日計りかかったが、その後は来ない。雀は恐いことを知っているのだ。結局、経験に顧みることができぬは人間だけだ。

奈良官補は、日本が敗けるようなことあらば、数年の後に必らず仇をとってやると。

西条八十氏は日本が敗けるようなことあらば自殺すると。これを、ある日本人の妻（仏人）に話すと、それだから日本人は弱い、なぜジツと忍んで復讐をしな

いかといった。西条氏は煩悶したと露子嬢の話。

日本が敗けるようなことあらば、ほんとに種々な社会現象が現れるであろう。

六月二十四日（土）

サイパン附近の海戦では日本が主力艦を繰り出したが、一戦の後、逃げ出したと米国の放送はいつている由。いわゆる「物量」の相違——「物量」ということを物質的と解して現代の日本では馬鹿にする言葉に使っている——から齒が立たぬらしい。

ニミッツは米国艦隊の目的は支那に到達するにあるというている。岡崎情報官曰く、米国はその言っているように実行するのが妙だと。米国の意志は、日本を南方から遮断するにある。

樺太、北海道を旅行した時もそうだったが、今度九州を旅行した時も、「日本は戦争でどうなる」「大東亜戦争で日本は勝つか」といった質問を発したものは一人もいなかった。第一には、そうしたことを考えるだ

けの前途観を持たないことがその理由だが、第二にはそんな質問をすれば大変なことになる可能性があるからだ。質問だけでも拘引されるであろう。

吉田茂（前大使）の大磯あたりで話したものが、レコードになって憲兵隊か、警察かにとつてある由。誰かと外交問題について話したのを、部屋に機械を据えつけてあつたのだ。嶋中君の話し。

麦刈りで一日、手伝う。麦のできがいいと思つたが、それでもなく、小粒である。作物というものが、自分でやってみるといかに手間のかかるものであるかが分る。

六月二十五日（日）

隣りの天明郁夫君という四十三歳の人応召。県会にて調査部長、企画部長として極めて有力なる人である。ここにも、対手を選ばず徴集する方針を見る。

隣家だから朝送る。隣組の者何十名かが送る。けだし恒例であつて、精力の浪費の一例だ。八幡様で昨夜

も壮行会をやった。

大熊真君、畠に来訪。僕の百姓姿を見て、「清沢洌君を百姓にして置くのは惜しいや」と、「しかし、どうせ発表もできないんだし、とうえんめい【陶淵明】のように逃避しているのもいいかも知れん」と。

きょうもほとんど一日、百姓をやる。智的仕事をせず、近頃極めて物淋し。

六月二十六日（月）

東洋経済の評議員会に、出席す。脇村義太郎君も来たり、戦局の話などをする。サイパンに敵二師団上陸。飛行機は当方が三百機を喪失し、再編成をやむなくしているといわる。（脇村君の話にはあらず）戦後どうなるかといった問題を話しあう。

六月二十七日（火）

日本人は罵倒することが、問題が解決することだと考えている。大東亜戦争勃発までもそうだった。

ウオレース[▲]【Henry Wallace アメリカ副大統領】が重慶を訪問したのについても同じ口調だ。

国際関係研究会で鶴見祐輔君の講演あり。

『読売』『時標』六月二十七日 主人と奴隸の關係 米に
啖呵で繰られる重慶 募る知識層の反米氣運 ……わが作
戦成功に「重慶の敗戦に我慢ならないといふ感情的非難
までが米紙の紙上を賑はしてゐる」、逆もある、「桂林よ
りの帰来者も異口同音米兵の常軌を逸した横暴ぶりに憤
激してゐる」：「かくて米に対する不満は蔣に対する憤
激と變つて知識層間における抗戦政策の根本に対する懐
疑が日一日と深刻化しつつあることは極めて注目され
る」

六月二十八日（水）

尾崎行雄、大審院で無罪になる。例の不敬罪に對してだ。三宅裁判長の名文が光る。

『毎日』『硯滴』六月二十九日 尾崎行雄氏の不敬事件は

明治時代からあるが、当時は言論が自由だったし、議会の言論は守られていた。今は戦争で「言論の統制はだんだん窮屈になり、」…「一般人にしても犯意犯情のないものが罪に陥るが如きことは、却つて戦時下の国内体制を傷」つけるであろう。」

サイパン島に散大勢力上陸。上下に悲観の色ようやも現る。

外務省に行く。外相官邸の前の首相官邸には巡查ものものし。後に知るところでは、独大使シュターマーが午后四時官邸を訪問し、三時間にわたつて重光と三人で会談をしたという。

サイパンに米兵が来たのは日本の当局には突然だったようだ。その証拠には小畑司令官はパラオに行つて不在だったという。文官なら責任問題だ。鶴見君も始めてサイパンへの敵進航で「慄然として驚いた」と自からいつている。かれは大東亜戦争樂觀者で、軽井沢で僕の悲観論に対し「将来に見ましよう」と別れた

のだった。

日本もドイツも敵をズツと馬鹿にして来た。今度始めて、敵の強さを知つたようだ。シェルブルを米兵に占領された感想——チュリツヒの特電（毎日）

『毎日』六月二十九日　：敵は大半が未経験な兵だったが『ノルマンディにおいて火の洗礼をうけつゝ勇敢に闘つた』と独側も認め「ドイツ側の輕蔑的口調は今戦況報道の中からは消え去つてゐたことも右の事実を裏書するものといへよう」…「この侵攻部隊の運命を決する最後の戦闘も間もなく始まることにならう、」…

鶴見祐輔君の講演後、昨夜、皆なで「戦後の日本の外交政策」を討議するつもりであつた。然るに、この信すべき人々の間でも、「日本が、もし敗れたらば」といつたような前提の下には何人も話さない。三人以上いるところで話したことは、必らず憲兵隊に洩れるぞい フランス北西部の港湾都市、そのノルマンディー上陸作戦に引き続く兵站基地確保となる。

うだ。小山庫之助という代議士も、そういうことがあったという。

重臣と閣僚の間でも真実を話さない。日本には正直に政治を語る機会は全くないのである。これが大東亜戦争以前からの日本の特徴だ。

六月二十九日（木）

小汀君、三菱の寄附について、同行して三菱銀行会
長加藤武男氏を紹介してくれる。自分で話してくれる
由。小汀君自分の事のように説いてくれた。

『オリエンタル・エコノミスト』の編輯会議に出る。

東條内閣が危機に瀕している由。連合艦隊の豊田は、
海軍大臣が軍令部長を兼ねていてはやれないといつて
いる。また飛行機に対し材料割宛が陸海軍五、五ずつだ
という。そんなで横鎗はまず海軍から入って来た。そ
の上、安藤内務大臣が内閣改造を宣言しているので、
警察の方も取締る方法がないとある。

東條は、依然ヒステリー的で、先頃も閣議で、食糧

増産につき、玄米よりも白米の方がこぬか利用その他
でいいと内田農相かがいうと、「そんな事を今頃言つて
いるんか！」と真赤になつて怒鳴りつけた。内田も「駄
目だよ」と言っているとか。しかし東條自からはやめ
るつもりは全くないらしい。ただ情勢が、こうなつて
やつていけるかだ。

六月三十日（金）

サイパンを放棄するに決したという。ただ問題はこ
れをどういう形式で新聞に発表させるかだが、情報局
の中には、今までのように一々指定しなくて自由に書
かせたらどうだというものもあるとの事。現在では一々
記事の段数を指定する。たとえばローマ陥落の場合、
三段にしようか四段にしようかと評議して二段にした
とか。新聞が中央で統制されたこと現時の如きはなし。

正宗白鳥訪問し来た。先頃、海軍報道部長に招か
れたが、その中に長谷川如是閑、馬場恒吾等も居った。
かなり皆なあけすきに物をいったとのことだが、栗原

部長曰く「これは憲兵隊には報告しませんよ」と。

正宗氏は疎開を決意したとのことである。近く軽井沢に行く。「文学報国会などでも、そこで話すことは四角張ったことばかりいう。なぜ暮し向きが困るといったようなことを話さないか」という。文学者という奴は愚劣だとかねはいう。日本に関する限りそうだ。この国民は真実を話せない国民だ。

この事態になっても、なお希望的考え方が新聞に現れている。それだから一般国民は案外に樂觀的だ。その一例――

『読売報知』六月三十日 油の補給がつかぬ 本社…大量のガソリン消費で「支那本土から補給は出来ないだらう。」：「C中尉…向ふの方ではほとんど油送路を造つてゐる」：「本社：B29は非常に旋回性がいいといふが。」：「本社…こっちの戦闘機は一つも墜ちなかつたやうですな」…」

人間を沢山徴用するが、その連中が何をしているか、

その辺に不平が堆積している。

『毎日』「建設」六月三十日 奇襲査察 …「なすべき仕事を持たぬ人間の頭数のみ多き」：「表面査察では其の内情は判らず、最下層の声を聞く覆面査察或は奇襲査察をやつてもらひたい」…」

旭硝子の吉田四郎君夫妻来る。その話し――

同工場の医師の話しに近頃は脚けが非常に多いが、その患者が注射薬を受けつけないそうさ。ところが試みに玉子一個を与えたら直ちに効力があつたという。

先頃の米機の空襲は旭硝子の九州工場に当つたが、いずれも急所に当つて居り「盲爆」ではないと。

サイパン島で海軍機五十台が並んでいたところを、一戦にも及ばずしてやられてしまった。機械が非常にいいが、それをハンドルすることを知らなかつたからだ。

七月一日（土）

富士アイスの成績悪く、千葉の牧場はとりあげられてしまう。最近になって、借金して一万五千円近くも入れたのは見込み違いだった。

嶋中君が南胃腸病院に入院中である。見舞う。いよいよ『中央公論』を辞める由。言語に絶する圧迫なりとの事。

久し振りで国民学術協合理事会に出席す。牧野英一博士の談によると尾崎行雄に対する裁判は法律の正当なる解釈である。尾崎の言が不謹慎ではあるが、忠誠の念において疑われない、出版法だと客観的影響その他が問題になるが、不敬罪は然らずと。

サイパンのその後の模様非常に悪し。艦隊および飛行機の喪失量多く、このままでは戦争の継続もできない程度である。

婦人が銃をとっていることを盛んに宣伝している。

長谷川如是閑の話——「この間も富沢清氏の話し

を聞いたが、日本の飛行機の性能の劣悪さは問題にならぬ。大東亜戦争開始当時の日本の武器はまるで、なっていないかったそう。日本の武器が劣っているというようなことをいう学者はドシドシ追い出してしまった。そして役人のいう通りのことを口まねするものを重用するのである。それでは知識導入の方法があるわけではない。明治時代は当局者が、ワイワイ連中を押えた。今は反対だ。」

脇村義太郎氏の話——国防上の意見が二つに分れている。一つはサイパン、比島が生命線であると考えているもの。他はそこをとられても支那大陸を経由して、必要な物資を南洋から入れ得ると考えるもの。前者は海軍で後者が陸軍だ。そこへ御用学者があつて、「支那には苦力が沢山いるから肩から肩へで日本に運び得る」と。

陸軍は盛んに「衡陽」攻撃を大書し、例により「至妙な作戦」「有史以来の壮絶」といった最大形容語を並べたてている。これは海軍に対する当てつけらしい。

桑木博士、生れて始めての瘠せ。牧野博士も然り。誰もかれも挿せる話しである。營養不足であることは明らかだ。

新聞は例によつて秋山謙蔵とか野間海造とかといった連中の元寇の役のことなどを書きたてている。

七月二日（日）

雨降らず、大地かわく。岡山方面などはまた大旱ばつである。家の畠もひび入る。

大本営発表は小笠原群島南方で大海戦を伝う。伝えるところによると我艦隊の損害は非常に大で、このままでは最早戦争継続不可能な事情にあり。ただ米国側が日本側の損害を知らぬように見受けられるという。

東京空襲、すこぶる切迫したように考えられる。

誰に逢つても僕が非常に瘠せたことをいう。

林春雄という帝大名誉教授の日本民族礼讃

『読売報知』七月二日 日本人は小さいが持久力がある、

智能は和算に見られるように優れた者で、自然科学の現今は欧米に劣らない、人文科学はいうまでもない、「本元では墮落退亡しても日本において発達大成せしめやがて世界を日本的文化を以て一字たらしむるものであらう。」：「父子の強固なる團結力」：「しかるに米英等の民族精神は享樂主義をもつた個人主義である。」：人口減であるのは米英は「それは個人主義の思想が骨の髄までしみこんでゐて、この思想の上に社会制度が強固に根を下ろしてしまつたからである。」：「かくの如く米英等は個人中心、利己主であるから強調一致の精神において破綻を来し易い。」：「サイパンの戦火漸く厳烈とはいへ、動揺するな……」

有楽町の駅の前の家屋は取り去られ、それを大学生の勤労隊が取り片づけられてゐる。学生は気の毒だ。鮎沢君の長男は、浅草で家の取壊わしで働き、身体一面にのみに食われたと。

去る二十八日に東條首相、重光、スターマーが三時間、にわたつて会談。これを『読売』が大書した。世間

では「さて？」と考えたものがあつた。僕なども何人かに聞かれた。小汀は独ソ和平問題ではないかといつていた。今朝の『朝日』ではそれは「日独の提携強化」であると再報している。果して何事を議したか——日本側、ドイツ側の形勢重大化の現在において。

七月三日（月）

朝早く軽井沢に来る。碓氷の草木、夏の様相を帶ぶ。列車内にて偶然、松尾晴見氏と会見、また高崎から蠟山政道君の乗り込むに会す。

蠟山君から嶋中君の社長辭職問題について聞く。

一、蠟山君に代行社長になつてくれと交渉があつたが辭退した由。

二、神奈川の特高課長が訊問が終つた時、「結果はいずれにしても、社長をやめて貰いたい」と正式に申し込んだ。嶋中君を別室に招いて。その後、一週間に一回ぐらいずつ呼び出す。病氣だといつても「病氣だつて構うものか」といった調子で、も

し呼び出しに応じなければ檢挙するといった様子である。

三、嶋中君が南病院に入院した時に、夫人が藤田君を伴つて、その旨神奈川県警察部に釈明に行った。

四、杉森孝次郎、大熊信行、蠟山正道、馬場恒吾の諸君を病院に招いて、その前日かに警察に社長をやめることを申し出た由。そして決意をこの人々に話して前後策を相談したとのことである。（最も親しいと見られていた僕は招かれなかつた）。

五、政府権力を利用して、三十台の青年官吏を中心に、中央公論を乗取る策をやっているのだ。始め嶋中君は自分が辞めて代理社長をあげるつもりであつたが、それでは「政府」は承知しないのだ。官選社長を出したいのである。それは彼等が自から言論機関をやりたいらしいとのことである。現に、『改造』の山本実彦が『改造』廃刊届を出したが、「政府」はこれを認めないといつてゐるとの事。「政府」とは何ものぞ、青年官吏の「官閥」とその走狗で

はないか。

六、こうした出版界に干渉することになったのは、内務省官吏が呑む機会を作る目的にあるらしい。大蔵省、農林省等は、そうした外郭機関を沢山有しているが、内務省にはそれがない。そこで出版界に目をつけたのだ。彼等は直接に干渉し得るところに利権をもつて割込むのである。通信省が放送局や電気事業界に、外務省がニッポン・タイムスや外政協会に、というようにである。この目的のためには問題を起して置いては人間をかせ、自分の都合のいいような人物をあげて、呑む機会を作ったり友人に恩を売るので。かくてその外郭団体は益々拡張される。目的が如上にあるから、統制の必要のないところでも無理に統制をやる。

七、内務省の特高課あたりが、そういうことをやり始めると、現代においてはこれを是正する方法がない。中央公論社の如きは、その信用からいつて立派なものであり、交友範囲も高く、広い。然る

にそれをもつてしても、下級刑事の獣の如き訊問、呼出し、圧迫をどうすることもできないのである。藤田君という人のいい秘書をもつてしても、「人間ではありません獣です」といつていた。ここに完全に墮落しきつた末世日本がある。これでは、どうにもならないのである。我等は常に不安に脅えざるをえない。

松尾晴見氏の車中の話――

高等学校に行っている二男坊の友人が夕飯を食いに来た。その談話に今度の戦争は軍閥と官僚の妥協によつてできたもので一般国民はあずからぬ。これが国民が熱を持たない所以であると。彼等は日本が勝つても、敗けても、僕等が新日本を礎きあげますといつていた。この十八、九の青年達にも時代の鋭敏な観察はあるのだ。

山荘は草茫々たるものあり、人手不足でどうにもならないのである。畠の作物の出来は比較的によろし。草ははえているが。

晩に鮎沢夫妻来たり夕飯を共にす。

七月四日（火）

空襲が来たらば世は収拾すべからざる混乱に陥いるであろうことを予は長い間いつて来た。掠奪はあるであらうし、強姦、強盗等は素より可能である。食糧不足は当然であり、食糧を貯蔵するような家は供出強制か、然らざれば公然奪い去るであらう。そういう危惧もあつて予はカーペット、その他の衣類を軽井沢に送つた。幸い島田という運送屋が便宜を与えてくれ、その一部を七月二日に発送した。無論極めて一部だが。

革命は最早必至である。時期はそんなに遠くあるまい。敗戦の後、秩序の破壊は必らず到来し、その後に来るものは暴動、革命、暗殺である。敵と条約を結ぶ者が何人であるか知らぬが、かれも暗殺の手に仆れるであろう。その後に来るものが、しかし「新しい日本」「希望ある日本」だとは何者も断言できぬ。この国民はむしろギリシヤ的、イタリーになる危険がある。い

ずれにしても、その革命後に反省するかどうか将来の分れるところだ。

井出君の話しでは信州あたりでは、まだ勝利の信念はゆるがぬ。敵を近寄せて置いて徹底的な打撃を与えろと考へているそうだ。地方人の考へるところが、また東京の大衆層の考へるところだ。彼等は世界政局も、現代戦争も全く知らないのである。

蛸山君とも話したことだ。事態がこうなつたことは我等の予言の適中だ。無知な連中の指導の結果がいかなるものであるかを示すことは感情的には不愉快ではないかも知れぬ。しかし我等の国家が、悲惨になることは、これまた堪えられないことだ。そこに矛盾がある。鮎沢君のところに招かる。三井高維、蛸山および予が客である。

三井君の話しに、中等学校、小学校の三年以上はことごとく軍需工場に出て働かなくてはならぬ。学生動員だ。ただし一週間六時間だけ学習する。すなわち一日一時間宛だ。三井君のところ（啓明学院）は海軍の

艦政本部と連絡して、学園を雲母工場にすることになり、同処で働くのである。労働と学問の一致は僕多年の主張だ。しかしこれでは、日本から学問が消失する。況んや大学生は全然学習の時間がないのである。

「国防国家」とやらの軍人の理想がここに実現したわけだ。それにしても彼等の言うことを唯々として聞く文相の岡部は、何という腰ぬけな男だろう。もつとも彼はメートル法排斥一本槍で東條の目に止った男。こんな男に文政のことなどが分るはずがない。——日本はこのままで行くと暗くなる。

僕は蟬山君に、他日、新たに作られるであろう日本憲法に二つの明文を挿入してくれといった。

二つとは言論の自由（これについて個人攻撃には嚴罰を課することとし）と、それから暗殺に対する嚴罰主義である。

本日警戒警報出す。

七月五日（水）

雨降る。

ラジオによつて、敵の機動部隊が小笠原島、硫黄島近くに現れたことを知る。警戒警報はそのためであった。硫黄島を艦砲をもつて攻撃したというのであるから（現在交戦中）、敵はその方面へ上陸を企図しているのではあるまいか。

サイパンは、日本人のいる東北方面へ進出し「紛戦中」とある。玉碎であるかも知れぬ。

政府が声明書を發表。「重慶政權の軍隊と雖も、米英を排するものは我の敵に非ず」と。支那作戦が支那を目的とするものに非ず、米英を敵とするものだということを明らかにするためだ。今頃、そんなことをいつたつて、相手の侮辱を買うだけだ。その内容は我等が以前から主張して来たところではあるが。

押しつけられたにしても、ここまで対支政策が来たのである。しかし彼等は決して、心から反省して居らぬ。彼等には反省はない。謀略である。現に二、三日以前のラジオでも、湖南作戦の意義といった題下に、軍需物

資が、非常に多いことを放送して、アンチモニがどうか、鉄がどうかといっていた。今までやって来て、しかもまだ物資が「存在」することと、これを「利用」し得ることの区別が分らないのである。

蟬山君帰京。久し振りで読書。三浦鉄太郎氏の『世界転換史』を読む。風呂を浴びて早く寝る。

七月六日（木）

天気晴朗。朝早く外に出て働く。

三浦氏の『世界転換史』を読了。叙述は上手ではないが、立派な研究であり、教えられるところすこぶる多かった。

広域団体制による世界秩序は警眼だ。すなわち自主独立を許容し、その団結による共栄圏思想だ。

新聞を見ず。ラジオによって小笠原島、硫黄島に敵の砲撃あるを知る。もつとも父島の方は艦砲射撃によるものに非ずと訂正。一応、去ったようだが、今後二十日ぐらいたつと、また準備してやって来るだろう。

ラジオは毎日、工場から男女青年達の感情に満ちた放送だ。感激だけの表現。

七月七日（金）

天気よし。一日中、畠や庭の手入れ。読書できず。食うことは、こうも時間をとるものかと思う。

夕飯前に風呂を浴びると、こうして居つていいものかと思う。一方、また僕はどんなことでもする意志を有しているにかかわらず、時勢が僕を使わないではないかといった抗議的な声も聞える。しかし一流旅館でもない設備をもつて、安易な日を送り得ることが幸福のような気もする。

七月八日（土）

きょうもまた百姓。煉炭を二百運び入る。昨年買つて置いたものである。総計三百以上あり、これで冬期の準備は完備した。畠もあるし。

北九州に今朝、再び敵機十数機来たる。被害は二、三

の民家を半焼しただけの由。しかし一機をも撃墜しな

ある。

かつたらしい。ラジオで聞いていると、ほんとに被害はなかったように思われる。井出君の話では、地方

では、米艦隊を、おびき寄せて置いて、ガンと殲滅す

今日、相変らずの島。

るのだと確信しているとのことである。中央で敵の力

を、まるで軽視して報道しながら、興亡の大危機だと

逢う。その話し。

いつているその矛盾を、地方では前者だと考えているのである。

軽井沢で防空壕を掘れというので、庭の先きに掘つた。巴里では普通人は逃げさえすればよかった。しか

朝、秋山謙蔵という右翼歴史家が、七百六十年以前の元寇の役を、またラジオで講演している。

かるにここでは誰もかれも出ろという。防空具を、玄関の正面に置かねばならぬ。しかも、それが買え

蠟山君の話では東條は近衛を検挙しようと、いろいろやってみた。すなわち東條の対戦態度を知ってい

る者は近衛であるから、かれを圧迫し去ろうという意

どうしたって闇で買わざるをえない。それを二、三回使うと駄目になる。

志であつたというのである。

横浜の家は高いところで、水道が来ぬ。しかもポ

今日は宣戦布告——大詔奉戴から二年七ヶ月目である。

ンプを買わなくてはいかぬという。

先頃、九州を旅行した時、二等車のシートがボロボロになつてた。日本は底力を全く出しつくしたので

外国から帰つて来て、始終いわれたことは、日本が世界一だということだ。何か一寸いうと「外国かぶれ」と攻撃する。「今に御覧なさい、分るからとい

たことです」という。

こうした感想は、誰もかれも持っているとどこである。

日本人の自己陶醉が現在の事情を齎らしたものであつて、矢張りこの段階を経るべき必然性にあつた。

明日は下山する。

この日記帳は軽井沢に置いて帰る。実は、いつこれを見られるかも知らぬ懸念があつて、日記帳にすらも、遠慮とカムフラージュせねばならなかつた。

【「出典不詳」】盗難、不着、不足の危険負担 損保七月から引受を中止 … 損害保険統制会社では、… ただし紙幣有価証券などは除く、ⁱ

保険すらも引受けない世の中になつたのである。

先頃書いた正宗白鳥氏の話——先頃、海軍報道部長が各界の代表者を招待。馬場恒吾君なども出た由。課題は「いかにして国民の戦意を昂揚せしむるか」と。

海軍が「自由主義者」を招くのが珍らしいことの一つ。それから当局としては国民の民意が昂揚していないと考へていることが第二ⁱ。

最後に附託す。この日記の最初に「書いたことのないう日記」と書いたが、それは没収でもされる時のことを懸念して書いたのである。この日記の前に一部あり。
(昭和十九年七月九日夜 軽井沢山荘にて)

七月十日(月)

軽井沢から朝の汽車で帰京、東洋経済の評議員会に出席す。石橋君は山中湖に行つて在らず。

蛭山君と鳴中君を病床に訪う。丁度、情報局より言い渡しありたところなりとて、中央公論社を、いよいよ解散することになつた旨語る。

嶋中君の感じでは、今まで共産党事件などで社員を引張つたのは、中央公論の打ちこわしを計画しての一貫した策動である。従来嶋中君は、上層部に接し、極

ⁱ 昭和十八年十月一日に記されている。

めて理解ある態度を示されたが、そしてこの人々の判断に親頼して来たのであるが、若い警察部方面の策動は、そうした最高方面を皆目無力ならしめたのである。中央公論問題は、神奈川でとった調書（嘘八百で固めていると嶋中君はいう）と共に閣議の問題となった。岸だけが「解散命令というのは不穏だから」といい、重光がこれに和した結果、「命令」ではなしに「自発的」ということになったのだ。

紙も割宛その他は没収。「改造」社の山本も呼び出されて同様である。

『東洋経済』の佐藤編輯局長は警視庁に呼び出されて「警告」を与えられた。いろいろな情報を伝布するからというのである。九州の空爆に関する「流言」のため、随分沢山の者が引張られているようだ。

東京鍛工場に対し、軍需会社法を適用し、日産に依託したのは興味がある（八日）。これにつき軍需省航兵総局総務局長大西海軍中将は国亡び何の株ぞと明言した。

一、国の亡びないために商法も憲法もあるのではないか。

二、ここでも戦争の責任を銃后に持って来ていることを見るべきだ。

『朝日』七月九日　：「国亡んで何の会社の株か、何の商法かである。弁護士に頼んで商法や軍需会社法の研究をやつてゐる時ではない」：サイパンの株を心配せず、頭を切り替えろ」

嶋山君の話しでは、栗原海軍報道部長が、翼賛会で、こういう話をした。「日本海軍はサイパンを奪われるという如きことは夢想だもしなかった。そこで現在、次の作戦の準備がない。いま至急にそれを研究中である。」と。代議士の中には、今までに反撃し得なかったものが、いかにして今に至つて反撃し得るか。サイパンをとらることは生産基地を爆撃にさらされることではないかと質問した。また翼賛会は、政府不信任的

な決議をなしたそうである。戦争の結果、民心ようやく動揺す。

晩に大東亜会館に「国民学術協会」あり。いろいろの話しあり。官吏は人民とは全く別人種と考えているだろう証拠には、ある局長が毎日、白米を持つて来て平気で食っている。他の人は無論配給米である、と一人がいう。

ある人の実話——農商省の若い役人から、靴だの下着だのを貰った。そしてこちらは砂糖を持つて行った。その役人は証明書を渡し「香港にて訓練用として使用」と。それで帳面は、少しも不思議はないのである。役人、警官、軍人の腐敗墮落。言語に絶す。

和辻哲郎氏質問して曰く「日本が、敵兵上陸の危険すらもある時、支那で大袈裟な戦争をしているのはなぜか」と。陸、海別々の作戦をしているのもその一つの理由であろう。

七月十一日（火）

昭和十九年七月

中央公論、改造の廃業が発表された。

『毎日』七月十一日 改造、中央公論両社自廃 …「思想指導上黙許し難き事実のある点が明らかにされたので、情報局では断乎として両社に自発的廃業を申渡すこととなり、」…

一、営業方針に不健全なところがあればそれを変更させればいいではないか、廃業とは如何。

二、『現代』『公論』は右翼一本槍の雑誌だ。

蠅山君のいうところでは中央公論、改造の背後に三十万の知識階級——政府のオポジションがある。それがブラック・リストになっているが、それを取り除こうというのである。東條内閣の政策の一つである。

東経にウォレスと支那訪問のことを書く。

始めて桃をとって食う。非常に甘く、おいし。胡瓜あり。朝の食卓は楽し。

七月十二日（水）

中央公論の藤田君の話し。

羽仁説子さんが藤田海軍中佐の伝記を書いた。飛行士として非常に優秀な成績を残した人である。それが『子供の科学』（？）で評判になったので、手を入れて一冊に纏めて届出した。社では推薦図書にでもなると考えていた。然るに「出版不承認」と却下された。印刷が総て出来ておったのに。聞いてみると、かれは熱心なクリスチャンだと書いてある個所が不許可になったのだ。

藤田中佐が聞いたなら、こんな愚劣な人々のために、生命を捨てるのは惜しかったといっているかも知れぬ。クリスチャンでも国のために、立派に生命を捨てるんだ——そう考えてキリスト教に対する認識を改めずに、反対にイデオロギーで事実を抹殺しようというのだ。

秋山陸軍中佐（報道班員）は敵が本土へ上陸することとを覚悟しなくてはならぬといったという（文学報国会の席上）。まるで他人事のように、そしてその責任を

銃後の国民に帰している。

警察の水野君が来て、「私共は作戦のことはかつて批判もしたこともないのに、サイパン占領まで国民のせいのように言っていますわ」といつていた。この沈黙の人が、そう感ずるのである。

矢野仁一著『清朝末史研究』を読む。先頃はまた三浦氏の仏国革命史論の辺を読む。官僚の墮落は同じ。さらに帝政にまつわる末期的現象も同じ。

『毎日新聞』に白鳥敏夫の論文あり。例のユダヤ主義議論である。こうした精神病的人物が指導者なのだから、この戦争がうまくいくはずなし。

『毎日』七月十二日 米国民戦意の根源 …「戦争の犠牲は大きいに拘はらず国民一般の戦意はなかなか旺盛である。」が「如何なる苦難を忍んでも、如何なる長期戦になつても最後までやり抜くといふ熱意と決心があるとはどうしても考へられない」戦争目的がはつきり自覚されてないからだ、…ユダヤの抱く野望 米国の指導者といえはユダヤ人…「世界制覇といふ大野望を持つてゐる

る、」：「最後の目的は世界共產化といふこと」：民族の将来を度外：「大戦がいよいよ熾烈の度を加へるや、兵隊の生命は能ふ限り大切にするといふ当初の方針を一擲し、仮面をかなぐり捨てて兵士の生命を塵芥の如く取扱ひはじめた、太平洋然り、シエルブル然りである、」
：「最早戦局は終末に近づいた」：

待合、料理屋が私設クラブになり、何々寮となった。『毎日新聞』は、そこへ夜間、自動車が行くことを写真をとつてのせている。数字によると――

築地警察管内で三月末に百十七軒の待合と四十一軒の料理屋があつたが、その大きなものが、大軍需会社の「クラブ」「寮」となっているのである。そこでは芸者も従前の如しだ。

『中央公論』『改造』の廃刊に対し、『朝日新聞』の筆瀾「神風賦」だけが、おっかな、びつくりで一寸書いている。「この雑誌の過去の経歴からいって、今日存続を許されぬという論も立ち得る」といった調子だ。ただ最後に「自分達だけが言論報国、愛国的文筆家の免

許を持つものの如く振舞い、他を一切封ずる如きことは言論本来の趣旨に反する」といつている。これは『中央公論』などの廃刊が、言論報国会などの執拗なる運動の結果を諷したものであろう。

『中央公論』『改造』と、兎にも角にも日本の思想界をリードして来た雑誌は、葬る辞もなくして逝つた。

正宗白鳥氏をたずぬ。ピアノ二台とも輸送することである。「皆な死んでも、自分だけは死なぬと考えるのが人間だ、いかにも呑気である」という。佐藤東経編集局長と共に訪ねたのは、同家を誰かに貸せたとの話で、同社の社宅にしたらと僕がいつたからだ。

松本烝治博士の話に、同氏の義弟が大阪医師会長だ。東京の医師会（政府側の召集により）に出席したが、軍医局長が劈頭、「最も時局を弁えぬものは医師と弁護士である」と言つた。同氏は支那の書籍を読んでゐるそうだが、「怒らざるものは稀なり」と古語を引用していつていた。

小泉丹博士曰く、その研究室（慶応医科大学）で、

伝染病研究等に絶対必要な人間を出せというので、十三名とかをあげた。それをさらに削れとて結局七名にして、これだけは応召されぬ保証を得た。ところが、その一名がすでに召集され、他も召集されるだろうという。

ある問題で軍医中佐あたりの人が大学に來た。かかりの教授が、その条件を聞いて、「とても出来ない、それでは辞めるより外はない」といった。軍医中佐は「それでは、どうぞお辞め下さい」といわれて二の句がつけなかつたそうである。同じく小泉丹博士の談。

サイパンは北端のマップピ山附近で「自刃を揮つて凄絶なる肉薄攻撃を敢行」中なる旨発表。まだサイパンが敵手に落ちたことを発表していない。

外国からの電報は、すでに太平洋の制空権、制海権が敵手に落ちたことを伝えている。米国はサイパンが六日落ちたと放送したと。一方、ドイツは東部、イタリア、北仏と三方の敵を受け、一千キロ以内に迫っている。いずれもベルリンの方向に向いつつあり。

日本を動かしつつあるは憲兵と警察である。そしてその背後にあるは軍部である。警察と憲兵隊が相よからざるは事実なれども、しかし官吏は自己保護のために、強力勢力に服従するはその特徴である。軍部が力の中心であるのはいうまでもない。

七月十三日（木）

畠に行つて働き、歸りに桃、胡瓜、茄子等をとつて歸る。人生その中であつて平和なり。

「敵」は必らずしも恐れざれども、国内の政府当局者——警察憲兵隊に、どうされるかも知らず、こわしというものあり。

國際關係研究会あり、太田三郎君（外務省調査局課長）の英帝国首相會議の談あり。講演後、予質問す。この人の、人もなげな態度は悲しむべし。非常に頭はいいのだが。

大した人の話しならねども、島田海相が辞表を提出したとの説あり。嘘かも知らねど可能性あり。

笠原甚一という医師で、入営した人あり。笠原家の分家である。見習い士官だが、中尉、大尉という連中は、ただどなったり、殴ったりするだけで、何にも策も意見もない。そして酒保に行つて酒をねだつて持つて来て呑んでいる。想像以上に悪い。こんなことで戦争に勝てるわけではないという。

芳賀檀(?)という高等学校の教授が、言論報国会で正宗白鳥氏に「この戦争は敗けますよ」といった。その理由は「現在の当局者は、衆智を集めることが嫌いである。先頃、海軍省に行つたら、『おれ等の知恵にあまつた、君等各々が考えてくれ給え』といった。そこで陸軍省に行つた時、自分の意見をいつたら『君等が何を知っている、生意気な』と、ひどく怒鳴りつけられた。こんな連中では仕事は出来ません」と。同君はドイツに留学していた。

実兄、笠原政一氏疎開し、明后日豊科へ帰る由。清明と共に笠原家を訪ぬ。東京に出て十二年。兎に角、不義理をせずに帰郷。目出度し。

鉄道線路に副^へうた家屋は全部取り払う。それでも都市計画を起すつもりはないらしい。

食用油の配給ある由。一合二十三銭。これを闇相場で買えば七円なる由。すなわち実価は公定相場の三十倍になったのである。これでは物資は出廻らない。兄の話しでは、埼玉県で米が一升十五円、一千円に三俵だとのことだ。また胡瓜が一貫目四円とかである。田舎の百姓で一万円ぐらい持つていないものはないほど。東京近県の百姓は儲かるとのことだ。

七月十四日(金)

『読売報知』は社長が貴族院議員になつて、政府にお世辞たらたら姿見ゆ。今日の『毎日新聞』は偶然にも少し警世的文字あり。東京工業大学長八木秀次は「重大戦局に直面して」との題下に

『「毎日」七月十四日……「昨年の春、ある文士が『何の愚者か、科学の力を信ずる』と新聞、雑誌に書いて世間

の喝采を博した」……流れ作業も日本精神を汚すと講演した者も居た、「それが今日では一にも科学、二にも科学である、戦況が面白くないと『科学の力が足りないから』だといふ」……

と書いている。如何にもこの八木氏は協力会で最も気のきいたことをいった人である。また同じ『毎日』に

「『毎日』七月十四日 言論を活発に 明るい批判に民意の高揚 石川達三 ……戦意が高揚しない原因は、日常生活の不自由、「言論の萎微沈滞」……「言論を抑圧すれば民衆は反抗し、反抗を弾圧すれば民心は沈滞する。」流言飛語が生まれる、「今日指導者の一部は民衆の批判を許さない。」……「海軍報道部長栗原大佐は私に語つて曰く『今日最も純粹なる者は裁判官であらう。何となれば彼等は常に弁護士によつて厳しき批判を受けてゐるからだ』と。私はこの言葉をそのまゝ当局にさし上げて御参考に供したい。』……「戦意高揚すれば言論は相關的に活潑となり、当局はその批判を受けなくてはならない。批判を抑圧し

て戦意は高揚しない。』……「私は敢ていふ、国民を信頼せずして何の総力戦ぞやである。国民は信頼するに足り、また信頼されなくてはならぬ。』……」

といつてゐる。これは現在、いい得る最大限の表現である。『朝日新聞』の読者欄にも同じことがある。

我等の国際関係研究会の司会者として永井松三氏が、太田君を紹介するのに「政府は国民について来いといつて、何等の情報も知識も与えない」と、この慎重な人が、むしろ大人気のないほどのことをいつた。戦況の非運と共に、言論の自由を要求する声がボツボツ起つてゐる。

外務省に行く。福田一平君も委員会に来ることになつた。太田三郎課長が福田を高く買つてゐるとのこと。英文書きと「頭」の問題を一緒にするのである。

内閣改造が決定した由。残るのは重光外相で、青木大東亜相、小泉厚相等は退却し、陸海軍大臣も變ることである。東條は依然たるらしい。

経済クラブで、秋山高氏二男清君の南方に勤務するため出発するを送る会を開く。折しも、嶋中氏お嬢さんの婚約が出来たので、懇親の意味なり。

嶋中夫人の話――

嶋中君が入院したので、その報告のため神奈川県警察に赴く。警部補という男が、「貴様の亭主は悪い奴だ」とか「お前は何に來た」とかいふ。「ウン、病氣だ？うまいものばかり食やがつて、胃病も癖もあるか」といった怒鳴り方である。二、三十人の待つてゐる人と一緒に緒だったので、一部屋でお話ししたいと一時間ばかり待つていた。「お前はおれをここまで何のために呼んだんだ」――貴様、お前である。

嶋山一郎君が刑事に護られて召喚されたという説あり。この前にもそういう噂を聞く。この次ぎは蜷山政道だと誰かがいつたそうだ。

嶋中君は軽井沢に行きたがつてゐるが、軽井沢とか、熱海とかというところはブルジョアの行くところだから、心証悪い、奈良の生れ故郷に帰れと、切に勧め

られてゐる由。郷里は嫌だから、今のところ法隆寺でも借りて疎開の意向である。

高柳賢三君のところでは、嶋中君は起訴されるだろうと。また雨宮君は『婦人公論』を初号から持つて行つたことを伝ふ。若い頃からのものを集めて、罪に落そうというのだ。憲法の存在せざる現在、警察に睨められたら最後、逃れるに道なし。

隣組にウイスキーと葡萄酒配給さる。それを公平に分配したので、我家でも少し貰う。不二屋主人の話では、アスパラガスを買つた職工が、味噌汁の中に入れたら、とけてしまつたし、そのまま喰つても味が無い。「あんな高いつまらないものはない」といつた。またバターも産業工場には非常に沢山行くが、恐らく味噌汁の中にでも入れるのだろうと。平等配給主義――ブルジョアに対する反感と相俟つて、破壊的革命の基礎が出来あがつてゐることを知るべし。

七月十五日（土）

笠原政一兄夫妻疎開のため郷里に帰る。朝六時、蒲田の駅まで送る。

昨日、三井より来書あり。二千五百円宛、日本外交史研究所のためにくると。三菱も同額を決定。兎に角、五千円の収入あることになる。小汀君の話では、三井では二千円といったのを、加藤武男氏の口入れであった三菱では二千五百円といって、そうなったのだと。来年度に財閥が存在しうる事態だろうか。

国民学術協会が、中央公論社がなくなつて事務所なしになる。そこで従来 of 社長室を貸してくれまいかと、三菱地所部に桑木博士と共に相談す。中央公論社の跡には、すでに軍需省の軍人が借りたしと申し入れありという。

『中央公論』、『改造』を虐めて廃刊せしめたのは矢張り軍部であつた。情報局の第一部は海軍、第二部は陸軍で、第三部が外務省である。この内、中央公論事件

に主となつてやったのは、第二部である。ここから命令が出るので、神奈川警察部などが、無茶に強いのである。軍部少壮派と、官僚末輩とが天下を左右している一例。

雨、幾日にも降らず、畠灰の如くなる。

七月十六日（日）

陸軍が支那大陸で「活躍」していることを、毎日のラジオも新聞もジャンジャン書き立てている。新聞の標題を見ると「在支精銳航空部隊の伎倆は、いまでは神技といえる境地に達した」とか、「戦史以来の巧妙なる大陸作戦」とか「絶妙なる制空部隊」とか、およそ最大級の言葉の連続だ。

田舎に行つて支那大陸戦のことを聞いたら「支那の方にはあまり興味はありません」と。しかし海で押されているのに、陸では赫々たる戦果をあげたという風に解するものもあろうし、それが目的であらう。

サイパンの戦況について敵の発表によると、発見し

た屍体一万何千、それからインターン【intern 抑留】されたもの九千人とある由。九千人は婦女子であろう。

ある三国（スウィスカ）の新聞の批評に、支那の戦争は、日本が、まだ戦闘余力があることを示すが、また同時に非常な消費を行っていることを示すものだとある。日本が避けねばならぬのは消費戦である。現在の作戦は、敵の思うつぼにはまったことになる。

小汀利得君一家を午后のお茶に招く。畠で出来た桃を御馳走せんためだ。

長男の正ちゃんが立川に来て、休暇を利用して帰宅した。その話によると、満洲で擲（な）られて、頬などはれたそうだ。陸軍大佐の息子が打たれて、あごの骨を折って片輪になった。また美濃にいた時に、ある隊が練習に出て五人の兵隊を川に溺れさせて殺したが、帰隊しても気がつかったとのことである。

砂糖は一貫目二百円、卵^マ子一個一円の由、それでもドシドシ買入れている者が多いと小汀君の話し。

東條の参謀は津雲であるとのこと。この男は最も下

等なる政治陰謀家だ。これに官僚としては次官の唐沢が一枚加っている。この方はたち[、]のいい官吏だと思われるが。

東條の多摩川べりの別荘を襲うて滅茶滅茶にした賊ありとの噂あり。果して事実かどうか——デマが四方に飛ぶ。

戦時警備法ⁱが一昨日とかから発布されたそうだ。新聞には書かせず、ただ官報にだけ発表するのが近頃の手段なりという。

隣りの北田正則君徴兵さる。近頃、若い者は全部といたいほど徴兵される。

近衛の家の前を憲兵隊が借り受け、これに近衛家の電話線を引込み、傍聴（盗聴）しているそうだ。近衛というオポジションの可能性のあるものに警戒し、またこれを葬り去ろうとの策動の現れだ。

七月十七日（月）

i 「法」ではなく戒嚴の一つ手前の「戦時警備」を発布。

どの新聞も国民総蹶起せよといった意味の記事を特別囲いで出している。これは社論ではなく、また素よりニュースではない。(軍部の)情報局あたりで書いて、それを強制的に新聞に出させるのだろう。これがまるで知識がないことを暴露している。たとえば『読売』

の「国内戦場総突破の秋——奔騰す一億の戦意——鉄桶防衛と徹底持久の確立へ」という記事の中で「政治経済も内線の利」というがある。政治経済も内線の利とはどういうことなのだ？

『読売』七月十七日「決戦中の決戦期へ、重大以上の重大段階に突入した、…、いまや(一)国土の戦場化を覚悟し鉄桶の内外地防衛陣の確立と」：「就中航空撃滅戦のための航空戦力の生産、保有、動員こそ焦眉の急務」：政治経済も内線の利：「時局認識の透徹と頭の切り替へが今やかくの如く急調浸潤しつゝある秋」：「縦横に内線作戦の妙を発揮」：「航空機大量増産の目的を達成しなければならない。」

東経評議員会に出席。石橋君山中湖より帰る。同地方に泥棒あり、それが同地方に療養中の水兵であるらしいとのことだ。

森島公使夫人の家妻に、かつて話したところでは、鎌倉方面の女中を海軍の水兵達が引き出し、晩に山中で密会す。ある晩十二時頃、巡查が女中を連れて来て、海辺で密会していたのを発見したのだといい、警戒を希望したそうだ。風紀の頹廃ここに至る。

大本営には連絡会議があるが、決定機関はない。政略と作戦には知識が這入って行く機会がなく、若い参謀と、東條などの「かん」で決定されている。日清、日露戦争には明治天皇を中心に、伊藤、山縣等の元老が議をねつた。これが現代と異なるところだ。

いよいよ島田海軍大臣辞職し野村大将就任す。陸軍と海軍との対立感情は、かつて史上にその類を見ないほど深刻だ。軍需工場などでも、その物資の奪い合いで、係員は全く困っているとのことである。海軍の方が大體に文化的であるのは勿論だが、しかしこれとて、例

えば島に先に上陸すると、いいところは全部占拠してしまうといったことは珍らしくないという。陸軍は憲兵制度を有しているから、海軍に同情あるものに対しては圧迫を加え、いやみをやるのが常である。海軍同情者を検挙することも稀でないという。しかもこの陸海軍の悪感^{あつかん}は、天下公知の事実なるにかかわらず、新聞も雑誌も一言もこれに触れぬ。またふれたら大変だ。

『東洋経済』が「七月一日号」にサイパン島について「この一島は全力固守に値するものと認めて差支えない」と書いたが、それを警視庁で「注意」をして来たそうだ。仮にサイパンを、とられない前に「サイパンは全力固守に値せず」と書いたら、発行禁止ものであろう。またそれを書いたのは、とられる前のことであつた。言論は当局者の御都合主義である。

閣議で東條内閣に反対する翼政会の議員達を検挙すべきかについて論議された。これに対し内務次官の唐沢俊樹はそういうことに責任が持てないといって反対したとのことである。

七月十八日（火）

雨降らず。中国その他が渇水のため稲の植付け出来ず、食糧問題極めて懸念すべきものあり。

今日、我等には必らずしもニユズではないところのサイパンを敵に略取されたる旨の発表、大本營よりあり。陸海軍部隊は全滅、在留邦人も軍隊と運命を共にせりと認めらるという。この場合「玉碎」という文字は使わなかつた。東條首相の談に陛下に対し奉り恐懼にたえずという言葉あり。東條がこうした文字を使つたのは最初のことである。今まではアツツの時さえ「戦史に稀なる絶妙の転進」といった意味のことを言つたのである。

太平洋諸島に何十万、支那に百万近くの軍隊あらん。この人々の運命こそ氣遣わし。支那における我軍は、最早後方を断たれて、帰国する能わず、またその上に武器弾薬も尽くる日あらん。予は大東亜戦争勃発の時、既に重大関心を在支軍隊に有したのであつた。

日本における「革命」は最早必至だ。それに先行する暴動が我等の胆を寒くする。仮に「革命」があつても、それは多分に破壊的、反動的なもので、それによつて、この国がよくなる見込みなし。これだけペンデラム【pendulum 振り子】が右翼に振つて極端になれば、その反動も自然に大ならん。

七月十九日（水）

今朝の新聞は全面サイパンの記事だ。例によつて「誓い」や「決意」を語るものは徳富蘇峰、斎藤劉、尾崎士郎といった連中である。

参謀総長に梅津美治郎大将任命さる。元帥杉山元が教育総監となる——民間の大臣は幾つでも兼ねられるが参謀総長という軍組織を背景に持つものは頑張れない。サイパン——参謀総長問題——確かに一つの段階だ。

サイパンの全日本人が玉碎したのは、今後の問題を提供する。そうした死に方は犬死にならないのか。日

本のためであるのか——無論、現在の軍指導の下にあつて、それ以外の道に、出ずるのは困難だが、最後は死ぬために戦つたようなものだ。左の記事はそれを示す。「夜襲攻撃」など出来ぬ事情を知るべし

『読売』七月十七日 最高指揮官最後の命令 米鬼を粉碎すべし 武器なきは竹槍にて ……「重傷病兵三千名は自決」…「の総攻撃に生き残つたものは爾後随所に出没して果敢なる遊撃を行ふ」…

疾風、血刃の総突入 敵陣遂に大混乱 最後の模様敵側の報道（チューリヒ特電十七日発）…米軍部隊は、陸海空軍の圧倒的優勢をもつて圧迫、…

制海空権奪ふ 敵発表の戦況（チューリヒ特電十三日発）…『…米軍は過去における密林戦の諸経験に鑑み、夜間は戦艦及び航空機よりは多数の照明弾を放つた、サイパン島攻略がかくも短時日の中に完了し得たのは一に米軍が制空権を掌中に収め得たからであつた、…』

日本は「一機でも多く」の標語で働いた。しかし、

その一機が、果して内容的に優秀なものであるかどうかについて思いをめぐらすものはなかった。

嶋中君を見舞い、外務省に行く。大熊真君は子供を田舎に置いて帰ったばかりだという。東條は、いよいよ辞表を奉呈したそうだ。「改造」ですまそうとしたが、

サイパン——東條内閣崩壊——当局者に対する反感——一緒になって騒いで置きながら、戦争が不利となれば国民は必らず不平をいおう。ここに大東亜戦争は一転機を画す。七月二十日は記憶すべき日になろう。

さるにても、これくらい乱暴、無知をしつとした内閣は日本にはなかった。結局は、かれを引き廻した勢力の責任だけでも。その勢力の上に乗って戦争をしていた間は、どんな無理でも通った。然るに参謀総長をかねて、掣肘をこの勢力の上に加えるに至って、一とまりもなく振り落されたのである。

かつて参謀総長兼任をもつて、政戦一致といつて太鼓を叩いた新聞は、また「絶対信頼の梅津大将」とか「ひたすら作戦一途征戦完遂」などと、お世辞をいつている。

昨日も、今日の新聞も悲憤憤慨の文字で全面を盛っている。もつとも現在は一週間の内三日は、ただの二頁であるが、その二頁が、「一億訓練の時」「南溟の仇を報ぜん」「急げ輸送隘路の打開」「怒りの汗に滲み職場離れぬ学徒」「津々浦々に滅敵の誓」(以上『朝日』

といった記事で、他には何にもない。『朝日』がそうだから、他の新聞は想像しうべし。

敗けたのは「兵器不足に基因」(『東京新聞』七月二十日)といった論調が、軍部の態度を示す。

流石に実業家は文句がある。今朝の『日本産業経済』に現れた代表的実業家には、政府詰責の調子歴然たるものがある。三菱重工会長、郷古潔談

『日本産業経済』七月二十日　：民心が萎縮し官に頼る、官は指導すべきであつて自ら経営するものであつてはならない、生産の主体は飽くまで民に置かねばならない、民に旺盛な生産心の昂揚があつて始めて生産を上げ得る」：「昔は政党は悪かつたが又公平な意見も出したし新聞は正しい批判を行つて居て官の独善に反省の機会を与へた、今は全く官の御用でありその誤りに対し一言半句建言をして居ない、」

(その他の語調同じ)

『朝日』七月二十日「……日本とアメリカ、その両国民の本質を考へ見よ、この日本国民がどうして負ける筈があるのだ……」

吉川英治の『朝日』に書いたもの。(二十日)「宮本武蔵」(これが代表的)を書いた小説家が唯一の指導者である。これに対し徳富の意見は、その方面の代表的だ。これはまだ——始終いつて来ていることを繰返している。即ち米国は直ぐ崩れるというのである。(十九日ラジオ放送)

【出典不詳】…泣き言を言う時ではない、最後は勝つ、「敵は一六勝負で出かけたもの」…敵は永くなくなると瓦解する、日本精神發揮の秋…長期戦にもって行く、…注意要す敵の計…彼等はうそつきで泥棒だ…」

今夜七時のラジオによって始めて大命が、小磯と米内に下った旨を知った。陸海の感情衝突は、最早国民の常識だ。この協力を要請する最後の試みが、ここで

なされたのである。一方の代表者では他方がきかぬのを示すものだ。

七月二十一日(金)

十八日の辞表提出を二十一日の新聞が始めて報道している。東條については『読売』だけが好意的に書いているだけで他は黙している。

この朝のラジオは、ヒットラーが爆発陰謀のため、周囲のものは重傷を負い、かれは火傷した程度であつて、その日ムソリーニと会談したと伝える。かれが軽傷かどうかは、なお保留して聞く必要がある。

清沢寛から昨夜電話がかかつて来て朝日スレートの社長寺門氏が、馬鹿に僕に感服している。実に偉い、予言者のような人だといっているようだ。聞いてみると「米国は日本と戦わず」に書いてある内容が現代を予言しているというのである。寛も、「池崎忠孝」などの本を読みかえしているが、まるで間違っているといっ

i 『清沢洌選集』第一巻「アメリカは日本と戦わず」

ていた。今において過去の著書を読みかえす人が出て来ているのである。先頃は、正木弁護士が『転換期の日本』を読んで端書をくれた。予言を讀めたのである。

久し振りにゴルフをやる。あまり興味無し。ただ友人達に逢うためである。PGA。

加藤武雄、近藤浩一路両君曰く「東條はやめただけでいいの知ら。他人の子弟を沢山殺して、あれで責任が解除するの知ら」と。

東條は百万居据りを画したが、とうとう意を得なかった。その事は

『日本産業経済』七月二十一日 桂冠の理由 情報局発表
(昭和十九年七月廿日) …「人心を一新し挙国戦争完遂に邁進する為には内閣の総辞職を行ふを適当なり」と…
「宸襟を悩し奉り恐懼に堪へず」…」

という発表でも明らかだ。最初の原稿には、閣員に裏切り者あり、重臣が協力せずといった意味の文句があつ

たそうだ。軍部は東條閣で固まっているので、今度の東條の辞表には反対で、そこで種々の行き悩みがあつたそうだ。鈴木文史郎君の第一の報告(七時)には阿部信行が陸軍大臣となるとあり、第二の報告(鶴見祐輔君午後八時半頃)には後宮大將が就任確定したと報告があつた。情報局総裁に緒方竹虎君が擬されたが辞したと。

七月二十二日(土)

警察の水野君来て内閣の顔触れの決定を見せてくれる。左近司中將が交渉を受けたが、「陸海軍は軍人でなくてはならぬが、その他は軍人は駄目だ。また僕が這入ると愚図々々いうだろうから断つた」と語つた由。

一般民衆は東條の評判がいいとのこと。例の街に出て水戸黄門式のことをやるのがいいのだろう。陸軍大臣には杉山元が教育總監と兼任らしい。

経済連盟に東良三君を訪ねている間に雨降る。ぬれ鼠のようになつて国際関係研究会に赴くと、折柄の雨

の故か、人集まらず流会となる。

歸りの頃は内閣の顔触れ判る。新味は、緒方君が國務大臣となり、情報局総裁を兼務したことだ。これは兎に角、一つの進歩である。表面から見れば、この内閣は従来の内閣の継続だが、この内閣ならば、「休戦」「講和」「時局拾取」といったことを、冷静に研究し得る顔触れである。また言論の自由についても、内閣のおよぶ限りにおいて伸長し得るのであり、それができなければ内閣の力のおよばないところに障害があると見ねばならぬ。

サイパンが戦争の第一段階であり、それに応じて小磯内閣は政治的に戦争終末への第一歩である。敵グアム島に上陸す。グアム島は、いつの間にか大宮島と改名されている。

小磯内閣にはかつての米内内閣の人物が七名揃っている。米内、小磯、藤原、石渡、児玉、島田、広瀬の各相だ。米内内閣は、当時の陸相畑俊六が昭和十五年七月十四日、「陸軍の総意」といって辞表を呈出し、

十六日に総辞職をなしたものだ。すなわち陸軍の毒殺にあったもの。

東條内閣崩壊の原因は第一に海軍の不満、第二に翼政会の反対、第三に重臣の非協力、第四に閣内の内輪割れ、第五に軍部自身の分裂——これを突破する力がなかったほど客観的情勢が東條に悪化した。

源川栄二の話——先頃、滋賀県の親戚で、一人息子を兵隊として失った家を見舞いに行つた。靖国神社にまつられて光栄でしようというと、その婦人が真向きになつて、「大切な息子を失なつたものが、靖国神社に行くと、乞食のように白砂利の上に据らされて、いつまでも頭を下げている。そんな馬鹿なところに行くもんか」と。ひどい見幕だつた。

同——滋賀県の草津方面では、警察署長が農村の区長を集め、七月二十日まで田植えせよ、そうしなければ引つくるぞ命令した。「他県では皆なやつてゐるではないか」というのだ。こうした警察の態度は今、代表的なものである。

山浦貫一君来訪。妻君、小供を疎開させるが、その後の始末に因つていゝという。加藤武雄君の如きも然り。

七月二十四日(月)

例によつて大臣達の抱負が新聞に出ている。『読売』米内海相は、「陸海軍協調の要はいうまでもない。陸海軍の關係は鎖のようなもので、環の一つ一つを見ると互いに違ふ方向に向いていゝように見えても、それでいて強いのだ。」杉山陸相は「一層、海軍との緊密なる協力一致により最大の戦力を發揮して敵を撃砕する」といつていゝ。両相ともに、今更にこの点を強調するのは何を意味するのだらう。

小磯は二・二六事件の黒幕であり、有名な南進論者で、昭和十五年八月、近衛内閣に蘭印特派の交渉を受けた時も、一挙に南方問題を解決せんとしたが、時の政府の容るるところとならず、小林商相が代つて特派され

i 根拠はない、底本も注で直接關係はないとしていゝ。

た。松岡外相は当時、「鬼の面を、おかめの面にかえたのみだ」と説明した(『読売』二十四日)。小磯というのは、こうした男である。ただ問題は、その後、少し利口になつたかどうか。恐らくはそうではあるまい。

家妻曰く、大達という人が都長になると、手腕家だから、大変よくなるとの評判だったが、少しもよくならない。その人が内相になれたんですかと。

新聞の、軍へのオベンチャラ世辞の一代代表的なもの。

『毎日』七月二十四日 : カメラに収まつて後、杉山が東條を搞つて、「いたはる杉山元帥、元氣な東條さん、そ

こに無敵陸軍の崇高な精神の流れがひしと感ぜられた」

挨拶をすることが、「崇高な精神」なのである。

米内海相の記者団に話したところでは、一ヶ月の米をふくめての配給量は月に十一円である。それにアブラのまわりが少ない「痩せもしようさ」という。

清明の話しでは多摩川べりの田舎でトマトが一個

五十錢。桃の少しいいのは一個一円二十錢だという。悪性インフレの行衛、とどまるところを知らず。

東條の評議員会に出席。伊藤正徳君も出席す。東條は予備になることをいやり、最後には内閣の「統帥」のような地位につくことを提案したという。これより先き、木戸が東條に軍令部長を別に任命したらどうかという、「それは陛下の御意志か」と反問したという。結局不承不承に海軍大臣を任命した。

この東條を讃めたのは、太鼓持ちの徳富蘇峰だけである。この戦争放火者はいう。

『毎日』七月二十六日 …「勝敗は時の運だ。」…「東條首相その人がこの荒波を乗切つて来た」…「その労に至つては何人もこれを認めざるを得ない。」…」

東條は対支政策において支那共産党（延安政權）と提携して重慶に対処せんと案を言い出した由。蜷山君の話である。如何に外交を謀略的に取扱っている

かが判る。

七月二十五日（火）

一日中、在宅。『東條』の社論「重光外交」について書く。

七月二十六日（水）

海軍報道部の高瀬五郎大佐は昨日の経済クラブの講演でサイパンで日本の連合艦隊が出動した事、敵が三段構えを有し、航空母艦が前面にいるという偵察機の報告により、全飛行機を飛ばせたが、行ってみると前方にあるものは戦艦であり、航空母艦に行きつくまでに非常な損害を蒙りたる事、中央艦隊と戦闘をして弾丸を打ちつくし、グアム方面に引きあげると、そこに左翼艦隊が待つて居り、助かつた飛行機は数台に過ぎぬ旨を語つたという。すなわち海軍飛行機は、今や「無」に等しいのである。この際においても、陸軍飛行機は出なかつた、「これからは出るはずであるが」といったそうだ。海軍は太平洋に、陸軍は支那大陸にと

いのが今次戦争の実情である。

朝、大倉組へ日本外交史研究所のことを頼みに行く。それから満鉄に行ったが、返事面白からず。社長の小日山直登に手紙をやったが、返事だになし。

晩のラジオにより敵はグアム島（大宮島）およびテニアン島に上陸したことを発表。

高瀬大佐は、サイパン島の日本兵四万、在留邦人二万五千——ほとんど裏切り者はなかったといったそうだ。その内のあるものは助かったにしても五万以上の戦死は確実なようだ。

現在の情勢になるも陸軍については、全く勧告染みたこともいえない。その一例として『中部日本新聞』の社論において「軍需生産行政の飛躍を要望す」と題して、小磯首相の「国務は統帥に帰存せねばならぬ」といったのにつき——この文字は一体何を意味するのだろう——左のように論じている。何をいつているかわからないが、それが余程思い切った言い方である。

『中部日本新聞』「社説」七月二十六日 軍需生産行政の飛躍を要望す …「統帥を離れて国務は無い。」…「生産は作戦に帰存せねばならない。」…「作戦も亦それを裏付ける生産の実務及びその発展動向の的確な把握によつて、一層精密且つ充実せしめられるのではないかといふことである。果して然りとすれば、かかる見地から優秀なる産業指導者を起用し、いはば生産幕僚として活用する道を拓く余地が全くないものかどうか。われらは決してこれを以て右の鉄則に抵触するものと考えない。それどころか作戦と生産の直結要求がこれによつて最も効果的に達成されるものと信ずるのである。』

同じ意味のことが東京の新聞の社論にも先頃出た。作戦を生産と並行せよとの意味だ。しかしこれまた遠まわしで分らない程度の書き方だ。

軍に対しては讃辞以外には全く書くことが出来ないのが現代の実情だ。

ヒトラーは健在だという。しかし、ゲッベルスを全面的戦争動員総監に任命した緊急令には「ヒトラー

總統は国防協議々長ゲーリング国家元帥の指示に基き……」とある。ドイツでは従来ヒトラーが絶対無二の存在だった。かれが「指示」されることは全く始めてだ。何か内情がある。前後の事情から、革命は余程進んでいるらしい。陰謀の主が軍部の大立物ベック元帥であるというし、「他の命令に服するな」という布告もしている。ナチスの命運がいよいよつきる時が来た。

東條が改造を企てた時、岸が辞意を出さなかった。総辞職を主張したのである。憲兵隊（警察？）は、岸を引きくくることを考慮したそうだ。現にその運転手は検束された。緒方などが、あることを強く主張すれば、「引っぱられる」恐れあり。それが我国の現状である。かつて須磨情報部長は憲兵隊に召喚されたのである。

七月二十七日（木）

一日中、在宅。半疎開のため昔しの手紙など整理。一九三〇年に米国から欧州に渡った頃のこと想出さる。米国西部の日本人——山口、入、有馬、両角の諸君の

親切が想い出さるのである。山口その他の消息如何。

鈴木文史朗君曰く情報局から新聞へ来る指令を見ると極端な侮辱を感じる。まるで子供に対する指図の如きものであると。しかもこれが、新聞社にも這入れないような若い下級官吏によつて決定指令されるのである。政治、外交の幅と見識が低下するのは、そうした下級官吏——上級だつて形式主義だが——によつて事実上の国政が左右されているからだ。

従来、内閣が変ると、必らずその意味、書き方等、一一情報局からいつて来たが、今度だけは何にもいつて来ないと東経編輯長がいつていた。

七月二十八日（金）

野菜の配給ほとんどなく、妻君達は田舎への買出しに狂奔している。煙草も買えず。附近の煙草屋で七時に売り出すのだが、えんえん蛻々長蛇の行列、今朝も十六人前で売り切れてしまったそうだ。

『オリエンタル・エコノミスト』の編輯会議。参謀本

部で五部買上げ、友人に送ることにしたそうだ。官製ならざる言論は、外国人にも信用があるということを、結果において知りながら、総合的に考えることができないのだ。それにしても、この言論圧迫時代を、孤城を守り通して来たのは石橋湛山氏の『東洋経済』だけである。確かに将来、特筆に値する。

新小磯内閣で、陸海軍の両相が発言して、四ヶ条の提言をなしたが、それには「国民士気の昂揚を図るため輿論の明朗化につき特に考慮を払うこと」というがある。(二十八日の閣議)。「何故に士気が昂揚しないか」というのが、従来の官僚軍人の疑問であつた。緒方の情報局総裁就任も、ここに一応の具体的な頭を見出した。

経済クラブ主事岸野君の話。昨夜、甥の海軍々人が訪ねて来た。運送船がサイパン近くで魚形水雷にやられ、海に泳いでいる事十一時間。救われてサイパンに赴き、療養の後、飛行機で数日前に帰つて来た。その話によると軍隊が約六万。それにその地方の島から

集まつた市民達が四万。十万人ぐらい居つたろうという。だから全部で六万人というのは、少し少なすぎるとの話。

今回の戦争で生命を喪つたものの数は意外に多いらしい。まだその損害数を一回も発表して居らず。ただ米国側の発表を嘲笑しているだけだ。おそらく最後まで戦争の真実を知らせぬであらう。

七月二十九日(土)

サイパンその他の島に居る日本人に、全部の玉碎を強いないで、せめて普通人にそこに居残ることを命じたらどうだろう。そうすれば将来、その経済的基礎ができるのである。いまのように全滅では、米国側には、あつたえ向きである。何にも残らず、彼等の自由になるからだ。しかしこうした事は絶対に論議できないのだ。

食糧を南方の諸島に運ぶのに、最早運送船がない。そこで水雷艇と駆逐艦で運ぶのだそうだ。これは岸野

君の甥の話。同人は食糧品運搬の任にある人。船がないから、今は内地で積込みを監督しているのだと。

【朝日新聞七月二十九日】松前重義博士応召 無装荷ケーブル、電波兵器の権威として知られる通信院工務局長工博松前重義氏はこの程一兵士として応召入隊したⁱ」

こうした例は無数にある。戦力増強の中枢人物を「一兵士」として召集するのだ。

世の中に思想ほど恐くないものはない。それはその人の納得なしには這入って来ないから。これに反し暴力ほど恐いものはない。それは全く自分がどうにもならないから。

甥の定雄、子供三人あるのに海軍に徴兵された三十五、六歳。一つ星もつかぬ雑役的なものらしい。こうしてあらゆる国内の労力をさらいとつてしまうのである。挨拶に来た。

ⁱ 通信省工務局長、東條内閣倒閣に動いたとして、東條の直接指示で招集されたという。

七月二十九日号の『東洋経済』は石橋君の筆として「東條内閣は民心を喪い、広く天下の人材から見放された」と書いている。過去の内閣にしても、これだけ書けるのは石橋君以外にはなし。

七月三十日（日）

雨降る。旱^{ひでり}でりが続いた後、今度は各地に洪水がある。汽車が大分不通だ。食糧問題は本年は非常に窮迫するであろう。

飴一貫目百五十円で買わないかといつて来たものがあるそうだ。二年以前に比して約五十倍の値段だ。

今日から「近代外交史」を書き始む。ワシントン会議から大東亜戦まで行くつもりだ。願わくは文明的な役割りをつとめ、後世に残るものでありたい。

七月三十一日（月）

伊勢詣りをした小磯首相が新聞記者に感想を語っている。先頃の就任当時の話しも愚劣だったが、今度の

ものも下士官的感想だ。これでは矢張り駄目だ。そこに行くとき米内の方がしつかりしている。米内は組閣終了の当日、記者との会談で「軍人は不具の教育を受けて来た」といった。

『日本産業経済』七月二十四日（米内談）：元来軍人が政治向きのことに口を出すことは避けねばならぬと思ふ、政治家で軍人であり得たのは桂大將の頃までのことではないかと思つてゐる、それからの軍人は不具の教育を受けて来た、私はそれでよいと思つてゐる、不具のものが下手な政治向きのことに口を出してみたとしても、それは附焼刃で忽ち剥げる、」：」

伊勢参宮の途、発表した小磯首相談

『日本産業経済』七月三十一日：「私は改めていふが神の實在を信念したい、」：「私は生を皇国に享けた、皇国日本は神国なりといつてゐる、さればこそ古来日本には天佑神助がある、」：今や敵が玄関に、「斯の如き状況

に差迫つてゐると云ふことは未だ国民全部が挙げて日本の本義に透徹しあらざる現状に対し神の試煉を受けつゝあるものと考へねばならぬ」：」

東経の評議員会に出て小磯内閣の噂を聞いてみると、翼政会あたりでも、この内閣には中心がなく、寿命もあまり長くないように観測しているという。

かげにゐる間は、「大物」だとか「首相級」だといつてゐるが、小磯のように喋らせてみると、実力がよく分る。矢張り軍人では駄目だ。それも昔のように陸軍大臣を十年近くもやって、それから総理になるのならいいが、突然出てゐる駄目だ。

八月二日（水）

朝、早く上野出発。軽井沢に来る。学童の疎開などの関係あり、汽車すこぶる混む。

晩に香掛倉庫組合の創会^マあり、鮎沢氏の宅にて晩餐。組合員たる吉阪、蟬山、柳沢夫人等集る。そば、肉などの御馳走あり。

帝大の先生達が、三階の研究室に行くのがやっとだといった話しあり。大阪方面では野菜配給が十日に一度くらいしかないという。吉阪氏は内務省出身者、ジュネーヴに長く在り。第一次大戦のドイツが丁度、日本の現在と同じような情態だったと語る。吉阪氏あたりの機関（金融会社理事長）でも食糧をギャランチャーしなければ、人間が来ない。工場あたりで夜業を喜ぶのは夕飯が食えるからだとのことである。

『東洋経済新報』に石橋君が、後継内閣に対する批評および、註文を書いた。これを情報局が削除を命じたとのことである。「政府誹謗」にわたるからとの理由だ。

昭和十九年八月

その前の号では、やや強いことを書いたが、注意もされなかった。これはおそらく最初はドサクサで方針も分らなかつたが、今や見透しもついたので、奥の手を出したのであろう。

東條の秘書官をやっていた赤松大佐が軍務課長になった。最も重要な椅子に東條の直系を持つて来るところに、その勢力を知ることができる。

八月三日（木）

軽井沢も中々あつし。室内二十八度。

吉阪、鮎沢両君と共に坂本君を訪問。同君の話しに外交畠の重臣（広田ならん）のところに、二、三ヶ月前に参謀本部の大佐級が二人やつて来て、戦争の見込みは立たないから、何等か外交交渉で打開の道なきやを頼んだという。

蒙古国の財政が困難である。同国は阿片の産地だから、これを国営にすれば切ぬけることができる。それを大橋忠一が進言したが、そのため首になつた。聞くと、

その独占権を有しているのが某という男で、その利益金を東條、星野等にやったという噂さあり。北京に在る佐野という司法官がそれを調査したが、そのため転勤を命ぜられた。かれは屈せず、二ヶ月も命令を聞かなかったとか——おそらく噂さならん。しかし政府の最高首脳が、そうした噂をたてられることがすこぶる面白からず。

夕方、蠟山君来訪。牛場君（近衛秘書）が来たとのことである。同君の意見では小磯内閣は、戦争の経過をそのまま発表し、国民の覚悟を促せばよかったのに、これをなさなかったのは謬りだといったそうだ。この事は小磯にはそうした政策方向がないことを物語る。すなわち小磯は要するに戦争遂行内閣である。

坂本君の話しに、英国は最後まで日本と諒解を持ちたかった。欧州大戦が始まり、同君が帰国の前に、英国のアロンという政治家がパリに来て、満鉄の出張所長たる同君と会った。その目的は英国は満州の大豆を

i 小磯内閣が「戦争遂行内閣」であるとしても、発足後一ヶ月で、「発表すればよかったのに」という過去形の表現は疑問。

総べて買う。その代金の支払いとして、日本の必要とするいかなる機械をも提供するというのである。これはかれがバトラーと話し、そのバトラーはチェンバレーン首相と諒解した提案である。政府と政府との話しになれば、英国が断られれば面子の問題もあるから南満鉄道に話すのだ。もしその案がよければ、東京の大使館商務官に話してくれというのである。坂本君は帰朝して種々話したが、そんな話しはテンで受けつけなかった。

坂本君は昨年、支那に赴いて有力人に会見した。その時の話しでは、誰もかれも日本が戦争に敗れるであろうことを語っていた。

緒方情報局総裁は宮中方面に信用がある。東條内閣を倒すために、かなりな運動をした。東久邇宮様が、「俺が出る」と乗出したのには困った。この方を断念せしめるために、骨が折れたとの話しである。（坂本君の話しにあらず）大東亜戦争の勃発当時、宮中方面に、軍の若い者が運動した例に見ても、議会が無力であり、

輿論もない現時において、唯一の道として、そういう方面への運動があることは想像しうるところである。

八月四日（金）

鮎沢君帰京。蛾山君も帰京。源川栄二、子供と共に来たる。汽車が混んで、東京から立ち続けであったそううだ。

Eugene Young の『パワフル・アメリカ』ⁱを読む。一九三六年の出版だ。ワシントン会議の開催に当って、ニューヨークタイムス社長オックスと英海軍相ロード・リーのなした役割を書いて興味あり。また日本のそれ以後の世界政策に乗り出した事情はフェアである。軍閥の責任に帰するところ他と同じ。

支那人が、日支事変以来、日本のために失なった損失は、合計二千万に上るという。軍隊の損失に加えて、シベリアンの死傷あり。――坂本君が支那人の話しなりとて伝えるところ。

i 邦訳『強大な米国』国会図書館デジタル化資料

八月五日（土）

毎日の新聞に社論に非ず、ニュースでないこうした記事が載る。

『中部日本新聞』八月一日 不満はただ一つ……「国家の興亡に当つては唯一つの不満のみが許される。即ち己れの微力に対する焦躁と敵愾心の不足である。」……「齒の浮くような大国民の襟度とやらに徒らに禍されて、敵愾心を鈍らせる敵の謀略を警戒せよ。」……「敵より先きに米本土を、」……」

右はおそらく情報局から与えられる、罐詰記事であろう。（上掲は『中部日本新聞』一日）

首相、参謀総長、陸相を一人で兼ねて、ならざるなき権勢を有していた東條が苦もなく仕れた。その東條は小磯が伊勢参宮をなした同じ日に、赤松大佐その他多数の家の子郎党を引きつれて、同じく伊勢参宮をしている。傍若無人だ。この独裁者が仕れたのは、日本

は矢張り皇室が中心だからだ。この制度により願わくは、過激なる革命手段によることなくして戦争始末をなさんことを。

からだ非常に疲る。營養不良ではあるまじく、原因不明。熱を計つてみると三七度。休む。

八月六日（日）

新聞は、東京で購読していたという切符を出さねば買えず。ここでは新聞なし。ラジオのみが頼りだ。

小磯内閣は従来の「大本営政府連絡会議」を廃止して、「最高戦争指導会議」を設置。その「情報局発表」が「なお別に毎週、定例的に政府大本営間において情報を行うこととせり」と「政府」を先に書いたのが、小さいことながら注意さる。その構成は「陸海軍首脳部と関係閣僚」とあるのみで何人であるかは明瞭でない。陸海緊密なる提携といった決まり文句はここにも出て来る。「いやしくも従来の行きがかりにとらわることなく」というのも可笑しい。大東亜戦争は陸海戦争だ！

【『出典不詳』情報局発表（八月五日）：事態直視万全期す

小磯首相恐懼謹話 …『苟も従来の行きがかりにとらわれることなくよく事態を直視して万全を期して』…

政治的戦時工作の完了…『ここに新内閣下の戦争指導陣容は陸海軍自体においては全く整備を見るに至つた、』…『同会議と大本営会議および閣議との関係も法制的なものではなく政治的關係によつて律せられるものである、』…

『信濃毎日新聞』に、こういう記事がある。官僚統制が、どんなに不経済かの一例だ。

『『信濃毎日』【日付なし】農家の云分 …馬鈴薯を供出しろと言うから行つたら、今度は配給するから取りに來いという、』…『この農家でも野菜づくりを専業にしてゐないからその売上げはアテにしてゐない、苦勞して持ち出すより呉れてやつてよろこばれた方が百姓冥利だともこの頃痛切に感じてゐる（長野郊外生）』…

日本兵の頭蓋骨をアメリカ少女が机の上に置いてある——その事を高田市太郎君が、米国の鬼畜として放送した。

【中部日本新聞】八月六日（ベルリン四日発同盟）米に『首狩時代』再現 独外務省 懺悔写真を披露 …アメリカ雑誌『ライフ』五月号に載った、アメリカ兵が記念に日本兵のドクロを贈った、ドイツ外務省当局が写真を披露した、…』

近頃、盛んに対米敵愾心を煽っている。新聞は盛んにそうした事を動員して書くのである。敵愾心が、思う通りに出ないのか、それともまた内部への注意を、対外に向けんとするのか。（左も同じ日の新聞だ）

『信濃毎日』八月四日 バタアンにみる獸米の本性（東京）…本曾従軍僧談 正に人面の豺狼だ …従軍した当時見聞きしたところでは、敵味方なく埋葬した我々に反

し、アメリカ兵はフィリピン兵に残酷で、食糧を与えなかったり、後から撃つたり、ドクロの件もさもありなん …
長野師範心理学教授 阿部孫四郎 米獸を解剖 一国の元首が人骨のペーパーナイフを使用するということは「アメリカ人が一人残らず残酷な性格を持つことについて疑ひをいれないであらう、」…』

八月七日（月）

家妻と、英二と東京に帰る。一日、雨降る。身体が変調なせいか、東京に帰って、生野菜を食いたい気持です。毎朝、痔せたことを思う。本年春に比して一貫八百目減る。この二、三日煙草をのまず。

原枢密院議長死す。男爵を賜う。何等国政に寄与せざる法律家、榮譽に恥づべし。

頭山満に対する批難、その方面の陣営から聞く。曰く巨額の金を東條は与えていたとか、曰くその長男秀三は特殊技能者ということで徴兵を逃れているとかいうのである。頭山自身も憂国者顔などできた義理でな

く、軍部もお、べん、ちや、ら、を、い、つ、て、い、る、と、い、う、の、で、あ、る、。
 ゴロつき万歳の世だ。笹川良三とかいう国粋同盟の親分は何千万円の財産家だという。右翼で金のうならぬ男なし。これだから戦争はやめられぬ！

八月八日（火）

からだの調子恢復。畠などをやる。晩に鮎沢氏宿る。
 小磯首相、ラジオで放送。何をいつているか分らぬ。
 「天皇に帰一し奉る」ということが結論だが、それは何を意味するのか。これぐらい分ったようで分らぬ文字はない。

八月九日（水）

午后、坂本直道民来たる。一家の識見を有する人だ。板木龍馬の甥に当る人というだけに国土である。

近衛がかつて鳩山一郎を午后九時頃訪問して、日米交渉の経過について語ったとのことである。鳩山は近衛を尊敬していなかったが、その事情は諒した、これ

を打ちこわしたものは松岡（初期において）だということである。

三国同盟について、その威力を以て米国を圧迫するのが目的だったというのは、坂本君の意見では、後につけたものであって、実は軍部の圧迫によつたものだ。来栖はこれに反対で、ベルリンから三回も電報を寄^マ込^マし、米国と相談したらどうかといつて来た。しかしそれに関し返事がなかったそうさ。最後には米国との交渉には自分が行つてもいいといったという。

僕は、軍部の圧迫は事実であろうが、その直後、近衛松岡共に「戦争」を公然いったほどだから、強く出れば対手が引込むとは考えていたろうと語った。

徳寓蘇峰は国民が、ひどい目に逢うのは天罰だといったことをいつている。

【出典不詳…『毎日』戦時版にほぼ同文あり】…「私が最近感じてゐることは戦争目的が国民に徹底してゐないことだ、日本はアングロサクソン中毒の第三期の症状にあ

るのであつてこの治療には藪医者の手当てや仁丹を飲ませるとかといった手軽なことでは治らない、切開手術で治すより仕方ないのである。国民は百年間の永きにわたる中毒に罹つてゐるため、自分ではアングロ排撃を唱へながらその言葉の下から、アングロを信じてゐるのだ」……奴隸制を見よ：「われわれは持久戦になれば強味が出るし、彼等は寄せ木細工のやうなもので少し雨でも降ればすぐこはれてしまふ、そこで雨が降らぬうちと国力を傾けてやつてくるのはそこに理由がある、彼等は人間でない、動物になつてゐる、」……

朝鮮人が大分帰国しつつあるそうだ。台湾には「戦場態勢」ができあがつた。(長谷川総督布告八月五日)。台湾に敵が上陸する危険あるに對する予前措置だ。

八月十日(木)

【『出典不詳』ヘチューリツヒ二日発同盟】天人怒る鬼畜の米兵 英靈の神骨を冒瀆 紙切ナイフ作つて大統領へ贈る ……ワシントン情報では骨の件は幾つかの教会で批判

の声を上げている……」

近頃の新聞が盛んに「日本人の頭蓋骨」云々の記事を書いてゐるが、右は前記の記事だった。軽井沢に来ていたから見なかつたのである。

これに對し国内、各紙は「米獸」といつた記事を盛んに書いている。(次のページ参照)

なお論説だか、記事だからからぬものは、官憲が書いて活字その他を指定して出させるものである。同じ記事が『信濃毎日』と『中部日本新聞』に出してある。「獸米屠殺の部署につけ」とは中々強い言い方である。戦争には勝たなくてはならぬ。ただ果して反響がどうか。

「住友」が日本外交史研究所に二千元を寄付してくれることになつた。これで總計七千五百円だ。

【『中部日本新聞』八月五日 獸米屠殺の部署につけ ……天に代つてこれを誅するものは世界広しと雖も日本人のみである。』……アメリカの植民後未開民族が多く滅亡……」病

院船を爆撃する位は彼等の茶飯事」：彼等をやつつけるには、軍籍に入る、兵器を造る、食糧を作る、国土防衛いづれかである。」

訪問者なく、平静な日を送る。畑をやる。

八月十一日（金）

朝ラジオは米国飛行機が、分散して西九州、北九州、山陰方面を襲うたことを伝う。三回目の襲撃だ。お昼のラジオにも内容として、「満々たる自信を以て、我制空部隊は必勝の……」といった形容だけを放送しただけで、何にも知らせない。

午后旧軽井沢に赴く。途中、大島博光君という露子さんの友人詩人に逢う。先頃、帰りの汽車で老海軍大佐と汽車で同席したが、米国軍は結局毒ガスをまいて、日本人全部を抹殺してしまうだろうと真面目に話して居った由である。そして同君は非常にデスペアー【despair 絶望】していた。

そうしたのが現在の宣伝方針である。『読売』の中央に十段の囲い記事あり。左の如し。（八月八日）

『読売』八月八日 日本皆殺しを狙ふ米鬼を断乎滅せ！

勝たざれば平和なし 帝都は近き将来に第一線 ……一、二ヶ月後には東京にも爆撃が来る、敗ければ奴隸となつて南方にやられる、「いたいけな子供は親の手から引き離されて彼等のためになぶり殺され去勢されて遂に我等の意志を継ぎ得ず愛するわれらの輩や娘や恋人たちは老若を問はず、すべて米兵に暴行を加へられたあけく最後に悪質の病毒を感染せしめられ廃人と化し去らねばならぬのである、現在の戦争においては敗者の悲運はかくの如く死に数倍する深刻極まる苛酷さを覚悟」：「彼等の戦争目的を考へれば一目瞭然である、『日本民族皆殺し』といふ事は敵の宣伝ばかりではない そもそも米英を支配してゐるユダヤの資本家共は利益のためには何も犠牲にするといふ無情破廉恥の野蠻性をもつてゐる」：「ユダヤ吸血鬼共の極悪非道かくの如し、」：「あるひは今後我が底力にへこたれて利を以て我を誘はんとするか

も知れない、然し断乎、断々乎として瞞されてはならない。」：「元寇の役に際し：一人残らず惨殺され婦女子は暴行された」：」

八月五日に最高戦争指導会議が設置された。その時腸はった陛下のお言葉に「渾然一致」というがある。陛下は何故に、そのお言葉を特に御用いになるのであるか。恐懼、恐懼。

【『朝日』八月六日】小磯内閣総理大臣謹話：『最高戦争指導会議を構成する者克く渾然一体となり戦争指導に關する最高方針の策定及び政戦両略の調整に万遺憾なきを期し以て大東亜戦争の完遂に邁進すべし』とのことを賜った、：「今日の重大時局に際し統帥と国務との吻合調整が何よりも大切」：」【これは八月六日の日記に張られた記事と同じ内容だが、別記事として『朝日』と推測。】

『中部日本新聞』七日、題字わき、特別記事

昭和十九年八月

【『中部日本』八月七日 幽霊工員を飼ふは誰ぞ：人前では殊更粗衣、裏で「妾を置き贅沢三昧、闇の暮し」の者が居る、：不完全な兵器を造るのも国賊である、：「いづれ神風が吹くだらう等といふ不逞な考へを捨てよ。日本民族一人残らず地球上から姿を滅するか、更に強く生きて、世界に正義と光明とを与へるかといふ瀬戸際だ。鬼畜敵米を噛み殺しても勝たねばならぬ決戦であることを考へたら日本人らしい行動とは如何なるものであるかの判断は直ぐにつく」：」

八月八日（『中部日本新聞』中央七段ぬき）

【『中部日本新聞』八月八日 総武装せば必ず勝つ：「我等の祖国日本は今安危興亡の関頭に立つ。一億起つて総武装すれば必ず勝つ。」：心配するのは死力を尽していないからだ、：「敵米英を過小評価して安価な自己満足に耽る愚劣も敗戦主義だ。」：」

【『読売』八月十日 鬼畜性・英兵も劣らず 遺骸の腹に炸

葉 人間土囊や肉顔標的 北緬の密林に繰ひろぐこの悪虐（北ビルマ前線藤井報道班員八日発）イギリス兵も新兵訓練に敵遺骸を標的にしている、；アメリカ兵の死体侮辱事件はドイツでも非難の声」

右の如き記事が毎日出る。鬼畜なりとの恐怖心を植えつける宣伝方策だ。実際、一般人は、（知識階級も）日本人は抹殺されると信じている。

八月十二日（土）

午后坂本直道君を訪問し、共に鳩山一郎氏を訪問す。一回しか逢ったことがないので、忘れていたが、名乗るとすぐ思い出した。午後二時半ぐらいから午後八時頃まで、種々の話を聞く。ことに東條首相辞職から、小磯首相就任までの事情が面白かった。僕は重臣会議が、多数決制度になると何人も責任を負わなくなる、これは内大臣が、飽くまで責任を負う組織とせねば駄目だといった。

その話しの内容は別に書くが、東條内閣に対しては重臣がまず失望して動き出したのである。これに対し軍部では、これに反対した。赤松秘書官は、もしこの際、東條をかえる如きことあらば、折角一本になった軍部がまた紛糾する。その責任は、貴方が負わねばならぬといったことを木戸内府にいった。

鳩山は自から時局收拾の衝に当る抱負を有しているようだ。また事実、従来、便乗連に一切背を向け来たり、翼政会からは脱退して自由の立場を有して来たので、立場がはっきりして居り、重臣——殊に近衛などが目をつけて協力しているのである。

鳩山が検挙されたという噂は、しばしば聞くとところだ。鳩山のいうところでは、かつて塚本（？）という憲兵隊の課長が来て、「自由主義者」といったことについて問答した。その結果、かれはことごとく感心して「自分が職にいる間は断じて指一本でも指させません」といった。爾来、しばしば時に上ったが、全く安全である。「先生のことを再々投書して来ますよ」と憲兵が言つて

いるという。その塚本という中佐は「鳩山は偉い男だ、他日必ず総理大臣になるよ」と誰の前でもいうという。

陸、海は喧嘩している上に、官庁の形式主義は少しも直つて居らぬ。ただもう判だけ押している。そしてそれが「西洋的」だと考えている！

『読売』『陣影』八月七日 近ごろ家を借りるにも役所の印が十三要る、すくない方である、戦時体制といいながら、「他は推して知るべし」、「大化改新後の唐制模倣時代」もあつたことだが、「今は西洋法学思想によつて右の如く吾々は同様の不便や苦しみをなめてゐる」……

各新聞に「最高戦争指導会議への要望」といった論文が出ている。どの新聞も書いてあるから、これも若い軍部が書かしているのであらう。

緒方情報局総裁は、新聞に対し末梢的干渉をせずと九日言明した。しかし、その事が果して可能であるかどうか。役人は上長に従うような心的姿態になつて居

らぬ。

鳩山は人なつこい、開放的で好感が持てる。智的でもある。この人の舞台が来るであらう。大胆で、度胸もある。右翼に対し「戦争は勝てると思わん」と平気でいつているらしい。人徳がある。彼には、兎に角、良心的な人々——例えば芦田、植原その他——がついている。場合によれば百人ぐらひは集まるだらうという人もあると自からいつている。

八月十三日（日）

朝早く、大島君と吉田正君（日大教授）が尋ねて来た。汽車が超満員で乗れぬものが溢れているとのことだ。

昨日、鶏を井出君が買つてくれ、おかげで御馳走あり。ただし二十円とすれば一回のおさい五円を下らず。

東京の野菜饑饉はますますはなはだしいとのことである。「統制」というものが、この事態を齎（もたら）せたことに言及するものはほとんどなし。

綾子と瞭来たる。

八月十四日（月）

朝早く出発。軽井沢から倉橋藤治郎君と同行。

「東洋経済」に出席。

晩に町田忠治國務相と会談。長谷川如是閑、馬場恒吾、石橋、高橋亀吉の諸君あり。

最高戦争指導會議は総理、参謀総長、軍令部次長、陸海大臣、重光外相である。軍需相は出ない。決戦をいつやるということを議している。同氏の話しは（日支関係当初の）別に書く。

配給はますます悪く、軽井沢から持参せる大根一本ずつを皆な喜ぶ。石橋氏の話では一ヶ月の副食物の配給料は一日平均野菜二錢二厘、魚その他二錢、合計四錢二厘であると。また誰かの話しでは一ヶ月四大家族の配給金額四十二円某しである。高橋君の話しでは、人間の必要カロリー二千三百の内、現在配給されているのは一千四百カロリーすなわち六割ぐらいであるという。各人の目方の減少は近時特にはなほだしいうさだ。

八月十五日（火）

外政協會に安東という条約局長の話しを聞く。誰でも知っていることを、新聞にある如く述べる。自分の意見をいわぬ。「ドイツはどうか」という誰かの質問に対し「それをいうのを遠慮します」というのである。つまり依然として本当のことはいわぬのである。外交官としてつづが小さいし、頭も悪い、これで外交はできず。

半沢玉城君、東條内閣瓦解翌日より公式な場所に出で、今は、外交協會に出席しているを見る。一緒にお茶を、馬場恒吾君と共に呑む。

憲兵隊では野村前大使が、「米国は日本と戦争をする意志はなかった」といったかどうかを執拗に聞いたそうさ。半沢の意見では野村をも場合によれば引張るつもりらしかったと。

馬場君の話しでは、東條の辞職少し前は、クーデターをやるところまで行っていた。憲兵隊に検挙されたも

の四十余名の多きにおよび下園（木戸のところ）に出入記者）その他が現に検挙されたままになっていると。

八月十六日（水）

「住友」から日本外交史研究所の基金二千円受取る。本年度限りで、来年はまた交渉してくれという。その金を三菱丸ビル支店に預く。

東経にて「外交を強化せよ」の論文を書く。

八月十七日（木）

白柳秀湖氏来たり二時より午后六時まで喋る。第二男坊の嫁さんがいないかというのである。

――――。

白柳君はこんなでは日本が亡びるだろうといった。この点で、かれは「日本国民」に甚大な自信を有していることと矛盾している。しかしかれは、有色人種の内では優秀だから生きぬくであろうともいうのである。

昭和十九年八月

晩に黒木時太郎氏に招かる。西村伊作氏及び鈴木文史郎君あり。西村とは、かつて文化学院の経営者。不敬罪と言論取締法（？）にて八ヶ月の禁固の宣言を受けた人である。明つ放しで面白し。しかし誤解さるるおそれは充分ある人だ。若い時、外国で勉強した人で、そうした影響が見える。

八月十八日（金）

朝、嶋中君の自宅を訪問す。顔色もよく、大分回復している。家に来ることを遠慮する当り、仕事がなくなつて、もう態度が變つて来ている。

外務省に赴き、高柳君と語る。

僕は、いまや最後の決戦に入る前に、日本は米、英にピース・オフエンシヴ【peace offensive 平和攻勢】をやつたらどうかと話した。すなわち大東亜宣言の線に副うて、支、タイ、比島その他から全部撤兵すると声明して、その条件でフィール【feel 手探り】したらどうか、重光外相に一応注意すべきだと話してみた。

敵の例の演説などが、いかにわい曲されるかの例――

日新聞にはある】

白柳君曰く

誰かが、一番一生懸命で働いているのは米国の俘虜、それから誰とかで、第三が学徒だといっていた。

【『東京新聞』八月十九日】（ローズヴェルトの談話）…第

一次大戦でドイツが国境に至らぬ前に休戦した、為に今次大戦が起こった、「日本に対しては将来日本がその他の各国と協力する態度を事実をもって示さぬ限りは永久に世界から閉め出しを食はせねばならぬ」…

【『東京新聞』八月十九日にはない】ル大統領華府帰還（ヘリスボン十七日発同盟）太平洋戦線の視察を終えたローズヴェルトは近々チャーチルと会談するだろうと…（『東京新聞』八月十八日夕刊）

以上、十七日、新聞記者への会見談

以下、十九日（土）各紙

〔八月十九日各紙 ルーズヴェルト豪語…〕反枢軸軍は今度こそかかる誤まりは起きないだらう、日本に対しては永久に世界から締め出しを喰わせねばならぬ」…【朝

八月十九日（土）

『朝日新聞』にサイパン最後に関しタイムの記事が打電されて来ている。少年も死に、黒髪の婦人も死ぬ。「この自殺は何のためか、『アメリカ人は野獣だ。誰もかれも殺戮する』ということを感じたためであろうか」と反問している。

サイパンの十万に近い軍人と非戦闘員は、こうして死んでいったのである。それは封建的イデオロギーの犠牲である。軍人指導者に必随する行為である。ああ。

〔『朝日』八月十九日 壮絶・サイパン同胞の最期 岩上、大日章旗の前従容、婦女子も自決 世界驚かす愛国の精

華（ストックホルム渡辺特派員十七日発）：「米誌の報道をかりてサイパン在留同胞の最期を故国に伝へたい」
：『サイパン島の北端マツピ山と呼ばれる場所に出かけた』：戦死者収容作業をしている隊員が言う『一昨日から昨日にかけて男、女、子供の日本の非戦闘員数百名がこの崖の上にゐたが、それが皆一様に崖から飛び降りるか、崖を降るかして海に入つてしまつた、私は或る父親が三人の子供を腕に抱きながら身を投ずるのを見た』
：『こんなのは何でもありませんよ、西側へ半マイル下つたところにはこんなのが数百人もあますよ』：『自分は白いブラウスにカーキ色のズボンをはき黒髪を水に漂はせた一人の女に打つかつたが、白いブラウスを見かける度にあの女のことを想ひ出してはならない、また四、五歳の少年が武装した日本兵の首にしつかり腕を巻きつけて死んでゐるいぢらしいのもあつた』：『息をこらして見つめてゐるとやがて日本の女連は互ひに手に手をとりあつて静かに水中深くはいつて行つた、マルビポイント断崖上の岩上に集つてゐた百余の日本人達は厳肅な儀式を行つた、断崖下に現はれた海兵達を見ると彼等は平かな岩の上に大きな日章旗をひろげ、手榴弾を分けあつ

た、またある日、海兵隊の兵は約五十人の日本人、それも小さい子供を加へた一面が丁度野球試合前に選手がウォーミング・アップをやるやうに嬉々として手榴弾を投げあつてゐるのを見て胆をつぶしたことがある、そこへ突然、今まで穴の中から米兵を狙撃してゐた六人の日本兵が現はれると見るや「玉碎とはかうするものだ」と非戦闘員に教へるかのやうにその一団の目の前で自殺して見せた、この自決、この玉碎は一体全体何のためか、何を意味するであらうか、』：「

アツツと同じだ。こうした無意味な、醒^マ惨^マな最後をして、願わくは大東亜戦争を以て最後ならしめよ。

陸軍は衡陽をとつたというので、毎日毎日新聞とラジオで「わが雄渾豪壮な作戦」の形容をくり返させている。それと同時に、敵は「執拗の反抗」をなし来た旨をも報ずる。なにをしていることやら。

八月二十日（日）

この新聞も『タイム』のサイパン最後の記事の翻訳

あり。凄壮である。三歳の子供が死んだとか、女が自

殺したとかと書いてあるところを、打電者（編輯局内か）

が形容詞たつぷりで悲奮^マしている。日本人には、記事

をそのまま書き、読むことはできないのである。各紙

とも、女の自殺をとりあげ、『読売報知』は「日本婦人

の誇りよ、昭和の大葉子」斎藤劉、「百、千倍の勇氣湧く、

光芒燦たり、史上に絶無」平泉澄。朝日「偉大な民族

の血潮、時来れば光発す、戦時彩る女性の殉死」高柳

光寿、「かくてこそ強し、日本の真姿」岩田豊雄、とい

うように、新聞の半分を割いている。封建主義——浪

花節の影響——飛行機時代に、ハラキリの絶讃。

英二君の話に、飛行機が非常に多く空中分解する

という。同人は軍人に友人が多いが、東久邇宮様すら、

こう飛行機が悪くてはどうにもならぬと、大変な御悲

観の由。工場に数を六^{むす}かしくいうので、その数だけ出

す結果、内容が悪くなるのである。「予科練」の連中が

十一月頃巢立つが、それまでは小笠原はもつまい、結局、

先方の来るのを迎え打つ以外に方法はないという。こ

れは某少将の話。

午后五時より一時間ばかり、九州、中国西部を米機

空襲した旨のラジオあり、白昼とは、少し、なめられ

た感がある。「我方地上に若干の損害あり」と附言す。

八月二十一日（月）

昨日の空襲で新聞が一杯だ。雑報欄は疎開の記事だ。

説教と形容で満つる新聞は、歴史上、現日本を以て最

とするだろう。

『毎日』八月二十一日 ……「降りた敵に対しては武器抵

抗でもしたら叩殺さんと怒りの制裁を用意したものもあ

り。…「敵へ日本刀をふりかぶると忽ち両手を挙げ」…」

落下傘で下りたものが「昂奮して口もきけず」と新

聞にはあるが、そんなに昂奮するとは思われず、打ち

殴ったのではあるまいか。

「東経」評議員会に出席。ただし誰も居らず。どこも、

ふんだんに砂糖を使ったりした料理を食っている由。敵機来襲が近づいたので、貴重品をとって置いてもつまらぬという気持ちからである。

翼壮会の団長に建川美次中将、副団長に橋本欣五郎大佐と、それから小林順一郎大佐。いずれも二・二六事件や五・一五事件の本尊であり、戦争放火者である。この人事だけが小磯が自分でやったものの由で、かれがいかなる男であるか知るに足る。

町田忠治氏はボケてはいないが、その視野は、経済技術家の域を脱しない。高橋亀吉素より然り。有能だけれども、高橋の意見が戦争を起すに責任があつた。

八月二十二日（火）

二十一日午前一時（二十日真夜中）再び敵機来襲、落さず。

『毎日』八月二十二日 敵が降りたら捕獲して軍に渡せ

…『落下した敵兵は捕獲しなければならぬが、自衛行動

の必要な場合もあらう、一般の人が発見したならば緊急を要す場合は別として至急、軍、警察機関に連絡、指示を受ける、』…『状況により捕獲出来るものなら捕獲して軍に引く渡す』

上記、保護を加えろというような文字は一つもないことに注意を要す。

『日本産業経済』八月二十二日 不埒なり決戦を路上で観戦 現地憲兵分遣隊長嚴重注意 …北九州に敵機来襲時、友軍機や地上部隊の奮戦を見学する者が多かった、『待避信号は厳守せよ』…』

どうすればいいんだ、みられるのが嫌なのだろう。

午后、東経社論を書く。

八月二十三日（水）

外務省に赴く。もう夕飯はどこでも食えず。

小磯首相の地方長官会議の演説愚劣ますますはなは

だし。こうした男を首相に持つて来ねばならぬのは、偏えに軍部の組織が、政界の中枢部を占拠しているからだ。この大切な時期に遺憾限りなし。

朝鮮の総督阿部とても、その頭は小学生程度である。朝鮮人のインテリ、帰国頻々。東洋経済の平山君（鮮人）曰く、日本が勝つても負けてもこの戦争は朝鮮にいいと。成程その通りだ。

八月二十四日（木）

形式主義はますますはなはだし。

『毎日』八月二十四日 国防経済研究所長、代議士、商学博士田中貢氏談 「◇ある工場では生産高はたしかに二倍になつてゐる、しかしこれには工員の数が二倍になつて、職員が三倍になつて、驚くことには資材係員といふものが四・二倍に増加してゐるのだ、ある工場では工場新設のため十六万一千枚の書類を提出せねばならなかった、またある造船所では定期報告と称するものを二千七十二件について行はねばならず、このため

五万四百十一枚の紙を要したといふ、その作成に要する時間と労務は無駄といへないであろうか、かういふ無駄は実に「統制」によつて生じたものだ、換言すれば増産を阻害する……」

反省の時期である。

指導者原理、統制主義、曰く何、曰く何。

それ等が国家のためによかつたか。

宇都宮に赴く。

サイパンの最後について、各新聞共に、外国がこれに非常に感心しているように書いている。幕末の武士が、あの服装をして海外に赴き、外人が感心したと書いているのと同じ心理だ。

[Fighting Spirit, Oh……]

Shown by Japanese……

Domei

LISBON, August 19-Two U.P. correspondents, who recently returned to the United States from the Mariana front, expressed

awed amazement at the indomitable fighting spirit that inspire the men of the Japanese Forces to charge into the enemy in complete oblivion of death with shouts of "Banzai."

"What impressed us most in the operations against Saipan, Guam and Tinian Islands was the fact that the Japanese soldier is not only fearless of death but that he seems actually to welcome death. In this respect the Japanese are hitherto unencountered and strange adversaries. A Japanese soldier considers it the supreme glory to be deified at Yasukuni Shrine.

"For example, when the Japanese were hard pressed in their mountain position by the American forces, they suddenly launched a death charge with shouts of 'Banzai' on their lips. At Tinian and Guam also, the Japanese Forces hurled themselves against us in daring charges. When he is engaged in actual fighting a Japanese soldier seems to forget everything else. Consequently, the Pacific theater of war in the future will be a repetition of still bloodier fighting and the American forces will have to be prepared for greater sacrifices."

【闘志…日本人によって示された…(ヘルスボン発八月十九日同盟)マリアナ前線からアメリカに戻ったUP特

昭和十九年八月

派員は、「バンザイ」を叫び死を完全に忘れ敵に立ち向かう日本兵士達を鼓舞する不屈の闘志に畏怖の驚きを表明した。「サイパン・グアム・テニアン諸島においての作戦で我々に最も感銘を与えたことは、日本兵が死を恐れただけでなく死を歓迎する風であったという事実です。この点で日本人は今まで遭遇したことのない見知らぬ敵です。日本兵は靖国神社に奉られるのを最高に榮譽と考えます。例えば、日本人はアメリカ軍によって激しく高地に押された時、彼等は唇で『バンザイ』と叫び死の攻撃を突然開始しました。テニアンでもグアムでも、日本軍は大胆な攻撃で我々に飛びかかりました。実際の戦闘に従事している時、日本兵は他の全てを忘れているようです。従って、将来太平洋の交戦圏はさらにより血なまぐさい戦いの繰り返しで、アメリカ軍はより偉大な犠牲の準備が出来ていなくてはならないでしょう。】

宇都宮に講演に赴く。汽車切符を買うのは、とても大変であり、十分の一ぐらいしか買えないが、汽車の中はガラ空きの状態である。聴衆は七、八十人である。

ドイツが危ないことを円曲^マに話す。パリは一週間ぐらいの間に落つるだろうといった。

宇都宮あたりの田舎で唐^マもろこしが一ふさ二十錢から普通は五十錢ぐらいするという。米が一升十円とか。砂糖は東京で一斤二百五十円が普通だという。

東京の疎開児童の問題が、田舎で負担になつてゐる。米の配給が東京は三合六勺なのが、地方は二合六勺だとかいう。また砂糖の配給料も異なる。そうしたことが一一問題になるのである。

経済会の会頭その他により「第一八百駒」とかいふ料亭で御馳走になり、晩は宿る。部屋や廊下暗し。

八月二十五日(金)

宇都宮を朝、出発。東京で紫雲莊事橋本徹馬君の談話を石橋君と二人で聞かんがためだ。

橋本徹馬君は昭和十五年頃より日米関係調節に乗り出し、その要務を帯び近衛内閣、陸、海軍より費用を出させてワシントンに赴き、国務省極東部の連中と懇

談して来た人である。元来、右翼であるけれども、グルーやクレイギーなどと交渉したため、米国人のよさをも諒解するに至り、今や何人よりも親米的である。三時間ばかり経過を聞く。(別記)

ルーマニア国、二十三日、ソ連と休戦し枢軸国より脱落す。

新聞で、既に小磯内閣がスロ・モーであるといううなことを攻撃している。軍部および憲兵隊が、小磯内閣攻撃を奨励しているらしく、今朝の『朝日』にも「統制弱化を戒む」といった論文あり。『東京新聞』にもスロモに関する攻撃がある。『東洋経済』が、東條内閣を讃めなかつたことに対し前者は、削除、後者は嚴重注意を食つたそうだ。「新日本同盟」という高広君(英二君の友人)の団体に憲兵隊が来て、少し現内閣の批評演説会をやつたらどうかと水を向けた由。東條一派が軍部を押えて、そこから憲兵を使つてゐることが明らかだ。これを、また新聞が、便乗してゐるのである。この国民に対しては弾圧以外に方法はないのか!

軍部はまだ、最後に神風が吹き、戦争が大勝利を以て終ることを信じているようだ。

橋本徹馬君は、今のところピース・オフエンシヴや講和工作などをやるのは全く早いといっている。つまり、このままでは国民は、実情を理解しないというのだ。それでいて同君は天佑神助を信じて、日本が結局ヴィクトリーを得る——少なくとも総てがオー・ライだと信じている。

八月二十六日（土）

古本屋に行く。近頃は僕の最も好まない本——即ち徳富蘇峰だとか、「日米戦争論」だとかいったものを買う。昔しのことを書く準備だ。

八月二十七日（日）

朝からの客。大熊真君、警察の水野君、そこに小汀利得から電話がかかってコーヒーを呑みに来いという。応諾。

午后二時半から、家内と小汀家で御馳走になる。柿内という医師あり。矢張り、米国人が日本人を抹殺するといった考え方をしているようだ。順天堂という大きな病院に医師は同氏と、台湾出身の人だけである。台湾人、朝鮮人に徴用がないのだ。

朝鮮人が半島に引揚げ中である事実は、山田君の話しても明らかだ。東洋経済に居った二人の鮮人はいずれも、朝鮮に帰った。

鮮人である平山君は公然曰く、大東亜戦争は、日本が勝つても、敗けても朝鮮にいい。勝てば朝鮮を優遇するだろうし、敗ければ独立するのだと。大熊真君の話では、外務省に朝鮮人の官吏がいるが、明らかに日本が敗けてくれることを希望するような口吻である。

八月二十八日（月）

東洋経済の評議員会に行く。平君、岸本君、本日より評議員会に来た。岸本君は文理大と法政大学との

先生であるが、金融学会に来て仕事をするのだという。

軍部は「政府は言論を明朗化するといっているが、こちらはこちらでやるんだ」と。そこで東條前内閣を攻撃するようなことは一切弾圧するのである。こうした注意や切りとりは、一週間ぐらいたつて来る。それは命令の出どころが、情報部や、内務省ではなしに、陸軍報道部である証拠だ。

言論検閲が情報部、内務省、警視庁、陸海軍報道部——いずれも独立の権限を有して、競争でやるのである。

八月二十九日（火）

外務省より囑託の辞令出る。書込む書類が、写真、戸籍謄本等、とても大変だ。「役所的」である。

議會で外交問題に対し、質問応答の形式で日本の条件を発表するに、やや決定した模様だ。

米沢靖君の希望により昼食を共にす。同君の話し。

一、三菱銀行で土工を頼んだ。午前二時間、午後二時間で十六円。一時間四円ずつだ。然るに同行に働

く者は一ヶ月百二十円ぐらい。不平が起るのは当然だ。

二、朝鮮人にして一億円以上の金持は十八名あり、その内二人は二億円もある。彼達は独立運動に金を出しつつあり。

在日朝鮮人百三十万人。

三、石油は戦争前の生産量は三十四万噸^ト。今は十四万噸を出でまい。機械はバレンバン等に送ってしまったから増産もできない有様だ。

四、金の産額は戦争前は四十噸——現在では十四噸。共栄圏内の不換紙幣は四百億円であろう。

八、鉄の産額は昨年は四百三十一万噸——現在は三百四十万噸ぐらいならん。

満州は百五十万噸より百二十万噸に低下。

六、船は開戦当時六百八十五万噸であつた。然るに本年四月現在で百五十万噸。今や八十万噸前後ならん。この外に徴用船あり。総計百五十萬^マ噸を越すことなからん。

八月三十日（水）

いよいよバリ陥落。実は敵側の放送では二十五日に無条件に明渡したということである。（二十九日とドイツ側発表）

【『中部日本新聞』八月二十九日】 怨敵退散般若心経 各
宮殿下も御浄書 …「般若心経一千万巻の浄写運動は曹
洞宗宗務所の発意で」…「中等学生百二十万人が出動」
…小磯首相以下数閣僚、皇室数名…永平寺でも大法要…

各方面に戦勝祈藤会開かる。その智的程度が元寇の
乱当時に大差なきことが分る。

八月三十一日（木）

ワシントン会議のことを書くために、大正十年の『東
洋経済』を読む。『東洋経済』の論調は自由主義に徹し
非常によし。

昭和十九年八月

九月一日（金）

大震災記念日。鶴見に詣る。墓場の鉄柵は全部取り去らる。総持寺の銅像もなし。いずれも徴用されたのである。橋には鉄なく、窓には金具なし。大東亜戦争は、根こそぎに鉄類を日本から奪ってしまった。

国際関係研究会事務所に立寄る。柳父君居らず。それから外務省に行く。

欧州戦争が始まって満五年になる。五年が総力戦の峠だとかつて僕はいつたが、ドイツの降伏はもう目の前にある。

大熊真君、太平洋戦争の見透しにつき、僕が悲觀的なことをいつたをも想出したそうで、「景氣のよかった時は、どうかと思つたが、先見に服するよ」と。

九月二日（土）

「東洋経済」で日本外交史研究会のために封筒とか、その他を注文す。

日本外交史研究所といえ、大倉喜七郎氏に手紙を出し、また秘書をも訪問したが返事さえせぬ。實際、あたつてみて、お金というものが、中々そう簡単に出さぬものであることを知る。大倉男の如きは、もつと、こうしたことには同情があると思つた。

東條靴店に久し振りに寄る。靴屋は統合してしまつたそうで、同店は営業権を失なつてしまつた。そして銀座のどこかに統制会社ができた。「これでは絶対に物もふえず、いい品物でもませんよ、誰も責任をもたないですから」という。

同君などは日米戦争の結果に、非常な恐怖を抱いている。僕は「日本民族を、米国はどうすることもできないものではない。問題は国内において騒動が必らず起り、食糧饑饉に瀕することは必定だ。」というた。つまり国内問題に、より多くの危険性があるといった。松本で工場を買う決心も、僕の話しでついたようだった。「あなたの樂觀論で勇気づきました」とかれはいつた。

九月三日（日）

軽井沢に來たる。汽車の二等で立ちづめである。軽井沢までを坐れないで來たことは今回が始めてである。切符を購入することが非常に困難である。清明だから買ふことが出來たが、あらゆる連絡をたどつた結果だ。それでも家内が五円お礼をやつたとか。

庭前の芝、またのび放題になる。管理人たる井出君、近頃鼻息すこぶる荒し。都市のものが、あまりおだて、すぎるからである。大体に田舎の農業家の鼻息は當るべからざるものあり。何にもやつてくれぬ。

突然一婦人尋ね來たる。暫らく話している内に、それが笠間夫人なることを思い出す。「戦争はやみませんか」といつた質問である。要するに荷物などをいかにすべきか。一人で、どうにもならないとて相談に來たものらしい。鶴見君と極端に感情が対立している。鶴見君が、非常に惡らつた細工でもしている如く話した。鶴見君もそうだろうが、この婦人も、少し可笑しいようだ。

九月四日（月）

お昼のラジオによりフィンランドがソ連と和平交渉を行い、ドイツ軍に退去を要求したことを知る。ドイツはこれを承認した。

先頃、誰かの話しに大島大使からの報告が、一報ごとに悲觀的で、警戒を要望して來ている由。この男が今頃、なんだといいたくなる。この先生の報告や活動が國家を謬つた一原因だ。

総理大使^マが軍人、滿州大使、朝鮮總督、台灣總督は何れも軍人、實際政治を運用しているのが軍人。これで日本が旨くいく道理なし。無智が指導しては。

九月五日（火）

正宗白鳥氏訪ね來る。毎日、新聞ばかり読んでいるという。

新聞は新購読は一切できない。予も軽井沢に來ると無新聞主義になりラジオだけが唯一のニュースの源泉で

ある。

ワシントン会議前の朝日新聞を読む。

九月六日（水）

正宗氏との約により、井出君を伴い、まず御代田村に原田忠一郎君を訪問す。旧家である。コーヒーなど御馳走になる。それから岩村田に出で、税務所に立寄り、三岡に赴いて桃やトマトを買う。生れて始めて買出し部隊となったわけである。

岩村田という田舎でも、食堂やそば屋は全くなし。統制がようやくこの田舎にまで浸透したるを見る。

敵の攻勢に対し、各方面で竹槍の訓練が行なわれている。

『朝日』九月六日（婆心生寄） 竹槍訓練も、肉弾をぶつける気魄も居るが、「実際の戦場において必要な各種の技術訓練を組織的に行ふやうにすべきではないか。戦争の様相に即応した訓練を施し国民総武装総蹶起をして一

層実用的な内容充実したものにしてゆきたいと思ふ。」

…」

軍人や、八百屋の主人が音頭をとっている証拠だ。

帰って来ると蛾山雅子さんに逢う。今日鮎沢露子さんと二人で来たが留守だったという。雅子さんと共に家に来る。政治に興味を持ち、また非常に頭のいい婦人の方である。その事は聞いていたが。

かの女の話——

東京女子大学は今年、四月、五月頃、随分憲兵隊のために虐められた。靴ばきのまま、正服の憲兵がチャペルに来て、いろいろ調べたりした。カナダや米国から来た壁の装飾もがした。またチャペルの塔の上に、高射砲を据えろと主張して聞かない。更に構内の樹を切れともいうのである。文部省に聞くと、そんなことはないはずだという。結局、憲兵の下端の独断の嫌がらせであることが分った。

生徒が、しばしば学校当局に抗議したほど、唯々

諸諾として命令に服した。(もつとも樹などはあまり
きらなかった。)

東條内閣が辞めた時に、四谷のある工場に行ったら、大きな貼紙がしてあって「東條内閣辞職の真因を明らかにせよ」と書いてあった。その前に黒山のような人だった。自分は東條内閣反対の人の所為だと思ったが、父に聞いて東條内閣のシンパの人の所為だと分った。

九月七日(木)

時々の雨。

郵便局に赴き電話架設を申し込む。中々六^{じゅうろく}かしいらしい。ただ移転ならば郵便局長の裁断でいいこの事。この軽井沢の町の電話が一千五百円(架設は三百十円)であるのだから法外である。

帰りに坂本直道民のところに寄り、正宗白鳥氏も来る。軍部の一部に、尾崎秀実をソ連に、佐野学を中共に使いせしめんとする議ありという。尾崎が、まだ

死刑に処せられなかったことは意外千万。ただし事實は不明だⁱ。

坂本君が東京に行くと、数人の知人が集った。その中に海軍大將がいたが、「こうなれば国民玉碎の外はない」といった。坂本君は日本民族の前途をどうするかと反駁したというが、玉碎主義は、今のところ現在の指導階級のイデオロギーだ。

鮎沢露子さんの話しに、汽車の中で「東條内閣はどうしてやめたんだ」といった事を大声に話していたそう。恐らくは「重臣の陰謀だ」という東條一派の宣伝を、流布しつつあるものと思われる。

内閣の首班が軍人、朝鮮総督が軍人、台湾総督が軍人、東京市長が軍人、そして実際の指導勢力が軍人——彼等は實力を以てそこに居るのではない。肩書きを以てそこに居るのだ。しかもその肩書きは「無智」の標準ではないか。この組織が直らなければ、日本は断じてよくならぬ。

i 上告棄却で死刑確定がこの四月、十一月執行だから、意外というほどでも無いだろう。

九月八日（金）

今日は一日中、大正十年の古新聞と取組む。

末広重雄氏が日米戦争が起れば、日本は食糧に困ると、その頃論じたのが警眼である。

そこに行くと同じ京大でも、近頃の学者は情けない。統制経済を盛んに主張した谷口吉彦という先生はこんなことを論じている。

『中部日本新聞』九月二日　今！起たずば　――生産戦最後の勝敗に通ず――谷口吉彦　：武力だけで勝敗がつくのは昔の話、ドイツは対ソヴィエトに、日本は対中国に残しておくと、のちのちの厄めかしは、戦意を殺ぎ「生産力を側面から低下せしめる目的」、……「日本を地球上から抹殺すると」の不逞の驕言を吐いたかと思ふと、こんどは支那の見張役の任務を与へる」……国破れたら山河はアメリカの所有になる……増産に励めば勝てる……（筆者は京大教授・経博）

九月九日（土）

少し原稿を書く。（ワシントン会議の）

九月十日（日）

支那料理が食えるはずと、正宗白鳥氏を誘ったが、休みである。集め上手の支那人でも、流石に近頃はどうにもならないと見ゆ。

九月十一日（月）

午前に警察の特高課の刑事来たり、午后も来たる。聞くと「一緒に清沢先生の話しを聞こう」と約束したのが一人宛になつてしまつたのだという。

午前の刑事は『何故東条首相が辞めたか』という疑問が田舎にあります」という。「今までだつて内閣辞職の理由なんか発表したことはないではないか」というと「それだけ東條大將が人気があつたのでしよう」という。成程、あれだけ新聞が提灯を持てば、田舎者には人気があろう。

午後の刑事は田舎の人は「小磯の方がズット偉い」

といっているという。それは長野県の知事の郡山とかいう男が不人気だったが、これを止めさせたからだという。

「田舎では、こう考えている」と一口にいつてしまうことが、いかにミスリーディングであるか。

午後の刑事の話では、サイパン事件があり、それから東條内閣の辞職があったので、地方の職場においては一生懸命になり俄然能力があがっていると。

九月十二日（火）

今朝早朝、軽井沢を出発。雨降る。

お昼に経済クラブ中央会において津島氏の北支開発に関する話を聞く。

いろいろ計画することが、「戦争に勝つ」という前提の下に進めている。しかも何人も、そうした指導者階級は「勝たない」ことを知っているのである。形式主義、精神主義の弊が、ここにも現れている。

石炭などはあるが、輸送が駄目だ。

いま、海上で沈められる数は、製船能力の二倍であるということだ。天津と、山海関の間で、始終、汽車を転覆されるという。

九月十三日（水）

『東洋経済』の原稿——外相に望む——を書く。

晩に国民学術協会に出席。それから嶋中君が牧野良三君に対する感謝宴に連なる。

九月十四日（木）

株式会社は、清算してしまわなければ、また前の如く復活しようというのが、松本博士の説である。嶋中君と共に訪問。継続の見透しができた。

外務省に赴く。先頃の重光が議会でなした五原則の演説は、極めて重要だから、何とか書いてくれという秘書から話したと高柳君がいう。一緒に夕食。三人で百円を払う。

重光が、日本で平和工作として、対支政策および大

東亜共同宣言を主張するならば、かれは先見の明のある男で偉い。これに反して、日本の政策が、大東亜共同宣言の如くあるべしと本気に強調するならば、かれはドン・キホーテである。日本人は、謀略以外にはあんな宣言は信じない。

高柳君曰く、言論報国会の編輯した大東亜共同宣言の闡明論文は、最も智的レベルが低いと。近來、所を得顔に拔はこした連中の論文だ。

九月十五日（金）

丸ビルの中央公論社跡に事務所を持つべく打ち合す。雨宮君と。

翼賛壮年団というのは、国内唯一の青年団であるが、この団長が建川中將で、その主腦者が橋本欣五郎という支那事變当初の頃日米戦争を起すためにバネーを撃沈した大佐である。軍人、軍人、軍人。

i 彼の直接指揮はレディバード号砲撃で、パネー号撃沈はそれに呼応した海軍航空機によるもの。

九月十六日（土）

富士アイス、教文館の第一四食堂を他に譲る。乾燥野菜をやることに決定。そのため重役会。

先頃、太田永福君と、鈴木文四郎君と、金井清君とで、元の陶々亭——満州クラブで昼食を共にした。そこで話した話題が問題になり、憲兵隊に召喚された。鈴木君は四日間、金井君は二日、太田君は一日止め置かれた。何でもない雑談だ。疑問なのは、その付近に何人も居らなかったことである。隣室で聞いたか、聴音機でも控えつけてあるかだ。

七尾氏の話しに、陸軍から、聴音機の注文を受けたことがある由。

外務省に赴く。重光外相の演説批判について打ち合わす。

九月十七日（日）

加地幸一若から電話あり、来たいと。そこで石橋湛山氏を招いて午後三時より雑談す。

サイパンが陥落する前、閣議で青木大東亜相が、「普通シビリアンは死なないで（玉碎せずに）、生命を全うすべきである。この旨、司令官に政府から訓電するよう」と強硬に主張した。東條も殺したつて仕方がないということで、打電することになった。ところが、さて打電するとなると、いかなる言葉を以てすべきやが問題になった。説明すれば分るが、あまり説明できない。誤解されるおそれがある。そこで結局、司令官の常識に委すことになった。軍人の常識に委せば、結局ああいうことになるう。

この話は石渡が、「困ったものです」と石橋君の説明に同じての内輪話である。

打電も出来ないところに国民層と指導者層との常識上の食い違いがある。

支那の事情は想像通りで、支那人はあまり日本人とは交際しないそうだ。

九月十八日（月）

昭和十九年九月

「東洋経済」評議員会に出席。伊藤正徳、蠟山君等も出席。

帰つてきて、重光外相のことをジャボニカスとして書く。

九月十九日（火）

ジャボニカスを書きあげ外務省に持って行き、ミス・マキというに頼む。囑託として来たのだ。

岡村今朝良、徴兵されたので、新宿まで送つて行つた。僕の周囲でも笠原貞雄徴集され、また義和も同じだ。義和は三十六七歳で五人の子供の父だ。岡村今朝良は国民兵内種である。ほとんど若い者全部が召集されるのが明瞭だ。野に青色なしというが、町と村に若者無しだ。北海道の義和は横須賀へ。今朝良は青森へ。これも運輸の無計画を示す。

九月二十日（水）

新聞の間接的描写によつて、米軍がドイツ国内に侵

入したことを知る。

日本の新聞はこの事を一行も書かず。『朝日』だけが左の如く発表。

『朝日』九月二十日 独住民の敵愾心旺盛 アーヘン米従軍記者の報道へチュリッヒ特電十八日発「米軍はアーヘン附近において局部的にドイツ領に侵入した」……これまでは解放者であつたがここからは征服者で「米軍を仇敵視するのみか、」……「ヒットラー總統への敬礼をして」……

戦線武庫という原稿を書き、一日中在宅。

九月二十一日(木)

かつて書いたが、日本の重要職業、会社、官吏は全部軍人で占領。首相、海相、東京市長、翼賛会、翼壮団長、総て、然り。

『読売』『陣影』九月二十一日 「平沼内閣時代に『総親和

総努力』といふ言葉が盛んに使はれたが、これが国民に与へた感じはこの文字の意味とは全く逆であつた」……『もう一艦もう一機』の如きもいかにも喘ぎ／＼生産してゐるやうな」……「航空日に関して日本劇場の前に掲げられた大ポスターは見る人々に甚だしく不評である◇それは勝ち誇れるが如き堂々たるルーズヴェルトの肖像に『日本人を皆殺しにせよ』などといふ敵の宣伝文句を書き入れてゐる◇これなども出してゐる当事者にいはせると尤もらしい説明をするのであらうが、見る者が受ける印象は敵の威力誇示であり、ルーズヴェルトの人氣を立てるための選挙宣伝みたくである◇しかも日本人自身が日本人を侮辱してゐる感じで米国に対する敵愾心は起らず、却つて当事者に対して反感を抱く」……

外務省に赴く。牧という婦人が僕の日本文を訳す。木曜クラブに赴く。久し振りだ。樫田ドクトルが中心の会だ。話しをさせられる。ドイツの命運が迫つたことを話す。

今回の戦争で儲けたものは右翼団で、彼等は支那、

内地、どこでも鉱山その他の権利を得て、大金を儲けているそうだ。彼等は軍人と連絡があるからだ。その一例として児玉誉志男（ママ）という大森区から代議士に立候補した右翼の男——国粹会の何かだ——が今日の『毎日新聞』によると福岡で水鉛鉱山を経営して居り、写真入りで紹介している。

ビルマ方面（拉孟、騰越）でまた全滅隊出ず。何人が責任を負わねばならぬか。しかも新聞をして盛んに「作戦の絶妙」とか「神妙の作戦」とかと毎日書かせている。祖国の守りが危うい時にビルマには何のために行っているか。しかも作戦の妙を常に絶讃するのだ。国民の無智も責任あり。

九月二十二日（金）

晩のラジオによりマニラに敵機八百台来襲（二十一日、午前午后に亘り）を知る。大使館も空襲されたとのこと。佐藤書記官もいる。安否如何。

i 底本で「出す」だが玉碎しているので「いずる」の意。

昭和十九年九月

東京商科大学を産業大学に、神戸商科大学を経済大学に、それぞれ変更。なお名前変更病のあるを知る。

一日中在宅。『日本産業経済』に農業の記を執筆。

九月二十三日（土）

『毎日』『建設』九月二十三日 女性と決戦 近ごろ「エイッ、ヤッ」と竹槍訓練をやつてゐるのを随所に見受ける。米鬼英獣の皇土を侵すならば、その一胸先深く貫きもつて日本女性の意気を示さんとする意図であることは、説明を待たずして明かだ。……「勝敗の分岐が航空機の質量如何にあることを政府は繰返し国民に告げてゐる。……竹槍を振り回すより、飛行機を作るほうが……」

戦力培養の道……「出来るだけの休息を与へてこそ」……「それを狩出し、夜間二時間も三時間も軍隊訓練を施すことはどうかと思はれる。……また敬礼や右向け、左向けを二、三日教えられて、それで決戦に役立つ女兵が出来るのだろうか、精神訓練だとしたら、精神を余り簡単に見過ぎてゐる。……「家庭婦人に休養の必要なしと

いふものあらば、働く人間の實際を知らず、たゞ大言壮語して独り快とする淺慮の沙汰だと思ふ。」

高知から帰つたある人の話だというのを聞くに、高知で今、海岸に土壕みたいなものを掘り、それに労力を強制している。今までは日本が絶對的に勝つとのみ思っていたのが、壕を掘るので、「日本は危ないのか」と考え出して、騒いでいるとのことである。

竹槍で訓練しているのは笑い事ではなく、どこもそうである。この程度の知識ならば、ほんとうに近代戦争の恐いことを知らせることが結局利益になるのかも知れん。

九月二十四日(日)

朝、斎藤淑子さん来たる。女子大を明日卒業するのだが、その寮では、御米は充分だが青い副食物は何にもない。米だけ食っているのだそう。ただ当番が、墓地に行つて野草をとつてくる。それを汁に入れて食

うだけだという。

動員で工場に行くが、学生の中に非常に肺浸潤が多いとのことである。これは無理がない。營養が不足なのである。

家の英子も日本鋼管という工場に行っているが、お昼には、御飯と、汁の中に二三切れ野菜を入れたものだけな由。漬物などは普通の家では、ほとんど食えないとの事。

久し振りでワシントン會議に関する著書の継続を書く。東京では、いろいろ用が多くて著書は駄目だ。これから輕井沢で半ヶ月を著書に費そうかと考う。

独裁主義の結果はイタリーの政治家や有名人が、ンドン殺されたりしている。チアノは銃殺され、財産は没収された。ムソリーニ派によつて銃殺され、ボノミ派によつて財産没収の厄に逢つたのだ。また

BY BONOMI GOVERNMENT

Ex-Police Chief of Rome Given Death

Penalty for Spying ; Mussolini Retaliates Domei

LISBON, September 21.-Pietro Caruso, Rome's former Chief of Police, was sentenced to death tonight and Roberto Occhetto, Caruso's codefendant and secretary, was condemned to 30 years' imprisonment in the court trial opened today in which the two defendants were accused of collaboration with the Germans and for spy activities, according to a Rome dispatch.

Counsel for Caruso asserted that no proof had been offered that Caruso had killed anyone and stressed the fact that the Bonomi Government recently abolished the death penalty.

Meanwhile, it was reported the Fascist Government in northern Italy has announced that in the event of Caruso being executed, 40 hostages will be shot. One of the hostages is reported to be Jose Togliatti, brother of the Foreign Minister of the Bonomi Government, who was taken into custody by the Fascist police.

【ボノミ政府による二ファシストへの宣告

昭和十九年九月

ローマの前警察署長死を与えられる

スパイへの処罰：ムッソリーニは報復

（リスボン発九月二十一日同盟）ピエトロ・カルソー（前ローマ警察署長）は今夜死刑を宣告された、ロベルト・オッチェット（カルソーの共同被告で秘書）は、禁錮三十年を宣告された、二人が対独協力とスパイ活動で訴えられた今日開かれた裁判で、ローマの急報次第であるが。カルソーの弁護人は彼が誰かを殺したという証拠が無いこと、ボノミ政府は死刑を廃止したことを強調した。一方、北イタリアのファシスト政府は、カルソーの処刑が行われたら40名の人質が撃たれると発表した。内一人はファシスト警察によつて拘引されたホセ・トグリッチ（ボノミ政府外相の兄弟）であると報告されている。】

独裁主義の判決として斯くの如く雄弁なるものがあるか。

『朝日新聞』がフィンランドを呪う記事を書く。イタリーが降伏した時も、ブルガリア、ルーマニアが屈し

た時も、日本の新聞は「裏切り」「背信者」「卑怯者」といった言辞を使い、現にバドリオといえは、「裏切り」という意味に通ずる。彼等はこれ等の国が戦いつくして、刀折れ、矢つきて屈服したことを考えない。「自分達から離れ去ったのだ」という一方的見解しかない。国際情勢が分らない一原因であり、また世界の民心に訴えるものを欠いている重大理由だ。

毎日のラジオは依然として支那作戦の「絶妙」や「歴史に誇る」立派な振りを宣伝している。よくも研究しないが、広東方面から漢口方面につなぐ作戦らしい。仮にこれをつないだつて、それを警備するのに、どれだけの人間が要ると思うのだろうか。しかも何人もこれを批判するものなし。

九月二十五日（月）

東洋経済に行く。晩は三井高維君方に夕食に招かる。家内と共に。途中でシーレーの『エキスパンション』

オヴ・ユーロープ』を十円で買う。けだし拾い物だった。千葉豊治氏大連で死せる旨、二三百以前、電報を以て通知さる。珠の如き人格者なりき。惜むべし。

九月二十六日（火）

朝、外務省に赴き、『オリエンタル・エコノミスト』の会議に出で、晩は柿坪という外務事務官の話しを国際関係研究会において聞く。

柿坪事務官の話の一節。

アフガニスタンの日本公使がモスコウに來た。初めアフガニスタンの外務省は、ソ連は日本公使に入国のビザを与えまいと考えた。これを与えるかどうか、ソ連の対日態度を知る指標とした。元來同国はソ連と英国との間に挿つて、その立場はデリケートだ。旅行のビザを日本公使に与えれば、それは英国に対する無視を意味するものである。（日英間は戦争しているから）それをソ連が許容したのだから、驚いた。それから英

i John Robert Seeley なる The expansion of England

国へ強く当るようになった。

ソ連においては人種上の偏見は全くない。外人な
るが故に、買物行列を途中で侵入しても黙っていた。
外人への尊敬だ。蒙古人に対しても位階の上の軍人
には敬礼する。然るに帰りにハルビンにおいて、日本
軍人が列車の中で、規則を励行したとかで日本軍人が、
満州軍人の上級な者を、衆人の中で殴っていた。軍人
の教育を直さなければ駄目だ。

ソ連と満州国とは、非常に仲が悪い。その満州国の
領事館員はほとんど全部日本人だ。両方で喧嘩ばかり
している。然るに日本人に対しては非常にいい。モロ
トフは佐藤大使に対し、「ソ連は中立条約を忠実に実行
し、これを廃棄したり、違反したりするような意志は
全くない」と云ったという。その意味は重慶を援助し
たりする意志はないことを意味する。

九月二十七日（水）

『東洋経済新報』に社論（戦後案を研究せよ）を書く。

昭和十九年九月

『日本産業経済』に「素人農園家の記」出す。

ブルガリアの首脳者、捕えらる。その時の事情により、
ドイツについても死刑ものである。民主主義以外に人
間の安全を確保する道なし。

九月二十八日（木）

自由学園の男子部学生の卒業式に連なる。

岡部長景（前文相）が祝辞を述べた。「今度の戦争の
後は、米英も今までのように教えてもくれなければ、
あらゆる方面で迫害を受けよう。戦後は、大いに科学
を準備して、緒戦から勝つようにしなくてはならぬ。」

岡部前文相は、例によって盛んに日本的世界観といっ
たようなことをいった。人柄はいいようだが、この先
生は戦争の教訓に、少しも醒めていない。

自由学園の生徒の純真さには、ほんとに涙ぐましい
気持がした。彼等は岡部の話しを、吸い取り紙が、イ
ンキを吸い取るように、全く脇目もふらずに聞いている
のである。こんな純真な青年が、他にあるだろうか。

この学校の出身者は、必らず将来、日本の勢力となることがある。

九月二十九日（金）

国際関係研究会で横田喜三郎教授の戦後案、特にダンバートン・オークスの会議に関する報告があった。矢張り中々いい頭である。同会議は最初から、決定機関ではなく、予備的な会合である事。また同会議がソ連モロトフの提案になったものである旨、ハル（？）の開会の辞にあったそうだ。

本日の新聞で同会が流会になったことが伝えられた。常任理事国の投票権の問題であらうといわれる。

戦後の新機構はやはり国際連盟と同じようなものである。人間は大した智恵がないものである。

九月三十日（土）

昼間はワシントン会議の続稿を書き、晩は笠原義和が横須賀の海軍に入営するのを送別夕飯会を催す。

かれは五人の父親で、三十四歳である。友人達の話によると、新兵は棍棒その他でひどくなぐられ、そのために片輪になるものもあるとのことである。一人が、何か言い間違えでもすると、全隊が打たれたり、叩かれたりするのである。斯くの如く野蛮なる場所が、世界の何処にありや。

大宮島及テニヤン島の部隊は九月二十七日までに全員壮烈なる戦死を遂げたる旨、本日大本営より発表さる。小畑忠良中將も戦死。テニヤン在住の一万五千、大宮島五百の同胞も全部玉碎す。

十月一日（日）

久し振りの雨で畠を休む。原稿を書く。

大宮、テニヤン両島軍民全員戦死の報、今朝の新聞に詳報さる。

『朝日』十月一日 婦女子も自決 テニヤン一万五千大宮五百の同胞 情報局総裁談 ；「テニヤン島在住同胞約一万五千名の中十六歳以上四十五歳迄の青壮年男子約三千五百名は義勇軍を編成して数個の部隊に分れ夫々皇軍諸部隊に配属し軍と一体となつて最後迄奮戦し、全員壮烈なる戦死を遂げた、老幼婦女子等の多くは戦火を避けて同島カロリナス地区に集結し皇軍の奮戦を援けつつあつたが、敵が最後の防禦線に迫るや敵手に渡るを潔とせず悉く自決して最期を遂げた模様である」；「敵手に渡つて縄目の恥を受けるよりは自決して終を全うするに如かずとして進んで国難に殉じた老幼婦女子の最期」；

緒方君は個人としては、この玉碎主義に反対で、困

昭和十九年十月

たことだと早稲田の教員連中を集めて話した由。

この悲劇に際し、各新聞、例により特輯す。『毎日新聞』は末次信正を出す。かれは戦争の転機近きにあるをいう。『読売』は鹿子木員信、匝瑳胤次（海軍少将）を出し、いずれも玉碎を讃美す。

匝瑳少将は天正十一年賤ヶ岳合戦を引照して、現在が攻勢転移の戦機なりという。

『毎日』十月一日 ；「余は何故に長たらしくこの賤ヶ岳戦記を捉へ来つたかといふと、そこに今次のテニヤン、大宮島戦闘と一脈相通ずるものあるを感得したからである。」；「二島の攻略に費した物心両面の痛手」；敵が驕り本土に來たら、「本土の鉄壁陣にぶつかり」、反撃の余勢はハワイ・オーストラリアまで行ける；

闇相場は全く天井知らずである。玉子は一圓一円で安い方だという。小汀君は「豚肉を百目十四円で買った」というと、田舎から帰つて來た岡村今朝良が「牛肉は百目二十三、四圓、豚が十七八圓が相場です」

といった。先頃、妻が鶴川で馬鈴薯を買ったら、一貫目四円、一寸大きなものは一個二十五銭に当る、それが埼玉県で既に一貫目六、七円だとのことだ。

中産階級は全く没落の外はない。我等自身も、生活に困る時代が目前に來ている。

十月二日（月）

大熊真君危篤。朝見舞う。床上に会見。やつる。

毎日の新聞は、日本軍が「なぐり込み」「切りこみ戦術」を行ったと書いてある。宮本武蔵の講談そのままだ。これでは戦争は勝てない。

国民学術協会に出席。最高の知識階級においては、現在ラジオでやっている米国の「鬼畜的」野蠻の宣伝が不人気だ。こういう宣伝をすることは、却って学童その他の教育に害があるというのである。前晚、海老名一雄氏が米国人を、まるで動物以下のような宣伝をした。

何人も国を愛す。要はいかなる方法が敵撃破に有効

であるかの問題に帰す。

十月三日（火）

外務省に赴く。僕の書いた原稿が落第したという。

児童疎開の問題が充分準備がなかったので、各方面で盛んに批難されている。床屋に行くと、ここでもその時だ。

石橋君の主催で大内兵衛、有沢広巳、脇村義太郎三君（帝大教授および助教授）の共産党事件で無罪になったのを祝う晩餐会が開かる。かつて、文筆社会に華かに躍った人々である。判決の要旨は、労農党は合法的団体であるが、これを援助した連中は、コミンテルンの成功を希望したので、それが有罪だというのである。しかしこの教授連は、それとは全く関係がなかったことになっている。

戦後どうなるかを我等は議論した。私有財産が無くなるかどうかとの問題につき、私有財産は存するだろう。ただそれは国家のために非常な制限を受けるだろう。

うというに大体意見一致す。ナチス的なもの出現せんと。大内兵衛氏はマルキストといわれるにかかわらず、案外にその観方が客観的である。公式的ではない。総ての学者が大体そうであるように、非常にいい人のようだ。

十月四日(水)

白柳秀湖君を訪ぬ。松本に行くから一緒に行かぬかとの話である。行くことにす。

晩に『東洋経済』の座談会に出ず。座談会は久し振りだ。

先頃、農業に関する随筆を書いたら、その反響十数通に達す。ただ一通が「清沢は非国民だ。今頃、南瓜は右翼団だとは怪しからぬ、産業経済が、そんなものを今后出したら、ひどい目に会せるぞ」にいつて来たものがある以外は皆な讃めて来た。これくらい反響があつたものは少ない。

かつて、人が集まると食い物の話しをした。今やそ

の食物は無くなつて、話しは素人農業の問題になつて来た。誰もやつている。赤松克麿君もやり。松岡駒吉君もやる。長谷川如是閑老は馬鈴薯を植えて、収穫が親薯一つしかなかったそうだ。こうした趣味が僕の農園随筆に興味を持たれたのだ。

一読者より弟子入れの申し込みあり！

十月五日(木)

雨降る。家妻となつ、やが軽井沢に赴く。

『朝日』『鉄箒』十月五日 検閲 …疎開児童の手紙を教師が検閲、学校寄宿舎まで手紙の検閲をしている、…「統制といふことを履き違へ」…「指導者の資格を喪失してゐるといつても過言ではない。」…

一錢通貨の廃止…一錢以上費用がかかる、五錢単位で済む、故に一考を」

手紙を検閲するのは現在の思潮を現わすもの。

一錢通貨はインフレを示すもの。一錢通貨では新聞

が買えぬ。

○君来たり、その働いている軍事工場においては三百屯の材料を消化する設備があるが、事実は七十トンの材料しか来ない。しかも毎日、その材料を集めるに一生懸命で、技術的なことはせずに、雑務をやっている。今日も、やつと材料を持って来て、明日、機械を運転するようにしたのだ。企画院や軍需省の計画は無責任で、全くなっていない。生産は全く行き詰っていますと。

雨宮君、伊藤君を連れて来る。伊藤君は早稲田の教授（第二部―高等科）であるが、僕の日本外交史研究所を助けてくれるはずだ。いい人のようだ。かれは杉森孝次郎氏の弟子だが、杉森氏が今回、早稲田をやめたのは、個人的理由でなく、公的に中野登英雄氏に反対だからだ。早稲田の総長を増田義一などが名誉理事として、内部工作をやったから、それを気に入らなかつたからだという。

郵便局で端書がないことは余程前からだ。切手がな

い。端書と切手を買う行列ができた。――「端書がなくなる」という噂が生れると直ぐ行列ができるのだ。

ドイツの無条件降伏を前提とし、ドイツを三分して米、英、ソで占領する案が欧州諮問委員会で決定した旨ストックホルム電は伝う。

ジグフリード線が、いよいよアーヘン近くで突破されたらしい。ドイツ側は、まだしかし容認していない。

十月六日（金）

頭山満が死んだそうだ。愛国心の名の下に、最も多く罪悪を行った男だ。同時にまた最もよく日本人の弱点を代表している男でもあった。

『読売』十月五日　：「凡ゆる戦法が工夫された、水際に火の壁を張る戦法、人間魚雷、人間爆弾式戦法など、桶戦法が次々と考案されその人柱たらんことをわれもわれもと志願した。かくして敵〇ヶ師までは即ち五倍の敵は必ず水際に殲滅する、いかに圧倒的な敵に対しても赤坂城

に拠る楠戦法を發揮して最後の一人となるも生き抜き戦ひ抜き一人でも多くの敵をやつつける。……」

上は各紙（五日）に現れた「楠戦法七生魂」（『読売』）の電報の一節だ。内南洋のペリリュー島を守る軍の奮戦振り。いかに多くの「肉弾」が費やされているか。こうした記事が「斬り込み」「殴り込み」といった記事と共に毎日出ているのである。

一年ぐらい前までは行列は外人に物の不足を知らせるからといった理由で禁止していた。今は新聞は毎日、切手や葉書きがないことを書いている。体裁論は、もうかまっていられなくなつたのだ。端書が無くなるとは、流石に僕にとつても意外だ。物資の不足、労力の不足がここまで響いて来たのである。

電話は、また中々かからない。自動電話が故障あるらしく、四谷局などは、今日一日中かけたが駄目であつた。そのくせ、大森は直ぐ出た。この次ぎに用を弁ぜないものは電話であらう。自動車が町にほとんど一台

もいなくなつたのは、もうよほど前からだ。

民族主義の段階が、少くとも欧州においては過ぎ去つている。仏国、イタリー、ルーマニアその他、敗戦国においては、その陣営が二つに分れて、民族の線に沿うていない。それはむしろ思想の線にそう。その思想は、大まかにいえば階級的といつてよからう。

今日一日、原稿を書く。『中部日本』と『オリエンタル・エコノミスト』に。

十月七日（土）

これで四日降雨続く。秋の刈入れを控えて穂が腐つてしまうようなことはなからうか。家の畠も損害大。神風と神雨が、どうやら反対に日本に見舞つているようだ。

今朝ラジオで伊藤正徳、戦争は敗けると考える者の方が敗けると説く。——日本は敗けるなどとは、少なくとも数年の間考へたことはない。それが大東亜戦争を起した所以だ。悲観説が起きたのは最近であつて、

それは最初からの悲観説ではない。

ひどい雨のところを東京都の講演会に行く。十九名の生徒である。指導員養成だ。

東條英機大將が殺されたというデマが、陸軍あたりから伝わるのとことである。「もう東條はこの世にはいない」といったことをいうそうである。これはどういう心理的シグニフィカンスを持つのだろうか。東條は戦争を始めたから悪い男だというのだろうか。それとも党中央をたてたから怪しからんというのだろうか。もし前者だとすれば意味はかなり重大だ。

東京都で健民運動（訓練）に九百万使っているのだそう。国家全体では三千万円。それは前厚相小泉中将の発意によつてできたものだが、広瀬現厚相はそれに不賛成だという。こう始終変つては困ると当局者が言っていた。

信州の蓼科に海軍の療養所がある。その海軍軍人たちは別荘の樹でも、石でも、無断で盗んで来て、自分達のものとするそう。別荘などを持つていてブル

ジョアーは怪しからんという理由である。多分、海軍では、そういう教育をしているだろうとのことだ。

同じことが山中湖にもある。別荘の世話その他が頻々盗まれる。その犯人が海軍々人だろうというのは、前にも別なところで聞いたところだ。また海軍が棍棒などで新兵をなぐりつけることは有名な話だ。

これ等のことが、一切秘密にされ、抗議されないのです。その弊害は是正されないのである。

新しい制度を作る場合には、そうした事に対し、抗議ができるような組織が絶対に必要だ。

十月八日（日）

昨夜から暴風雨である。農作物には非常な悪影響があるだろうと思う。午前九時頃よりやむ。

新宿十時十分発で松本に來り西石川に宿る。汽車の混み方言語に絶す。これで統制の結果なのである。車中、列を乱して席をとつた男と一寸議論す。

商人的、工場的、土木請負業者のような連中が、二

等車を占領す。それがため秩序も維持せられず。いわゆる柄が悪くなったことはなはだし。

中産階級の破滅、新成金階級の出現目に見ゆ。途中、朝鮮人が荷物を沢山持つて乗る。乞食みたいな格好なり。車掌が検札をしたが黙っていたから、おそらくは二等切符を有していたならん。朝鮮人の金儲け非常なものである。闇取引によつてであつて、全国的な網を持つている由。この問題はユダヤ人のその如くならん。問題は名前をかえることを奨励して、ほとんど全部は日本名を有していることだ——これも無知なる軍人政治の結果である。その総督の名を南という。確か、満州事変を起した当時の陸相だ。

車中、贈られた牧野英一氏の『自由の法律、統制の法律』を読む。さすがに面白し。傑出した学者だ。

晩に白柳秀湖氏尋ね来たる。安曇族の研究に、講演を兼ねて来たのであるが、今日は穂高に行つたという。僕の来信目的は同君の二男に土橋の娘を紹介のためだ。

十月九日（月）

白柳君と共に松本博物館、天守閣等を観、晩には土橋家にて食事を共にす。

記念館は外国の博物館に動物館を兼ね。いかにも貧弱である。東京でもそうであるが、日本における、こうした文化的設備の貧弱はいかにも情けない。

平林盛人市長に、同君の事業として大博物館（郷土史研究資料の陳列）設立を勧告した。

お昼に平林市長のお昼食の招待に預かる。同君は陸軍中将で、石原莞爾と同級。石原は偉い男だと極力賞讃している。

石原が満州に参謀として行つたのは、満州事変以前のことであつたが、かれの胸中にはいわゆる大東亜共栄圏的なことが大尉の頃からすでにあつた。赴任する時に、平林君ともあつたが、大事を決定する決意が見られた。

平林中将の話——

一、満州事変は要するに板垣少将と石原との合作だ。

石原は満州を王道楽土とするつもりだったらしい。

かれの考えによれば満州人も支那人も同じだ。満州を日本の力で理想的な楽土にすれば、支那人は必らず日本を慕うに違いない。そうすれば日提携ができる。この力を以て米国に当るのである。

二、石原は最初から、日本の最後の敵は米国だと考えていた。しかしこの国に対し、日本は今のままでは不可能だから、支那と提携せねばならぬ。その準備が必要だと考えていた。

三、平林君が米国を通じてベルリンに行った時だ。その時、かれはベルリンに駐在していたが、「平林、米国では八九十階のビルが沢山あると聞いたがそうか」「その通りだ」「馬鹿な奴等だな。それではまるで飛行機と爆弾の的になるようなものではないか」と話した。

四、自分（平林）が憲兵司令官をやっていた時に、東條英機から出たらしいと見らるる命令が、しばしばあった。東條は常に憲兵隊を使った。

白柳君の談――

石原は鶴岡にいますが、その山形県の警察部長は、『自分が職に居る間に「石原を引っくくれ」という命令がないように』と祈っていたとのことだ。

十月十日（火）

朝、松本出発。豊科に降り、お昼を御馳走になって青木花見^{あおけみ}に赴く。けだし家妻にとりては最初の訪問だ。

清沢森の長女の婿、ニューギニアにて戦死したとのことにて、長女は子供をかかえて泣いていた由。予の身边にも、高田甚市民の家庭では同じく婿が満州事変で死んで長女が寡婦になった。秋山高氏長男が死んだ。石橋君然り。今後おそらくは同じような事件が頻出せん。戦争が、どんな味をするか、よく分るはずだ。

青木花見の家も、市治が北支に行っていて、人手がなくて、どうにも困っている。田舎でも米が一升二円五十銭ぐらいだとのこと。一番いいのが自由労働者で、大体十円ばかりとることである。

豊科の駅に大きな樫¹、その他のハードウッド【hardwood】がある。これは猿田という旧家のものを切り出したのである。ところが一方、木工船は成績悪く、もう作らないことになったのである。この命令系統の徹底化しないため、まだ田舎では切っているのだ。青木花見の家でも四、五本大きな木を供出することになっているとのことである。北の塙のところにある巨大な杉も然り。近頃には珍らしい御馳走を昨日から引続いて御馳走になる。田舎は、何といつても豊富だ。

十月十一日（水）

朝、九時半出発帰京。

八日に外務省調査官大熊真君死した旨電報あり。非常な篤学な士であつて、将来協力を得んとしたるに惜しいことをした。

その電報が、「至急至報^マ」で、東京郵便局を九日午後一時出したのが、土橋方に来たのは午後十一時だ。すⁱ「けやき」とルビを振っている。底本では「櫟」と修正を入れているので、清沢のミスであろう。

昭和十九年十月

なわち約十二時間かかる。先頃、軽井沢を出した電報は丁度一昼夜以上である。以前の手紙と同じである。

松本方面で切符を買うのに、一駅（下り二枚、上り五枚）という札がかかっている。そこで隣の駅に行くのに四、五時間出札口で並んでいるのは珍らしくない。しかも電車はほとんど空っぽで走っているのである。一種の仇討ち思想である。一般に対して不便を感じさせ仇を打ったような気になっているのだ。

十月十二日（木）

国際関係研究会に出で芦野君の林悟堂著書の紹介を聞く。この人は典型的役人型にて、その批評も、それ以上に出でず。

どこの郵便局でも切手無し。手紙を出すこともできない有様だ。

台湾に今朝七時から敵機来襲。戦闘中だという。田舎では、まだ日本は負けっこはないといっているそうだ。敵を引きつけて置いてギャフンとやるというので

ある。

十月十三日（金）

小磯内閣になって言論が自由になった。緒方君が情報局総裁になって努力の結果である。その方針左の如し。

【左の如しに対応する新聞の切り抜きが無いとのこと】

千葉豊治氏追悼会の打合せを、石橋君と共に本郷教会でやる。田崎牧師を相手に。

十月十四日（土）

大熊真君の初七日。坊様のお経を聞く。分りもしないことをおうむのように繰返す坊様の心的態度が、観念的になる一理由だ。

晩に白柳秀湖氏夫妻来たる。先頃のお礼のためだ。夕飯を出すと「こんなに御馳走があつては交際できぬ」という。かれは若い時から苦勞して来ただけに、「生活」のことを非常に気にする。また「有名」とか「人氣」

とかいうようなことも、案外神経過敏である。

台湾に十二、十三、十四日と引続いて空襲あり。（延二九五〇機と発表）我軍は航空母三隻、艦種不詳三隻を撃沈せるも、なお引続き来襲するところを見れば余程の有力艦隊が数隊に分れていると見ゆ。決戦期いよいよ近づく。

陸軍は依然として支那で作戦をやっている。近く桂林を突くという。非常な宣伝だ。陸軍は成功しているが、海軍の方は大変だともとれる。

十月十五日（日）

『読売』十月十五日「…勿論宣伝に憂身をやつす敵米の言動など問題とするに足らぬが量に驕れる敵米の作戦企図が大海軍力をかつて大陸戦線の敗色を一挙に覆へさんものと誇示しつつあるものといへる、いまや大陸戦線の進展に比例して敵米の太平洋反攻は決戦段階に突入した、わが本防禦線たる戦略要線に対する敵米の執拗なる

i 撃沈云々が事実ではなかった。

反撃企図は益々熾烈となることは明かだ。」…

十月十七日（火）

神嘗祭である。

この時、各新聞は台湾東方の大戦果を伝える。

盟に関する研究をなす。

小村寿太郎は宮崎県の出身。好戦的である。仲裁裁判の如きに対しては絶対に賛同しなかった。これが伊藤博文などと意見を異にした点ではなかったか。小村に対して、研究しなおす必要あり。

要するに加藤高明、小村というように強硬外交の本尊が珍重されたので、「軟弱外交」は幣原だけだ。

十月十六日（月）

行列が街に蛇々^{えんえん}と続く。新聞を買わんがためだ。大體近頃の風景だが、特に今日、長いのは十二日夜半、十三日薄暮、十四日昼間、同薄暮の三日間に亘る戦果の詳報を知らんがためだ。街の人々がいかに捷報^{しやうほう}に飢えているかを知るに足る。

『日本産業経済』十月十七日 大本営発表（昭和十九年十月十六日十五時）：轟撃沈・航空母艦十隻、戦艦三隻、巡洋艦三隻、駆逐艦一隻、撃破・航空母艦三隻、戦艦一隻、巡洋艦四隻、艦種不詳十一隻
空母等五隻を屠る マニラ来襲の別動隊遊撃 大本営発表（昭和十九年十月十六日十六時卅分）：撃沈 航空母艦一隻撃破 航空母艦三隻、戦艦若は巡洋艦一隻、撃墜卅機

この戦果に対し、小磯首相は談話を発表した。中に「ことに今回の戦闘に陸軍の雷撃機隊も参加し、陸海真に一丸となって勇躍健闘、この戦果をあげたことは特筆大書さるべきことである」といつている。

国家存亡の時期に当り、陸海軍が一緒に戦争をすることが、どうして特筆大書すべきことなのか。こうし

たことを総理大臣がいうことが、特筆大書すべきことであろう。

この間、東京都事務官の話に、訓練所を陸軍が使っている、海軍が、少しも便利を講じない。陸軍はまた海軍が何だという。「この下の方の兵隊の感情がおそらくは上層部の感情でしょう」と。

この戦果に新聞はいずれも全面を割いて、士気昂揚につとめている。「史上稀な大戦果」(『朝日』)というような言葉が久し振りに出る。かつては「史上未曾有の」とか「神人共に泣く」といった形容詞が毎日出たものであった。

敵の損害は大体に「五十万噸と二万六千名失う」(『朝日』)計算だという。

ただ問題は

一、日本側の損害は発表に一切触れていない。

二、敵の発表は、日本側に与えた損害を誇大に報じている。

ことである。将来、この辺の事情が明かになろう。海

軍はその発表が大体に良心的であった。

【この「大」戦果は、「台湾沖航空戦」と呼ばれるが、10・10沖繩大空襲、翌日の台湾大空襲を行ったアメリカ航空母艦部隊に対する海軍による攻撃である。戦果未確認のまま大本営に報告された。史上稀な大誤報で、アメリカ側では沈没した艦船は無かったとのこと。】

どの新聞にも「ローズヴェルトの選挙が近づいたから、米国艦隊は大いに蠢動するだろう」と、選挙と軍事行動を一緒にして論じている。彼等が政治というものをいかに解さないかが分る。

『朝日』十月十六日 政略の犠牲、海底艦隊 絶対性なき米の軍略 …「民衆に選ばれた大統領が陸海軍の最高統帥者たるの地位にある敵アメリカではその軍事行動において純戦略的見解と並行して、国内政治的立場よりする輿論への顧慮を常に念頭におかねばならぬことは当然」…選挙の為に「厖大な損耗を蒙りながらその損害をひた

すら頬かむり」：「台湾東方海面の航空戦の結果について何等の発表をも行つてゐないことは」世論の動揺をおそれている証拠、：「二日間に一万名を越える大出血を強要せられる結果に終つた」：」

「絶対性」の軍略とは何か。そんなものがありうるのか。左様な観念論をやっているから大事を謬るのである。

ハンガリー、いよいよソ連に停戦を申し込んだ（十六日）。その反対のサラシー内閣ができた。国内が幾つにも割れるのが、今大戦の特徴で、国民主義の時代が一步過ぎた。それなら階級のかというと必ずしもその線には、添うていないが、それに近づきつつある。（思想と階級と勢力関係の一緒になったもの）今頃、雑誌などは「米国の研究」を始めている。十一月号の『実業之日本』『新女苑』その他。

十月十八日（水）

昭和十九年十月

満十七歳以上の男子、兵籍に編入。十一月一日から実施することである。戦争は、いよいよ我一家にも及んだ。徴兵せらるることほとんど必至である。

陸軍の「雷撃機」の自慢話しが、またラジオと新聞で始まった。台湾で参加したものだ。何かやると屹度その後に長々と自慢話が続くのである。

十月十九日（木）

三井本社から二千五百円を、日本外交史研究所のために貰う。

総務部長大谷寿雄氏の話しでは、ある軍人が来て、三井の幹部のいるところで、「三井ぐらゐは僕の力でもつぶしてしまえる」といったという。一方に、三井を脅すかと思うと、それでは金を貰えないから、想像的に強力なものにして金を取ろうとする。三井の財産は幾らありましようか。——十二三億かも知れませんが、そんな金は数日の戦費にも当らない、三井には、何にも力はありませんよ。日本においては三井財閥の力

を盲信するのは確かにマルキストの公式論である。

戦後案および重光の五原則を検討のため来栖三郎大使と会見。高柳君と共に。来栖氏の話しは別に書く。愉快な男である。

十月二十日（金）

台湾沖の海戦が勝利だというので、日本国民ワッと沸きたって来た。戦争だというものの、こうした一戦闘で喜憂するのが、いつもの日本人だ。

『毎日』十月十二日

菊池 …「とにかく敵は見てびつたね。僕達はかういふ

ことは期待してゐたけれどもこんなに早く実現される

とは思はなかつたね」…

木村 …「サイパンとかテニヤンとかいふ所は将棋でい

へば捨駒」…

菊池 …体当たり精神があるからあの大戦果…敵は生き

て帰りたいと思っているから駄目…」

以上は菊池寛と、木村義雄との対談だ（『毎日』二十日）。

右のような楽観論が横溢し、酒の配給があり、野菜の配給も増した時に、新聞電報は米軍が比島のレイテ時にやつてきたことを報ずる。上陸作戦らしい。敵の力を知らない例はここにも直ちに出来て来ている。

「米鬼」に対する宣伝運動、各方面に起る。その中心は米国に居った人々である。海老名、武藤省吾その他の人々が中心だ。先頃武藤君から僕のところへ米鬼の悪虐無道な写真があるかと尋ねて来たが、僕のところには無かつた。

『中部日本』十月十七日 飢餓迫る敗戦国 これを見ても

我等断じて勝たん 白鳥敏夫氏 …「獸米抹殺の神機到

来」…「星条旗を各自踏みにじつて入場」…白鳥は言う

…枢軸陣営から脱落した敗戦国では…「自ら招いた運命とはいへ」…飢餓で子供たちは骨と皮、ボロボロの服を

着て食を求め…」

小磯内閣になってから言論が、やや自由になり、僕のところにも講演を頼みに来るものが増えた。今夜は金田商店主催の講演会に出た。

東條前首相の不評判は一寸驚く。誇大だとは思うが、東條攻撃の手紙が、一日、二百通も行ったことがある、という話もある。また東條が、伊勢の大神宮にお詣りした時、目前で悪口をいったものもあるという。東條が憲兵を使用したことが不評判の原因でもあるようだ。「一寸した会合には、ことごとく憲兵を入れてスパイしていたそうだ」と、ある人が話した。

十月二十一日(土)

日本人は問題の重要性を識別する力がない。形式に捉われるのはそのためだ。

台湾沖の海戦で勝利を得たというので、酒の特配などがあつた。それを新聞は攻撃する。つまりこんな誰にも分ることになると攻撃するのである。

つぎに必要なことは具体的であることである。小磯

内閣が「木炭車」だという。しかしこれに対し、どうしていいかをいわないのである。

国際関係研究会で上田辰之助博士の「中共」に関する講演あり。中国共産党は「日本解放委員会」という特別の部門を有して居り、日本の軍国主義を打破するスロガンを持つている。また現実に、北支における日本軍部に働きかけているとのことである。朝鮮人にして逃げて行つて中共に投ずる者も、かなり多いと。

十月二十二日(日)

一日中、ワシントン会議頃原稿を書く。第三回日英同盟廃棄前後。清野君信州より出て来て一泊。

十月二十三日(月)

信州の土橋、白柳君の二男との結婚は、歳があわぬとのことにて、老人が反対の由。愚なる迷信が、子供の前途までもあやまらせることここに至るか。両親共に、とてもいい縁談だと考えていたのだが、祖母が売

ト者のところに行つたらしい。

十月二十四日（火）

外務省に赴く。

『東京新聞』に「配給は悪し、東京の電車に乗れば故障ができて生命がけだし……」といった各方面の悲観的な材料ばかり並べてある。

小磯内閣が「木炭自動車」だとか、微温的だとかと、論説その他で攻撃するものを、しばしば見る。『読売』が最もはなはだし。

小磯首相「官吏訓」をまた発表。また国民が、神社に参拝することを勧む。

『読売』十月二十四日 元寇の役でも神前に祈つたように

「私は国民諸君が靖国神社秋季例祭を機会に一斉に所在の神社に参拝し前線に健闘する将兵の武運の長久を祈るとともに神前に一切の邪念を払ひ去り」……」

十月二十五日（水）

ドイツ軍、ジークフリード線のアーヘンは二十日、敵手に委した。十六歳から六十歳の男子を以て国民突撃隊を組織した。先頃はヒムラーはゲリラ的戦術を高唱した。ドイツ国民の最後までを戦争に投げ入る。壮また惨。

日銀から五銭と十銭の紙幣が出るようになった。

二十五日、九州済州島へ敵機百機内外来襲した。

午後二時より三井氏の啓明学園で講演。先生達に対してである。

二十四日以来、フィリピン島東部において輸送団に対し猛攻を開始した。戦果があがつている。決戦的な大戦争がいよいよ開始されたのである。我方の損害も巡洋艦二隻外あり。

台湾沖の戦果を祝うため「祝い酒」を特配したというので、各方面に批難あり。また小磯内閣において国民に配給をよくしたので、これまた批難あり。よくブツブツ小さいことを愚図々々という国民ではある。

十月二十六日（木）

朝、足利の経済クラブに講演に赴く。電車から見れば秋のとり入れの最中で、それが女だけであるのが目立つ。

お昼は水とんという小麦粉をまるめたお汁のもの二杯。皆なうまいといって食う。かつて、ここではお昼は、料理屋の立派なところに案内したのであったが。配給なども東京より遙かに悪いという。大都市と農村の間に挟まって、物資が不足なのである。

町に「殺せ、米鬼」という立看板がある。落下傘で下りたものを殺せというのだろう。日露戦争の頃の武士道はもうない。国民が、何等近代的な考え方も教わらず、古い伝統も持っていないのを示すこと、近頃の街頭にしくものはない。

『「毎日」投書欄』十月二十六日「その工場では、徴用された少年工が大多数だ。」食べた盛りで、配給ではた

りない、おまけに食糧係が横取りしている、給料は食費に使い果たし、仕送りを求めると、「今度は工場外で飲食することを厳禁された。」…我慢出来ず「農家に潜入して食糧を盗むやうになつて来た。」…」

足利には足利銀行頭取の鈴木という人がある。叩きあげた人で確かりした人だ。一、二年前に憲兵隊から人が来て、「一切講演をしてはならぬ」といつて来た。もしやれば引つくくるといつた。一札を入れて講演はしませんと約束した。「東洋経済新報の同志だせ見たんでしよう」と氏は語つた。

講演が終つて夕食もない。帰宅したのは午后八時半であつた。夕食を出せば、それだけ個人のものに食い込むことになるので出せないのである。

地方では戦果に非常な期待を持っている。一時は食い物の話が一番盛んだつたが、近頃は百姓の話が、どこでも盛んだ。誰も百姓をやっているのである。

十月二十七日（金）

フィリッピン群島レイテ湾に決戦的大戦闘が行われている。敵は合計三箇師団を二個所に上陸、さらに後続上陸部隊を輸送して来たのを、我船艦が遊撃したのである。従来の航空戦と異なり、我主勢力が出勤している。敵の損害は多いが、我が方も戦艦が沈没、中破している。レイテ島の陸上部隊が、殲滅されるか、増強されるかによって敵の打撃が判断され、また東京空襲の遅速も判断される。

大打撃を与えるとネゴシエーテッド・ピース【negotiated peace】交渉による和平】の可能性が出て来るわけであるが、まだおそらくはそこまで行っていない。願わくは好機をつかむだけの戦果をあげよ。

大本営発表（十月二十六日）によると、九州、濟州島に來襲した敵機の損害は撃墜五、撃破一九で、総数の四分の一に当る由である。国民は海軍側の発表は信用するが、陸軍のものに対しては疑う傾向が強い。

i 10.23から25までのこのレイテ沖海戦では大戦果は無く、海軍としての主要艦船を喪失し、大海戦は終了した。

『『毎日』「標題」十月二十七日 殺せ・米兵を殺せ 人的損害が敵の急所』

米、英、ソ連はボノミイタリー政権を承認した（二十五日）。

三国は仏国ドゴール政権を承認した（二十三日）。

日本の新聞は、常に米国の選挙と戦争を結びつける。比島戦は選挙対策だというのである。各所で、そういう質問を受けるから、僕は、ローズヴェルトの下には共和党員もあり、専門軍人もある。ローズヴェルトの意志通りにはいかない。政治と戦争を結びつけるところに、日本人が政治を解さない事実があるのだと説明する。すなわちローズヴェルトが勝つても、ディユイが勝つても同じだというのが常である。『毎日新聞』のチュリッヒ特派員も、同様の比島の戦争が選挙対策だといっている（二十五日紙、二十二日発）。

地下足袋が一足四十円、ナッパ服一着が二百円もす

るそうだ。自由労働者の日給が高いのは当然と投書（『毎日』）。

雨降る。本年のように十月に降雨する年も少なし。ダンバートン・オークスの戦後案について書く。（『東洋経済』へ）

十月二十八日（土）

中央公論社跡の事務所着々進行す。とても奇麗になる。雨宮、伊藤両君と会見打合す。

同盟通信の長谷川君（ロンドンに居った人）の談話、国際関係研究会であり。

一、台湾および比島沖海戦について、米国側においては自国の損害を発表せず、かえって日本側の被害を大きく発表している由。

永井松三氏の談話——

石井菊次郎、幣原喜重郎両相の下に働いたが、頭の冴えているのは石井子であった。幣原氏は注意深さはあるが、それほど政治的計画あるかどうかは一

考される。大して偉さを示さなかったのは内田康哉だ。しかしこの人は人交際振りがいいし、酒も強い。ゴム人形といった人柄が誰にも好かれたのだろう。

加藤高明は米国のことは知らなかった。当時、予は移民課長をやっていたが、移民問題について、大體話しが纏まって好転していた。それを大臣になって、我等のところによつて来て直ちに打ち切りを言い渡した。「米国なんて奴は分らんよ、あんなものをいつまでも相手にしたつて駄目だ」というのである。

十月二十九日（日）

移植麦の苗床を作る。

千葉豊治氏の追憶会をやる。そこで石黒忠篤氏の談話——

後藤新平伯は、朝鮮人がロシア国境内に数十万人いることを知つて、これはどうかせねばならぬといつた。当時、新聞は、鮮人というと「不逞」という文字を冠したものであるが、伯は「それは沢山の中に

は赤もいるかも知れんが、兎に角、日本人という名を有している者が海外に居る以上は、それを保護し、利用しなくてはならん」といつて、その案を千葉豊治君に起しせしめた。予も、これに関係していたので、それ等について知っているのである。後藤伯がロシアに行ったのは、そんな関係もあつた。

大蔵公望男曰く――

自分も後藤伯と前後してロシアに行った。後藤伯の任務の中には、確かに朝鮮人および日本人の移民問題があり、諒解を得て帰れたが、帰つてこられて死んでしまった。

千葉豊治君の追悼会は僕の計画によつて行われたもの。皆な満足していた。集まるもの名士約百人。米国と満州に居りながら、いかにも知人が多い。

チャーチル、二十七日に下院でモスコウ訪問の報告をした。かれはイーデンを引具し、本月九日にモスコウ入り、十九日まで滞在したが、ポーランド問題につき、完全な諒解に達しなかつたといつた。バルカン問題に

ついては話しあいができた。仏国も近くドゴールにつき民意を問うはずだが「外部によつて強制された政府だ」という印象を与えないためだ、という。

林甚之丞君の昨日満州から帰つての報告では、満州への米国空襲は、盲爆どころか、中々の正確で、鉄道のスイッチなどにキチンと当てている。空襲による損害は、今のところ六割で、四割分の生産だ。

十月三十日（月）

雨の中を三鷹というところの常会で講演す。東京都の依頼である。

三十四円そこそこを貰う（四十円の御礼から税金を差し引かれるのである）。これで考える。かつて三十円の御礼を貰えれば砂糖が約五貫目は買えたらう。今は砂糖一貫目は約三百円であるから、六回行かなければ一貫目が手に入らないのである。一日の我等の労苦は砂糖を百匁買い得るにすぎぬ。

十月三十一日（火）

お昼に石橋湛山君の家に招かる。鶴見氏という僕の肖像を書いた画家が、石橋君の肖像を終えた感謝もふくまれている。

石橋君は前夜、柴山陸軍次官と会食した。陸軍次官は軍人を工場や、その他のところから引きあげたいと考えているが、却つて今は工場などで放さないという。

沖縄県の空襲で知事が、どこかに逃げてしまつて、まだ出て来ない。警察部長が踏み止まつたので秩序が維持できた。そこで県民は知事を罷免して警察部長を知事にしろといつて来た。軍人が居ると、兎に角、秩序ができる、というのである。これ等のことは、軍人の蔭にかくれて責任を逃れようとする考えと、また軍人がいなくなると、却つて軍部の干渉がうるさいと考えるものとの二種類があろう。

十一月一日（水）

鮎沢君に招かれたので石橋君の自動車に便乗しよう
と出かける。電車が大森駅に行くと「空襲だから退避
しろ」という。皆な飛び出て、思い思いのところに隠
れる。十分ばかりで解除。再び電車に乗って品川まで
行くとまた「空襲、退避」だ。皆な遽^{あわ}てて線路を横ぎつ
て、建物の横などにかくれる。そんなところにいると
火事が出たら、まる死にだ。僕は外に出る。非常な混
雑だ。十分ばかりで解除になったが、省線は動かない。
仕方がないから市電で東洋経済に行く。ちょうど、地
下室に退避するところであつた。これで空襲があつた
ら、ほんとに大変だ。形式的な訓練が何にもならぬこ
とが、今日のことと分る。

鮎沢君が待っているであろうと考えて、石橋君を誘つ
て電車で赴く。電車が非常な混乱だ。後に発表された
ところによると、大型一機が京浜地区に来て爆弾を投
げずして遁走したという。果して来たかどうかと皆な

疑問にした。

どの新聞にもローズヴェルトが選挙対策のために空
襲をやるのだと書いている。米国政治を知らない連中
にも困ったものだ。今年のお正月に、敵は正月に油断
をしている時に来ると騒いだことがある。

鮎沢君の家は小さな、しかしコージー・ホーム【Cozy
home 居心地の良い家】である。例によつて旨い御馳走だ。
午后九時四十分、満月をあびて帰る。途中でまた警戒
警報が出る。よほど狼狽している。

十一月二日（木）

『東洋経済』にダンバートン・オークスの「国家連合」
のことを書く。

晩に板橋菊松君が「経済学博士」をとつたのでその
祝賀会に出る。「日本大学」での博士だそうだが、この
人にどんな学識があるのだろうか。帝大以外は、博士
号もあまり、あてにならぬ。

薩摩薯を掘る。昨年よりも、うんと好成績である。

約四分の一掘つて二十貫。

外務省に寄る。グルーが海軍日になした演説の速記を貰う（二十七日の演説）。日本は「壊滅を免がれるために、軍隊を占領地から引くかも知れないし、また満州の統治を放抛（ほうほう）するというかも知れぬ——しかし日本がどんなことをいつても、この講和を受諾してはならぬ。妥協平和は危険である。ただ一つ無条件降伏をするならば、それが彼等のとるべき唯一の道である。インエビテブル【inevitable 必然の運命】を延ばしても敗北を免れることはできない。彼等が、もし左様に行動するならば、それは不必要なる生命の犠牲と破壊を免れることができる。一日の終りだと考えよ……」*“I can them call a day”*

これは重大なる降伏勧告である。またグルーの態度に顧みて、「満州国放棄」を条件として、やってみるという謎であるかも知れぬ。兎に角、僕はこれを読んでズツと、その隠語を汲み取ろうとして頭からその問題が離れなかった。しかし今の当局者は、こうしたデリ

ケートな言葉の文字を諒解しないであろう。

今朝の新聞によるとレイテ時に上陸した敵の兵力は五箇師団に達したという。台湾沖、比島沖の戦果は、果してかえつて敵の作戦に引つかかったものであった。なぜならば敵は、比島上陸という、かねてからの目的を達したからである。

近頃の「大本営発表」は「必死必中の猛攻」とか（十月二十一日）、「肉攻斬込隊も亦奇襲上陸に成功せり」とか（ペリリユー上陸作戦十一月一日）と、陸軍的形容を使用している。

政府、総合計画局を創設、任命——安積得也君その第二部長になる。——依然人物の入れかえ盛んだ。

十一月三日（金）

又雨である。一日中、「国家連合」のことを書く。神聖同盟の頃のことを読む。けだし「国家連合」とそれと、よく似ているからである。歴史は繰り返す。

十一月四日（土）

神風特攻隊が、当局その他から大いに奨励されている。ガスリンを片方しか持って行かないのらしい。つまり、人生二十何年を「体当り」するために生きて来たわけだ。人命の粗末な使用振りも極まれり。しかも、こうして死んで行くのは立派な青年だけなのだ。

『日本産業経済』十一月四日 神風特攻隊は「人間流星弾」
 〈ベルリン二日発同盟〉：ドイツでも伝えている、【ロケット代わりに】「若い青年達で特別に訓練を受け」：「現在なほ何百といふ「生ける爆弾」が勝利のため」：

これを外国人が感心していると、九割五分までの日本人は考えているのである。

ダンバートン・オークス案の批評を書く。誰も来ず勉強ができた。勉強だけしていいような生活が欲しい。

十一月五日（日）

毎朝、畠をやっていると工場に行く職工の一団が軍歌を唄いながら通って行く。指導者が歌うと、一同がそれを繰返すのである。「大和男と生れなば……敵兵戦の華と散れ」といった文句である。こうして肉弾戦を信仰し、青年は国家のためなりと死んで行くのである。

空襲警報なる。

米国の選挙戦が近づくというので、特に神経をとがらしているであろう。ベルリン電報からも、それを伝えて来ている。米国の政治が、まるで分らないのが、日本人とドイツ人である。そこに悲劇が生れる。

某官吏によると、船舶の撃沈さるるもの非常に多く、毎月造船能率の数倍に上ると。「これでよくやって行ける、数字を聞くとそう思うほどです」といつていた。無論数字そのものは話さないが。

米国の死傷数発表——十月二十一日現在で総計四十八万七千七百名——内、陸四一万、海七万。

小麦植付期来たる。しかもなつや家に帰って在らず。

薩摩薯も掘らざるべからず。今日、一日畠仕事をなす。
朝、警戒警報出ず。

十一月六日(月)

満鉄総裁小日山直登氏、先きに手紙をやったが返事なし。逢いたいというので赴く。朝、警戒警報発令。少し当事者、神経過敏に過ぐようだ。

満鉄、二千元ずつ五ヶ年くるる由。

小日山君、明日帰満するといひので会談。松岡流にて、とても強気である。「なんでもありませんよ。空襲? あんなものは直ぐ修繕工事ができますよ。米国なんか、やつつけることは何でもないさ。なに、やれますよ」といった調子だ。

そこで僕は「あなたのような責任ある地位に居られる方は希望と現実を、よく判別して下さい」といった。そして満州の情勢について、大蔵公望男や林甚之丞君などとも逢ったことをいった。ちよつとまごついたようであつた。しかし、結局、僕はかれが偉いと思つた。

昭和十九年十一月

僕は返事すらもよこさないかれに、悪感を有していた。飯に金を貰つても、かれに好意を持つまい。そう僕は考えていた。しかし、かれは、進んで会見して「この前には行きちがいで逢えなくて」と忙しい時間を割いて諒解を求めたのである。この辺が、かれの出世したところだろう。

僕の如き、兎角に、心が頑^{かた}くなになつてしまふものは、顧むべきである。

東洋経済の評議員会に出席。石橋君は家族疎開に、山中湖に赴き在らず。

明治堂にてベルツの「鉱泉論」(明治十一年刊)というパンフレット購入。その頃、すでにこの論あるベルツは偉し。若いドイツ人の学者が、新しい国に来て、その着眼を見よ。

十一月七日(火)

青梅にて講演を頼まれ赴く。ちやうど講演開会時の午后一時頃、警戒警報があると思うと、直ちに空中警

報が発令。その時事務員が「敵機が頭上にあります」と外に出てみる。青空を飛行機一機、飛行雲を起しながら東南方に進む。小さな飛行機が、その後を追っているようだが、高度において距離において問題にあらず。僕は、それがどうしても敵機だとは思えなかった。この白昼、敵が帝都の上を堂々と通過するのである。それを我軍が、どうもすることができないのである。実は、そんなに我飛行機が劣弱なものとは思えなかった。「まさか、あんなのが敵機ではあるまい。僕は日本の防空陣を信用するから」と人に話した。皮肉では決してなかった。

豈図らんや、それは、やはり敵機だったのだ。B29の四発機である。かれは帝都の模様を総べて、映写したであろう。

国民は機械力が、どんなものであるかが、まだ分らないが、その内に分るであろう。

僕は、敵が東京を果して無差別に空襲するかどうかを疑う。日本人がサイパンで子供まで死んだことにつ

き、「日本人は米国を悪魔だと考えている」と思っているであろう。そして日本に、米国の然らざる所以を知らせるような政策をとるのではあるまいか。——戦争だから事実是不明だが。もし、そうだとすればサイパンの男女自殺は、日本を救う役目を果たしたものである。空襲警報下に講演。フィヒテを引用しつつ。

会后、酒が出る。——お昼の御馳走は、むし、パンと甘薯。晩飯は日本酒と白米の握り飯。これが「清沢先生」のお出でだからと恩に着せるのだから、以て知るべし。

食事の時、青梅町の有力者列席。町長、医師、組合長、東京都訓練所長等である。その内の一人を除いて、「日本が絶対に勝つ」とて、少しも疑って居らぬようである。その論拠は、彼等の肉身が一生懸命で働いているというにある。

一人の若い人——四十四、五歳の人——は米国の工業力、戦争能力を理解し、日本がこれと対抗し得るかに疑問を有していた。比島作戦も、旨くいっているのではないことを感づいているようだった。僕は——日本が

大丈夫だといった説の方に、断言はしないが、見せるようにした(！)

ドイツの話をする場合にも「ドイツの前途を悲観することも間違いだが、樂觀することも間違いだ」といった調子のお話をするのである。これで国民が、真相を知るはずなし。ただしそれ以上の話をすれば大事件になる。

その席での話しに、ある外務省の役人が講演の中で、グルーは初めの間は日本人を猿のようにいつたが、最近「米国人が戦争に飽きたようにいうようになった、そんな事を一般に知らせると、気がゆるむから知らせないが」と話したそう。事務官などはグルーのお話を、その程度にしか取って居らぬ。つまり米国人が戦争にあきたという程度にしか。

満鉄の小日山総裁に会見した時、グルーのお話でも、してやろうと思つて、そのタイプの紙を持つて行つたのだが、かれがあまり元気がいいので、そういう話は一切しなかつた。かれは曰く、「かれ等は自分の都合

のいいように、いろいろなことを言うでしようけれども」と。

湯川君のダンバートン・オークス案のお話を空襲沙汰のために、予定が狂つて、とうとう行けなかつた。

『毎日新聞』十一月八日 B29二機関東へ 敵の野望断

じて碎け ……サイパンから二機偵察飛行

敵機見物は厳禁 ……高射砲の破片で人がまた出た、警報が出ずとも敵機が見えたら退避せよ……

高射砲というのは敵機を打つものでなくて、味方国民を負傷せしむるものである！

「敵機を見あぐるべからず」。それは恥かしいところを見せるものだからだ。

十一月八日(水)

午前四時に、鵜の木町会の者、八幡様にお参りするといふので家内参列。晩遅く、演習したり、午前四時

に起したり、人間を疲労させることばかり考えている。しかしそれも無理もないことで、こうした際に出るのは大工や土方みたいなものばかりである。鶴の木西町の前回の防空長は、家に出這入りの――、それが病気になるって今は――というのだそうだ。こんな連中に率いられているのだから――そして万一の時にはそれが秩序の担い手となるのである。

一日中家にいる。水野警察子、米国の大統領選挙の問題、スチルウエル【Joseph Warren Stilwell, 1883-1946】の問題等を聞きに来る。スチルウエルが、蒋介石と衝突し召喚されたのが日本の新聞を賑わしているのだ。僕は米国が面目にこだわらず、自己の將軍を引きもどし、大使ガウスの辞職を聴許せんとすることが偉いといった。日本ならばここで面目問題を持ち出して大騒ぎをするところである。

十一月九日（木）

大統領選挙にローズヴェルト圧倒的に勝つ。それに

つき『東洋経済』に書く。

晩、国民学術協会に出席。杉森孝次郎氏のスターリンの声明に関する講演あり。

スターリンの演説は注目に値す。かれはドイツの民族優越論が、結局、あらゆる国を敵にしたことをいい、また日本がアグレッシヴ・ネーション【aggressive nation】であることを明白にして、真珠湾攻撃や支那攻撃に出でたる事、支那、米国の如きが、平和愛好国にして、攻撃されて立ちあがったことをいった。

予は、学術協会の席上、スターリンは日本に宣戦布告するところまでやって来まいといった。無論、日本の出方にもよるが。

牧野英一博士の話しに、平塚の別荘で、牆の棒を持ち去るものがある。そこで番人が咎めると「空襲が来れば、誰のものも、かれのものもなくなるではないか。そんな事を一々いう奴があるか」と平気だという。「空襲が来れば掠奪やなどが公然行われる下地はできてい i 「かき」とルビがついているが「ほばしら」である。「牆」または「牆」のつもりか。

るんだ」と博士はいった。

破壊的気分は、各方面に満ちている。丸ビルの僕の事務所を修繕するのに、三つの窓を打ちこわしている。全然必要のないのを、特に打ちこわすのである。電車をつるさがる柄を盗むものが続出し、今や電車には、それが半分もない。電車や汽車のシーツの布を切つて家を持つて行くとのことである。

十一月十日（金）

午前、午後にわたつて小麦を蒔く。広幅法というのをやつてみる。ひどく手間がかかるのが困る。

警察の加納君が、スターリンの演説について意見を聞きに来る。恐らくは警視庁からの指示であろう。僕は聞かないような風をする以外に方法はないといった。もし日本が、あまりに積極的な行動に出れば、ソ連はそれに口実を得て宣戦を布告する可能性があるとも附言した。

加納君の話では、二三日帝都上空に米国機が来た

のに何故に落さないかとの疑問が一般人に在るとのことである。あれが落せないとすれば、外地で何十機を落したというのも嘘だろうともいつているという。

日本の機械的実力が、こうして国民から隠し終うせなくなるであらう。それは実物教育としては、結果から観て日本人に利益を与えるであらう。

畠のつばきや山茶花が咲き出でんとす。この間咲いたばかりではないかと思う。月日の経つのは、農園に生活して特に早し。

ドイツにV2号出でたとベルリン電報囃し立つ。西部戦線において、流星にドイツ好戦して、米英軍をして進行せしめず。

小麦を播き終う。

十一月十二日（土）

北海道の奥田実治君と米子さん来訪。浦河町にも軍隊が駐屯し、山や海岸に盛んに穴を掘っている由。そのため材木を皆な切っている。しかも一つの軍隊が、

それを命令して、切り出す頃、他の軍隊が来て、その方針が異なり、材木が積みあげられて、道路に腐っている有様である。

先頃、師団長が来た。そのお土産にと兵隊が飛び歩いて、鮭を買い漁る。折から不漁で、村の村に奔走したので、それまで軍人に盲目的尊敬を有していた者が、近時、疑いと蔑視を以てするようになったと。

晩に大熊真君の忌日に、夕飯に招かる。神川彦松、外務省の吉田課長等出席す。

そこでの話。

大正大学教授浜田とかという人。参謀本部にこういう事を提議した由。即ち五、六十万の決死隊を米国に送り、パナマ運河やアラスカをやつつけるというのである。そしてその半分は全国の仏教信者から募集すると。そこで僕は「何で行くんですか、飛行機か、潜水艦か」と、聞く。かれは「航空母艦で」と答う。「それだけで行っても駄目で、後続部隊はどうする」。かれ答えられず。一高、帝大を卒業した大学教授が、この程度の常識し

か無し。また五十枝君が「ドイツはいつ参るんだろう」と話し出したのを「あまり客観的で不愉快だ。ドイツは助けなくてはならぬではないか」という。皆なで、助けた後にいけなかったらどうするか」というとかれ答えなし。

我等の交友の範囲で、問題でないことが、異なる領域にある連中の無知驚くべきものあり。これでは中々前途遠し。それでも、B25号の東京を飛んだのに対しては、これをどうにもできなかった日本空軍力に失望していた。実物教育以外にはなし。日本の教育がいかに偏しているか。その内でも仏教徒というものが最も観念的である。

神川彦松博士とダンバートン・オークス案につき意見を戦わす。かれは日本は大東亜共栄圏主義だから、ダンバートン・オークス案を入れれば大変だといって反逆者みたいなことをいう。政府の方針にこれ従うのが日本の学者である。

しかし、かれが米国は三年や四年で屈しない。「そん

なことはあらかじめ分つて戦争をしたはずだ」といったのは、当然ながら、その表現の方法がサゼスチヴ【suggestive】だった。予は、講演会の後の質問において、「米国は、いつ参るか」というに對し「米国は人種的雜居だし、女に權利があるから、沢山の損害を蒙れば、反對論が盛んになる。もつと日本は叩かなければ駄目だ」といつて來た。予は心の中で左様に考へているのではなく、米国や英國は、決して参らぬと信じているのである。しかもそういう理由は、そういわなければ「親米的」といわれ、或は戰意をくじくものと攻撃されるのを恐れたからである。そこに「弱さ」があつた。神川君の如きは、その御用学者的立場から、左様な批難を蒙る懸念なくそれが強いところである。

十一月十二日（日）

汪兆銘、名古屋にて十日逝去との報あり。汪兆銘一人を對手に打つた支那新政權の樹立が、かれが死んでどうなるのか。日本の政策がいかに希望的觀測の下に

生れたものであるかは本日明瞭にされた。

支那の桂林落つ。支那大陸を広東方面より連絡せんがためならん。しかしこの長い交通線を確保することが果して出来るか。ここにも、まるで無茶なる作戰あり。犠牲者に氣の毒である。新聞の標題——「米空軍基地群覆滅」「戰略優位を確立」「西南支那も制圧」「敵、日作戰に重大破綻」（以上『朝日』）新聞は特別ページを出して滿載。これに對し勅語が下された。

新聞は先頃から二ページだけだ。それに全くニュースが盛られず、ただ「作文」あるのみだ。

十一月十三日（月）

尾崎秀実は十一月七日に死刑を執行されたそうだ。かれをソ連外交に利用しようというような噂もあつたが、嘘であつた。これに對し平沼國務相（當時）射殺事件は懲役七年の判決があつた。何と軽い判決か。

【読売報知十一月九日】平沼男狙撃犯人に判決　：懲役七

年が三名執行猶予つき一名の判決」

ソ連に広田元首相あたりを送つて——民間よりは久原を送るとの噂もある——何か工作しようとして、モロトフに伺いをたてると、「モスクワには佐藤大使がいるから、外には誰もいらぬ」と断つたといわれる。かつて有田が行くという噂もあった。その目的は日ソ同盟ともいわれる。まさか重光が左様なことを考えるとも思えぬが。

数日前、甘薯を採取したが六十貫の収穫があつた。四十坪足らずのところとしてはいい成績だ。

東洋経済評議員会に出席。

今朝の新聞は、汪精衛のことで全ページを埋む。現職首相の死でも、これほどまでは書かざるべきことは明らかである。小磯首相、重光外相は名古屋に赴き、汪氏に菊花章頸飾を御贈進伝達した。近衛も名古屋へ。

行田の安田利兵衛君来宅。地方では戦争に勝つものと決めている人が、まだ非常に多い由。

十一月十四日（火）朝、霜降る。

いわゆる体当りの記事、新聞とラジオの大半を占む。陸軍と海軍で、双方競争で特攻隊を吹聴す。

『毎日』十一月十四日 大本営発表 「我特別攻撃隊万朵ばんだ飛行隊は戦闘機隊掩護の下に十一月十二日レイテ湾内の敵艦船を攻撃し……四名体当たり、別に五名戦死……」

陸軍は万朵飛行隊だが、その後に「時宗」「型式」「横花」等続く。

これに対し海軍は神風攻撃隊の中に左の如く小別す。いかにも一つの英雄物語りだ。名前の懐古的なことと、考え方の単純なるを見る。

『日本産業経済』十一月十四日 噫神風隊卅七神鷲 十隊員の偉勲全軍に布告 ……「大和魂の精華を発揚して悠久の大義に殉じその忠烈万世に燦然たる大和隊、朝日隊、山桜隊、菊水隊、若桜隊、葉桜隊、初桜隊、彗星隊、梅

花隊、左近隊の十隊員卅七神鷲」…

俘虜に対し、警察では、民衆の殺傷を遮ぎって、保護する指令を受けている旨、警察の人の話しである。ただ加納君の如きは、そうした場合、民衆が警察官を対手にして乱暴をせぬかを恐れていた。おそらくはその通りだと思う。

国際関係研究会で加納久朗子の話しあり。面白し。近頃あまり軍人が新聞に書いたり、ラジオをやったりしないようになった。新陸軍大臣の方針の故であろうか。

十一月十五日（水）

富士アイスの重役会だ。それでも八%の配当に落ちついた。我等は無配を覚悟していたのだが、太田君の配慮からである。

今日はまた東洋経済の五十周年記念である。お昼には出られず、晩に出席。

英国ならば石橋君は、この機会にShぐらいは貰ったであろう。日本では知識と文化に対する評価が極めて軽い。ことにジャーナリズムに対して。僕も、この雑誌に関係して、十ヶ年近くなる。

十一月十六日（木）

雨降る。徴兵さるもの非常に多く、若い青年が「日の丸国旗」に墨で書いたのを肩から斜にかけた姿を見る。

『朝日』『鉄箒』十一月十六日 農婦の訴へ … 農家だが、主人と舅は死亡、長男は入営、二男は応召、三男は満州義勇軍、四男は中学生で工場動員、五男も工場行きになった。主婦と七十の老母だけで農業が出来ない、四男は工場でたいした仕事も無いといっている、四男・五男の動員解除は出来ないか。』

以上が現在の普通の状態である。画一的にして、総力戦を解さないが故に、△△人出の必要なところに△△人力がない。

床屋での話し――

第一戦から帰った者の話しに、食うものがなくて、人肉を食っている。しかも弾丸で死んだものは、どんな毒が這入っているか分らないから、生きたのを殺して食うのだ。それがために俘虜を殺す。それを大金に入れて油をぬいて食うというのである。「誰も黙っているが皆なやっているんですよ」と自分で話した。それが朝飯の時だったので、飯が不味くなってしまったと話していた。

アツツの時にも、誰かがそんな意味の話しをしていた。誇張もあるが、ある程度まで事実だろうと思う。

この世界から戦争をなくすために、僕の一生が捧げられなくてはならぬ。

『日本産業経済』十一月七日？ なんとかならぬか都民の足：都電・都バスの混雑が目立ってきた、増産の足かせにもなっている、どうにかならぬか
切抜策は出払った 今はお客に頼る丈 避けよう不急の

混雑：事変前（昭和十一年度）一日平均百十一万人、十八年度は二百五十万人、

十六年度 十七年度

電車 一、五五七、〇五〇 一、九一一、三八四

バス 三五九、三四一 五六八、七八一

計 一、九一六、三九一 二、四八〇、一六五

車両不足（台数はあっても稼働出来るのが、新車は無し、補修困難、軌条の整備も尽ならぬその為故障車も増える。女性車掌も他の職場にとられて減少、食糧運送をバスに代えて電車にする為の改造も手を取られる。……」

昨夜、十時過ぎに空襲訓練があつた。起しに來たそ
うだが家ではとよやも嫌だといつて出でず、組長から
叱られたそうだ。訓練というのはバケツを持って飛び
歩くようなことで、疲労するだけだ。

町には、どこにも道の脇に穴が掘つてある。そこに
徒らに水がたまっている。それは待避壕なのだが、た
だ爆風が避けられるだけのものだ。

スターリンの演説に対し、政府は新聞雑誌に一切批

評を許さない。『東洋経済』に書こうと思ったが、それができず。「侵略者とは何ぞや」の趣旨を書く。下らぬゴシップは困るが、批評が何故にいけないか。官僚統制の弊。

「必殺——レイテ湾殴り込み」『読売』と『毎日』の標題。

十一月十七日（金）

一日、家に居り、久し振りで著書の原稿を少し書く。外務省あたりではスターリンが、ブルガリアに対するように、日本に宣戦でも布告するかに考えているそう。それにおびえて何事もいわないのである。もっともいわぬのも一つの外交であるが。

強そうなことをいわぬのは、開国以来おそらくは今回が初めてであろう。

十一月十八日（土）

又、雨。

世田谷区役所で講演。東京都からの依頼だ。

都の役人の話では、やはり戦争の前途に楽観的だ。軍人達が「大丈夫だ」といつているのを、そのまま信じているのだ。国民の九〇%までは戦争が勝つと考えている。

御礼三十円。かつても書いたが、一日近くの労働で砂糖百目^{マツメ}を買得るだけだ。

『「朝日」「神風賦」十一月十九日 ……質屋の利用は労働者階級が姿を消し俸給生活者になった。金融の資金ぶりは、農林中央、農業会、市街地信用組合がよく、また都市銀行より、地方銀行が良くなった。…』

十一月十九日（日）

清沢寛来る。小汀利得君をも昼食に招く。

とよやは訓練に赴く。「落下傘で下りる敵を殺せないというようなことでは駄目だ。そこで、彼等を実殺す稽古をするんだ」というのだそうだ。竹槍を使う訓練をするのだそうだ。百五十人計り集ったとのことであ

る。

小汀は珍らしく洋服を着ている。敵が、いつ来るか分らないから用意しているんだという。先日の敵飛行機の写真によつて、近く来るのが明らかだというのである。

十一月二十日(月)

朝、幣原喜重郎男を訪問。いつまでベルをならしても出ない。あけたのは夫人らしかった。女中がいなとのことで茶も出ない。二階の書齋に通さる。二十畳以上もある立派な部屋だ。最近の本が沢山ある。日本外交史研究所について講演を頼む。快諾。顧問についても然り。講演を速記にとることを嫌がる。どういふわけだか分らない。しかし非常に気持よく話す。(話し別記)

「東洋経済」の評議員会に出る。

どこの家でもガス使用超過で閉栓さる。街路樹などを切れとの説出る。

『「毎日」「建設」十一月十九日 ガスの閉栓 …「割当量が急激に減つて来るので、…私どもの近所は軒なみ閉栓処分」：「ガス利用家庭に来る炭の配給量はいふに足らない。それも九月以来ずっとない。」ガスが止まったら塀を壊して煮炊きか、その為の七輪も品不足…』

小磯内閣の改造説有力。軍需省の藤原、運通省の前田は、いずれも困難な局面だが、不思議なのは重光外相が変り、広田や有田が候補の名前にあがっているとのことである。重光についてはスターリンの演説が崇めているという。翼政会あたりでワンワンいつている。これは『ブラウダ』や『戦争と労働階級』あたりで、そんなことは、かねてからいつているので、スターリンの演説も、大して珍らしくはないではないか、とある者がいうと、「そういうことを知らせなかった外務省が悪い」という。この前の議会で重光が、ソ連は非常にその態度が親日的だといったのを、「そんな見方が間

違いで、外相は駄目だ」というわけらしい。重光は重光で、「ソ連と戦争ができなきや、ああいうより外はないではないか」といえばいいのを、「日本は防共協定以来、ソ連にいい感情を示したことがあるか。今、ロシアより好意を示されることは期待できない」といったことをいうので、それが翼政会の無知な代議士連を怒らしめたそうだ。

代議士で外交問題など分るものは極めて僅かしかない。

外務省委員会には人も来ない。薯の問題などになると、百人も来るのに——と蛸山君がいう。

十一月二十一日（火）

北九州にまた敵機来襲。支那における「米機基地」をやっつけている理由が不明だが、国民はそんなことは考えぬ。

『日本産業経済』十一月二十一日 敵搭乗員不足に悩む

昭和十九年十一月

…撃墜された搭乗員を見ると少年で真新しい装具をつけている…「衣料品携帯口糧その他慰薬品は実に贅沢」…」

上記「衣料品、医薬品^マは贅沢の限りを尽し享楽主義の反面を示している」は面白い。また「服装も新しいものをつけているから新参者」も奇抜だ。幕末維新の頃の外国人に関する記事とちょうど同じだ。

晩に西原亀三^ミ氏の談話あり。従来のものより纏まってよかった。かれは軍閥外交に反対だったというのであり、寺内もそうだったという。

十一月二十二日（水）

世田ヶ谷区役所のために講演。——町会長の集りで東京都の依頼による。

大根三本をお土産に貰う。これも近代風景だ。

帰りに菊田貞雄君を訪う。明治学院教授だが、肺炎を病んで十ヶ月計り引込んでいた人。明治史の篤学者だ。明治外交を、宗教の方面から観る書を書くことをいⁱ 実業家で政治家、中国への西原借款の当事者。

勧む。

十一月二十三日（木）

新嘗祭である。空襲があらうと予期され、どこも不寝番が行われている。

陸軍の発表が出鱈目であることは左の数字でも分る。すなわち本土来襲のB2Cを百二十台撃破したというのである。家の瞭すらも「嘘ですね」といった。十一月二十一日九州に来襲した飛行機六十三機を落し、大陸へ追って行って落したという。——民間の批判はなはだしいので、いわば照れかくしである。残骸が一つもないのはなぜであるか、これくらいのうのうと嘘をつく機関はない。命令をしつけているので、発表さえすれば、それで信用されると思っているらしい。

【出典不詳】本土来襲B2C撃破数

6.16～11.21まで四回のべ280機余り来襲、撃破130、撃破110機（ただし不確実を含む）【底本の

表は上下ズレがあり、撃破総計は120とあるが、撃破・撃破数を横に加えるとそのようになる。】

神風特攻隊が毎日比島方面で出動している旨、新聞は特報している。——朱雀隊出撃——第九型式隊突入（レイテ湾敵船団体当り）——こうして、精神主義高調の結果が、人命を以て物質の代理をするに至ったのである。しかも何人も注意するものもなく、民衆、気がつかず。

とよやがタスクス笑いながら話す——

「訓練で、若い娘達が分隊式とかをやって拳手の礼をするのであるが、中央に伊藤さんの奥さんが居って、私達が行列を進め、右をむいて手を挙げる。伊藤奥さんがそれに酬います。今、思い出しても可笑しいのです」と。

重慶政権が改組した。蒋介石とローズベルトが、スチルウェル召還事件を中心に、「下駄を預けた」とか「蒋介石の方が役者が上だ」とか（『朝日』。「そうではない、

それは皮相の觀察だ」（『読売』二十三日社論）だとかと、盛んに論議されている。外交を依然として、「駆引」と心得ている。支那の事を知っているものは米国を知らず、米国を知っている者は支那を知らず。

神風隊の一回の投弾のために、飛行機と飛行士を殺してしまうのはいいのか。

米国の戦費は一日、二億五千万弗だと。第六回戦時公債を発行に際しローズヴェルト発表。

白柳秀湖君のところに安田君の令嬢の履歴書を持って行った。もうある程度決った人がある由。

十一月二十四日（金）

『毎日新聞』の標題に「典型的戦争屋スプルーアンズ」と。米人を攻撃するためだが、「戦争屋」は、そこいらに對し皮肉でござろうぞ。

子供達の買出し観——

i Raymond Spruance 海軍大將、太平洋の主要海戦で指揮。

昭和十九年十一月

「『毎日』十一月二十四日 買出しの封じ手 都立一中生：買出しの起因 腹を満たす為金のある者が買う、欧米の利己主義の為、工場労働者が必要以上に高給な為。悪い訳 配給が乱される、交通機関に害、悪性インフレのもと、英米の望むところ。どうする 買い取り価格を上げる、自覚を促す、百姓に時局を認識させる。」

『毎日』に「蒋介石の愚を嗤う」という社論あり。相変らず蔣が米国の強圧に屈したことをいう。しかも筆者は何応欽、孔祥熙が、参謀総長、行政院副院長に残った意味を解しないのである。

米国が「自由主義の仮面を脱いで、貪慾な」政策に出れば、それは日本の利益である。なぜならば、それは、必らず支那の反抗を招致するから。しかし米国の恐しさは、そんな風に出ないことであろう。そうすれば米国の人氣は、まだ支那に続くであろう。

正午少し過ぎ警戒警報について、空襲警報発令。後の発表によると七十機帝都にマリアナ島方面より来た

という。警報が出ると、子供や婦人が、隣りの山を掘つた壕の中に入れられる。そこへ防空群長であろう、一々叱り飛ばす。子供が防空壕の中で便を催おしても、外に出さぬ。誰かが、外を歩いていると「早く壕の中に這入ってくれ」と怒鳴る。しかも敵機は、少くともこの方面から影も形も見えぬのである。見えぬ敵機に対し、ちよつと外に出ることすら許さぬ「防空」である。僕は多くは書齋にあつた。無論、軽装はしたのであるが。

晩に大熊君の家に行く途中、ゾロゾロ電車から下り立つた群衆が、今日の異変を語りつつ帰る。女の子の話「米国の飛行機は早いわ。すばらしいいい機械があつて、それが大工場の上に行くときピタリと止まつて場所が直ぐ分るそうですよ。写真もいいのがとれるんですつて」男の子「そんなこといっちゃいけないよ。そんなことは嘘だよ」米国機の優秀を語るのはデマであり、利敵行為と信じさせられているのだが、しかしその言葉はハーフ・ハーテッド【halfhearted 気乗りしない】で女の子の話しに興味を持つていたようだった。

英子の話を聞くと、かれ等女生徒が隠れる防空壕は、機械工場の下にあり、極めて小さく、その上には薄いコンクリートがあるのみだと。ここに爆弾が落ちれば全滅は必至である。その近くに河原があるのだから、そこへ避難させればいいのである。しかし我等にしてからが、それを注意したり、抗議したりしても無駄であると感じる。それぐらい総べてが、運命的に感ぜられて居り、改善は不可能だ。

それにしても学徒は、皆な工場にあり。工場空襲の場合には、これが全滅の危険にあり。壮丁は軍人として、少年は、工場において――ああ。この国は斯くて亡国に瀕す。愚劣なる指導者の罪、ついここに至る。

十一月二十五日(土)

昨日の空襲は軽武装で、一万メートル近い高度から爆弾を投げたそうだ。「撃墜確認三機」と大本営発表にあるが、そんな高度に日本飛行機があがれるかどうか。さらに墜ちた飛行機の残骸はどこにもなし。

敵の発表によると、敵機は「第二十航空隊所属ハンセル麾下の第二十一爆撃隊で、サイパン島に基地を有する。ハンセルは六月、B-26の第一回九州爆撃をワシントンから指揮した人物」だ。

日本側の発表には、どの方面に來たか、その損害は幾らというようなことは全くなし。

田沢義鋪氏死去。(貴族院議員)。先年一緒に満州と北支を旅行し、その人格は珍らしい人であつた。その後、相交わるころ少なかったが、惜しむべし。講演中卒倒した由。

東京都の講演を頼まれて成城に行く途中、警戒警報発令。ために中止。加藤武雄君のところへ赴き、それから柳田国男氏を訪ぬ。頭布を被つて自分で出て來た柳田氏、それから奥さんが自らお茶を運ぶ。女中がいらないのだという。大きな書齋だ、二十坪もあろうか。それにギッシリ書籍がまつている。僕はこんな大きなものは要らぬが、立派な書齋が欲しいと思う。柳田氏は三万冊くらいあろうかという。

昭和十九年十一月

『大陸東洋經濟』の座談会に出ず。ダンバートン・オークス案に関するもの。神川彦松、横田喜三郎、高垣寅次郎、平貞蔵諸君出席。神川君と議論す。かれ「国策」にかくれて窮す。結局は大した議論家にあらず。横田君の方が、遙かに理論的だ。もつとも横田君と予とは、その立場が近似しているからの理由もあろう。

地域主義か、國際中央主義かで、議論激し。ただし速記にとらず。こんなことすらも公表できないことに、日本思想界の不具の原因を見る。

十一月二十六日(日)

二十四日の帝都侵入B-26に与えた損害は、大本營発表は撃墜五機、損害を与えたるもの九機——我方自爆未帰還機七機という。ことごとく海上に落ちたるものの如く地上には一機も見当らず。

夜中、雨と思つたのに、そうではなくて、落葉翻々たるのであつた。秋である。

それにしても、どこに行つても薪炭無し。柳田氏は

庭の木を切って、炭を作ったといっていた。

新聞に現れたるもの左の如し。

『毎日』十一月二十六日 ガスなき家 …暇さえあれば薪

(実は雑草) 拾い、9人家族月に半俵の薪で要らぬ家具は全て焚いた、後は生米食うしかない、7月以来木炭の配給が無いどうなるのか。」

十一月二十七日(月)(雨)

山本デンチスト【歯医者】が死し、告別式あり。先頃の空襲で動かしたので悪化した結果だという。告別式中に空襲警報発令。皆な穴にかくる。僕は玄関で待つ。皆なグット・ハートデ^マ【goodhearted 思いやりがある】で、知識階級はあまりおびえ居らず。日本側飛行機が、ほとんど問題にならないことが何人にも話題になつてゐる。「朝、ビステーキの大きいのを食って、それからやって来て、明るい中に家に帰るんだ」「出勤が今日はちよつと遅れたね」と敵機について話している。同時に九州

辺で、花嫁、花婿が、結婚式が終つた当日、爆弾でやられたというような実験談もある。

十一月二十八日(火)

東京都の依頼により青梅から中に入った小曾木村というに講演に赴く。帰りには飯能に出て七前半帰宅。約十時間働きで一日四十三円某し。旅費は当方から持ち出したから、土工夫より遙かに悪し。近頃は人夫の稼ぎが一日百円にもなる場合があるという。悪性インフレ、今や一般化。

【出典不詳】：「上がしつかりせぬと末端では高賃金低能率といふやうな現象を生ずる。」…夏皆勤したら一日当りの収入が減つた、仕事が減つてゐるのだ。勤労学徒も朝・午後各二時間労働で、朝七時から夜七時まで居る、…」

この山と山とに、かこまれた山地で、空襲警報が発令されると、壕の中に這入つたりするのである。僕は

村長に、その無用を話して、生産に励むように勧めて置いた。

東京都庁の地方事務所に働いている若い青年が、「戦争に日本が敗けるような気がします」と話していた。他の一人が叱して「必勝の信念を持たなくては駄目じゃないか」と。

笠原の兄、信州より出京。家に招く。

十一月二十九日（水）

晩に国際関係研究会で柳沢健君のタイに関する話あり。その要領は別記す。

十二時過ぎ警戒警報。ついで空襲警報。

柳沢君は、黒田清伯から聞いたのだが、米国側では二十八、九の両日は休んで三十日には東京を空襲すると放送したと話していた。これが二十九日の夕方のことである。その通りである。

十一月三十日（木）

午前一時頃、空襲警報で書庫に赴く。「京浜上空に敵機無し」というのでベッドにもぐり込む。続いて空襲警報があつたので、そのまま寝込んでしまう。眼をあくと午前八時。

富士アイスの重役会に赴くと、今晩来の被害の多かったのに驚く。東洋経済の後方は火事で焼けた。日本橋の三越前方も然り。盲爆だ。

この焼け出されたのに対し、政府は何事もできない。隣組で食料、衣服を取敢えず与え、後はいわゆる縁者疎開をさせるのだそう。隣組とても、しかし与えるべきものは、そんなにあるはずはない。そこで被害者は「身の不幸」として「お気の毒様」だけだ。

雨降る。そこから今晩来の火事の煙が出ている。天気続きで、風が吹いていたら、大火事になったろうと思われる。

十二月一日（金）

今日も雨だ。何とよく降ることよだ。

『東洋経済』の来栖大使の演説を批評する一文を書きオリエンタル・エコノミストの編輯会議に出ず。

東洋経済でも、もう戦時体制に移り、家族は山中湖に移り、社員は社内に宿り得るようにするのだそうだ。空襲のため能率が非常に低下。

あらゆる紙上体制は整った。修理なども体制だけはキチンとできあがった。しかも実際は靴の修繕一つできない状態だ。

【「出典不詳」】…なるほど修理班など「形の上ではなかなか整つてゐるが、軍監部による修理機構と統制会によるそれとの間に調整すべき複雑な面が多々あり、又肝腎の修理用資材や労務や技術等の調達、動員も思ふにまかせず、謂はば生殺しの状態」…

鉄道関係者は汽車に乗ることが恐しいそうだ。毎日、徴兵の青年が停車場に一杯だ。

毎日、通う池上線の車掌が若い婦人になったのはよほど以前からのことだが、最近では運転手が婦人になった。男の手がなくなったのである。

東京の制空権は今や敵軍に渡った。敵はいつでも日本を襲うことができ、しかも極めて安全である。

『読売』『陣影』十二月一日…久里浜のペリー記念碑は撤去案があつたが未だある、取りあえず「天誅」と立札して撤去することになった。…「日本国民がペルリに頭を下げる筋合は全然ない」…

ペルリの記念碑が、いよいよ撤去される。丸山国雄君が『ハリス、ペリー侵略外交顛末』というのを発行した。内容は、当時の「通信全覧」より引用したもので、真面目な研究だが、その題名が時局的である。

十二月二日（土）曇

一日、在宅。石井の『外交余録』などを再読す。矢

張りこれだけの知識ある外交家は少なし。石井は日本
で有数な外交官であつた。

日本人が良心的でないのは、どこに原因があるのだ
ろうか。考えていることと、まるで反対のことをいう
のである。丸山国雄君の『ペリー侵略史』もそうであり、
伊藤道夫君の米人鬼畜呼わりもそうである。無論、ま
た海老名一雄君がラジオや講演会で、米人惨虐説の宣
伝もそうだ。僕の周囲で、これをやらないものはほと
んどない。僕などが、沈黙を守っている唯一の存在だ。
これは国家を最大絶対の存在と考え、その国策の線に
沿うことが義務だという考え方、それとともにそうす
ることの方が利益だという利益主義からであろう。外
国においては、そうした立場をとらない人々が少なく
ない。そのアチチュード [attitude 考え] を作ることが、
今後の教育の任務だ。

大熊真君の『幕末東亜外交史』を読む。文章もよく、
研究も行き届いている。惜しい研究家を死なした。

昭和十九年十二月

十二月三日 (日)

書庫の整理をなす。待避をなす用意。

本日また帝都を敵機来襲。二十四日から左の如し。
いずれも大本営発表。

来襲日	機数	撃墜数	損害
二十四日	七〇	一四	火災
二十七日	四〇	無し	微軽
三十日 (一・五時)	二〇	無し	火災
三日	七〇	二二	火災 (五機)

(敵の発表では一機を失なっただけだといっている。)
三十日未明は雨で、しかも防空指導官が無理に防空
壕に入れたので、病人ができたらしい。これは明らか
に盲爆だ。他の昼間爆撃は、中島飛行場を目がけて、
他を目がけない。三日目毎の「定期便」だ。(撃墜数に
ついては敵発表と絶大な相違あり)

十二月四日 (月)

「東洋経済」の評議員会に出る。

蠅山君の話しに、ある政府関係会に、僕を出したらという話をする、「清沢君が来ると打ちこわしになるから」といったという。蠅山君は「出てくれ、そしてあの分らず屋達を啓蒙してくれ」といつていた。山田君は「清沢君さんはうざい型」と思われているんですよ」と笑う。どこでも、また誰とでも議論をするので、同席を嫌がっているものがある証拠だ。しかしこれのために態度を変更する必要も意志もなし。僕の態度は破壊的ではなく、建設的だ。間違っているのは先方である。

セーリスの『日本渡航記』、小野寿人の『明治維新前後における政治思想の展開』を購入。後者は神宮皇学館大学助教授。帝大出身だが、神風的思想所有者。若い人人が、こう凝り固めては気の毒である。

ENEMY PROPHECIES BELIED

All Predictions of End of War Wrong, Says,

Reich Spokesman

——
Domei

BERLIN, December 1.-Motivated by the latest correction made by Prime Minister Winston Churchill on his previous predictions, the spokesman of the German Foreign Office recently published a list of prophecies made by notable British and American statesmen in regard to the presumable date of the termination of the war against Germany.

According to this list, Churchill declared on November 12, 1944 in Paris that Germany would be beaten within six months. On January 1, 1944 U.S. General George Patton declared at one of his press conferences that October 31 would be the date for the end of the war against Germany, while General Sir Bernard Montgomery thought December 1944 would be the likely date.

On August 3, 1944 British Foreign Secretary Anthony Eden said that by the middle of September 1944 the

war would be terminated, while Churchill some months earlier said that the summer of 1944 would see the end of the war.

Prime Minister Jam C Smuts of the Union of South Africa promised his soldiers on December 9, 1943 that they would be home by Christmas 1944. General Eisenhower said on December 7, 1943 that the war would certainly be terminated by a victory for the anti-Axis countries in the course of 1944.

Vice-President Henry Wallace of the United States predicted on December 26, 1943 that the anti-Axis countries would defeat Germany and crush her within three months after the invasion. Former U.S. Secretary of State Cordell Hull stated on December 28, 1943 that a German defeat could be reckoned with as an absolute certainty in 1944.

【敵の予言は偽りである／戦争終結の全ての予言は誤りである、とライヒスボークスマンは言う（ベルリン発

十二月一日同盟）チャーチル首相の前の予想に関する最新の訂正に動機付けられて、最近、ドイツ外務省の報道官は、著名な英米政治家の対独戦争終了期の予言リストを公開した。このリストによると、チャーチルは1944.11.12に六ヶ月以内であるとパリで公言した。1944.1.にパットン将軍は10.31が対独戦争の終わりであると記者会見で断言し、一方モンゴメリー将軍は十二月がありそうな日付という。八月三日英国の外相エデンは九月半ばには終わるといい、一方チャーチルは数カ月前、夏には終わるといった。南アフリカ連合の首相スマッツは1943.12.9に来年のクリスマスは自宅であろうと兵士に約束した。アイゼンハワー将軍は1943.12.7に1944年中には半枢軸の勝利で終わると確かに言った。ウオレス米国副大統領は1943.12.26に侵攻後三ヶ月以内にドイツを倒し潰すことを予測した。ハル元長官は、1943.12.28にドイツ敗北は1944年内であることは絶对確実とされるべきとした。】

ドイツ中々善戦し、諸種の予言が失敗す。

十二月五日（火）

日本外交史研究所の発会式をあぐ。参会者二十三名。たまたま小野塚博士の告別式あり。穂積博士、蠣山君等はそのため欠席。

出席者——幣原喜重郎男、桑木嚴翼、松田道一、柳沢健、鈴木文史郎、伊藤正徳、高橋雄豺、小汀利得、飯田清三、石橋湛山、田村幸策、植原悦二郎、高柳賢三、松本丞治、高木陸郎、宮川三郎、芦田均、馬場恒吾、三井高維、信夫淳平、鮎沢巖

僕挨拶して、事業として「外交家の経験談の蒐集」「外交史の特殊的研究」「外交史辞典の編纂」「英語への翻訳」をあぐ。同時に予は、これから自らの報酬をせざる旨を明言す。芦田君の挨拶あり。それから幣原男の日露戦争当時およびワシントン会議当時の話しあり。

伊藤博文を議長とする会議で日露戦争継続の決定あり、然るに御前会議の結果、償金と割取を決議して、それで談判を纏めよとの訓令を出した。然るに石井子（当時通商局長）が、英公使マクドナルドから樺太南方

の割取やむなしとの情報を聞いて、再び打電した。それが幸い間に合つて、樺太の南方が手に入った——そういう興味ある話しがあった。（伊藤君筆記）

瞭、久しぶりに帰宅。中島飛行場の製図係りにまわされたそうだ。工場は、とても整っている由。自由学園を灰色に塗つて、そこへ軍需省製造工場を移したとのこと。総ての建物と、総ての人員は、字義なりに戦争遂行のために使うのである。

十二月六日（水）

東洋経済に來栖大使の演説について書く。來栖は十一月二十六日を以て、米国の対日最後通牒の日といひ、毎年演説をすることになっている。内容は石橋君はいいといひ、僕は、日本そのものの立場に無理があるから議論が弱いと思う。

十二月七日（木）

新らしく特高主任（東調布警察署）稲毛警部補が來

任したということで水野君とともに来訪。

高柳君と共に「正金」の加納久朗子を訪問。例によつて気焰高し。同子のところに憲兵隊から四人をつけて居った。そして女中を買収してスパイにした。同子は女中が、どうも可笑しいと思つて、とうとう実を吐かせた。そこで直ちに憲兵隊に電話をかけ、「こちらから行く」といったら、「こちらから参ります」といい、押問答の末、少尉が来た。かれは、「この事不足の際、四人なんて無用だ。一人を専任にし給え、その代り、一日中、どこにでも連れて行く」といった。「スパイ女中は『東條をどう思う』といったことを聞くので、『東條がルーズヴェルトやチャーチルと同等以上の人間だと思わぬ』といったが、君等もそう思わぬか」とアケスケにいつてやつたという。「それから一応解決したと思う」——といつていた。

同氏の話によると吉田茂（大使）のところにも憲兵隊からスパイを書生に住み込ませたとのことである。

「三越」の前方に空襲による被害を見る。二、三、四

方にわたつて焼けている。二千軒ぐらいの被害だそう
だ。

外務省に行くべく玄関に出ると大きな地震あり。水平動の強きもの。奈良君によつて、名古屋方面の強震で電話不通、蒲原（？）駅陥落、汽車不通という事実を聞く。その被害は甚大であろうと考えられる。被害者に無限に供給すべき衣料その他のないのは無論で、何でも二百万個ぐらいしか保存して居らないそうだ。「[▼]危害するならば今だ」と奈良君戯る。地震のことは新聞にも書かず、ラジオにも報道せぬ。

ギリシャに暴動あり。ドイツ軍を追つて英軍の手に渡つてから約一ヶ月の後、すでにこの騒動あり。人間は矢張り強圧を必要とする如き智的状态にありと考ふ。ことにギリシャの如き国において然り。しかし国内騒動は戦争に比して大袈裟に伝わる。ギリシャのこの大暴動で三日間で死者百七十、負傷三九三である。チャーチルの報告では、死者十一、負傷六十とある。戦争においては問題にならぬ数である。

十二月八日（金）

本日は大東亜戦争勃発の三周年である。朝、小磯首相の放送があつたが、例により低劣。口調も、東條より遙かに下手である。全く紋切り型で、こうした指導者しか持たない日本は憐れというべけれ。

昨日は午後六時に警報、今晩二時頃警報。起きて整服。記念日だから、この日に来るだろうというので、多くの平和産業は休んでいるとの事、「仇討ち」思想だ。当局者も、必らず来るだろうと予測している由。

小学校は十一日まで休み。英子の組は二十六名が八名しか来ていないという。いずれも八日の復讐を予期してのことだ。

これ等の事実は、日本人がいかに米国を「日本的」に観ているかを示すものだ。予は先頃、政府に駐米大使をやった者で、一つの情勢判断局をつくれと『東洋経済』に書いたが、そうすべきだと思う。

午後は、家の糞尿の汲みとりをなし、また落葉を集む。

畠に堆肥をつくるためである。

十二月九日（土）

午前三時頃警戒警報。やはり起きて服装整う。これでは一般人は神経衰弱になろう。

七日に高柳君から本日、外務次官官邸で幣原男と会谈するから来てくれとの話しあり。諾す。問題はジャポニカスの対外宣伝およびダンバートン・オークスの案についてである。ところが本朝、外務次官より代理電話あり。遠慮してくれというのである。予というジャーナリストを入れたくないのであろう。沢田廉三という男はゴチゴチの官僚型であるが、その眼からは我等は、市井の一ジャーナリストにしか見えないのであろう。実は予は国民学術協会あり、不承不承に承諾したのだが、こう先方から出られては不愉快である。こういう男を次官にする重光も、どうも大したものではないように見える。最初の印象を変更する必要はないようだ。——この問題ではないけれども。

重光はソ連にいても、ロンドンにいても、強力勢力のテーストに向くようなことばかりいつて来たものであつて、若い官吏たちはこれに心服しなかつた。そのことは予は、しばしば他人にも話したが、いま外務省の囑託になつて近辺にいても、その大きな政治的見識は、どうもみえないようである。

その代り国民学術協会に出る。桑木、松本烝治、牧野英一、芦田均、杉森孝次郎、阿部賢一、桑木或雄、小泉信三、長谷川如是閑の諸氏出席。

小泉信三氏は慶応義塾長で内閣顧問だ。瘠せた。五貫目ばかり減つたが、それでも一貫五百目ばかり最近増えたという。驚いたことは、全く右翼的になつたことである。「戦争でどうなつても、米国の奴隷になるよりいい」とかれはいう。「奴隷になるということはどういうことでしょうか」というと「講和条件にもよるが」という。「この戦争が今后二年も続いたらどうなるか」というと「生活程度が低くなるだけで、戦争はやれる」と答える。戦争始末の処理というようなことは、以て

の外だという態度であり、そういうことは考えても罪悪であるようにいうのである。

僕は淋しくなつた。小泉氏の如きは最も強靱なるリベラリストだと思つた。然るに今、それがまったく反対であることを発見した。杉森氏に帰途「小泉氏は変つた」というと「自己の地位のプロテクションもあらうが」といつた。それにしても大臣待遇とか塾長になれば、意見が、こうも変わるものだらうか。日本人がそうなのか、学者は時の問題に諒解を持たぬのか。

この間、伊藤正徳が松本氏に「小泉君は誰の評判もいい」といつた。松本博士は義兄である。「誰にも評判はよくはない、現に家では、あんな最右翼みたいなことをいつて評判が悪い、清沢さんのようになってくれればいいがといっていますよ」と僕にいうのである。僕はしかし「私は同情します。兎に角、数千人の生命を預つてゐる。愚図愚図していれば踏みつぶされてしましますから」と弁護した。悪意は持たぬけれども、「この人が」と淋しいことは事実である。

阿部賢一君の話によると「ソ連は中立条約の廃棄を申し込んで来るだろう、と外務省は悲観的だ」というのである。ソ連が満州を外蒙のようにするだろうと松本氏はいう。僕は「日本は満州を持ち切れまい。それを外交の手に使うべきだ」という。これには反対があった。要するに政府およびその関係者、識者は、まだ非常に強気である。最後までのことを突き進んで考えることを恐れているようだ。

十二月十日（日）

一日中、家にいる。午後は堆肥づくり。麦に肥しをやる。

大熊真君の『幕末期東亜外交史』を読んでいる。研究がつんでいるだけに面白く、参考となるところ多し。幕府に対する批判は、酷にすぎ。けれど現代においては朝廷側をかさにきてやってきたことは、総べて正しとの見解に立たねばならぬ関係から、そうした無理が生ずるのである。

外務省あたりでの情報によると××^マ×^マ【天皇】について三国三様の方針がある。重慶は、その存在が害があり、一掃を必要とすると考える。英国はスタビライジング・フォース【stabilizing force】と考える。米国はラバー・スタンプ【rubber stamp】として今後利用しようとする。

この問題は、最も重大だ。幕末維新と同様な——それ以上の大変局を予想せしめる。最も困難な問題だ。

『ネーション』にパシフィカスなる者の論文あり。日本の政情を評して東條が失脚したのは実業家の怒りを買ったからだ。今や日本は中央は藤原銀次郎による軍需省独占、南方は事業の財閥による分割あり。国務省の案は日本の実業家をして権力を得しめることである。云々と、国務省を攻撃している由。グルーは、対日政策として、産業人中心を考えていることは明らかであり、かつその意見は十九世紀的自由主義を脱せないであらうことも察せられる。

外交には持つものを手札として、最少限度に譲歩する手を用うの外なし。日本が持っているものは満州と、

外国の駐兵とである。その二つを使つて朝鮮、台湾を食い止め得れば最上である。

朝鮮に対する小磯首相の言明が、いま問題になつてゐると。すなわち何等かの政治的権限を与える問題だ。朝鮮は日本のアイランド問題だ。

十二月十一日(月)

昨夜八時、今晚三時頃、敵機來たる。損害よりも晚に起こされることが生活的不安である。

東洋經濟の評議員会に出る。諸氏の談話によつて、過般の中部日本の地震が、戦力に極めて重大な影響あるを明らかにした。日本の飛行機生産の少くとも四割は名古屋付近にあり。その外に造船、重工業はその方面に多い。しかも、それ等は海浜の埋立地に多いから、被害も多かるうという。火事は少いが、機械の狂いを生じたものは、これを修繕する資料がない。

汽車は掛川まで通じ、以遠は通らない。客は一切受けない。イングランドにとつてのアイランド問題という意か？

付けて居らぬ。中央線と北陸線をまわる外はない。

大東亜戦争の第一段落は「中部日本」の大地震に出ず、と後世の歴史家は書くであろう。折しもレイテ島において敵はまた一個師団をあげ(日本側発表)、また後ろのオルモクに上陸したという。空中勢力は双方千五百台ばかりだが、タンクの如きは敵は千台も持つてゐるという。レイテの戦芳(かん)ばしからず。

欧州においては十日ソ連とド・ゴール仏政府との間に同盟および相互援助条約が結ばれた。ドイツと共產主義者への両方への姿勢があるう。イタリー政府の外相スフォルザに対し英国は反対し、米国は内政干渉に反対してゐる。ギリシャでは暴動が蜂起して英国が手こずる。――英は地中海における勢力回復に努力、米とソ連はこれに干渉的態度をとる。すでにドイツが敗れたと見て、戦後外交に入つてゐる。

十二月七日午后一時三十六分の地震は遠州灘に震源を有する。名古屋は水道がとまつたらしく、伊豆下田には一部に浸水を見た。静岡県では地震の後に、空襲

が来て、職工達が逃げ出したという。震災のことを新聞はほとんど書かない。ラジオは全く放送しなかった。

十二月十二日（火）

昨夜も二回、警戒警報で起された。

今日、一日中、家にいる。大熊君の『幕末期東亜外交史』を読了す。近頃、最もいい本の一つであつた。いきていれば種々論議するところであつた。改めて惜しい人を失くしたことを思う。

午後は麦の手入れ。ジャポニカスを書き初む。

ギリシャでも、イタリーでも英国の腰強し。恐らくはソ連にポーランドをやる代りに、地中海ではフリー・ハンドを得る諒解があるのだろう。それにしても英国首相が、伊、希について、ファシストだけは許せぬといい、共産党が公然重要閣僚に入っているのは、何といつても不自然だ。こんなことが長く続くはずなし。ダンバートン・オークス案の前提をなすところの勢力分割競争が今や始まる。

今日、午後一時二十二分、国内をあげて、伊勢大神宮に必勝祈願をした。小磯首相の提唱で、かねてから、そういう演説をしていた。神風を吹かせるようにというのである。

二十世紀中期の科学戦を指導する日本の首相は神風をまき起す祈願を真面目にやる人なのである。

ラジオ、また新聞は、毎日、毎日、特別攻撃隊のことを書き、放送している。体当り精神と事実との表彰、鼓吹である。

十二月十三日（水）

昨夜八時、十二時頃、午前四時半頃、三回に渡つて警報発令。真夜中のものは、ひどく高射砲がなり、その破片が、家より遠からざるところに落ちた。家の硝子戸が、ミリミリなった。この家の破壊される時も、そう遠くないかも知れぬ。その時々起きて、着物を着るのである。その煩わしさは並大抵のことに非ず。これをニューヨーク、シカゴその他に半年も繰返せば、

かれ等は戦争をやめる気になるならん。

外交問題処理には屈伸性（フレキシビリティ）の心的態度が絶対に必要だ。これが日本人にはない。ユダヤ人問題を説く連中——現在、日本の中心になっている連中にことたり。

帝国ホテルで高柳賢三、長谷川如是閑、鮎沢巖の諸君と会食後、話していると空襲警報あり、静岡、名古屋方面に八十機前後の編隊が空爆したことが報ぜられた。後の放送では「損害軽微」とあるが、先頃、地震の被害の立直りができない前に、この爆撃は打撃であろう。

それよりも時間の空費は恐ろしいもの。我等は午後三時頃までホテルを動けなかった。

『現代』十一号に「座談会」あり「神州憤激して起つ」というのであるが、その中で御手洗辰雄君は

【『読売』】『現代』十一号にありと読売新聞に載ったと言うことであろう、日付は無し】：御手洗氏は『何を措いても、

国民の思想や精神に影響を与へる立場にある指導者にして親米英的人物乃至は過去においてさういふ傾向のあつた人間は、仮令政府の要路にあらうと、或は軍人であらうと、悉く危険人物と見做して差支えない。……そんな危険人物に先達して貰はなくても……阿部氏は、敵の日本抹殺方針を考えるだけで憤激するようであれば、『敵が手を変へて融和政策に出てきたとき、ちよつと手の打ちやうがなくなる……』

といつてゐる由。読売新聞に見ゆ。「親米英的人物」というのはどういふことで、誰がそれを決定するのであるか。

僕が『東洋経済』に書いた「侵略者とは何か」といふ社論は削除になつた。その論文が来栖大使などに問題になつてゐた、と高柳君が話してゐた。「石橋君はあんな問題を書くまいから清沢だろう」といつてゐたそ

十二月十四日（木）

丸ビル事務所で伊藤君と打合わす。まだ内部が片づかず。

陸軍軍務局長に真田少将就任。佐藤賢了は転出。前議会から問題だったが、「軍の面目」があつて一時取りやめ。ほとぼりがさめた時に発表したのである。

今でもそうであるが、木や果樹をドンドン伐つてしまった。青壮年団や官吏などの方針であつた。ところが、今一部では、それが行き過ぎであることが分つて来た。もつとも、軽井沢でも、いま木を切っているし、また畠の木も、必らず切られるであろう、薪のために。破壊そのものに興味を持つのであるから、どうにも手がつけられない。

『毎日』「硯滴」十二月十五日 「二時、果樹園征伐が横行し、立派な果樹が惜し気もなく引抜かれたところがあつた」：果物は贅沢どころか無くてはならない物であり、耕地によれば果物に向き他は不適というのもある。果樹

園と共に他も増産するべきであつた。果樹園農家は優秀で総合的に出来る。「果樹征伐は」ひどく、取り戻すのに時間がかかる。「一時の勢で取返すかないことは金輪際やらないことに、この大きな犠牲を役立てたい。」

十二月十五日（金）

昨夜は一回、空襲あり。一機で五百万市民を不眠に落とす。

ジャポニカスの原稿を書く。

十二月十六日（土）（独軍西部攻勢に出ず）

昨夜は空襲警報鳴らず。非常によく眠れた。何だか落し物をしたような気持ちである。

夕方清野道之君来る。近く松本に赴く由。その話――

松本の駅長がスパイだということで大騒ぎをした。他人のところに、いろいろのものが送り届けられ、駅員が不思議に思っていた。ある時、かれが留守の時、するめが届いた。そこで駅員がこれをあぶると、英

文字が現れた。それがスパイの秘密通信だというので捕えられた。その後かれは銃殺に付せられたという噂がある。兎に角、かれが居らぬことは事実である。

この外に、もう一人、松本にスパイがいるという。そういうことを女学生までが噂さしているというのである。船などがあまり沈められるので、これはスパイの仕業に違いないとて、さてこそ騒ぐのである。

清野君の会社に帝大出の某というものがある。これが蒲田の某という手の先で、病気を直す男の信者である。これによると世界は今、善の神と悪の神とが戦っている。善の神は日本で、悪の神は米国だが、その使いがユダヤ人だ。日本人はそのユダヤ化で悪の神が体に這入り込んでいる。そのため東京は灰となる。しかし結局、善の神が勝つ——そういうのだそうだ。この人のお守りを持っていると悪の神の米国の爆弾は決して当らない。そこで海軍軍人などで、大金を投じて、そのお守りを貰う者が沢山あるとのことだ。そういう予言者みたいなことをいう者が沢山ある。ユダヤ禍主

義者も、それ等の一人だ。大本教の予言が当たったとかで、信者がまた増えたそうだ。

十二月十七日（日）（独軍の攻勢の報到る）

昨夜も空襲無し。一昨夜からパンツをはいたまま寝るんだが、却つて空襲がない。

女中の豊やとなつ、やに徴用令来たる。女中二人がだいたいぜいたくだった。家内が、いろいろ清明と相談しているようだ。

ミンドロ島に敵一箇師団上陸したと新聞発表。マニラの鼻先の島だ。

チャーチル、議会においてソ連にカーゾン線以東を与う旨を発表。イタリー、ギリシャに英国のフリー・ハンドを与うる代りに、ソ連にポーランドを与う取引だ。今回の戦争で、世界に平和が来ぬことが、いよいよ明らかになった。再びパワー・ポリチックスの幕が開いた。

ジャポニカスの原稿を奈良君に送る。

近頃、新著を沢山買入る。その中に武田誠吾なる者の『新聞とユダヤ人』なる一書あり。世界において斯る愚劣なる書籍が、店頭をかざる国ありや。この国民の知識を引あぐることは絶望的な仕事だ。

十二月十八日（月）

東経評議員会に出席。

十二月十九日（火）

日本外交史研究所例会を午後一時半から経済クラブに開会。幣原喜重郎男出席。一時間半にわたりワシントン会議の頃のことを話す。新しい資料あり、極めて有益である。

出席——幣原——、松本丞治、桑木巖翼、石橋湛山、馬場恒吾、小汀利得、高橋雄豺、田村幸策、永井松三、植原悦二郎、杉森孝次郎、清沢、伊藤

幣原男の話は近く僕が書くつもり。幣原男は依然として出席することをあまり好まないようなゼスチュ

アーをする。ゼスチュアーもあるようだ。つまり自分は広告をしたくないというところの。だが、非常にエーブル【*able* 有能な】な外交官であることは事実だ。

松本丞治博士から外交史研究所へ一千円寄付さる。感謝にたえず。

十二月二十日（水）

一日中、『東洋経済』の社論を書く。欧州が勢力範囲に分割さるる問題についてである。各国共、戦争最中に第三次戦争のために準備しつつある旨を論ず。ソ連の実利外交は、果して将来、ソ連に幸いするや。ポーランド問題の如きはソ連に禍を残すものならん。

十二月二十一日（木）

午前中、米国の國務長官の更迭について書く。『東洋経済』の社論（新年后）なり。米国が戦後、経済的帝國主義に乗り出す御膳立てである。またグルーの次官就任は、日本に対する処分案を処理せしめるためであ

る。

正午に黒木時太郎君を訪問、家内と共に。柿の木坂の新居（借家）に移つて最初のお客だ。相変らずお賑かな男だ。

十二月二十二日（金）

外務省に赴く。長谷川如是閑、鮎沢巖両君がジャポニカスに参加したため打ち合せの会があるによる。帝国ホテルで昼食。

また警報なる。名古屋方面に百機近く空襲したりと。損害軽微とあるが、果して然るや否や。おそらくそうではあるまい。

日本クラブに久し振りに寄る。田中都吉氏、ドイツの西部大反撃を大いにたのもしそうにいう。誰も、表面から悲観的のいうものなし。

田村幸策君の話——ワシントン会議の時、ロイド・ジョージ、日本参事官永井松三氏に、日本に行くには幾日かかると聞き、確か船をとつたという。その時、

日英同盟廃棄に決し、日本の諒解を求めるために、日本に赴かんとしたのではないかという。珍らしいニーズである。

高柳君より一千元、外務省機密費から貰う。大して仕事もないのに、気の毒である。

十二月二十三日（土）

丸ビルの中央公論社跡、片つき、行つて掃除やら、いろいろ運び入る。

昨日、小汀君より電話あり。安田保善社より、武井大助常務理事を通し一千元を五ヶ年間寄付するに決定せる旨通知あり。これで完全に一ヶ年一万円ずつ。

一昨日、軍需大臣藤原銀次郎辞し、吉田茂就任。重光外相が辞するの噂があつた。右は小磯が大東亜大臣に政党人（二宮文相との説もあり）を持つて行きたく重光に交渉したところが、外交の二元化には反対で、誰がなるにしても大東亜大臣は兼任しなくてはならぬ。もし大東亜相をやめるならば、自分は辞職するの外な

しと強硬に出たため沙汰やみとなったのだと。高柳君の話しでは重光は重臣方面に信用があると。軍部ではソ連を利用せよというに對し、重光は駄目だという。「当ってみなくて駄目だという奴があるか」と重光に不満を有していた。スターリンの演説で始めてあきらめて、やりよくなつたとのことである。

小磯は近衛のところに行き、枢密院議長になつてくれといったが、近衛はこれを断つたそうだ。小磯は、押しがきかぬとの評判。

伊東巳代治の『翠雨莊日記』を読む。シベリア出兵に関する外交調査会の審議に関するものだ。寺内、後藤、伊東などがシベリアをあゝの革命のドサクサにどうかしようとの意図であつたのは明らかだ、これに對し、最も反対したのが牧野、次ぎが原敬だ。伊東というのは、一個陰性の政治家で、嫌な男である。外交調査会のようなものがある方が、それでも外交について、大きな失敗をしないためにいい。外交は遅すぎる方がいいいで、早すぎるのが困る。外交は老人の方がいい——第

一氣が長い、第二に綜合的知識がある。第三に判断が常識的だ。牧野が、何故に軍人に睨まれたかの理由が、牧野の思想を知ることにより明らかになる。かれはその時も辞職しようとしたのである。

十二月二十四日（日）

今回は幣原男の談話を筆記す。二十枚（四百字）を書了。近頃としては成績のいい方なり。

昨日、吉田四郎君の妻君来たり、先頃植原パパも清沢さんも、荷物を疎開すべきだといったら、清沢さんも、パパも自由主義者だから、そんなことをいうんだ、国家あつての僕等じゃないかといって怒りまわしたという。吉田君は優しすぎるくらい優しい男である。それが旭硝子という軍需会社に通つていると、こう筋違いをいうようになってしまふのである。かれは帝大出だから教育の問題ではない。論理の混濁といつてもいいかも知らん。吉田よしえさんの話しでは、四郎君は直きアメリカをやつつけてしまえるといつてゐるそうだ。

若い人、そして軍需関係の人の元氣よさには、一面頼もしいところがある。

それにしても若い人は新しく立ちあがったといっているようにである。彼等は「俺等が死ななければ、国家がつぶれるんだ」と、進んで平気で死に赴いている。黒木君の二男坊も、後方勤務なんかつまらんと飛行士方面に志願しようとしているそうだし、またかれの友人も来て、そういう話をしていそうさ。この間、研究所の伊藤君が、学生を引率して動員に行ったが、「学生は空襲が来ても平気ですよ」といつていた。青年の意気想うべし。喫茶店に行っていた時代とは確かに異なったものがある。

十二月二十五日（月）

日本では大正天皇祭、西洋ではクリスマスだ。

毎晩、一、二機帝都を襲わざるなし。しかもそれで帝都および近県を不寝に陥らしむ。昨夜も一昨夜も、三四時間、帝都付近にあった。

警報は、まず「東部軍司令官」が発令し、それから「横須賀鎮守府司令長官発令」をいう。これを一つにしないところが陸海軍対立である。

小磯首相が議会で「鮮台同胞の処遇改善」を声明した。その結果、朝鮮において大分問題が起っているそうだが、今朝の新聞で「政治処遇調査会」なるものが設置された。蟬山君などもその一人に選任されている。

ドイツ軍の十二月十六日に始まっていたゆるルントシュテット攻勢は、その後好調である。果してどこまで行るか。

長谷川如是閑、馬場恒吾、黒木時太郎および綿貫ドクトルを招く。馬場および長谷川両氏はもう七十歳の老齡。この戦争を生きぬけるや否やも疑わしく、午餐招待は、そんな気持もあった。しかし二人ながら極めて健康。

馬場氏は意気軒昂だ。政府と国民に良心なきを痛撃す。マツチを二十本使ってもつかぬ。しかもラジオでは、ⁱ「アメリカ側の言う「バルジ（突出部）の戦い」、地名から「アルデンヌ攻勢」とも言われる。殆ど最後の抵抗となる。

一本を二本に使えと放送している。何事かという。

近頃は人間が集まると、爆弾と焼夷弾の話に花が咲く。戦争下ではまず食物——それから農業のこと——それから爆弾というように話しの種が変化して来た。生活の変化である。

十二月二十六日（火）

国際関係研究会で石橋君が世界秩序奏を發表す。政治的な解決は期待できないので経済的方面から解決しようというのである。「経済」というも結局、政治問題であり、フライン・ドリームに終るおそれありと植原氏はいふ。案の骨子は世界を三圈に分けて、地域理事会と、世界理事会との二つにするのだ。しかし、兎に角、石橋君ならではできない案である。

それが終つてす、焼、き、会あり。東洋経済の評議員会の忘年会である。来年は果して、こういうことができるだろうかと皆で話す。

しかしこれで戦争が終れば、日本国民は戦争なんて

ものは何でもないことだと思いはしないか。お互いにまだ、不自由以外に、大して実害を受けていないではないかと僕がいうと、石橋君は、「先頃もそんなことを話したんだよ、ひどい目にあつたものは死んでしまつて、生きているものは傍観者だからね」という。

クリスマスに当るためか、昨夜から空襲来たらず。新聞の伝えるところでは、当方よりクリスマス・イヴを目がけてサイパンを襲撃したそうだ。双方で協定してクリスマスと新年と相互にやらないことにすればいいんだが——しかし、そんなことを考えるのは閑人のことなんだろう。ことに奇襲作戦は、日本の基本的な作戦だから、そんなことが実現されるおそれはなし。新聞の伝えるところでは、敵がクリスマス・イヴを祝つていたところに空襲したという。

十二月二十七日（水）

一日中、家に在つて幣原男の談話を書く。四十枚（四百字）二日に書き了う。

今日は銀翼を列ねた敵来たる。その内の一機落つ。近くに見あげていた朝鮮人まで、手を叩いて喜ぶ。「万歳、万歳」と声をあげところ、国技館の畳相撲に対する如し。

大本営の発表するところでは、五十機ばかり来て、半分近くを撃破したという。おそらく東京人の多くはそれを信じまい。発表があまりに過大であることは、大本営の信用のために惜むべし。

十二月二十八日（木）

幣原男のところへ筆記原稿を持って行く。日本クラブに赴くというので一緒に出る。来月も出てくれることになる。

伊藤安二君と共に、松井慶四郎男を訪う。日本外交史研究所のために話しをして貰わんためだ。折しも空襲発令で、道はものものしい光景だ。松井男は、そんな昔のことは覚えて居らぬという。かれは、二十一ヶ条要求の時の外務次官だが、話していると、いかにも

覚えていないらしい。「日露戦争の時の外相は小村さんだったが……」といった調子だ。これでは話しにならぬと、かえつてこちらから引下がることにする。石井や、牧野や、幣原に比すれば、その頭の働きが非常な異^ふいだ。ことに幣原が抜群である。

松井男は、しかし日本人には珍らしい容貌整った人だ。日露戦争の時の外務次官珍田が米国に行った後、政務次官であるかれが、次官代理をやったというから、若い時には敏腕だったのかも知れん。家は古いが、旧式な西洋式である。入口はホールになっている。外交官的な建物だ。だが空襲のためカーペットを取り去つてある。「加藤高明」の伝記があつたね、僕のところにもあるが、読まないんで……といった調子で、そういう方面にはまるで無関心だ。これでは我等の仕事には同情は持たなからう。

伊東敬君という英国通が検挙され、軍法会議で一ヶ年の刑の宣告を受けたということだ。伊東君は外務省嘱託であるが、夫人が英国人であることが疑を買つた

ものらしい。ただ普通のことを隣りの牧師さんかに話しその牧師がまた誰かに話した、それが調べられたという。また女学生かに話した話を父兄が密告したのだともいう。たまたま同君が徴兵されていたので、軍法会議に廻されたが、獄中では模範生活者であるとのことで憲兵も同情し、夫人に仕事を見つけてやっていくそう。かれが書いていた日記を調べられ、それに日本が敗けるようなことが書いてあったのが、崇つたという。

チャーチルがイーデンを伴つてギリシヤに飛んだ。七十歳の老人が、クリスマスの日にアテネに行ったことが、問題の重大性を語るものだ。チャーチルは、しかし少し飛び歩きすぎはしないか。

議会政治のいいことは、チャーチルが失敗すれば、かれが責任をとつて、無理押しをしないことである。すなわち事実を事実と認めて、無理が理屈を押えつけるようなことがないことだ。かれがやめれば、英国の政策をかえれば大して疵がつかないのだ。

十二月二十九日（金）

何のことはなしに一日過してしまった。馬場恒吾、芦田均両君に外交史の原稿を頼む。「大東亜戦争政治史」といったものである。

十二月三十日（土）

昨夜は空襲三回。浅草の蔵前が百軒ばかりやられたそう。警報が遅かったので、死者も大分あったとの事。片岡鉄兵君和歌山の知人方で死亡。その内輪の葬式をやるとのことと赴く。生命保険を十万円かけてあったとのことで、未亡人は路頭に迷う恐れなし。荻窪駅から十数分のところだが、爆弾が近くに落ち、鉄兵氏の家の硝子も割れたという。練馬付近の被害はかなり多いらしく、死傷者も少なくない。鉄兵氏の義弟に当る人の話しに、敵の爆弾は六割があたり、四割が盲爆だそう。

末次信正海軍大将死すとの報あり。かれは日米戦争

論者の巨頭である。かれは米国の飛行機は、絶対に日本に打撃を与え得ないといっていた。かつて、かれは、

リンドバーグが北海道に落ちたのは、かくて北方をスパイせんとするのだともいった。徳富と末次だけに対しては、この戦争が、日本にどういう結果を齎らかすという事実を見せてやりたかった。国民の喝采裡に死なすのは、ある意味で惜しい。新聞を見て僕は「惜しい」と自語した。

丸ビルに寄つて伊藤君と会見す。部屋大体完成す。

家妻が鮎沢君を訪問した帰りに電車の中で、ある婦人の話である。

先頃、かの女の隣組の一章君が電車に乗つて、「今夜あたり、また米国のお客様が来るだろう」といった。これを聞いていた憲兵が、ひどく横手でこの婦人をなぐり飛ばして負傷した。「電車の中では、どんなこともいえません」と話したという。

こういう例は決して少くないようだ。

十二月三十一日(日)

いよいよ暮である。熱海に行く毎年の例を止して、今年は家で歳を迎えることにす。実は汽車の切符も買えないのである。昨日あたりの電車は殺人的であつた。家内の話によると、誰とかが、鉄兜のために押されて肋骨二枚を折つたという。

ワシントン会議の原稿継続。歴史を書くのは六かしい。筆が硬ばつて進まない。パイウオーターという海軍論者の意見がリベラルで立派だ。リベラルな議論が、要するに世界的になる。英国などが一例だ。

本年終る。経済的にも一杯一杯であつた。収入二万円。勤労所得なのに、よくもこれだけ這入るものだと思う。しかし闇による支出は十倍である。将来が不安である。不動産もあるから僕の場合は、全く困つてしまうことはないにしても。

一九四五年（昭和二〇）年

一月一日（月）

昨夜から今晩にかけ三回空襲警報なる。焼夷弾を落したところもある。一晩中寝られない有様だ。僕の如きは構わず眠ってしまうが、それにしても危ない。

配給のお餅を食って、お目出度うをいうと矢張り新年らしくなる。曇天。

日本国民は、今、初めて「戦争」を経験している。戦争は文化の母だとか、「百年戦争」だとかいつて戦争を讃美してきたのは長いことだった。僕が迫害されたのは「反戦主義」だという理由からであつた。戦争は、そんなに遊山に行くようなものなのか。それを今、彼等は味っているのだ。だが、それでも彼等が、ほんとに戦争に懲りるかどうかは疑問だ。結果はむしろ反対なのではないかと思う。彼等は第一、戦争は不可避なものだと考えている。第二に彼等は戦争の英雄的であることに酔う。第三に彼等に国際的知識がない。知識

の欠乏は驚くべきものがある。

当分は戦争を嫌う気持ちが起ろうから、その間に正しい教育をしなくてはならぬ。それから婦人の地位をあげることも必要だ。

日本で最大の不自由は、国際問題において、相手の立場を説明することができない一事だ。日本には自分の立場しかない。この心的態度をかえる教育をしなれば、日本は断じて世界一等国となることはできぬ。総べての問題はここから出発しなくてはならぬ。

日本が、どうぞして健全に進歩するように——それが心から願望される。この国に生れ、この国に死に、子々孫々もまた同じ運命を辿るのだ。いままでのように、蛮力が国家を偉大にするというような考え方を捨て、明智のみがこの国を救うものであることをこの国民が覚るように——。「仇討ち思想」が、国民の再起の動力になるようではこの国民に見込みはない。

僕は、文筆的余生を、国民の考え方転換のために捧げるであろう。本年も歴史を書き続ける。幸いにして

基金もできた。後世を目にかけて努力しよう。

本年の予想——ドイツは本年中に敗戦するであろう。大東亜戦争は本年中に片はつくことはないであろう。ダンバートン・オークス案は成立するであろう。そうすると日本だけが、孤立奮闘するような事情が生れるであろうことも想像できる。

一月二日（火）

昨夜は空襲警報が一回もなかった。

新聞によつて日本銀行券発行高三十日の歳末に百七十八億に膨脹し、前年比七十三億八千万円増。貸出八十八億円（前年比五十五億円増）である。

家妻が鮎沢君を先日訪問した時、小駅で、労働者風の男が百円紙幣の束を落した。はだかでポケットに入れていのだそうで、しかも極めて部厚なものだった。隣りの女の人が「あなた落しものを——」というと、そのままズボンの前ポケットに入れて、平気な顔をしていたという。インフレの一現象。

日本人および軍部はいかにして戦争を勝ちぬかんとするか。敵陣営内に厭戦気分が出ることに、今もなお望みを持っている。以下は「比島戦局まさに危急」の結論

『朝日新聞』一月一日：「わが精銳が野戦において米陸上軍と本格的に遭遇する最初の機会であり、敵兵大量殺戮の絶好の戦機が到来する、米国民大衆から成る陸兵の大量喪失は国内の輿論に大なる反響を投じてその継戦意志の根柢に破局的脅威を与へることは必至である、」……

同じ一日の『朝日』には「B29の葬列」という記事で、日本軍が「B29の五百五十機を叩き潰す」といい、その最後にこういつている。米国内に厭戦気分が起ることを期待し信じていることが分る。

『朝日新聞』二面一月一日 B29の葬列 五百五十機を叩き潰す 搭乗員も四千以上は道連れ ……月産一千台のB29だが、これまでの乗員の損失は4千名に上るだろ

う。：「厭戦気分」に浮足たつのを懸念して」：「首魁どもは苦虫を噛みつぶしてB29の損害をひた匿しに秘してゐるのである」]

米国に厭戦気分が起り、そこから破綻するという考え方は戦争初頭からのものだ。それを目ざして戦争を始めたのである。現在でもそう考えているようだ。

徳富蘇峰が『毎日』に書いている。題は「一億英雄たれ」と。

『『毎日』一月一日：半年前自分は亡き隈氏に『これまで我等言論人も声を限りに叫び来つた。しかも微力にして寸効なし。この上は何れ遠からず帝都の真中に敵の爆弾が落下するであろうから、その時を待つほかあるまい』』と言つた。：「これを一大転機として、」：「』

その意は日本人が覚醒しないから、「帝都の真中に敵弾を落して覚醒せしめる外はない」といった意味と解せられる。斯くの如き無責任な言があるうか。徳富は

戦争開始の責任者でありながら、その罪を国民にぎせているのである。かれはかつて、そういうことを書いた。

「なぐり込み」「切りこみ」というような字を、日本軍の夜襲その他に使っている。それをかつても予が書いたことがあるが、今朝の『読売』でやくざの言葉のようで嫌だと書いてある。同紙によれば「焼夷弾」というのは「寇を誅する」「悪人を除く」「野蛮人を平ぐ」という意味だそうだ。

新聞には「日本兵が強い」「日本は敗れない」というような電報ばかりのせている。米国海軍長官フォレストルがそういったとか、海軍次官がそう報告したとか——今日はロイターのキムチという記者が、日本はまだ強いから戦略建直しをせよといったと特筆。昔しから讃められてばかりいなければ安心できないのが日本人、特に軍人の特徴だ。敵がそんな言を吐く心情なり、考え方なりは一切知ろうとしない。

白井弥枝君来訪。三十日とかのラジオで安岡正篤が、

「支那問題は来年（昭和二十年）解決してしまふ」といったとかで、また今朝の『朝日』には本年は解決を期待する意味の記事があつたので、それに關し意見を聞きにきたのである。僕はそれは、とてもできまいといった。

方法は三つある。（一）満州放抛、（二）全面的撤兵、（三）蒋介石をして日米戦争の調停をなさしめる事等である。第一については、日本でまだ用意なく、第二は、もし撤兵すれば米軍が、それを基地にする恐れあり、第三は蔣がおそらくそのままでは聞くまい。かりに蔣が立つことを承諾すれば無条件降伏の程度を条件とするだろうと答えた。僕はまた瞭が羽仁説子さんから聞いてきた話をした。北京では夜は一切歩けず、各人寝る時は竹槍を枕元に置くのだそうだ。この竹槍を置かないのが、北京生活学校だけだとのことである。もし戦争が不利になれば、支那に虐殺事件が、あらゆるところに起るだろうと僕はいつた。以前から僕は、そういつて警告したと話した。

i 底本ではここで「ママ」としているが日記上では「度目」、「放」、「抛」共に同じ意でダブルが「放り投げる」の意。

戦争の行詰りは食糧問題からではなく、打つべき弾丸がなくなることからくるだろうと僕は話した。

一月三日（水）

本日、午后敵機九十機、名古屋、浜松、大阪に來たり「被害輕微」、四十二機を撃墜破した旨をラジオの大本營発表は報ず。当方の損害は二機な由。いつも非常な戦果である（！）。外地において戦われるのではなしに、内地で皆な見ているところの空中戦だから、大本營発表の戦果が正確であるかどうか、国民に分るであらう、その内に。いまでも、日本空軍がサイパンを破壊したというのに、依然としてやってくることに不審感を有している者がある。

白井君再び來たる。肉を持ってきてくれる。同君の話では、北千島に行く船が、十隻行つて三隻しか先方につかぬ。その三隻の内、歸りに一隻しか残らぬと、ある軍医長が話したとのことだ。

今日も、外交史原稿書き続く。

笠原清明病氣。

一月四日（木）

深谷博治君来訪。日本外交史研究会のために伊藤博文、陸奥の書翰の筆写依頼。百円内渡す。

特攻精神を陸海軍大臣が強調す。十二月二十七日、議會における杉山陸相の報告一節

【『出典不詳』】「…敵米は今次大戦における人的消耗の莫大なるに内心大いに苦慮しつつあり、」…開戦以来50万に達するにも拘らず「只管隱蔽せんと努め」支離滅裂であることは「實際の死傷者の数は極めて大なることを示唆」…「宿敵を撃滅しその戦意を破砕するの途は正に特攻隊の体当り精神なり」…」

米内海相演説

【『出典不詳』】「飽くまで比島方面を決戦場とし、」…「一億挙つて特攻精神に徹底し今後益々激化せらるべき敵空襲下に」…」

小磯首相、閣議（初）に発言して戦局の重大を説く。

【『東京新聞』一月五日】…「台湾沖、比島沖海空戦で曠古の大勝を博したが、我海軍の損耗も決して尠しとしな
い、」…「レイテの戦況は必ずしも可ならず」…「特にヨーロッパの戦況から見て敵は歐洲戦線の不利を太平洋に於いて補綴せんとして」来るから…「銃後に特攻精神を作興し戦力増強して前線の健闘に応ふべき」…」

一月五日（金）

一日、外交史を書く。宇梶洋司君来訪。外交史を、ただ事実の記録でなく、個人的意見を入れて書くことにす。その方が僕に適するし、書き易くもある。

馬場恒吾君、大東亜戦争政治史引受く。芦田君断る。幣原男は第三回で打ち切りたしと申し来たる。

一月六日（土）

大熊君の切ぬき、その他を午前中見た。未亡人が疎

開するので貰い受くるのである。先天的な整理家であり、学者タイプであつて、僕の如き、その辺の天分少なきものには、むしろ恨むべきタイプである。

独マヂノ線を逆に突破す。問題はドイツが占領地において、どれだけ民心を得ているかによつて決する。遺憾ながら、この点で永遠に渡る成功を期待し得ず。

翼壮団長の建川美次中将と、その幹部辞職に決定の由。右翼のイデオロギーの破綻だ。

疎開学童の後援会、東京にできる。官僚だけでは、どうにもならぬことを示すもの。

一月七日（日）

大熊真君の遺原稿その他を貰うために同家にあつて調ぶ。いろいろのものがある。家に運ぶ。

一月八日（月）

「東洋経済」初めての評議員会あり。蛸山、平、鮎沢その他の諸君集る。

この会合にては比島の戦の前途を悲観す。ルソン島のリンガエン湾にきた敵機動部隊の上陸作戦は目前に迫る。一度敵がサンフェルナンドの町をとれば、それで決戦の第一幕は下りるといつていい。一方、他の部隊は支那のどこかに取りつくらしい。かくて南方を遮断さるというのだ。

そこへ作田君来たる（衆議院議員）。言論委員会の会長をあてがわれたというので、石橋君の意見を聞きにきたのである。同君は戦争そのものについては非常に楽観的だ。ドイツがウンと頑張る。すでに米軍の損害大だ。比島で対手をグッとやつつければ、米国の人種構成の弱味が出るというのである。彼等はそれで参るという訳だ。この楽観が、なお日本の最大多数の認識だ。洩れ承れば皇室のお方々も極めて楽観的であられる。何人も、そういう風にしか申しあげないのである。

作田君に対し、僕はドイツの戦争と、日本の戦争とは別に考えなくてはならぬとだけいつて置いた。

鮎沢君の話では、参謀本部の中佐あたりの課長が、

日本はどうせつぶれるようになっていたのだ。今度の戦争の結果は、ただ一つの問題にすぎないと、大声で話していたそう。日支事変は、どうせあなるのだ。支那が、あんなに構えていたのだから、今やらなければ、ひどい目にあつたところだと、かつて牧少佐というがいつていた。

ドイツのアルザス反抗は本格的になつて、数地点でライン河を渡河したと。

一月九日(火)

外政協会でフィンランドより帰つて来た公使の談話あり。途中で空襲警報あり中止。その要領は一、汽車などはソ連が中々いい。外部からはそんなに疲れたようには見えぬ。かつて満州の汽車はよかつたが、今や反対になっている。朝鮮が満州より悪く、内地が最も悪い。交通機関は日本にくるほど悪かつた。

昨年八月頃、フィンランド外相から来てくれという。かれがモスコウに行つて帰つて来て直ぐだった。予感

があつたが、かれは口ではいえないから書いてきた、それを見てくれといつて渡した。見ると国交断絶をしたから、在住日本人引きあげてくれというのだ。「何しろ外国の圧迫があるものだから」と弁解する。「どこの国の干渉があつたのか」というと「英国だ」と明白に答えたそう。

ソ連は丁寧に待遇したという。

外務省で高柳君と逢い、帝国ホテルで夕飯を共にす。

沢田外務次官が高柳君にいつた。『東洋経済』に外相と首相と仲が悪いように書いてある。清沢君が書いたらしいが、そんなことを書かれて大臣が迷惑している。外務省に関係あるものが、そんなことを書かれては困る。

これはおそらく蟬山君の書いた「外交の在り方」というののことであろう。僕は憤慨して「僕は外相も次官も批評しようと考えていたところだ。国家のために是と考えるところを書いて何故悪いんだ。重光がペー・ビュロクラット【petty bureaucrat つまり官僚】を

採用するところを見て、かれの外交家としての度量が疑われる」と。少しはげしくいった。

「囑託」という肩書きを持つているので、そんなことで僕の筆を拘束しようというのだ。先頃、招待を拒絶してきたことなどの記憶があつて、不愉快な気持ちが続く。沢田というのは下らない男である。

高柳君が、この戦争を何とかネゴシエーター・ピー・ス【negotiated peace 交渉による和平】に持つて行きたい。それがためには米国の太平洋調査会の会長ジーサップという有力者と懇意だから、この人とても会見して話したらどうかという。僕は双手をあげて賛成した。ただどこで、いかにして会見するかである。スウェーデンあたりならよからうが、それには潜水艦でも行くより外なからうという。

奈良君は本年中に独と米英と妥協し、ソ連が対日宣戦を布告するだろうといった。僕はドイツの無条件降伏となるだろうといった。英米とドイツとの握手などがやれるものか。

帝国ホテルの夜は、火の気少しもなく寒い何のといつたらない。八時にほとんど消燈。戦時下の東京一のホテル。

一月十日（水）

一日、家に居り『東洋経済』の原稿書く。午后は歴史執筆。

伊藤安二君来訪。

一月十一日（木）

大熊君の遺物整理中、重光の書いたタイプの本あり。ロンドンで書いたものとのことだ。こんな事を好きと見ゆ。一応の識見がある。ただ、つとめてポイントに触れぬところが能吏か。

一月九日、米国軍が比島ルソン島のリンガエンおよびサンファビアンに上陸した。前途憂慮にたえぬ。

「特攻精神」というのが毎日の新聞とラジオで高調している。日本には死の哲学があつて生の哲学がないと

はその通りだ。この結果、どこでも無理が行われて健康が害されつつある。試みに学徒の成績を見よう。

清明、腸チブスにて聖路可^{せいりか}に入院。

『日本産業経済』一月十一日 依然多い病欠者 工場側の

猛省を促す …「土木、荷揚、自動車運転、旋盤、拉伸、熔鉱炉作業、研磨、ターレット、エンヂン仕上等」の工場の動員学徒の病欠は

病欠欠席欠勤数(四ヶ月間)

病種	動員後	動員前
胸部	三〇	四九
消化器	一九	九
脚気	一六	二
外傷	二九	〇
黄疽	二	二
盲腸	二	五
皮膚	二	〇
痔	五	四
神経痛	七	二
耳鼻咽喉	八	二
心臓	一	八
伝染病	一	二
腫物	四	〇
風邪其他	一〇三	九〇
計	二二三	一八七

一月十二日(金)

毎晩、空襲が来ない日ではない。最初は隣りの防空壕に這入った近所のものが、今や誰も這入るものはない。馴れたのと、また一つはそんなことばかりやっていられないのである。

新聞が盛んに「強力政治」なることを言い出した。ドイツのように「根こそぎ動員」をやれということらしい。ただ動員すればいいと思っているらしい。何をいつているか自分で知らぬことを、ただワンワンいつているのが近頃の日本人だ。具体的には何をモサゼスト【sugest】して居らぬ。

例の徳富蘇峰がルソン島の上陸を青天の霹靂^{へきれき}だといっている。右翼代表の説としてのせよう。

【切り抜きは無いとのこと】

こんなことが蘇峰には青天霹靂に響いたのである！

徳富を以てしても軍が秘密にすぎるといふ。

米国では特攻隊の記事に触れていないそうだ。敵から見れば相手に打撃を与えることが目的なのだから、どちらにしても同じなのである。日本だけだ、抽象的精神力というものを重視するのは、物量や発明も精神力であることを気づかずに。蘇峰の如き議論がドンキ・ホーテの最たるもの。かれは全く科学的考え方はない。

『日本産業経済』一月十二日米誌特攻隊の活躍を報道（ヘストックホルム十日発同盟）米軍当局は殆ど特別攻撃隊の活躍には触れてゐないが、十二月七日「一機の日本機の如きは火焰に包まれながら五哩も飛び続け遂に米軍の駆逐艦に突き込んだ、」……

一月十三日（土）

国民学術協会に出席す。

伊藤君の幣原男の談話筆記はまるで駄目だ。

一月十四日（日）

片岡鉄兵君の告別式に出で、帰りに蟬山政道君のところに立寄る。実は蟬山君とドイツが昭和十九年一杯で参るかどうかを賭けて当方が敗けたので、缶話を少し持つて行つたのだ。

国民学術協会の柳父君が、実にやりにくいので、それに関する相談もしたのだ。柳父という男は、無暗に反抗する男であり、協力のできない男だ。

帰りに三井高維君のところに寄る。——外務省官補に令嬢をくれるかどうかを聞いたのだ。三井君夫妻は実に立派なゼントルマン夫婦だ。奥さんは「いえ、私共なんか」といった。ほんとに謙遜である。

植原悦二郎氏方に年始に赴く。家内と落ち合う。植原氏は熱海に行つてあらず。どこでもことごとく餅を御馳走になる。本年は余程の連絡がなくては餅が手に入らず。我家でも配給だけのものだった。

それから伊東治正君のところに行く。若い伯爵だ。翠雨荘日記（伊東巳代治伯）を出版しないかとの相談

である。夕飯を御馳走になる。「戦争が進めば、我等はこうして居られますまい」という。いかにも非常な贅沢だ。伊東巳代治が、あの慾張りで金を儲けたのである。

かれは政党あたりからの賄賂でどうにもなったようである。しかし治正君はいい青年のようだ。これから為すところがあるうと思われる。この三十歳そこそこの青年が一千万円近くの財産の主人なのだ。社会主義も現れよう。戦争の結果について、金持ちが一番不安である。

ヒリッピン島のリンガエン湾に上陸した敵はますます増強す。どこに行つても、その問題に関する質問だ。

『読完報知』一月十四日　…特攻隊が体当たりしているが、
「敵上陸軍はわが精銳の夜間における果敢なる挺身斬込みを極度に恐れて多数獵犬を伴つて来てゐる。」…「敵航空兵力は逐次増加し」…

敵は、我が切込み隊に対し獵犬を備えているそうだ。

我が特攻挺身隊は、犬と戦うためののだ！
仏印にも敵の空襲きたる。

『「東京新聞」一月十四日』俺も散らうぞ華かに　前線に
空の特攻隊の歌生る　…「比島の空では昨日も今日もこの歌を口ずさみつゝ帰らぬ」比島陸軍航空部隊作
一、咲いた桜が男の子なら慕ふ胡蝶は妻ぢやもの
意気で咲け　桜花
八紘一字の八重一重
二、明日は初陣軍刀を
月にかざせば散る桜
意気で咲け　桜花
俺も散らうぞ華かに
…（曲は露宮の歌の前奏曲但し第四節の最後は調子を上げずに下げるものとす）

日本青年が比島で死ぬのは、こうした悪ふざけたドドイツ的情緒のためなのか。ああ。

『「毎日」建設一月十四日　鉄拳と増産　…「すぐに工員を

殴りつける」：「些細な過失、失態に対して、なぜ温情をもつて善導して下さらない」：「いきなり鉄拳を食らはせ、その上で叱言。それでは工具を口惜しがらせ、反感を抱かせるだけだと思ひます。」：「

軍隊の鉄拳は、もう言うだけ野暮である。それが工場でも行われている——日本は暴力世界だ。

一月十五日（月）

東洋經濟評議員会に出ず。

今朝の新聞で、伊勢の大神宮の豊受大神宮が敵機のために被害を受けたということを知る。新聞はそれをデカデカに書いた。大本営発表も然り。

敵機は計画的にこれに投弾したか、それとも謬つて投弾したのか、それともまた果して敵機の仕業であるのか。米国人の捕虜の言だとして世間で聞くところでは、宮城、明治神宮、靖国神社等は襲撃せぬ方針だといわれた。いまそれをやる理由如何。新聞標題——「米、

鬼畜の本性現わす」「醜弾伊勢の神域を汚す」「この暴挙断じて許さじ」（『朝日』）それから名家の憤慨談を掲載。

一月十六日（火）

今朝の新聞は十四日の伊勢大神宮空襲の論説で一杯だ。論説、記事、批評等。無論、当局者の指導によることというまでもない。何でも情報局は一切触れぬことにしたいと考えていたのを、参謀本部で発表したとかいう。

まず小磯首相が御託言上し謹話を発表。

『読売報知』一月十六日 小磯首相謹話 「一月十四日マリアナより来襲せる敵機が伊勢の神域を冒し」：「若干の被害」：「臣子として実に恐懼」：「

内相も伊勢に伺い大前にお詫び。
それから——

論説の題——驕敵の暴虐蛮行遂に極る（『読売』） 敵の意図炳然（^{ひげん}）——『毎日』、神威の顕現（『朝日』）

その調子の代表的なもの——

『読売』「社説」 一月十六日 驕敵の暴虐蛮行遂に極る

：「三千年来、：かつて味はったことがなく」：アメリカ人の人道とは何ぞや、：手段を選ばず征服を狙って、「兇暴さを發揮し」：。「全国民は、：指導者の勇断を待つてゐる。」：「ただ必勝のみである。」

右の論説に初まつて新聞は「不俱戴天、暴敵を滅さん」「神域冒瀆に一億の怒り爆発」とか「畜生今に見ろ」とか、紙面の半分以上をこれに宛てている。この挙を戦意昂揚に使っていることは明らかだ。『読売』には伊勢大廟の前に民衆が土に平伏している写真をかかげている。『朝日』は黒ぬき文字で「米鬼塵殺のみ」と、米人の野蛮振りを書き、また例によつて徳富蘇峰（^{おおくさつ}）を持ち出して談話をさせている。題して「人には人の道あり、

敵は人にあらず」と。蘇峰は自分を責める代りに、当局者を責めているようだ。

問題は当局が目がけるように国民が、心から奮激しているかどうかだ。そこいらの妻君や、普通人に聞く。「工場の方が大切ではありませんか」といったことを話している由。下町の話。

もし、そうであるとすれば、人心を察せざること当局者を以て最とすというべきだ。ただし我等の接する都会人と地方人および右翼方面とは自ずから別だろう。

ジャポニカスの委員会で、加納久朗子と会食。かれは流石に頭が鋭い。経済問題から観た東亜新秩序について論ず。

晩に、秋山高、杉原軍三、^{マツモト}山野、鈴木咄波その他の連中のさごのにおける会に招かれ出席。杉原君は最後の交換船で米国から帰った人。米国の役人が、いかに親切に敵国財産について取計つてくれたかを実験上から語る。まるで自分の家の弁護士よりも、よくやつてくれた由。敵国の取扱いに、かれが、こう感謝してい

るのだ。ここに米国の強味がある。

日本人には、どうしてこういうことができないのだろうか。敵をも愛することが、やがて十数年後において、日本を世界によく紹介する所以ではないか。

電車が滅茶々にこわれている。窓硝子はなく、椅子席の布がない。窓は乗客が強いてこわすのであり、布は盗んで行くのである。電車が遅いといつては、無理に破壊するのだそうだ。

敵に対する怒りが、まず国内に向っている形だ。

一月十七日（水）

強力政治、強力政治と新聞はいつている。そして同時に官僚の無責任を攻撃している。強力政治を主張してとうとう官僚政治を誘致したではないか。新聞記者の無知にも困る。

事務所ができて、かえって時間をとられて勉強ができぬ。伊藤君は事務的でなく、かえってこちらが事務をさせられる有様だ。

一月十八日（木）

幣原男の講演、日本外交史研究会においてある。第三回目だ。出席者

桑木、石橋、高橋雄豹、高石真五郎、信夫淳平、芦田、田中耕太郎、武井大助、牧野英三、松田〇一、三井から一人、雨宮

三時過ぎまで会議

一月十九日（金）

昨日の会の午餐費十五円。とても貧弱だ。物価は十倍以上に上った。

今日、家妻鮎沢君のところに行つて、お餅を買ってきた。一個——大きからざるもの——が五十銭である。一白六十余円だとのことである。石橋家では和彦さんの告別式をやるのに野菜を買ったが、二百何円とかを払った由。

久し振りで畠に行く。雨気のなきため、まるで灰の

ようになった。その上、寒気は前例なく強い。家中で

零度だったという。どんな水たるも二、三寸の水が張った。東京で僕が経験した最も寒い冬だ。しかも、どこに行っても火の気がない。

午后、警察の水野君来たる。比島の戦況について聞きに来たのである。僕は、ルソン島戦闘が、案外に早く片がつきはしないかを恐れるといった。

独軍ワルソウを十六日に撤退した由。また南方のクラコウでは市街戦に移った由。西部戦線の楽観が東方で反対になってきた。ソ連軍の攻勢恐るべし。これでザリと押して行く可能性あり。

石橋夫人の友人のピアノの先生が、目下の生活はものを食わないで餓え死にするか、それとも闇でものを買って破産するか、二つしかないといったと。その通りだ。

郵便と汽車賃が四月一日にまた引上げられる。封書十銭、端書五銭。

一月二十日（土）

日本外交史研究会のために人を招く。

丸山国雄、深谷博治、堀真琴、伊藤孝一、宗口守吉、浜田久米雄。

こうした会は、いつでも単に雑談に落つるものだ。この時が然り。ただ深谷君は極めていい人で、研究的だ。すでに陸奥の書簡を整理してくれている。伊藤君の代りに、この人を連れてきたいと思う。同君にさらに二百円を送る。

一月二十一日（日）

悪感がして、床に臥す。熱は三十八度八分。一日、寝るといふようなことは始めてだ。

一月二十二日（月）

『朝日新聞』、今朝の記事、神宮館大学の教授の論文だ。

『朝日新聞』一月二十二日 国難へ天佑の御加護 ……天

佑とは「天照大御神の御護り助けに他ならない。元寇の国難に際して天佑の現はれた事は周知の通りであるが、神武天皇の御東征の砌にも、」：「天佑を降し給ふのが、天照大御神」：」

今日一日寝る。咽喉から血が出るのである。医者に來て貰う。風邪流行で、こうした型だという。

寝ていて吉野作造博士の『対支問題』『時事問題講座』第七（国会図書館デジタル化資料）の小著を、一日で読了す。さすがに面白し。博士の死前の作であろう。明治文化研究の知識も盛っており、殊に支那革命史の著書もあり、得意の問題だ。僕はやはり、吉野博士とは共鳴し得る。その観方が同じだ。大正時代からの吉野作造博士をつぐものは、昭和の僕ではないかなどと思う。外交史を書いて、学的産物を残すことができれば、吉野博士を発展させたものであることになる。

人糞を入れるのが、一かつぎ（二個）一円だという。昨年まで無暗に投げ込んで困ったのであった。上の『中

部日本』の記事により、一日の大工の工賃が六五円くらいなるを知る。

『中部日本』一月二十二日 …「配給の資材を別に延十六人の労働賃金が千円といふのである、」：」

水糞は、とつて貰う方よりも出すのであつて、一個一円、五十は優に半日に運べよう。

議会在昨日閉会されたが、首相、外相、蔵相いずれも真実のことはいつていない。小磯首相は

『中部日本』一月二十二日 …太平洋は樂觀出来ないが、大陸では「敵重要拠点を覆滅して在支米空軍に轟動の余地なからしむると共に更に進んで南支、仏印間の陸路連絡を打通し」：「わが東亜防衛の戰略態勢は極めて強固である」

といっている。

重光外相は下の如くいう。

『中部日本』 一月二十二日 …「東西の戦局は真に決戦段階」：「軍事についてはわが陸海軍の善謀勇戦に絶対の信頼を寄せるもので戦況の一進一退に一喜一憂するものではない、皇軍は到るところ奮戦を続け特別攻撃隊の意気は全軍の精神であるとともに全国民の精神であつて終局の勝利の我に帰すべきは秋毫の疑ひもないのである」

石渡蔵相は左の如きう——

『中部日本』 一月二十二日 …「支部事変勃発以来発行せられた公債の総額は八百四十九億七千余万円、消化額七百六十七億三千余万円、昨年中に発行せられた公債は二百六十九億九千余万円、消化額二百五十億一千余万円であつて公債を財源とする戦費の調達、予算の執行は何らの支障なく遂行せられつゝある」

昭和二十年の議会——この年で戦争が片がつくといわれる時代において大臣からは一切、憂慮すべき事態

は発表されぬのである。議会の演説、質問、応答は、ラジオと新聞の如く、総てがうまくいつていることを報ずる。国家が潰れんとするその時まで、こうした嘘をいつている、教育と、考え方と、指導の方法を見よ。日本人は嘘と真実との中間を精神的に彷徨して暮せる国民だ。

一月二十三日（火）

石橋和彦君の告別式あり。僕、風邪の故を以て家内代つて参列。いい青年なりき。こうした若人を何百万と殺さなくてはならぬ。

一昨日、笠原義和もタンカーに乗込むので二日の暇を貰つて清明のところに宿りにきたそうで、ちよつと挨拶に来た。寝ていることを理由に家内が帰したのが、いかにも遺憾だった。南方からガスリンが来ぬので、いわゆる挺身隊を出して、大して防護なしに送つてくるのだそうだ。十隻の内二隻でも三隻でも来れば儲けものとして、まるで人間を死地に投げ込むものだ。こ

れはいかなる外国の国民も許されぬ乱暴さだ。挺身隊の如きも外国なら決して許さぬが、日本では、父兄がまず騒いでいる。

大臣の演説も、新聞の論文も近頃は「決死的」という代りに「挺身隊魂」とか「挺身隊精神」といった文字で表現されている。

隣組の小島さんの母親が死んだ。その棺桶が、返還することを条件として融通して貰ったのだそうだ。つまり死人の棺桶は借りるので、買うのではない。これを何回も使うのである。

死骸が焼けないということは余程前からいわれていた。しかし棺桶がなくて、それを何回も使うというのははいよいよ時局を反映する。その内に自動車がなく死体が動かせず、庭の隅に埋めるといようなことが、半年後ぐらいにはあり得ると思う。

病気のおかげに読書をす。青柳篤恒『極東外交史概論』を読み終う。早稲田の教授だが、支那語ができるだけ、文章もよく面白し。他のものより公平だが、大隈の乾

分として二十一ヶ条要求の弁護などは自家撞着だ。

宮崎滔天の『三十三年の夢』を読む。日支関係が浪人によつて始められたのが不幸だった。宮崎の純な気持は充分に分るけれども。

一月二十四日(水)

一日休養。読書。

支那問題に関する著書を読む。

一月二十五日(木)

昨日、技術院総裁八木秀次博士、議会で答弁していた。

「最近必死必中ということがいわれるけれども、必死でなくて必中であるという兵器を生み出すことが、われわれかねがねの念願なのであるが、これが充分に活躍する前に、戦局は必死必中のあの神風特攻隊の出動を待たねばならなくなったことは、技術当局として誠に慚愧にたえず、申し訳ないことを考えている」

この答弁は、非常な感激を議場で生んだ。泣いているものもあつたという。（『読売』——非常にスペースを割いてその状況を伝う）これは、封建的な愛國観（死ぬことを高調する道徳）に対するインテリの反撥の発露だ。誰かがいつてくれたらいいと考えていたところだ。それを八木博士がいつたのだ。

日本人は、いつて聞かせさえすれば分る国民ではないのだろうか。正しい方に自然につく素質を持つているのではなからうか。正しい方に赴くことの恐さから、官僚は耳をふさぐことばかり考えているのではなからうか。したがって言論自由が行われれば日本はよくないのではないか。来るべき秩序においては、言論自由だけは確保しなくてはならぬ。

風邪大体よし。一日、家において読書、そして幣原男の話しを筆記す。

一月二十六日（金）

一日中家に在り、幣原のものを終る。

米国について今朝の新聞、

『毎日』社説「一月二十六日 米將兵の素質 ……このパツトンこそは曾てシチリヤにおいて一怠慢兵をはり飛ばして問題を惹起した男で、米軍人としては稀に見る軍人らしいところを持つてゐる。」…アメリカ軍の軍規の乱れは云々「米軍中には重罪犯人を以て編成された特殊部隊があり、その残虐性を敵に対して發揮せしめることによつて一鳥二石の効果」…「当局と云い部隊と云い実に見下げ果てたものであるが」…」

『読売』投書「視野」一月二十六日 指導と無駄口 ……「大東亜戦争は日露戦争の時から続いているとかペルリが下田に來た時に始まっているなどと、未だにいつてゐる責任ある指導者をみるが…前線とつながりのない指導や言論はお互に止めようではないか。」

『読売』「社説」一月二十六日 科学技術者を支持せよ…

特攻は「日本の科学技術が戦力として最高度に發揮されてゐない事実を表現」……

「八木技術院総裁は、……特別攻撃隊を生まざるを得なかつたことを詫びて国民に深い感銘を与へた。」……「長年に亘る科学輕視の支配的傾向、……指導者達の態度こそ、この際大いに反省せらるべき」……

第一に「工員の半分にも足りぬ俸給」……「肝腎の實驗材料も容易に入手出来ず、……物資偏重、腕つぶし偏重の弊」……

第二に「決戦兵器のみに向けられてゐるが、これだけが科学でもなく、……必要な時だけ尊重ではなく「現実を客觀的に捉へ、」……「日常生活を始め經濟、政治、行政などの部面にも科学的態度を浸透させることが肝要である。」……「総裁の眞摯な答弁は一億国民の上に久し振りで明るい光を投げた。」……

インテリの鬱憤は自発的ではなしに、何かの機会に便乗して発せられる。今回の科学技術の場合に然りだ。

一月二十七日（土）

大熊真君未亡人をお昼に招待。六万円ばかりの金ができたそうで、それを持つて郷里に帰る由。僕はその三分の一ばかりを株式にかえて持つていよと教えた。調査してやるつもり。

中野正君來たる。サラリーマンは不安に思つてゐる由。積極的な青年は政治に出て、次に來たるべき世界に備えんとし、他方、消極的青年は生活難のため田舎に引きあげることを考慮してゐる由。

普通人の中にも、軍人に対する反感がようやく出てきてゐるとのこと、七十何歳の老婦人が「政治家が、何で軍人を押えないんでしょう」といつていた由。ある友人は、米国の雑誌を見て「早くチョコレートが食いたい、片がついたらいいね」と話したと。

著書の原稿を續く。

伊藤安二君（アシスタント）から昨日速達あり。僕が事務的にやつてくれといったのを、切手代まで送り歸して來た。僕が確かに風邪の加減で、郵便切手のこ

とまでいつてやったのは悪かった。ただ、一向、仕事をやってくれないので、少しムズムズした結果もある。僕はやはり、人間を使うのは不得手だ。研究所が精神的負担にならないように考えようと思う。

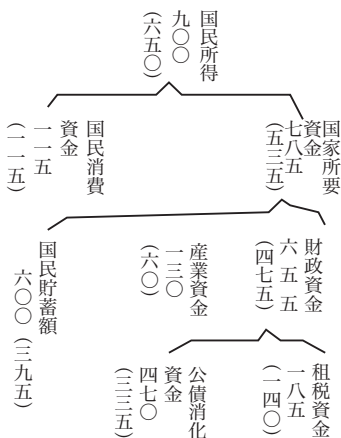
一月二十八日(日)

風邪よし。久し振り——二ヶ月振りで近くで畠に行く。一人なり。本年は人手がなく、昨年のようにできなかるべきを思う。

財政の全貌明瞭になる。臨時軍事予算は八百五十億円、経常費が二百三十億——結局一千十八億一千八百万円、それから臨軍特別会計創設以来二千二百余億円に達す。これだけ兵隊さんの危険な玩具にしたわけだ。(国家収入九百億円に対し支出一千億円)。

『日本産業経済』 一月二十八日 二十年度の国家資金計画 貯蓄目標六百億円 国民総所得、九百億円 「石渡蔵相は二十七日の衆議院予算総会に於いて」：「二十

二十年度国家資金計画概要
(括弧内は十九年度 単位億円)



年度は十九年度に比し夫々国民所得二百五十億円(三割八分) 租税資金四十五億円(三割二分) 公債消化資金百三十五億円(四割) 財政資金百八十億円(三割七分) 産業資金七十億円(十一割七分) 国民貯蓄目標額百九十億円(四割六分)を増加、：：：国民の一層努力 蔵相要望：「昭和二十年度は前年度に比し相当多税なる経費の国内支出を予想されるのであるから資金、物資、労務等国民経済の各般に亘り多大の影響を及ぼすものと考へられる、：：」

清沢寛より電話あり。昨日の空襲で銀座四丁目付近

がやられ、東條靴店等燃えたとの事。岡村今朝良の事務所も水びたりになりたりとの事。いよいよ戦争の被害が身近くに迫ってきた。

英子が友達から聞いてきた話——この間、蟬山政道君の質問が、なつていなかったので、演壇から引きずり落された、この次ぎの選挙にはむずかしからうと。そういえば新聞に「妨害」といった文字があつたようだった。重光に対し批判的なことをいうとか、多少ともピース・オフエンシヴなことをいえば、そのくらいなことをやりかねない議員である。日本国民が低調であると同時に議員も低調だ。政党対立の時なら、一方の政党が許さないのだが。

これも英子の話——那須かどこかに疎開した兒童が、麻病マビを感染して、皆で医者にかかっている。小森さんという友達の母親がそのため行つたそうだ。文部省では、黙っていてくれといつてゐる由。

一月二十九日(月)

富士アイスおよび東條靴店に見舞いに行かんと新橋で下る。銀座通りは縄が張つてあつて通れず、帝国ホテル方面まで爆弾のため硝子が破れ、半壊のところ多し。全壊半壊、四百戸、死者三百人以上という。(死傷千人)。一日の爆撃にしてはその損害はなはだ多し。東洋経済に赴き、この向きでは本年一杯には東京の半分ぐらい無くなるだろうなどと話す。

山崎清純君が三浦老人に話したとの話——

ある重臣が陛下にお目にかかつて講和の御意志はありませんかとお伺い申しあげた。陛下は無条件だろうなと仰せられた。やや暫くして「それぐらいならば朕も第一線に出て生命を投げ出す」と仰せられた由。かしこかしこし。

ある人曰く、何故にその重臣は、その御考えは失礼ながら正しくない事、一億の死ぬことの御手本を示し給うよりも、彼等をいかにして生かすかをお教え遊ばすことが御義務であられることを何故に申し

あげなかつたかと。

高橋正雄という元九大助教授の人、上海から来ての話――

上海では米一俵一時六万円だったのが、今は四万円である由。上海に今、邦人人口約七万。ドンドン減りつつあり。日本兵手薄くなれば通州事件のような問題起る可能性あり。

土曜日来襲の飛行機Bの撃墜二十二機――他の大半に損害を与うと大本営発表。米国側では四機未帰還とっている由。日本側の発表常識的に少し誇大にすぐるようだ。

一月三十日（火）

一日中在宅、『東洋経済』の社論を書く。

畠をやる。女中とよや、畠をやることを嫌がり、白足袋で出ず。若い未婚婦人が精神的にも可笑しくなっている。家妻が地代を持つて行けといったのに対し、「まだいるかと思われるのが嫌だからいかぬ」といった由。

今日も「畠仕事は大嫌いだから、夏まで続くかどうか」といったと。これが最近の女中気質で、「いてやる」「いつでも出る」といった態度である。

商店の婦人社員など欠勤非常に多し。店を休んで、男を尋ね、時間になると、知らぬ顔して家に帰る由――奈良官補の話である。我等の知らぬ若い女の貞操観念の変化は想像するに足る。

日本の国民は何にも知らされていない、何故に戦争になったか。戦争で損害は幾らなのか、死傷はどうか。これを総合的に知っている者は日本において誰もなし。一部の官吏はある事は知っているが、他の事は知らないのである。今度の議会でも多少問題になったが相変らず駄目だ。

一月三十一日（水）

帝国ホテルで高柳教授と会食す。

土曜日空襲が東京に案外な損害を与えたに驚く。銀座四丁目から帝国ホテルに近いところまで、破壊家屋

に満ち、硝子はほとんどこわれている。今までの工場は一部の人しか知られなかったが、この都心の破壊は改めて、敵の戦争力を国民に知らそう。銀座四丁目では、爆弾が水道をこわし、地下鉄ために運転不能に陥っている。富士アイスの教文館以南も焼く。堅固なる鉄筋コンクリートの建物は流石に強い。大地震の時もそうだった。服部時計店もたっている。この被害に対し政府は全く何事もなし得ず。個人の不幸に帰している有様だ。無責任といおうか無力といおうか。

大東亜病院に笠原清明を見舞う。この病院も「聖路可」という名をかね、屋上の十字架をとり去ってしまった。空襲の被害者が最も多くここに運ばれた由。

二月一日（木）

家に居って著書の手稿を書く。日支關係。

二月二日（金）

「東洋經濟」で香港の總督（？）であつた磯谷中将に會見。最近歸朝したのである。

石橋氏が戦争の行き違いはどこにあつたかと聞くと「我等（陸軍）からいうと海軍が、もつとやれると思つて、島などにも兵隊を持つて行つたんだが、どうもできなくなつた」という。「陸軍は大部戦争をやりたいかつたが、海軍は好まなかつたようだ」と問うと「海軍の一部では戦争を避けたい氣持があつたでしょうが、多くはやりたがつていましたよ」という。同中將によると米軍が本土に上陸する可能性もあるという。支那人に接しているから、かれは支那人が何といつても偉いといつていた。米人とコンタクトしたものは考え方が、また異なるだろう。

今朝の新聞で幾つもの軍管区ができた旨発表。米軍の上陸に備うるためであらう。磯谷中將は「一億玉碎」というが、「それは我等がいうことで、国家を保全するために、玉碎も必要なのだから」とて玉碎説を批判した。そこで僕は、そういう説を軍の内部から生れるようにしていただきたいといつた。僕等がいうとデファイナスト【defeatist 敗北主義者】といわれるから。

ある右翼のいつたことだといふ話によると、彼等は皇室さえ存続させてくれたら、米国の條件は受諾していいといつてゐるとの事。どんな右翼やら。

二月三日（土）

一日中原稿を書く。明治三十年代の支那留學生のこゝとや孫文の革命準備について研究。吉野作造博士を引用。

欧州の東部戦線で赤軍はベルリンへ十五里に迫る。米軍マニラに迫る。米軍の使用する大砲はロケット砲も使用して居り、日本軍は手も足も出ない状態だぞ

うだ。日本軍は、まだ主力戦に出て居らぬ。米国辺ではミステリアスだといっているそうだが、時期を狙っているのか、それとも武器の相違で、反撃すらもできない状態なのか。

平川君が来ての話に、岡山あたりの田舎では、皆な松根油を掘っている。これはガスリンの代用にするものらしい。

二月四日（日）

【『出典不詳』『伯理記念碑』を撤去（横浜発）…ペリー上陸記念碑は撤去が叫ばれていたが、県知事の断で撤去し蘇峰の碑に代えられることになった…】

清沢寛、岡村今朝良来る。二人共に先頃の空爆で命拾いをした連中だ。寛は近頃景気よく、チョコレートなどを持って来てくれたのだ。二人共に軍閥跋扈は困るという。また、戦争について悲観も同じ。しかし若

い軍人と、下町のアンチャンたちは依然強硬で、日本が勝つことに疑いを持って居らぬという。朝日スレートの社長寺門氏の如きも、日本が必ず勝つといっているそうだ。

戦局を悲観しているのは、日本民衆のインテリ少数で、マニラが落ちる現在になっても民衆は、ただ勝利を信用しているのである。

【『読売』『社説』二月三日 甘い考へを捨てよ …今や生活最低線も捨て「すべて戦力に傾倒しなければならぬ」…。「身近かの物資もすべてこれを戦力化されねばならぬ」…

「これを金の面から見るに千億予算を施行するために、石渡蔵相は六百億円を貯蓄せねばならぬといった。これは国民所得総額の六割六分を占め、曾て本欄で指摘した如く一人当り年八百円、五人家族として一戸四千元に当るのである。即ち各戸はその収入額の三割三分を以て生計を樹てねばならぬことになる。仮りに月二百円の収入ありとすれば、六十六円で生活し毎月百三十三円を貯蓄

しなければならぬ。これは実に容易ならぬことであるが、千億予算の施行が戦争完遂上の至上命令とすれば、この貯蓄も亦たとへ各人の生活を如何に切詰めても完遂しなければならぬ性質を有する。」：「配給制度実施以来配給のみに依頼してはゐない。この配給以外の物資も物と金との両方面から、今年こそは益々入手難に陥ること必至である。」：「事態はそれどころではなく、」：「一切の甘い考へを捨て、すべてを国家に捧げるの覚悟を新たにせねばならぬ。」

午后から胃腸をこわし寝る。咽喉、はれもの、また胃腸、からだに抵抗力がなくなつた証拠だ。

二月五日（月）

昨夜腹下り、頗る不愉快だった。悪質の病氣ではないかなど心配す。

東洋経済を休んで、寝る。

二月六日（火）

石橋和彦君の一周年忌あり。石橋氏知人招待。山田君という経済クラブ会員（早稲田で石橋同級）が、僕の予言が神のように当たるとて、人にも吹聴している由。すなわち大東亜戦争、ドイツの運命、マニラ、無条件降伏等々――

同じような顔触れ！（七日）

【読売報知二月七日】緊急国策の断行 小磯首相に陳情
山本大將ら十二氏起つ 一、先手断行、二、一億総討ち死に、三、木製飛行機増産、四、重要軍需工場の国家管理、五、軍需工場の疎開、六、根こそぎ動員、七、学校授業停止、八、生産隊強化、九、飼料肥料自給、十、闇防止】

欠勤者の増加

【『日本産業経済新聞』二月八日】労務者への米の加配
十五日以上欠勤者には停止 無断欠勤、理由なき欠勤者には増配を停止し、浮いた分を優秀工員の加配に廻す、

…

二月七日（水）

『東洋経済』の原稿を在宅して書く。

もう学業は全くないといつてもいい。誰も勉強をしているものはない。学生は全部工場だ。その上、

【『日本産業経済新聞』二月八日】高校理科も入営延期取

止め … 文理科大学文学部、高師文科、青年師範学校、実業教員養成所（工業教員養成所を除く）臨時教員養成所、体育専門学校、理工系、歯科、薬剤、獣医専門学校の一部

新入生への延期を認めない所 高校理科、大学予科、旧来の理工系の専門学校、獣医、薬剤、歯科医専の大部分入営延期を認める所 大学の大学院及び研究科、大学理工学部、（文理大理学部を含む）工大、大学農学部の農芸化学、農林化学、水産学、獣医畜産科等、高師理科】

いよいよマニラに三日米軍侵入す。先頃からマニラ

はすでに軍事的価値なしと宣伝していた。ドイツと同じ宣伝振りである。

二月八日（木）

日中著書執筆。日支関係論

【底本では、この後数行余して、改ページされている。】

雪降る。

本年は世界あらゆる方面で五十年振りの寒気といわれる。東京で家の中の水が全部凍るといふ如きは三十年の東京生活で知らない。炭はなく、本年の寒さは誰にもこたえる。本年の冬を通じ、先頃、一俵の木炭の配給があっただけである。幸いにして我家はまだある。

二月九日（金）

国民学術協会あり。津田博士の仏教に関する講演があったが、途中で警報出で、誰も直ちに帰ってしまった。

二月十日（土）

約により日本クラブで幣原男と会見。原稿を貰う。僕の書いたものに不満で書いてくれたのである。その感想別に、幣原資料の中に入れて置いた。

その時、空襲警報あり。九十機、群馬県太田の飛行機工場を襲う。敵が何故に、飛行機工場の所在を知るか、これはスパイの作戦ならんと憲兵隊などは一生懸命で探して居り、ロシア人から行くだろうとのことで、ロシア人に近い日本人を虱潰ししらみつぶしにあげているとのことだ。近所迷惑だ。

高橋、読売副社長と会談。戦争をいかに処理するかの問題につき心配して研究しているとの事、それについて幣原の説を知りたしといていた。重臣が陛下に拝謁しているという話は嘘だが、牧野伯が動いているのは事実だとの事である。僕が、その朝、牧野伯に、外交史研究所のことで電話をかけたなら、「今日は先約あるが、是非逢いたいから、後に当方から電話する」とのことだった。晩に自宅に逢う旨電話あり。

晩、深井君の結婚式に参列。外務省の若い事務官だが、僕が新居の口をきいたからの因縁だ。

ヒリッピン方面は敵が制空権を有し蟻の出る隙もない旨外務省調査局長の話。したがって外務省の若い連中も到底帰って来られないとのことである。佐藤君の運命気づかわる。

比島全面にゲリラが非常に盛んだそうだ。

二月十一日（日）

紀元節だ。例によって、どの新聞も徳富蘇峰の談話だ。

【出典不詳・日付のみ二月十一日】神武東征を燈明台に悠久不測の大義に生きよ 一億同胞に檄す 徳富蘇峰
 「悠久二千六百五年、有史以来かつてなき戦局下」……
 ……「大東亜聖戦の最後の勝利を確信」……「斉藤別当実盛が平維盛に向つて」……「曹操も百万の兵をもつて呉を」……
 ……「今日アメリカが眉毛に火がつく如く焦りに焦つて一気呵成に決戦を我等に挑み来つたのは彼等が計ら久しきを持することが出来ないことを暴露」……「そもそも神武

天皇が高千穂を出で」：「神武東征の半ばにも未だ達してゐない」：」

二月十二日（月）

朝、牧野伸顯伯を訪問。外交史研究所のために談話を頼んだのである。考えて置くといった。（別に感想を書く）

東洋経済の評議員会に出席。蠅山君も出席。新政府出現が問題になつてゐる由。僕はそれ等については大して興味を有していないといった。蠅山君の話しでは政府は戦局を投げてゐる。したがって力強い声明もないのはそれがためだ。蠅山君は「最後まで戦う論者だ」といった。僕は、戦争が好き日本人だから、戦争を徹底的に味わうことが一つの道、それとも、犠牲が高いからできるだけ早くすませるか。僕には決心がないといった。どうせジリジリ後者にならう。

二月十三日（火）

日本の役人は、形式的なことしかいえない。最後まで内閣の改造があつて、児玉新文相の談話左の如し――

『毎日』二月十二日 若き力を結集 戦争一途に動員活用

文相談　：「万事をあげて驕敵撃滅の一途に邁往すべき秋である、」：「科学技術戦力を劃期的に増強し殊に青少年の若き力を十全に結集動員すると共にこれを養育鍛錬すること」：」

朝鮮と台湾「同胞」に対する「処遇」問題はこの前の議会で小磯首相が発表。委員会もできた。今回、朝鮮から「御礼」のため委員上京。今回の戦争で朝鮮を独立せしめ、その代りに国内の朝鮮人を、その本国に送りかえすことができれば一番いいのである。

二月十四日（水）

『読売』『陣影』二月十四日「工場の怠け者を匡正するためには」：「休んで内職したりしてゐる者も相当数にの

「ぼつてゐる」：「国民が怠けてゐて戦争に勝てる筈はない。」

工場を休むものが非常に多い。一つはそうして他でかせぐのであるが、もう一つは工場に行つても仕事がないそうだ。築比地君の話では、同君の甥が工場に行つて、石炭がないので一ヶ月に三日しか働かなかつたとのことだ。

今日の新聞で米、英、ソの三頭会議の内容が発表。二月四日からクリミアのヤルタで開いたとの事。ヤルタはチエーホフの故郷でその家がある。

ドイツに対する制裁非常に苛酷だ。これではナチスは死に者狂いに抵抗するだろう。ソ連が断然リードしているが、これが果してソ連に対し勝利を意味するかは疑問だ。ただソ連が、そのプロレタリア・イデオロギーの故に、どこの国にも手兵を有しているのが強味だ。

『毎日』「硯滴」二月十四日 「学校閉鎖論は各方面に擾頭

してゐるが児玉新文相は『つまり看板を外すか外さないかの問題であつて、戦局と睨み合せ勤労と教育との調整に機動性を発揮することが肝要だ』というが「看板ではなく実質が、：生徒は安く雇へ勤勉とは言え「大した仕事もなく幾日間も工場でブラブラしてゐるやうな現状」：「生徒の特権は教育を受けること」：「教育に対して、文部当局の自信力の確保こそ」肝要：」

学生を全部、工場に打ち込んでゐる。これは指導階級——軍部が教育の価値を認めないことと、それから文部省の役人が、まるで自信のないことを示す。従来、橋田、岡部、二宮、児玉というように、右翼イデオロギーのものばかりで、軍部におべつかするのである。十年後のことが恐しい。学生の職工化も無論のことだ。工場でいい指導が行われれば、それでもいいが、今のままでは困るのである。

『日本産業経済』二月十四日 ナチ主義を抹殺 対独作戦・処理に意見一致 三頭会談公報（リスボン十二日発同盟）

ロイター電報ニヤルタにおける三頭会談の公報全文次の通り

英国首相チャーチル、米大統領ルーズヴェルト、ソヴェト聯邦人民委員会議長スターリン氏は会議の結果について次の声明を発表した

ドイツ軍に対する作戦 我々は共同の敵を最終的に打破るための三聯合國の作戦計画を検討し且つ決定した。極めて詳細な情報が交換され東西南北から我らの陸軍並に空軍によりドイツの心臓部に加へらるべき新たな、従来よりも一段と有力な打撃の時期、範圍並に調整について完全な意見の一致を見、細目に亘つて計画が出来た。

今回の会議で米英蘇三国の軍事代表が極めて緊密な実戦協力關係を確立した結果、戦争の期間が短縮されるべきことを信ずる。三国軍代表の会議は今後も必要に應じて継続されるであらう。ナチ・ドイツの命運は極まれり。ドイツ国民は絶望的な交戦継続を企図することによつて、自ら愈々重い敗北の代償を負担するにすぎない。

無条件降伏条項の実施 更に我等はドイツの武装抵抗が最終的に粉碎された後、ナチ・ドイツに対し我々が共に課すべき無条件降伏条項の実施に関する共同の政策並

に計画について意見が一致した。今回成立した計画によれば、三国の兵力は各々ドイツの分割地区を占領する予定である。

右計画の下においては、三国の最高司令官をもつて構成し本部をベルリンにおく中央監理委員会によつて、行政並に監理の調整が遂げられよう。フランスが占領地帯の一部を分担し、第四の成員として監察委員会に参加を希望する場合には三国はフランスを招請することに意見一致した。フランス軍の監理地域は關係四国政府において歐洲諮問委員会における代表を通じてとりきめるであらう。

ドイツ軍国主義とナチ主義とを破摧しドイツが再び世界平和を攪乱出来ないやうにすることが我らの不動の目標である、我らは一切のドイツ兵を解体しドイツ軍国主義の復興を再三企図したドイツ参謀本部を永遠に分断し、ドイツ軍事施設を悉く撤去乃至破壊し、軍需生産に資するべき一切のドイツ工業を抹殺乃至統制し、すべての戦争犯罪人を裁判に付し速かに処断し、ドイツ軍が犯した破壊については現物による賠償を強要し、ナチ党とナチ法制、組織並に制度を一掃し、公職並にドイツ国民

の文化的、経済的生活からナチ並に軍国主義の勢力を悉く掃討し、その他将来の平和と世界の安全に必要と考へられる諸政策を、ドイツ国内において実施する決心である。

尤もドイツ国民を破壊することは我らの目的ではない。

しかしナチ主義と軍国主義とが根絶された場合にはじめて、ドイツ国民は相応の生活と国際政局における地位を期待し得るであらう。

損害賠償委員会 我らは今回の戦争においてドイツが聯合各国に与へた損害の問題を検討し、ドイツが出来る限り最大の限度まで現物をもつて損害を賠償することを妥当と認め、損害賠償委員会を設置するに決定した。委員会はモスクワに設置する。

国際安全保障体制 われわれはまた総ての平和を愛好する国民の緊密且つ継続的な協力によつて、戦争の政治的、経済的原因を取除かねばならない。基礎はダンバートンオークス會議に於いて据ゑられた。今回の會議でダンバートンオークスに於ける非公式會談で提案された線に基き意章を用意するため、一九四五年四月二十五日合衆国のサンフランシスコで聯合各国の會議を招請するに

意見一致した。

重慶政權並にフランス臨時政府とは直ちに協議し、米英蘇三国政府と共に右會議の招請に當るやう要請する。重慶並にフランスとの協議が終り次第投票手續に関する提案の正文を発表する予定である。

「解放」諸国に民主主義樹立

スターリン議長、首相チャーチル並に大統領ルーズヴェルトは米英蘇三国民並に解放された歐洲各国民の共同の利益のために相互に協議した結果、解放された歐洲に於ける不安定の一時的期間に於いてナチ独逸その他歐洲の従前の軸軸衛星諸国の支配から解放された各国民が、民主主義的方法によつて彼等の緊迫した政治上、經濟上の諸問題を解決するのを援助するに當り、三国政府の政策を調整することに相互に同意した旨共同で宣言する。

歐洲に於ける秩序の建設並に國民經濟生活の再建は、解放された各国民をしてナチズムとファシズムとの最後の残滓を破砕し、各国民の選択する民主主義体制を樹立するを得せしめるが如き過程によつて達成されねばならぬ。

これらの国に於いては先づ、第一に国内に平和の状態

を確立し、第二に窮乏に陥つた各国民を救済する非常対策を実施し、第三に各国民の間に於ける総ての民主主義的要素を広く代表し自由な総選挙に依つて出来るだけ早く人民の意気に応じた政權を樹立することを公約する中間的な政權当局を決定し、第四に必要なに応じて右総選挙の施行を促進することが必要な条件だといふのが吾等の判断するところである。直接関係各国に利害関係ある諸問題が討議される場合には、三国政府は他の聯合各国並に臨時政權或は他の諸政府と協議するであらう。三国政府の見るところに依り歐洲の解放された国又は従前の衛星国の状況に鑑み、緊急の措置を必要とする と解される場合には、三国政府はこの宣言に表明された共同の責任を果たすに必要な措置について直ちに協議するであらう。この宣言を發表するに当り三国は仏共和国臨時政府がこゝに示唆された手續に協力することを特に要望する。

波蘭問題 赤軍による完全な解放の結果ポーランド国内に新情勢が生れるに至つた、その結果現在ポーランドに於いて機能をも有してゐる臨時政權は、ポーランド国内自体並に外國に於けるポーランド人の間から民主主義領袖を採入れより広範な民主主義的基礎の上に改組されな

ければならない。然る場合右新政府は拳国一致のポーランド臨時政權と呼ぶべきである、モロトフ、ハリマゾ、サー・アーチボルド、クラーク・カーに対して、まづ第一段に於いてモスクワで現在の臨時政權の閣僚並にポーランド内外からの他のポーランド人民主々義領袖と以上の線に沿ひ現在の政權を改組する目的を以て協議することを委託する。ポーランド拳国一致臨時政權が正統に結成される場合には現在のポーランド臨時政權と現に外交關係を維持してゐる蘇政府並に米英兩國政府は、ポーランド拳国一致新臨時政權と外交關係を確立し大使を交換するであらう。

三国政府の主班は、ポーランドの東部国境線がカーゾン線に沿ひ或る地域に於いて五キロ乃至八キロ右線よりもポーランドのために有利に確定されるのが至当と考へる。同時にポーランドが北方並に東方に於いて實質的な領土の割譲を受けねばならないことを認める。

ユーゴ問題 チトー元帥並にスパスッチ博士に対しては両者間の協定を即時実施し、右協定の基礎の上に新政權が結成さるべきことを両者に勧告するに意見一致した。我等は又新政權の結成と共に同政權が次の通り宣言

することを勧告する。

一、反ファッショ国民解放会議（アヴノイ）を拡張し、最後のユーゴスラヴィア国会（スクブリーナ）の議員にして妥協して敵と協力しなかつたものを組入れ、臨時議会と称すべき団体を構成すること。

二、反ファッショ国民解放会議が採決した立法行為については将来憲法会議に於いて審議確認すること、その他万般の諸問題についても全般的評議を加へた。

外相会議 今回の会談の結果三国外相が定期に協議を遂げるための常設機関を設置するに意見が一致した、従つて外相は必要に應じて極めて頻繁に多分三ヶ月乃至四ヶ月毎に一回づゝ會議することゝならう。右會議は世界組織に関する聯合國會議の後先づ第一回をロンドンで開催し、爾後三国の首都に於いて順番に開催されるであらう。

結論 クリミヤに於ける我等の會議の結果、今回の戦争に於いて連合国の勝利を可能且つ確実ならしめた目的と行動の一致を、来るべき平和に際しても維持し強要する我等の共同の決意が再確認された。クリミヤ會議に於いては英聯邦、蘇聯邦並に合衆国の俘虜並に市民が現に

独国内に侵入してゐる聯合軍に依つて解放される場合、彼等の保護扶養並に帰国について詳細規定した包括的な協定が成立した。右取極めに基き各同盟国は、各国民が輸送便を得て帰国するに至るまで、それぞれ他国民に対し食糧、衣服、医療その他の必要品を提供するだらう。

蘇紙、三国の協力を強調（モスクワ十二日発同盟）共產黨機關紙プラウダは十一日の紙上において三頭會談に關し次の通り述べてゐる

テヘラン會談以來 十四ヶ月國際間の軍事的、政治的情勢は急速に変化してつた。今日においては最終的に完全な勝利は近い將來のことであり、ヒトラー支配下のドイツは回復し難い軍政治上の不幸に遭遇するに至つた。偉大な民主主義諸国の直面する主要な且つ決定的な任務は、ドイツを完全に撃破すると共に同盟各国と相携へて永続的平和の確固たる基礎をおくことである。

◇…ペルー宣戰布告（リスボン十二日発同盟）リマ來電「ペルー政府は十二日ドイツ及び日本に対し宣戰を布告した」

二月十五日（木）

空襲警報あり、静岡、名古屋方面に敵機来襲したと
のことだ。

本屋を漁ってマードックの日本歴史（¥20）と、黒
龍会の日支交渉外史を買う。

さ、かのノー・サーバー会というに出る。秋山高氏
の牛耳るもの。ここに比島から帰った明大教授の瀧本
松蔵（？）君、客としてあり。かれは確か米国生れの
二世で、明大に入り、そこで調法がられて教授とな
りしものだ。かれの話しが頗る有益だ。

一、比島では、比島人がほとんど皆な米国側につい
て居り、ゲリラが非常に多い。女まで日本を敵と
考えている。

二、原因は、少数知識階級は、どうせ米国が勝つか
ら、日本に味方すると、その内にひどい目にあう事、
また民衆から迫害されるからにある。

三、しかし、もっと有力な理由は日本の兵隊がひど
いことをやる。比島人を、よく平手で叩く。彼等
は顔を平手で叩かれることはいかなる侮辱よりも

ひどいと考えるのである。そしてそれが親類友人
に伝わる。そればかりでなく、日本人は比島人を
私刑に処する。すなわち比島人を木に結びつけて、
下から火をたいたり、水を打ちかけたりして悶死
せしめる。しかもこれを白昼、多数の面前で行う
のである。これが反感を持たれない訳はない。

四、マニラ・ホテルの食堂などで、姿を整えている
ものは中立国の外交官と、ホテルの支配人と、私
と、給仕だけだ。日本人は、足を出して、足の毛を、
むしりながら食っている。こういう連中を彼等は
初めてみたのである。

五、帰りに軍報道部長と一緒に飯を食って、何でも
いってくれといったから、そうした生活上のことを
いうとその大佐も同意して「日本人は頭はある
が、カルチュアはない、それはマライでも経験した」
といった。

六、しかし、それならば日本人が全部悪いかという
と必らずしもそうではない。比島人の教会でスペ

イン語の祈禮の中に「ワチ」という言葉がある。聞いてみると「是非、和知將軍を長く比島に置いて下さるよう」に「というのである。和知將軍は支那に置つた関係もあり、民衆に、よく挨拶もして、評判がいい。——そういう例を二、三引用して、比島人のためを思う日本人は評判がいいといった。七、彼等はい、外国に暫く居つた日本人は話しが分ると。

要するに外国から観れば、和冠が行つた形ちだ。野蛮人の進出という中世紀の現象が今に現れたのだ。教育の失敗だ。理想と、教養なく、ただ「技術」だけを習得した結果だ。彼等の教養は、義士伝以上に出でぬ、ことに「軍人」という中流階級以下の連中が大量に押し出したのである。従来、の渡航者は、とにかく選ばれた少数者であつた。今や「真正日本」が外国に行つたので、そのままに先方に紹介されたのである。

二月十六日（金）

朝七時から警報発令。午后四時まで継続して空襲警報発令。敵機動部隊が来たのである。飛行場をやつたという。艦載機が来て、しかも、これをどうすることもできぬ、汽車をも襲撃しているという。

いよいよ食糧問題も交通断絶から起るであろう。日本は、今、生産的には何にもしていない。全力を戦争のためにささげている。それが破壊されるのだから、日本は恐ろしい勢いで国力を磨滅しているのだ。

東京の真中であつて、我等はどこが、どういう被害を受けているか一切分らぬ。この秘密主義は最後まで然るだろう。

「敵は焦っている」——そうラジオでもいい、新聞もいい、軍でもいい。これはおそらく、もう敵も飽いている、一頑張り頑張ればという意味だろう。この認識が、従来ズツと觀察を謬つてきたのだ。

二月十七日（土）

今日も艦載機来襲。午后二時頃に至る。機動部隊が

来てどうにもならない。海軍全滅したことを知るべし。

二月十八日（日）

ジャポニカスのために日支関係の原稿を書く。

二月十九日（月）

「東洋経済」の評議員会に出席。

蟬山君の話しに、議会で、安藤正純君が、「戦争責任」の所在を質問した。小磯の答弁は政務ならば総理が負う。作戦ならば統帥部が負う。しかし戦争そのものについてはお答えしたくなしといったという。我憲法によれば天皇その責に任じ給うの外はなきに至っている。戦争の責任もなき国である。

二月二十日（火）

朝、瞭と共に寒肥えをやる。

午后、正木 兎君の事務所を訪う。昨夜、電話をかけてきて雑誌が返送されてきた。多分疎開されたと思っ

たが、馬場、嶋中君に聞いたら東京にいる由だから電話をかけるのだという。馬場君も行くというから逢うことにす。嶋中君も来た。自由主義者の被圧迫者だけが会同した形になった。正木君は『近きより』を発行している人だ。弁護士で、日本人には稀に見るファイターだ。昨年、警官の拷問致死事件ⁱを起した。すなわち警官を告発したのだ。警察ブロックを対手にして喧嘩をしたのだ。警察の方では、あらゆる方法を以て圧迫してきたが、これと敢然戦っている人だ。

中央公論の藤田親昌君が一ケ年の牢獄——実は留置場から出て来たが、警官は無暗にぶん殴る。身体がはれあがる。ぶんなぐつた後で、体操をやらせる——問いただけでも熱血沸くものがある。日本には憲法もなければ、法治国でもない。ギャングの国である。警察で、どんなことをされても仕方がないそうだ。正木君がそういうのである。正木君は死ぬつもりで戦っているという。さもあるう。正木君は、また東條前首相に

i 「首なし事件」とも呼ばれる。戦後に警官は懲役三年。

対し悪口——正当な批評をしたおそらく唯一の人である。会話は愉快であつた。

二月二十一日(水)

黒木時太郎君のところにお昼に行く。小瀧君居る。外務省の課長だ。招かれるのにお弁当を持っていく。かれもまたこれを辞退しないのだ。近頃は一食の米が、非常に貴重なのである。小瀧君は吉田茂と重光につかえた。吉田はロンドンで二十万円も金を使つたそうだからは秘書としてそれを処理したという。吉田は志士。重光は単なる官僚。それがかれの観察だ。無論、重光は頭は悪くない。

十九日に硫黄島に敵上陸す。いよいよ切迫した。

二月十九日の各紙は一齐に敵の対日処分案なるものを発表す。今までは全然伏せていた皇室の事——国体変革の企図が敵にあることをも書いている。これはかなり思い切つた処置である。この反響は如何。知りまほし。一文を『東洋経済』に書く。

徳富蘇峰がまた書いている。(後掲ⁱ) 徳富を以てしても、陸海軍の軋轢は見かねると見える。

【ヤルタ会談に対する反響二題】

『毎日』二月十九日 敵の痴夢日本処理案 暴戾・わが国体の破壊を意図 国民も徹底奴隸化

一月開かれた太平洋問題調査会会議の対日処理案は、「日本の全面的占領」、「軍閥を解体し戦争責任者を処罰且つ財閥解体」、「日本国憲法を徹底的に改変」、「海空軍の徹底的武装解除」、「軍需工場の完全破壊」、「秘密結社の撲滅」、「日本国民の再教育」、「カイロ宣言に基づく日本帝国の解体」、「太平洋の島嶼を返還」、「支那に返還」、「損害賠償」、「精神的にも徹底的に奴隸化せんとするもの」……「国体を敢て破壊蹂躪せんとする意図」……

『中部日本』二月十九日 残虐無道 対日処分案 不逞

神州抹殺を標榜日清役以前に反し搾取

【毎日新聞とほぼ同じ内容】「国体の変革」……「皇室に関する一項目を挿入する暴挙に」【これを『毎日』は項目該当する切り抜きはないとのこと】

として挙げず……」

二月二十二日（木）

幣原男と会談、別に会見記書く。

お昼を高橋読売副社長から御馳走になる。

二月二十三日（金）

昨夜からの雪、一尺近くつもる。本年ほど寒き年なく、また本年ほどの降雪も、約三十年の東京生活に初めてである。

執筆、支那革命前後のこと。

二月二十四日（土）

古書展覧会を見た序手に神田古本屋を漁る。大変沢山買う。——（約五百円近く）

アダムスのヒストリー・オヴ・ジャパン（百二十五円二冊）プリンクレーの日本歴史（六十五円）

これ等は直接は安らぬが、かねてから垂涎しつつあつ

昭和二十年二月

たものだ。しかし、いま大東亜戦争史を書くために出発している僕が、維新時代のことを書く機会があるかどうか。

しかし書齋は漸次整いつつあり。神よ、これを戦火に焼くことなからしめよ。

二月二十五日（日）

今日は、朝から空襲警報がなり、艦載機が来襲した。それから午后になつてB29が百三十機も来た。後に聞いた話では、これ等の数は「戦果」の発表のために、内輪に数えているとのことだ。つまり、戦果が比例としてたからしむるためには、これを内輪に発表するのが便利なのだ。

【以下、底本では四頁弱もある引用の一断片】

『毎日』二月二十日 大権発動の急務 蘇峰徳富猪一郎
旧令古慣を断切り 青年に括舞台 粉碎せよ日本抹殺の妄想 ……「遠くは神武の東征、近くは維新の大業に」……敵

の意図は日本抹殺」：「比島を死守すべき」：「ヤルタの三頭会議に於てはドイツの処分案なるものが出で」：「日本人を抹殺し、」：十箇条の革新案は今の事態を予想したのではない、「しかしながら必ず或るものが来ることを予期したといふことは、良心的にこれを今こゝに断言して憚らない。指導者よ目覚めよ」：「本土に上陸することを目論でゐる」：「皇国を背負ふ青年」：「大権発動の急務」：「何の屈託もなくその心身を挙げて国家を扞護」：年寄りの兵に：「日本に政治家なきや」：「黙視できぬ時局」：……」

『毎日』「硯滴」二月二十日 「空襲下の生活に感ずるのは、出来るだけ身軽、気軽にならねばならぬことで、」：老幼婦女だけでなく群衆も足手纏ひ、機銃掃射の目標になり易い：家屋疎開の必要……」

二月二十五日（続き）

原稿を書きながら、不幸にして爆弾が落ちれば万事窮すといったことを考える。

二月二十六日（月）

雪、一尺もつもる。三月も近いのにこの大雪は珍らしい。

東洋経済に赴くと、野沢君が入口に居って、「とても大変です。焼け跡から、焼け残った布団をとり出して居ったり、ふるえながら灰を眺めたりしているところを見ると、ほんとに悲惨です。戦争とはいふものの犠牲が大きすぎます」といった。誰に対していふともなく、かれは嘆ずるようである。東洋経済ではガスも水道も出ない。自宅を考えていたよりも被害は多い。電車もほとんど動かないのである。

会議の後、神田に土曜日に買った本をとりに行く。神田一面が焼けただれている。神田駅付近から駿河台下方面にかけて、先頃焼かれなかったところがやられている。まだ燃えている。

全体の被害一万九千戸。死者は百三十名とかだそうだ。上野方面が焼けているとの事。消防が来て「水道

の栓はどこだ」と問いて歩いていたとのもので、非科学的なところが現れている。

神保町通りは焼けていず、買った本を受取った。折しもの雪で、都電が動かず、それが悲惨感を激化している。たまに荷物を積んで運んでいるものもあるが。

今やその車すらもないのである。しかも国家はほとんど何等の救助を被害者に与えることができぬ。

家妻が、早朝雪を踏んで軽井沢に赴く。切符を買って貰ったが、それを利用しなければ、いつまた買えるかわからないからだ。

二月二十七日(火)

軽井沢から電話あり。昨朝五時に家を出た綾子は、昨夜八時に軽井沢に着き、ために帰宅は二十九日になると。

午前雨宮君来たり、伊藤安二君に断つてくれたという。安心した。四百円を何事もしないことのために差上げたが、それもやむを得ない。いい人だけれども、

事務的でもなし、研究的でもない。いい人を得ること難し。

この間、黒木君のところで、僕が日本はギリシャかスペインのようになろうといったら、かれはそんな国になるもんか、そこまで文化が及ばんよ、エジプトのようになろうといった。

朝のラジオは相変らず軍人だ。今朝は中井良太郎という中将で、米国は鬼畜であるとして平和熱を極力攻撃して一億玉砕を高調した。

二月二十八日(水)

『東洋経済』のために「政治と外交」という論文を書く。午後は著述進行。

三日一日（木）

神田の古本屋に行き、支那関係その他の英文書を買う。火事になると困るから、買って置くのである。高くなったとはいふものの、他に比すると非常に安い。しかしこれも遠くない将来に高くなるう。

日本人の断種をなせといった乱暴な議員がある。

『朝日』三月一日 この暴言、これが米だ（ヘリスボン 二十七日発同盟）日本人收容所に関する議会での発言……

三月二日（金）

『日本産業経済』三月二日 興亜総本部で米捕虜の断種決議 翼賛興亜総本部では先のアメリカ議員の発言に対し……

雨降る。

「直結」という言葉が流行している。政党が民衆に直結するという如きだ。直結しないものが多いから来たのだろう。

信夫清三郎君来宅。まだ極めて若い青年だ。この人が、あんな内容のある著書を出したかと疑われるほどだ。外交史のスタンダードなものを書くことが目的だ。それで、基本的なところへ目をつけているから、それは可能であろう。それから日清戦争外交史を研究するという。

三月三日（土）

一日、在宅、執筆。

三月四日（日）

雪降る。清沢覚のところに行く。お餅を御馳走になりとうてなり。近く疎開に決定。本月一杯には荷物を運ぶという。

朝八時頃よりB29百五十機来襲。「悪天を利用し」

とラジオで発表するほど悪天だ。したがって日本側からは、ほとんど飛行機は出ないようだ。巢鴨その他がやられたそうだが、例によつて全く発表はない。日本では「被害軽微」「敵の損害甚大」といつている間に、いつの間にか大都會の過半は焼失してしまうといううなことになるだろう。

歸りに明大教授、松本瀧藏君のところに寄る。土橋のことを頼むため。

三月五日（月）

東洋経済に赴く。

石橋君の話——『河北新報』の「一力社長の話」に、この間、同地の軍管司令官が赴任したが、有力者を集めて演説をした。かれは敵が上陸してくれば自信がある。第一は敵の補給線が伸びている事。第二には、いよいよ陸軍の得意の作戦に出られる。比島や硫黄島などでは狭くて力が出ないが、内地では充分やれるといった由。皆なあきれた由だが、彼等は、ほんとに、焦土

を考えているのである。

先頃の内閣改造についても、国内事情についても、何一つ発表しない。国政が闇取引である。こんな政治がかつてあつたらうか。

三月六日（火）

昨夜、植原悦二郎氏が話したいのことにて、正午、山王ホテルで会見す。同氏の話しによれば、同氏は戦争終了について重臣方面に話しをしている。若槻とも逢い、岡田啓介とも会談。幣原とも逢ったが、幣原は対外的なことばかり考えていて——すなわち飽くまで抵抗すべしとのみ考えていて、内政的なことを考えていないから僕に機会があつたら話してくれというのである。岡田も小磯が駄目であることを知り、これを何とかせねばならぬといっている。ただ人がないというのである。また近衛も木戸の不適任ことを知っているが、逢うと辞職を勧め得ずに別れてしまうそうだった。陛下が重臣五人に拝謁仰せつけられ、時局について諮

間違ばされたとか、その中には牧野もある由。

植原氏は無条件降伏それ自身恐ろしくではないか。その上で当方から条件を出すこともできるのだといつていた。

植原氏は矢張り愛国者である。

帰りに古本屋にまわり若干のものを買う。

三月七日（水）

『東洋経済』の社論に「徳富蘇峰に与ふ」というを書く。責任を解さず、他人をのみ責むることを難詰したもの。石橋君が書くこうではないかというので書いたわけだ。（石橋君曰く、もう紙も貰えないし、大胆に書くとうと。）

午后、宇梶君来たる。著述原稿整理を依頼したのだ。同君は下妻の郷里に疎開する由。片道汽車で、三時間かかるそうだ。

三月八日（木）

日本外交史研究会をつくるために、深谷、村山、宇梶三君と会談。信夫、今中両君は、通知状不着のため来なかつた。渡辺幾治郎氏その他からやつて貰うように話す。

深谷君が原内閣時代の外交文書を貸してくれた。貴重品である。今度の歴史は、少なくとも今までのものより、いい資料で書ける。

三月九日（金）

通信院の貯金課に願まれ、前橋に赴く。二等の切符無し。しかし据れる。

講演の結論で、日本は飽くまで抗戦すべき旨を述べ。幣原男のいったようなことだ。決して自己の本心ではない。

日本の空気は正直なことがいえないようにできているのである。この空気をかえなくては、外交は出来ない。戦争の結果によって、それが可能だろうか。急に出来るものではない。

宿屋がとつてあつたのを、早いので帰る。高崎で汽車、一時間半遅る。近頃は珍らしくない由。

三月十日（土）

昨夜、汽車は約二時間遅れた。蒲田につくと警報が出て真暗である。手さぐりで電車に乗る。家に帰つても、あかりもなく、寝る。

警報でめ、め、め。けたたましく大砲がなる。外に出ると、B26が低空飛行をやり、探照燈に銀翼を現わし悠々と飛んでいる。盛んに高射砲を打つが、少しも当らず。我飛行機は一台も飛び出して居らぬ。B26は、フツクリ空に映えて実に奇麗である。たちまち北方の空、真紅になる。風が非常に吹いているので、この風では止めようもあるまい。風に燃焼の臭いあり。どこか知らねど被害が多かろうと胸いたむ。後に聞けば百三十機が、編隊をなさず、一機一機に襲つた由。後の話しになるが、金田君が、敵ながら作戦が立派だという。各方面から押し寄せて来たのである。

朝、国民学術協会に出席のため都心に出る。電車は品川しか行かないというのが、浜松町まで行けた。蒲田駅で、眼を其赤にし、どろまみれになつた夫婦者あり。聞くと浅草方面は焼け、観音様も燃えてしまったという。東京に近づくにしたがつて、布団につつまつた人が多くなる。浜松町からは、鉄道を、群衆が歩くところ、ちょうど昔の震災の時と同じだ。新橋駅近くの左右が燃えている。ことに汐止駅が、まだ盛んに火を吹いている。ここは東京最大の運輸駅であり、二三丁四方にうずたかく物資をつんであつたはずだ。それが灰燼に歸したのである。しかも驚くべきことは、極めて正確に荷物置場だけがキチンとやられて居り、その投弾の正確なること驚くばかりだ。

銀座三丁目あたりから一丁目にかけ焼く。日本橋の白木屋にも火が這入っている。いつも行く明治堂古本屋が焼けてしまった。木曜日に予は本を買つて、取りに行く筈であつた。丸善だけは無事。三菱銀行支店だけがどこに行つても立っているのは、同銀行の信用を

語るものか。見るにたえないのは、老婦人や病人などが、他にささえられながら、どこかに行くものが多いことだ。燃え残った夜具を片手に持っている者、やけどだれたバケツを提げる者。それが銀座通りをトボトボと歩いて行く。彼等の目はいずれも真赤になっている。煙と炎の故であらう。

板橋君に逢うと石橋家が丸焼けになって、奥さんが「東洋経済」に行っているという。見舞うために行くと、奥さんが疲れた姿でいる。昨夜、石橋君は鎌倉に行き、奥さんと女中だけが羅災。全然何にも出さず。丸焼けだとのことだ。この戦争反対者は先には和彦君を失い、今は家を焼く。何たる犠牲。

浅草、本所、深川はほとんど焼けてしまったようだ。しかも烈風のため、ある者は水に入って溺死し、ある者は防空壕で煙にあおられて死に、死骸が道にゴロゴロしているとのこと。惨状まことに見るにたえぬものあり。吉原も焼けてしまったと。

帰りに銀星に寄ると甥の笠原貞男の妻君も子供三人

をかかえて焼け出され、これまた何にもないとの事である。どうすればいいか修司も困っている。

本郷一面、芝三光町、その他全焼——警視庁では二十万戸と数えている由。そうすれば百万人の罹災者という訳だが、果してそうかどうか。帝大の一部も焼失。国家は、これに對しほとんど何もできぬ。晩に衣食寝具を供出してくれと隣組からいつてきた。

それにしても、これが戦争か？小磯首相は罹災者に對し「必勝の信念」を説いて、敵の盲爆を攻撃した。宮内省の主馬寮が焼けたことはかり恐縮していることに對し、国民からかえつて反感が起ろう。

今日の朝刊にまた陸軍大将二人出来。万骨枯れて二将功成るもの。彼等は全く傍若無人だ。

前橋で聞いた話では、同市の大佐が、「硫黄島の如きは、単に電氣の火花に過ぎず、戦争はこれからだ」といつて気焰を吐いたとのことだ。各方面で軍人の非常識が問題になっているのは一つの收穫か。

仏印が日本との軍事同盟を守らないというので、九

日日本軍が仏印軍隊の武装を解除し、単独に防衛することになった由を放送によって知る。

前橋に行く汽車から観ると、田舎では、まだバケツで防空練習をしている。そんなものでないことが、東京の実情を見れば直ぐ分らねばならぬはずだが、知識の伝播力は遅い。

東京の焼跡を見れば、また敵は機械力によつて爆撃していることが分る。従つて、今までやつている燈火の極端な管制——たとえば煙草の火一つをも怒鳴りまわしている流儀が馬鹿々々しいことが分るはずだ。結局、総べては知識のない連中が指導していることが、こうなるのである。

軍部はいよいよ内地で作戦する準備中であることを明らかにしている。国民はこれと考えるか、どういうリアクションがあるかが今後問題を決する唯一の鍵だ。

三月十日は陸軍記念日（奉天勝利の日）だが、杉山陸相は発表して曰く

『日本産業経済』三月十日 陸軍記念日に方り陸軍将兵一般に告ぐるの辞 ……「早期終戦を焦慮する敵は愈々進攻の速度を急ぎ」…「最後に皇土にある將兵に一言す皇土に於ける作戦は外征の夫れと趣きを異にし真に軍を中核とせる官民一億結集の戦なり、而して総力結集の道は軍鉄石の団結の下燃ゆるが如き必勝の確信を堅持し能く武徳を発揚して軍官民同心一体必勝の一途に邁進するに在り」…」

『日本産業経済』三月十日 敵より長く戦ひ抜かん 松村報道部長放送 ……「わが主力嚴として健在」…「硫黄島の血戦は太平洋随一、猫額大の孤島、山高からず、地下数米にして熱湯湧出して工事至難而も飲料水殆どなく、地形的に見て守に難きこの島」…「フィリピンでは」之に反して我方の損害は僅少、主力は嚴然として健在し、本格的出血作戦は今後に期待さるゝ所大なるものがある、…「四年目の危機を克服せん」…「本土決戦に満々の自信」…「今や戦局の推移は本土の決戦を予期しなければ

ならない、莫大な物量を持つ敵に対し補給の困難は大洋の孤島に於いて敵に大出血を与へながらも遂に玉砕の已むなきに至つた、併し乍ら若し敵にして本土に侵攻し来る事あらば、改むれば全員弾丸となり守れば一兵城となる、わが大君の統べ給ふ皇軍の真価は遺憾なく発揮せられるであらう、況や国体護持、皇土防衛に燃え起つ一億の憤激、火の如きものであるに於てをや、我々は満々たる勝利の確信を持つものである」【底本で二頁半あり】

【出典不詳】対日最終攻撃の地歩を占む・一切は海軍力・ヤネル強がる（ヘリスボン五日発同盟）ワシントン米電：「米軍は今や日本本土に対する作戦最終段階を執行出来る地歩を占めるに至つた」：「太平洋上の資源豊富な島々から日本本土を孤立させ」：「最終攻撃の一切は主として海軍の仕事である」

【銘記せよ、一月十四日、ノ】

i 底本ではこの「銘記せよ……」の字句そのものも引用の断下げがなされていて、次に「以下ビラの貼付」と記されている。ビラの出所は不詳。

【出典不詳・ビラ】不逞の米奴断じて許すべからず 社団法人 神武天皇祭 明治天皇祭 桜菊会 専務理事 森本光男：「昭和二十年一月十四日！」：「米奴の醜弾、伊勢神宮の神域を汚したり。」：「度し難きは、神域を恐れざる」：「然れども米奴よ！よく聞け！」：「勝ちぬかん決意を披瀝して敢て満天下各位の奮発奮起を促す次第なり。」

三月十一日（日）【以下第四冊目大学ノート】

科学の力、合理的な心構えが必要なことを、空襲が教えるにかかわらず、新聞やラジオは、依然として観念的日本人主義者の御説教に満ちる。この国民は、ついに救済する道なきか。

十日午前一時以後のB2S空襲の惨状は、日と共に明瞭になりつつあり。銀星の店員も焼出さる。浅草方面にては屍体^マ置^マたるものありという。烈風に煽られて逃げ損じたためである。おそらくは大地震の時より少くあるまい。二、三万を越えると思う。

【この3.10は「東京大空襲」と呼ばれる。罹災者

100万、死者10万人という推定もある。一連の爆撃作戦での被害では、これに匹敵するのは、沖縄、原爆の三例ぐらいだろう。」

『中部日本』三月五日【記事が見当たらない】「億総討死の決意を徹底 葛生能久、皆川治広、横尾惣三郎、吉植庄亮、松永寿雄、四王天延孝、樋口善右衛門、入江種矩は言う、「先手断行」統帥一体化「億総討死の決意の急速徹底」「木製飛行機増産」「闇取引防止」など十二項目要請……」

一億総討死をしたら、その後の国家はどうなるのか。しかしそれが今のところ軍人、右翼のイデオロギーである。

『中部日本』三月六日【五日付けにある】「謀略恐るに足らず」『上陸説』等に惑ふな 神経を太く勝抜かう……『名古屋控訴院三木検事は『謀略戦に勝て』と次のごとく語る』……「敵のやり口は戦前自国軍備の威嚇から平和

主義の鼓吹、さらに一旦開戦となるや平和の仮面をかなぐり捨てて」……「何処々々で××会議を開いたとか開くといふ報道を読んだだけで威嚇を感じてもそれはすでに彼らの手に乗つてゐるのである、敵側発表の戦況報道も」そのまま受け取るな……「東京焼野原」……「とか口に出してゐるものがあるだろうか、……」

（三木検事談）こういうことを信じたらいいんだ？

『中部日本』三月八日 乗つてなるか敵の謀略 宣伝ピラを拾つたら直に届出よ……「中川愛知県特高外事課長は七日次の談話を発表した」……「国内の親米英分子、不平厭戦分子を目標に謀略宣伝を開始する、」……ピラは「必ず最寄りの警察署か又は憲兵に届出で、」……」

敵の宣伝——味方の宣伝に対し、ようやく神経過敏になつたのを見るべきだ。

本土決戦なるものが真剣に考えられている。すでに松村報道部長もそれをいい、仙台の司令官も素晴らしい、

更に左の如く新聞もそれを宣伝している。——国民がどう考えるかが唯一の問題。

『中部日本』三月【四日】 本土決戦に備ふ 全国民へ動員令 女性も起つて敵を殺せ ……「井上郷軍会長談」：「神武御東征の時から軍と国民の区別はない、」：「川西日婦理事長談」：「戦国時代主君や夫のために死地に赴いた勇婦の如く今こそ自らの手に武器」：「郷軍を猛訓練 加藤名師団兵務部長談」：「服装は戦闘に便利な服装でいつでも出来るやう用意」…」

戦争を職業とするものが、人間の生命をどんなに軽く取扱うかを、国民一般に知らせることは、結局日本のためになるかも知れぬ。ああ。
仏印に対し単独防衛の処置に出す。

「共同防衛今や不可能 駐屯軍所要の措置開始 …フランスとの協定に基づいてやってきたが、態度が変わってきた。領土的野心は無いが、単独で防衛する。」

然らば何故に仏印を占領したか。理由の数々左の如し

『日本産業経済』三月十一日 樞軸的仮面の下に 完全にド・ゴール化 露骨化せる敵性行為 …ペタン政府時代のものを知る排し：「ユダヤ人官吏任用禁止等のペタン時代の法制を廃止した」…出先機関はドゴール側と連絡を取り、「仏印当局の排日的乃至不協力の事例及び重慶等に対する迎合的事実」…インドシナで撃墜された飛行士を引き渡さない、…高騰に見合つた軍費の支払いを拒否し、…」

ユダヤ人官吏禁止云々といった条件がナチスばかりであることを見るべし。これではいかなる国民も断じて服するものに非ず。子供のような頭脳である。

『中部日本』三月五日【グルー、対日戦意を煽る 日本】の力を知れ 一世代戦争も戦抜く敵ヘリスボン二日発同盟」ニューヨーク来電 「國務次官グルーは一日外国新

聞協会において再び日本の徹底的撃破を呼号」…

日本の戦力 …「日本は今や文字通り世界の巨人国となつた」

日本の資源 「今日の日本は東亜における大きな通商路を扼する」…

日本の生産力 …「現に日本は米軍が前線において日本機を破壊する以上の飛行機生産力を持つてゐる」…

日本の人的資源 …「即座に動員可能な壮丁〇〇百万あり

これに加へて更に十七歳から二十歳迄の男子〇〇百万をも動員し得る」…

船舶増強が急務 …「対日戦には対独戦に要する船舶の三倍が必要である」…

補給の困難 ルソン島、硫黄島に「最初の一ヶ月間に六十四万トン、次の一ヶ月間に二十四万トン、二ヶ月合計八十八万トンとなる」今後の攻勢に補給が…

時を稼ぐ日本 「日本は十年戦争どころではなく一世代戦争さへ考へてゐる、日本のもつ最も大きな利点は時間であり」…」

グルーは明かに日本の戦力をオーヴァエスチメート

昭和二十年三月

【overestimate 過大評価】している。かれは知らぬのであるまい。警告して、ゆるみを生ぜしめないためであろう。

それにしても、日本人は、口を開けば対手を軽く見ることばかりして居り、また罵倒——極めて低級な——ばかりしているが、日本国民に、この辺の相違が分らぬのだろうか。

【『中部日本』三月六日】 衆庶に期待し給ふ 大御心に応へん 生れよ若き 日本の新党 鹿子木博士談 …今次大戦で総力戦が必要である、一般国民が政治において充分な責任を果たしてこなかった、……「今日不利な戦局をとにかく支へつゝあるは外ならぬ二十歳前後の青年特別攻撃隊である、戦局をかくも不利にならしめたるは所謂老練練達の士といはれた既成の人達ではなからうか、政治、経済、技術、思想総て戦局を支へてゐる廿歳前後の青年が堅持する特攻精神に徹し」…」

鹿子木、徳富蘇峰といった連中が、この戦争を招来

した最も大きな元兇だが、二人ながら今、同じことをいつている。青年の出現を叫んでいる事、また現時局について他を攻撃していることである。

こうした人々を指導者とする日本は禍いなる哉。

三月十二日（月）

東洋経済に赴く。誰に逢つても「政府は一体どうするつもりだろう」と話しあう。その調子には、かなり昂奮した気持ちがある。それも無理がないので、大達内相の議会における報告では、東京空爆の被害は人口百四万人、家屋二十三万余戸、死者三万二千人、行衛不明は不明。議員が「行衛不明は何人か」と聞くと、「不明だから不明というんだ」と答う。議員は「馬鹿野郎！」といったそうだ。

本所、深川方面では、空爆三日の後、まだ死骸が道路に転っているそうで、警防団がトラックで運んでいるそうだ。火事のため毛も顔も原形をとどめず、黒い焼け杭のようになっており、男女の別も分らなくなつ

ているという。

甥の笠原貞夫は出征して居り、その妻が三人の子供をかかえて焼け出されたのは、さきに書いたが、修司が区役所に行くと、「縁故疎開の外はどうにもならぬ」と、一向受けつけない。貰ったのが五日分の食料切符と汽車無賃乗車券のみである。仕方がないから丸ビルの地下室に連れてきて、信州に送るという。布団二枚を自転車につんで連れてきた。国家の罹災者救助というのは五日分の米と醬油だけだ。

陛下が重臣をお招きになって、政府と統帥を一本にするために御下問になって居らるることだ。しかしこれに対し、軍部が絶対反対であり、また重臣も押し切つて誰一人、積極的に申しあぐる者がないという。木戸内大臣が侍立するのか、それとも御一人でお話しになるか分らないが、木戸は侍立申し上ぐるだろうとのことだ。

憲兵隊などは、非常に警戒しているそうだ。——和平論に対し。サイパンからの日本語放送では、「国民に

は気の毒だが政府が悪いから」といつているとやら。

政府は、いよいよ上陸作戦の決心である。

小磯首相の議会（三月十一日）における演説

『日本産業経済』三月十二日　…『インドシナの件の話』

…『ルソン島、硫黄島の話』…空襲の件で「罹災者に対しては深甚なる同情を表する」…「努力を傾けて居るのが」…

本土決戦準備は既に完整　…「即ち本土戦場を覚悟せねばならぬ」…敵は余勢を駆つてくるが「若し夫れ皇土の戦場化するあらば、敵をして復起つ能わざらしむるの神機は正に此の秋にある」…「而も尚敵にして我が近海に來たらば海上に之を撃滅するのみである、敵上陸を企画せば之を水際に於いて海中に叩き落すのみである、又若し敵にして遂に上陸し來ることあらば我は鉄槌下の組上に之を殲滅するのみである、加之敵を邀ふる戦場は悉く之れ我が郷土たるの地の利と一面軍と協同して防衛に當るもの悉くこれ我が同胞たるの人の和がある」…
「私は來るべき本土周辺の作戦を相を按じ断じて醜虜を

して足を神州に止めしめず、必ず之を殲滅し得ることを確信して疑はぬ」…「來るの行きがかりを一掃して…」此の秋に當り一億同胞亦愈々覚悟を新にし必勝の信念を固くし」…

『日本産業経済』三月十二日　ガ島以來の痛憤　本土狙ふ

敵頭上に爆発せん　陸相発言　…ルソン島では「上陸敵兵力の既に約三分の一を屠り去つて居る」…硫黄島では「死闘を續けて居る」…「今や帝国は皇土を中核とする決戦段階に突入した、陸軍としては海軍と共に一体の実を發揮し、敵を徹底的に粉碎し、一挙に勝を決するの好機を捉ふべく必勝の確信の下、銳意作戦準備の完璧に邁進しつつある

即ち一度敵の本土侵攻を見んか全軍特攻、飛行機は勿論、有ゆる新鋭屈敵の兵器を以て敵艦船に殺到し、醜敵を一挙に海中に屠り去るの神機を捕捉すべくんば撃ち洩らしたる敵の上陸を見んか、為にガ島以來切齒、痛憤求めんとして求め得ざりし陸上決戦を実行するの天機を捉へ敵に優るの戦力を以て小地にして而も設備せられたる決戦場に遊撃し、断じて敵を殲滅するの推算を有するものである

驕慢の敵機動部隊 機到らば必ず破滅 米内海相 全海軍の決意表明 …「わが方は…その艦艇に対しては大きな損害を与へることが出来なかつたことはまことに残念の極みである、当時わが方は諸般の情勢を判断し実に忍び難きを忍び、堪へ難きに堪へて遂に隱忍致したのである、」…」

陸相、杉山元帥の陸軍戦況報告中には、一言も、不勢だとも、遺憾だとも、危険だともいわない。「一挙に勝を決する好機を捉うべく」といつている。これに對し海相は「残念の極み」といつている。『朝日』は社説で、米内海相の「率直」を称揚しており、見ようによつては陸相に皮肉になつてゐる——最大がその程度だ。

名古屋に十二日零時半より三時二十分までB29百三十機来襲。午前十時まで焼けたというから東京と同じであろう。

宮内省の主席寮（十日朝）、熱田神宮（十二日）が被害あり。ラジオも、大本営発表も、これを繰返し強説している。願わくば皇室に累を及ばすなかれ。

三月十三日（火）

朝、自由学園の生徒一人の援助で、馬鈴薯を植う。僕は麦に肥料をやる。煙草をやめて一ヶ月以上。食欲非常にあり。

三月十四日（水）

清沢覚が郷里に帰るというので、かれの事務所を訪問。持参の弁当を使う。

実物教育が何よりも有効で、国に帰るものが続々できてきた。僕も軽井沢に行くことをだいたい決意した。石橋氏に話すと、家を東洋経済で借りようという。

重光外相が石橋、小汀、正金の加納、柳井（？）の四人を招待し、戦争を何とかしてやめたいのだが、実業家の方面から何とかできないかと相談したそうだ。

新しい蔵相津島は、全然話が分らないそうだ。米軍が押し寄せてくれば、これを撃退する自信が軍部にあるそうだからといって、和平論などはテンで考えよう

ともしないそうだ。海において撃退し得ないのを、上陸の際、どうして破ることができるのか。仮にいちおうこれを破ったとしても、米国を最終的に打ち破ることが、どうして可能なのか。もし打ち破れなかったら、

どうして戦争を終結させうるのか。こうした理屈は何人にも分つていねばならぬはずなのに、インテリに分らないというのはどういう訳だろうか。第一には、突きつめて考えることを好まないからであり、第二は、そういうことをいうと、禍の身に及ぶことを恐れるからである。

我等の周囲において戦争の始末を考えているものは石橋湛山君と植原悦二郎君ぐらいなものだ。そればかりではなく、大臣などが、そうした調子を見せると、みんなオベンチャラにこれに従うそうだ。——そういう道徳的勇氣にかけた連中の集まりだから、こんなことになったのだ。

空爆の被害や内容については政府は一切発表しない。ただ幾ら打ち落したということだけだ。——誰かがそ

の打ち落したものを総計すれば、米国の造ったB29よりも遙かに多くなっているといった。

『読売』「社説」三月十四日 被害の報道は具体的たれ「情報や報道の生命は具体性にある。事実を具体的に生々と示せば、演説も要らぬ、説教も要らぬ、ただそれだけで国民は方向を見定め、決意を堅める。こゝに報道の秘密がありまた意味がある。しかしこの判りきつた常識を忘れて、今なほ空疎な抽象的な報道が行はれ、いや、行はせてゐるのは、抑々何故であらうか。紋切型の形式的な報道は、国民に力を与えるどころか、却つてこれを奪ふものである。良い例は爆撃による被害状況の報道である。これは今後思ひきつて具体的にせねばならぬ。日付さへ変更すれば、何時の爆撃にも通用するやうな報道が横行してゐるのは、戦時下の情報量伝の何たるかを解せぬものと評すべきだ。勿論敵に対する顧慮もあらう。しかし空襲前後のあの丹念な偵察から見ても、彼等が吾々とは比較にならぬほど知識を持つてゐることは明らかである。」…

「被害状況などの報道が抽象的だと、第一にかういふ結果が生ずる。即ちこの空疎と隙間とを埋めるために流言が生れる。現在でも一步罹災地を出ると、殆ど荒唐無稽な流言が我物顔に闊歩してゐる。それは著しく針小棒大であり、また兎角興味本位に構成されてゐるが、敢て言へば、この流言は、あの抽象的な報道が生んだ鬼子であるに過ぎぬ。公的の權威を持つ筈の報道が、闇の流言を抑圧する力を欠いてゐること（抑圧し得るためには、報道自体が具体的でなければ駄目だ）、既にそこからも戦力に対する流言の好ましくない影響が知られるのである。

第二の結果は更に重要かも知れぬ。即ち現在のやうな抽象的な報道では、田舎は固より、目と鼻の先でも直接被害地でないところの人間には、事態が一向はつきりと理解されないといふことだ。交通機関が今日のやうな状態では被害地へ行つて実際に見るといふ機会も極度に少ない訳であるから、当然さうなる。ところが最も大切なことは、事態について何の知識も与へられてゐない田舎の人達が、莫大な罹災者の面倒を見ねばならぬといふことである。

爆撃による被害を具体的に生々と理解してゐてこそ、本当の隣人愛も国民愛も生れるのだが、さういふ知識の欠けたところへ罹災者が入り込み、それが大なり小なり地方民の生活へ食ひ込んで来るとなると、動もすれば、これを鼻であしらひ、邪魔物扱ひする傾向が生ずる。今日既にかうした様子が見られるのだ。

具体的に報道せずとも、或は報道させずとも、政府がその手で完全に罹災者の問題を処理するならばよい。しかし実際は結局各罹災者が或は縁故を頼り或は知人に身を寄せて、地方農村に救援の手を求めてゐるのである。情報報道に関する当局の政策は、彼等を救ふべき隣人愛、戦友愛の生ひ育つ地盤を逆に掘り崩してゐるものではないか。情報や報道の生命は具体性にあるのである。」

三月十五日（木）

『青年読売』にソ連外交について書く。

小瀧碩君という青年を、土橋家の弥生さんに紹介したが、当人事務所に來たる。明朗な青年だ。

嵯峨野という料亭でノー・サーベール会があるはずで行つ

てみると、先頃の空襲で全焼していた。三十万円とかで造った立派な建築であつた。山の上から見ると芝の
一帯焼野原だ。

十四日朝、大阪が空襲で焼かれたそうだ。日本銀行
に來た報告では焼失家屋十二、三万とかいう。二日に一
回ずつ、東京、名古屋、大阪に來たわけだ。

何故、敵の宣伝ビラを拾つたら悪いのか、何故敵の
宣伝と正面から取組ませないのか。(各紙ともシャープ・
ペンシル云々を書いてゐる。これこそ宣伝だろうと考
えられる。)

『読売』【三月十七日】 新型焼夷弾 怖るな飛沫 鉛筆
爆弾にも注意 … (五十キロ級) のもので中に爆薬が
装填されてあり、落下するや否や猛烈な火の飛沫を出し
て火災の範囲をひろくする、… 「また爆薬をつめた
シャープ・ペンシルや菓子、チョコレートを落し、ひろ
つた者に怪我をさせる手も用ひてゐる、現に銚子付近で
シャープ・ペンシルをひろつて重傷を負つた実例がある
からよく注意」… 「届出よ敵の宣伝ビラや文書 怠ると

内務省令で罰せられます」… 故無く届けなかつた場合
「三ヶ月以下の懲役若しくは拘留又は百円以下の罰金若く
は科料に処す」…」

三月十六日 (金)

富士アイスの重役会あり。深川の倉庫および冷蔵庫
が焼けた。その中に新たに購入した品物も這入つてい
た。また所有家屋も焼けてしまった。解散するかどう
しようかという相談会だ。(上野の支店も焼失した)。
太田専務は、前途を悲観して、もし米国に対し、無条
件降伏でもすれば商売も何も出来ぬといつて、この際、
解散しようかというのである。

僕は、かつて、何人よりも戦争について悲観的であ
る事、しかし今は誰よりも樂觀的である事、衣食住か
ら生活が始まるに顧みて、洋食物や、パン業などが極
めて有望的であることを極説した。けだし太田君は、
僕と、よく議論して開戦論者であつたから、僕の立場
をよく知つてゐるのだ。消極の方針をとつて持ちこら

えることに決定した。

渡辺文克君が、家を見つけたというので、黒木時太郎君を紹介す。黒木君は福島^マの宿屋に疎開の由。

渡辺君の話しでは、昨年八月、陸軍の少佐以上の軍人に米国の事情を話して、必ず東京を空襲し、ために東京は焼野原になるといったところが、会后、酒を呑んだ時、「そんなことはあり得ないから、あんな話をして貰っては困る」と注意されたとのことである。軍人の認識はその程度であつた。

蒲田駅で憲兵が、紳士風の男を二人、拉して行つてゐる。東京駅前にも憲兵が立つてゐる。戒厳令施行の噂も専らである。いよいよ軍政が事実的^マにきたのである。新聞でも、議会でも、「強力政治」をいい、それは日本にては軍政をいうのである。軍的秩序と軍人政治に対する、迷信を見るべきである。

晩のラジオにより小磯首相が統帥會議に列し、陸海軍大臣と共に作戰を協議する旨の報道あり。戦争指導^マ i 小磯は予備役のまま首相になったので参謀本部には入れてもらえなかつた。天皇のお声でやつと入れた。

會議は、そういうことだと思つたのが、まだそれをしていなかったのだ。小磯が、それを有難そうに——陛下の御下命があつたのだ——いつてゐるのである。日清、日露の時に、最初にやつたことを、今頃になつてやつてゐるのである。

仏印の安南およびカンボジア、独立を声明す。カンボジア王の声明は、仏国は彼等を保護する能わず、故に一八六三年の条約を破棄するにありというにあり。日本側の策動によること勿論だ。問題はこれ等の国が、どれだけ真実に独立を欲しているかだ。

七尾氏（実業家、富士アイス重役）の話し——被難^マ者は、敵、米国を憎む気にならず、むしろ、こういう悲惨な状態になつても、蒲団一つ提供してくれない国内政治を呪うような気分になつてゐるとのことだ。この話しに焼け出された池田君（富士アイス重役）も同意を示していた。同氏はやはり着のみのままに逃げた一人だ。

『中部日本』三月十三日 中京夜間空襲 ……十二日早曉三時間にわたり波状攻撃、「某国民学校では奉安殿を背に全身水濡れの一訓導が火叩きを手に仁王立ちとなって奉安殿を護り」……」

御真影は、小学校その他の学校においては、生命以上に尊貴なるものとされている。このため生命を失ったものも少くない。

池田君の話では、同町会には七百五十名の死者があった。四千二、三百名の町会の中から。これによると大体一割六、七割の死者で、それは悪い方ではない。上町の石橋湛山氏の隣組に七人の死者があったそうだ。こうした事実を考慮に入れると三月十日の空襲によって、おそらく死者十万人を超えているよう。

『朝日』三月十六日 威嚇と甘言を使ひ分け 厭戦気分を煽る 思ひ上つた敵謀略の手を暴く ……宣伝ビラ、謀略放送を開始した、……威嚇、甘言、厭戦の三タイプあり、……「第一の威嚇宣伝ではわが報道の真实性を否定して敵

の戦果を誇大に宣伝したり」……「国民を敵としない、降参すれば平和な生活を保障する」……「第三は軍官民の離間を策し、指導者のために犠牲になるのは馬鹿馬鹿しいという反戦気分を醸成せんとするものと」……」

敵の宣伝を警戒せしむるに一生懸命である。以上の三つの内容は、いずれも、敵の宣伝ビラが書いているところだと伝えられたものだ。

下のシャープペンシルの記事その他と共に、どんなに苦勞しているかが分る。

『読売』三月十六日 これがシャープ爆弾（銚子発）万年筆形とシャープペンシル形が見つかった。……小銃弾の炸裂程度の威力、……チョコレート形もあり……」

これは興味ある記事だ。一般人をして敵の投じたものを拾わせないためには、巧妙な宣伝だ！

『中部日本』三月十二日 ……「航空機による爆撃と艦砲射

撃によつて本土の輸送動脈を切断」：「後一挙に本土上陸の手段に出る」：「今にして誤らんか紙幣は一片の紙屑となり、昨日の重役は清掃人夫或は米兵の靴磨きとなり最愛の子女を鬼畜米兵に虐まれるの悲境に顛落するを痛感すべきである」

各方面において敵の上陸に対し、訓練を始めている。

三月十七日（土）

著書の内容順序を模様がえしたので、書直す。ワシントン会議前史を一冊とし、支那問題の如きを比較的に詳しく書こうとするのである。

昨日ラジオで聞いた小磯首相が大本営会議に列する記事は次のページの通りだ。

『朝日』によると小磯は組閣当時

(一) 小磯首相が大本営会議に出席するか

(二) 小磯首相が現役に復帰して実質的な国務と統帥との調整に当るか

(三) 全然新しい構想を以て問題进行处理するか

の三案を有して折衝したが、第一、第二案とも軍部が反対し（この事は『朝日』になし、他から聞く）、第三案の最高戦争指導会議となつたものである。先頃から重臣などが盛んに往来してまうやくこの程度のことが出来上つたのである。

【『日本産業経済』三月十七日】 首相大本営会議に列席

作戦と政治を一本化 ……本土上陸が目前になつたので「今回最高戦争指導会議の決定に基き特に内閣総理大臣を大本営会議に列席せしめて事実上の統帥と国務とを一体不可分化を図る」：「最高戦争指導会議は別個そのまま、情報局発表：「戦局に鑑み特別の臨時措置として（特旨により）首相を入れる」：

小磯首相謹話：「天皇陛下に拝謁仰付けられ」：「決戦下の国政運営に御奉公の誠を致し、大本営、政府真に渾然一体となり、戦争目的の完遂に邁進」：「

上記、「特別の臨時措置」と特記し、また小磯自身が、

「大本營、政府」と大本營を上位に置くを見よ。軍人大將の見識を知るに足る。

三月十八日（日）

朝から臼井弥枝君と神谷君、それから佐藤伊兵衛君来たる。佐藤君の方は、家を「東洋経済」に貸したいための話で、それを見に来たのだ。家族同伴。神谷君は小学校の校長先生だが、傑出した人だ。今度やめて安曇に帰る由。田舎の人は、まだ日本が勝つと確信している者が多いとのことである。そうであろう、判断する資料がないのだから。

九州南部および東部に敵艦上機約八百機来襲。

ドイツのルントシュテット元帥はアイゼンハワーに對し和平条件を申し込んだとの報あり。すなわちドイツは總ての条件を受諾するが、ただナチ政權の持續を条件とすというにあり。そして對ソ戰爭をなすために後援せよというのだそうだ。アイゼンハワーは無条件降伏以外は受付けずと返事をしたとの事。

三月十九日（月）

東洋經濟の評議員会に出^いず。

軍部では、まだここ六ヶ月間位は、米國軍の上陸作戦は絶対にできぬといっているそうだ。欧州大陸には英國があつたが、日本に対してはそれがない。比島は二十万ばかり要つたが、日本へは百万の軍隊が要ろう。一人に對し十六トンから二十トンの船腹を必要とするが、そんなに船がない。そこでまず支那に上陸するだろう。支那における日本兵は南からズンズンぬいてきて北支に集中する。そして満、北支、朝鮮を日本が固める。この交通路は、飛行機を遠方に持つて行かないのだから、防備出来る、南洋は自然放棄する——そんな風な考え方だそうだ。

石油は南方からはタンカーの一角（日本から送つた）ぐらいしか歸つて来ない。そこで砂糖からのアルコールと、松根油をとるのだそうだが、松根治は一トンをとるのに三百人の人数が要る。十万吨をとるのに

三千万人必要なわけで、しかもその釜を目下、山に設置しているという有様だ。米国では一トンの石油が十弗で、人間が二人分である。——ここからいうと日本の戦力は百五十分の一ということになる。

深川、本所の惨状は、聞けば聞くほど言語に絶するものあり。陛下昨日羅災地を御巡幸遊ばさる。日本は何故にこの惨状——婦女子、子供を爆撃せる事実を米国に訴えざるか。かれ等は焼いた後を機銃掃射をやつたとのことである。もつとも、日本も重慶、南京その他をやり、マニラについても讃められぬが、米国のやり方は非道許すべからず。臼井君の話しに、かれの使つていた男が徴用され、屍体取りかたづけに行つた。焼けて男だか女だか分らない。それ等を一万五千ばかり上野に穴を掘つて埋めたそうだ。

国民学校（初等）を除き、全国授業を停止すること昨日の閣議で決定。向う一ヶ年は学業は全部なくなつたのだ。今までのような学校なら、なくなつてもいいかも知れぬ。

小磯首相は議会で、空襲被害はできるだけ詳しく発表するといひながら、町も、被害数も、場所も発表しないといった。それでは詳しくも何でもない。この大被害の真相を知っている者が、一部官僚だけであるというに至つては、官僚政治の弊害極まりだ。これを根底から改造しなくては直るまい。だが日本人の傾向でそれができるか知ら？

三月二十日（火）

在宅して『経国』という雑誌の原稿を書く。題「戦時外交論」。

『毎日』三月二十日 小癩、又ビラを撒く〈門司発〉：
十八日の来襲の際に紙幣ビラをまいた。…

敵は盛んに宣伝ビラをまくようだ。これに対して、ただ聞くな、見るな、話すなと三猿主義をとっている。ドイツも同じだが、これでうまくいくか知ら。

戦時下政治の一現象——朝鮮、台湾、樺太に対し、貴院勅選議員朝鮮、台湾より十人以内、衆院に朝鮮二十三、台湾五人、樺太から貴院多額議員一、衆院三名を出すことに枢密院で御諮問、十七日決定。法案として議會へ。

一ケ年は選挙を一切停止。これまた法律化へ。

三月二十一日（水）

どの新聞も流言蜚語が盛んになったこと、その原因が政府が事態を発表しないことからきていることを書くようになった。『朝日』の本日の社説「民心の奥に要塞を築け」というのもそれだ。同社説には「赤飯とらつきようを食べば爆弾に当らない」という迷信が流行しているところある。「ドイツが前大戦において突如内部より崩壊したのも、政治的判断と現実感との欠如のために迫り来たる危険を認めることができなかったからである」といつているのはよほどの奮発だ。

i 底本では以下三行、「衆院三名」まで一字断下げしている。

今日、お昼のラジオで、硫黄島の勇士が、最高指揮官を先頭に玉碎したことを伝えた。敵自身の発表によっても確か二万近くの死傷者ありとのことで、日本軍がいかに奮闘したかがわかる。ああ。

この間、結婚した深井外務省事務官、借家を世話したのを恩にきて、お礼に来たる。いい青年だ。またいい奥様だ。チャンドラ・ボースに接近していたが、この人を非常に讃めている。こんな人が日本にいたら日本は救われるだろうともいう。よほど立派な人らしい。毎日新聞の論説の愚劣は今に始まったことではない。ユダヤ人といった形容で物事を決めてしまっている。ドイツが休戦を申し込んだことがデマだといって左の如く論じている。デマかも知れん。しかしその理由が小児病的でドイツの全くの宣伝通りだ。

『毎日』「社説」三月二十一日 謀略宣伝に没頭する敵

…休戦申し込みのデマはこれまで幾度かあった。従軍記者の伝える士気の高さ、スペインの一紙が伝える独軍の

勇敢から見てもつじつまが合はん。…独外務省筋の解釈「今や英米には厭戦気分が横溢し、国民の疲労はこれ以上の戦争努力に堪へざらんとしてゐるので、かゝるデマ報道が流布される」…「英国における厭戦気分は横溢は余りにも有名である」…もう五年半にもなる…「故に

戦争指導者共は国民の厭戦気分を防ぐためにあらゆる施策と工作とに没頭しつゝあるのである」…敵は焦っている…「焦燥にも拘はらず、武力によつて戦局を速かに終焉に導くことが出来ないとなれば、敵としては謀略宣伝の手段に訴へるのほかないではないか」…」

これが大体、日本の官僚が考えている敵の情勢だ。つまり敵は厭戦気分が溢れているというのである。「自由主義国」「個人主義国」は戦争できぬ。その開戦に至つた考え方が、いまなお残っているのである。

三月二十二日（木）

丸善でペリーの遠征記三冊を五百円で買う。以前は百五十円ばかりであつたのに。しかしやはり備えて置

かねばならぬものだから思い切つて買った。

晩に小瀧君のところに招かれて行く。弟、碩君^{せき}を土橋家に紹介したが、その打合せのためだ。すぎ焼など、この節としては非常な御馳走なり。

三月二十三日（金）

昨日以来、烈風吹く。こんな時B29が投弾せば大変なことになると安き思いなし。

硫黄島十七日夜半を以て通信たゆ。敵損害三万三千（我方発表）小磯首相曰く「吾人の必勝の信念には微塵も動揺を来さない」と。

『読売』三月二十二日 一人まで戦はん 国民総出動近く決定 小磯首相放送 …「私は率直に硫黄島の喪失が大東亜戦争の推移上重大なる転機を劃する痛恨極まりなき出来事である事を認めざるを得ない」…「元寇の役においてわが吉岐対馬は雲霞の如く押寄せる蒙古軍のために遂に敵手に歸した、しかし吉岐対馬の失陥はやがて」…「従つて硫黄島の喪失によつて吾人は必勝の信念には

微塵も動揺を来さない」……アメリカ軍の物量に精神力で如何に抵抗したとか、……「これ位の程度で勝ち得るならばそれはあまりに楽に過ぎる」と考へてゐるのである、」
……「全国民一緒になつてこの敵に対し」……

今日、鶴川村に鮎沢氏訪問。電車の混雑言語に絶す。予はスーツケース一つ持つて行つたが、そのため生死の巷に出入する程度の困苦をなむ。身体が斜になつたまま約一時間。――整理は全くなく、詰めこむままの自由競争だ。車体はますますいたみ、台数も減る。改善の見込み絶対になし。

春になつて初めての暖かさだ。――外にいと暑いくらい。石橋君、湛一君、宮川三郎君等と共に散歩す。寒かつたので梅と桜と一緒に咲く程度に、桜すでにくらむ。

強制家屋取壊し令発布。日本橋の丸善も四、五日中に立退く。東洋経済の木造建築取払い。また山内さんのところでも疎開命令を受く。

『朝日』三月二十二日 ……重要生産工場、官公庁街に空き地帯防火帯を作る、鉄道沿線も五十から百メートル疎開する……取り壊しは「軍隊、労務報国会員、学徒、工員、町会隣組員など数万人出動して取り壊しに当る」

『朝日』三月二十二日 敵の本土侵攻に完璧の用意 柴山陸軍次官 力強き言明 ……「先づこれを洋上において撃滅」……「敵に優る兵力と火力とをもつてこれを沿岸において撃滅する完璧の用意」……

【『日本産業経済』三月二十二日】 本土作戦の準備へ 築城・設営増強 陸相『軍事特別立法』説明 ……「敵を徹底的に粉碎するの好機を捉ふべき必勝の確信に燃え」……「築城その他緊要なる機構の整備をなすことを目的として」……土地建物物件などを管理・使用・収容する法律を整備……」

かくて本土防衛の準備着々進行中である。

今の問題は、敵の上陸作戦に対し、日本軍がどれだ

け積極的に抗戦し得るか――換言すれば武蔵野が、戦場と化するかどうか。鮎沢君などが疎開するのは、その可能性ありと考えるからだ。同時に、制空権制海権をとられて、果して反邀し得るかとの疑問も有力だ。近代戦においてはゲリラ戦の如きは実行不可能である。

ソ連外務省はソ土中立条約を廃棄すべくトルコに申込んだ。

『日本産業経済』三月二十三日 東部戦線 橋頭堡放棄

シュテツチン（ベルリン二十一日発同盟）：かくて守備

隊は南岸へ後退した

蘇土友好條約 蘇側破棄を發表（モスクワ二十一日発同盟）

：「最早新たな情勢に即応しなくなつたため重大な改善を加へることが必要となつた旨を」：

（ストックホルム二十一日発同盟）ロンドン來電 ソヴィ

エト政府は黒海から地中海へする権利を持ちたいと、：

このトルコに対する態度は、日ソ中立条約を示唆す

るものでもある。

【次の引用と同じか不詳】

「田中氏 首相は陸海軍一本にする考へはないか

首相 総理としての自分から答弁する限りでない」

上記は二十二日の衆院予算総会における田中貢代議士の質問に対する答弁だ。首相の「総理として自分から答弁する限りではない」とは奇妙だ。誰なら答弁出来るのか。それは統帥事項でもないのだ。

『朝日』三月二十三日 窪井義道『国民総武装の立法措

置如何、防衛計画の根本方針如何：』

「首相 国土防衛は統帥部で当然立案されてゐると思ふ、我々国民同胞は何時でも統帥部の計画に応じ得る体制に置き、生産増強に、陣地構築に、或は輸送に協力することが肝要である、：：：」

小磯首相が如何に統帥部に遠慮しているかが分る。

責任を転嫁しているのかも知れぬ。

三月二十四日（土）

小瀧君から電話あり。切符買えたから晩の汽車で松本に行くという。汽車の切符は軍、官用にのみ売られるもので、これを買うことは、貧乏人がダイヤモンドを買う程度の困難だ。後に聞くと「役人の出張」ということにしたのだとか。（罹災者は別として）

新宿の駅に汽車発車時間二時間半前に行くと、すでにプラットフォームには人間が一杯で身動きができぬ。皆な汽車の窓から入り込む。僕ら——小瀧彬君と僕とは幸いにして乗車したが、碩君が乗れず、窓から入る。手を洗う小さなスペースに六人と荷物が一杯置かれて居り、足が宙に浮いて動けず。午後八時から午前六時半まで、立ち通しで、その上全く一睡もせず。便所に人間が一杯這入る。予、反対するも聞かず。そのため婦人の如きは、便通を催おして腹が痛いというもの。また子供は大便を席でやるという状態だ。喧嘩口論は

起る。かかる惨めな交通機関は最初である。

同じく立ちつくした婦人の話しに、罹災者の証明を持つて、切符を買うのに二十一時間行列したということである。それから汽車に乗つて八、九時間立ち続けるから結局三十数時間立ち、更に明料から午后三時にバスが出るまで待ち、果してそれに乗れるかも不明だという。信州の家に帰るのに二昼夜以上、不眠不臥なわけである——でも、皆なそれが当然のように考えているようだ。

三月二十五日（日）

朝六時半過ぎ二十分計りの遅着で松本着。浅間の西石川に赴く。土橋からの申しこみあり。「こんなことはありませんが、幸い部屋が開いていたので……」とまづ女中が恩に着す。実は今朝、来ることを土橋に三つの方法で通知せんとした。小瀧君が外務省の電報局から至急報で打電。同じく碩君が各局を歩いて、築地とかで受つけてくれた。普通は、私信は受つけないのだ。

午後二時半頃打電したのが、朝の二時に到着したそう
だ。至急報が汽車の旅行より遅いのだ。僕の家では午
后三時から午前二時まで五、六分ごとに申しこまんとし
たが、その遠距離電話を申しこむ電話が出ないのであ
る。この方は、とうとう通じなかった。

東京はポカポカして彼岸の暖かさを示したが、松本
はまだ寒く、氷張る。一浴、一睡。

お昼に小瀧君兄弟を土橋に同道す。婿さんが花嫁候
補者のところに行くのは日本の習慣では可笑しいが、
宿屋でもお昼を出さず、料理屋でも食事が出ぬ。そこ
でやむを得ず、こうしたことにしたのだ。

見合い成功。両方共反対なく、晚餐。午後九時半頃
辞去せんとし、いつ結納を入れようかと相談すると、
今日が吉日だとの事。そこで直ちに結納を仮りに入れ
て手続き全部完了。午後一時に始まって午後十時まで
で、結婚の手続きが完了したのは、日本でも珍らしい
ケースであろう。――君は東京を引きあげ、松本に来
る話しも決定した。

三月二十六日（月）

どこでもお昼を食うところなし。また土橋家に赴く。
お昼といえ、小瀧君が西石川に米三合を渡し、握り
飯二つだけであつた。どこの宿屋でも、提供した米の
半分ぐらいいしか出さない由だ。僕等が西石川に宿るの
にも、土橋で米を出してくれたのである。いかなる仕
事にも米を要求す。米、米、米。

松本でも疎開をしている。この汽車の大混雑がほと
んど全部東京からの転出だ。地方の食物を買漁りイン
フレ起るべし。また家庭への強制的割当は家族主義を
根底からこわすものである。しかしすでにそれが始つ
ている。

青木花見の実家に赴く。その晩の話し。

一、小学校には兵隊が沢山宿つている。半分が授業で、
半分が兵舎だ。「決死隊」で、敵が上陸して来ると
直ちに、突進するというのだそうだ。家の近くを
訓練して歩いていた。

二、米の供出が激しいので百姓が自家用も残らない。

それに他でかせげば非常に儲かる。そこで小作人をやるものもなく、実家でも千坪ばかり返された田ができた。さらばとてそれを作ると、他のいい田から足して供出せねばならぬので、そこは不耕作地にするのだそうだ。かくて耕作地はドンドン減って食料は窮迫を上げて行っている。

三月二十七日（火）

松本駅を午前十時十九分発の汽車で帰京。混雑は依然たり。出入は汽車の窓口よりなし、鉄道員もそれを奨励している。汽車中の話ではたんすをかついで運んでいるものがありとのことだ。貨物として送り出せないのも、誰もかれも両手に余る荷物を持っている。それが混雑する理由だ。小瀧君と、保大という朋明の長男に持つて貰って帰る。帰ってみると中野君が本を整理していてくれる。疎開の準備が進行中なのだ。

三月二十八日（水）

二十五日に敵、沖縄、慶良間列島に上陸と発表。

警察の加納君来訪。自分の長男が飛行兵を志願して入営したが、青竹で打たれたことなどを話す。ソ連から休戦を日本に申し込んで、日本が聞かなければ開戦する、といった噂があるという。おそらくデマだろう。続いて岡村今朝良来たる。片岡の両親、鉄兵未亡人等を連れて田舎に転出するそうで、荷物は貨車で全部運んだ由。お別れである。

三月二十九日（木）

国際関係研究会あり。僕、辞意を表明したが受けられず、もつとも理事としては石橋、三井両君のみだった。「新鋭滲刺たる若き在郷軍人の皇國護持の熱情にこたえるため」満十七歳、十八歳の青年を必要に応じ招集し得るようにした——瞭がちょうど徴兵の適齢者である。

三井高維君の靴が破れていた。財閥の巨頭三井一家

の人も、衣食住が自由にならないのである。

ドイツは重大機に立った。英国の新聞はジャーマン・レジスタンス・クラブスド【German resistance collapsed ドイツの抵抗崩壊】と書き、タイムスだけがジャーマン・メーン・ライン・ブローケン【German main line broken】といっているようだ。もう旬日じゅんじつの生命らしい。その時、日本のリアクションは？

日本はどこまで抵抗する？それが現在のトピックだ。

『朝日』二月二十九日 街に村に義勇隊 南西諸島に敵上陸、…各地の「その進軍譜を聞かう」…「職場の竹槍薙刀隊…千葉県」…「伊豆では『突撃隊』」…「蘇る三多摩の伝統」…「日露勇士も決起（三島）」…「秋田の翼賛特攻隊」…

どこでも竹槍で訓練している。B29を見ても、まだ竹槍と柔道でやれると思うところが、日本精神であろ
うか。

沖縄県民は、「鉄砲がなければ竹槍でいこう、竹槍が折れたら唐手でいこう」と決意しているとの事（『朝日』二十九日）

本土に敵は上陸するか（戦争によつて）。それとも、それ以前にどうかなるか。

敵は沖縄に上陸して南方と本土の連絡を断とう。その結果、日本は北方の資源に頼るべく、北支、満州、朝鮮、本土を結ぶ線に頼ることになろう。これに対し敵は、これを遮断すべくいき対馬あるいは西南群島あたりに上陸するのではなからうか。

三月三十日（金）

「同盟通信」の富田君の話しに、和平問題について陸海軍の中でも意見が割れているとのことだ。海軍と、陸軍の航空隊方面では英国か、ソ連を通して和平工作をやろうといっているが、他の陸軍は絶対にこれを不可として抗戦説である。日本の如く中心権力がクラブ

i 底本では「corrupt」と見ている。「頹廢」

したところでは、軍部の内輪割れのみが、戦争の解決を可能ならしめる。上記の如き議論の対立があつたので、一時はまた二・二六事件の如きものが起りはしないかと危ぶまれた由。そこで小磯内閣も、強気でいくことになったそうだ。強硬説を主張すれば、その方には暗殺などがないので、当局者は常に強硬になるのだ。分らず屋は数からいえば少数だ。これを制圧する組織が必要で、ここに敵側でも「秘密結社」の禁圧というようなことをいい出す理由があるのである。日本の問題を外敵の手によつて解決せねばならぬのは何という遺憾であろう。

新政党の党首に南次郎陸軍大将決定。この愚劣な男が新しい政治運動の党首なのである！ 何か求めて政党を解体して、しかし周囲の事情はやはり陸軍大将を据えねばならぬ事態にあるのだ。

『読売』は海軍少将匠瑳少将の談話を掲載。この人ほど謬った観測をしている人はないのでに依然たりだ。

ヒステリー的に喚くのが新聞の常だが、それが近頃

は増してきた。二つの点に注意に値する。第一は帝国陸海軍に対する依然たる讃仰だ。第二は米国の競争目的が金儲けだという点だ。

『毎日』三月三十日 南西諸島決の好機 驕敵たゞ討つのみ 戦争投機の米に思ひ知らさん …「敵米の太平洋反攻以来、…「敵米の航空兵力とその傘の下を遮二無二押し進んで来る尤大な鉄量の前に碎け散つた」が…「世界いづれの国がかゝる大戦果を挙げ得ようか、わが帝国陸海軍にして初めてよく成し得る人力を絶する血戦死闘の賜物である、世界何れの国がかかる痛撃に耐え得るか、…「道義に反する敵の戦争目的は結局するところ戦争投資に外ならぬ、かゝる大損耗を喫してもただ日本を屈服せしめ得るならば戦後において投資に対する利潤は思ふ存分回収し得るとの皮算用に耽つて飽くなき物量攻勢を続けつゝある、」…「南西諸島の防壁こそは一億の総力を結集して守り抜くべき要衝である、」…」

金儲けがこの困難にたえさせるならば、金儲けもま

た偉大な人間生死を左右する原動力といわねばならぬ。

東京の大新聞の首脳部記者の頭脳はだいたいこの程度である。

教育の問題だ。

嶋中雄作君の家が強制疎開の命令を受けた由。電車の両側の家が、ドシドシつぶされ、その瓦やその他が破壊されている。なにしろ五日ぐらいの猶予期日しかないのです、丁寧によっている暇がない。全部打ちこわした。

戦争というものの「力」を思う。一晚の内に何十万户を焼きつくし、さらにその残ったものを一通の命令書で取りこわすのである。米国の戦後処分案を待たずに、日本はすでに日清戦役以前の資産状態にかえりつつある。

「戦争は文化の母なり」と軍部のパンフレットは宣伝した。それを批評してから我等は「非国民的」な取扱いを受けた。いまその言葉を繰返してみろ！ 戦争は果して文化の母であるか？

『「毎日」三月三十日 乗るな謀略の魔手（福岡発）…執拗・弱点に食入る 偽札や日の丸宣伝文…低級なビラの例…「十円札の模様の裏に宣伝文を印刷したもの」…「病人、死人の累々たるグロテスクな図の上に」…「日の丸の裏に和平宣伝を印刷したもの」……」

右は『毎日』（三十日）の記事である。『朝日』にも同じ記事あり。出処が軍部なるは元より明らかだ。「正確無比なる大本営発表」といった文字が『朝日』には見える。

三月三十一日（土）

『オリエンタル・エコノミスト』に空爆の惨状を書いて、米人に警告する一文を書く。

『「朝日」「鉄箒」三月三十一日 防弾らつきよう …空襲があるが「禍は福に転じうるはず」…帝都災害は「然し民衆に果して責任なしとするか。」…「先日の被害地区

から、らつきようを食へば爆弾に当らぬといふ迷信が流布したと聞いて驚いた。これでは未開野蛮人を距ること果して何歩か。」……「また罹災者の会話によると平常無私無欲でひとに親切だった人が助かり、心がけの悪い人がひどい目にあつて苦しむといふ結論に導いて、……そこに神の加護を待んでゐる徒輩の何と多いことか」……」

国民の無知は想像以上である。

浅草観音は大震災にも焼けなかつたし、効驗あらたかだから、今度も焼けまいと考えて、観音に駆けつけたものが多かつた。それがその辺で死んだものが多かつた一原因だつたという。

経済クラブにいる一婦人は、上野付近にいたが、その近くに、何とか神社がある。他に勧められても、この神社の傍だから大丈夫と考えて、荷物すらも送らなかつた。それで全焼したそうだ。

この投書欄にある如き迷信は、しばしば聞くところだ。国民層の常識はこの程度である。

近頃の電話は、どこにかけても通せず。電話は受け

つけず。交通機関は半麻痺状態だ。そのようやく通じた電話によつて、嶋中君と会談。同君の牛込の新居も焼失したことを知る。同君ほど戦争の影響を受けたものも多くあるまい。近く疎開の由。

アルゼンチン共和国、三月二十九日に日、独に対し宣戦布告。

米国が海軍建造を八五%ドロップしたのは、英国艦隊が太平洋に出現しているからと米海軍長官ジェームス・ファレスタル発表。味方は削減の理由になり、敵と見ば倍加せねばならぬ。

四月一日（日）

正午少し前、中野正君、手助けに来られ、「年表」の副本を整理してくれる。

松本丞治氏来宅さる。孫が数人、家庭にいるが、どこかに疎開させねばならぬ。ただし鎌倉の別荘も、御殿場の別荘も、取りあげられる状態にあり。使うことができぬ。軽井沢に貸してくれる別荘があるが、食料に困るとの他の忠告あり。これも駄目。新潟にでも疎開させんかと苦慮中なりという。

それから時局談あり。

一、松本氏は戦争終結として日支事変以前の状態に復帰する程度でよからんといった。僕は、とてもそんな程度ではすむまいといった。

二、憲法に手を触れなくてはなるまいが、宣戦講和について議会の協賛を経ることを必要とする項目を加える程度を以て足れりとするだろうといった。これまた樂觀的である。

三、沖縄島方面で、敵に大打撃を与え、それで和平の時機を狙うのがいいといった。僕はそのことは望ましいが、敵が和平を望むに至る程打撃を与え得るかは疑問だといった。ただし日本国民をして「駒」はすでに無しという事実を認識せしめることは必要だと僕は同じた。

四、松本氏は戦争は今秋ぐらいまでで、それ以上は続くまいといった。僕は、もう少し長くなるだろうといった。関東方面で上陸敵兵を邀^{むか}えて激戦を交えるようなことはあるまいという点では一致した。その頃には当方に、それほどな戦力はあるまいというのである。

五、松本氏は、日本人は優しい国民であるから、大した乱暴はしないという。僕は日本人は優しくないという。支那その他における日本人の行動が、それを示すといった。

六、戦争責任者として東條、近衛、松岡、木戸の四人は免がれぬと松本博士はいう。

松本博士曰く「考えたつて仕方がない。近頃は小説ばかり読んでいる。デッケンスの本を読んでいるが、とても面白い」と。同氏によれば斎藤内閣の商工大臣として、次の内閣に居残つてくれと交渉があつたが断つた。また宇垣の流産内閣の時に、内務大臣を交渉されたが、司法ならばと受諾したそうだ。こういう有為の才を、ただ小説を読ましておいては勿体ない。が、それが現状だ。

東條※「井舟+壽」君来訪。銀座で真先に店を焼かれた一人だ。大きな靴工場が焼かれたもの多く、おそらくは陸軍への供給も間にあうまいという。ゴムがまるで無く、それでも皮はあると。郷里の安曇に疎開したそうだ。

松本博士は御殿場と鎌倉に別荘があるが、鎌倉の別荘は軍にとられ、前者も使えざることば前記した。電車線路の両側の家は、無惨に打ち倒され、父祖伝来の財産も官憲の命令一下、没収されている。こんな時代は、また決してあり得ないであらう。

四月二日（月）

荷物を軽井沢に送り出すのに九箇しか受け付けなかったの事だから、水野君に相談す。

昨夜Bに五十機来襲。所沢方面を空襲した。

鮎沢君の話では、同君の方面に落下した米兵は竹槍が何かで突殺してしまつたそうだ。同君の知人方に、錆びた槍があるが、それを各方面で買ったがつて交渉してくる。何にするかというとい異口同音に「竹槍よりよからう」と。

新政党の党首に、まず平沼に交渉したが、総動員本部といったことを交渉されて断り、次は広田が断り、それから宇垣は軍部が反対し、さらに小磯首相に交渉し、小磯は受けたが、翼政出身大臣が「辞職せねば困る」で破談になり、結局小磯の口添えで南になったのだそう。蟬山君は入会せず、松本博士は南の關係（かつて最高顧問に招聘され、かつ、親戚のものの仲人になつた）で承諾。

敵の宣伝には日本側ではよほど、気を使っている。

朝鮮、台湾住民が議員（貴、衆）を出し得ることになり、詔書渙発。

『中部日本』三月二十七日 敵機の投下物・必ず届出よ

重ねて注意・怠れば嚴罰 ……「投下物は万年筆、鉛筆、菓子類、偽造紙幣など獸性発揮の恐れあるため今後いかなる場合にもあくまで皇国民たる誇りを堅持するやう愛国心に慫へ指導主義で臨む方針である、」……」

東良三君訪問さる。日本人には全く愛想をつかしたといっている。かれは長く米国人と取引してきたが、日本人殊に軍部の腐敗は驚くべしと慨嘆している。両方を知った者が、日本人を攻撃するのでは、日本が駄目な証拠だ。

上陸軍に対し用意着々進行。

『中部日本』三月二十七日 科学兵器も大量生産 上陸軍必滅に自信 本土決戦態勢 急速完整を要望 ……「本

土要塞化、物心両面を通ずる本土決戦態勢の確立が喫緊の急務とされる」……「（一）土地、建物等を国家が管理、使用、収容し（二）移転、除却、焼却迷彩を命じ或は新改、増築、移転、除去等を禁止し（三）住居の移転、禁止、制限などを命じ（四）個人、団体に労力提供を命ずる等」……「国民総武装の構想」……「国民勤労動員令の運用により、国民勤労力総出動を期す」……」

米敵、三十一日朝、神山島、前島（慶良間列島）に、四月一日、沖繩本島に上陸す。

陸軍の中に、沖繩を決戦場とする説と、主力を本土防禦のためにとつて置く説との二つある由。而して沖繩作戦は陸軍だけでやつて居り、海軍はやつて居らぬと。最後まで陸海は対立。

東京の空襲による被害は百億を算するだろうという。この方面にあつた銀行の帳簿も、金も焼失し、全く整理がつかない。預金は忘れないが、借りたものは返す氣遣いはない。銀行の帳尻は国家が、これを負担せざるを得ない。かくて通貨の膨脹は必至だ。すでに先月

末の兌換券発行高は百九十億円で、加速度的に増えて行く。物価は砂糖は一貫目六百円といわれ、米一俵同じく六百円といわる。支那と同じ程度のインフレ必至。

駅の近くで「ピアノを百五十円で売ります」といつている女の子がある。「安い」と聞いてみると、その日の午后三時までに取りに来なくては駄目だというのである。運輸機関がなくなった現在を語るもの。

四月三日（火）

神武天皇祭だが、全くそんな気がせず。朝、皐。

佐藤伊兵衛君来宅、先頃の話により「東洋経済」が、我家と皐を一ヶ月二百五十円で借りることに決定。

かねての約により長谷川如是閑氏を訪問。書籍を疎開させたしとのことだ。実にいい本が約五千冊あり。これを焼いては大変で、そのための相談だ。馬場恒吾氏も来たる。暫らく見ない内に、いかにもおとろえが見える。風邪をひいたとのことだが、いたいたし気に見ゆ。長谷川、馬場両氏の如きは、天下稀に見る清廉

潔白の士である。戦争の罪悪は、こうした清土が困り、悪人が思う様儲けて天下を我物顔に振舞うことにある。馬場氏は夫人を信州に送ること、自身は東京に止まるという。

長谷川氏の宅に軸や絵画あり。弟にして隠れたる日本画家大野静方という人の画帳にて、またその師、輝方及び清方、しょうえん等の画、沢山あり。これを売れば数万円の価値あらん。然るに如是閑は、それが弟のものなる故を以て、どこかに寄付するため、すでに関口泰君に頼んだという。こんな真面目な人が、世に沢山あるうか。しかも自身は、書籍を運ぶのに、家を売らなければ金がないのだといっているのだ。

隣組が、如是閑の宅が、闇を買いに出ないので、困るだろうとて、今までは、いろいろ持つて来てくれたが、その人々が田舎に行つて、知人が無くなつて困ると笑いながらいう。

馬場氏は、戦争が八月頃すむだろうという。松本博士も、そうした見透しであつた。長谷川氏はそうもい

くまいという。僕も、勝敗の数は明らかだが、もう一年ぐらいいは続くだろうといった。馬場君は、その善人性の故に、いつでも、問題を樂觀する。

四月四日（水）

本日、未明の敵の空襲こそ、生れて始めての壯観であつた。今まで敵の空襲は、都の北東その他であつて、予はそれを見し得なかつた。今日のものは自宅より俯視し得るところ——京浜間の工場を爆撃したのであつて、近代戦争の破壊力をこの眼を以てみる事ができたのである。

一家、空襲警報で夢がさめた。ドシンと地震があつた。それが地震か、爆弾か、今に至るも明らかでない。服装を整えて外に出る。月明なるも、各方面に爆弾投下されて炎あがる。鶴見、川崎方面の工場数個に亘る。

たちまち照明弾二箇投下されて、四辺昼の如く明るくなる。爆弾は、たえず猛烈なる音して炸裂す。空はたちまち夕空の如く紅くなれり。

敵の飛行機は今日は一つも見えず、従つてまた味方の活動の様も見えず。ただ見えるのは煙火の如き、炎の飛ぶ光景のみ。時々稲光の如き閃光が輝く。敵の爆弾か、それとも味方の高射砲か。爆撃は午前一時半頃より始まり、午前五時以前に至つてやむ。その後も制限爆弾による時々爆発あり。

朝、電車は池上線も、目蒲線も通ぜず、電話も通じない。清明の話しでは田園調布の学校がやられ、その隣りの電話局も故障を受けたらうと。

ラジオは報じて、今晚敵B29の来襲による軍事工場の被害はほとんど無かつたと。空襲の実状を見た数十万の者は当局者の発表を信ずまい。戦争は、最も責任ある地位のものをして、途方もなく嘘をつかせるものである。

『読売』の敵の国内事情を解説した中に、米国には厭戦気分が漲っている旨が書いてある。——最初からの対米観である。

笠原清明の話し——親戚の軍医が訓練を受けている

が、その教官の訓示に曰く、海の外では駄目である。敵を静岡方面か、九州方面にでも誘いこんで、これを挟撃するのがいいと。軍人達は犠牲の価を知らず、ほんとにそう考えているようだ。

軍の情報官の談だと責任ある編輯人曰く、いま米軍に本土に來られては、まだ少し具合が悪い。そこで米軍が支那大陸に行くように書いてくれと。日本人を対手にして、為すがままにさせていると、世界どこの人間でも、そうなると信じている。

軍人の考え方は、相対的、機動的でないから、総合的に物を推論することができぬ。日本本土では対手をやっつけることができると、まだ彼等は信じているのだが、その時に日本の飛行機も、軍艦もなく、また敵の武器が一段の工次を、こらして、絶對的に優勢だという事実を知らぬのである。日本人全体の頭が一体にそうであつて、それを直すのには教育の一変以外にはない。

清明の親戚の軍人の話しに、かれの戦友が沖繩から

飛んできた。その一週間ばかり前に、彼等が沖繩上陸のための新兵器を持つて來ることが分つたので、それを本省に持つて來て研究するためであつたそうだ。來京三、四日の後、沖繩に敵が上陸したので帰れず、生命が助かつたと。その話した人の曰く、敵は沖繩という最爾さいじ【取るに足らぬ】たる島にも、一々新兵器を發明してやつて來るのだから、とても叶わぬと。

四月五日（木）

國際關係研究会あり、太田三郎君の談話あり。ソ連を中心にする研究である。頭はいい人だが、傲慢マカマカで、独断的で、威圧的である。ただ意志と体力が強いようだから、これで押し通し、大をなし得るかも知れぬ。

小磯内閣総辭職し、鈴木貫太郎に大命下る。正午に經濟クラブに行くと、すでに後繼内閣首班に鈴木が押されるだろうと噂うわさされていた。太田君は鈴木は一億玉碎祖の旗頭はたからなりという。僕が、かねて聞いているところではそうではなく、且つ、重臣の空氣からいつて、

今頃、そうした人を出す筈なしと考えられる。鈴木文史朗がかつて鈴木に会見し、非常に感服していたのを覚えていた。かれはガツガツの右翼派に非ず、リベラルな誠忠の士だといわれていた。ただ、果して総理大臣として、然るかどうかは、事実によつてみるの外なし。「大将」といった看板が、人物を仮装せしめるものだからだ。

新潟知事の町村君が富山で話したのが想い出される。かれは確か鈴木秘書かなにかやつたが、二・二六事件の後に、海軍士官もこれに関係があったと聞いて、海軍がこんな風に政治策謀に没頭しては国がつぶれると、そこで末次とか、真崎とかいう連中を誡首せしめたのだそう。また、いつか潜水艦がトッポ・ヘビーの故に沈んだ時に、その報告に接したかれは「乗組員がどんな状態で死んだか」を調べさせた。全員ことごとく持場を死守していたと報告された。かれは、「それで安心した。その事実が分れば、潜水艦など何隻沈んでも惜しくない」といったという。そういう話しから見ても、

かれは誠実の士であることは事実のようだ。問題は、どれだけ政治的見識あるかだ。

地方は総て一紙になり、上記のものが配達さる。東京も一紙ずつ配達。

中部日

読売報知
毎日新聞

本新聞

朝日新聞

【右の様な形式で新聞の題字で下部には発行所等記載】

『朝日』四月五日 流言は自己謀略 警視庁から都民に反省を：空襲での新たな流言、「某重要工場の技師がスパイの嫌疑で挙げられたとか、某省の役人が災害情報を故に密通してゐたとか」：尾ひれがついて「ある重役は私宅をスパイの巣窟に提供してゐたとか……『ある』はいつか実在の名士の名となり、風説は次第に具体性を帯びてくる」：失火は自己爆撃云々、妄言に惑わされる云々……

以上は『朝日』（五日）の記事だ。戦況その他の発表不充分なことを表裏して、種々の投書やデマが横溢し

ているであろう。そしておそらくは無実の者が、迷惑を蘇つたものが随分あろう。客観的な事実と、希望とを取り交ぜる癖は、今までも随分多いのである。

『読売』四月四日 沖繩決戦 維新前夜の歴史に偲ぶ ……
薩英戦争、馬関戦争でも米英とぶつかった、鹿児島湾では「折しも孝明天皇が御祈念遊ばされた如く暴風雨は湾内に吹き募り薩摩の軍勢は老若男女をふくめて一体となり」敗走させた、…アメリカの侵略意図はペリーから始まり云々…「だから米英と日本が最初に砲門を開いた薩英、馬関のときを緒戦とし、日本が彼らの属国化を拒否する限り、大東亜戦争は必然の運命であつたのだ。」…

大東亜戦争に導いた民間学者で最たるものが二人ある。徳富蘇峰と秋山謙蔵だ。この二人が在野戦争責任者だ。『読売』は、まだこれをついでいる。

『中部日本』『社説』三月二十三日 戦勝の則として攻撃に転ず可し ……「常に真相に立脚して対策を明示し、率

昭和二十年四月

ゐる者と率ゐられる者との心が、一つの目的に融け込むやうに指導しなければならない。」…「凡そ防禦は戦争に勝つ所以の作戦ではない。それは実に攻撃を行ふ為の準備作戦に外ならないのだ。故に古来何千を算する大小の戦争に於て、防禦に終始して勝利を得た例は絶無といつて差支へない。」…「敵が本土に上陸し来らば、といふのは敵の行動を前提とするものだ。自分の努力を前提とする作戦でなければ完全なる攻撃作戦は望まれない。吾等は敢ていふ。国民は大日本が大反撃を実行し得るだけの兵器を造り得ないものか何うか、最後の試みに決死邁進しようではないか。」…

伊藤君の筆らしい。敵の上陸を俟つ戦略の愚をついて遺憾なし。

『出典不詳』米海軍作戦部長の年次報告 目標は日本の心臓 硫黄島に二十八万を動員（リスボン三月二十七日発）
ワシントン来電 太平洋域で「七十二回の作戦行動…」、
「潜水艦隊の協力…」、「太平洋戦域…」、「二方面から進

攻…濠州から北へ、ハワイから西へ…」、「一ヶ年の作戦経過…サイパン等を抑え他のマリアナ諸島を無力化…六月フィリピン海戦…」、「海陸協力作戦…協力の妙で相次ぐ上陸作戦を成功…」、「硫黄島作戦…海軍が硫黄島に上陸させた海兵隊の兵力は六万で、海軍がこの作戦に動員した艦艇数は八百隻兵員二十二万に達したが果せる哉同島における戦は熾烈且つ血腥きものであった、…」、「太平洋戦の前途遼遠…日本の心臓部に攻撃を加へる基地を獲得してゐる…」【読売報知3/29に近似した記事】

【『出典不詳』米艦艇損害小出し発表（ヘリスボン二十七日発同盟）ワシントン米電「一九四四年十月損害四隻、撃破五隻」、「一九四四年十月一九日レイテ沖大破一」、「二〇日レイテ沖大破一」】

四月六日（金）

どの新聞も「国務と統帥の吻合」ということを後継内閣に希望している。

まず公式の発表は左の如し。

【『朝日新聞四月六日』情報局発表（四月五日午後七時）時局の重大性に鑑み更に強力なる内閣の出現を冀ひ、現内閣は茲に総辞職することとし、小磯内閣総理大臣は閣僚の辞表を取り纏め、本日之を閣下に捧呈せり】【他紙にも同じ文が載ったであろう】

内情として『朝日』の報ずるところは

【『朝日』四月六日 統帥・国務の吻合等 次期内閣に期待 小磯内閣総辞職の経緯 …八ヶ月半難局だった
が「その体験からこの際、さらに統帥と国務、前線と統後を一体化するの必要性を痛感してあらゆる努力を続けた結果、意のごとくならずして総辞職を行つたものである」】

【『朝日』社説四月六日 戦時の政変 …沖縄戦の最中政変とは「痛恨に耐えない」…「申訳がないといふだけでは、実に申訳のないことばかりである。」…「戦時宰相に望むところは、まさに危機感の痛烈なること、それに基づき

なさんと欲する明瞭な一目標をもつこと、」…

『読売』『社説』四月六日 敵前の政局更新 …「この時こそ一切の行きがかりは放擲すべき時だ。」…「強力内閣の出現を冀い」敵前政局の更新に直面した以上、政務の渋滞分秒を許されぬ」…「新内閣は一億総突撃態勢を、急速強靱に整備して、難局を突破し得る実力内閣の実体を具備すべきである。」…

『読売』四月六日 陸海軍の作戦一体化 …「作戦面に於ける陸海軍の一体化並びに統帥と国務の完全なる吻合調整である」…小磯内閣が苦勞したのである云々…「生産行政の一元化」…」

『毎日』『社説』四月六日 政戦一致を開拓 小磯内閣八ヶ月の業績 「政戦吻合に新構想…最高戦争指導会議の設置…」、「在任八ヶ月の業績…」、「国民総力結集の運動…」、「鮮台同胞政治処遇…選挙法改正…」、「大日本政治会」結成…翼賛政治会の解散」、「国民総武装態勢の確立…」

イテ、ルソンと敗けたが国民総武装態勢強化はした」…「強力内閣実現への一階梯であつた」

「政変と国民の願望」…「首相の力如何は戦の勝敗に最大の影響を及ぼす。」…「政治と統帥の緊密化、政戦両略の一致といふ点については、」前々内閣から…」

『毎日』『硯滴』四月六日 …「強力の自信を失つた小磯内閣が去るのは、」当然、…「下り坂にある戦局を承知の上で、重責を引受けた内閣は果して如何なる成算があつたのか知らぬが、その成算のあまりに根拠がなかつたことは何とも申訳がない次第だつた」…」

『読売』と『毎日』の社説は愚劣だ。ただいずれも政治と統帥の緊密化を説くのは同じ。

いずれも社論的記事（近頃の新聞の特徴だ）に政治と統帥の吻合を要望している。

『読売』四月六日 武人の典型 鈴木貫太郎大将の略歴 …「本年七十九歳の高齢ではあるが、その元氣は壯者を

凌ぐものがあり」…」

四月七日（土）

『日本産業経済』四月七日 『日ソ中立条約』不延長 モ
ロトフ外相、佐藤大使に通告 …「今直ちに廃棄するこ
とを意味するものでなく単に期限満了後延長せざる旨の
意志表示」…

独ソ戦の有勢転回 不延長通知の根本理由 …予想され
たことであつたが、「独蘇戦が最近著しく蘇聯に有利に
転じたことにより」後方の安全を図る必要がなくなつた。
ソ聯側発表（モスクワ五日発同盟）タス通信社は、調印
當時とは情勢が根本的に変わった、条約に則つて不延期
を「通達」

五日は、ちょうど、小磯内閣が総辞職し、鈴木大将
に大命が下つた日である。

鈴木大将は誠忠の士のような。しかし手許に大臣候
補者がなく、狭い範囲からの選任である。ろくなもの

が集まる訳はない。

歴代内閣四十四代、その内軍人内閣十八人。（同一人
をふくむ）

明治時代内閣十四、その内軍人首相四人（同一人を
ふくむ）

大正時代内閣十、その内軍人首相五人
昭和時代内閣十六、その内軍人首相九人（但し田中
は政友会総裁）

大将ならずんば首相になり得ない組織が、大東亜戦
争の最後まで続いたのを知るべし、そしてそれがいか
に不自然であるかが分るはずだ。

日ソ中立条約不延長に対して、各紙とも悪声一つ放
つものがなく極端なレザヴ【reserve 見合わせ】だ。外
務省の方針によつて然るのだが、元来ならば「ロシア
討つべし」といった議論が飛び出るところだ。

田村幸策君の話し——日本がソ連と近づけば、米国
はやキモキして日本に手をのべてくる。また日本が米
国と平和的工作でもやれば、ソ連は、日本の御機嫌を

とつて来る。そういう考え方が、日本人知識階級に非常に多い、と。その通りだ。日本は、国際関係を見るのに極めて勢力均衡的で、それが特に右翼や軍人に多い。リアリスチックではなしに、かえって自己独断的である。

鈴木大将は、本日は一日考えて、夕刻ようやく何等かの決定をみたようだ。

B 20、名古屋に百五十機、関東へ百三十機来たる。大本営発表は例によって曰く「被害僅少」と。

今日は源川の居った家に移るため掃除その他、一日を費す。

四月八日（日）

内閣の顔触れが昨夜決定、発表された。要するに「義理」を各方面に果たしたという格好だ。組閣の知恵袋は岡田啓介大将で、その関係から、その婿の迫水久常（ト）（大蔵省銀行保険局長）を参謀とし、結局書記官長にした。平沼の義理を立ててその乾分の太田耕造を文相に

持つて来た。大日本政治会（唯一の政治団体）から岡田と桜井をとった。後は迫水の友人や、自身の海軍関係の後輩だ。

外相の東郷茂徳は軽井沢に居つて間にあわなかったので一緒に発表されなかった。この人選は悪くない。誰か鹿児島人は若い時には平凡だが、老人になつてよくなる人があるといった。東郷はその一人である。小日山直登は満州から上京しつつある。

その構成は雑多だ。しかし依然として右翼的であり、いわゆる革新的である。つまりフォーカスが合わない。そこが日本を代表する。

鈴木貫太郎首相の第一声左の如し。

【出典不詳】「戦局危急を極むるの秋に当り揣らずも内閣組織の天命を拝しまして」：「今は国民一億の総てが既往の拘泥を一掃して尽く光榮ある国体防衛の御盾たるべき時であります、私は固より老軀を国民諸君の最前列に埋める覚悟で国政の処理に当ります、諸君も亦私の屍を

踏み越えて起つ勇氣を以て新たな戦力を発揚し、
俱に宸襟を安んじ」……

鈴木大将の誠実は疑えず。ただ誠実尽忠だけでは政治は行えぬ。

大河が落下せんとして、まだ渦を巻いているといった形ちだ。この内閣では何もできぬ。時勢に押されて、適當の時期まで待つだけだ。

陸軍に総軍司令官ができたが、これに杉山元帥と畑元帥の二人が任命された。二人が総司令官——不思議なことだ。意見が異なつたらどうするんだろう。(もつとも東西に一人ずつの司令官を置くというのかも知れない)

【『日本産業経済』四月八日】総軍司令部を新設 杉山、畑両元帥親補 航空総軍司令官に河辺大将：「今般本土防衛強化の爲新に総軍司令部及航空総軍司令部設置せられ元帥陸軍大将杉山元及同畑俊六は夫々総軍司令官に、」……

国土防衛態勢強化：「本土の空地両面に亘る鉄桶の邀撃 布陣を完璧ならしめるに至つた」……

教育總監に土肥原大将 参謀次長に河辺虎四郎中将……

外務省の深井君来たり。昨日あたりまで省では広田が外相になるといつていたそうだ。

四月九日(月)

鈴木首相は、「政治は元来嫌いだ」と新聞記者にいつた。この政治の嫌いな海軍大将を引き出さねばならぬところに日本の現状がある。

【『日本産業経済』四月九日 十対三は予ての覚悟 断乎戦

ひ抜くのみ 鈴木首相 必勝の決意表明 ……

鈴木首相：日露戦争と同じで「決して悲観するには及ばぬと思ふ」、……「自分は元来政治にはずぶの素人で一介の武弁に過ぎぬ、」、……「戦には負けて勝つ手もあるのである」「徳川家康は明かに三方ヶ原で武田信玄に負けて勝つてゐる、」……」

蟬山君の話しでは重光に一応留任の勧告があつたが、重光はこれを拒絶したといわれる。

或人はこれを身代り内閣といった。広瀬蔵相は勝田主計の婿さんである。重臣が出る代りにその第二世を出したのである。『毎日』の報道によれば、小磯が現職に復帰して陸相になろうとしたが陸軍が反対したとのことだ。

ベルリンの外務省スポークスマンは「日本の政変が日ソ中立条約の廃棄通告と連関があるかどうか知らぬ」といつている。米国あたりではむろんこれと関係ありと放送している。

『『朝日』『神風賦』四月九日 日ソ中立条約の件が政変の因という「敵のデマ放送のことを開くにつけ」……』

蟬山君は我等と同様に国家を憂えているのは重臣だけであるといった。したがってこれを制度化して、軍

部に対せしむべしといっている。僕は会議政治は責任の所在が不明だから、会議によって首相を選ぶ如きは不可だといった。

沖縄においては日本の連合艦隊が出動。最後に奮闘したそうだ。敵の放送によれば、日本の四万五千トン級の戦艦を撃沈したとすることで、これは日本でも認めている。

乾精末君来たり。予のダンバートン・オークス案批判を放送したしとのこと承諾す。外務、情報局、放送局、同盟通信が一緒になって、桑港^{サンフランシスコ}会議に対する批判を放送するという。石橋君のものも放送。賀川豊彦君も放送するという。

四月十日（火）

戦争下に今日ほどインテリの没落を感じたことはない。——島田（丸通）の受諾により、荷物を三十個送ることになって、本日二人の荷造り人夫来たる。昨日、

i 大和は7万トン級かと。

大工に頼んで、箱の蓋その他はことごとく整えて、ただ荷造りをするだけにした。

正午、日本外交史研究会のために、信夫淳平博士の日露戦争当時の外交について聞いた。午后五時に帰って来ると、ちょうど荷造りが終っていた。代金を請求するのを聞くと二百二十円だという。すなわち一個、十七円五十銭だそうだ。これは材量は全部当方で出していることである。そうすれば一日、彼等の日給は百十円である。それが午前十時より午后四時半の間で、その間にお酒を出したり、お昼を出したりした。一時間当りの、彼等の賃金は二十円だ。信夫博士のお礼は五十円である。帝国学士院会員で、日本の最も傑出した学者の一日のお礼が五十円なのだ。それも毎日あるわけではなく、たまの依頼である。我等インテリの労働賃金は一日、最高五十円である。これが現在の知識階級と、労働人夫との比較なのだ。我等の収入はますます減少し、逆に労働者の収入は天井の如く高くなる。

「この国民は何という順柔な国民だろう」と植原悦

二郎氏がいえば、信夫博士、永井松三氏もこれに和す。その意は、強制立退で、家を滅茶苦茶にこわされて、それでも黙っているという意味だ。実際、電車から、その両側を見れば、住宅を滅茶苦茶に破壊している。まるで空襲の後と同じだ。壁をとって、縄をつけ、引き倒すのである。瓦など、すっかりこわされている。この資材の不足の時に畳や陶器類等四散して、見るにたえないものがある。植原氏の話しでは、いつかその主任技師が交詢社での話しに、土地は陛下のものであり、国策からこわすのに何の遠慮もなくドシドシやるといった。植原氏は聞くにたえず、中座したとのことである。

机の上で図をひいたので、耐火建物のあるところを取りこわし、木造家屋のあるところを取り残している。その一つの例が――平川君が来ての話に武藤局長の家でとても立派なものを戦前に建てた。それを取り潰してしまった。署長が来て、自分達に何等相談しなかったので、こういうことになった。自分達に相談すれば、

やり方があったといったそうだ。

何でも軍が東京に飛行滑走路をつくるために、大きな道路を造るのだそうだ。戦争というものは、個人の権利もなにも、全く認めない。

今日の雨で取りこわした後がぬれ、畳などが散乱している。今朝の新聞に、その取りこわしたものを個人に売り渡すことに決したとあるが、今まではそれすらもしなかった。しかも運搬の方法がないから、一方に防空壕も造る資材もないのに、他方にそういう不用なものが堆積している。なぜ隣組にでも利用させないのか。

官僚と軍人の政治というのが、こうも日本を滅茶にさせてしまったのだ。ああ。

四月十一日（水）

字梶君来たり、著書原稿を整理す。同君は細心で極めていいアシスタントだ。日本外交史研究会の事務を托した。

東郷茂徳外相は左の如き「抱負」を新聞記者に語った。内容は極めて形式的である。

『読売』四月十一日 東郷新外相抱負を語る …この戦争は「自衛のため已むなく干戈に訴へたのである、此点は偶々爾来敵側の発表した文書等において彼等自らの不用意の間に告白してある所である」…一方「互恵平等の基礎に立つ万邦親和の実現にあり、大東亜諸国家諸民族の解放も亦要するに茲に由来する次第である、」…」

一、重光外相の「大東亜宣言」に触れない。

二、『朝日』は社説で東郷外相に期待し、重光外交の批判に始まらねばならぬことをいつている。

僕は最後まで重光外相に人間的なものを発見せず、また政治的偉大性といったものを感じず、単に事務官僚としか考えなかった。僕がジャポニカスとして働いていたことを知りながら高柳君のみを対手としたといった事実が、僕に多少の偏見を与えたかも知れぬ。それでも差支えない。僕等や蜷山君等に、そうした感

じを与えることが官僚式であることを示すものだからだ。しかしそうした感じをぬきに、公平に判断して、僕は彼の外交が、優れている理由を発見し得なかった。

近頃僕は下らない本を買う。大東亜戦争下にいかに下劣な刊行物が横行していたかを考証せんがためだ。しかし最も不愉快な仕事だ。こんな書籍に書棚を貸せるのは嫌だ。乞食を奥座敷に寝せるような気がする。

『中部日本』四月八日 鈴木貫太郎大将（下）木村 毅
兇弾の前に堂々屹立 ……山本五十六元帥が師事してゐた先輩が鈴木大将、…「問題は、果してこの人に政治的手腕があるかどうかだが、」…「宮中と民草との間が、急に隔てが一つ取れたやうな氣」…前々内閣「の欠いてゐたものがこの内閣で充たされるやうな期待がもてる」

四月十二日（木）

空襲警報発令。一度びこれが発令されると電車が止まり何事もできぬ。これだけで日本の生産が低下する

こと必至だ。

深井君と共に鮎沢君方に赴く。露子さんを誰かに紹介せんものと深井君の希望に出ず。朝吹英二の孫という人あり。啓明学園を教えて居り、いつかの僕の講演を聞いたという。大変な御馳走である。西洋に居った人の客扱いは実に気持ちがいい。

小日山直登氏（満鉄総裁）運輸通信相に就任。国務大臣に安井藤治という陸軍中将就任。阿南陸相の同級の親友だというだけであるらしい。

真面目なる明治史研究家菊田貞雄君（ふ）逝去。『征韓論』の著者である。大熊真君を失い、またこの真面目な学者を失う。予、自身としても落胆す。先頃手付金として三百円を送ったのが役に立たなかつた。

『朝日』四月十二日 武人宰相鈴木貫太郎大将 必勝政治の求める人 各界指導者この人に続け ……なじみの薄い人で国民も驚いただろうが本人も驚いたといつてゐる ……二二六事件時侍従長で「安藤は『問答無用』と叫び、

侍従長は『射て』と胸を張った、侍従長はドツと倒れたが、兇弾は急所を外れて、侍従長はあくまで意識明瞭であつた、……「安藤大尉は止めを刺さうとしたが、タカ子夫人の『鈴木も帝国軍人です』と叫ぶ儼然たる阻止に遭つて早々と引揚げた、……「国民は今最高とも言ふべき一人の戦争指導者を得た、……「国民は最終内閣を要求する、……」

一、二・二六事件をやつた人によつて起された大東亜戦争を、この人々によつて狙われた人たちが収拾しようとしているのである。

二、「武人宰相」のこうした記事が日本人の感激を呼ぶであらう。

三、軍部大臣が、頻々として変るところに近來の特徴がある。かつては軍部大臣に居残つた。

どこに行つても戦争は、いつ終るだらうかという点に話頭が向けられて行つてゐる。誰も戦争に飽いたことが推知される。

日ソ条約不延長が戦争を予見せしめる類の言論が現

れている。『日本タイムス』もそうだし、左の『中部日本新聞』の社説もそうである。

『中部日本』「社説」四月八日 日ソ条約不延長の必然的帰結……これまでが不自然だつた「東部戦線における戦況は明かにソ聯に有利にして盟邦ドイツに不利であり、此儘にして推移する場合には、ソ聯は近い将来に極東戰を企図するの野心に基き敢て日ソ条約の不延長を通告したものであるとは、吾等の今日之を推断するを欲せざる所である。」……

『中部日本』四月九日 逃避疎開なきや 中京死守に徹せよ 総蹶起大会 岡田東海軍司令官講演……中京も空襲を受けたが少数で、制空部隊も活躍し、沖繩でも戦いがあり、「爆撃位で逃避する者は国家の配給米を受ける資格さへない、……」

軍人は疎開に反対（逃避ならざる疎開ありや）

四月十三日（金）

急に暖かく身体だるく何事もする気なし。（夜空襲あり）

ローズヴェルト大統領脳溢血で逝去との報あり。

四月十四日（土）

十三日夜といつてもいいし、十四日朝といつてもいい。敵機、百七十機帝都を来襲。宮城の一部焼かる。すなわち

【読売報知四月十五日】四十一機撃墜 八十機に損害 …

「右爆撃により宮城、大宮御所及び赤坂離宮内の一部の建物に発生せる火災は間もなく消火せるも明治神宮の本殿及拝殿は遂に焼失せり」…

例によつて、どこが焼けたのか一切不明だが、かなり広汎に亘つて焼失、三万人のパンを用意したというから被害者はそれくらいだろう。一晚にして帝都の六、

七分の一を焼き払う。戦争の惨状、まことに言語に絶す。

中央公論社に赴き、松林君に外交史研究所の家具代、内入れとして五百円を支払う。

明治神宮、宮城の一部焼かる。電車は山の手不通。信越線も大宮から運転。その方面の被害想像さる。

四月十五日（日）

本日は一生の内、最も想い出の多い日であつた。この日、僕は空爆の洗礼を受けたのである。そして身に微傷も負わなかつたが、身体に敵の焼夷弾を受けたのである。

この日、家族は軽井沢に行くべく汽車の切符を各方面に依頼した。昨日、警察の水野君が一枚都合してくれた。近頃、汽車切符はダイヤに比すべく貴重なものである。瞭が駅にとりに行くと、昨日の罹災者の外は、一切、切符は出さぬのだとて断られた。

荷物を源川のところに運ぶ。夕飯后、自宅に帰ると、そこに小瀧君あり。話しをしていると、警戒警報なる。

かれ倉皇^{そうこう}として帰り、予は例によつてベッドに入る。多くの人の如く、こんな場合に緊張できないのが、予の癖である。昨夜の空襲沙汰の寝不足でウトウトしている空襲警報なる。早速、用意をして外に出る。午後十時半頃だ。星はあるが暗い夜。従来の敵機と異なつて、今夜は頭上をしばしば通る。目標は多摩川の両側にある工場だ。高射砲が咆哮し、敵機の落す爆弾が、暗のとばりに紅蓮の炎を浮き立たせた。B2Cは銀色で、それが探照燈の光を浴びて絵のようだ。一機ずつ飛んでいる。空中を柙^{ます}の目を画いて、残すところなく焼夷弾を落して行く。家内は源川の家に宿っている英子と豊やの安否を心配して行つた。瞭と予は小さな防空壕に入つたり出たりしていた。大森、蒲田方面は既に空が真紅になり、敵の攻撃は盛んに我等の近くに迫るのである。「今夜ほど早く空襲警報が解除されることが待たれる日はありませんね」と瞭は言つた。僕が、下の防空壕の様子を見に行くために門前の道に出た瞬間である。ザーと雨のような音がした。僕は思わず切り通

しの高い道傍に身を隠した。この時、遅く火が降つて、家の屋根、隣の松林、笹竹の垣が燃え出した。「お父さん」と瞭の声だ。「オーイ」と返事した。気がつくや僕の外套に火がついているのである。「これはいけない」と消そうとしたが消えない。そこで外套をぬいで叩いて消した。その時、もう一面の火だ。入口に来ると、瞭は「お父さん、消しましょう」という。「消そう」僕は答えた。つかみかかるといふ気分はこんなことをいうのだらう。僕は脱いだ外套で竹垣の火を叩いて消した。書庫のコンクリートが燃えている。コールタールを使つてあるので、それが燃えたと思つたが、その後、そうではなく、敵の油し焼夷弾のためと分つた。これにも水をかけた。垣の火は消えたが、屋根に火がついている。「これは駄目だ」とあきらめた。「書籍や、私有物が全部焼けるんだ」といふ感想が脳中を過ぎる。梯子を運んで行つて屋根を見ると、火はいつか消えていた。その頃、畑をこえた先方の家と、道を隔てたアパート的な家が燃えている。また森をへだてた漬物屋も燃えている。幸い

なことにはいずれも風下ではなく、また事実風も少ない。もう火事も終りぎわになって風が出てきたが、それは火事のためだろう。

この火事を見、火事と戦つて、僕は何か憎くて痛憤した。怒り心頭に発するというのはこの事だろう。しかしそれが、ただ「米国」という敵だけではないようだ。僕は盛んに「米国の奴め、癪に障る」といつた。それには明かに、人に聞いて貰いたいためのせり、ふが交つていた。「親米的」といわれはしないかという懸念から、特にそうした点を強調するのである。だが、何かに対し憤りを感じなかったというのならば明らかに嘘だ。「こんな戦争をやるのは誰だ」と、僕はこの愚劣な政治と指導者に痛憤していたのである。

火を消してしまつた後、僕は世に克つたような気がした。また実際、僕がいなかったら、火事は延焼していたに違いない。林の草は燃えあがり、垣根も燃えていたのだから。午前二時頃、床に入る。

四月十六日（月）

朝、午前五時半頃起く。地主の長久保豊のところも焼けた。

「通り魔」というが、BBSの空爆は「通り魔」である。通つたところが一丁ぐらいの間焼かれるのである。南から北に一線を貫いて焼けて、まだ燃えている。その跡を掘つて瀬戸物などを探している。類焼は家財道具を出す余裕はあるが、焼夷弾が落下したところは、何にも出して居らぬ。昨夜の僕の経験から見ても、左様なタイムは全然ない。僕も家財を出そうか、消火にどうとめようかと考えていた矢先き、瞭が「消しましょう」といつたのに力を得て、消火に立ち向つたのだ。

帰つて来て、隣の松林を見ると、焼夷弾の空筒があるもある。またたくの間に七個を拾つた。附近の人が掘つたのを合せると、百坪足らぬ間に十数個あり、それに低い近隣地のものを合すると三十個あまりもある。一つは家の東方に落ちてゐる。それが井戸の屋根に火がついた正体だった。西方に落ちたのは、屋根か

ら二、三尺を離れたところに在り、布片が松に引つかかっている。三、四尺の危ないところで、家が助かったのだ。

そうしたものを拾い集め、跡始末をして朝食に移転した家に来る途中、僕は「神様はあるのじゃないか」という気がした。家を中心にして、これだけの焼夷弾が落ちたのに、それが一つも家の屋根に当らなかつたのは、真に奇蹟である。「神が僕を助けたのじゃないか」と僕は感じた。考えてみると、不思議だらけの幸運だ。瞭が「家は焼けても仕方がないから、下の防空壕に這入りましょうか」といったので、僕は「それもそうだなア」と見に行つたのだった。その途中の、あの焼夷碑の落下だ。瞭が東から、僕は西から、時を移さずに消火に努力したのも、消火し得た最大な原因だった。一方だけに居たら駄目だったかも知れぬ。五分間も経てば、もう竹笹の垣に燃え移っていたに違いない。軽井沢に出発できなかったのもかえつて幸福だった。かつて信じたキリスト教の信仰が、心底に動いて

来て、そこに伏して感謝したいような気持ちになった。

朝食後、英子と共に多摩川から下丸子の方面を見に行った。川原に焼夷弾の空筒が無数に落ちてゐる。三菱の寄宿舎も焼けた。下丸子の新興工場は、ただ一面の焼野原になつてゐる。どこかでドカンと時限爆弾の爆発する音が聞えて来る。日本の工業力はこれだけで何分の一かの低下だ。昨夜、僕は家の高台から、川崎工業地帯と、この下丸子の焼けるのを見て、近代戦争の持つ破壊力の絶大さに、むしろ驚嘆した。いまこの焼け跡を見る。これが十時間とは経ぬ間の出来事である。電車は止まり、電気も来ぬ。水道もガスも停止した。瞭の話によると、多摩川の川辺に逃げた者が爆弾にやられ、首や胴のない死骸が運ばれて行つたそうだ。

これ等の空爆を通して、一つの顕著な事実は、日本人が都市爆撃につき、決して米国の無差別爆撃を恨んでも、憤つても居らぬことである。僕が「実に怪しからん」というと、「戦争ですから」というのだ。戦争だから老幼男女を爆撃しても仕方がないと考えてゐる。

「戦争だから」という言葉を、僕は電車の中でも聞き、街頭でも聞いた。昨夜も、焼き出されたという男二人が、僕の家に一、二時間も来ていたが、「しもた家が焼かれるのは仕方がない、戦争なんだから。工場が惜しい」と話していた。日本人の戦争観は、人道的な憤怒が起きないようになっている。

午后、野村生命の重役の椎名君が見舞いに来てくれた。かれは「日本人には、ほんとに愛想がつきた」といった。その話によると、その近くにドイツ・ジュー【ユダヤ人】がいる。その妻君はトマス・マンの夫人の姉だということだが、それまで、洗足方面はミリタリー・タージェットがないから安心だと防空壕も造らなかつた。昨夜、防空壕を探したので、近くの防空壕を紹介した。ところが、その隣組長が、途中で気がついて「毛唐がいる」というので、その二人を追い出した。この二人はオロオロして居つたとのことである。「何のための戦争ですか、目的もない戦争を始めて——」とかれはいうのである。

晩に佐藤伊兵衛君が大八車を曳いて家財を持つてやつて来た。

信州の笠原政市兄が、信州からやつて来た。五反田から歩いて来たのだそうだ。

祝賀会にコーヒーを皆で飲んだ。

四月十七日（火）

十五日夜から十六日の空襲に関し発表されたものの左の如し。

『毎日』四月十七日 B 200 二百機京浜西南部来襲 五十機以上に損害 七十機を撃墜 …… 「十五日二十二時三十分頃より約二時間三十分に亘り」 …… マリアナ基地から来襲、「蒲田、大森、品川各署管内に相当の被害」 …… 「横浜市の一部及び川崎市に相当の被害」 …… 警察署、区役所、病院、学校、寺など焼失、人員の被害は極めて僅少、「徒らに地方転出に焦躁してゐる者 …… かくの如き者は一人でもあつてはならない、」 ……

毎日、デマが盛んに飛ぶ。昨夜も警報が出たとか、艦載機が来襲したとかいうのである。また電車の中などでも、そういうことをいうものがある。警報が吹奏されないにかかわらず、誰もかれもそれを信ずる。これは恐慌時代、不秩序時代の一步手前だ。元来が、批判なしに信ずる習癖をつけてこられた日本人だ。これが悪質のデマと化すると、どんな事でも仕出かす可能性がある。大地震の際の朝鮮人に関するデマが、そうであった。今回も、そうした事変の起る可能性は非常にある。

沖繩の戦争は、ほとんど絶望であるのは何人にも明瞭だが、新聞は、まだ「神機」をいつている。無論、軍部の発表によるものだ。国民は、愚かな田舎人でもこれを信じまい。誰も信じないことを書いているのが、ここ久しい間の日本の新聞だ。

【出典不詳】突け！敵のたじろぎを 追撃の神機は今ぞ
一押しへ緩むな補給 沖繩決戦 戦果は直に我消耗 …

「沖繩の決戦こそ文字通り国体の安危、民族の存亡を賭す肇国以来の一大決戦」…沖繩近辺で敵艦船減少「こそ追撃の唯一無二の好機である、」…「わが方の攻撃は総て特攻隊であり、その戦果は直ちに…消耗であり、戦力の低下である、」……」

ローズヴェルトの葬儀は十五日行われた。死んだのは十二日午后三時三十分である。ブラック・フライデーの一日前で、迷信の流行をのがれた。このニュースを聞いた時、英子は「いい気味だ」といった。瞭の話では、食事の時学校でその事を聞いて、皆な喝采したが、二、三人の話になると惜しい事をしたといったそうだ。瞭は、後まで惜しい、惜しいといっていた。

その翌日経済クラブに行くと、呪う者は少なくて、戦後経営を、かれをしてやらせたかったというような話しが絶対多数だった。これだけ、ひどい目にあつて、敵を呪う気持が少ないというのは意外という外はない。十五日に白聖館の発表によるとソ連外相モロトフが

桑港會議に出席の報あり。新大統領トルーマンが招請状を發し、スターリンこれに応諾したというのである。

米軍の戦車先鋒部隊はすでにベルリンに二十軒^{キロ}余り(五里)に近づいた旨の報道あり、ただし米國側これを確認せず。ゲッベルスは危機を承認。ただしヒトラーが最後に救うだろうといっている。すなわち

GOEBBELS SAYS FUEHRER

WILL BRING SURE VICTORY

Admits German Resistance

Further Reduced by Recent

Loss of Various Areas

Domei

BERLIN, April 13.-"I know that the nation is engaged to the point of exhaustion and that the prospects of its resistance have been further reduced by the recent loss of territory. But I also know that the Fuehrer will for certain find a way out of the dilemma and bring us victory."

Thus Dr. Joseph Goebbels, Reich Minister of Propaganda,

writes in his latest contribution to Das Reich adding that what mattered today was to save the threatened existence of our people.

"We must all be prepared," Dr. Goebbels went on, "to stake our lives for this end and to sacrifice them if necessary. The enemy can be halted only by our firm resistance. There are towns in Germany which have resisted the enemy onslaught for months. They must set the example for other towns. If every German town acts in this way then the enemy cannot advance further.

"Our national resistance is not only a matter of the armed forces but a matter of the whole people. A few courageous men and women can perform miracles. Do not always expect help from above but see how you can help yourselves until other help comes.

"He who aids the enemy indirectly is a traitor and will receive the penalty which he deserves. We must ward off the enemy actively. There have been cases in which individuals without character have not shown the cool reserve which he deserves. Disengagement from the enemy is a cheap

thing and, if continued, can lead to a general crippling of the country's national resistance.

"Once we will have to face the enemy and it is far better to do so at the place where our home stands, where we work and do our duty and where a simple but grave demand faces as to fight and to win or die. We must all swear an oath to die rather than be slaves. Only thus can a nation be saved."

【ゲッベルスは総統が確かな勝利をもたらす言うへベルリン発四月十三日同盟】… 国の抵抗は軍力だけではなく総ての人々のものであり、勇敢な人々が奇跡を起すことが出来る。…】

英国の空襲による被害―百二十万戸。

LONDON EVACUEES WAREND

Strongly Advised by Churchill Not To Return

Due to House Shortage

Special to the Nippon Times

LISBON, April 14.-Prime Minister Churchill in "earnest

ⁱ "WAREND"は底本の「ワーンド」"warned"の誤り。

and urgent" advice to the half-million London evacuees from London warned them to stay where they are for the present in view of the housing shortage, according to a London dispatch.

In view of the great number of bomb-damaged houses in the London area which have still to be made habitable, Churchill explained, the evacuees who have no proper homes to come back to shall remain in the reception areas until they can be rehoused.

Earlier, Minister of Health Willink had announced that 1,203,720 houses in the United Kingdom were recorded as destroyed or damaged beyond repair as a result of German action. The number of persons who occupied these houses was estimated at about 800,000.

【ロンドン被災者に警告へリスボン発四月十四日へチャール首相は、罹災者に対して再建出来るまで避難地に止まるよう…、破壊された家屋120万、家を失ったもの80万人…】

日本の被害が極めて僅かの間に、それよりも遙かに

多いのはいうまでもない。

日本は近代戦争などをしうる状態ではなかった。軍人は最後まで、「東京へは絶対に敵機を入れない」とか「麹町区には飛行機を入れない」といつていた。いま彼等は何という？　しかし国民の軍人に対する反感は、嘘のように少ないと思う。軍部に関する批判は一切させないからである。そしていわれなければ気がつかないほど低劣だからだ。しかし永遠に気がつかないだろうか？

四月十八日（水）

朝、小汀利得来たり、野菜を贈る。昨朝も来て気焰を吐いて行った。山中湖の別荘に行ったが、御殿場から歩いて行ったのだそうだ。戦争は今年の秋ぐらいまでしか続くまいといっていた。

どこに行っても聞く話は、兵隊さんの食糧が足らず、家庭に行ったり、食い物屋に行つて食をねだるところだ。銀座にも、毎日のように兵隊が来て、お腹が空

いて困るから食わしてくれとねばり、これを断るのに困っている。昨日も、そういう兵隊さんと押問答していた。鮎沢君の息子のジュン君が士官候補生の学校に行っているが、お腹がへるといので、母親と露子さんが、始終運んでいる。家に来る警察の水野君の妻君が、やはり持つて行ったが、御鉢か何かに入れて行ったので、人前で食えず、持ち帰つて来た。加納君はそこで、一口に、知らん顔をして頬張れるものを持つて行ったそうだ。話しをしている様子しながら食うのだという。食事当番になると、釜から食器に盛る時に、手ですくいとつて盗み食いするのが通例である。この兵隊が飢えたら秩序はどうなる？

午后、田園調布の方に見に行く。四間道路の両側は焼失。大竹正太郎君のところを見舞う。爆弾で硝子は滅茶苦茶になったが、家はまだ助かっている。その辺に大穴があいて、家が倒れかかったものが多い。芝染太郎氏の家焼く。国務相、情報局総裁下村宏氏が、丁度自動車で帰つて来て門前で逢う。「随分被害が大きい

よ」といつていた。御機嫌がいい。「御苦労様です」といつて置いた。

ガスもなく、水道もなく、電燈もなし。ろうそくに飯を食う。

四月十九日（木）

今日、「沖繩における敵兵が無条件降伏した」という風説が伝わった。僕も聞き、瞭も聞いて来た。結局そうではなかったらしい。

陸軍は依然として敵を本土に上陸せしめ、そこで迎えうたんとする作戦であるが、米内が頑張つて、沖繩の海辺で決戦することになったという。陸軍は最後まで、そういう馬鹿々々しいことを考えているのである。どれだけ真実か。

沖繩戦戦果左の如し。

【『朝日』四月十九日】 沖繩戦戦果（三月二十三日ヨリ四月十八日マデ）

【表で空母から魚雷艇まで十四種を撃沈、

撃沈あるいは撃破、撃破の三に分類、総計333隻を撃沈又は撃破したという。朝日新聞に表がある】

米軍の無条件降伏説が、軍需会社方向に伝わっているのを見ると、おそらくは軍部の宣伝ではないか。各新聞の記事いずれも「絶好の神機^{しんき}」をいう。

『毎日』十九日、社説――

「絶好の機到る」

その理由は左の如くだ。

『毎日』社説「四月十九日「またも大きな戦果が挙げた」

……空母を五隻沈めた、「予備は幾何も残つてゐない。」……補給線も伸びた、……わが特攻隊の勇士たちは、滅敵の機会を追つて止むところがない。好機まさにいたるの感はいよいよ深い。」……

『毎日』記事「敵の〃局地優勢〃覆る」。

『毎日』四月十九日 南西諸島のわが作戦が奏功し現に來

襲機が減ってきた、…「今こそ勝機を把握すべき絶好の神機である」…「沖縄県民は一人残らず守備部隊と一体となつて昼夜を分たぬ血戦死闘を戦つてゐる」…」

『朝日』十九日、社説に「勝機に立つ試煉」、それからその外に記事二つあり、一は「勝機の把握今にあり」他は「海上勢力ようやく衰頹」とある。二ページしかない新聞に沖縄戦の記事が第一ページの半分以上あり。以てこれを決戦場としていることが判る。

『朝日』四月十九日 勝機の把握今にあり …沖縄では陸海とも打撃を与えた、「神機はわれわれの頭上にある」

本日から電燈通ず。

『日本産業経済』は「敵大平洋艦隊主力の掃滅近し」を横大標題に「必勝の神機開く」と。

『読売』も、横の黒面白抜きの大活字で「今にあり勝利の把握」とある。

『読売』四月十九日 遂に來た一億待望の一瞬 撃滅へ、無二の関頭 見よ敵補給限界点割る …「未曾有の戦果の下敵撃滅の神機到る！」…敵機来襲数が減つてきた、…「かくていまや敵の物量補給は遙かにその限界点を割りつゝあるものと見られる」…」

右によつて軍部が、これを最後と、力を入れていることが明らかだ。

【この箇所は沖縄本島と、南西諸島全体の地図が挿入されている。朝日新聞に同じ地図がある】

空襲の犠牲者^い出ず。東洋経済の鎌田君という記者、足をやられて足先を切断したが、それが原因で死去した。死体を入れる棺桶がない。そこで「東洋経済」の別館を取りこわした古材木を以て社員が造った。焼き場を利用することも困難だが、リヤー・カーか何かで運ぶらしい。悲劇そのままだ。

脇村義太郎君が、従来敢闘して助かつて来たが、先頃（十三日）にいいよ焼かれてしまったそうだ。明石照男氏も被害。

四月二十日（金）

『読売』『陣影』四月十九日 …ヒトラー独総統の布告と新大統領トルーマンの議会演説があった。：「一方は既に死を覚悟したものであり」：「近ごろの沖繩を繞る激戦は敵の戦力の山が見えたことを」：」

小汀利得君、朝来宅、汽車切符を買ってくれる由。ただし、いま、とても罷災者疎開で汽車の混雑大変なれば二十四日頃にしたらどうかという。頼む。

同君の話では十三日の空爆の羅災者五十八万人、十五日の分は六十万人。それに三月十日のものを合せると二百二、三十万を突破するという。

英国における、ドイツ空襲による被害は、開戦以来

一九四五年二月二十八日までで一四四、五四二である。その内死者及び行衛不明五九、七九三、病院に入院負傷者八四、七四九だ。商船の船員損害は三四、一六一人。

『中部日本』四月二十日 鈴木首相特旨により大本営へ戦争指導会議に列席 …小磯に続いて二度目：」

沖繩戦が景気がいいというので各方面で樂觀説続出。株もグツと高い。沖繩の敵が無条件降伏したという説を僕も聞き、瞭も聞いてきた。中には米国が講和を申込んだというものがある。民衆がいかに無知であるかが分る。新聞を鵜呑みにしている証拠だ。それは東京のみではなく地方でもそうらしい。左は十九日の『中部日本新聞』の記事である。新聞で景気のいいことをいつて、それを信ずるなどというのだ。

『中部日本』四月十九日 今だ、驕敵捉へて一億特攻 危険な樂觀説 軍を信頼、職場へ挙げ …沖繩周辺で敵

艦隊八割を撃沈した』『岐阜市では提灯行列用の提灯を造つてゐる』：「何月に終つて提灯行列が目前に迫るなど樂觀的な現戦局では断じてない」：」

四月二十一日（土）

朝、島。それから書籍を書庫に運ぶ。

都心に出る。丸ビルに行かんとして二時間もかかり、用が足せずして富士アイスに太田君を訪う。近くまで火が来たが助かった由。安倍能成、小平権一の諸氏類焼。岡田啓介大将の家も燃えた由。

歸りに京浜の省電をとる。大森と大井町の間の海岸寄りの方面焼失した。しかし、もつと慘澹たるものは蒲田を中心にする火事振りだ。一面焼野原だ。蒲田駅も焼け落ち、蓮沼まで一軒の家もない。想像に絶する被害だ。焼け落ちた駅の高台に立つて無然たり。

瞭の見て来たところでは、巢鴨、大塚仲町辺は上野駅までほとんど人家らしいものはないという。

しかし注意すべきことは、焼け出された人々が案外

に平気であることだ。「今日は自分の身の上、明日は他人の身の上」といった自慰があるからだろうし、また多数の同運命は悲しみの軽減に役立つのだろう。

『読売』四月二十一日 決戦訓：「皇軍将兵は皇土を死守」、「待つ有るを待む」、「体当り精神に徹す」、「一億戦友の先駆たるべし」：」

阿南陸軍大臣は上の如き決戦訓を発表。政治団体である大日本政治会の南総裁が、これを奉戴すべきよう声明をなした。南陸軍大将か、政党総裁か。本土死守の布告である。

『読売』四月二十一日 日本に講和許すな ハルゼー憎悪の放言（リスボン十九日発同盟）：「米国は日本国民を無力化すべく、しかも長期に亘つて無力の状態におかなければならない」：」

米陸軍兵力八百五万（リスボン十九日発同盟）：米軍損害九十一万（リスボン十九日発同盟）：」

米国側では日本の米兵虐待に対し刑罰を主張しているようで、信夫博士は、何故に日本が俘虜待遇について公表しないかを言っていた。

四月二十二日(日)

今朝の新聞は内務省が百二十五名の異動を行ったことを報じる。

『読売』四月二十二日 思ひ切つた若返り 国土防衛へ前進体制 : 「知事級において二十一名、部長級十五名、実に三十六名の勇退者を求める」 :」

これが上記『読売』によれば「久しく沈滞鬱積せる人事を刷新する」ためだそう。やるものもやるものだが、新聞記者も新聞記者だ。僕の知っている町村警視總監(新任)を見ても、大東亜戦争開始当時富山県知事であったのが警保局長、休職、新潟県知事、警視

總監と代つて居り、安積得也君の如きも、東京府経済部長、栃木県知事、計画局部長、それから愛知県次長と、二ヶ年ばかりの間にこの異動だ。

役人中心の政治である。いわゆる革新主義―実は封建主義的観念論が、まだ政治の中心をなしていることが分る。そして「大物」中の「大物」が安井英二という五十六歳の前内相。さすがに『毎日』も「官吏の異動を停止せよ」といい、『読売』も「地方官の異動」と題してこれを批判している。新聞が、内閣の施策について批判したのは、これが近來始めてだ。

今回の内閣は鈴木首相が重臣の推挙によつて出馬したことによつて分る如く常識的、自由主義的、非小児病的だと考えられてきた。然るにその内閣のなすところは、極めて反動的であり「根こそぎ的」だ。

試みに、文相太田耕造(平沼の乾分)の談話を見ると、何をいつているのか分らないこと依然たりだ。これではろくな結果は見られない。もつともこれを逆用すればだが。鈴木にそんなことができるとは信ぜられない。

やはり彼は一片の武弁である。

【朝日新聞四月二十一日】太田文相の構想を聴く 本社記者

問一答 …「青少年学徒をしてその総力をこの戦局に遺憾なく發揮せしめるためには」…

「国体教育とは天窮無窮の皇運を扶翼し奉り、身命を賭して国体を悠久に護持すべき皇国民を錬成することである、」…

…「日本精神諸学の学問的素材は、前にも申した通り国史を中心とする皇国世界観に基く具体的人間活動であると思ふ」…

…「英才教育は…自然科学、人文科学両方面に亘つて従来の学校教育の形に捉はれず、」……」

この愚劣な神がかり思想を見よ。

佐藤君のところに御茶を呼ばれ、オハギを御馳走になる。オハギは近頃の特別な最大御馳走である。砂糖は一貫目七百五十円ぐらいであるという。

松本丞治博士を見舞う。その近くの立派な家が十数

軒焼けた。木下信氏のところも焼失。

四月二十三日（月）

赤軍、ベルリンに突入す。最後までナチは踏み止まり玉碎。斯かる戦争方法が賞讃さるべきか。無条件降伏を看板にしたる米、其の戦法も将来批判されるであろうが、玉碎戦術も、また後世史家の論題たらん。

日本においては、この前例は恐らく「日本精神」の模範たるべし。問題は皇室が日本に在り、ナチス戦術は必ずしも上層階級の支持を受けざらん。

「東経」評議員会に出ず。蠟山君のいうところでは重光は留任を運動したる由。かれはまた首相を狙ったともいわる。

四月二十四日（火）

「日本産業経済」の古田保君の世話にて汽車切符、また堀（隣家）の長男（日大生）の奔走にて二等切符往復を手に入る。二等切符の方はお札に五十円を出す。

各方面のお礼にて沓掛への切符一枚が五十円ぐらいに
つこう。窓口の売子は、そうしたお礼を公然とする由。

堀君、その友人と来訪。いろいろのことを話す。こ
れ等の学生も琉球で米敵を、やつつければ日本がこの
戦争に勝つと考えているのである。

結局、明朝五時の汽車に乗るつもりで（可能ならば
今夜乗るとして）、午後六時半家を出ず。我等二人、瞭、
英子、それから豊やが上野まで送りくる。乗車客何れも、
背負い切れぬ荷物を負い、それが三、四町の行列をつ
くっている。中には簞笥を背負っているものあり。か
かる風景は決して、他には見られないであろう。七時
半頃着くと、もう行列の後の方だ。前の者は午后三、四
時頃から待つていたろう。臨時列車が午後十時四十五
分に出るといので、それに乗る。乗ってみると二等
列車はガラあきで、三等も然り。長野行きであること
も一因だが、駅員も、臨時列車のあることを注意せず。
知らないのである。我等は、幸いに送ってくれた笠原
清明の周到なる注意によってそれに乗ったのである。

こうした非能率——一方には乗り切れぬ死に生きの混
雑、他は空列車の運輸は、鉄道省の不親切に原因す。

汽車から外を見ると、上野以北の右側は四月十三日
の空爆のため、一面荒野原の如し。想像に絶す。

四月二十五日（水）

午前五時半頃、予定の如く沓掛に到着。井出君の家
にて朝食を御馳走になり、山荘に着く。取敢えず便所
を掃除す。取り片づけて落着く。

前の後藤一蔵伯所有の林は、供出のため落葉樹、切
り去られ、雑木のみ残る。以前の如き風景なし。

コブシの花、真白く咲き始む。まだ若芽も出ないのに、
この真白の花は山の精なり。予はこの花を好む。

四月二十六日（木）

瞭と予と、取敢えず畠に着手。井出君のところに馬
鈴薯の種と、堆肥を貰いに行く。予は大八車を曳いて
帰る。途中の馬糞を一々拾う。生憎、拾いとするものが

ないので、手でつかんで入る。女学生が通るので、さすがに手づかみにするのが恥かしく、近くの紙片などを使用することあり。しかし女学生達も、紳士の馬糞拾いは珍らしくないのか、振りかえつても見ない。

馬糞を拾いながら、こうすることが国家社会のためかと考う。デビジョン・オヴ・レバー【division of labor 分業】が全くなくなり、我等自身、土方のやることをやらざるを得ないのである。

それでも、馬鈴薯の一部を植え終う。山は夜になるとまだ寒い。

四月二十七日（金）

切符の往復の期限の関係で、本日瞭は帰京。予は独りで労農生活。

四月二十八日（土）

午后、正宗白鳥氏を訪う。それでなくても風采のあがない人が、厳寒を高原に送って、むさ苦しい田舎

労働者となり終う。アメリカの純粹コーヒーと、くるみ、ピーナッツ、ドーナッツ等、珍品を御馳走になる。かれ、その生活を呪う。

「飢えと寒氣と戦つて、ただ生きてきた」と、吐き出すようにいう。無知の農夫や労働者が、高い闇相場の金をとつて、しかも王者のように威張り通す。「誰もかれも乞食だ」と。その生活を書いて置いてくれという、「そんな意志も慾望も全然ない。ただ動物の如く生きるだけだ」とかれはいう。隣りの土地を買った。一坪二十円某。東京郊外の値段だ。「働くのが嫌だ」といつていたが、さらばとて働かねば食えぬ。その土地の楽なところを開墾することを勧め、かれもそれに従うことを決心した。

後、坂本君のところにちよつと寄る。鳩山一郎氏あり。吉田茂氏（前駐英大使）が、確か四月十五、六日頃、憲兵に引張られたと話していた。樺山愛輔子【伯爵】も家宅搜索をされたそうだ。樺山子は引張られなかつたから、吉田氏がいるのではないかと探したらしいとの事。

また評論家の岩淵辰雄も憲兵に引張られたとのこと。
「馬場恒吾君はどうですか」といつていた。閣議かどこかで「敗戦主義者」を全部あげるといふ議があつたが、それでは六千万人ぐらいをあげなくてはならぬからと取りやめになつたそうだと笑う。予もかねてから、そういうことになるだろうと考えていた。最後のもどえである。

それにしても予の身边が無事なのが不思議だ。ただ一つ奇妙なことは、四月十五日の空襲の夜、二人の男が僕の家に來て、「下丸子の工場にいたが、家族を防空壕に避難させた。家は焼かれたらしい」と、暫らく話し込んでいた。どうも、その様子が普通の労働者ではなかつたようだった。僕は、当時消火に努力しながら、「米敵憎し」と何回も繰返し、この人々に対しても、無辜の市民を空爆する米敵を呪つた。「戦争だから住民をやるのは仕方がないが、工場が惜しい」といつていた。そう考へない訳では決してないが、こういう場合に、自己防衛の意味があつたことは否定できぬ。この二人

は何者であつたか知らぬ。しかしあらゆる場合に、憲兵政治が、スパイ的行為をしていることは事実だ。

正宗氏の話しでは、軽井沢の万平ホテルにソ連大使館が疎開して來ていたが、そのボーイは全部憲兵だつたと話していた。

四月二十九日(日)

天長節。

畠をやる。寒し。

国民義勇隊なるものを組織して本土防衛の準備を進む。ドイツの玉碎主義と同じ行き方である。

【「出典不詳」国民義勇隊の組織運営方針決る 職能組織を活す 当面は戦力の充実へ …「当面の任務は飽迄も軍需食糧の増産など戦力の充実に邁進」…「情勢急迫し戦闘隊に転移したるあとにおいては、…兵站的業務に服する」…「状況により戦闘任務に服し、…」…】

i 小磯内閣時に成立した。男子十五から六十、女子十七から四十までの国民を義勇招集する。

田舎に漸次、官僚組織が入り込み、動きがとれぬようになってきている。

正宗氏のところで労働者を雇おうとすると、まず町の労務事務所に届出で、その許可を受く。労働者と共に監督が来て、どの仕事はしてもよく、どの仕事はやつてはいけないと一々干渉す。一日の公定相場は六円だが、十円は普通であり、中には一日に八十円も請求したものがあるという。労働者数人に一人ぐらの監督——俸給生活者がつく訳である。

四月三十日（月）

馬鈴薯を植え終う。疲労して体中ミキミキなる。

晩のラジオでドイツのヒムラー、米英に対し無条件降伏を申し出たと伝う。米英はソ連をふくむ連合国に同様な申出でなければ受けつけないといったという。またムソリーニも、その一味と共にとらえられた旨を報ず。第二次世界大戦はちょうど五ヶ年八ヶ月を要し

たわけである。第一次大戦の四年四ヶ月に比すれば一ヶ年四月だけ長かった。僕の想像より一ヶ年半ばかり延びた。

それにしてもムソリーニが自裁せずして、捕えられたことに対し、多くの日本人は何というだろう。またヒトラーの最後は如何。

そして——最も重大なことは日本はどうする？

九州に敵機、毎日来たり、鹿児島、宮崎等を爆撃。本日は立川に二百機来襲した由。何故に東京都を爆撃しないかが、やや不思議である。米国内に都市爆撃の無謀をいう輿論を起すような工作も、輿論も日本には起らない。戦争というものはそうしたものだと思えるのか、それとも特有のフェータリズム【*Fetters* 宿命論】か。米国飛行機の東京都その他の民家焼払いは、不必要なる惨害を国民に与えるもので、何といっても罪悪である。彼等がこの事を自覚して中止すれば、その幸福はただに日本国民のみではない。

【ムッソリーニは4:27逮捕され、翌日銃殺される。
ヒットラーは4:30自殺する。
ベルリンの占領は5:2ソヴィエト軍による。】

五月一日（火）

相変らず労農。花壇を造る。生活は食うことのみにあらず。願わくは困苦の間にも、多少の文化的エンジンメントあれ。

毎日のラジオは沖縄の戦において敵に与えた損害を繰返す。これは支那事变以来一貫したやり方だ。国民の知りたいのは、そんなことではないのに。

晩のラジオは、プルシャのフレデリッヒ大帝が七年戦争に結局勝ったことをいい、ついで

一、日本においては昭和十二年頃まで軍備縮少の必要を説いた政治家があつた。それを議会が喝采した。

二、思想宣伝において米国は積極的だった。人間をアメリカ的にした。

三、日本の物質的発達を阻害した。たとえばガスリンを安く輸入し、円タクを安く走らせて国民を享樂生活に陥れ、人造石油の発達を遮げた。

とて、ワシントン会議やロンドン会議において、日本の戦力をそいだことをいい、加藤寛治大将などを持ちあげた。最近の『週報』にそうした記事があるそうで、これは軍部の宣伝であらう。こんなことが軍部の許諾なくして放送、発表できるものではない。

井出君が来て、町においてドイツが無条件降伏したことにつき盛んに問題になっていることを伝う。昨日、井出君が来た時、「ドイツが危いようですね」というから、「すでにドイツは片がついたのだ」といった。かれは不承不承であつた。帰つて晩のラジオで、それを聞いたのだ。「どうしてドイツは頑張れなかつたろう」と、どこでも不思議な問題として話しあっているそうだ。新聞が、常に優勢らしく伝えるので、一般人にはそれが分らなかつた。そして突如として現出した事件のよるに思うのだ。

新聞の伝うところ左の如し。

『信濃毎日』五月一日 独・降伏を申入れ 「無条件」で

米英両国へ 英首相声明（ストックホルム二十八日発同盟）ロンドン来電 ヒムラー内相が英米両国のみに無条件降伏を申し出たとの報道に対し、英政府は発表すべきことはないが、米英ソ三国に対するもののみ受け入れると。

〈リスボン三十日発同盟〉：スイス外務省の者がヒムラー内相の伝言を英米に伝えた。

〈リスボン二十九日発同盟〉ワシントン来電 無条件降伏の報道に対しトルーマン大統領は未だ何も聞いていないと。』

近頃の手続きの煩瑣なこと限りなし。移転するのに、区役所、町会、隣組等の判を必要とし、また軽井沢に來ては届出のため班長、隣組、町役場等、そのため二、三日を要す。

到着の日、水道をあけてくれるように町役場に依頼したが、翌日來たる。そして「その内に水道の口を台所と風呂場だけにする」という。水洗便所は使わないが、洗面所だけは欲しいという。戦争中は我慢して貰い

ます」といい、「それで愚図々々いうなら全然水道を速断する」と頭からいう。

東京でも、そうでないことはないが、田舎者は戦争を、総べての不親切の口実にするのである。ちよつと、そういうただけに、僕の家の鉄管が漏れて、床下に水が噴出しているが、何回催促しても來てくれぬ。なまなかに理屈をいう方が負けだ。

五月二日（水）

雨。東洋經濟ヘドイツの降伏について書く。投函のために軽井沢に赴く。

英子の転校について軽井沢女学校に赴く。妻が何回となく足を運んで解決せず。結局、内務部長に、小諸女学校に転校したき旨を請願せよという。

水道洩り、「森角」に修繕を頼む。「承つて置きましょう」という。まるで、お役所である。「お引受けはできません」というのである。何か、人間と交渉する毎に、

不愉快限りなし。こんなことを毎日やっていけば神経衰弱になるおそれあり。百姓だけに努力することを決心す。正宗氏が、軽井沢を呪う気持ちがよく分る。

坂本氏のところに寄る。また、たまたま鳩山一郎氏あり。ティータイムに御馳走になりながら、ここでは極めて愉快に話す。

鈴木貫太郎大将の首相出現の事情。

重臣会議において、まず口を開いたのが東條である。かれは「この際、戦争を妥協で打ち切るか、然らざれば最後まで戦いぬくか、この事を決定して置く必要あり、それが首相選任の前提である。私は絶対に戦いぬくことを主張する」といった。平沼これに和し、鈴木も同じく「絶対に戦いぬく」といった。近衛は意見を聞かれて、戦争をどうするかというようなことは後継首相の決定すべきことで、ここで論議すべきことではないといい、岡田これに賛成し、若槻は「御下問された問題は首相の人選であるから、その他のことは問題外だ」と述べた。それから人選に移り、鈴木は「一番

若い人が局に当るがいい」とて近衛を意味する発言をなしたが、これに賛成する者なく、つぎに平沼が「鈴木大将」と述べて、これに決定したとのことである。

これより先き陸軍は迫水を書記官長に推薦し、内閣支持の条件にした。米内は鈴木に対し、その非を申し入れたが、すでに深く食い込んで、どうすることもできなかつた。軍は鈴木に三個の条件を持ち出し、これを承諾せしめた。その中には「軍部を尊重する事」といった条件があつた。

鳩山氏は「赤」が中心になっているといった。坂本君と共に「赤」を極端に嫌っている。

坂本君は東郷茂徳氏が外相になる前に立ち話しをしたことがある。東郷は戦争終結にソ連に期待しているようであつた。ソ連をして口をきかせるために、樺太をかえし、共産党の公認等を条件とすれば充分だろうといったという。坂本君はこれが反対で、もし左様なことをすれば、岡野の如き共産党員が乗り込んで来て、

i 野坂参三の別名。

国内を滅茶苦茶にするだろうといった。

鳩山氏はソ連が口を利いても、米英がそれによつて、幾らかでも譲歩するだろうか、自分はしらないと思う。自分は率直に英米に対し日本の条件を持ち出すがいいではないかといった。

僕は兎に角、戦争を終末せしめる必要がある。それがためには

(一) 無条件降伏

(二) ソ連を仲介に立てるか

(三) 蒋介石を立てるか

(四) 米国あたりにいい出すか (これはソ連の例にみて駄目だが)

だが、いずれの道でも、目的を達すれば、それをとるべきだといった。

僕は、また米国の無差別爆撃に対し、日本のキリスト教徒が連合して、世界の輿論に訴うべしと述べた。第三国の人をして調査発表せしめるのもいいではないかといった。坂本君はそんなことは軍部が反対だろう

といった。

談話は極めて愉快だった。イグノランスがいかに罪悪であるかが、三人の一致した意見である。国民を賢明にする必要がある。それには、まず言論自由を許すのが先決問題だ。

ヒトラー死せりとの報あり。ムソリーニも殺害されたと伝えられる。——果して、今晚のラジオはその「説」を伝う。

五月三日(木)

ヒトラーが戦争指揮中死せりというラジオは伝う。この「英雄」は、まず終りを完うしたというべきである。ヒムラーは無条件降伏を申し出で、ヒトラーの後任デニッツは徹底的抗戦を声明す。ドイツ国内、四分五裂した情を示すにたる。

ソ連はベルリン占領を発表す。

晩にラジオで鈴木首相、「欧州情勢の急変について」と放送す。何のふくみ無し。

襲にて英国五年八ヶ月の被害よりも多し。

【出典不詳】ム統帥つひに処刑 伊叛軍の手で（リスボン三十日発同盟）…ファシスト党書記長、前書記長も処刑された。

休戦前提四ヶ条（ストックホルム三十日発同盟）…「無条件」、「三国に対して」、「独に講和条件を示さない」、「交渉斡旋者に恩典はない」

【出典不詳】「海軍総隊司令部」を新設 長官に豊田大将
…「全海軍の兵力を挙げて『特攻』一本の強力、活発、」
……

五月四日（金）

——君と土橋弥生との結婚式明日あり、英子を引きつれ、松本に赴く。昨夜、汽車切符を買うのに、とても骨が折れた。査掛では断られ、軽井沢に赴いて漸く買う。何でも軽井沢で、同方面へ三枚しか切符が売れぬとの事である。

空襲による被害、四月二十五日に発表。十二回の来

【『読売』四月二十五日 既に十二回も来襲 燃やせ無限の敵愾心 帝都の被害 五十二万戸二百十万人 日本民族抹殺が目標 B29暴虐の大都市無差別爆撃 ……

「去月十日未明には帝都、同十二日早晩には名古屋、翌十三日夜半は大阪市、同十七日早晩には神戸市、同十九日早晩にはふたたび名古屋市、同二十五日早晩には三たび名古屋市、本月に入つてからは二日早晩に帝都西部地区を襲ひ四日未明にはふたたび帝都、七日早朝には帝都周辺および名古屋市、十二日早朝は初の戦爆連合で帝都へ翌十三日深夜から十四日払晩にかけては帝都市街地区、さらに十五日深夜から十六日払晩にかけて帝都並に横浜、川崎両市と、」…

「帝都 浅草、本所、深川、城東、向島の各区の大部分が焼失、下谷、本郷、日本橋、神田、荒川の各区も被害大きく本月に入つてからはさらに豊島、板橋、王子、四谷、大森、荏原、品川の七区が相当な被害を蒙つた、また蒲田区はその大部分を焼失したほかその他の区域でそれぞ

れ一部を焼失しその焼失戸数は約五十一万戸、戦災者数は約二百十万に上った」

「川崎市 市街地の大部を焼失」

「横浜 市 鶴見、中、神奈川各区と桜ヶ丘などに被害があつたが詳細は目下調査中」

「大阪市 西成、西、南、北、天王寺、港、浪速、大正の各区が被害をうけ焼失戸数約十三万戸、戦災者数約五十一万」

「名古屋 市 千種、東、栄、中、熱田、昭和、中村、中川などの各区が主なる被害区域で焼失戸数は約六万戸、戦災者数は約二十七万」

「神戸 市 兵庫、湊、湊東各区の大部分および葺合、神戸、須磨、林田、灘の各区の一部も焼失しその焼失戸数は約七万戸、戦災者数は約二十六万」

主な社寺「帝都の明治神宮、富岡八幡、亀戸天神、名古屋市の熱田神宮、護国神社、大阪市の北畠神社、生国魂神社、神戸市の湊川神社、寺院では帝都の浅草寺、東本願寺、池上本門寺、名古屋市の東本願寺別院、西本願寺、大阪市の四天王寺などで教会では帝都の九段キリスト教会のほか多数の教会が焼失」

昭和二十年五月

学校「東京帝国大学農学部の一部、大阪医大の一部その他各都市において中等学校、国民学校の焼失せるもの多数」

病院「東京都立本所、大塚、三井厚生、日本大学付属、大久保、帝国女子医専各病院、神奈川県では日大予科、丸子、中原各病院、名古屋の帝大付属病院、大阪の阪南病院、神戸の旧日赤病院などその他多数の病院、医院」

小瀧彬君、大城君（次弟）等東京より来たり、ここで顔揃う。

敵、タラカン島【ボルネオの一部の様な島】に上陸す。石油の資源を押うためならん。

【出典不詳】ベルリン失陥 スターリン元帥掃蕩完了を布告（ストックホルム二日発同盟）モスクワ来電 …二日午後三時ベルリン守備隊は抵抗を停止、武器を放棄し降伏した。

ヒトラー総統薨去（こうきょ） 後任にデーニッツ提督（ストックホルム一日発同盟至急報）

飽まで戦争継続 新總統全軍民に懇ふ（ストックホルム
一日発同盟 デーニッツ總統はヒトラーを讀え、ボルシェ
ヴィズムの拡大に対し戦った云々…）【以下彼の来歴紹
介】

松本あたりの店で、ほとんど一つもファンクション
【function 機能】しているものなし。夜間は電燈皆無。暗
しとも暗し。

宿屋は浅間は二三を除き全部閉店の由。また西石川
にてもお客を二日以上は宿めず。しかも米を持参して、
しかり。覺の話では、客の出す米を女中と番頭で山
分けしているとのことである。

五月五日（土）

東京（江戸）の火事の歴史――

『読売』四月二十六日 地震、数十回の大火 忽ちに復興
膨脹 油然湧き上る戦災地再建の希望
江戸になって第一回の大火は、未だ草葺き屋根の小都市

であつた慶長六年【1601年】、駿河町から出火、全域に
及ぶ。

最大の火事は明暦三年【1657年】「振袖火事」、死者
十万余人、当時の推定人口三十万人。

安政二年十月二日【1855.11.11】地震で二万四千戸倒壊、
人口五、六十万人、戸数十五万の時代で大部分の人が罹
災者であつた。

明暦、安政の大火に匹敵する大火は元禄、享保、寛保、
文化を初め多数に上り、明暦以後でも大火だけで三十七
回に達してゐる

関東大震災 焼失三十万戸、罹災百七十万…

焼跡を一望の菜園に 深川区復興義勇隊 …空襲で焼け
た後を「一日も早く復興してお役に立てよう」と…

「結婚は捜すものでなく拾うものである」そういつて
僕は媒酌人の挨拶をした。

松本はまだ平時気分、皆なモーニングや紋付を着
て来ていた。もつとも御馳走は、炭まで全部土橋家か
ら持つて行つたとの事、それで料理して出されたもの

は約半分。近頃は途中で消えるのである。

【橋川文三が伝える清沢綾子夫人の言によると、五月十二日座談会や講演のために帰京し、まもなく風邪を引き、本人は発熱にも気付かず、四、五日続いて外出する。医者にかかってからも単なる風邪と大事を取らなかった。三十九度の発熱中を二夜にわたって来客と時局を論じ合った。十九日になって医者が肺炎と診断、本人が入院を希望し、聖ルカ病院に入院、二十一日午前一時すぎ、急逝した。】

作成者：石井彰文

作成日：2013.7.26

修正日：2013.12.9